四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第三十二冊

中間西井坪遺跡Ⅱ

本 文 編

1999.3

香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第32冊

中間西井坪遺跡 II

正誤表

位置	誤	正
第1分冊432頁27行	ＴＫての	全ての
第1分冊437頁25行	料化されえなかった	料化されなかった

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第三十二冊

中間西井坪遺跡Ⅱ

本 文 編

1999.3

香 川 県 教 育 委 員 会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団

遺跡遠景（西方上空より）

ＳＫⅡ46遺物出土状況（西より）

谷 7 下層出土土器

谷 7 中・上層出土土器

序　　文

四国横断自動車道は，高松～善通寺間が平成４年５月に開通しました。これにより，瀬戸大橋と香川県内の高速道路が直結することになり，香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では，四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い，昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。３年６ヶ月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し，平成３年９月に発掘調査を終了いたしました。また，平成３年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土品の整理業務を順次行い，平成４年度からは調査報告書を刊行いたしております。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十二冊」として刊行いたしますのは，高松市中間町西井坪に所在する中間西井坪遺跡についてであります。この遺跡の調査では，旧石器時代から江戸時代までの多くの遺構・遺物が出土しておりますが，そのなかでも今回報告します調査地区からは，弥生時代終末期の畿内や吉備あるいは山陰地域との関連を示す遺物が出土しており，当時の流通や交流を考える上で，貴重な資料になるものと考えております。

本報告書が，本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間，日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成11年３月

香川県教育委員会

教育長　　金　森　越　哉

例　　言

1. 本報告書は，四国横断自動車道高松～善通寺間建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第32冊である。「中間西井坪遺跡Ⅱ」として香川県高松市に所在する中間西井坪遺跡（なかつまにしいつぽいせき）の東半丘陵裾部分における調査成果を収録した。
2. 発掘調査は，香川県教育委員会が日本道路公団から委託を受け，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。
3. 中間西井坪遺跡の発掘調査は，全体としては平成元年５月から平成３年７月まで実施したが，今回の報告部分に関しては平成元年８月～平成２年３月に発掘調査を実施している。本報告にかかる調査の担当は以下の通りである。

   牧野啓造　中野昇一　蔵本晋司　萬木一郎　寺井香吏　山本　健
4. 調査および報告書の作成にあたって下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

   香川県土木部横断道対策室　高松市教育委員会　地元対策協議会　自治会　瀬戸内海歴史民俗資料館　寒川町教育委員会　善通寺市教育委員会　観音寺市教育委員会
5. 報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。本報告書の編集および第３章第１，２－Ⅱ･Ⅲ，３，４節を除く各章の執筆は蔵本が担当した。
6. 発掘調査および報告書の作成にあたって，下記の方々のご教示を得た。記して感謝を表したい。（順不同，敬称略）

   魚島純一，川畑　聰，久保田昇三，阪田育功，作田一耕，佐々木憲一，笹川龍一，柴田昌児，菅原康夫，高島芳弘，中尾賢一，橋本輝彦，北條ゆうこ，松本豊胤，真鍋篤行，三宅良明，森岡秀人，山田隆一，山本一伸，山本英之，山元敏裕，米田敏幸
7. 本報告書で用いる方位の北は，国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高は T.P. を基準としている。また，遺構は下記の略号により表示している。なお，谷・丘陵名を除く個別の遺構名については，『中間西井坪遺跡Ⅰ』との重複を避けるため，遺構略号と番号との間にローマ数字の「Ⅱ」を付して記載した。

   ＳＨ　竪穴住居　　ＳＢ　掘立柱建物遺構　　ＳＡ　柵列状遺構　　ＳＰ　柱穴
   ＳＫ　土坑　　ＳＥ　井戸　　ＳＴ　墳墓　　ＳＸ　不明遺構
   ＳＤ　溝状遺構

8. 本遺跡の報告にあたっては，下記の機関等に鑑定・分析などを依頼・委託し，その成果を第3章他に掲載した。(敬称略)

土器蛍光X線分析	岡山理科大学自然科学研究所　白石純
土器胎土砂粒分析	京都大学文学部　清水芳裕
動物遺存体鑑定	岡山理科大学理学部　富岡直人
貝類遺骸鑑定	香川県立香川中部養護学校　多田昭
石器等石材鑑定	香川大学　谷山穣
鉄滓等金属学的分析	(株) 九州テクノリサーチ・大澤正己
樹種・種子同定	(株) パリノ・サーヴェイ

9. 挿図の一部に建設省国土地理院地形図「玉野」「丸亀」「高松」「高松南部」(1/50,000)を使用した。

10. 本報告書で用いる遺構図のレベルの単位はすべてメートルである。

11. 煩雑な重複を避けるため，引用及び参照文献は各章末にまとめ，本文註のみ各節毎に記載した。

本文目次

巻頭図版
序　文
例　言

第１章　調査の経緯……1

第１節　調査に至る経過……1
第２節　発掘作業の経過……6
第３節　整理作業の経過……10

第２章　調査成果……17

第１節　調査地の地形と基本層序……17
第２節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物……45
第３節　古代の遺構・遺物……163
第４節　中世の遺構・遺物……230
第５節　近世の遺構・遺物……265
第６節　包含層……327

第３章　自然科学的調査の成果……333

第１節　中間西井坪遺跡から出土した木材・種実遺体の種類……333
第２節　中間西井坪遺跡出土土器の胎土分析……345
第３節　中間西井坪遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査……370
第４節　香川県中間西井坪遺跡出土動物遺存体……379

第４章　まとめ …… 387
第１節　遺構の変遷と個別遺構の検討 …… 387
第２節　中間西井坪遺跡谷７出土土器について …… 398
第３節　弥生時代終末期の讃岐地域の土器様相について …… 415
第４節　讃岐における古墳出現の背景 …… 454

挿図目次

第 1図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地(善通寺～高松) …… 1
第 2図　遺跡位置図 …… 6
第 3図　中間西井坪遺跡調査区配置図(1/5,000) … 7
第 4図　中間西井坪遺跡東半部調査区割り図(1/1,400) …… 8
第 5図　周辺遺跡分布図(1/100,000) …… 12
第 6図　遺跡周辺地形分類図(1/5,000) …… 18
第 7図　6区土層断面図(天地1/40・左右1/160)　27～28
第 8図　7a区土層断面図(天地1/40・左右1/160) …… 29～30
第 9図　7b・9区土層断面図(天地1/40・左右1/160) …… 31～32
第 10図　8区土層断面図(天地1/40・左右1/160)　33～34
第 11図　10a区土層断面図(天地1/40・左右1/160) …… 35～36
第 12図　10b区土層断面図(天地1/40・左右1/160) …… 37～38
第 13図　11区土層断面図1(天地1/40・左右1/160) …… 39～40
第 14図　11区土層断面図2(天地1/40・左右1/160) …… 41～42
第 15図　弥生後期～古墳前期主要遺構分布図(1/500) …… 43～44
第 16図　SBⅡ03平・断面図(1/80) …… 45
第 17図　SBⅡ04平・断面図(1/80) …… 46
第 18図　SBⅡ32平・断面図(1/80) …… 47
第 19図　SBⅡ33平・断面図(1/80) …… 47
第 20図　SBⅡ34平・断面図(1/80),出土遺物実測図(1/4) …… 48
第 21図　SBⅡ35平・断面図(1/80) …… 49
第 22図　SKⅡ15平・断面図(1/40) …… 50
第 23図　SKⅡ15出土遺物実測図(1/4) …… 50
第 24図　SKⅡ20平・断面図(1/40) …… 51
第 25図　SKⅡ38平・断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4) …… 52
第 26図　SKⅡ39平・断面図(1/40) …… 53
第 27図　SKⅡ44平・断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4) …… 53
第 28図　SKⅡ45平・断面図(1/20),出土遺物実測図(1/4) …… 54
第 29図　SKⅡ46断面図(1/20),出土遺物実測図1(1/4・1/2) …… 57
第 30図　SKⅡ46出土遺物実測図2(1/2・1/4) …… 58
第 31図　SKⅡ47平・断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4・1/2) …… 59
第 32図　SXⅡ21平面図(1/200)・断面図(1/60) …… 60
第 33図　SXⅡ21出土遺物実測図(1/4) …… 61
第 34図　SXⅡ22平・断面図(1/50) …… 63
第 35図　SXⅡ22出土遺物実測図1(1/4・1/2) …… 65
第 36図　SXⅡ22出土遺物実測図2(1/4) …… 66
第 37図　SXⅡ23平面図(1/100)・断面図(1/40) … 67
第 38図　SXⅡ23出土遺物実測図(1/4) …… 68
第 39図　SXⅡ24平・断面図(1/40) …… 69
第 40図　SXⅡ24出土遺物実測図(1/4) …… 70
第 41図　SDⅡ26・27断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4) …… 71
第 42図　SDⅡ53断面図(1/40) …… 72
第 43図　SDⅡ56断面図(1/40),出土遺物実測図(1/4) …… 72
第 44図　STⅡ01・02平・断面図(1/10) …… 74
第 45図　STⅡ01出土遺物実測図(1/4) …… 75
第 46図　STⅡ02出土遺物実測図(1/4) …… 76
第 47図　STⅡ03平・断面図(1/40) …… 77
第 48図　谷7流路変遷図(1/1,000) …… 80
第 49図　谷7土層断面図(天地1/80・左右1/320) … 81
第 50図　10a区谷7下層出土遺物実測図1(1/4) … 85
第 51図　10a区谷7下層出土遺物実測図2(1/4) … 87
第 52図　10a区谷7下層出土遺物実測図3(1/4) … 89
第 53図　10a区谷7下層出土遺物実測図4(1/4) … 91
第 54図　10a区谷7下層出土遺物実測図5(1/4) … 92
第 55図　10a区谷7下層出土遺物実測図6(1/4) … 93
第 56図　10a区谷7下層出土遺物実測図7(1/4) … 95
第 57図　10a区谷7下層出土遺物実測図8(1/4) … 96
第 58図　10a区谷7下層出土遺物実測図9(1/4) … 97
第 59図　10a区谷7下層出土遺物実測図10(1/2・1/4) …… 98
第 60図　10b区谷7下層出土遺物実測図(1/4) …… 99
第 61図　10a区谷7中層出土遺物実測図1(1/4) … 101
第 62図　10a区谷7中層出土遺物実測図2(1/4) … 102
第 63図　10a区谷7中層出土遺物実測図3(1/4) … 103

第 64図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図４(1/4)　… 105
第 65図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図５(1/4)　… 107
第 66図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図６(1/4)　… 108
第 67図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図７(1/4)　… 109
第 68図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図８(1/4)　… 111
第 69図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図９(1/4)　… 113
第 70図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図10(1/4)　… 114
第 71図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図11(1/4)　… 115
第 72図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図12(1/4)　… 116
第 73図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図13
(1/4・1/2) …… 117
第 74図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図１(1/4)　… 119
第 75図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図２(1/4)　… 120
第 76図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図３(1/4)　… 121
第 77図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図４(1/4)　… 123
第 78図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図５
(1/4・1/2) …… 124
第 79図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図６
(2/3・1/2・1/4)　…… 125
第 80図　11区谷７中層出土遺物実測図１(1/4)　…… 127
第 81図　11区谷７中層出土遺物実測図２(1/4)　…… 128
第 82図　11区谷７中層出土遺物実測図３(1/4 …… 129
第 83図　11区谷７中層出土遺物実測図４(1/4)　…… 130
第 84図　11区谷７中層出土遺物実測図５(1/4)　…… 131
第 85図　11区谷７中層出土遺物実測図６(1/4)　…… 133
第 86図　11区谷７中層出土遺物実測図７(1/4)　…… 134
第 87図　11区谷７中層出土遺物実測図８
(1/4・1/2) …… 135
第 88図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図１(1/4)　… 137
第 89図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図２(1/4)　… 138
第 90図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図３(1/4)　… 139
第 91図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図４(1/4)　… 140
第 92図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図５(1/4)　… 141
第 93図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図６(1/4)　… 142
第 94図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図７(1/4)　… 143
第 95図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図８(1/4)　… 145
第 96図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図９(1/4)　… 146
第 97図　10ｂ区谷７上層出土遺物実測図
(1/4・1/2) …… 147
第 98図　谷７最上層出土遺物実測図１(1/4)　…… 151
第 99図　谷７最上層出土遺物実測図２(1/4)　…… 152
第100図　谷７最上層出土遺物実測図３(1/4)　…… 153
第101図　谷７最上層出土遺物実測図４(1/4)　…… 154
第102図　谷７最上層出土遺物実測図５(1/4)　…… 155
第103図　谷７最上層出土遺物実測図６(1/4)　…… 156
第104図　谷７最上層出土遺物実測図７
(2/3・1/2・1/4)　…… 157
第105図　谷７最上層出土遺物実測図８(1/4)　…… 159
第106図　古代主要遺構分布図(1/500) …… 161～162
第107図　ＳＨⅡ01平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 163
第108図　ＳＨⅡ02平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4・1/2) …… 164
第109図　ＳＢⅡ05平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 165
第110図　ＳＢⅡ07平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 166
第111図　ＳＢⅡ08平・断面図(1/80) …… 167
第112図　ＳＢⅡ09平・断面図(1/80) …… 168
第113図　ＳＢⅡ11平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 169
第114図　ＳＢⅡ13平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 170
第115図　ＳＢⅡ14平・断面図(1/80) …… 171
第116図　ＳＢⅡ15平・断面図(1/80) …… 171
第117図　ＳＢⅡ16平・断面図(1/80)
出土遺物実測図(1/4)　…… 172
第118図　ＳＢⅡ17平・断面図(1/80)
出土遺物実測図(1/4)　…… 173
第119図　ＳＢⅡ18平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 174
第120図　ＳＢⅡ19平・断面図(1/80) …… 175
第121図　ＳＢⅡ20平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 176
第122図　ＳＢⅡ21平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 177
第123図　ＳＢⅡ22平・断面図(1/80) …… 178
第124図　ＳＢⅡ23平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 179
第125図　ＳＢⅡ24平・断面図(1/80) …… 180
第126図　ＳＢⅡ25平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4)　…… 181
第127図　ＳＢⅡ26平・断面図(1/80) …… 182
第128図　ＳＢⅡ27平・断面図(1/80) …… 183
第129図　ＳＢⅡ28平・断面図(1/80) …… 184
第130図　ＳＢⅡ29平・断面図(1/80) …… 185
第131図　ＳＢⅡ30平・断面図(1/80) …… 186
第132図　ＳＢⅡ31平・断面図(1/80) …… 187
第133図　ＳＢⅡ38平・断面図(1/80) …… 188
第134図　ＳＢⅡ39平・断面図(1/80) …… 188
第135図　柱穴出土遺物実測図(1/4・2/3) …… 190
第136図　ＳＫⅡ25平・断面図(1/50) …… 191

第137図　ＳＫⅡ26平・断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/3・1/4) … 192
第138図　ＳＫⅡ27平・断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 193
第139図　ＳＫⅡ28平・断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 194
第140図　ＳＫⅡ29平・断面図(1/40)…… 195
第141図　ＳＸⅡ12平・断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 195
第142図　ＳＸⅡ13断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 196
第143図　ＳＸⅡ14平・断面図(1/40)…… 198
第144図　ＳＸⅡ14出土遺物実測図１(1/4) …… 199
第145図　ＳＸⅡ14出土遺物実測図２(1/4) …… 200
第146図　ＳＸⅡ15平・断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 201
第147図　ＳＸⅡ16平・断面図(1/40),
出土遺物実測図１(1/4) …… 203
第148図　ＳＸⅡ16出土遺物実測図２(1/4) …… 204
第149図　ＳＸⅡ17平・断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 205
第150図　ＳＤⅡ14断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 206
第151図　ＳＤⅡ15断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4・1/2) … 207
第152図　ＳＤⅡ16断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 208
第153図　ＳＤⅡ17断面図(1/40) …… 208
第154図　ＳＤⅡ20断面図(1/40) …… 209
第155図　ＳＤⅡ21断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/2) …… 209
第156図　ＳＤⅡ22断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 210
第157図　ＳＤⅡ23～25断面図(1/40)…… 210
第158図　ＳＤⅡ36断面図(1/40) …… 211
第159図　ＳＤⅡ38断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 212
第160図　ＳＤⅡ42・ＳＡⅡ01平・断面図
(1/80・1/40), 出土遺物実測図(1/4) … 213
第161図　ＳＤⅡ46・47断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 214
第162図　ＳＤⅡ45断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 215
第163図　ＳＤⅡ59断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 216
第164図　ＳＤⅡ61断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/2) …… 216
第165図　ＳＤⅡ64断面図(1/40) …… 217
第166図　ＳＤⅡ65断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 218
第167図　ＳＤⅡ66・68断面図(1/40),
出土遺物実測図(2/3・1/4) …… 219
第168図　ＳＤⅡ67断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 221
第169図　ＳＤⅡ69断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 222
第170図　ＳＤⅡ71断面図(1/60) …… 223
第171図　ＳＤⅡ71下層出土遺物実測図１(1/4) …… 225
第172図　ＳＤⅡ71下層出土遺物実測図２
(1/2・1/4) …… 227
第173図　ＳＤⅡ71上層出土遺物実測図
(1/4・2/3・1/2) …… 228
第174図　ＳＢⅡ36平・断面図(1/80)…… 230
第175図　中世主要遺構分布図(1/500) …… 231～232
第176図　ＳＢⅡ37平・断面図(1/80),
出土遺物実測図(1/4) …… 233
第177図　ＳＢⅡ40平・断面図(1/80)…… 234
第178図　ＳＢⅡ41平・断面図(1/80),
ＳＫⅡ41平面図(1/80)・断面図(1/40) … 235
第179図　柱穴出土遺物実測図１(1/4・1/2) …… 236
第180図　柱穴出土遺物実測図２(1/4) …… 238
第181図　ＳＫⅡ05平・断面図(1/50),
出土遺物実測図(1/4) …… 239
第182図　ＳＫⅡ33平・断面図(1/40)…… 240
第183図　ＳＫⅡ34平・断面図(1/40)…… 240
第184図　ＳＫⅡ35平・断面図(1/40)…… 241
第185図　ＳＫⅡ36平・断面図(1/40)…… 241
第186図　ＳＫⅡ37平・断面図(1/40)…… 242
第187図　ＳＫⅡ40平・断面図(1/40)…… 242
第188図　ＳＫⅡ40出土遺物実測図(1/4) …… 243
第189図　ＳＫⅡ48平・断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 243
第190図　ＳＫⅡ49平・断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 244
第191図　ＳＸⅡ02断面図(1/40) …… 245
第192図　ＳＸⅡ02出土遺物実測図(1/4) …… 247
第193図　ＳＸⅡ06平・断面図(1/40)…… 248
第194図　ＳＸⅡ06出土遺物実測図(1/4) …… 249
第195図　ＳＸⅡ20平面図(1/100)・
断面図(1/40)…… 250
第196図　ＳＤⅡ06断面図(1/40),
出土遺物実測図(1/4) …… 251

第197図　ＳＤⅡ08平面図(1/100)，断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/4) … 252
第198図　ＳＤⅡ12断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/4) …… 253
第199図　ＳＤⅡ28断面図(1/40) …… 254
第200図　ＳＤⅡ29・30断面図(1/40)，出土遺物出土遺物実測図(1/3・2/3・1/4)　255
第201図　ＳＤⅡ31断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/4) …… 257
第202図　ＳＤⅡ33断面図(1/40) …… 257
第203図　ＳＤⅡ35断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/4) …… 258
第204図　ＳＤⅡ39・48断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/4) …… 259
第205図　ＳＤⅡ43断面図(1/40) …… 261
第206図　ＳＤⅡ70断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/4) …… 262
第207図　近世主要遺構分布図(1/500) …… 263～264
第208図　柱穴出土遺物実測図(1/3・1/4・1/2) …… 265
第209図　ＳＫⅡ01・02平・断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/4・1/3) … 266
第210図　ＳＫⅡ03平・断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 269
第211図　ＳＫⅡ06平・断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/3・1/4) … 271
第212図　ＳＫⅡ07平・断面図(1/40)，出土遺物実測図１(1/4) …… 272
第213図　ＳＫⅡ07出土遺物実測図２(1/4) …… 273
第214図　ＳＫⅡ09平・断面図(1/40) …… 274
第215図　ＳＫⅡ11平・断面図(1/50) …… 275
第216図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図１(1/3) …… 276
第217図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図２(1/3) …… 277
第218図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図３(1/3) …… 279
第219図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図４(1/3) …… 281
第220図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図５(1/3・1/4) …… 282
第221図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図６(1/4) …… 283
第222図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図７(1/4) …… 284
第223図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図８(1/4) …… 285
第224図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図９(1/4) …… 286
第225図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図10(1/4) …… 287
第226図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図11(1/4) …… 288
第227図　ＳＫⅡ12平・側・断面図(1/20) …… 289
第228図　ＳＫⅡ12出土遺物実測図(1/2・1/6) …… 290
第229図　ＳＫⅡ23平・断面図(1/20)，出土遺物実測図(1/4) …… 291
第230図　ＳＫⅡ24平・断面図(1/40) …… 291
第231図　ＳＫⅡ24出土遺物実測図(1/4) …… 292
第232図　ＳＫⅡ30平・断面図(1/40) …… 293
第233図　ＳＫⅡ30出土遺物実測図(1/3・1/4・1/2) …… 294
第234図　ＳＥⅡ01出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 296
第235図　ＳＸⅡ03出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 298
第236図　ＳＸⅡ04平・断面図(1/100)，出土遺物実測図(1/4) …… 299
第237図　ＳＸⅡ05平・断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/3) …… 300
第238図　ＳＸⅡ18平・断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/3・1/4) … 301
第239図　ＳＸⅡ19平・断面図(1/40)，出土遺物実測図１(1/3) …… 303
第240図　ＳＸⅡ19出土遺物実測図２(1/4) …… 304
第241図　ＳＤⅡ01断面図(1/40) …… 305
第242図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図１(1/3) …… 307
第243図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図２(1/3) …… 308
第244図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図３(1/3) …… 309
第245図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図４(1/3) …… 311
第246図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図５(1/3・1/4) …… 312
第247図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図６(1/4) …… 313
第248図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図７(1/4) …… 314
第249図　ＳＤⅡ０3断面図(1/40) …… 316
第250図　ＳＤⅡ03出土遺物実測図１(1/3) …… 317
第251図　ＳＤⅡ03出土遺物実測図２(1/3・1/4) …… 318
第252図　ＳＤⅡ04断面図(1/40) …… 319
第253図　ＳＤⅡ05断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/3・1/2) …… 319
第254図　ＳＤⅡ07断面図(1/40)，出土遺物実測図(1/3・1/4) …… 320
第255図　ＳＤⅡ10断面図(1/40) …… 321
第256図　ＳＤⅡ09出土遺物実測図１(1/3) …… 322
第257図　ＳＤⅡ09出土遺物実測図２(1/4・1/4) …… 323
第258図　ＳＤⅡ09出土遺物実測図３(1/4) …… 324
第259図　ＳＤⅡ11断面図(1/40) …… 325
第260図　ＳＤⅡ37断面図(1/40) …… 325
第261図　包含層等出土遺物実測図１(1/4) …… 329
第262図　包含層等出土遺物実測図２(1/4・2/3) …… 330
第263図　包含層等出土遺物実測図３(2/3・1/2) …… 331
第264図　Ｂ類土器と砂粒分類３類土器の推定製作圏分布 …… 348
第265図　１類土器と下川津Ｂ類および５類土器(空港跡地遺跡Ⅱ)との比較 …… 357
第266図　１類土器と下川津Ｂ類および５類土器

（空港跡地遺跡Ⅱ）との比較 …… 357
第267図　２類土器の細分および他遺跡との比較 …… 358
第268図　２類土器の細分および他遺跡との比較 …… 358
第269図　４・５類土器と他の分類土器との比較 …… 359
第270図　４・５類土器と他の分類土器との比較 …… 359
第271図　４・５類土器と他の分類土器との比較 …… 360
第272図　ウシ出土部位（模式図）数字は整理番号 …… 381
第273図　中間西井坪遺跡建物遺構主軸方向 …… 392
第274図　中間西井坪遺跡古代建物遺構変遷
（1/800） …… 393
第275図　中間西井坪遺跡主要潅漑用水路の変遷 …… 395
第276図　中間西井坪遺跡谷７出土の器種組成１ …… 401
第277図　中間西井坪遺跡谷７出土の器種組成２ …… 405
第278図　中間西井坪遺跡谷７出土の器種組成３ …… 407
第279図　中間西井坪遺跡出土の
外来系土器・搬入土器 …… 411
第280図　高松平野の旧地形とＢ類土器製作圏 …… 416
第281図　中間西井坪遺跡Ｂ類土器出現頻度 …… 418
第282図　下川津Ｂ類土器主要器種（1/8，３のみ1/12） 425
第283図　下川津Ｂ類土器搬入偏差 …… 433
第284図　竪穴住居平面形態分類１ …… 440
第285図　竪穴住居平面形態分類２ …… 441
第286図　竪穴住居平面形態分類３ …… 442
第287図　竪穴住居平面形態分類４ …… 443
第288図　弥生時代後期後半から古墳時代前期の
竪穴住居地域別分類 …… 444
第289図　Ｂ類土器共有圏と前期積石塚
前方後円墳の分布（1/2,000,000） … 447
第290図　東四国系土器群主要器種 …… 455
第291図　二重口縁壺・複合口縁壺の主要系譜 …… 457
第292図　終末期Ｂ類甕の口頸部形態分類（1/2） …… 459
第293図　東四国系甕の口頸部形態分類（1/2） …… 461
第294図　東四国系甕の主要系譜 …… 462
第295図　高松市茶臼山古墳出土土器（1/4） …… 465
第296図　香川県内出土古式布留系甕１ …… 467
第297図　香川県内出土古式布留系甕２ …… 469
第298図　香川県内出土畿内系土器 …… 471
第299図　香川県内出土山陰系土器 …… 473
第300図　香川県内出土阿波系搬入土器 …… 475
第301図　讃岐地域前方後円墳編年案 …… 479

図版目次

巻頭図版１　遺跡遠景（西方上空より）
ＳＫⅡ46遺物出土状況（西より）
巻頭図版２　谷７下層出土土器
谷７中・上層出土土器
写真１　木材（1） …… 340
写真２　木材（2） …… 341
写真３　木材（3） …… 342
写真４　木材（4） …… 343
写真５　種実遺体 …… 344
写真６　胎土の特徴と岩石鉱物（いずれも＋ニコル）… 368
写真７　胎土の特徴と岩石鉱物
（６・７が－ニコル，その他は＋ニコル）… 369
写真８　鉄滓の顕微鏡組織 …… 377
写真９　鉄滓と羽口溶融物の顕微鏡組織 …… 378
写真10　出土動物遺存体 …… 386

表目次

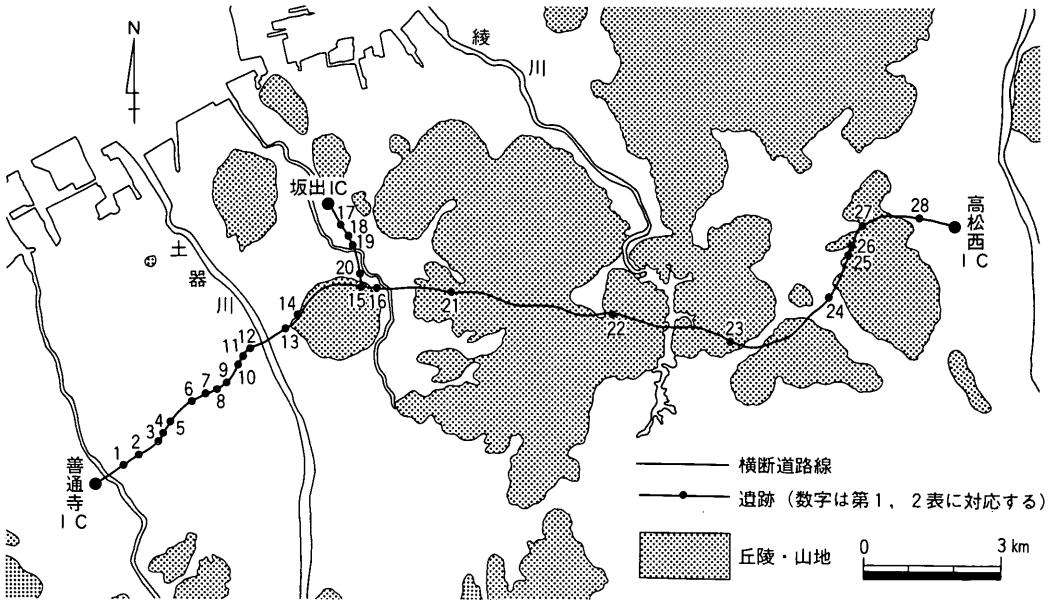
第１表　四国横断自動車道(善通寺～高松)
建設に伴う発掘調査の概要(１) …… 3
第２表　四国横断自動車道(善通寺～高松)
建設に伴う発掘調査の概要(２) …… 4
第３表　中間西井坪遺跡整理作業工程表 …… 10
第４表　周辺遺跡一覧１(弥生～古代) …… 13
第５表　周辺遺跡一覧２(弥生～古代) …… 14
第６表　周辺遺跡一覧３(弥生～古代) …… 15
第７表　周辺遺跡一覧４(弥生～古代) …… 16
第８表　樹種同定結果 …… 334
第９表　時代別・用途別樹種構成 …… 337
第10表　種実遺体の同定結果 …… 338
第11表　谷７外出土土器の胎土分析試料
一覧表(%)ただし Sr, Rb は ppm …… 355
第12表　谷７外出土土器の胎土分析試料
一覧表(%)ただし Sr, Rb は ppm …… 356
第13表　分析資料 …… 361
第14表　胎土中の岩石鉱物の含有量比 …… 362
第15表　胎土の特徴と土器との関係 …… 363
第16表　資料１の胎土の元素含有率(%) …… 366
第17表　供試材の履歴と調査項目 …… 371
第18表　供試材の化学組成 …… 376
第19表　古代製鉄遺跡作業工程概念想定表 …… 376
第20表　中間西井坪遺跡出土動物遺存体種名表 …… 380
第21表　出土動物遺存体属性表 …… 385
第22表　出土上顎第３後臼歯属性表 …… 385
第23表　讃岐地域の土器編年とその併行関係　412～413
第24表　讃岐地域の竪穴住居集成表１ …… 451
第25表　讃岐地域の竪穴住居集成表２ …… 452
第26表　讃岐地域の竪穴住居集成表３ …… 453

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

四国横断自動車道は，「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき，四国４県を連結する幹線道路として計画された。そのうち本遺跡調査の契機となった四国横断自動車道高松～善通寺間（延長21.7km）については，昭和57（1982）年１月８日に整備計画が決定され，昭和59（1984）年11月30日に建設大臣より日本道路公団総裁に対して施工命令が下され，昭和60（1985）年３月の路線発表を経て，ようやく建設に至る運びとなった。

香川県教育委員会（以下「県教委」という。）では，昭和58（1983）年度に国庫補助を得て，中讃地区４市９町を対象に詳細分布調査を実施し，こうした大規模開発に対応する基礎データの把握に努めた。さらに昭和60年の路線発表を受けて，路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的として，昭和61（1986）年度に国庫補助事業により詳細遺跡分布調査を実施し，約39万m²の調査対象地が確定した。分布調査の結果を踏まえて，路線内に所在す



第１図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～高松）

る埋蔵文化財の取り扱いについて，日本道路公団と文化庁との間で協議が行われ，工事施工に先立って発掘調査を実施すること，調査については基本的には記録保存で対応することなどが決定された。

一方，県教委では同事業に対応する調査体制を早期に整備する必要から，昭和62（1987）年度より香川県土木部横断道対策課及び日本道路公団高松建設局（以下「公団」という。）と調査体制などについて協議を開始した。協議の結果，昭和63（1988）年度より２ヶ年の予定で本調査を実施すること，整理報告は発掘調査終了後に実施することなどが決定された。また，調査体制の充実を図ることを目的に，昭和62（1987）年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）を設立し，専門職員の増員などの措置を講じて調査に対応することとした。

これと並行して，調査対象地の選定があくまで分布調査の結果基づくものであり，本調査に先行して遺構の遺存状態や層厚などを把握する必要から，日本道路公団と協議の上，予備調査を実施することとなった。予備調査は，昭和63年３月より用地買収が進んでいた丸亀市郡家地区を嚆矢として実施し，以後各遺跡において条件の整った地区より順次実施し，本調査時の調査方法や調査期間など計画策定に役立てた。

調査の実施にあたっては，県教委とセンターとの間で委託契約が昭和63年４月１日付けで締結され，以後本調査は，県教委が公団より委託を受け，センターが調査担当者として実施した。

本調査は，昭和63年４月より丸亀市郡家原遺跡・郡家一里屋遺跡・三条番ノ原遺跡の３遺跡において始まり，平成３（1991）年９月の坂出市川津一ノ又遺跡の調査をもって終了した。この間の調査面積は，32万㎡余りに及ぶ。調査結果の整理・報告は，平成３年度より実施し，平成９年度末までに18冊の報告書を刊行し，現在も継続中である。

No	遺跡名	所在地	面積（㎡）	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	文献
1	龍川五条遺跡	善通寺市原田町	12,300 10.200	元．6.26～2．3.31 2．4．9～2.12．5	竪穴住居・掘立柱建物跡・周溝墓・土壙墓・自然河川	弥生土器，土師器，須恵器，石器，木品	1 2
2	龍川四条遺跡	善通寺市原田町・木徳町	20,200 1,700 300	元．7．1～2．3.31 2．5.28～2.10.24 3．4．4～3．6.18	古代掘立柱建物跡・墓・溝状遺構・自然河川	縄文土器・土師器・須恵器・和鏡・磁器・瓦器	3
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,041 1,300	63．4.18～元．2.10 元．4.10～2．3.31	竪穴住居跡・自然河川・溝状遺構	弥生土器ほか	4
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	7,677	63．6.15～63.11.26	旧石器ユニット・溝状遺構・建物跡	旧石器・弥生土器・陶磁器	5
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町・郡家町	17,099 2,600	63．4.18～元．3.31 元．4.10～2．3.31	竪穴住居跡・溝状柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・緑釉土器・斎串ほか	6
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	14,067 6,450	63．4.18～元．3.31 元．4.10～2．3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	有舌尖頭器・弥生土器・須恵器・土師器・緑釉土器・灰釉土器	7
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175	63．6.15～元．3.22	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	須恵器・斎串ほか	8
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	12,741	63．6.15～元．2.17	掘立柱建物跡・溝状遺構・火葬墓	ナイフ形石器・弥生土器・須恵器・近世陶磁器	9
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町	3,033	63.12.12～元．3.25	掘立柱建物跡・溝状遺構	土師質土器	10
10	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町	4,034	63.12.13～元．3.27	溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器	5
11	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町	4,760	元．2．2～元．3.31	掘立建物跡・溝状遺構	土師器	11
12	川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町	12,208	元．4.10～元．8.11	中世掘立柱建物跡・溝・自然河川	土師器・須恵器・近世陶磁器	11
13	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町	3,366	63.12.13～元．3.27	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器	12
14	飯野・東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2．3．1～2．3.31		埴輪・陶磁器・近代梵鐘鋳型	2

第１表　四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(1)

No	遺跡名	所在地	面積（m²）	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	文献
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 綾歌郡飯山町	28,100 500	2．8．2～3．3.20 3．9．2～3．9．4	弥生～中世掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝状遺構	弥生土器・土師器・須恵器・墨書土器	13
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2．5.10～3．1.17	古墳時代竪穴住居跡・溝, 古代～中世建物跡・溝	縄文土器・土師器・須恵器・耳環・土馬・墨書土器	13
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2．5.10～3．2.28 3．4．4～3．9.13	弥生時代竪穴住居跡・溝・土坑 古代～中世建物跡・土壙墓	弥生土器・耳環・土師器・須恵器・鉄小刀	14
18	川津下樋遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2．5.10～3．1.31 3．7．1～3．7.16	弥生時代水田・井堰,溝・自然河川	縄文土器・石器・弥生土器・木製品	15
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2．5.10～3．3．8	弥生時代溝・自然河川,中世建物跡・溝	弥生土器・石器・土師器・須恵器	16
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2．4.12～3．3.28 3．7.18～3．9.27	弥生時代竪穴住居跡・建物跡 古墳時代竪穴住居跡・溝・水田	弥生土器・石器・土師器・須恵器・木製品	17 18
21	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町	2,200	元．4.17～元．5.16		弥生土器・須恵器・土師器	19
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2.10.30～2.12.26	時代不詳　柱穴・土坑	弥生土器・石器	13
23	綾南奥下池南遺跡	綾歌郡綾南町	2,900	元．5.22～元．7.24	須恵器窯跡	須恵器	20
24	国分寺下日名代遺跡	綾歌郡国分寺町	11,350	元．8.19～2．2.28	弥生時代溝・水田跡・動物足跡	弥生土器・土師器・須恵器	19
25	国分寺楠井遺跡	綾歌郡国分寺町	4,400	2．4.11～2.10．2	円墳・中世土師器窯・掘立柱建物跡	須恵器・耳環・土師器・瓦質土器	21
26	国分寺六ツ目古墳	綾歌郡国分寺町	900	元．9．1～元.12.28	前方後円墳（主体部３基）	古式土師器・鉄器	22
27	国分寺六ツ目遺跡	綾歌郡国分寺町	5,600	元.10．1～2．2.28	中近世建物跡	石器・弥生土器・近世陶磁器	19
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元．8.19～2．3.25 2．5.10～3．3.25 3．4．5～3．7.18	旧石器ブロック・埴輪焼成土坑・古墳（３基）竪穴住居跡・掘立建物跡・溝・土坑	旧石器・弥生土器・埴輪・須恵器・土師器・陶棺	23 本書 24

第２表　四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(2)

文献

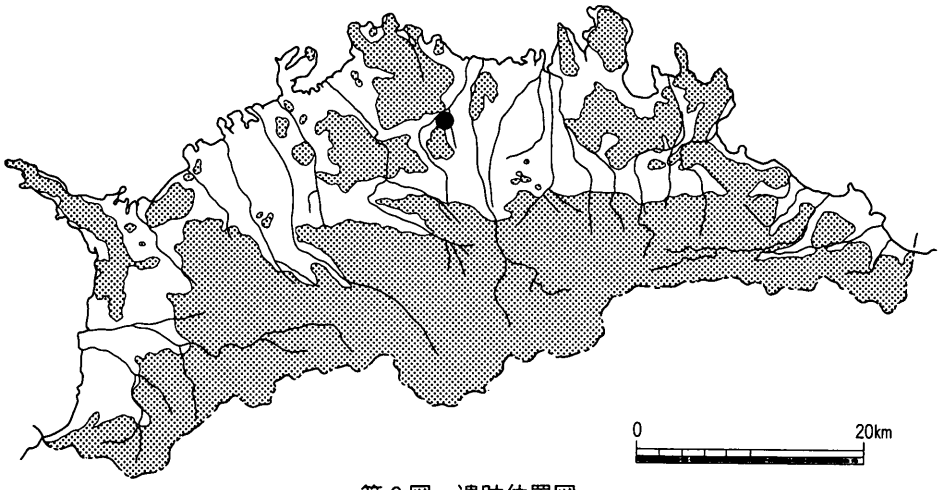
1. 宮崎哲治　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第23冊　龍川五条遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他　1996.12
2. 森下英治　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊　龍川五条遺跡Ⅱ　飯野東分山崎南遺跡』　香川県教育委員会他　1998.12
3. 西岡達哉他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊　龍川四条遺跡』香川県教育委員会他　1995.3
4. 片桐孝浩他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第11冊　三条番ノ原遺跡』香川県教育委員会他　1992.8
5. 森下英治他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第27冊　三条黒島遺跡　川西北七条Ⅰ遺跡』　香川県教育委員会他　1997.9
6. 山下平重他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第13冊　郡家原遺跡』香川県教育委員会他　1993.11
7. 和田素子　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第12冊　郡家一里屋遺跡』香川県教育委員会他　1993.11
8. 廣瀬常雄他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第17冊　郡家大林上遺跡』香川県教育委員会他　1995.3
9. 佐藤竜馬他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第24冊　郡家田代遺跡』香川県教育委員会他　1996.10
10. 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　昭和63年度』　香川県教育委員会他　1989.9
11. 片桐孝浩他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第22冊　川西北・七条Ⅱ遺跡　川西北・鍛冶屋遺跡』　香川県教育委員会他　1996.3
12. 山下平重他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第20冊　飯野・東二瓦礫遺跡』　香川県教育委員会他　1996.3
13. 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成２年度』　香川県教育委員会他　1991.8
14. 西岡達哉他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第14冊　川津中塚遺跡』香川県教育委員会他　1994.3
15. 片桐孝浩　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第21冊　川津下樋遺跡』香川県教育委員会他　1996.3
16. 木下晴一他　『四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊　川津二代取遺跡』香川県教育委員会他　1995.3
17. 山下平重　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊　川津一ノ又遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他　1997.3
18. 古野徳久他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊　川津一ノ又遺跡Ⅱ』　香川県教育委員会他　1998.10
19. 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成元年度』　香川県教育委員会他　1990.8
20. 佐藤竜馬他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第19冊　綾南奥下池南遺跡』　香川県教育委員会他　1996.3
21. 佐藤竜馬　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊　国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会他　1995.10
22. 森下英治　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第28冊　国分寺六ツ目古墳』香川県教育委員会他　1997.8
23. 大久保徹也他　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊　中間西井坪遺跡Ⅰ』　香川県教育委員会他　1996.11

第２節　発掘作業の経過

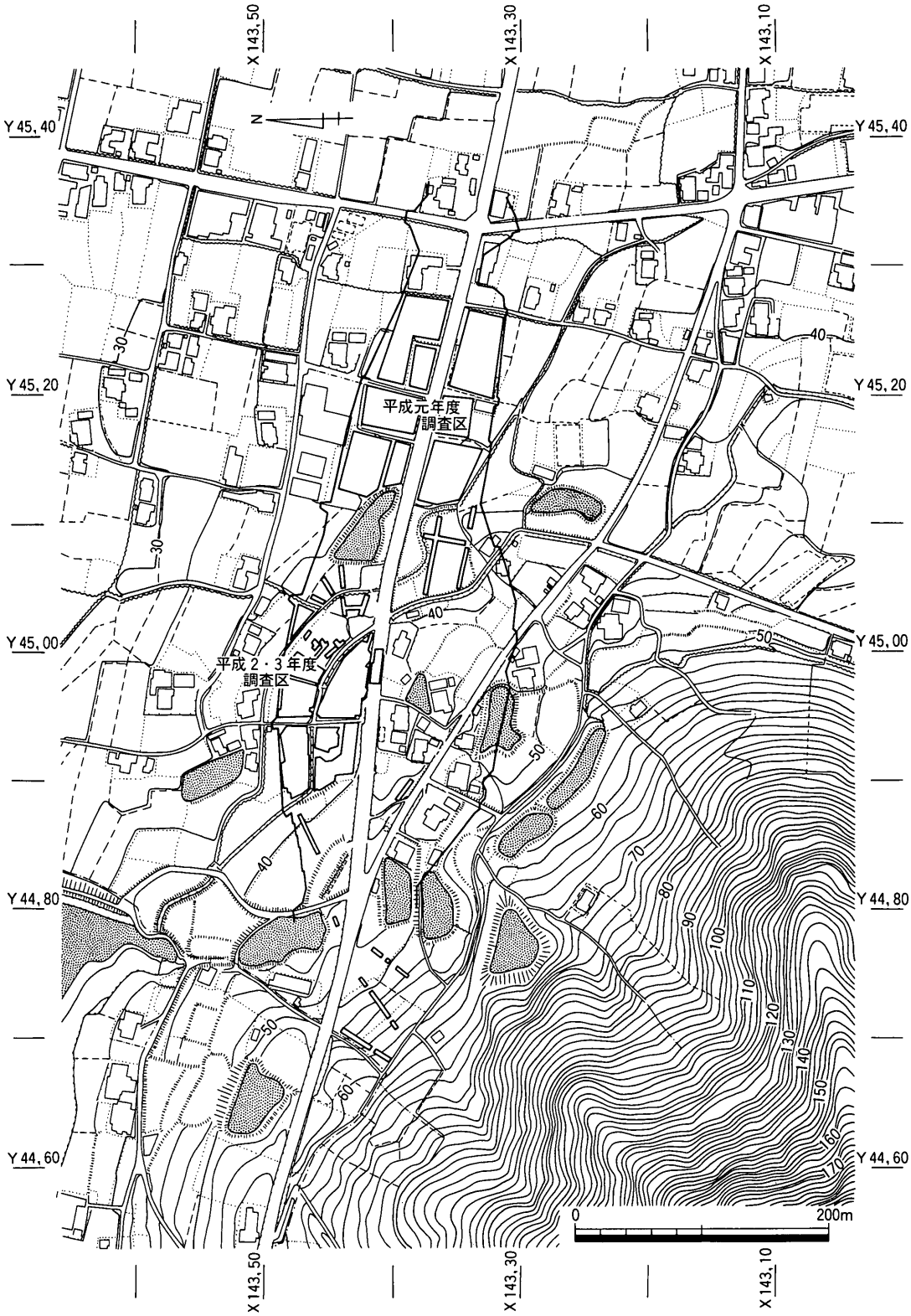
中間地区の発掘調査は，平成元（1989）年５月に県道西山崎御厩線以東の地区を対象とした予備調査を嚆矢として開始された。以後，平成３（1991）年７月までの間に，計６次の予備調査を実施し，また総面積約21,000㎡に及ぶ本調査を実施した。本報告書に所収するのは，そのうち平成元年度に行った１次予備調査と，本調査の調査成果である。それ以外の調査の経過については，同地区の報告書等（大久保他1991）に拠られたい。

さて，１次予備調査では，面積8,665㎡を対象に，トレンチ13本を設定して遺構・遺物の確認を行った。調査期間は，平成元年５月27日より同年６月１日までの実労５日間である。調査にあたっては，耕作土・床土は重機によって掘削し，遺物包含層以下は人力によって地山面まで掘り下げを行い，遺物量の確認を行った。調査の結果，顕著な遺構・遺物の分布は確認されず，本地点については当初の目的を達成したため，本予備調査をもって調査を終了した。

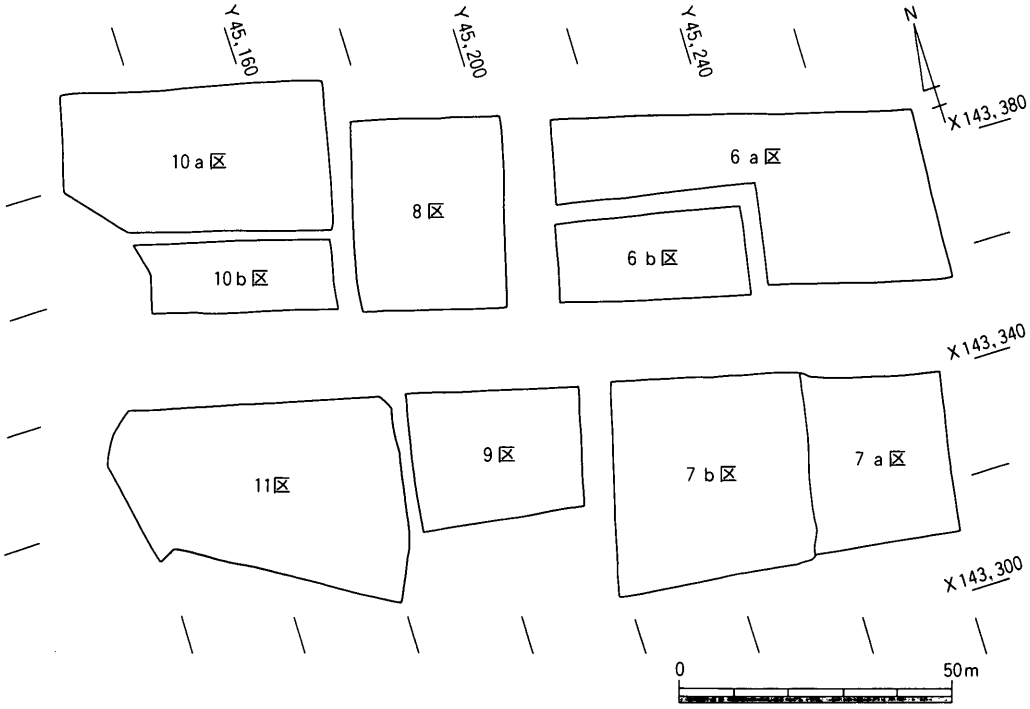
２次予備調査は，県道西山崎御厩線以西の平地部の面積13,009㎡を対象として，平成元年６月19日より７月６日にかけて，トレンチ９本を設定して調査を行った。しかしながら，当該地区の宅地部分については退去以前であり，実際の対象面積は11,600㎡に減少した。本予備調査の結果，対象地全域において濃密に遺構・遺物が分布することが明らかとなり，本調査を実施する運びとなった。なお，本予備調査対象地のうち未退去の宅地部分につい



第２図　遺跡位置図



第３図　中間西井坪遺跡調査区配置図（１/5,000）



第４図　中間西井坪遺跡東半部調査区割り図（１/1,400）

ては，平成２年度以降の調査と工事工程の切迫によって，結果的には遺構の拡がりを充分に把握することができないまま調査を終了することとなった。既刊の報告書にも述べられているように，特に中間地区の調査においては，その初期においては全体的な遺跡像の把握と調査工程の見通し，及び工事工程との調整等に苦慮したため，様々な困難や課題が生じたことは明らかである。その当初において予備調査に携わった一員として，今後の調査計画を立てる上で，こうした点は教訓として生かしていかねばならないことを痛感した。

平成元年度本調査は，上記２次予備調査の結果を受けて，平成元年８月19日より面積11,600㎡を対象として実施した。調査にあたっては，現状の里道や水路に制約されて，９調査区に分割して調査を行った。土層堆積状況の確認は，各調査区単位に行い，土層図と写真において記録を作成した。なお，調査に伴う諸工事等については，工事請負方式を採用し，（株）松村組が請負者となった。また，遺構平面の測量は，ヘリコプターによる航空測量で行い，個別の遺構等の平面図や断面図等については，調査担当者の手書きにより作成した。調査は，全体の調査工程を勘案して，掘削土量の大きい谷部より，まず調査に着手することにした。しかしながら，谷部の遺物量は予備調査で把握していたよりも多く，また複雑な堆積状況を示していたことから，調査開始直後より工程に若干の支障が生じ，

調査途中において調査員の拡充を行い対応した。それでも年度末の平成２年３月25日になって，ようやく調査を終了することができた。なお，出土遺物，図面，写真は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターにおいて保管している。平成元年度の調査体制は，下記のとおりである。

香川県教育委員会事務局　文化行政課

課長	太田　彰一
課長補佐	高木　　尚
副主幹	野網朝二郎
総務係長	宮内　憲生
埋蔵文化財係長	大山　真充

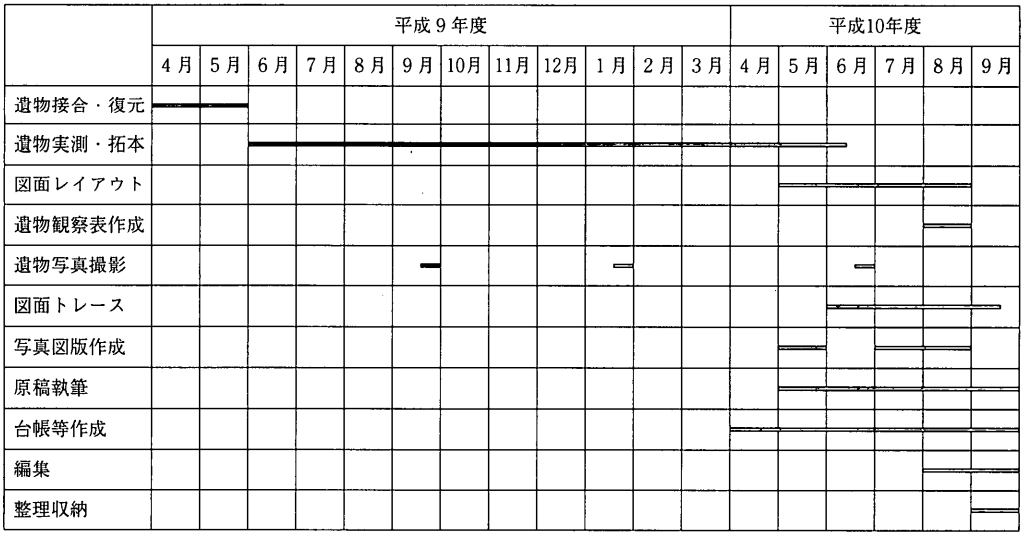
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長	十川　　泉
次長	安藤　道雄
総務係長	加藤　正司
主査	山地　　修
主事	三宅　浩司
調査参事	見勢　　護
文化財専門員	真鍋　昌宏
主任技師	牧野　啓造
技師	中野　昇一
技師	蔵本　晋司
調査技術員	山本　　健
調査技術員	萬木　一郎
調査技術員	寺井　香吏

第３節　整理作業の経過

本報告書に掲載する遺跡東半部の整理作業は，平成９年４月１日より平成10年９月30日にかけて，香川県埋蔵文化財センターにおいて行った。遺物注記作業など基礎整理の一部については，平成２年度において実施しており，当該年度においては，18リットル入コンテナ約350箱の出土遺物の接合・図化・写真撮影作業と，検出遺構の図面・写真などの整理・浄書作業を行い報告書に纏めた。当該作業に関わる人員配置は，調査員１名と整理作業員８名である。調査後既に９年が経過しており，調査時に得られたデータを十分に報告書に生かし切れたとは言い難い。また，出土遺物にも若干の混乱が生じており，今後に課題を残した。

なお，出土遺物の写真撮影と木製品の樹種鑑定は外部に委託し，出土土器胎土の蛍光Ｘ線分析は岡山理科大学　白石純氏に，出土土器胎土の岩石・鉱物組成の同定は京都大学　清水芳裕氏に，出土動物遺存体の同定は岡山理科大学　富岡直人氏に，出土鉄滓等の金属学的分析は大澤正己氏にそれぞれ依頼し，頂いた玉稿は第４章に掲載した。また，出土石器・石製品等の石材同定は香川大学　谷山穣氏に，出土貝類遺体の同定は香川県立香川中部養護学校　多田昭氏にそれぞれ依頼した。



第３表　中間西井坪遺跡整理作業工程表

平成９年度整理体制

香川県教育委員会事務局　文化行政課

課長	菅原	良弘
課長補佐	北原	和利
副主幹	渡部	明夫
総務係長	山崎	隆
主査	星加	宏明（～5.31）
	松村	崇史（6.1～）
文化財専門員	木下	晴一
技師	塩崎	誠司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長	大森	忠彦
次長	小野	善範
副主幹	田中	秀文（6.1～）
総務係長	前田	和也（～5.31）
主任文化財専門員	廣瀬	常雄
文化財専門員	蔵本	晋司

平成10年度整理体制

香川県教育委員会事務局　文化行政課

課長	小原	克己
課長補佐	北原	和利
副主幹	渡部	明夫
副主幹	西村	隆史
総務係長	中村	禎伸
主査	三宅	陽子
主査	松村	崇史
埋蔵文化財係長	西村	尋文
主任技師	塩崎	誠司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長	菅原	良弘
次長	小野	善範
副主幹	田中	秀文
主査	西川	大（～5.31）
主査	新	一郎（6.1～）
主任文化財専門員	廣瀬	常雄
文化財専門員	北山	健一郎
文化財専門員	蔵本	晋司

第５図　周辺遺跡分布図（１/100,000）

番号	遺　跡　名	所　在　地	内　容
1	横立山経塚古墳	高松市中山町	古墳前・積石前方後円34m
2	横立山東麓１号墳	高松市中山町	古墳後・箱式石棺
3	弾正原古墳	高松市神在川窪町	古墳後・横穴式石室
4	木野戸古墳	高松市神在川窪町	
5	原経塚古墳	高松市中山町原	古墳前？・積石円墳？
6	桑崎古墳	高松市中山町桑崎	古墳後・横穴式石室
7	坊主山古墳	高松市神在川窪町	古墳前？・円墳（竪穴石槨）
8	住吉神社古墳	高松市神在川窪町	古墳後・円墳（竪穴石槨）
9	白骨古墳	高松市神在川窪町	？・箱式石棺
10	勝賀廃寺	高松市香西西町堂の奥	古代・寺院
11	沢池西古墳	高松市鬼無町是竹	古墳後・横穴式石室
12	かしが谷古墳群	高松市鬼無町是竹	古墳前・円墳４基（竪穴石槨他）
13	佐料遺跡	高松市鬼無町佐料	弥生後・散布地
14	西打遺跡	高松市鬼無町	弥生後・集落
15	山の神１号墳	高松市鬼無町佐藤	？・箱式石棺
16	善師垣古墳群	高松市鬼無町佐料	古墳後？・横穴式石室？
17	虎池西古墳	高松市鬼無町佐料	？
18	木舟池下古墳	高松市鬼無町佐料	？
19	今岡古墳	高松市鬼無町佐料・佐藤	古墳中・前方後円61m
20	首取山古墳	高松市鬼無町	古墳中・箱形土製棺
21	山口龍神社古墳	高松市鬼無町佐藤	？
22	平木古墳群	高松市鬼無町佐藤	古墳後・横穴式石室３基
23	鬼無大塚古墳	高松市鬼無町佐藤	古墳後・横穴式石室
24	神高池古墳群	高松市鬼無町山口	古墳後・横穴式石室３基
25	古宮古墳	高松市鬼無町山口	古墳後・横穴式石室
26	神高南西古墳群	高松市鬼無町山口	古墳後・横穴式石室２基
27	山野塚古墳	高松市鬼無町山口	古墳後・横穴式石室
28	相越古墳	高松市鬼無町山口	？
29	桃太郎神社西遺跡	高松市鬼無町鬼無	古墳後・散布地
30	袋山古墳	高松市鬼無町鬼無	？
31	衣懸古墳	高松市鬼無町鬼無	？
32	王墓古墳	高松市鶴市町王墓	古墳後・円墳
33	相作牛塚古墳	高松市鶴市町相作	古墳後・円墳（竪穴石槨）
34	青木１号墳	高松市飯田町青木	古墳後・円墳？
35	御厩大塚古墳	高松市御厩町大塚	古墳後・横穴式石室
36	御厩天神社古墳	高松市御厩町西山	古墳中・前方後円30m
37	御厩池古墳	高松市御厩町池内	古墳後・横穴式石室
38	うたい塚古墳	高松市御厩町池内	？
39	伽藍山東麓古墳	高松市御厩町池内	？
40	御厩池遺跡	高松市御厩町池内	弥生後・集落
41	三つ塚古墳	高松市御厩町池内	古墳後・横穴式石室
42	中間西井坪遺跡	高松市中間町西井坪	弥生後～古代・集落/古墳他
43	正箱遺跡	高松市檀紙町正箱	弥生中，古代・集落
44	中間東井坪遺跡	高松市中間町東井坪	古代・水路
45	兀塚遺跡	高松市檀紙町兀塚	古墳後・集落他
46	矢塚古墳群	高松市中間町峠	？・箱式石棺２基
47	弓塚下古墳	高松市中間町竹薮	古墳後？・横穴式石室？
48		高松市西山崎町	古墳後～・散布地
49	西山崎１号墳	高松市西山崎町	？・円墳
50	西山崎２号墳	高松市西山崎町	？・円墳・箱式石棺
51	西山崎３号墳	高松市西山崎町	？
52	西山崎４号墳	高松市西山崎町	？
53	馬塚古墳	高松市西山崎町	？
54	犬のくそ塚古墳	高松市西山崎町	？
55	西山崎古墳群	高松市西山崎町	？・円墳10基以上

第４表　周辺遺跡一覧１（弥生～古代）

番号	遺　跡　名	所　在　地	内　容
56	本堯寺北１号墳	高松市西山崎町上所	古墳中・竪穴石槨/円筒形土製棺
57	本堯寺北２号墳	高松市西山崎町上所	？・円墳
58	本堯寺西古墳	高松市西山崎町上所	古墳後・横穴式石室
59	奈良須池古墳	高松市岡本町	古墳後？・横穴式石室？
60	立石神社古墳	高松市岡本町	古墳後？・横穴式石室？
61	金比羅社遺跡	高松市岡本町	弥生～古墳後・散布地
62	若宮神社古墳	香川郡香南町吉光	古墳後？・円墳
63	佐賀神社古墳	香川郡香南町吉光	古墳後・横穴式石室
64	冠纓八幡遺跡	香川郡香南町由佐	弥生後？・散布地
65	城所山古墳群	香川郡香南町岡	古墳後・横穴式石室２基
66	奥谷古墳	香川郡香南町岡奥谷	？
67	大坪窯跡	香川郡香南町西庄大坪	古墳後～古代・須恵器窯
68	茶園窯跡	香川郡香南町由佐	古墳後・須恵器窯
69	音谷池西岸窯跡	香川郡香南町由佐	古代・須恵器窯
70	音谷池東岸窯跡	香川郡香南町由佐	古代・須恵器窯
71	西方寺古墳群	高松市西宝町	古墳後？・横穴式石室？３基
72	下ノ山遺跡	高松市郷東町	弥生中・中広銅矛出土地
73	木里神社古墳群	高松市郷東町	古墳後・横穴式石室
74	摺鉢谷北尾根古墳群	高松市西春日町	古墳後・横穴式石室７基
75	摺鉢谷北尾根東古墳群	高松市西春日町	古墳前・積石円墳３基
76	峰山墓地古墳群	高松市西宝町	古墳後・横穴式石室４基？
77	摺鉢谷９号墳	高松市峰山町・西宝町	古墳前・積石前方後円27m
78	摺鉢谷古墳群	高松市峰山町	古墳後・横穴式石室８基
79	摺鉢谷遺跡	高松市峰山町	弥生中・高地性集落
80	御殿神社古墳群	高松市鶴市町	古墳後・横穴式石室４基
81	御殿貯水場古墳群	高松市鶴市町	古墳後・横穴式石室３基
82	猫塚古墳	高松市峰山町・鶴市町	古墳前・積石双方中円100m
83	姫塚古墳	高松市峰山町	古墳前・積石前方後円42m
84	小塚古墳	高松市峰山町	古墳前・積石前方後円17m
85	石船塚古墳	高松市峰山町	古墳前・積石前方後円58m
86	鏡塚古墳	高松市峰山町	古墳前・積石双方中円75m
87	北大塚東古墳	高松市峰山町	古墳前・積石方墳
88	北大塚古墳	高松市峰山町	古墳前・積石前方後円40m
89	北大塚西古墳	高松市峰山町	古墳前・積石前方後円？19m
90	北大塚北方２号墳	高松市宮脇町	古墳前・積石円墳？
91	鶴尾神社４号墳	高松市西春日町	古墳前・積石前方後円40m
92	奥の池古墳群	高松市西春日町	古墳後・横穴式石室20基以上
93	奥の池遺跡	高松市西春日町	弥生中・集落？
95	稲荷山北端古墳	高松市宮脇町	古墳前・積石前方後円？
96	稲荷山姫塚古墳	高松市室新町・宮脇町	古墳前・積石前方後円54m
97	稲荷山古墳群	高松市室新町	古墳前・積石円墳２基
98	北山浦古墳群	高松市西春日町	古墳後・横穴式石室３基
99	切通し古墳群	高松市西春日町	古墳前・積石円墳２基以上
100	野山古墳群	高松市西春日町野山	古墳後・横穴式石室４基
101	浄願寺山古墳群	高松市飯田町・西春日町	古墳後・横穴式石室20基以上
102	南山浦遺跡	高松市西春日町	弥生中・集落？
103	南山浦古墳群	高松市西春日町	古墳後・横穴式石室10基以上
104	片山池窯跡群	高松市西春日町	古代・瓦窯
105	片山池下遺跡	高松市西春日町	弥生中～後・集落？
106	坂田廃寺	高松市西春日町	古代・寺院跡
107	片山池古墳群	高松市西春日町	古墳後・横穴式石室３基
108	小山窯跡	高松市西春日町	古代・瓦窯
109	がめ塚古墳	高松市飯田町	古墳中？・前方後円27m
110	天満・宮西遺跡	高松市松縄町	弥生後～古代・集落他
111	白山神社古墳	高松市木太町	古墳前・円墳

第５表　周辺遺跡一覧２（弥生～古代）

番号	遺　跡　名	所　在　地	内　容
113	境目・下西原遺跡	高松市松縄町他	弥生後/古墳後・水路
114	松縄下所遺跡	高松市松縄町	弥生後・集落，古代・条里溝
115	キモンドー遺跡	高松市伏石町	弥生後・集落
116	大池遺跡	高松市木太町	弥生後・散布地
117	上天神遺跡	高松市上天神町	弥生後・集落/水路
118	太田下・須川遺跡	高松市太田下町	弥生後・集落，古墳中・集落他
119	蛙股遺跡	高松市太田下町他	弥生後・壷棺，古代・条里溝
120	居石遺跡	高松市伏石町	古墳前・祭祀
121	井手東Ⅱ遺跡	高松市伏石町	
122	井手東Ⅰ遺跡	高松市伏石町	弥生中・水路
123	浴・長池Ⅱ遺跡	高松市林町	弥生中～後・集落
124	浴・長池遺跡	高松市林町	弥生中・集落/周溝墓，古代・水田
125	浴・松ノ木遺跡	高松市林町	弥生後・水路，古墳後・水田
126	林浴遺跡	高松市林町	弥生後？・水路
127	林・坊城遺跡	高松市林町	弥生後・周溝墓，古墳後・水路
128	六条・上所遺跡	高松市六条町他	弥生後・水路，古墳中・集落他
129	凹原遺跡	高松市多肥下町	弥生中～古墳前・集落/土器棺墓
130	多肥松林遺跡	高松市多肥上町他	弥生中・集落
131	松林遺跡	高松市多肥上町	弥生中・集落/噴礫
132	日暮・松林遺跡	高松市多肥上町他	弥生中～後・集落
133	天満宮古墳	高松市多肥上町	古墳？
134	空港跡地遺跡群	高松市林町	弥生後～古代・集落/水路/周溝墓他
135	拝師廃寺	高松市上林町	古代・寺院
136	加摩羅神社古墳	高松市三谷町	古墳後・横穴式石室？
137	高野丸山古墳	高松市川島本町	古墳中・円墳
138	高野廃寺	高松市川島本町	古代・寺院
139	高野南古墳群	高松市川島本町	古墳後？・円墳２基
140	平石上１号墳	高松市三谷町	古墳前？・円墳
141	平石上古墳群	高松市三谷町	古墳後・横穴式石室２基以上
142	日山山頂古墳	高松市三谷町	古墳前？
143	瘤山１号墳	高松市三谷町	古墳前・前方後円27m
144	北山古墳群	高松市三谷町	古墳後？・横穴式石室？３基
145	雨山山頂古墳	高松市三谷町	古墳前？
146	雨山南古墳群	高松市三谷町	古墳後・横穴式石室３基以上
147	住蓮寺池古墳群	高松市三谷町	？
148	犬の馬場古墳	高松市三谷町	？
149	矢野面古墳	高松市三谷町	古墳後？・横穴式石室
150	三谷三郎池西岸窯	高松市三谷町	古墳中・初期須恵器窯
151	日妻山山頂古墳	高松市三谷町	？
152	石舟池古墳群	高松市三谷町	古墳前･竪穴石槨，古墳後･横穴式石室10基以上
153	三谷石舟古墳	高松市三谷町	古墳前・前方後円墳90m
154	通谷遺跡群	高松市三谷町	弥生中・土器棺墓他
155	光専寺山古墳群	高松市池田町	古墳中/後・円墳各１基
156	上佐山東麓古墳	高松市池田町	古墳後・横穴式石室
157	毘沙門堂古墳	高松市池田町	？
158	池田合子神社古墳	高松市池田町	古墳前？・前方後円？
159	中山田古墳群	高松市池田町	古墳後・横穴式石室４基
160	中山田遺跡	高松市池田町	弥生後・集落
161	上佐山山腹古墳	高松市池田町	？
162	上佐大明神南古墳	高松市池田町	？
163	天満池北西古墳	高松市西植田町	？
164	天満池西古墳	高松市西植田町	？
165	尾越古墳	高松市西植田町	古墳後・円墳
166	大亀３号墳	高松市西植田町	古墳後・円墳
167	大亀古墳群	高松市西植田町	？・円墳２基

第６表　周辺遺跡一覧３（弥生～古代）

番号	遺　跡　名	所　在　地	内　容
168	本村古墳群	高松市西植田町	？・円墳２基以上
169	西岡古墳群	高松市西植田町	？
170	東神内古墳群	高松市西植田町	？・円墳３基
171	葛谷遺跡	高松市西植田町	弥生後・集落
172	葛谷古墳	高松市西植田町	古墳後・横穴式石室
173	末次古墳群	高松市西植田町	？
174	南惣天満古墳群	高松市東植田町	？
175	北浴古墳	高松市東植田町	？
176	円養寺古墳群	高松市西植田町	古墳前・円墳３基/壺棺墓１基
177	松尾池池の神古墳	高松市西植田町	？
178	松尾池北古墳	高松市西植田町	？
179	東植田八幡馬場先古墳群	高松市東植田町	古墳後・横穴式石室３基？
180	竹元遺跡	高松市東植田町	弥生後・水路
181	下司廃寺	高松市東植田町	古代・寺院
182	稗田東古墳群	高松市西植田町	？・円墳３基
183	天親墳	高松市川島東町	弥生？
184	金法寺古墳	高松市川島東町	？
185	川東１号墳	高松市池田町	古墳前・円墳？
186	古塚古墳	高松市川島東町	？
187	松宇八幡馬場古墳	高松市川島東町	古墳前？・円墳
188	西尾天神社古墳	高松市十川西町	古墳前？・円墳
189	鷺池南古墳	高松市十川東町	古墳前？
190	出之山南古墳	高松市十川東町	？
191	百相廃寺	高松市仏生山町	古代・寺院
192	船岡山古墳	香川郡香川町浅野	古墳前・前方後円51m
193	船岡古墳	香川郡香川町浅野	古墳後・横穴式石室
194	万塚古墳群	香川郡香川町浅野	古墳後・横穴式石室
195	八王子古墳	香川郡香川町浅野	古墳後・横穴式石室
196	横岡山古墳	香川郡香川町浅野	古墳後・横穴式石室
197	剣山古墳	香川郡香川町川東	？
198	東赤坂古墳	香川郡香川町浅野	古墳後・横穴式石室
199	油山古墳群	香川郡香川町川内	？
200	長崎鼻古墳	高松市屋島西町長崎鼻	古墳前・前方後円43m
201	浦生遺跡	高松市屋島西町	古墳前～後・製塩遺跡
202	浜北古墳群	高松市屋島西町	古墳前・円墳？３基
203	屋嶋城跡	高松市屋島東町	古代・山城？
204	屋島寺境内遺跡	高松市屋島東町	弥生中・高地性集落？
205	谷東古墳	高松市屋島西町	？
206	中筋北古墳	高松市屋島西町	？
207	中央西古墳	高松市屋島西町	古墳後・横穴式石室
208	東山地古墳群	高松市屋島中町	？・箱式石棺？
209	久米八幡神社古墳群	高松市東山崎町	？
210	諏訪神社遺跡群	高松市東山崎町	弥生中・区画墓？，古墳前・円墳
211	久米山遺跡群	高松市東山崎町	弥生後・箱式石棺/木棺墓他
212	川添ポンプ場遺跡	高松市東山崎町	弥生後・散布地
213	高松茶臼山古墳	高松市東山崎町他	古墳前・前方後円75m

第７表　周辺遺跡一覧４（弥生～古代）

第２章　調査成果

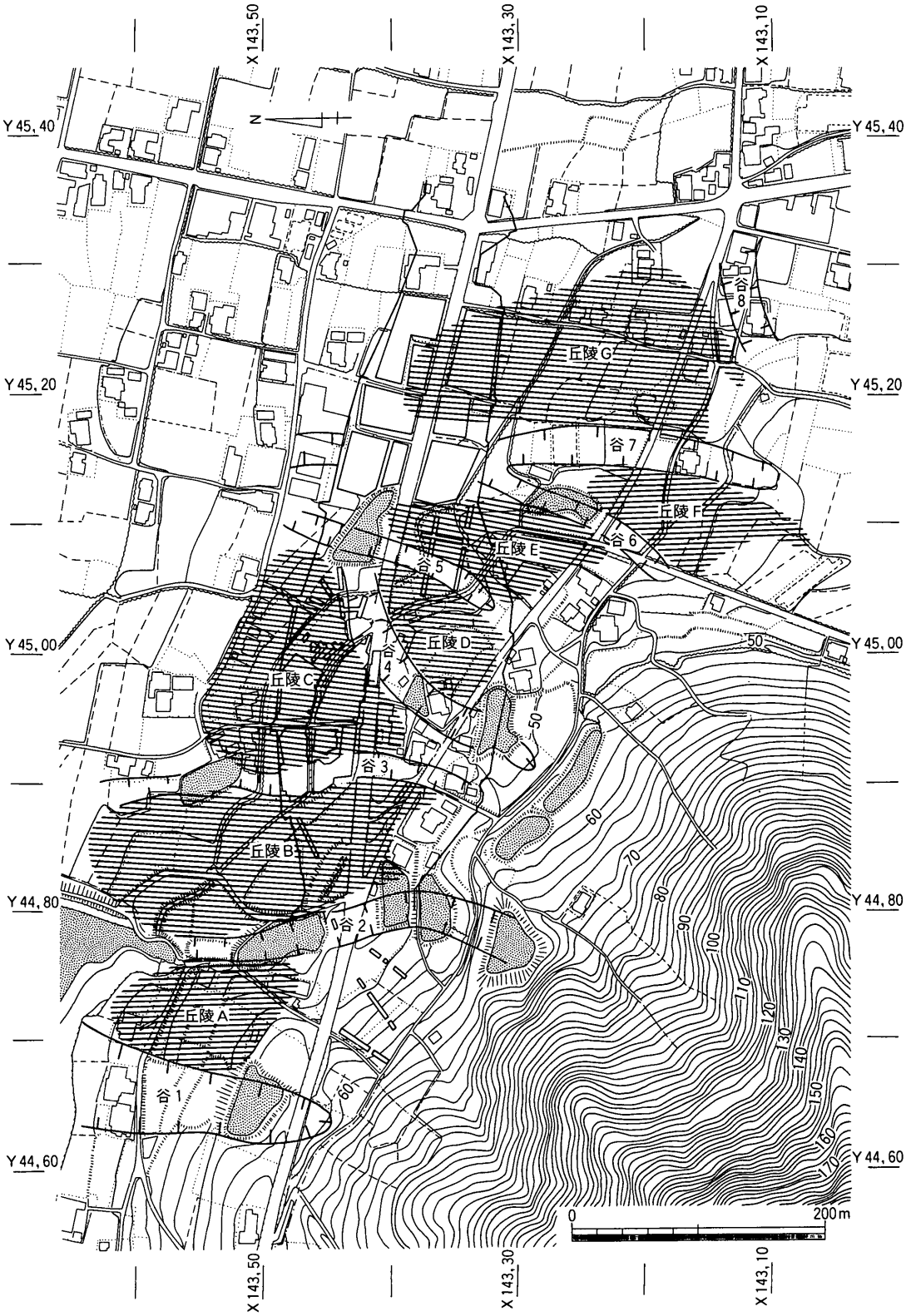
第１節　調査地の地形と基本層序

1.　周辺地形

中間西井坪遺跡は，高松平野西縁を区切る堂山山地の北半，伽藍山と六ツ目山に囲まれた東に開けた谷の南縁，六ツ目山山麓の北裾斜面部に位置する。谷前面には，北流する郷東川が形成した高松平野の基盤をなす扇状地が展開し，その西端を襲うように谷から派生する小規模な扇状地形が東に張り出している。

標高317ｍの六ツ目山は，整った円錐形を呈したビュート状の山塊で，標高約70ｍの鞍部を介して南に堂山，北に伽藍山が接続する。その北麓は，標高60ｍ前後を境に，それより低所は10％以下の勾配で緩やかな緩斜面をなして下り，現状で宅地や田畑が展開する。この緩斜面の先端は，先の扇状地形の下に埋没して緩やかに連続し，その境を見いだすことは難しい。さらに，六ツ目山中腹に源を発する小規模な開析谷が，これら緩斜面をいくつかの丘陵部に裁断しながら流下しており，周辺地形の景観をより複雑なものにしている。遺跡は，基本的にはこれら緩斜面上に展開すると考えるが，調査地の制約からその範囲を明確にすることは現状では困難である。

中間西井坪遺跡は，六ツ目山北麓のいくつかの小丘陵と扇状地上に跨って所在する，旧石器時代から近世に及ぶ複合遺跡である。時代によって遺跡内部の遺構の拡がりに差がみられ，一つの遺跡名を冠してこれら遺構群を捉えるのはやや妥当性を欠き，むしろ遺跡群として捉えるべきであろう。本書で報告するのは，遺跡東端の11,600㎡についてである。第６図は，大久保徹也氏が作成された遺跡周辺の地形環境の復元案である（大久保1996)。この図に示したように，本書報告部分は，西端の谷７と丘陵Ｇと冠された北に延びる小丘とその縁辺に相当する。地形的には比較的まとまりを有するが，後述するようにその遺構内容は多彩である。こうした地形的にまとまった地区内部においてさえ，遺跡範囲の面的把握が困難なことを示している。



第６図　遺跡周辺地形分類図（１/5,000、大久保1996より一部改変）

本書報告地区は，上記したように六ツ目山北麓の北に派生する小丘陵のうちその東端の丘陵上に位置する。この丘陵Ｇの現地表面は，現状で緩やかに北東方向に傾斜する棚田状に開墾されている。現状での地表面の起伏が，人為的な改変等によって旧状を大きく変更していないとすれば，丘陵Ｇの丘頂軸線は，丘陵の中央部にはなく西偏し，丘陵の西縁を画する谷７東岸近辺に求められる。谷７による地表面の改変以前には，丘陵Ｇの地表面は丘陵Ｄ・Ｅのそれに連続し，一連の地形面として捉えることが可能である。つまり，丘陵Ｇは，谷７による下刻によって丘陵Ｄ・Ｅより切り離された，六ツ目山より北東に派生した一丘陵の東斜面裾部に相当すると考えらえる。本書で報告する調査区は，そうした丘陵Ｇの北縁辺を占める。

さて，以下では各調査区の概要について，土層堆積状況を中心に記す。

６区

調査地の北東隅に位置する調査区である。調査前は，南北２段の水田に造成されており，調査区もその水田区画に沿って２分割して設定した。その北東側の調査区を６ａ区，南西側のそれを６ｂ区と呼称する。６ａ区の現地表面の標高は33.8m前後，６ｂ区のそれは34.6m前後であり，両調査区の比高差は約0.8mある。

６ａ区では，遺構面は現・旧耕作土下で検出され，遺構面のベースは地山層である灰褐色粘土層（第７図49層）とその上部に堆積した褐色系砂礫層（同図48層）である。遺構面の標高は，南西部で33.5m前後，北東部で33.1m前後を測り，遺構面は緩やかに北東方向に傾斜して検出された。この遺構面の傾斜は，概ね旧地形の形状を反映しているとみてよい。

現・旧耕作土層は，0.3～0.8mの層厚を有しており，調査区東半部に特に厚く水平に堆積する。この耕土層は細かくみれば，層厚10～20cmの土層が２～３単位確認され，それが東に下る緩やかな階段状をなしていたことから，現状ではほぼ水平な水田面を保った本調査区も，おそらくは僅かな比高差を有した２～３面の水田面にかつては造成されていたものと考えられる。こうした水田区画の変更の具体的時期については，各耕土層からの遺物が乏しかったため不明であるが，近世遺構がすべて地山層の上面で検出されたことから，近世以前には遡らないことは確実である。また，調査区西半部のＬ字状の屈曲部以西では，遺構面は現耕土層直下で検出され，その間に床土・旧耕土層を介在しない。さらに，調査区全般において遺構の残存状況は悪く，多数の柱穴は検出されたが，掘立柱建物の復元率

は極めて低い。これは，柱穴の掘削深度が10cm前後と浅いなど，遺構面がかなりの削平を蒙っていることがその要因と考えられる。

６ｂ区でも，遺構面は旧耕土層下で検出された。ただし本区では，遺構面を形成する地山層は六ツ目山より土石流によって供給されたと考えられる褐色系砂礫層を主として，地点によって大きく異なり安定しない。６ａ区で灰褐色粘土層が面的に広がりをもって安定して検出されたのと比して対照的であり，これら砂礫層が灰褐色粘土層の上位に堆積していることからすれば，本区では人為的な削平深度が浅い可能性が指摘できる。それは当然ながら，６ａ区との現地表面の比高差0.8mとも対応する。

さて，本調査区の遺構面の標高は，南西部で34.3m前後，北東部で34.0m前後を測り，６ａ区同様緩やかに北東方向に傾斜して検出された。本区でも東半部を中心に，旧耕土層が堆積しており，現状の水田区画が設定されるまでにその更新がなされたものと考えられる。

７区

調査地南西隅の調査区で，県道三木国分寺線を介して６区に南接する。本調査区も調査前は，東西に３段の水田に造成されており，調査区も旧地割に沿って２分割して設定した。つまり東端水田部分の調査区を７ａ区，西側２段のそれを７ｂ区と呼称する。７ａ区の現地表面の標高は34.8m前後，７ｂ区のそれは35.2～35.4m前後であり，両調査区の比高差は最大約0.6mある。

７ａ区では，遺構面は基本的に２面確認された。まず現地表面下0.1～0.8m，標高34.0～34.7mを下限に現・旧耕土層の堆積（第８図１・４～９層）が認められる。本層群は，地点によって２～７層に細分される。各層は概ね水平に堆積し，東に傾斜する落差0.1m前後の数段の階段状を呈して検出され，数度に及ぶ耕地区画の更新を反映する。基本的には東に厚く堆積し，調査区西端部では現耕土層直下において地山層が検出されたことから，主に西側丘陵部の削平によって耕地区画の更新がはかられたものと考えられる。各層からの出土遺物が僅少なため時期決定は根拠に乏しいが，最下位の耕土層についても近世以降であることはほぼ誤りない。

現・旧耕土層下位には，３層に細分される包含層が検出された。上位層（包含層Ⅰ層・同図11層）と中位層（包含層Ⅱ層・同図12層）は，調査区東半部を中心に東に傾斜して検出された。下位層（包含層Ⅲ層・同図13層）は，中央南端部でのみ検出された古代の遺物

を主に出土する土層で，上位２層とは堆積環境が大きく異なり，東西10.5m，深さ0.2m程度の浅い窪地状の地形に溜まった土壌と考えられる。石礫の混在が少ないため整地層の可能性も考えたが，地山面上面の傾斜方向に合致した堆積を呈しており，斜面部に堆積した自然堆積層の可能性が高い。上記３層は，いずれも上位の水田化による影響が認められ，鉄分の沈殿やマンガン斑が顕著に認められる。

上位層は，層厚５㎝前後の薄層で，調査区北東隅で標高33.98mを，南東隅で34.18mをそれぞれ下限に堆積し，緩やかに北東に傾斜する。調査区東端部でのみ検出され，土層の面的なひろがりが極めて限られるため，明確な出土遺物はなく時期の特定は困難である。

中位層は，最大層厚20㎝前後を測り，調査区東半部で安定して検出された。下面の標高は，南西部で34.4m，北東部で33.9m前後をそれぞれ測り，緩やかに北東に傾斜する。古代を中心とした遺物が，コンテナ半箱程度出土した。本層をベースとする遺構面を第１遺構面とするが，調査前に設定したトレンチ部での観察で，微量の耕作痕跡と考えられる遺構を除いて，明確な遺構は確認されず，本調査時において面的な調査の必要性は乏しいと判断した。

基本的には上記中位層下面が最終遺構面（第２遺構面）となり，ベースは地山層である黄褐色系粘土・粘質土を中心に，概ね南北方向の帯状に褐色系砂質土～砂礫層が走行する。なお，調査区西半部では包含層は残存せず，旧耕土層下が遺構面となる。砂礫層が卓越する調査区南半部では，遺構の検出が極めて困難であったため，確認された遺構密度は乏しい。また，丘陵斜面上位に相当する西半部は，隣接する７ｂ区と比して遺構密度が希薄だが，これは耕地造成による切り土がより深くまで及び，包含層のみならず遺構の削平をも蒙っている可能性が高く，確認された遺構密度が本来的なものであったかどうかは問題点が多い。

７ｂ区では，包含層はほぼ存在せず，旧耕作土直下で遺構面が検出された。本区は調査前２段の水田面に造成されており，その上位段の東端付近で，遺構面の浅い起伏のため辛うじて削平を免れた包含層（７ａ区中位層相当）が，部分的に認められたに過ぎない。ここでも調査区西半部分は丘陵上位にあたり，度重なる水田面の更新により遺構面は大きく掘り下げられ，現耕土層直下で地山層が認められ，中世以前に遡る遺構の深度も浅いものが多かった。検出された遺構面の標高は，調査区南西隅で35.0m，北東隅で34.4mを測り，緩やかに北東方向に傾斜する。しかしながら，上記した遺構面の削平を考慮すれば，遺構形成当時の斜面は現状よりは傾斜が強かった可能性が高い。

8区

調査地中央北半部に位置する調査区である。本調査区は，調査前には1面の水田面に造成されていたが，1962年撮影の航空写真によれば，南北2段の水田面に分筆されており，おそらくは県道三木国分寺線の建設時に，土地区画が変更され1枚にまとめられたのであろう。調査の結果この水田面は，調査区北半部で比高約0.6mに達する大きな削平面として検出された。さらに，それ以前にはより細かな造成面に細分されていたようで，旧耕土層の連続した水平堆積が東壁を中心に観察できる（第10図3・5層）。基本的にはこの耕土層直下で，地山層の灰黄色粘土が露出し遺構面となる。遺構面はしたがって，北へ下る階段状を呈して検出された。西に隣接する谷7に向けて緩やかに下るSXⅡ21を除いて，耕作土層に先行する堆積層は確認していない。遺構面の標高は，調査区南端で34.1m前後，調査区北端で33.3m前後を測り，南北両端での比高差は約0.8mに達する。調査区北半部で遺構分布が希薄となるのは，こうした後世の造成による遺構面の削平が大きな要因であろう。

9区

調査地中央南半部に位置する調査区である。本調査区は，少なくとも1962年以降水田区画の更新はなされず，1段のまま現在に至る。現地表高は35.3～35.4mで，ほぼ水平である。現耕作土と床土層は0.2～0.3mの層厚で水平に堆積し，その下位に2枚の旧耕土の水平堆積が観察される。層厚はいずれも0.1m程であり，近世以降少なくとも3回の水田面の更新がはかられたものと考える。なお調査区西端付近で，中世後半から近世の遺物を含む希薄な包含層（第9図8層）の堆積を確認した。本層下面は緩やかに西に傾斜するが，土層からみておそらく自然堆積層とは考えられず，水田造成時の客土もしくは旧耕作土と考えられる。上記旧耕土層下面で地山層が確認され，地山層上面が遺構面となる。遺構面の標高は，調査区南端で35.0m前後，同北端で34.8m前後を測り，約1％の緩やかな勾配で北に傾斜する。検出された遺構面が本来的なものではないことは，調査区北端で確認された地山層の上位層が，調査区南半では次第に薄くなることからも窺え，遺構面上面は南半部を中心に強い削平を蒙っている。

10区

調査地北西部に位置する調査区である。調査以前は，南北3段で，北端の1段は東西に

２段の，都合４段の階段状の水田区画に造成されており，水田面の比高差の乏しい北側３段分と，南側１段との２小調査区に分割して調査を実施した。前者を10ａ区，後者を10ｂ区と呼称する。最も標高の低い10ａ区北東部の現地表面の標高は33.5m前後，10ｂ区のそれは34.5m前後を測り，両調査区の比高差は最大約1.0mに達する。

10ａ区では，現耕作土以下に最大６層に細分される，旧耕作土の水平堆積が確認される。これら旧耕作土は調査区内で一様ではなく，東西両壁での観察で北に傾斜する３～４単位の水平堆積として確認され，おそらくは近世以降のそう遠くない過去において，頻繁に水田区画が更新され，現状の地割りに至ったことを示している。この旧耕土層は，丘陵Ｅの東縁辺に相当する調査区南西隅ではほとんど確認されず，一部現耕土層直下において地山層が露出するが，調査区東壁においては0.3m前後の層厚で確認され，斜面上方に相当する調査区南西半部が特に顕著な削平を蒙っていると判断される。基本的にはこの旧耕作土層直下が，第１遺構面となる。第１遺構面は，調査区南西隅で33.5m前後，北東隅で33.0m前後の最大比高差0.5m程の緩やかな傾斜をもって検出された。

一方，調査区南西部には，旧耕作土直下に層厚0.2m前後の中世に遡ると考えられる，希薄な包含層（第11図21～23層）の水平堆積を確認した。本包含層は，３層に細分されたが大きな差異はなく，近接した時期に堆積したものと考えてよさそうである。水平堆積を重視すれば，水田面の造成に伴う客土の可能性もある。さて，本包含層によって調査区南西部の200m²程は，さらに１面の遺構面が追加されることとなったが，調査期間や遺構密度の関係から，下位の遺構面で第１面の遺構を検出することとし，各遺構面毎の調査は行わなかった。したがって，本包含層下面及び旧耕土層下面で確認された遺構を，第１遺構面の遺構として以下報告する。なお，第１遺構面下位には，後述する谷７の埋土が厚く堆積する。谷７の両岸には，特に東岸部を中心に谷７埋土に連続する暗褐色系粘土（同図74・75・81層）が包含層状に認められ，上記第１面の遺構の大半は本層上面より掘り込まれる。本層を包含層と捉えるか，谷７埋土の一部とするかは判断にやや躊躇したが，本層下面で谷７の明確な立ち上がりを確認したため，一応包含層と判断し遺物の取り上げを行った。また，本層直下が地山面となるが，地山面を掘り込む若干の遺構を確認したため，谷７及び本層下面で確認された遺構群を第２遺構面の遺構として以下報告する。なお，上記したように，調査区南西部では本層を含めた包含層は残存しておらず，一部の遺構については遺物や埋土から所属遺構面を判断している。

10ｂ区も基本的な土層堆積状況は，10ａ区と異ならない。上記したように水田面１面を

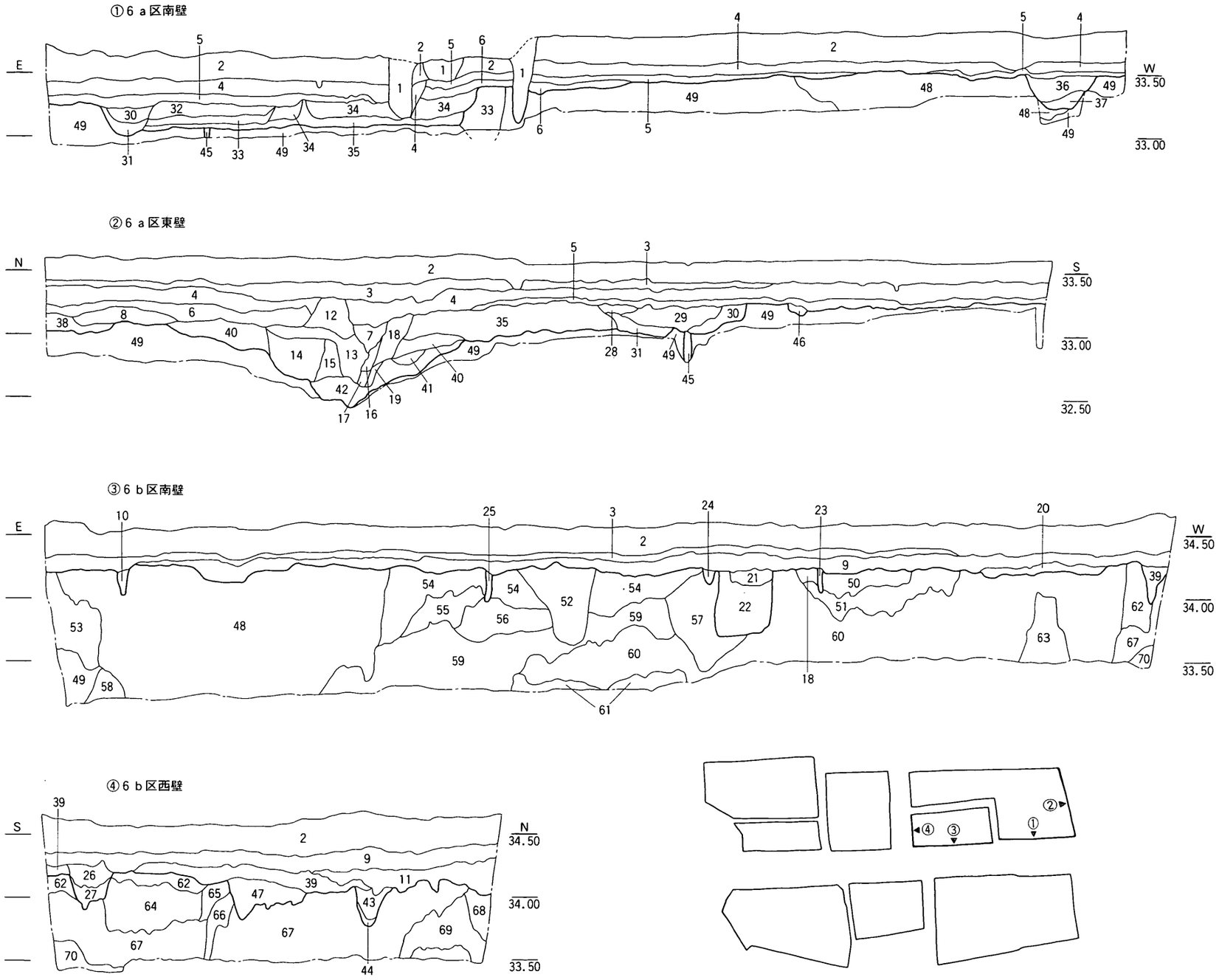
1調査区としたため，現地表面の標高は34.5m前後で一定する。耕作土下には，層厚0.2～0.4mの3～4層に細分される旧耕作土の水平堆積が認められる。旧耕土の内最下層は，調査区北半部にのみ堆積し，現状の地割りもさらに細分されていたことが窺えた。旧耕作土直下は，基本的には谷7埋土となるが，地点によって大きく異なる。調査区西端では丘陵Eが近接し，包含層は削平され地山層が露出する。また，調査区北半部を中心に，層厚0.1m程の明灰褐色粘質土層（第12図14層）が北に傾斜して堆積し，若干の中世の遺物を包含する。後世の削平によって検出位置はやや離れるが，10a区北西部の第1面包含層に連続するものと考える。本層下面より古墳時代以降の遺構が掘り込まれており，谷7埋土をベースとする本遺構面を第1遺構面と称する。第1面は，調査区南西隅で標高34.1m前後，北東隅で同33.8m前後で確認され，緩やかに北東方向に傾斜する。また，本調査区でも谷7東岸を中心に，谷7上層に連続する暗褐色系粘質土（同図53・54）の堆積が確認され，第2遺構面包含層として遺物の取り上げを行った。包含層下面が第2遺構面となり，地山層をベースとする。第2面は本調査区では，南西隅で34.1m前後，北東隅で33.4m前後と第1面よりはややきつく北東方向に傾斜する。

11区

調査地南西隅に位置する。調査前は1段の水田面に造成されていたが，1962年撮影の航空写真に拠れば，北に下る3～4段の水田区画に分割されていたようであり，調査によっても，現耕土層下において当時の削平面と耕土層の残存を確認している。客土に花崗土が使用されていることからみて，県道三木国分寺線建設時に区画の更新が行われたのであろう。なお，当時の耕土層下においても，調査区北半部を中心に，数層の旧耕土層の水平堆積を確認される。これら旧耕土層下面が第1遺構面となる。第1面は，地山層及び谷7と，北半部においては谷7の東西両岸の微妙な窪地部に辛うじて残存する希薄な包含層（第13図19・80層）をそれぞれベースとする。斜面上方に位置する南半部での削平は顕著であり，包含層は一切残存しない。第1面の標高は，調査区北半部で34.5～34.6m，南端部で35.1～35.2mを測り，やや強く北に傾斜して検出された。南半部の削平を考慮すれば，旧地形はさらに勾配の強い斜面地を呈していたと考えられる。上記谷7と包含層下面で検出された遺構を第2遺構面とする。検出された遺構は極めて希薄である。後世の削平の影響よりも，やはり地形環境に起因する要素が大きいと考えられる。

文献註

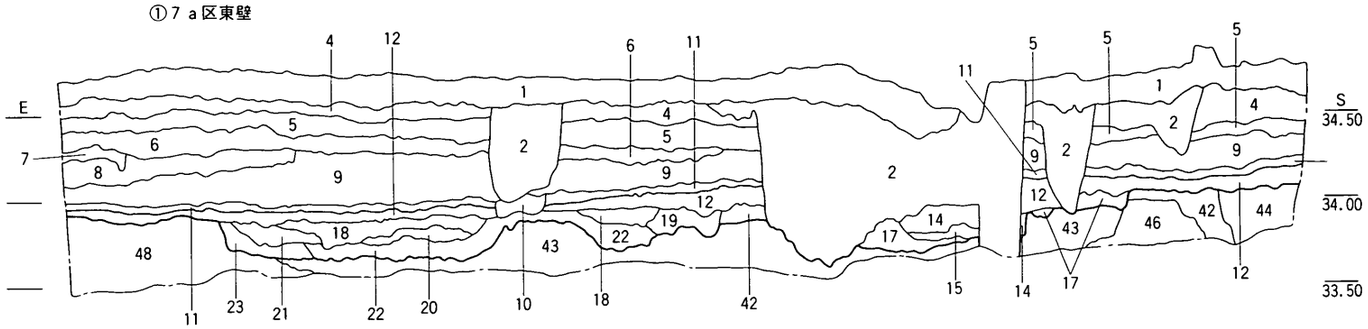
大久保徹也　1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊　中間西井坪遺跡Ⅰ』　香川県教育委員会他



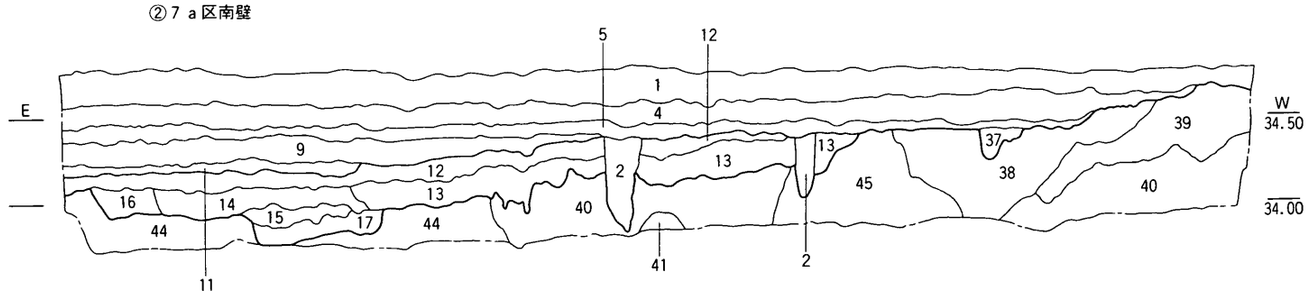
1．撹乱土
2．耕土
3．茶褐色粘質土（54層ブロック含，床土）
4．オリーブ灰色粘質土（旧耕土）
5．濃黄茶色粘質土（旧耕土）
6．灰色砂質土（旧耕土？）
7．灰橙色粘質土（49層ブロック・クサレ礫含，旧耕土？）
8．灰褐色砂質土（Mn含，旧耕土？）
9．濃灰茶褐色粘質土（Fe含，旧耕土）
10．撹乱
11．淡灰茶褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
12．黄褐色細砂
13．濃灰色礫混粘土（Mn含，ＳＤⅡ01）
14．灰黄色中砂（Mn含，ＳＤⅡ01）
15．灰色砂混粘土（Mn・クサレ礫含，ＳＤⅡ01）
16．暗褐色砂混粘土（ＳＤⅡ01）
17．灰色粘土（礫多含，ＳＤⅡ01）
18．灰橙色粘土（Mn含，ＳＤⅡ01）
19．灰色粘土（植物遺体多含，ＳＤⅡ01）
20．灰茶褐色粘質土（Mn含，近世遺構？）
21．灰茶褐色粘質土（Mn含，近世遺構？）
22．濃灰色粘質土（Mn・Fe・小礫含，近世遺構）
23．灰褐色粘質土（Mn・47層ブロック含，Pit）
24．灰茶褐色粘質土（Mn含，Pit）
25．灰褐色粘質土（Mn・54層ブロック含，Pit）
26．淡灰橙色粘質土（Mn・Fe含，近世遺構？）
27．灰茶褐色粘質土（Mn・小礫含，近世遺構？）
28．灰橙色砂混粘土（Fe含，ＳＤⅡ03）
29．灰色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ03）
30．灰茶褐色粘質土（31層ブロック土・Mn・Fe含，ＳＤⅡ03）
31．灰色粘質土（Mn・クサレ礫含，ＳＤⅡ03）
32．濁灰茶褐色粘土（Mn含，ＳＸⅡ03）
33．灰色粘土（Fe含，ＳＸⅡ03）
34．濁灰黄色砂混粘土（Fe含，ＳＸⅡ03）
35．灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＸⅡ03）
36．灰黄色砂混粘土（Mn・クサレ礫含，ＳＤⅡ07）
37．灰色砂混粘土（Mn含，ＳＤⅡ07）
38．暗灰褐色粘質土（Mn含，中世？包含層）
39．灰黄褐色粘質土（Mn・小礫含，中世包含層？）
40．灰茶褐色砂混粘土（Mn含，ＳＸⅡ02）
41．濃灰橙褐色粘土（ＳＸⅡ02）
42．暗灰色粘土（Mn・49層ブロック土含，ＳＸⅡ02）
43．暗灰黄褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ12）
44．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ12）
45．暗褐色粘質土（Mn含，Pit）
46．黒褐色粘質土（Mn含，遺構？埋土）
47．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，古代？遺構）
48．黄褐～暗褐色砂礫（地山）
49．灰褐色粘土（Mn含，地山）
50．灰橙色粘質土（Mn含，地山）
51．灰茶褐色粘質土（Mn含，地山）
52．暗褐色砂礫・濃茶褐色砂質土ラミナ（地山）
53．にぶい橙褐色粘質土（暗褐色粘質土ブロック含，地山）
54．淡灰橙色粘質土（Mn・暗灰褐色粘質土ブロック含，地山）
55．にぶい橙褐色砂礫混粘質土（地山）
56．淡灰橙色粘質土（Mn含，地山）
57．明黄褐色粘質土（Mn含，地山）
58．暗灰褐色粘土（Mn含，地山）
59．濁灰橙褐色粘質土（Mn含，地山）
60．灰褐色砂礫（Mn沈着，地山）
61．灰黄色粘質土（Fe・茶褐色粘質土ブロック含，地山）
62．濃灰茶褐色粘質土（Mn含，地山）
63．灰茶褐色粘質シルト（Mn含，地山）
64．濃茶褐色粗砂・暗灰褐色砂礫ラミナ（地山）
65．灰橙褐色粘質土（Mn含，地山）
66．灰茶褐色粘質土（Mn含，地山）
67．明黄褐色粘土（Fe含，地山）
68．灰黄褐色粘質土（Mn含，地山）
69．暗灰色粘土（Fe・小礫含）
70．淡青灰色粘土（Fe含）

第７図　６区土層断面図（天地１/40・左右１/160）

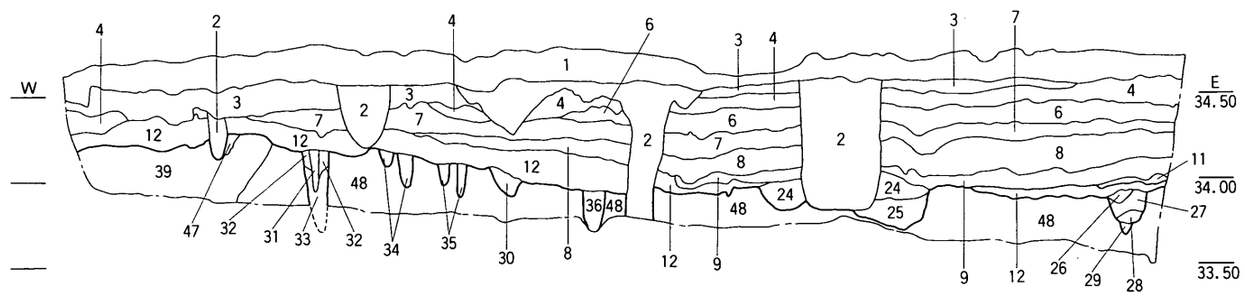
①７ａ区東壁



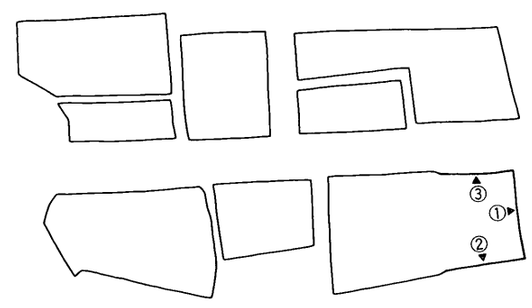
②７ａ区南壁



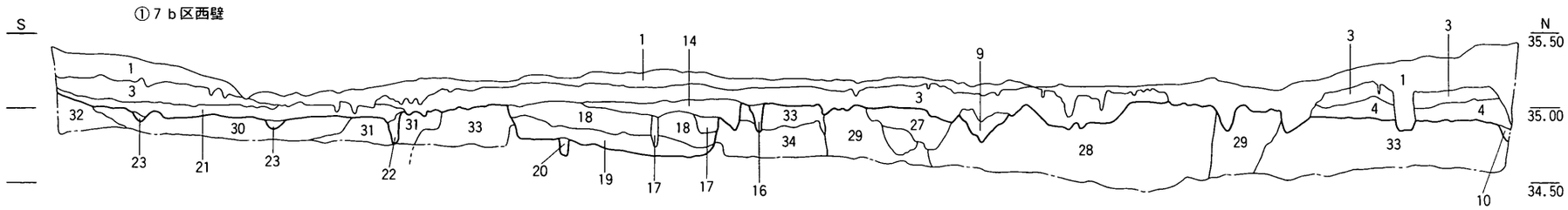
③７ａ区北壁

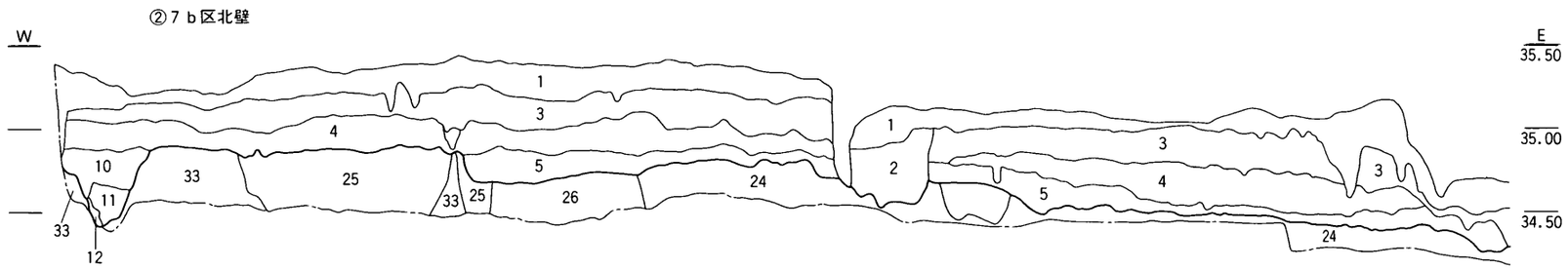


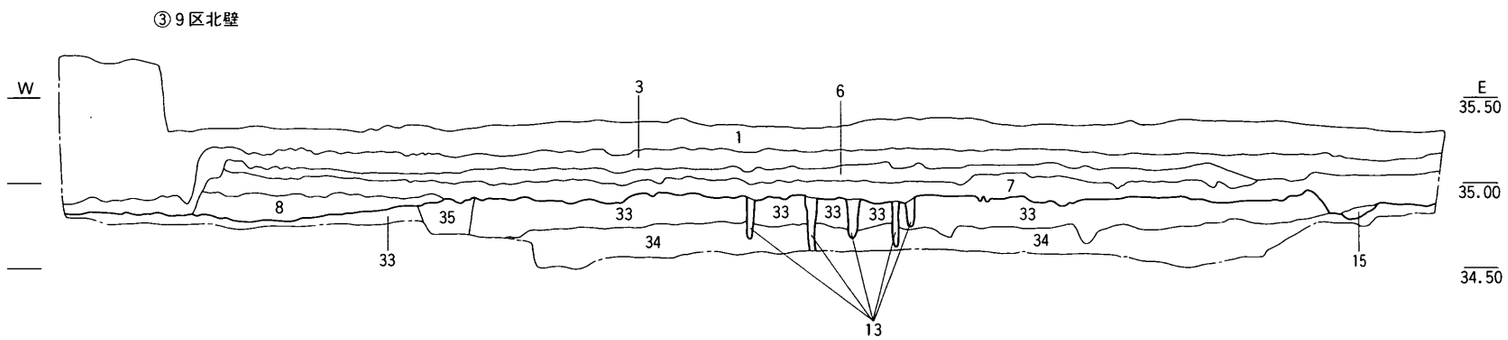
1．耕土
2．撹乱
3．床土
4．床土・旧耕土
5．明灰黄褐色粘質土（Fe含，旧耕土）
6．灰茶褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
7．明灰黄褐色粘質土（Mn・Fe含，旧耕土）
8．灰茶褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
9．灰橙色粘質土（Mn・Fe含，旧耕土？）
10．明灰橙色シルト（Fe・22層ブロック含）
11．濃黄褐色粘質土（Fe沈着，包含層Ⅰ）
12．濁オリーブ灰色粘質土（Mn含，包含層Ⅱ）
13．濁灰茶褐色粘質土（Mn含，包含層Ⅲ）
14．淡灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ15・16）
15．淡黄色細砂（ＳＤⅡ15・16）
16．暗灰茶褐色粘質土（Mn・Fe・炭片含，ＳＤⅡ15・16）
17．黒褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ17）
18．灰褐色粘質土（Mn・小礫含，ＳＤⅡ15）
19．灰茶褐色粘質土（Mn・小礫含，ＳＤⅡ15）
20．灰褐色砂質土（Mn含，ＳＤⅡ15）
21．暗灰茶褐色粘土（Mn含，ＳＤⅡ15）
22．暗灰褐色粘土（Mn・43層ブロック含，ＳＤⅡ15）
23．濃茶褐色砂混粘土（Mn含，ＳＤⅡ15）
24．黒灰褐色粘質土（Mn含，ＳＸⅡ12）
25．黒褐色粘質土（Mn含，ＳＸⅡ12）
26．灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ14）
27．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ14）
28．濁灰色小石混中砂（ＳＤⅡ14）
29．暗灰褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ14）
30．灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ20）
31．濁灰黄褐色粘質土（Mn含，Pit）
32．灰褐色粘質土（Mn・48層ブロック含，Pit）
33．暗灰褐色粘質土（Mn・48層ブロック含，Pit）
34．灰褐色粘質土（Mn含，Pit）
35．灰茶褐色粘質土（Mn・炭片多含，Pit）
36．黒褐色粘質土（Mn含，Pit）
37．灰黄色粘質土（Mn含，Pit）
38．明灰黄褐色礫混砂質土（Fe含，地山）
39．灰色礫混粘質土（地山）
40．濁黄褐色粘質土（Mn含，地山）
41．暗褐色砂礫（地山）
42．灰橙褐色粘質土（Mn含，地山）
43．濁黄灰色粘土（Mn含，地山）
44．濁灰橙色礫混粘質土（地山）
45．濁灰褐色礫混砂質土（Mn含，地山）
46．灰褐色粗砂混粘質土（Mn含，地山）
47．灰茶褐色粘質土（Mn含，地山）
48．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，地山）



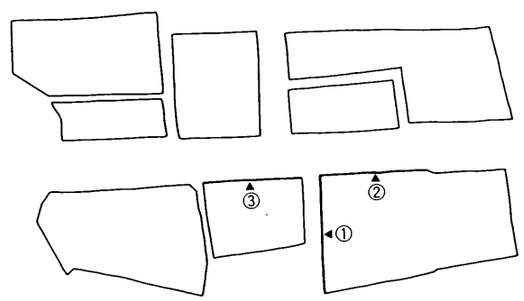
第８図　７ａ区土層断面図（天地１/40・左右１/160）



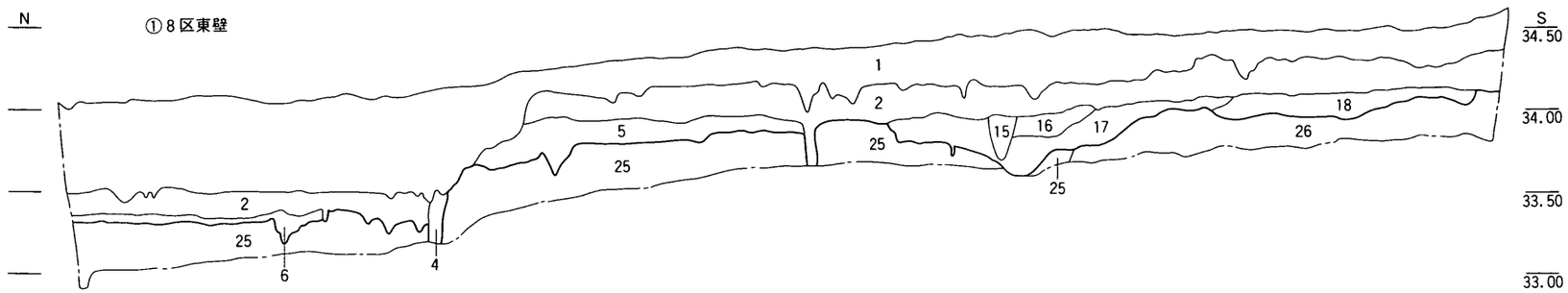


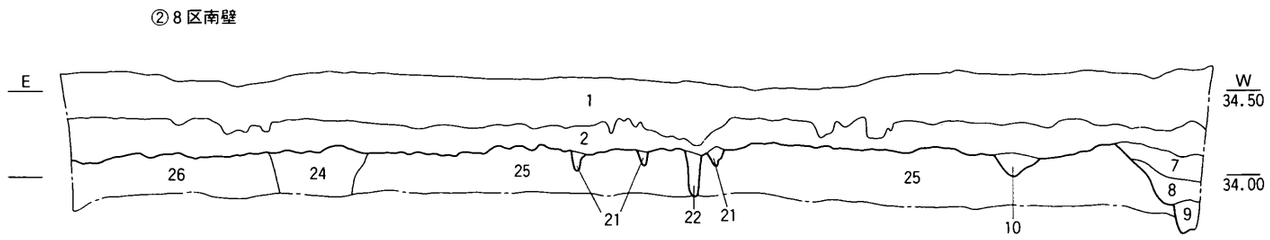


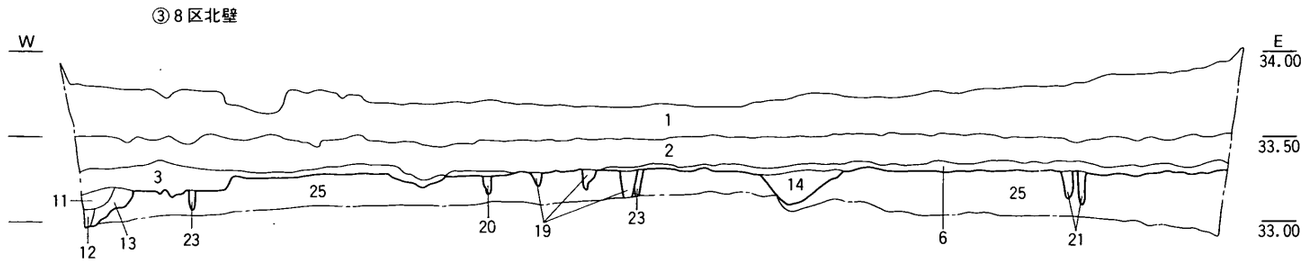
1．耕土
2．撹乱
3．床土
4．旧耕土
5．旧耕土
6．濃灰橙色粘質土（Mn含，旧耕土）
7．明灰黄褐色砂質土（旧耕土）
8．灰橙色粘質土（Mn含，包含層）
9．灰色粘質土（黄褐色粘土ブロック含，近世遺構？）
10．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ21）
11．濃灰褐色砂質土（ＳＤⅡ21）
12．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ21）
13．灰茶色粘質土（Mn含，Pit）
14．淡灰褐色粘質土（Mn含，古代包含層？）
15．灰橙色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ35）
16．灰褐色粘質土（Mn含，Pit）
17．灰茶褐色粘質土（Mn含，Pit？）
18．茶褐色粘質土（Mn・Fe・33層ブロック含，ＳＨⅡ02）
19．濃茶褐色粘質土（Mn・33層ブロック含，ＳＨⅡ02）
20．灰茶褐色粘質土（Mn含，Pit）
21．濃橙褐色粘質土（Fe沈着，包含層？）
22．濃灰褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ22）
23．灰色砂質土（Fe含，ＳＤⅡ23・25）
24．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，地山）
25．灰褐色砂礫（地山）
26．濃灰茶褐色粘質シルト（Mn含，地山）
27．灰黄褐色粘質土（Mn含，地山）
28．褐～灰褐色砂礫・黄褐色中砂ラミナ
29．明黄褐色砂質～粘質土（Mn含，地山）
30．濃灰黄褐色砂質土（Mn・Fe含，地山）
31．灰褐色～暗褐色砂礫（地山）
32．明灰黄褐色粘質土（Fe含，地山）
33．淡灰橙色粘質土（Mn含，地山）
34．灰茶褐色粘質土（Mn含，地山）
35．濃灰茶褐色粘質土（Mn含，地山）



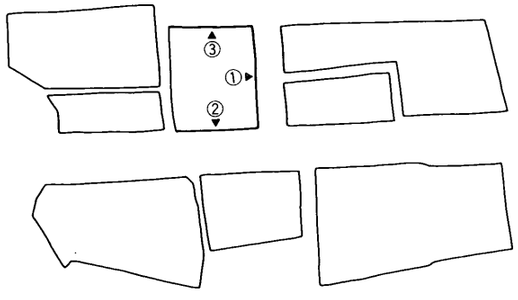
第９図　７ｂ・９区土層断面図（天地１/40・左右１/160）



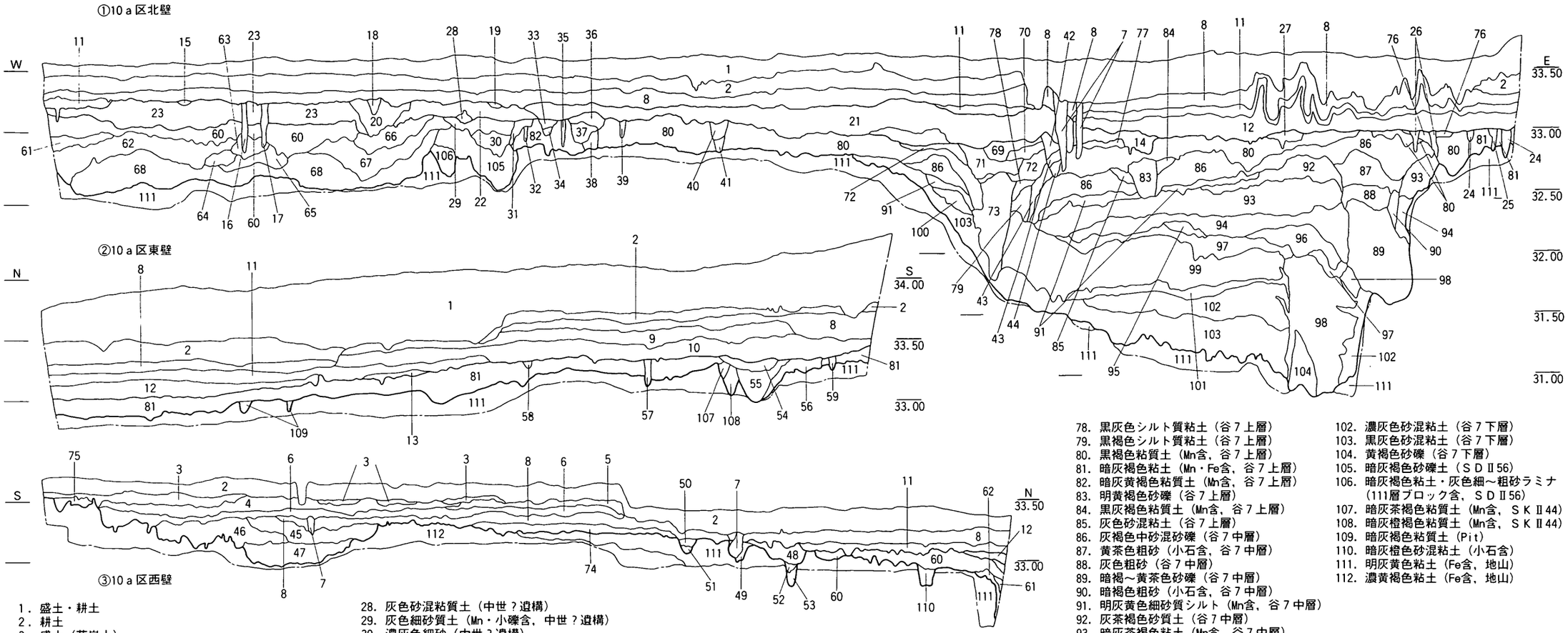




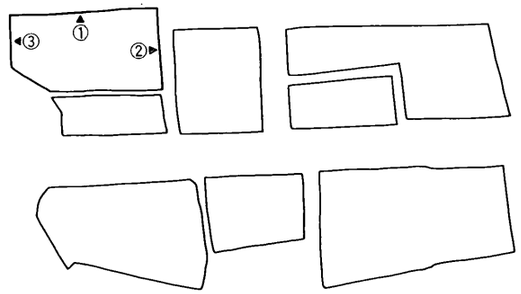
1．耕土
2．床土
3．灰茶褐色粘質土（旧耕土）
4．撹乱
5．灰黄褐色粘質土（旧耕土）
6．濃黄橙色粘質土（旧耕土）
7．濃灰黄褐色砂混粘土（Mn含，ＳＤⅡ30）
8．灰色砂混粘土（Mn含，ＳＤⅡ30）
9．灰黄色粘土（Mn・25層ブロック含，ＳＤⅡ30）
10．明灰橙色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ31）
11．灰色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ29）
12．黒褐色粘土（Mn含，ＳＤⅡ29）
13．濃灰褐色粘土（Mn含，ＳＤⅡ29）
14．暗灰褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ26）
15．濁灰橙色粘質土（Mn・地山ブロック含，ＳＤⅡ12）
16．灰茶褐色粘質土（Mn・Fe含，ＳＸⅡ20）
17．暗灰褐色粘質土（Mn含，ＳＸⅡ20）
18．灰色粘質土（Mn含，ＳＸⅡ20）
19．灰褐色粘質土（Mn含，Pit）
20．灰色粘質土（Mn・25層ブロック含，Pit）
21．灰褐色粘質土（Mn・Fe含，Pit）
22．灰橙色粘質土（Mn・25層ブロック含，Pit）
23．暗褐色粘質土（Mn含，Pit）
24．灰黄褐色砂質土（Fe・小礫多含，地山）
25．明灰黄色粘土（Fe・Mn含，地山）
26．黄褐色～暗褐色砂礫（地山）



第10図　８区土層断面図（天地１/40・左右１/160）

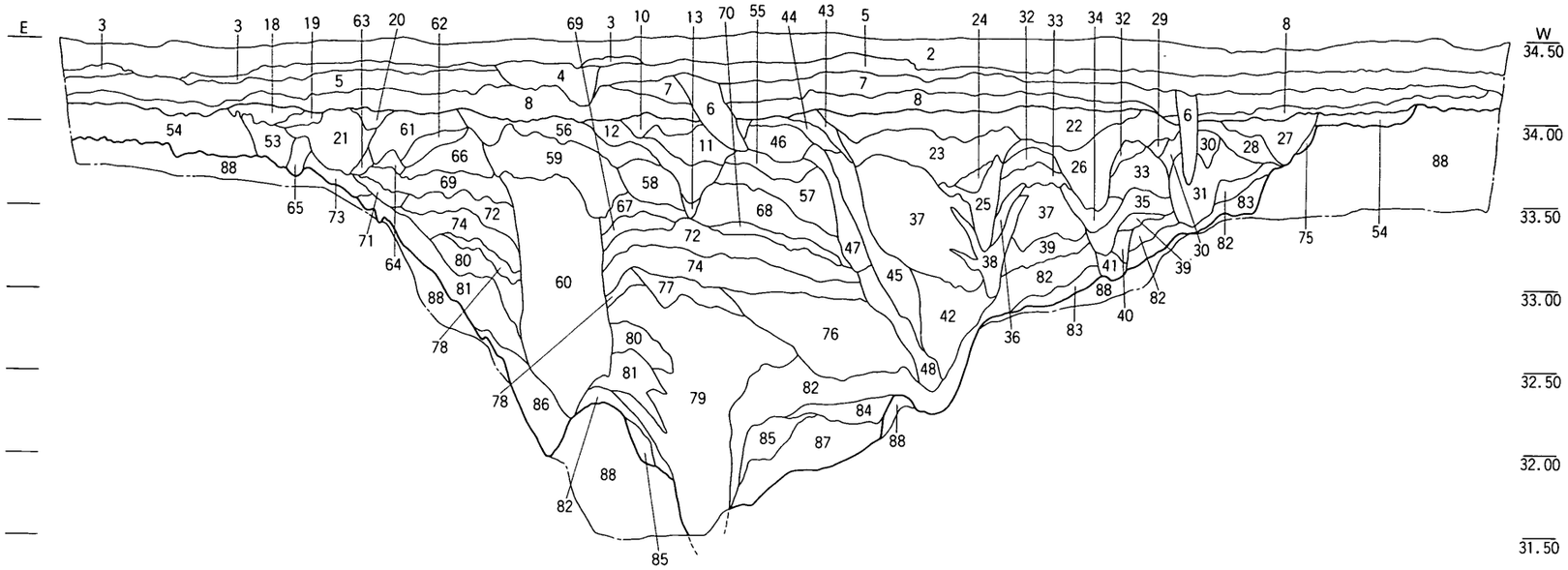


1．盛土・耕土
2．耕土
3．盛土（花崗土）
4．旧耕土
5．旧耕土・床土
6．旧耕土
7．暗渠
8．旧耕土・床土
9．灰橙褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
10．灰褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
11．灰橙色粘質土（Mn含，旧耕土）
12．旧耕土
13．淡灰茶褐色粘質土（Mn・81層ブロック含，旧耕土？）
14．灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ37？）
15．灰色粘質土（Mn含）
16．明茶灰褐色粘質土（Mn含，Pit）
17．明灰褐色粘質土（Mn含，Pit）
18．灰褐色粘質土（Mn含）
19．灰色粘質土（Mn含）
20．濃茶褐色砂混粘質土（Mn含）
21．灰褐色砂混粘質土（Mn・炭片含，中世包含層）
22．灰茶褐色シルト質粘質土（Mn含，中世包含層）
23．灰黄茶褐色粘質土（Mn含，中世包含層）
24．灰色粘質土（81・111層ブロック含，Pit）
25．灰橙色粘質土（81・111層ブロック含，Pit）
26．淡灰茶褐色粘質土（80層ブロック含，Pit）
27．灰橙色粘質土（80層ブロック含）
28．灰色砂混粘質土（中世？遺構）
29．灰色細砂質土（Mn・小礫含，中世？遺構）
30．濃灰色細砂（中世？遺構）
31．灰色粗砂混砂質土（中世？遺構）
32．灰色粘質土（Mn含，Pit）
33．濃茶褐色砂混粘質土（Mn含，中世？遺構）
34．灰色粘質土（Mn・小礫含，中世？遺構）
35．灰色砂質土（82層ブロック含，Pit）
36．灰褐色粘質土（炭片含，中世？遺構）
37．灰褐色砂混粘質土（Mn含，中世？遺構）
38．灰茶褐色粘質土（Mn含，中世？遺構）
39．濁茶褐色砂混粘質土（中世？遺構）
40．灰茶褐色砂混粘質土（Mn含，中世？遺構）
41．灰褐色粘質土（Fe・80層ブロック含，中世？遺構）
42．濃茶褐色粘質土（Mn含，中世？遺構）
43．暗灰茶褐色粘土（Fe含，中世？遺構）
44．灰色細砂（小石含，中世？遺構）
45．明灰橙色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ48）
46．明灰橙色粘土（Mn・黄褐色中砂ラミナ含，ＳＤⅡ48）
47．濃灰色粘土（Fe含，ＳＤⅡ48）
48．濃橙褐色粘質土（Mn・111層ブロック含，ＳＤⅡ44）
49．灰黄褐色粘土（Fe・111層ブロック含，ＳＤⅡ42）
50．暗灰橙褐色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ46）
51．暗灰橙褐色粘土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ46）
52．灰橙褐色粘質土（中世？遺構）
53．暗灰茶褐色粘土（111層ブロック含，中世？遺構）
54．灰茶褐色粘質土（Fe含，ＳＤⅡ39）
55．灰色粘土（ＳＤⅡ39）
56．淡灰色細砂・灰色粘土ラミナ（ＳＤⅡ39）
57．暗茶灰褐色粘質土（Mn・Fe・111層ブロック含，Pit）
58．灰橙色粘質土（Mn含，Pit）
59．灰茶褐色砂混粘質土（Mn・81・111層ブロック含，Pit）
60．濃茶灰褐色粘土（Mn含，谷７最上層）
61．暗灰褐色砂混粘土（谷７最上層）
62．灰色細～中砂・暗灰色粘土ラミナ（谷７最上層）
63．暗茶灰褐色砂混粘質土（谷７最上層）
64．黒褐色粘質土（シルト質，谷７最上層）
65．暗灰色砂質シルト（谷７最上層）
66．灰茶褐色粘質土・灰色細砂ラミナ（谷７最上層）
67．灰色細～中砂・暗灰色粘土ラミナ（谷７最上層）
68．暗灰褐色砂礫（谷７最上層）
69．暗灰茶褐色粘質土（小石含，谷７最上層）
70．灰褐色砂礫（谷７最上層）
71．暗灰色粗砂（谷７最上層）
72．濁暗灰茶褐色シルト（谷７最上層）
73．黄褐色中～粗砂・灰褐色砂礫ラミナ（下位に103層ブロック含，谷７最上層）
74．灰黄褐色粘質土（Mn含，弥生包含層）
75．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，弥生包含層）
76．黒茶褐色粘質土（Mn含，谷７上層）
77．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，谷７上層？）
78．黒灰色シルト質粘土（谷７上層）
79．黒褐色シルト質粘土（谷７上層）
80．黒褐色粘質土（Mn含，谷７上層）
81．暗灰褐色粘土（Mn・Fe含，谷７上層）
82．暗灰黄褐色粘質土（Mn含，谷７上層）
83．明黄褐色砂礫（谷７上層）
84．黒灰褐色粘質土（Mn含，谷７上層）
85．灰色砂混粘土（谷７上層）
86．灰褐色中砂混砂礫（谷７中層）
87．黄茶色粗砂（小石含，谷７中層）
88．灰色粗砂（谷７中層）
89．暗褐～黄茶色砂礫（谷７中層）
90．暗褐色粗砂（小石含，谷７中層）
91．明灰黄色細砂質シルト（Mn含，谷７中層）
92．灰茶褐色砂質土（谷７中層）
93．暗灰茶褐色粘土（Mn含，谷７中層）
94．黒灰色シルト質粘土（Fe・小礫含，谷７中層）
95．黒灰色粘質土（谷７中層）
96．黒灰色粗砂（小石含，谷７中層）
97．黒灰色砂混粘土（谷７中層）
98．灰色細砂・暗灰褐色砂礫ラミナ（谷７下層）
99．灰色細砂・暗灰褐色砂礫・黒灰色粘土ラミナ（谷７下層）
100．灰褐色粗砂・灰色シルトラミナ（谷７下層）
101．黒灰色粘土（谷７下層）
102．濃灰色砂混粘土（谷７下層）
103．黒灰色砂混粘土（谷７下層）
104．黄褐色砂礫（谷７下層）
105．暗灰褐色砂礫土（ＳＤⅡ56）
106．暗灰褐色粘土・灰色細～粗砂ラミナ（111層ブロック含，ＳＤⅡ56）
107．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＫⅡ44）
108．暗灰橙褐色粘質土（Mn含，ＳＫⅡ44）
109．暗灰褐色粘質土（Pit）
110．暗灰橙色砂混粘土（小石含）
111．明灰黄色粘土（Fe含，地山）
112．濃黄褐色粘土（Fe含，地山）

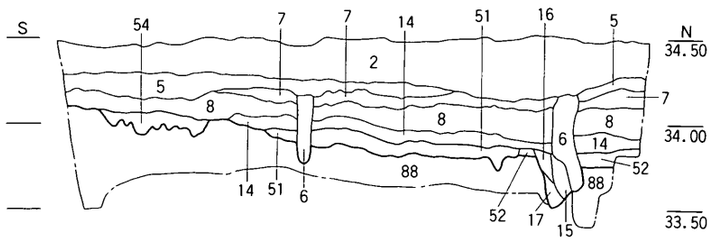


第11図　10ａ区土層断面図（天地１/40・左右１/160）

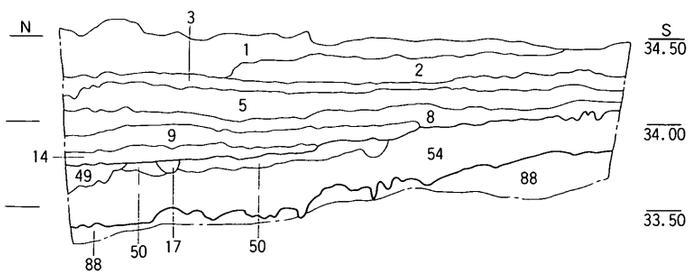
①10ｂ区南壁



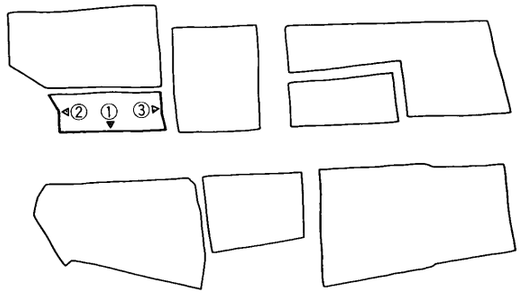
②10ｂ区西壁



③10ｂ区東壁

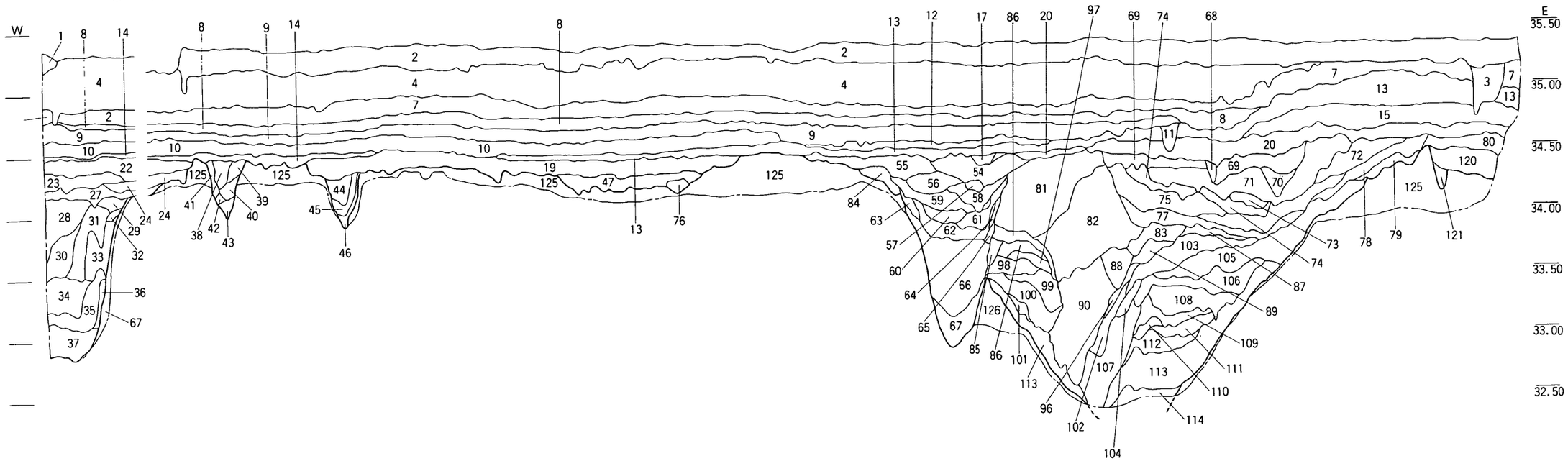


1．盛土
2．耕土
3．床土
4．撹乱
5．旧耕土
6．暗渠
7．灰橙色粘質土（Mn含，旧耕土）
8．橙灰色砂質土（Mn含，旧耕土）
9．灰黄色粘質土（Mn含，旧耕土）
10．灰色粘質土（Fe含，ＳＤⅡ48）
11．灰橙色粘質土（Fe含・シルト質，ＳＤⅡ48）
12．濃灰色シルト質粘土・黄褐色中砂ラミナ（ＳＤⅡ48）
13．濃黄茶色砂礫（ＳＤⅡ48）
14．明灰褐色砂混粘質土（Mn含，第１面包含層）
15．暗灰色粘土（Fe含，ＳＤⅡ12）
16．暗灰色砂混粘土（Fe含，ＳＤⅡ12）
17．黒灰色砂混粘土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ12）
18．淡灰橙色粘質土（Mn・53層ブロック含，ＳＤⅡ38）
19．灰橙褐色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ38）
20．暗灰褐色砂混粘土（Fe含，ＳＤⅡ38）
21．濃茶褐～暗褐色砂礫（ＳＤⅡ38）
22．灰色砂混粘土（Fe含，谷７最上層）
23．灰茶褐色砂混粘土（Fe含，谷７最上層）
24．灰色中砂・黒灰色粘土ラミナ（谷７最上層）
25．黒灰色細砂質砂質土（谷７最上層）
26．黒灰色礫混粘土（Fe含，ＳＤⅡ47）
27．淡灰黄色砂礫
28．灰色砂質土（西端Fe沈着）
29．黒灰色礫混粘土（ＳＤⅡ45）
30．濁灰黄色中砂（ＳＤⅡ45）
31．暗褐色小石混粗砂（ＳＤⅡ45）
32．暗灰色中砂混粘土（Fe含，谷７最上層）
33．暗灰色粘質シルト（Fe含，谷７最上層）
34．黒灰色粘質シルト・灰色細砂ラミナ（谷７最上層）
35．灰黄～暗灰色中砂（谷７最上層）
36．黒灰色小石混粘質土（谷７最上層）
37．濃灰色小石混粘土（谷７最上層）
38．濃灰色砂混粘土・黄灰色細砂～粗砂ラミナ（谷７最上層）
39．濃灰色シルト（Fe含，谷７最上層）
40．黒灰色粗砂混粘土（谷７最上層）
41．灰色中砂混シルト質粘土（Fe含，谷７最上層）
42．黒色砂混粘土（植物遺体含，谷７最上層）
43．灰茶褐色粘土（Fe含，谷７最上層）
44．暗灰褐色粘質土（Fe含・シルト質，谷７最上層）
45．黒色粘質土（谷７最上層）
46．濃黄茶褐色小石混粘質土（Fe含，谷７最上層）
47．黒灰色粗砂～小石混粘土（谷７最上層）
48．黒色粘土・灰色細砂ラミナ（谷７最上層）
49．灰褐色中砂混砂質土（Mn含，第２面包含層）
50．暗灰褐色砂混粘質土（Mn含，第２面包含層）
51．褐灰色粘質土（Mn・Fe含，第２面包含層）
52．赤橙灰褐色シルト質粘土（Fe含，第２面包含層）
53．暗灰茶褐色粘質土（Mn・Fe含，第２面包含層）
54．暗灰褐色粘質土（Mn含，第２面包含層）
55．黒灰色粘土（Fe含，谷７上層）
56．濃黄茶褐色中砂（Mn含，谷７中層）
57．黒灰色砂混粘土（小石含，谷７中層）
58．明灰黄色細砂（谷７中層）
59．濃黄茶色砂礫（谷７中層）
60．暗褐色～濃黄茶色砂礫・濃褐色粗砂ラミナ（谷７中層）
61．暗灰橙色シルト質粘土（Fe含，谷７中層）
62．濃灰橙色シルト質粘土（Fe含，谷７中層）
63．濃灰茶褐色粘質シルト（Mn含，谷７中層）
64．灰茶褐色砂礫（Fe含，谷７中層）
65．黒灰色粘土（Mn含，谷７中層）
66．暗灰色シルト質粘土（Fe含，谷７中層）
67．濁灰茶褐色砂質土（Mn・Fe含，谷７中層）
68．暗灰色砂混粘質土（谷７中層）
69．灰褐色粘質土（Fe含，谷７中層）
70．黒灰色砂混シルト質粘土（谷７中層）
71．暗灰茶褐色シルト質粘土（Mn含，谷７中層）
72．暗灰色中砂混粘質土（谷７中層）
73．黒茶褐色粘質土（Mn含，谷７中層）
74．黒灰色砂混粘土（谷７中層）
75．濃灰茶褐色粘質土（Mn含，谷７中層？）
76．濃灰色砂混粘土（谷７中層？）
77．灰色細砂（谷７下層）
78．濁灰黄色小石混粘質土（谷７下層）
79．灰～灰褐色砂礫（谷７下層）
80．暗灰色シルト質粘土（谷７下層）
81．黒灰色シルト質粘土（谷７下層）
82．暗灰色砂混粘土（Mn含，谷７下層）
83．明灰色砂混粘土（Fe含，谷７下層）
84．灰オリーブ色砂混粘土（谷７下層）
85．灰橙色砂混粘土（谷７下層）
86．暗灰色砂礫（谷７下層）
87．明黄褐色細砂～中砂（谷７下層）
88．明灰黄色粘土（Mn・Fe含，地山）

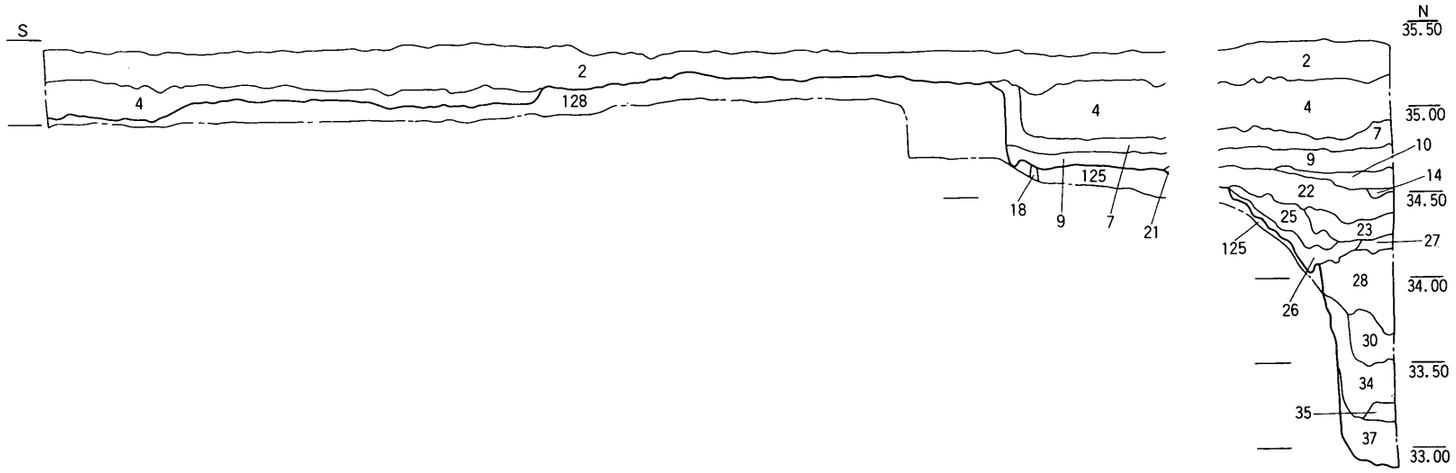


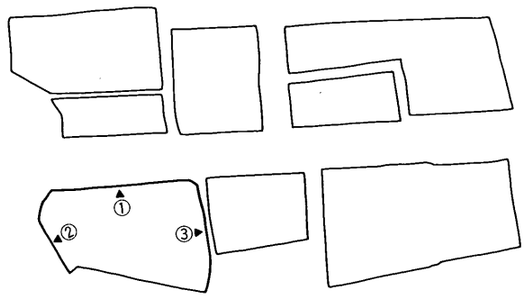
第12図　10ｂ区土層断面図（天地１/40・左右１/160）

①11区北壁



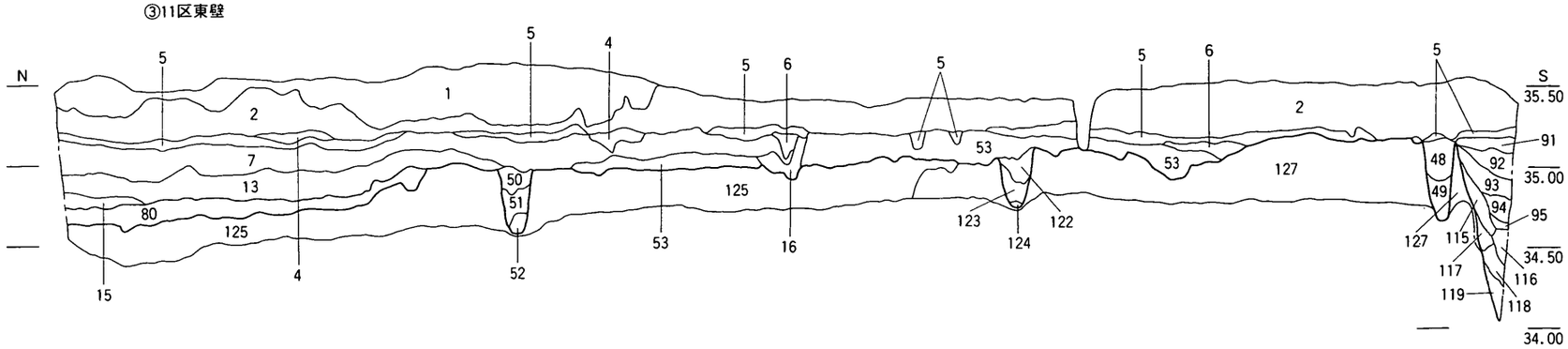
②11区西壁





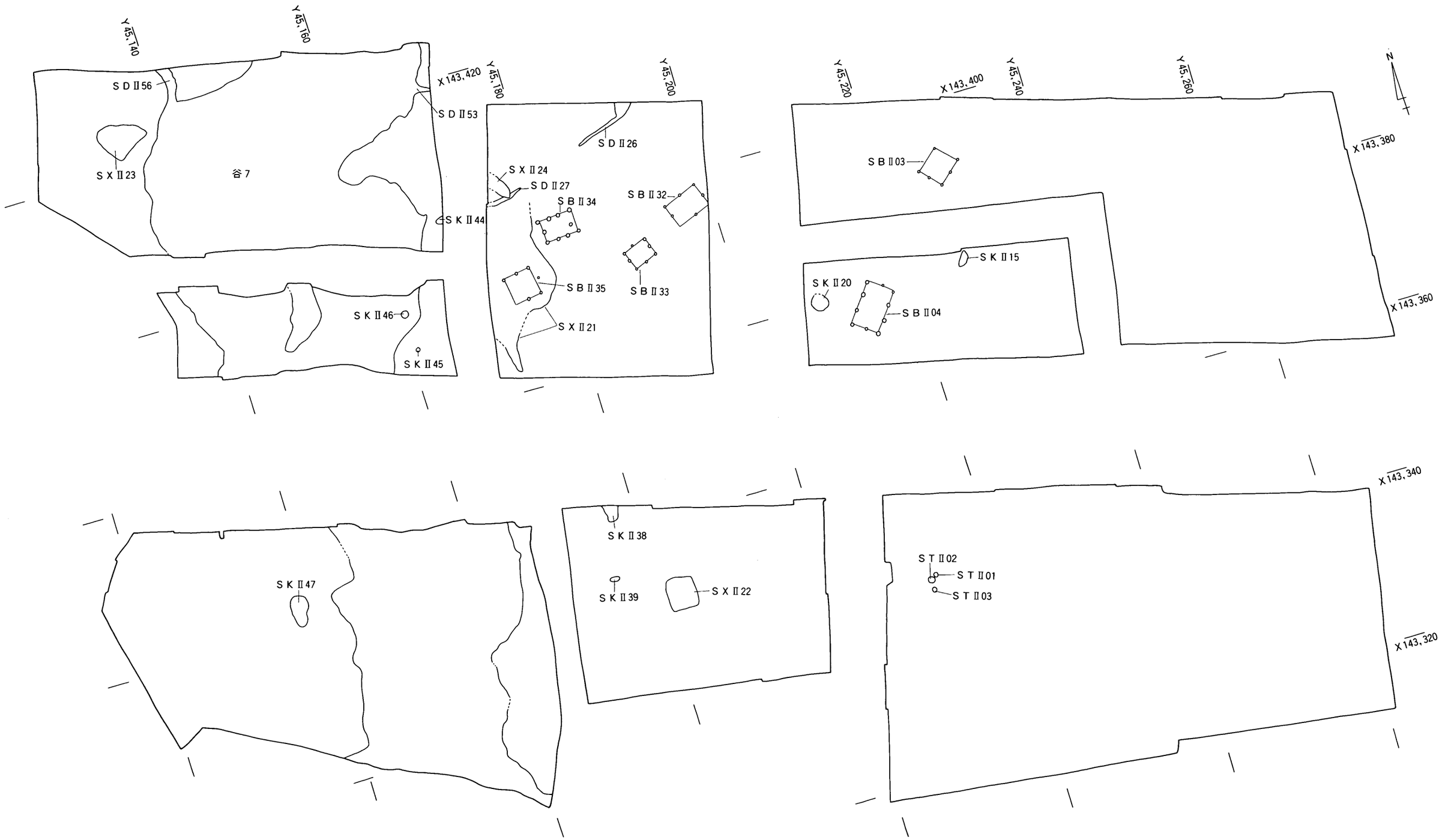
第13図　11区土層断面図１（天地１/40・左右１/160）

③11区東壁



1．盛土（花崗土）
2．耕土
3．撹乱
4．盛土
5．灰橙褐色粘質土（Mn含，旧耕土）
6．灰色細砂
7．旧耕土
8．旧耕土
9．旧耕土
10．灰黄褐色粘質土（Mn・13層ブロック含，旧耕土）
11．濃灰黄褐色中砂
12．灰黄褐色粘質土（旧耕土）
13．旧耕土
14．灰黄色砂質土（旧耕土）
15．灰橙褐色砂質土（Mn含，旧耕土）
16．灰黄褐色砂質土（Mn含）
17．にぶい黒灰色砂質シルト
18．暗渠
19．灰褐色粘質土（Mn含，中世？包含層）
20．灰褐色粗砂混砂質土（Mn含，中世？包含層）
21．灰色細砂（ＳＤⅡ70？）
22．濁灰黄褐色砂質土（Fe含，ＳＤⅡ71上層）
23．濃灰赤黄色粘土（Fe含，ＳＤⅡ71上層）
24．暗灰茶褐色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ71上層）
25．灰茶褐色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ71上層）
26．灰褐色砂質土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ71上層）
27．灰褐色粘質土（Fe含，ＳＤⅡ71上層）
28．暗灰色砂混粘土（Fe含，ＳＤⅡ71中層）
29．暗灰色砂混粘土（Fe・125層ブロック含，ＳＤⅡ71中層）
30．暗灰色砂混粘土（植物遺体・33層ブロック含，ＳＤⅡ71中層）
31．黒褐色粘質土（Fe・33層・125層ブロック含，ＳＤⅡ71中層）
32．明灰橙色砂混粘土（ＳＤⅡ71中層）
33．明青灰色粘土（Fe・植物遺体含，ＳＤⅡ71中層）
34．暗灰色砂混粘土（Fe・植物遺体・125層ブロック含，ＳＤⅡ71中層）
35．濃灰色粘土・黄褐色粗砂ラミナ（125層ブロック含，ＳＤⅡ71下層）
36．濃青灰色粘土（植物遺体含，ＳＤⅡ71下層）
37．灰色砂礫（ＳＤⅡ71下層）
38．暗灰褐色粘質土（Fe含，ＳＤⅡ69）
39．明灰橙色粘土（Mn含，ＳＤⅡ69）
40．濁灰黄色砂質土（ＳＤⅡ69）
41．明灰黄色粘質土（Fe含，ＳＤⅡ69）
42．暗灰色粘質土（Fe含，ＳＤⅡ69）
43．暗灰色砂礫（ＳＤⅡ69）
44．濃灰茶色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ68）
45．灰橙色粘質土（Mn・Fe含，ＳＤⅡ68）
46．灰色粘質土（Mn・125層ブロック含）
47．灰茶褐色粘質土（Mn含，包含層）
48．淡灰黄褐色中～細砂（ＳＤⅡ59）
49．灰茶褐色シルト・灰黄褐色細砂ラミナ（ＳＤⅡ59）
50．灰橙褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ36）
51．灰褐色中砂～粗砂（ＳＤⅡ36）
52．灰茶褐色シルト（ＳＤⅡ36）
53．淡黄褐色粘質土（Mn・Fe含，第２面包含層）
54．灰茶褐色粘質土（Mn含，谷７最上層）
55．灰茶褐色砂質土（Mn・Fe含，谷７最上層）
56．濃灰茶褐色砂質土（Mn含，谷７最上層）
57．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，谷７最上層）
58．明灰橙褐色粘質土（Mn・Fe含，谷７最上層）
59．灰茶褐色粘質シルト（Mn・Fe含，谷７最上層）
60．暗灰色シルト（Mn含，谷７最上層）
61．暗灰褐色小石混砂質土（谷７最上層）
62．淡灰～灰茶褐色シルト（Mn・Fe含，谷７最上層）
63．濁黄灰色シルト（Fe含，谷７最上層）
64．暗灰褐色粘質土（Mn含，谷７最上層）
65．黒褐色砂混粘質土（Mn・Fe含，谷７最上層）
66．黄褐色～濃黄褐色細～粗砂ラミナ（下面Fe沈着，谷７最上層）
67．灰色細砂・黒灰色粘土・黄褐色中砂・灰色砂礫ラミナ（植物遺体含，谷７最上層）
68．灰黄褐色中砂
69．暗灰橙褐色粘質土（Mn・Fe・71層ブロック含，包含層？）
70．にぶい灰茶褐色砂質シルト（Fe・炭片含，ＳＤⅡ58）
71．暗褐色砂礫（谷７上層）
72．暗灰橙褐色粘質土（Mn・Fe含，谷７上層）
73．にぶい灰黄色シルト（Fe含，谷７上層）
74．濁灰黄茶色砂礫（Fe含，谷７上層）
75．濁灰赤茶色シルト（Fe含，谷７上層）
76．にぶい淡灰茶色シルト（Fe含，谷７上層）
77．濁灰褐色シルト（Fe含，谷７上層）
78．暗茶褐色粘質土（Mn含，谷７上層）
79．にぶい灰褐色粘質土（Mn含，谷７上層？）
80．灰茶褐色粘質土（Mn含，第２面包含層）
81．濃茶褐色砂礫（谷７中層）
82．濃黄褐色砂礫（下面Mn沈着，谷７中層）
83．灰褐色シルト・灰黄色細砂ラミナ（谷７中層）
84．濁灰色シルト（Mn含，谷７中層）
85．暗灰色粘質土（Mn・Fe含，谷７中層）
86．黒褐色粘土（Fe・炭片含，谷７中層）
87．濁暗灰黄色シルト（Fe含，谷７中層）
88．黄褐色粗砂（下面Mn沈着，谷７中層）
89．淡灰色シルト（Fe含，谷７中層）
90．灰～濃茶褐色砂礫（谷７中層）
91．暗灰茶褐色粘質土（Mn含，谷７中層）
92．灰茶色シルト質粘土（Mn含，谷７中層）
93．茶灰色粘質シルト（Mn含，谷７中層）
94．灰黄褐色砂混粘土（Mn含，谷７中層）
95．暗灰色砂混粘土（Fe含，谷７中層）
96．明黄褐色細砂（谷７下層）
97．黒灰色礫混砂質土（Fe含，谷７下層）
98．濁灰黄褐色小石混シルト（Fe含，谷７下層）
99．明灰色砂質シルト（谷７下層）
100．濁灰色砂混粘土（谷７下層）
101．青灰色粘土（谷７下層）
102．黄褐色中砂・濃茶褐色砂礫ラミナ（谷７下層）
103．黒灰色粘質シルト（Fe含）
104．灰色シルト質細砂（113層ブロック含，谷７下層）
105．黒褐色粘土（Fe含，谷７下層）
106．濁緑灰色シルト質粘土（Fe・108層ブロック含，谷７下層）
107．暗灰色砂礫・暗灰色シルト・灰色細砂ラミナ（113層ブロック含，谷７下層）
108．灰黄褐色砂礫（谷７下層）
109．暗灰色礫混シルト（上面Fe沈着，谷７下層）
110．黒灰色シルト（谷７下層）
111．黒灰色シルト・淡灰色細砂ラミナ（谷７下層）
112．にぶい黒灰色砂質シルト（谷７下層）
113．黒灰色小石混粘土（谷７下層）
114．青灰色砂礫（谷７下層）
115．灰茶褐色粘質土（Mn含，谷７下層）
116．暗灰色砂混粘土（谷７下層）
117．灰橙褐色粘質土（Mn含，谷７下層）
118．暗灰色砂混粘土（谷７下層）
119．暗灰色砂混粘土（谷７下層）
120．灰茶褐色粘質土（Mn・炭片含，遺構？）
121．灰黄褐色粘質土（Mn含，Pit？）
122．淡灰黄褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ57）
123．灰茶褐色粘質土（Mn含，ＳＤⅡ57）
124．暗灰色粘土（ＳＤⅡ57）
125．明黄褐色粘質土（Mn含，地山）
127．明灰黄褐色粘土（地山）
128．灰黄色粘土（Mn含，地山）

第14図　11区土層断面図２（天地１/40・左右１/160）



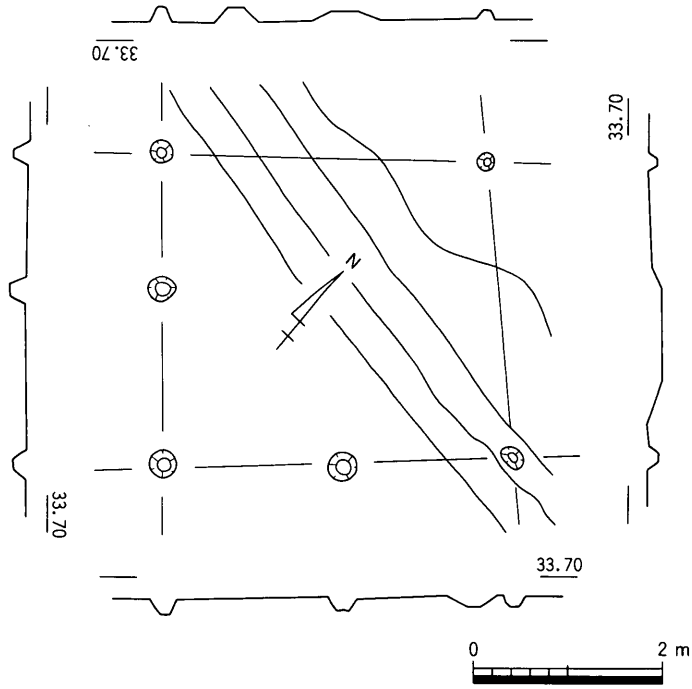
第15図　弥生後期～古墳前期主要遺構分布図（1/500）

第２節　弥生時代 ～古墳時代の遺構・遺物

掘立柱建物

ＳＢⅡ03（第16図）

６ａ区西半中央で検出した南北棟建物である。北列中央穴と西列中央穴は，ＳＤⅡ09によって損なわれているが，ほぼ旧状を窺うことができる。桁行２間(3.58m)，梁間２間（3.18m），主軸方向N48.0°Ｅ，床面積11.4m²の側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.2～0.3mの平面楕円形を呈し，残存深は0.14～0.24mと浅く，上面は顕著な削平を蒙っていると判断される。柱穴底面の標高は，33.3m前後で概ね一定する。柱間間隔は，桁方向で1.8m前後と概ね揃うが，梁方向では1.4～1.8mとやや一定しない。柱通りは良好である。柱穴埋土は，黒褐色系粘質土であった。



第16図　ＳＢⅡ03平・断面図（1/80）

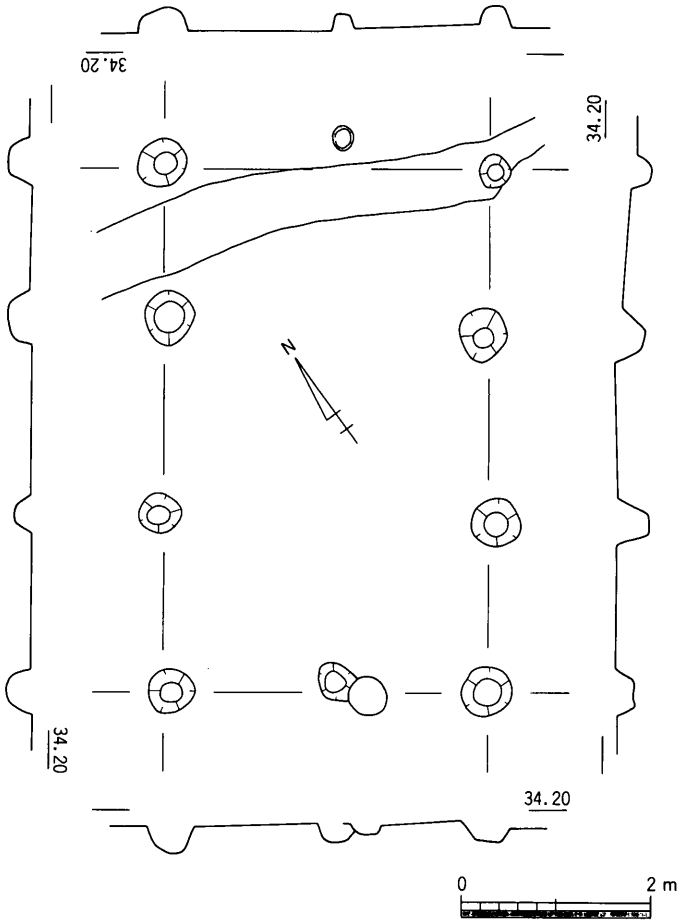
遺物の出土はみられなかったため，建物の時期を特定することは困難である。埋土の特徴が後述するＳＢⅡ04に近似し，近接した位置関係にあることから当該時期の建物遺構と判断した。

ＳＢⅡ04（第17図）

６ｂ区西半部で検出した南北棟建物である。北東隅の１穴がＳＤⅡ12と重複し，溝底面で検出された。桁行３間（5.50m），梁間２間（3.45m），主軸方向N36.7°Ｅ，床面積18.98

m²の側柱建物である。柱穴掘り方は，径0.2～0.6mの円ないしは楕円形を呈し，残存深は0.2～0.4mを測る。柱穴底面の標高は，33.6m前後で概ね一定する。桁方向の柱間間隔は，中央で2.0mとやや開く以外は1.7m前後で概ね揃い，また柱通りもよい。桁方向西列北より２穴目と南西隅穴に，径10cm程度の礫の詰石が，北列中央穴に根石がそれぞれ認められた。柱穴埋土は，黒褐色系粘質土である。

遺物は，弥生土器小片が柱穴より少量出土している。埋土の特徴及び各柱穴より出土した遺物に土師器や須恵器片が混在しないことから，当該時期の建物遺構と判断した。



第17図　ＳＢⅡ04平・断面図（１/80）

ＳＢⅡ32（第18図）

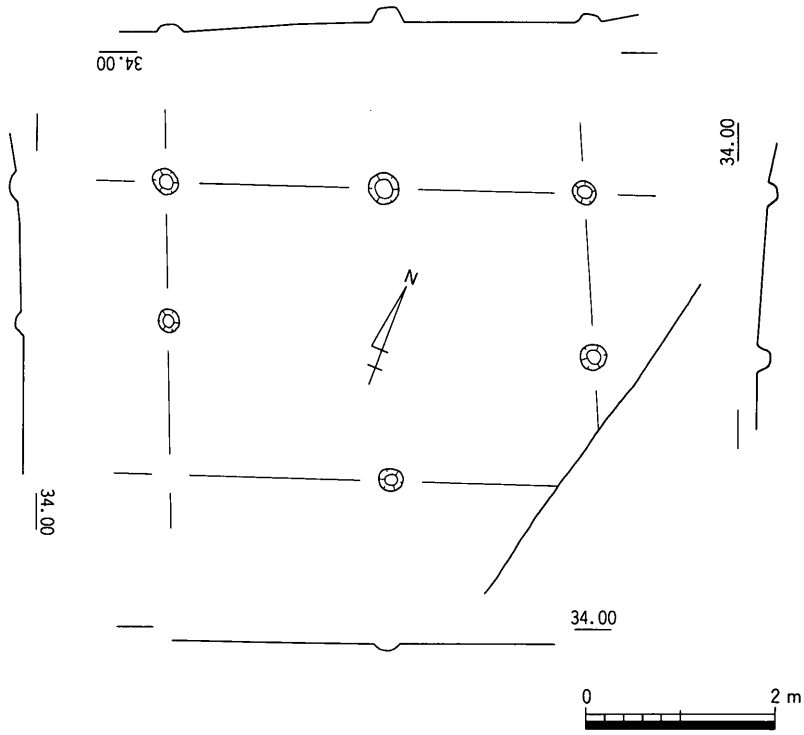
８区東端で検出した東西棟建物である。南東隅の柱穴は調査区外へ延長し，南西隅の柱穴を欠く。桁行２間（4.4m），梁間２間（3.1m），主軸方向N70.1°Ｅ，床面積13.6m²の側柱建物である。柱穴の掘り方は，径0.3m前後の略円形を呈し，残存深は0.1mと極めて浅く，顕著な削平を蒙っている。柱穴底面の標高は，33.54～33.77mと一定しない。桁方向の柱間間隔は，2.2m前後でほぼ均等に配され，柱通りも揃っている。柱穴埋土は黒褐色系粘質土であった。

遺物は出土しておらず，時期決定は困難を伴うが，主軸方向が近接するＳＢⅡ33と近似し，埋土の特徴からも，当該時期に位置付けられるものと判断した。

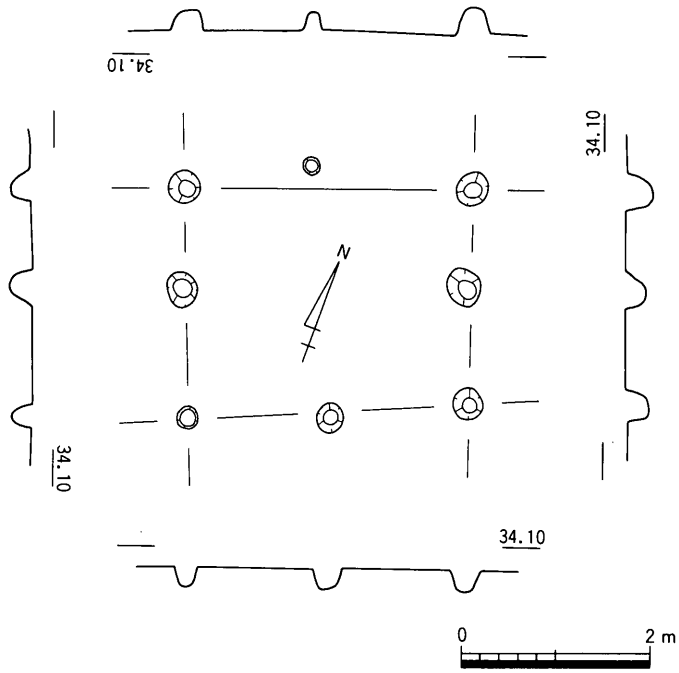
ＳＢⅡ33（第19図）

８区東半部で検出された東西棟建物である。桁行２間（3.0m），梁間２間（2.3m），主軸方向N69.4°Ｅ，床面積6.9m²の小規模な側柱建物である。柱穴の掘り方は，径0.2～0.4mの略円形を呈し，残存深は0.2m程度とやや浅い。柱穴底面の標高は，33.6m前後でほぼ一定である。桁方向の柱間間隔は，1.5～1.7mとやや一定しないが，柱通りは概ね揃っている。埋土は黒褐色系粘質土であった。

遺物は，各柱穴より弥生土器小片が少量出土したに過ぎない。出土遺物中須恵器等が混在せず，位置関係や埋土の特徴などから，当該時期



第18図　ＳＢⅡ32平・断面図（1/80）

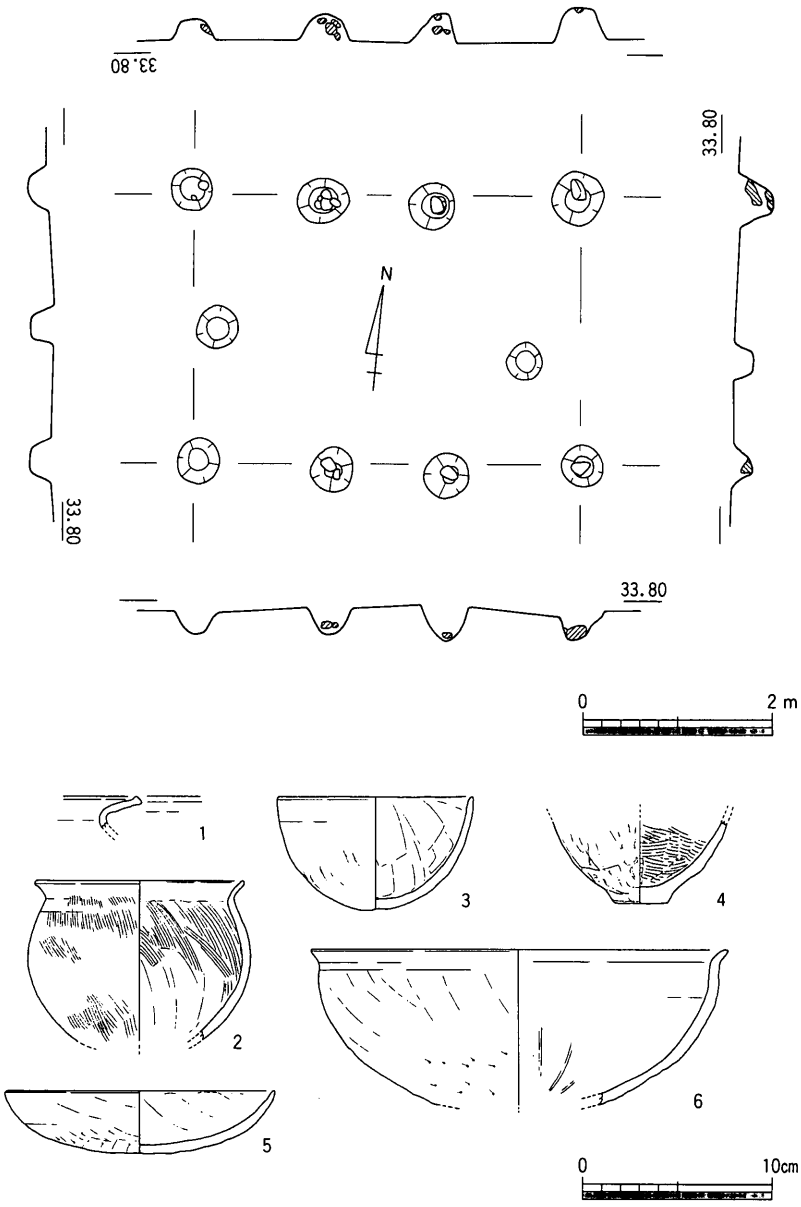


第19図　ＳＢⅡ33平・断面図（1/80）

に位置付けられるものと判断した。

ＳＢⅡ34（第20図）

８区西半部で検出された東西棟建物である。桁行３間（4.2m），梁間２間（2.8m），主軸方向N85.8°Ｅ，床面積11.8㎡の側柱建物である。柱穴の掘り方は，径0.5m前後の楕円形を呈し，残存深は0.3～0.4mと比較的深い。柱穴底面の標高は，33.6～33.7m前後で概ね一定する。桁方向の柱間間隔は，中央の柱間が1.3mとやや狭く，両端は1.5m前後で若干広くなっている。柱通りはよく揃っている。埋土は黒褐色系粘質土であった。



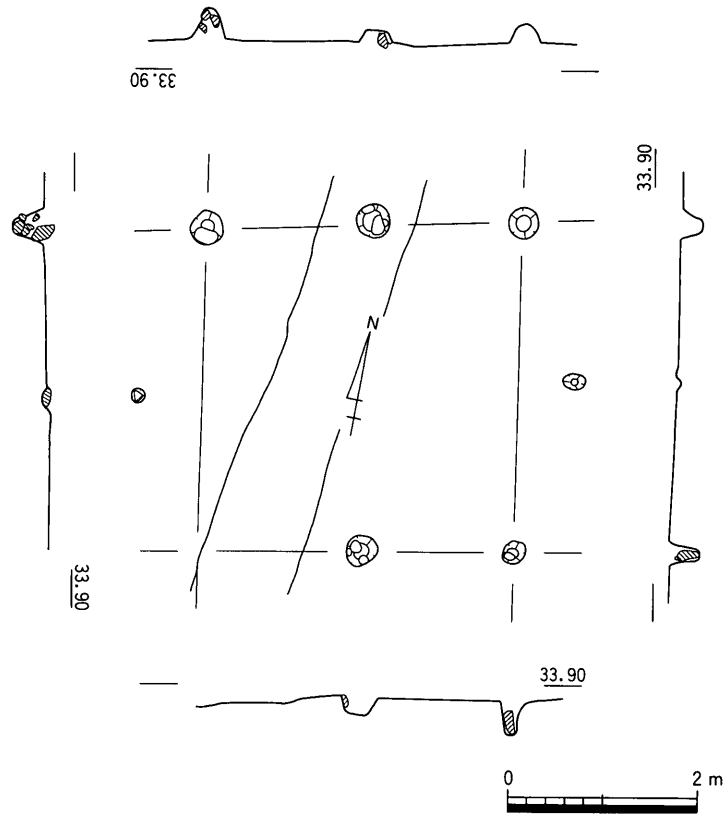
第20図　ＳＢⅡ34平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

遺物は，各柱穴より弥生土器の小片が比較的多く出土している。完形に復元されるものはなく，いずれも混入の可能性が高いが，他の建物にはない出土量を示しており，注意される。この内６点を選んで図示した。２は東列中央穴より，その他は南列西より２穴目の

柱穴より，それぞれ出土した。1は甕口縁部の小片。第4章に後述する甕Cで，布留式古相併行期に主流となる形態である。2は形態から小形の甕としたが，内面の調整手法等は鉢のそれに通じる。3～5は小形鉢。いずれも外面には，成形時の縦方向のクラックが顕著に認められ，外型成形の可能性を窺わせる。4のような突出した平底形態のものは，当該時期まではおそらく残存しないと考える。6は外反口縁形態の中形鉢。当該時期には，器形の大小を問わず鉢底部はケズリ調整が卓越する。

ＳＢⅡ35（第21図）

8区西端で検出された東西棟建物である。ＳＤⅡ31とＳＸⅡ21と重複し，切り合い関係よりＳＤⅡ31よりも先行し，ＳＸⅡ21よりは後出するものと考える。南西隅の柱穴を欠く。桁行2間（3.4m），梁間1間（3.4m），主軸方向N79.5°Ｅ，床面積11.6m²の側柱建物である。梁方向の中央穴は東西両列とも0.6m程外側にずれている。棟持柱の可能性もあるが断定はできない。なお，西側のそれはＳＸⅡ21上面では確認できず掘り下げてしまったが，相当する位置に根石と考えられる長軸20cm程の板状の自然石が出土したことから判断した。柱穴の掘り方は，径0.3～0.4mの略円形を呈し，残存深は0.2～0.3mとやや深い。柱穴底面の標高は，33.25～33.59mと一定しない。桁方向の柱間間隔は，1.6～1.8mとほぼ等間隔に配され，柱通りも揃っている。埋土は黒褐色粘質土であった。



第21図　ＳＢⅡ35平・断面図（1/80）

遺物は出土しておらず，時期決定は困難を伴うが，主軸方向が近接するＳＢⅡ34等と近

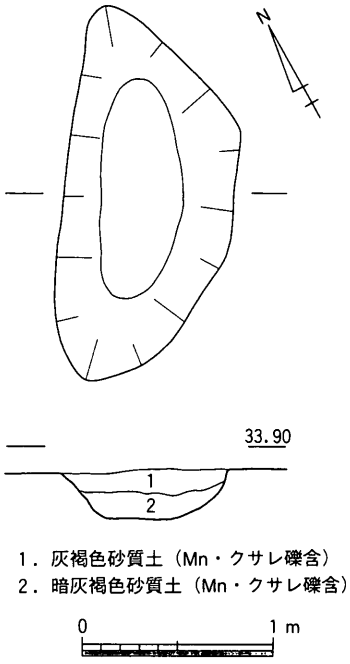
似し，埋土の特徴からも，当該時期に位置付けられるものと判断した。

土坑

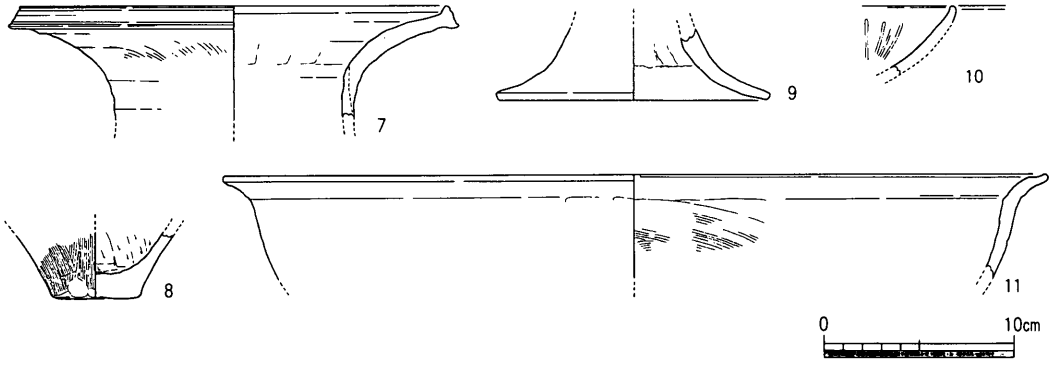
ＳＫⅡ15（第22・23図）

６ｂ区中央北端で検出した不整形な土坑である。長軸1.9m，短軸0.9m，平面形は南北に長いいびつな隅丸長方形状を呈する。深さは0.55mを測り，周壁は緩やかに掘り込まれ，底面は概ね平坦で，断面形は逆台形状を呈する。底面の標高は33.5m前後であった。埋土は灰褐色系砂質土が堆積し，２層に細分されたが大差はない。

遺物は，弥生土器小片が20～30点程度出土したのみである。このうち，５点を選んで図示した。７は東四国に通有の広口壺口縁部。口縁端部は上下に拡張され，端面には横板ナデにより鈍い沈線状の段を認める。８は甕底部小片。外底面に籾圧痕を認める。９は高坏脚部。10は小片だが，小形鉢の口縁部と思われる。内面には放射状のミガキ調整を認める。11は外反口縁形態の大形鉢。当該時期の大形鉢に直口形態は極めて稀であり，大半は外反口縁を採用する。口縁端部内面は，凹線状に僅かに窪む。以上の資料は，弥生時代終末期頃に位置付けられると考える。



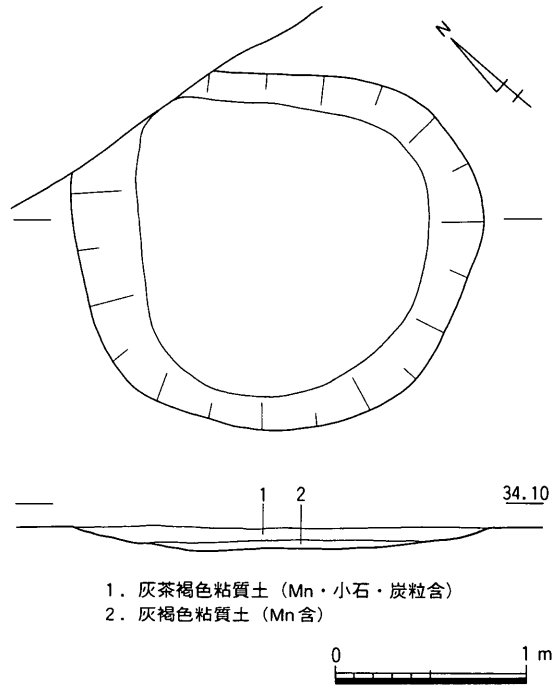
第22図　ＳＫⅡ15平・断面図（１/40）



第23図　ＳＫⅡ15出土遺物実測図（１/４）

ＳＫⅡ20（第24図）

６ｂ区西端で検出した浅い落ち込みである。平面形は，径2.3m程度のやや不整形な楕円形を呈する。北端部をＳＤⅡ12に切られる。深さは0.2m程度しかなく，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色系粘質土が堆積し，２層に細分されたが大きな差異はない。上位層に炭粒を含む点が注意される。断面形状からは，人為的な掘り込みと考える根拠に乏しいが，平面形は比較的整った形状を呈し，自然地形の窪地よりはむしろ，上面が大きく削平された遺構の基底部と考えておきたい。



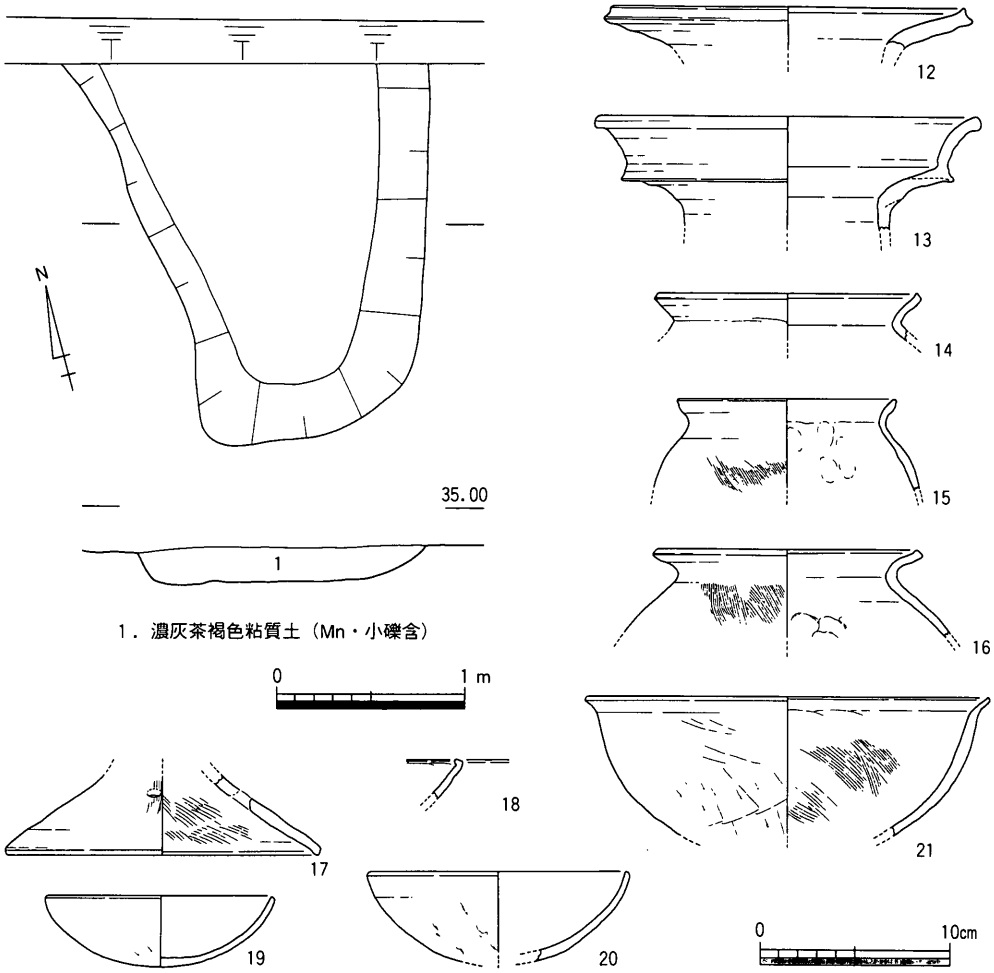
第24図　ＳＫⅡ20平・断面図（１/40）

遺物は，弥生土器小片２点が出土したのみである。遺物から遺構の時期を特定することは困難であり，埋土の特徴等から当該時期に位置付けられるものと判断した。

ＳＫⅡ38（第25図）

９区北西隅付近で検出した浅い土坑である。北半部は調査区外へ延長し，南半部のみ調査された。平面形は現状で，南北1.95m以上，東西1.90m以上の逆台形状を呈する。深さは0.2m程度しかなく，断面形は箱形を呈し，底面は概ね平坦であった。底面の標高は34.6m前後である。埋土は，濃灰茶褐色粘質土の単層であった。

遺物は，弥生土器小片がコンテナ半箱程度出土している。このうち10点の遺物を図化した。12は広口壺口縁部小片。13は二重口縁壺の口頸部小片である。いわゆる東阿波型土器群（菅原1990）の二重口縁壺に酷似するが，本地域の二重口縁壺の系譜関係については不明瞭な部分が多いため，現状では阿波系模倣と断定するまでには至らない。一次口縁は強く外反して開き，端部上面に二次口縁を載せて接合する。さらに，一次口縁外端面は強く外下方へ引き出される。14～16は甕。16は後述する甕Ｃで，口縁端部の拡張が乏しい後出形態である。14・15は「く」の字口縁甕であるが，14の口縁部形態には甕Ｃの影響を認める。17は高坏脚裾部の小片。明確な脚柱部を有さず緩やかに外反してラッパ状に開く形態



第25図　ＳＫⅡ38平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

は，下川津Ｂ類高坏のそれに近い。18～20は浅皿形態の小形鉢。18の口縁端部を内側へ鈍く摘み出す形態は，布留系甕のそれに近似する。21は中形鉢。本例も外反口縁を採用する。上記資料は，おおよそ布留式最古相併行期に位置付けられる。

ＳＫⅡ39（第26図）

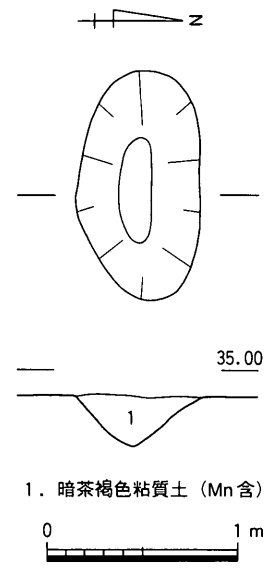
９区西半部で検出した土坑である。平面形は，長軸1.25m，短軸0.65mのやや不整形な隅丸方形を呈する。深さ0.28m，底面の標高は34.6m前後である。周壁は土坑中央に向けて緩やかに掘り込まれ，断面形はＶ字状を呈し，底面は明確な平坦面をなさない。埋土は暗茶褐色粘質土の単層であった。

遺物は，弥生土器小片が８点程度出土したのみである。出土した遺物から遺構の時期を特定することは困難であり，埋土の特徴等から当該時期に位置付けられるものと判断した。

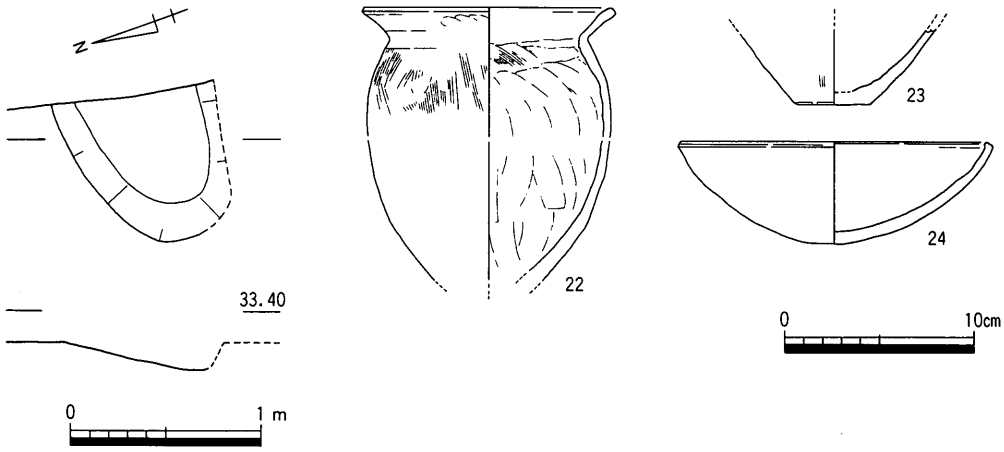
ＳＫⅡ44（第27図）

10ａ区第２面東壁際で検出した浅い土坑である。東半部は調査区外へ延長し，また南端付近を上位面のＳＤⅡ39によって損なわれており，全体形状は不明である。現状で，長軸0.85ｍ以上，短軸0.8ｍの東西に長い隅丸方形状を呈する。深さは0.1ｍ程度しかなく，断面形は浅い皿状を呈する。

遺物は，弥生土器小片が30～40点程度出土している。このうち３点を選んで図示した。22は「く」の字口縁甕。器壁の剝離が著しく，調整手法の観察は困難だが，辛うじて内面に斜め方向のハケ調整が確認される。23は甕底部であろうか。24は浅皿形態の小形鉢。口縁端部は鈍く内上方へ摘み出す。22の張りが弱く球形化が進展していない体部形状や，23のように明確な平底を呈する点から，布留式併行期までは下らないと考えられる。



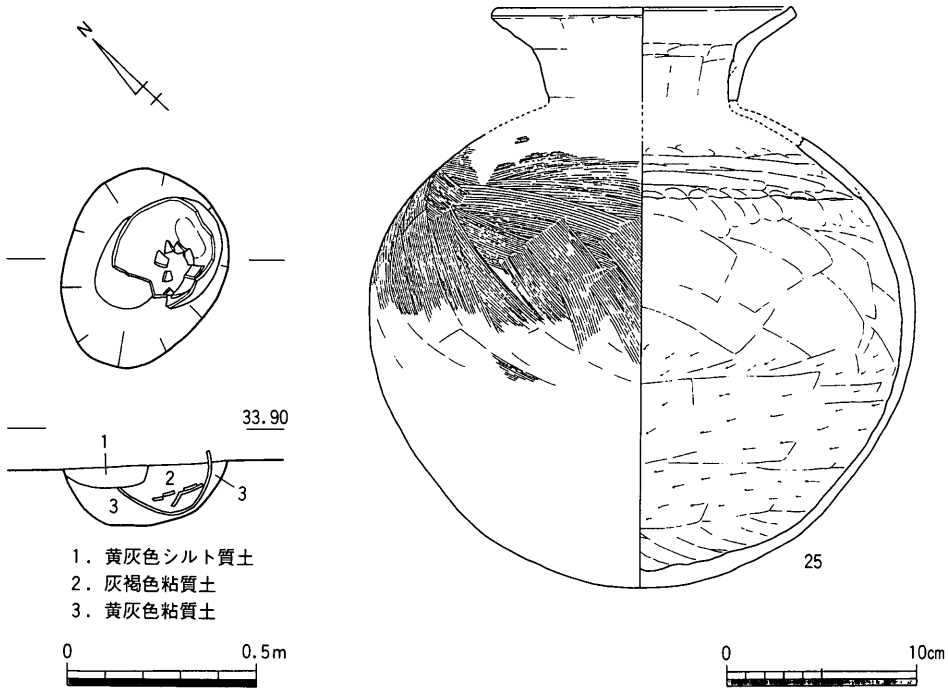
第26図　ＳＫⅡ39平・断面図（１/40）



第27図　ＳＫⅡ44平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

ＳＫⅡ45（第28図）

10ｂ区東半ＳＤⅡ38底面で検出した土坑である。谷７東岸に位置し，地山層を掘り込んで構築する。長軸0.5ｍ，短軸0.4ｍ，平面形はやや東西に長い卵形を呈する。深さは0.15ｍ程が確認され，断面形は逆台形状を呈する。土坑東半部より，底部を土坑東端に据え，西に傾いて弥生土器広口壺（25）が出土した。体部上半は，ＳＤⅡ38により削り取られ，



第28図　ＳＫⅡ45平・断面図（1/20），出土遺物実測図（1/4）

口縁部は小片が土器内部に転落して出土した。本来的に，同一個体のものである確証は得られなかったが，体部形状と違和感がないため同一個体として復元図示した。埋土は３層に細分された。下位層は，土坑掘削後土器を据えた際の埋め戻し土である。若干の地山層のブロック土が混入する。中位層は，土器内部に流入した埋土。上位層は，土器を一部壊して堆積しており，上位より掘り込まれた別遺構の埋土である可能性が高い。遺物の出土状況からすれば，土器棺墓である可能性もあるが，７ｂ区の土器棺墓群と比して，土器と土坑底面との間に間隙が大きく，土坑断面形状が土器形状を反映していない，つまり土坑と土器の関連が弱い点，単独で立地する点など相違点があり，土器埋納坑あるいは廃棄土坑として捉えておきたい。

遺物は，図示した25の他は，別個体の土器細片が数点出土したのみである。25は広口壺である。口頸部と体部が接合しなかったが，胎土及び上記出土状況より同一個体の可能性が高いと判断し図化した。頸部が外傾するタイプの広口壺で，弥生時代後期前葉以降在地系譜の壺として存続する。頸部は口縁部に比して短く，体部はほぼ球形を呈し，肩部には後述する東四国系甕に共通する右下がりのハケ調整が施される。上記諸特徴より，布留式最古相併行期前後に位置付けられると考える。

ＳＫⅡ46（第29・30図）

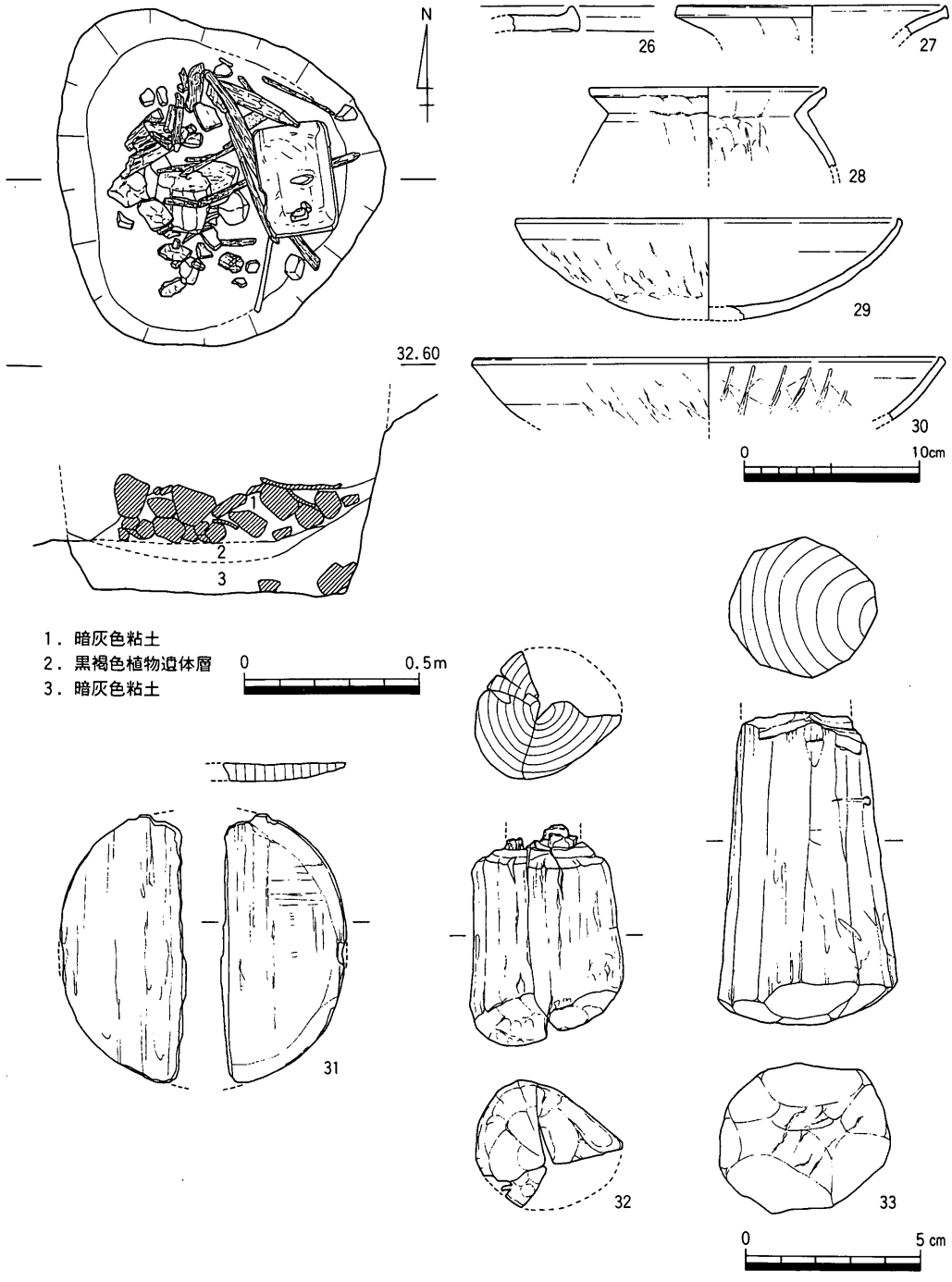
10ｂ区第２面谷７東肩斜面部で検出した土坑である。谷７中層掘削中に木製品がやや集中して検出され，周囲を精査してようやく土坑掘り方を検出したため，本来の掘り込み位置については明らかにできていない。しかし，土坑の検出レベルや谷７の堆積状況，遺物の出土状況などからすれば，谷７中層堆積以降に掘り込まれていた可能性が高い。平面形は径0.9m前後の楕円形を呈し，深さ0.45mを確認した。底面の標高は，31.95m前後となる。周壁は直に近く掘り込まれ，断面形は整った箱形を呈する。底面は径0.75m程の楕円形を呈し，平坦であった。

埋土は３層に細分された。上位層は暗灰色粘土層で，遺物の大半は本層より出土している。木製の泥除（36）は，土坑東寄りで凹面を上にして出土した。泥除の周囲からは，杭や棒状の木製品，自然木や20～30点程度の土器片が散在して出土したが，出土状態に特に意図的な配置は窺えなかった。遺物群の下位には多量の石礫が出土した。石材は，長径10～20cm程度の自然礫で，花崗岩系の石材を中心とした亜円礫である。極少量だが煤の付着する石材もあり，集落内で何らかの用途に使用されていたものも含まれている。この点は，後述する木製遺物の中に炭化材が含まれていたこととも関連するのであろう。遺物の大半は石材の上面より出土したが，一部は石材の間隙からも出土している。石材の下面が，中位層との境に相当する。中位層は，黒褐色を呈する草本類などの植物遺体の集積層である。層厚６cm程度で中央が厚く，レンズ状に堆積していた。本層からは，土器細片を除いてほとんど遺物は出土していない。下位層は，東壁側より傾斜して堆積する暗灰色粘土である。本層からも，少量の拳大程度の石礫を除いて遺物の出土は乏しい。石材は，上位層程大きくはなく，小礫を主体としている。

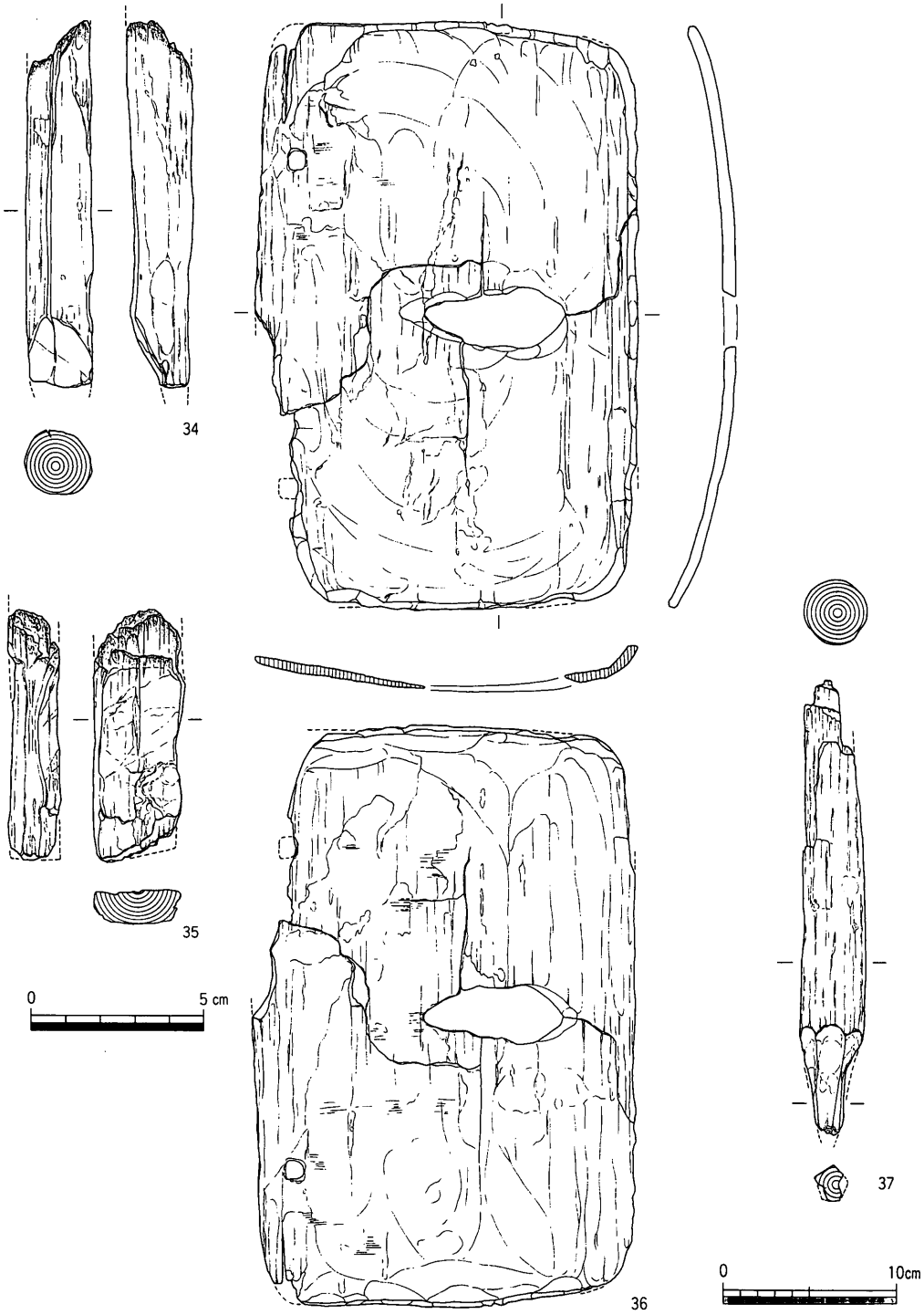
後述するように，本土坑構築時には谷７はほぼ埋没が完了し，その機能を喪失して低湿地状の窪地となっていた可能性が高い。また，土坑の掘削レベルは透水層に達するものではないが，谷部の伏流水によっておそらく土坑内は常時滞水下にあった可能性があり，埋土の状況もそうした想定と矛盾しない。本土坑の機能はそうした点から，井戸の可能性が高く，完形に近い状態の木製品が含まれる点を重視すれば，あるいは木器の貯蔵穴といった性格も想定可能であろう。

遺物は，12点を図示した。26・27は広口壺口縁部の小片と考える。26は強く口縁端部を上方へ摘み上げ，端面は内傾する。丸亀平野西縁域では端面への加飾が顕著だが，本地域を含めた東讃地域ではヨコナデ調整されるのみで加飾は乏しい。27は広口壺と考えたが，

小片のため甕口縁部の可能性も残される。端部は上方へ摘み上げられ，端面は直立する。28は「く」の字口縁甕。口縁端部は四角く納めつつ，上方へ僅かに摘み上げ，端面は直立する。頸部内面に強い稜を認める点は，本地域では少数派である。29・30は浅鉢形態の中形鉢。同形態の小形鉢と形態上の差異は乏しい。外面にはいずれも成形時のクラックを認め，30の内面は放射状に装飾的なミガキ調整が施される。31～37は木製品である。31は復元径８cm程度の薄い円盤状を呈する形態で，中央で半截している。周縁は斜めに削られ鈍く尖る。形状から蓋と考えるのが妥当であろう。32・33はほぼ同形態を呈する大小２種の不明品。32は芯持ち材が使用され，33は1/4分割された材を加工する。32は破損が大きくまた腐食が進行している。より残りのよい33は，上部径3.2cm，下端径5.1cmの側面台形状を呈し，横断面は多角形状に面取りされる。下端面は凸面状に丁寧に加工される。上端は欠損するが，周縁を細く削り込まれているようであり，柄状に加工されていた可能性が高い。全体的な形状は横槌と称されるものに近似するが，機能部（横槌の敲打部）の長さが大形の33でも８cm程と短く，また側面が丁寧に面取り加工される点からもやや躊躇される。34・35は一端に焼け焦げた炭化部分を有する棒状の木製品である。34は径1.9cm，長さ10.3cmの芯持ち材を利用し，一端を斜めに削り尖らせる。35は幅2.6cm，厚さ1.3cmの板状を呈し，いわゆる余り材を利用したと考えられる炭化材である。大きく欠損する一端が強く炭化する。36は横方向に走る木目と，厚さ0.8cmという薄い作りから泥除と考えられる。本遺構より出土した木製品の中で，唯一完形に近くまで復元される。平面形は，上辺32.7cm，下辺31.5cm，幅22.3cmの隅丸台形を呈する（小方孔のある方を上辺とする）。中央やや下方に柳葉形の柄孔を斜めに穿つ。横断面形は緩やかに湾曲した浅皿形を呈し，縦断面形も緩やかに湾曲するが，下辺が鈍く屈曲して斜めに1.5cm程立ち上がり縁状をなす。しかし，ある種の泥除にみられる蟻柄とは明確に異なる。周縁は方形に加工され，当然刃部は認めない。上辺左右には一辺1.2cm程の小方孔を各１孔穿つ。さて，本例は平面形状からは，泥除Ⅱ式（上原他1993）に属する。しかし，断面形状や，小方孔と柄孔の位置関係など，鍬・柄との接合に関わる重要な要素が大きく異なっており，既存の分類案にはなじまない。その系譜関係を含め類例を集めて再検討する余地が残される。37は芯持ち材を使用した杭である。先端部のみ五角形状に削り尖らせる。表面には樹皮が多く残され，加工痕は乏しい。上記資料及び遺構の検出状況から，布留式最古相併行期前後に位置付けられると考える。



第29図　ＳＫⅡ46平・断面図（１/20），出土遺物実測図１（１/４・１/２）

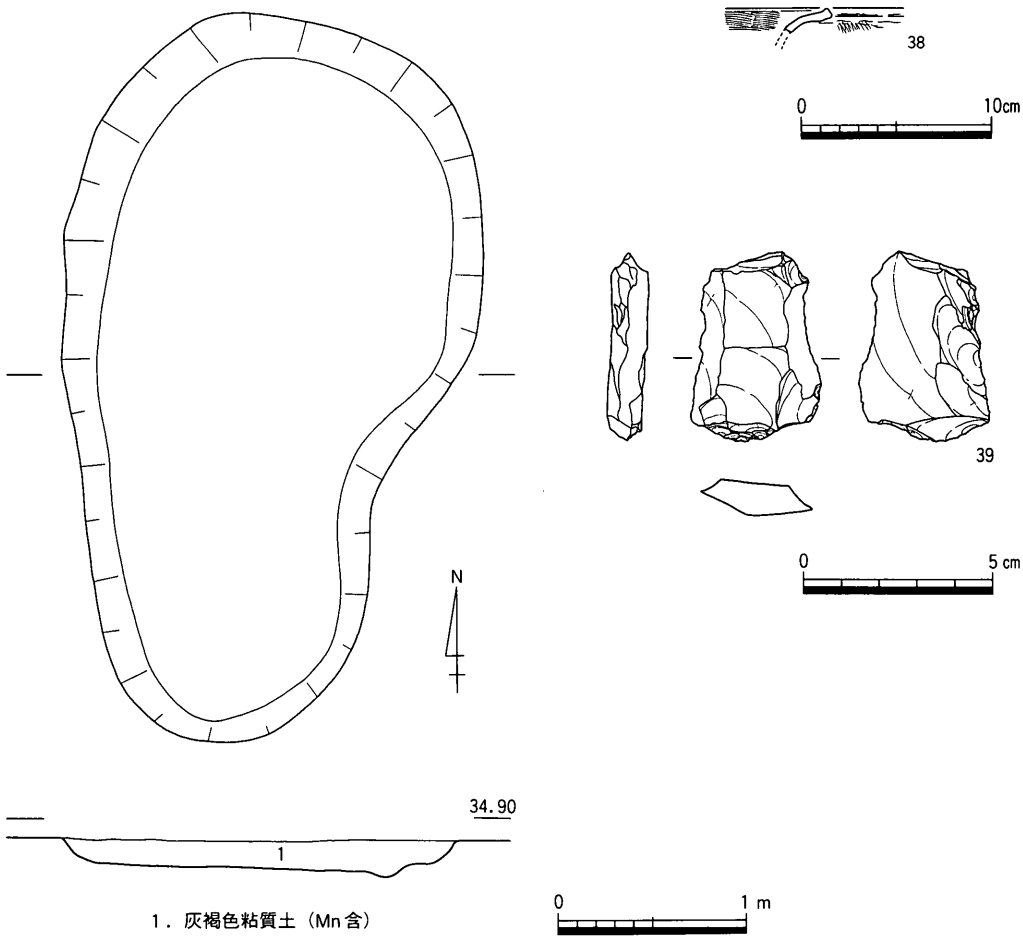


第30図　ＳＫⅡ46出土遺物実測図２（１/２・１/４）

ＳＫⅡ47（第31図）

11区中央部で検出した浅い土坑である。平面形は，長軸3.85m，短軸2.05mの南北に長いややいびつな長楕円形を呈する。残存深は0.2mと浅く，周壁は緩やかに掘り込まれ，断面形は概ね皿状を呈する。底面は緩やかに東に傾斜し，若干の起伏を認める。底面の標高は，34.60m前後であった。埋土は，灰褐色粘質土の単層である。平・断面形状に人為的な企画性は乏しく，自然地形の僅かな起伏に堆積した包含層の可能性も考えられる。

遺物は，図示した以外に，器形の判然としない弥生土器小片が20点程度出土したのみである。38は広口壺の口縁部とみられる小片である。外面には頸部より連続する縦ハケ調整が辛うじて認められる。39はサヌカイト剥片である。側縁に若干の連続した調整剥離を認める。

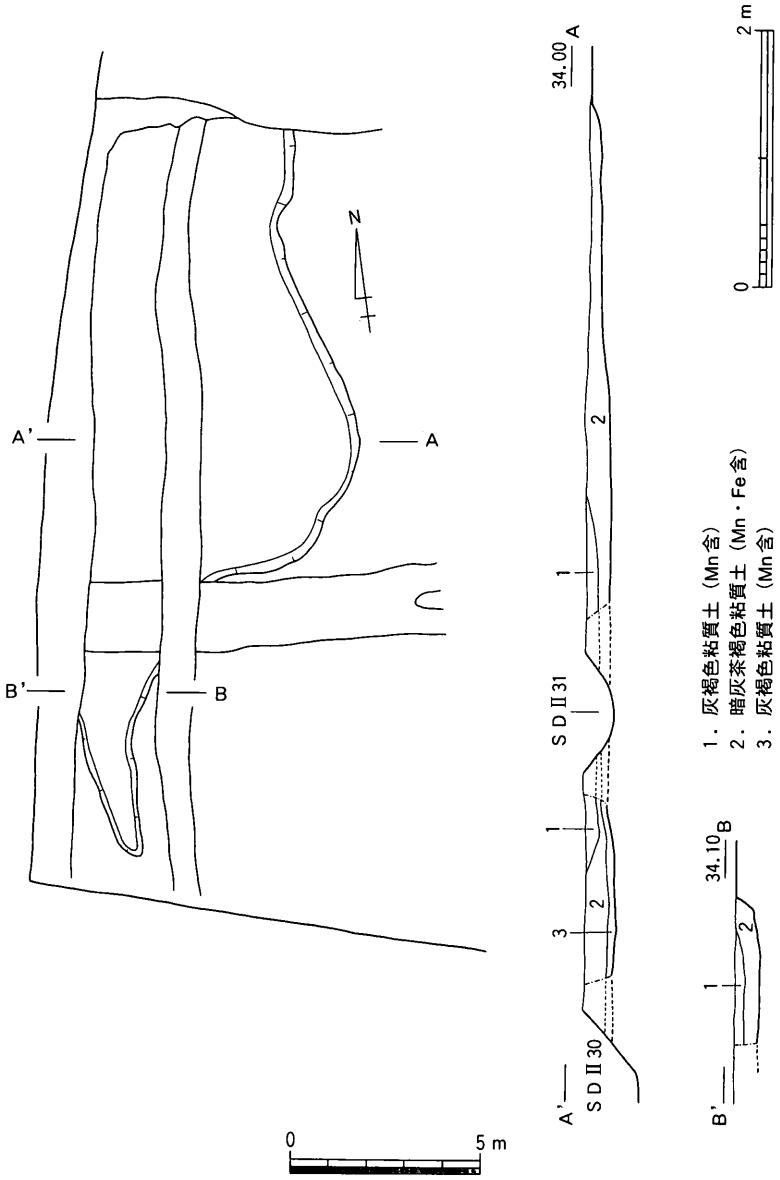


第31図　ＳＫⅡ47平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4・1/2）

不明遺構

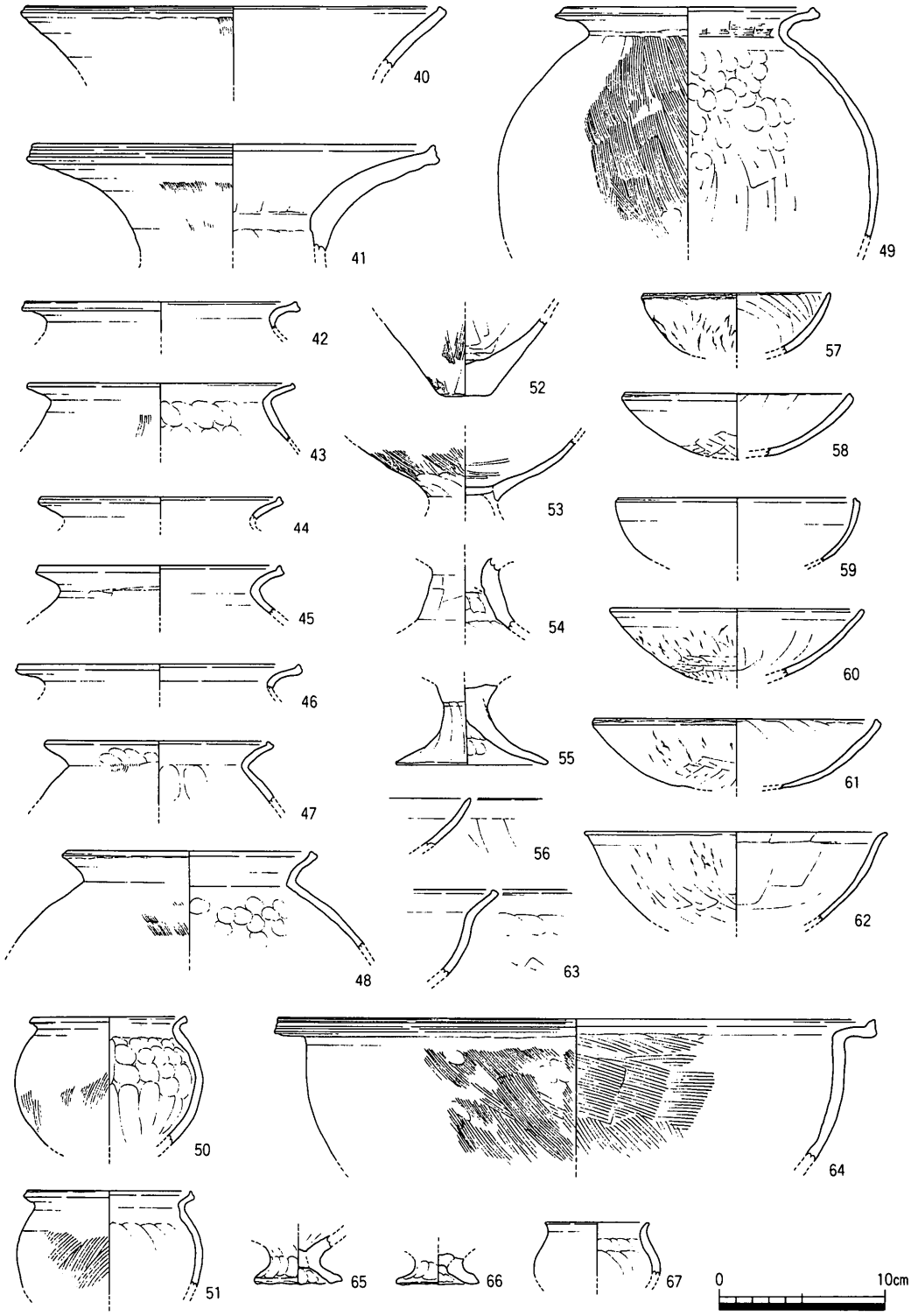
ＳＸⅡ21（第32・33図）

８区西壁際で検出した緩やかに北西方向に傾斜する浅い落ち込みである。ＳＢⅡ35及びＳＤⅡ12・30・31と重複し，いずれよりも先行する。北端部は旧水田面の造成により大きく削られ，延長部分は消失している。南端は舌状に突出し，底面は緩やかに南に向けて上昇する。形状から，人為的な溝状遺構との識別は容易である。東西幅7.0ｍ以上，南北長18.8ｍ以上を検出した。深さは0.2ｍ前後と浅く，東西断面は浅い皿状を呈する。底面の標高は，南端で33.9ｍ前後，北端で33.3ｍ前後と，0.6ｍの比高差をもって緩やかに下る。底面に顕著な起伏は認められない。平・断面形状共に，人為的な性格は乏しい。おそらく削平を免れて残存した，谷７東岸の緩斜面部に堆積した包含層の一部と考えられる。埋土は，灰褐色系粘質土が堆積し３層に細分された。



第32図　ＳＸⅡ21平面図（１/200）・断面図（１/60）

遺物は図示したものの他，弥生土器がコンテナ半箱程度出土している。器種としては，



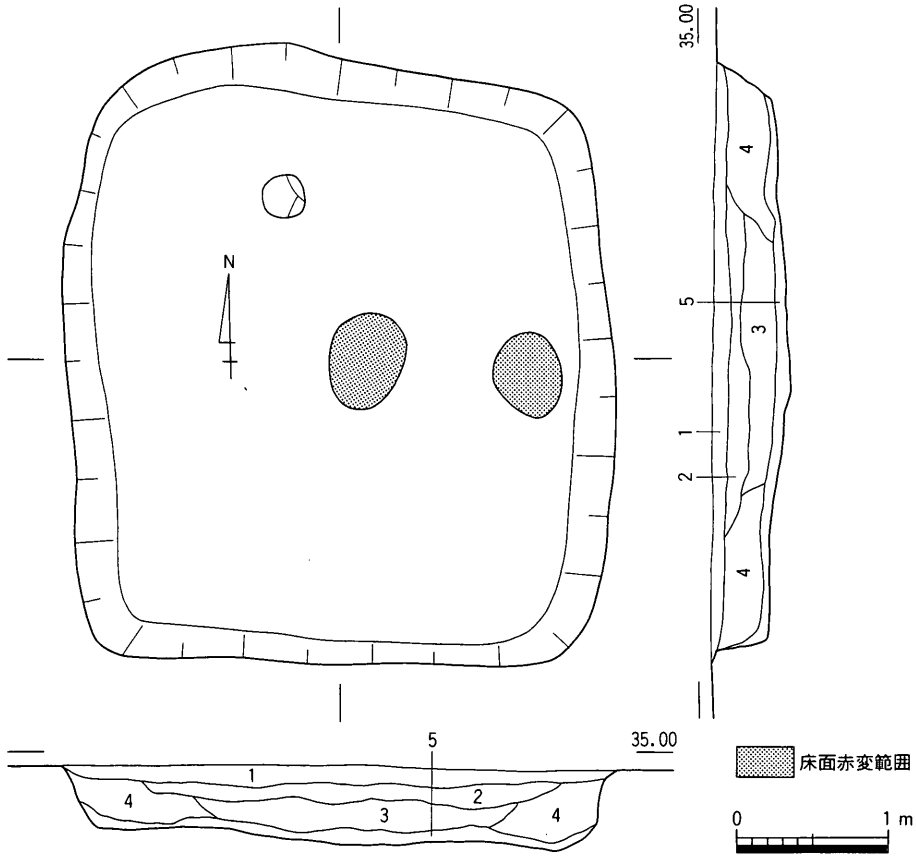
第33図　ＳＸⅡ21出土遺物実測図（１／４）

甕・小形鉢が多く，高坏は少ない。壺は広口形態に限られる。28点の遺物を図示した。40・41は広口壺である。40は緩やかに外反して開く口縁部形態を呈する。在地での系譜関係は明確ではないが，庄内式最新相併行期には少なくとも出現しており，外反度を弱めつつ布留式併行期には一定量存在する。41は在地系譜の広口形態。拡張された口縁端面には，２条の鈍い凹線文を施す。42～51は甕である。このうち42は下川津Ｂ類甕，43～49は後述する甕Ｃ及びその一定程度の影響を想定しうる在地系の甕である。42は，口縁部が短く端部の摘み上げも弱く，頸部内面の稜は丸味を帯びてナデ付けられており，Ｂ類甕の中では最も後出する形態と考える。43以下の甕Ｃ形態とは供伴することはないと考えており，混入の可能性が高い。一方，甕Ｃのうち，口縁端部は肥厚しつつ上方へ摘み上げ，内傾する端面に凹線ないし沈線状の装飾を施し，頸部内面に鈍いながら稜を認める49のような形態は，緩やかに外反して端部を上方へ摘み上げるのみの43・44・46・47等に比してやや古く位置付けられる可能性がある。なお，43は胎土中に黒雲母細粒を多量に含み，第３章に後述する胎土３類に属する。50・51は小形甕である。いずれも球形体部に，極度に矮小化した口縁部を有する。口頸部形態には甕Ｃの一定程度の影響を認める。さて，本例のような口縁部形態の甕は，香川県六条上所遺跡ＳＫ01（北山1995），徳島県黒谷川郡頭遺跡ＳＥ101（菅原1987），同ＳＤ302（菅原他1989）等に認められ，布留式最古相併行期を中心に一定程度の盛行をみるようである。52は甕底部と考えるが，本形態のような厚い平底を呈するものは，当該時期までは残存しない可能性が高い。53～55は高坏と同脚部。53の坏底部の充塡法は，下川津Ｂ類高坏に伝統的な手法であり系譜関係を想定しうる。54は脚柱部より鈍く屈曲して裾部が開く脚形態。一方，55は緩やかにスカート状に裾部が開く形態で，形状から小形高坏ないしは器台脚部の可能性が考えられる。56～61は浅皿形態の小形鉢である。底部付近まで残存する58・60・61では，その部分へのケズリ調整が認められる。また，いずれも外面は口縁部付近がヨコナデ調整されるのみで，それ以外は成形時のクラックを多く残し仕上げ調整が省略される傾向にあるのに対して，内面はハケ・板ナデ・ヨコナデ等により比較的丁寧に器面が整えられる。62も浅皿形態の中形鉢である。僅かに外反する口縁部を除いて，上記小形鉢と形態や調整手法は異ならない。63・64は外反口縁形態の大形鉢である。63は小片のため中形鉢となる可能性も残されるが，通有の中形鉢と比してやや口縁部が長く伸びるため，大形鉢としておく。64は強く折り返して水平に開く口縁部に特徴を有する。口縁端部は強く上方へ摘み上げ，端面には２条の凹線文を施す。最古形態の甕Ｃの口縁部形態に通じ，おそらくはその影響下に成立したものであろう。類例は多く

はない。65・66は製塩土器脚部。脚部の成形手法は両者で異なり，65では脚部と体部を一体に成形した後，脚中央部の空隙に下方より小粘土塊を充塡する。一方，66ではあらかじめ成形しておいた体部に脚部を接合するようである。両者の相違は胎土にも及び，65は66に比して石英・長石中粒を多量に含む粗い粘土が使用されている。なお，時期的には両者に顕著な相違はなく，大きく開いた脚部形状から，大久保編年Ⅳａ式（大久保1992）に相当する。67はミニチュア土器である。内外面ヨコナデ等により比較的丁寧に調整される。上記出土資料は一部を除いて，ほぼ布留式最古相に併行すると考える。

ＳＸⅡ22（第34～36図）

９区中央で検出した大型の土坑である。上面より中世に下る柱穴数基が掘り込まれている以外は，遺構の重複はない。平面形は，東西3.6m，南北3.9mのやや南北に長い隅丸長



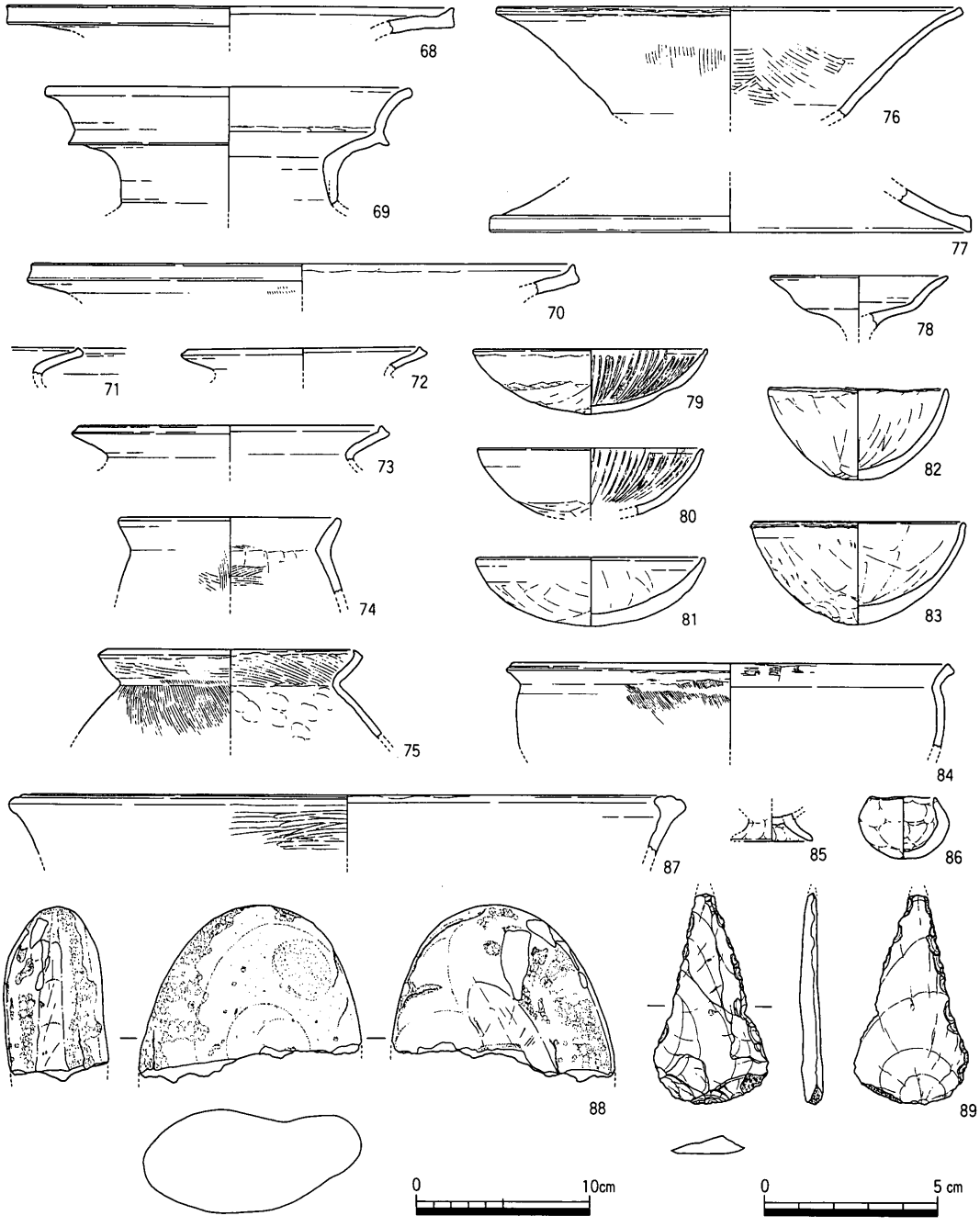
1．灰茶褐色粘質土（Mn含）　2．暗灰褐色粘質土（Mn含）　3．暗灰褐色粘質土（小礫多含）
4．灰茶褐色粘質土（Mn含）　5．暗褐色粘質土（焦土・炭多含）

第34図　ＳＸⅡ22平・断面図（１/50）

方形を呈する。残存深は約0.5mとやや深く，底面の標高は34.4m前後を測る。周壁は直に近く掘り込まれ，底面は最大10cm前後の起伏をもつがほぼ平坦で，断面形は整った箱形を呈する。床面中央付近には，径約0.5m程に被熱による地山層の赤変部分が確認された。また，柱穴や土坑状の掘り込みは，床面では一切確認されていない。床面からは土器片が散在して出土し，やや北寄りで径29～35cm程の板状の砂岩礫（90）が，床面より僅かに浮いて据えられたように出土している。若干の殴打痕を除いて明確な使用痕は認められない。石材表面は被熱により全体に弱く赤変しており，本来的に土坑に伴う可能性が高い。

埋土は5層に細分され，3層に大別した。下層（5層）は，土坑床面に広く堆積した焦土や炭粒を多量に含む暗褐色粘質土である。床面では層厚10cm程度でほぼ均質に堆積し，周壁際では壁面に沿って内側に傾斜する。特に南壁では，本層は土坑上面付近まで立ち上がる。層上面は，床面の起伏に合わせて若干の凹凸を認めるが，人為的な掘り込みの痕跡は顕著ではない。なお，本遺構に伴う遺物の大半は，本層より出土したものである。中層（2～4層）は，土坑周壁より中央に向かって擂鉢状に堆積した下位層（4層）と，その中央部を埋める上位層（2・3層）に2分される。3層は近似した灰褐色系粘質土で，土坑廃棄後の自然堆積層と考えられ，周壁部より徐々に埋没が進行したことが想定される。さらに，土坑上面を覆う上層（1層）により，本土坑は埋没が完了する。

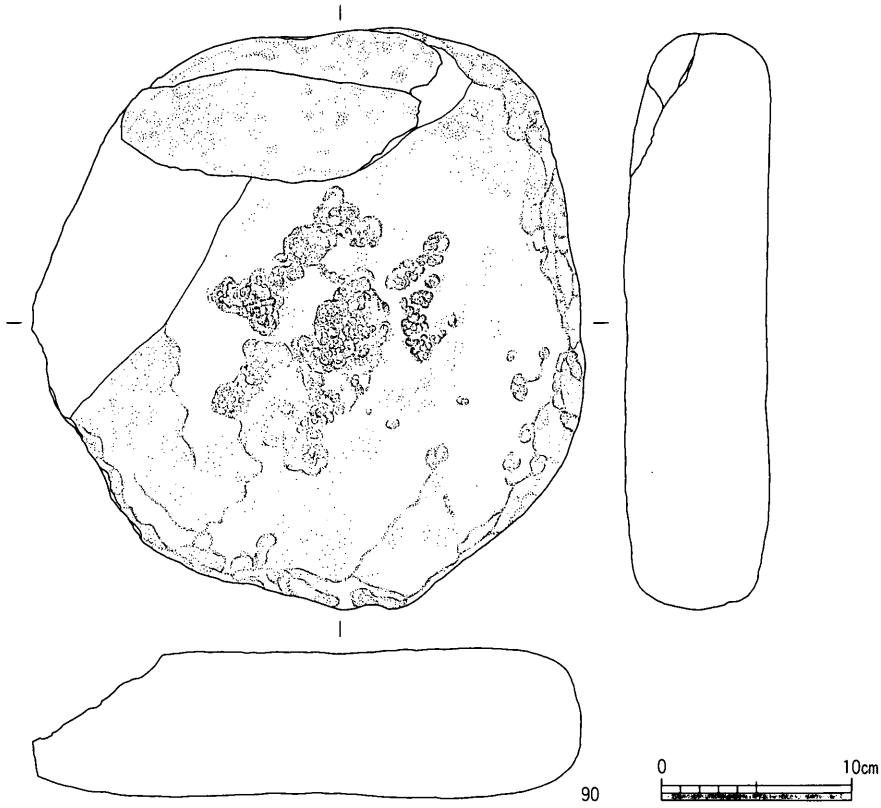
遺物は，主に下層より出土している。23点を図示した。68・69は上層，88は中層，その他はすべて下層出土の遺物である。68は広口壺口縁部小片。口縁端部は上方へ強く摘み上げられるが，拡張された口縁端面への加飾は乏しい。69は二重口縁壺。前記13とほぼ同形態を呈するが，本例の方が一次口縁長がやや長い。70は大形広口壺口縁部小片。基本的な形状は68と大差ない。71～75は甕。このうち71～73は甕C口縁部。71・72の口縁端面は，通有形態に比して強く内傾する。74は「く」字口縁甕。75のような口縁部が内湾し，端部を内上方へ摘み出す傾向は，布留系甕の影響を想定すべきかも知れない。しかし，他の形状や調整手法は在地系統を踏襲する。76は坏部中位で屈曲する高坏坏部片。坏上半部は外反しつつ大きく開く，弥生後期終末期以降の系譜を引く形態である。当該時期においても，高坏の多量化は達成されていない。77は高坏脚裾部として図化したが，小片でありかつ器表面の剥落も著しく，広口壺口縁部等別形態となる可能性も残される。高坏とすれば，大形品となる。78は小形高坏坏部である。特殊形態であり，類例は乏しい。79～81は浅皿形態，82・83は小碗形態のそれぞれ小形鉢である。前者では，底部はケズリ調整される79・80と，板ナデ調整で終える81の2者がある。本例ではケズリ調整される前者にのみ，内面に



第35図　ＳＸⅡ22出土遺物実測図１（１/４・１/２）

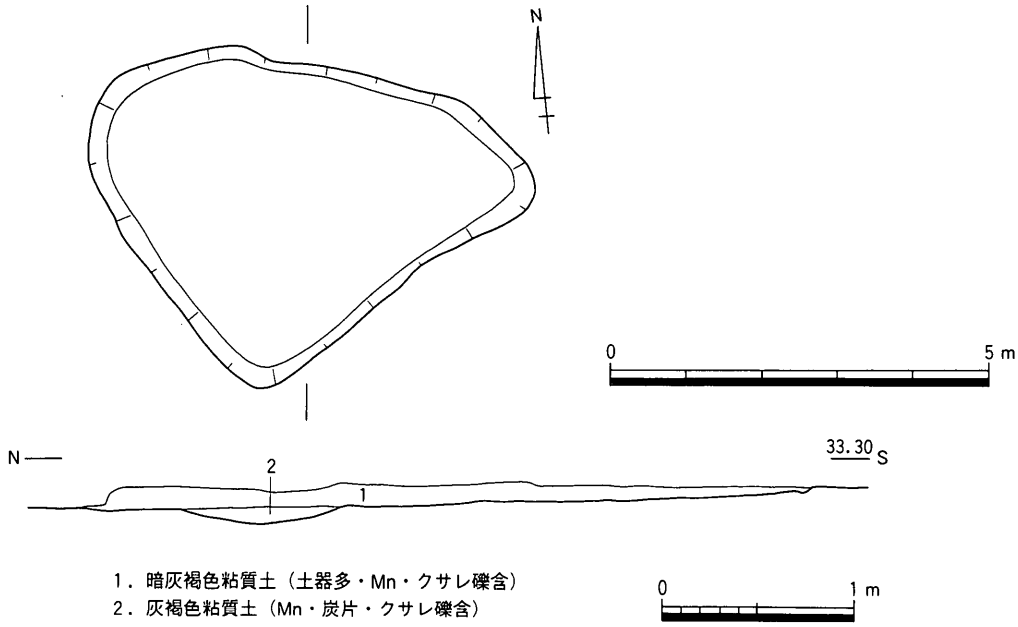
放射状のミガキ調整が施される。後者の小碗形態の小形鉢でも，底部外面はケズリ調整が卓越する。84は外反口縁形態の中形鉢。口縁端部は四角く納めつつ，僅かに下方へ引き出す点は，ある種の大形鉢のそれに通じる。なお，倍率数十倍程度の実体顕微鏡下での観察

ではあるが，口縁端面にベンガラとみられる赤色顔料の塗布がみられた。85は大久保編年Ⅳａ式の製塩土器脚部片である。先の65同様，小粘土塊で下方より脚中央部を充塡する。86はやや扁平な小球状を呈するミニチュア土器。器壁は厚く，内外面は指頭圧痕が明瞭に残る。87は縄文土器深鉢。口縁端部は内外に肥厚し，端面には２条のヘラ描き沈線文を施す。縄文時代後期中葉前後に位置付けられよう。胎土は一定量の石英・長石粒と，微量の黒色細粒及び火山ガラスを少量含む粘土が選択されており，本遺跡出土の弥生時代後期終末前後の一般的な土器胎土とはやや異なる。88は砂岩製の砥石。本来的には長円形を呈すると思われるが半截しており，また全体的に被熱によるためか赤変している。一側面と正面中央部に使用による擦痕が認められ，特に側面の使用が顕著である。89はサヌカイト製の縦長剥片を素材とする。三角形状を呈し，側縁に連続した調整剥離を認め石鏃未製品の可能性がある。90は土坑底面より出土した厚さ7.3cm，長軸35.0cmの六角形状を呈する砂岩製の台石と考える。上面には敲打痕とみられる僅かな窪みが観察され，また裏面を中心に一部に擦痕を認め石目が鈍く潰れるが，使用は顕著ではない。また，裏面を中心に被熱により赤変しており，一部薄く層状に剥離する。



第36図　ＳＸⅡ22出土遺物実測図２（１/４）

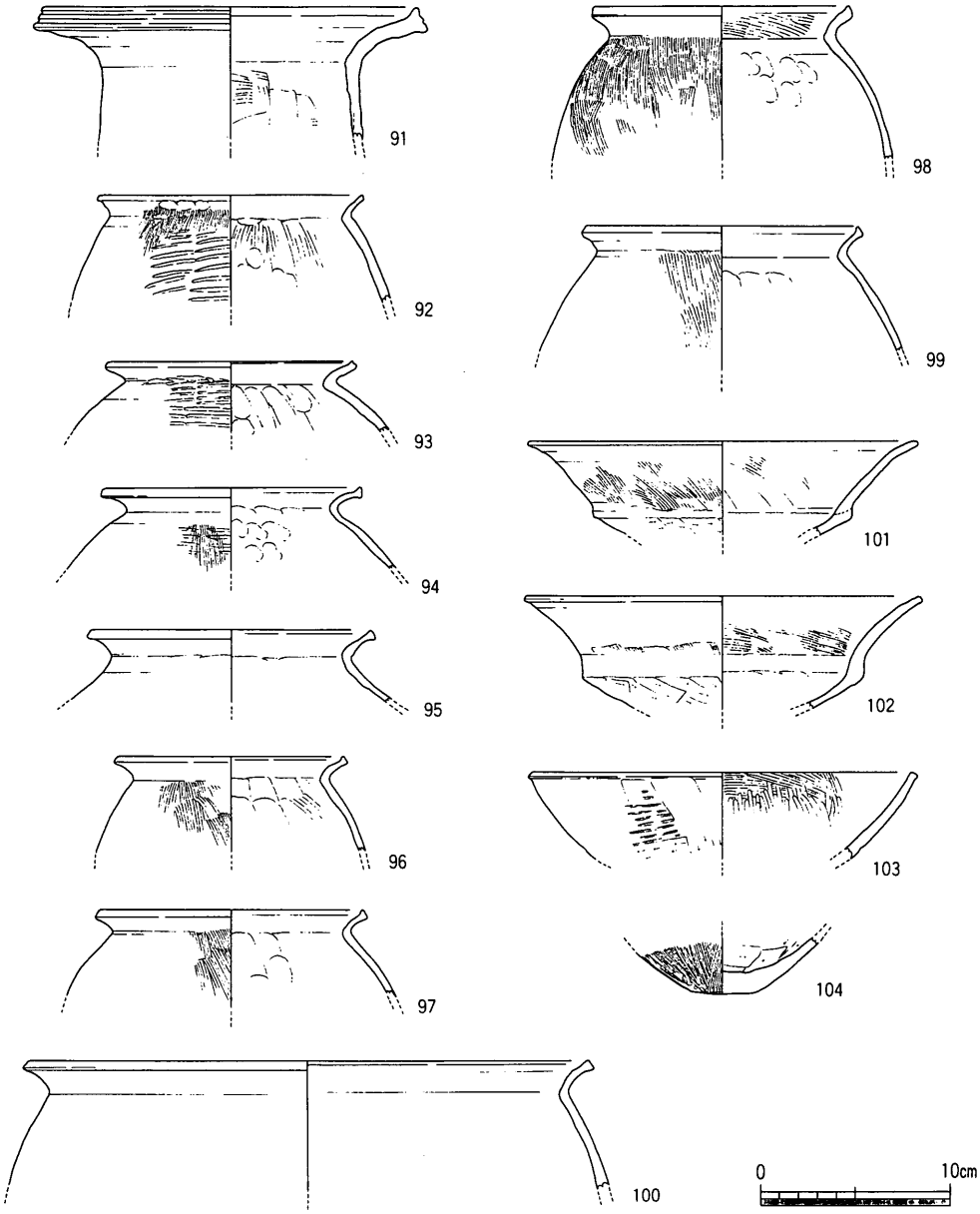
ＳＸⅡ23（第37・38図）



第37図　ＳＸⅡ23平面図（１/100）・断面図（１/40）

10ａ区第２面谷７西岸微高地部で，第２面の包含層掘削中に検出した浅い落ち込みである。平面形は，東西5.9m，南北4.4mの不整形な隅丸三角形状を呈する。深さは0.18mと浅く，断面形は概ね皿状を呈する。底面は若干の緩やかな起伏を有しており，北半部がやや深くなる。底面の標高は32.95m前後であった。埋土は灰褐色系粘質土が堆積し，２層に細分されたが大差はない。遺物は，上位層から特に多く出土している。平・断面形状からすれば，人為的な性格は乏しく，地山面上の僅かな窪地に堆積した包含層の一部と考えられる。

遺物は，壺・甕・高坏・鉢等の小片がコンテナ１箱程度出土した。遺物は細片が多く，また器表面は剝落したものが多い。15点を図示した。91は広口壺口頸部片。上下に拡張された口縁端面には，鈍い２条の凹線文を施す。口縁端面への多条の凹線文の施文は，広口壺を中心として阿波吉野川下流域に盛行したことが知られており，阿波からの一定程度の影響を想定すべきかも知れない。92～100は甕。92・93は「く」字口縁甕である。本地域では体部外面に施されたタタキ痕跡をハケ調整で丁寧に消すものが一般的だが，本例のようにタタキ痕をとどめるものも粗製の甕を中心に一定量認められる。また，93のように口縁部を強く外反させ，端部を上方へ摘み上げる形態は，甕Ｃからの一定の影響を想定すべ



第38図　ＳＸⅡ23出土遺物実測図（１／４）

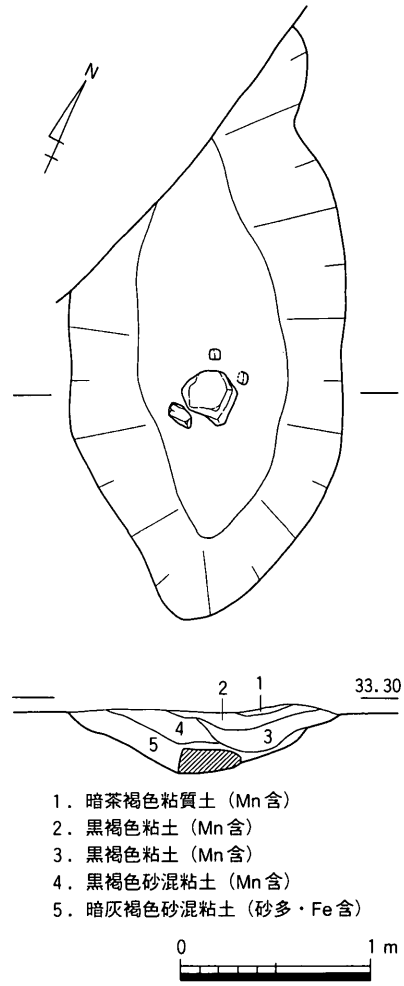
きであろう。94・95・99は甕Ｃ。94の体部外面には辛うじてタタキ痕を認めるが，甕Ｃにあっては少数例であり，外出するものではない。96～98も典型的な甕Ｃ形態ではないが，口縁部を中心に一定程度の影響が想定される。なお，97のような矮小化した口縁部形態の甕は，布留式最古相併行期前後の本地域において一定量認められる。100は大形甕として図化した。しかし，口縁部は焼成時のひずみが大きくまた小片でもあり，あるいは大形鉢

となる可能性も残る。101・102は坏部中位で屈曲する高坏坏部。在地系統の高坏であり，坏下半部外面には下川津Ｂ類高坏と共通する横方向のケズリ調整が認められる。しかし，Ｂ類高坏に一般的にみられる四分割のミガキ調整は省略され施されていない。103は浅鉢形態の中形鉢。外面にはタタキメ痕を明瞭に残し，外型成形以外の成形法による。量的には多数を占めるものではない。104は甕底部であろうか。器壁はやや分厚いが，張りのある体部形状や外底面へのハケ調整は「東阿波型甕」の影響を想定すべきか。上記した資料は，概ね布留式最古相併行期に位置付けられると考える。

ＳＸⅡ24（第39・40図）

８区西端部で検出された土坑状の落ち込みである。ＳＤⅡ27より後出する。西端部をＳＤⅡ29によって損なわれているため，全体形状は不明である。現状で，長軸3.0m以上，短軸1.45mの東西に長いややいびつな楕円形状を呈する。深さは0.35mを測り，断面形は緩やかに掘り込まれた皿状を呈し，底平坦面は明確ではない。底面の標高は32.90mであった。埋土は５層に細分され，２層に大別された。上層（１～３層）は，土坑東半部を中心に堆積する黒褐色系粘土である。明らかに上面より掘り込まれ堆積しており，再掘削後に堆積した土層と考えられる。平面プランのいびつな形状も，こうした再掘削によるものと考えられるが，下層との差異が明瞭ではなく，平面上の範囲は捉えられなかった。出土した遺物に顕著な時期差は認められず，短期間の内に埋没，再掘削がなされたと考えられる。下層（４・５層）は，黒褐色系粘土で上層に比して砂の混入が著しい。滞水下での堆積も考えたが，確証は得られなかった。

遺物は主に下層より出土している。石製品１点のみ図示した。105は土坑中央底面に接して出土した砂岩製の砥石である。使用面を上に，ほぼ水平になるように出土しており，意図的に据え付け



第39図　ＳＸⅡ24平・断面図（１/40）

られた可能性も考えられる。上面には主に2方向の顕著な擦痕が認められるが，石材表面の凹部には明確な擦痕が及ばず自然面が残される。おそらくは大形の製品の研磨に使用されたものと考えられ，また使用頻度も低かったのではないかと思われる。その他，弥生土器小片が20～30点程度出土している。器種は，甕・小形鉢が多く，他に小形丸底土器などが数点認められるに過ぎない。時期を特定することは困難だが，布留式最古相併行期ないしはそれを若干遡るものと考えられる。

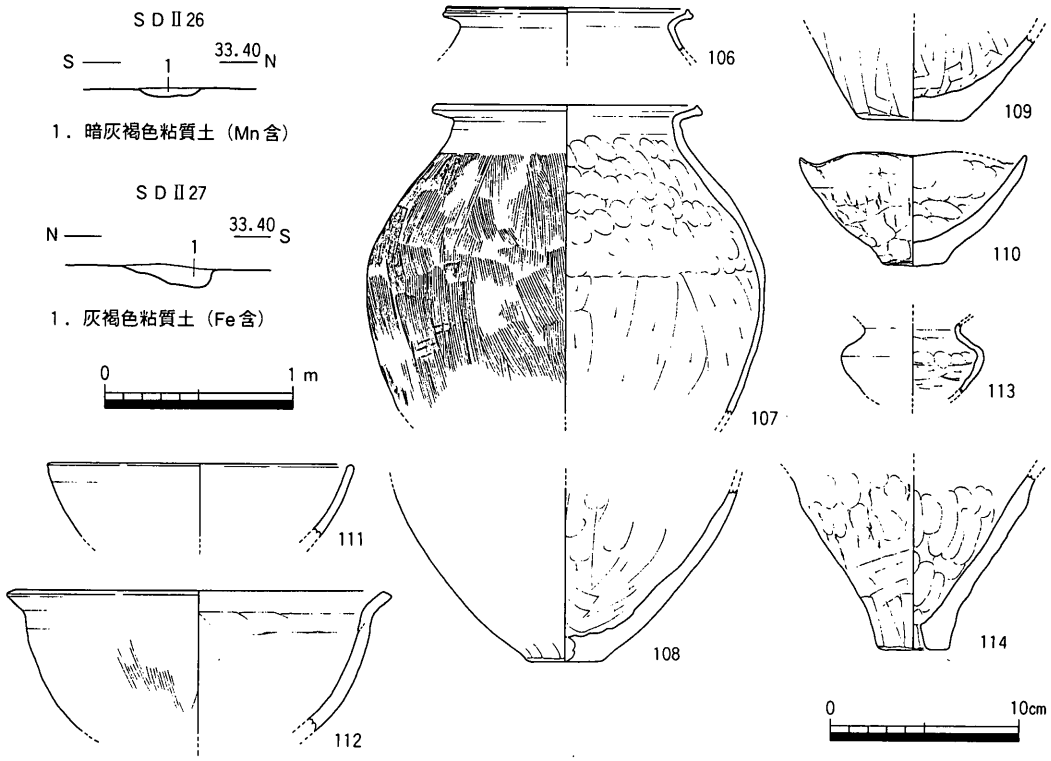
第40図　ＳＸⅡ24出土遺物実測図（1／4）

溝状遺構

ＳＤⅡ26・27（第41図）

8区北部で検出した溝状遺構である。上面は，旧水田面の造成により大きく削平を蒙り，溝底部分が辛うじて確認されたに過ぎない。位置関係や埋土の特徴より，本来は一連の溝であったと考えられるが，約8.6mに亘って途切れているため別々の溝として報告する。東側の溝をＳＤⅡ26，西側をＳＤⅡ27とする。ＳＤⅡ29，ＳＸⅡ24と重複し，いずれよりも先行する。

ＳＤⅡ26は，幅0.3～0.5m，深さ0.05m，底面の標高33.25m前後，流路方向N70.0°



第41図　ＳＤⅡ26・27断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

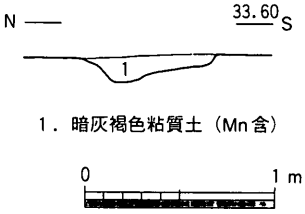
Ｅで，直線的に南西方向に流下する。北端部は幅1.9mとやや膨れ，また底面も0.1m程深くなって土坑状を呈する。埋土に顕著な相違は認められず，溜まり状を呈していたと考えられるが，その性格は特定できない。ＳＤⅡ27は，幅0.5m，深さ0.1m，底面の標高33.16m前後である。埋土は，両溝共灰褐色粘質土の単層であった。位置関係より，谷７に向けて掘削された排水路と考えられる。

遺物は，壺・甕・鉢・高坏の他，サヌカイト剥片が少量出土した。器種としては，甕が多数を占める。図化した資料はすべて，ＳＤⅡ26から出土した遺物である。106～108は甕。106は口縁部小片だが，下川津Ｂ類甕の模倣形態と考える。107は下川津Ｂ類甕である。短い口縁部と端部の摘み上げは弱く，頸部内面の稜は鋭さを欠き，さらに張りのある体下半部の形状から，Ｂ類甕の中でも最も後出する形態であることは間違いない。108は甕底部と考える。小さな平底と張りのある体部より，107とほぼ同時期として無理はない。109は安定した平底を呈するが，下川津Ｂ類土器の模倣と考えられる。110は粗製の小形鉢である。突出した平底形態を呈し，他の遺物と比してやや古い様相を残す。外面には成形時の

クラックが認められ，本例も内型成形の可能性が高い。111も小形鉢。112は外反口縁形態の中形鉢。外面はハケやケズリ調整によって，比較的丁寧に仕上げられる。113は下川津B類の小形丸底土器である。本遺跡では本例１点のみ出土しており，搬入量は乏しい。体部は扁平・小型化しておらず，107よりは若干古く位置付けられる可能性がある。114は底部穿孔鉢。突出した小さな平底に穿孔する本例のような形態は類例に乏しく，編年上の位置付けに苦慮するが，胎土の点では本遺跡の当該時期の一般的な土器胎土に共通し，107等と同時期と考えて大過ないだろう。上記資料は，概ね大久保編年下川津Ⅴ式（大久保1997）を前後する時期に位置付けられると考える。

ＳＤⅡ53（第42図）

10ａ区北西部，谷７東岸で検出された小溝である。東側微高地より谷７に流下する溝で，谷７に向けて徐々に幅と深さを増す。幅0.7m，深さ0.15m，底面の標高32.8m前後で，断面形は溝北半部がやや深くなる不整形な逆台形状を呈する。延長は僅かに1.5m程を検出したのみであるが，平・断面形状より人為的な溝とは考え難く，雨水等の流下に伴い，地山面が浸食され形成されたものであろう。おそらくは谷７の埋没が進行していない，谷７下層ないしは中層段階に形成されたものと考えられる。埋土は暗灰褐色粘質土の単層であった。

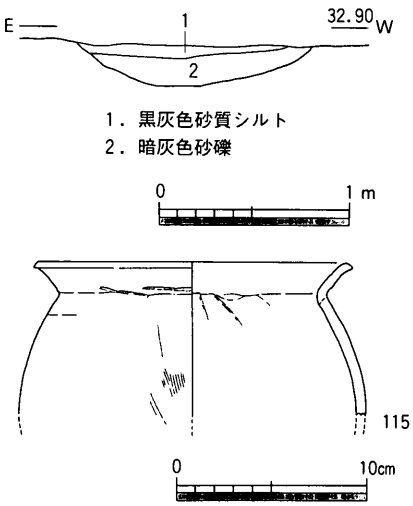


第42図　ＳＤⅡ53断面図（１/40）

遺物は，弥生土器甕等の小片が20～30点程度出土したのみである。

ＳＤⅡ56（第43図）

10ａ区北端部で検出した溝状遺構である。谷７最上層によって，谷７との合流部付近が一部削られている。谷７西岸より分岐して，丘陵Ｅより連続する微高地を横断するように南北に検出された。幅1.25m，深さ0.2mを測り，断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は32.6m前後で，谷７との合流部付近までほぼ一定し，検出長が短いこともあって，流下方向は明確ではない。埋土は，２ないし３層に細分され，下位に流水下の堆積が想定



第43図　ＳＤⅡ56断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

される灰色系砂礫層が，上位に黒色系のシルト層が堆積する。本溝の開削時期は，位置関係や溝底のレベル高，後述する出土遺物より判断して，おそらく谷７中層堆積時になされた可能性が高い。谷７より取水し，微高地を横断して設けられた給水路と判断されるが，谷７の埋没状況から判断して，比較的短期間で廃絶したと推定される。なお，本溝に伴う取水施設は谷内部では確認されていない。

遺物は，甕等を中心とした土器小片が10点程度出土したのみである。１点のみ図示した。115は溝北半部より出土した「く」字口縁甕である。口縁端部は四角く納めつつ，下方へ鈍く摘み出す。出土遺物から時期を特定することは困難だが，上記した谷７との関係から，布留式最古相併行期かそれをやや遡る時期に位置付けられると考える。

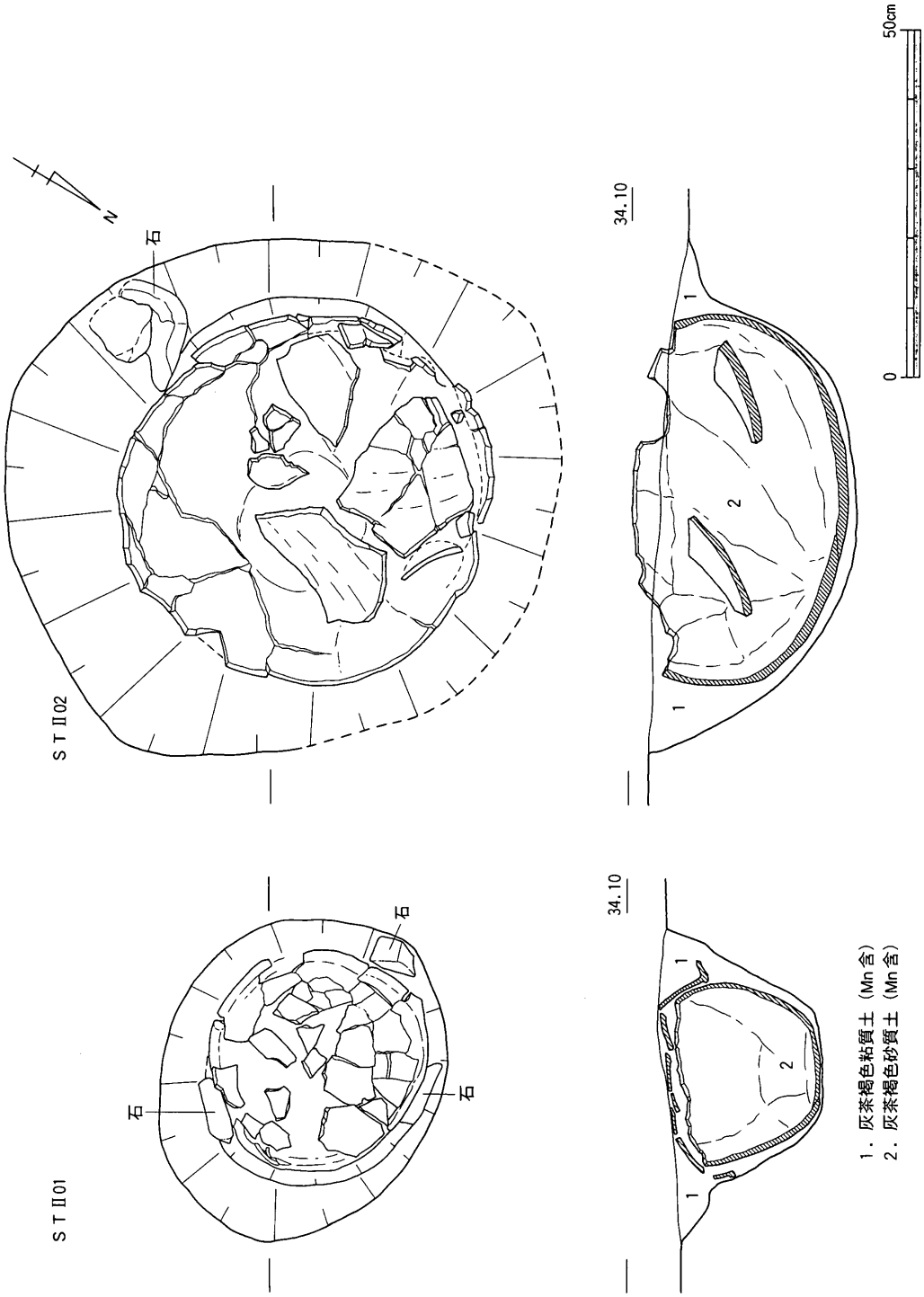
埋葬遺構

ＳＴⅡ01（第44・45図）

７ｂ区北西部で，南北方向に３基並んで検出された土器棺墓群の内，最も北に位置する。掘り方の平面形は，長軸0.47ｍ，短軸0.4ｍの東西に長いいびつな楕円形を呈する。断面形は，東縁部上半0.06ｍ程がやや緩やかに掘り込まれテラス状を呈するが，それ以外は概ね60°程の傾斜でもって掘り込まれ，底面は径0.15ｍ程の平坦面をなす。残存深は0.24ｍを測り，底面の標高は33.81ｍであった。

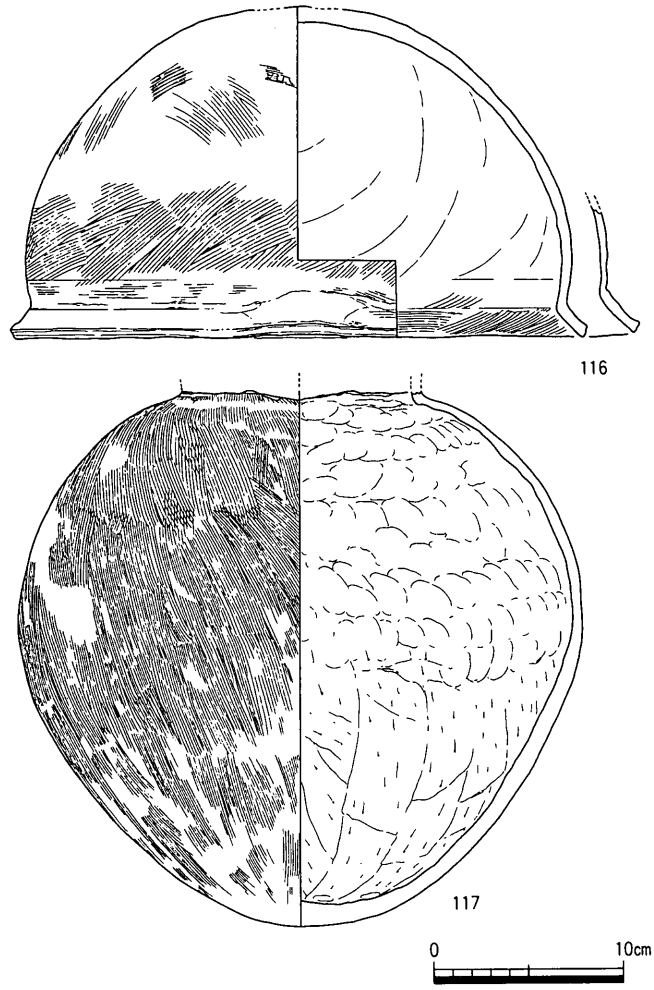
棺は，口頸部及び肩部の一部を打ち欠いた中形の壺を身として，土壙掘り方中央に壁面に接するようにやや斜めに傾けて据え，ほぼ完形の大形鉢を被せて蓋としていた。土壙平面形が楕円形を呈するのは，倒卵形を呈した壺の形態を反映しているのであろう。また，土壙上面まで削平が及んでいたが，大形鉢は土圧によって破砕し棺身側にやや落ち込んで出土したため，他の土器棺墓と比して残りはよく，本来の形状を窺うことができた。棺身の周囲からは，棺身を据え付ける際，棺の安定のために３箇所に置かれた拳大程度の礫が出土している。いずれも棺身上縁付近から出土しており，棺身を据え付け周囲を掘削土で充塡し，礫を置いて棺身を固定し，最後に蓋を被せて埋め戻したものと考えられる。棺内には，地山層に近似した灰茶褐色砂質土が流入していたが，人骨を含め副装品などは一切出土していない。

遺物として土器棺２点を図示した。116は蓋に利用された大形鉢，117は棺身の壺である。116は外反口縁の大形鉢で，口縁部の一端を強く押さえて片口となす。体部は球形を呈するが，頸部屈曲が弱い点からすれば，布留式古相にまで下るものではない。117は頸部以



第44図　ＳＴⅡ01・02平・断面図（1/10）

上を打ち欠いており，口頸部形態は不詳である。ただし，辛うじて残存する頸基部の屈曲から，頸部は直立して立ち上がるようであり，本地域通有の広口壺となる可能性が高い。体部は倒卵形を呈し底部丸底である。外面は右下がりの細かなハケ調整され，内面はケズリ調整の後上半部は指頭圧痕が明瞭に残される。大形鉢と共に，布留式最古相併行期に位置付けられるものと考える。なお，埋土中より壺口縁端部と推定される土器小片が1点のみ出土したが，117と同一個体であることが確認できなかったため，図示することは控えた。



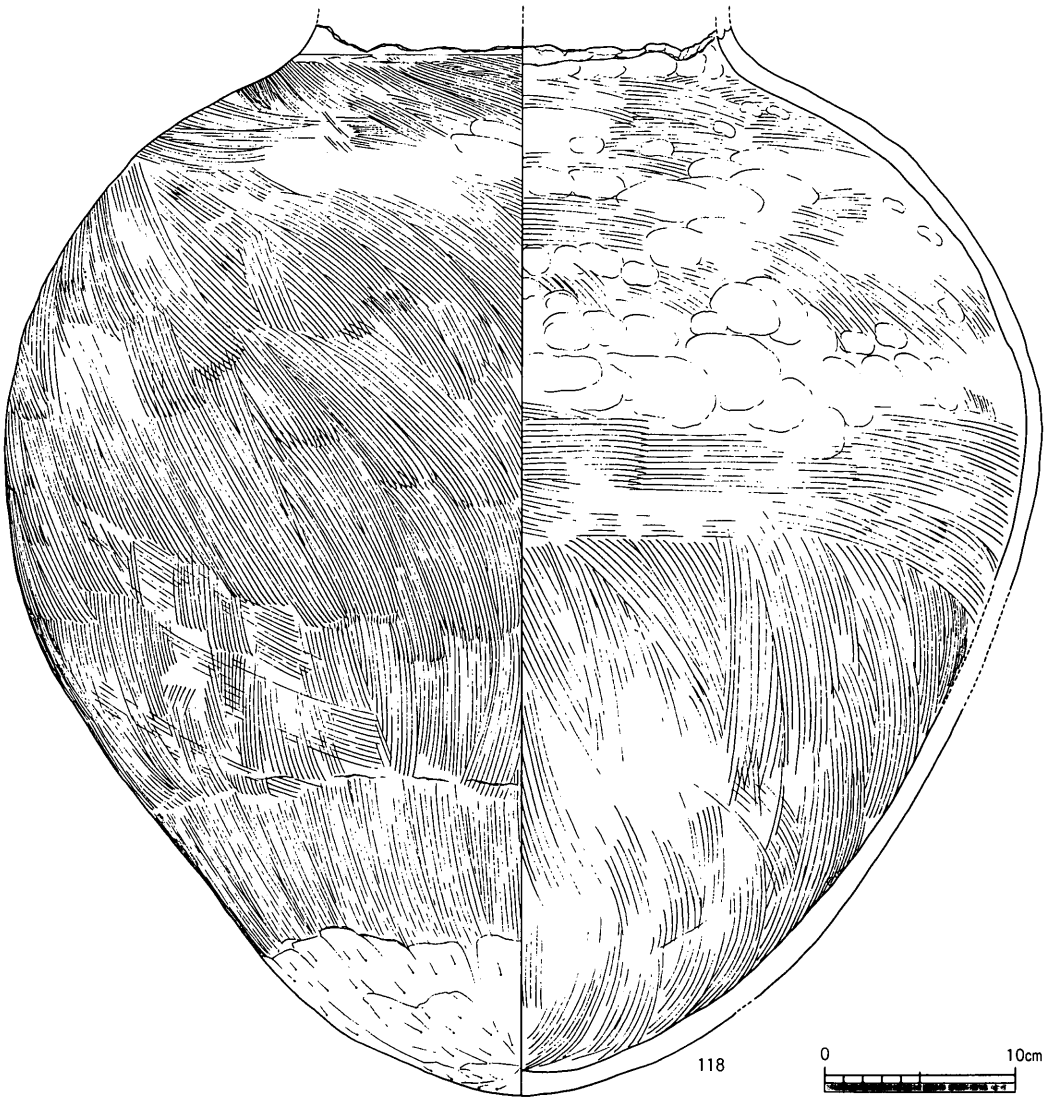
第45図　ＳＴⅡ01出土遺物実測図（1/4）

ＳＴⅡ02（第44・46図）

ＳＴⅡ01の南に，ほぼ接するように設けられた土器棺墓である。墓群中央に位置する。掘り方の平面形は，長軸0.82m，短軸0.70mの東西に長いややいびつな隅丸方形を呈する。周壁はややきつく傾斜して掘り込まれ，断面形はボール状を呈し，底面は明瞭な平坦面をなさない。残存深0.31mを測り，底面の標高は33.77mであった。

棺は，口頸部を打ち欠いた大形の壺を身として使用していた。上面の削平により，棺身上端付近とおそらく当初は被せられていたであろう蓋は，出土しなかった。棺は，土壙ほぼ中央底面に接して，垂直方向より約60°程南西に傾けて据えらえていた。棺内は，ＳＴⅡ01同様地山層に近似した灰茶褐色砂質土が流入し，土圧により破砕した棺材破片若干が転落して出土した以外，人骨や副装品の出土は認められなかった。

遺物として土器棺１点を図示した。118は大形の壺である。頸部以上を打ち欠いて土器



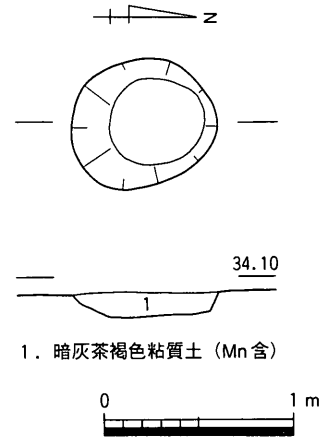
第46図　ＳＴⅡ02出土遺物実測図（１/４）

棺に転用している。頸基部の形状より，頸部は内傾しつつ立ち上がるようであるが，口縁部形態については断定できない。体部は概ね倒卵形を呈し，底部は外面周囲をケズリ調整し丸底に仕上げている。壺底部へのケズリ調整はあまり例をみない。体部外面への右下がりのハケ調整は，当該時期の甕・壺に共通する。内面はハケ調整が卓越し，体上半部に指頭圧痕を若干みる。内・外面の調整手法等に示される上記特徴は，本土器が土器棺専用の大形壺として製作された可能性を示唆するものと考える。時期を特定することは困難だが，体部形状より布留式最古相併行期を前後する時期と考えて大過ないだろう。なお，上記３

点の土器棺の胎土は，当該時期の本遺跡の一般的な土器のそれと極似しており，搬入品ではない可能性が高く，この点は被葬者の出自・性格を反映しているものと考える。

ＳＴⅡ03（第47図）

７ｂ区西部，ＳＴⅡ02の約0.5m南で検出された土器棺墓と考える土壙である。墓群南端に位置する。掘り方の平面形は，長径0.7m程の楕円形を呈する。周壁はややきつく掘り込まれ底面は平坦で，断面逆台形状を呈する。残存深は0.14mと極めて浅く，底面の標高は33.89mとＳＴⅡ01・02に比してやや高い。埋土は，地山層に類似した暗灰茶褐色粘質土の単層であった。



第47図　ＳＴⅡ03平・断面図（1/40）

棺は，おそらく大形壺の体部片と考えられる土器片が，土壙埋土中より15点程度出土したのみである。器壁の厚さからすれば，ＳＴⅡ02の土器棺と近似する。残念ながら調査時において，出土した土器片が土器棺の可能性を想定しえず，詳細な出土状態の観察を行わなかったため，棺としてよいかどうかは判断できない。ＳＴⅡ01・02に近接し，類似した埋土を有すること，平面形状が類似する点をもって，本遺構も土器棺墓として報告する。

出土した遺物は，上記土器片のみであり，図化しうるまでには至らなかった。

自然河川

谷７（第48～105図）

10～11区を南北に貫流する。検出面での上面幅は20～30m，深さは1.8～2.2mである。11区では概ね直線的に流下し，県道部分でやや西に振れ，10区中央部で再び方向を東に向け数mの振幅で蛇行しながら，調査区内でN9.5°Ｅ方向に流下する。底面の標高は，11区南端で33.50m，10ａ区北端で31.00mあり，比高差2.5mで調査区内での勾配は約2.9%である。

本谷は，現地表面の地割りや構築物に拘束され，10ａ・10ｂ・11区の都合３調査区に分割して調査を行った。調査に際しては，まず調査区毎に壁際に小トレンチを掘削し，下層の堆積状況を確認しながら面的な掘り下げを行った。しかしながら，調査区毎に後世の削平深度が相違し，また複雑な堆積状況を呈していたこと，各調査区間が離れていたことや，主要堆積層である黒色系粘土層は，天候や調査時の撹拌等によって，容易に質感が変化す

ることなどが災いし，調査途中で幾度か帰属層位を変更するなど，層位の同定には困難を伴った。当初遺物の取り上げは，細分した層位毎に行っていたが，上記したような理由から，後述するような区分に従って，大別して取り上げざるをえなかった。また，3調査区間の各層位の対応関係は，調査途上での個別土層のチェックを基に，整理段階での出土遺物の時期を参考にして決定した。その際，10a区北壁での堆積状況を基準層位として，他調査区の土層をそれに対応させる方法を採った。基準となる土層が，各調査区に良好な状態で普遍的に堆積していたわけではなく，若干の誤謬を犯している可能性もあり，遺物の掲載は10a区出土のものを中心に，所属層位の確実なものを特に選択した。

さて，10a区では，本章第1節で記述したように，主に旧耕作土直下において谷7上面が検出された。その間には，中世に下ると考えられる包含層（第11図30・50）が，調査区北西部を中心に，後世の削平を免れて部分的に堆積するにすぎない。また，谷両岸の微高地の地山層上面には，後述する谷7上層に連続する層厚10cm程度の黒褐色系粘土層が検出されたが，この部分は既述したように谷埋土ではなく第2面包含層として遺物の取り上げを行った。谷7の流路は，10b区より15m程北東流し，東岸の微高地に阻まれて直進できずに，大きく北西に流路方向を変更し，さらに再び谷西岸の微高地に突き当たり北東に流路方向を戻して調査区外に流下する。平面的にはいびつな「く」の字状に蛇行して検出された。したがって中央部東岸は半島状に細く西に突き出ており，その南側は水流により抉られて溜まり状を呈していた。水流のあった流路部分は，谷7中～下層期にあっては主に谷の東岸に偏在し，そのため東岸は抉れ込むように直に落ち込む。それに対して西岸は，緩やかに下っており，断面形は非常に対照的である。この西岸部を中心に，地山面上において立木数本が出土した。立木は，根元近くの幹を僅かに残すのみで，谷中央部に向けて斜めに傾いて検出された。位置は後述する下層内に包含されており，中層堆積時にはおそらく幹は欠損し，出土時の状態に近い形状を呈していたものと思われる。樹種は後掲した分析のとおり，ムクノキ，アカガシ，コナラ，クヌギが認められた。

10a区谷7埋土は，後述するように大きく4層に大別された。

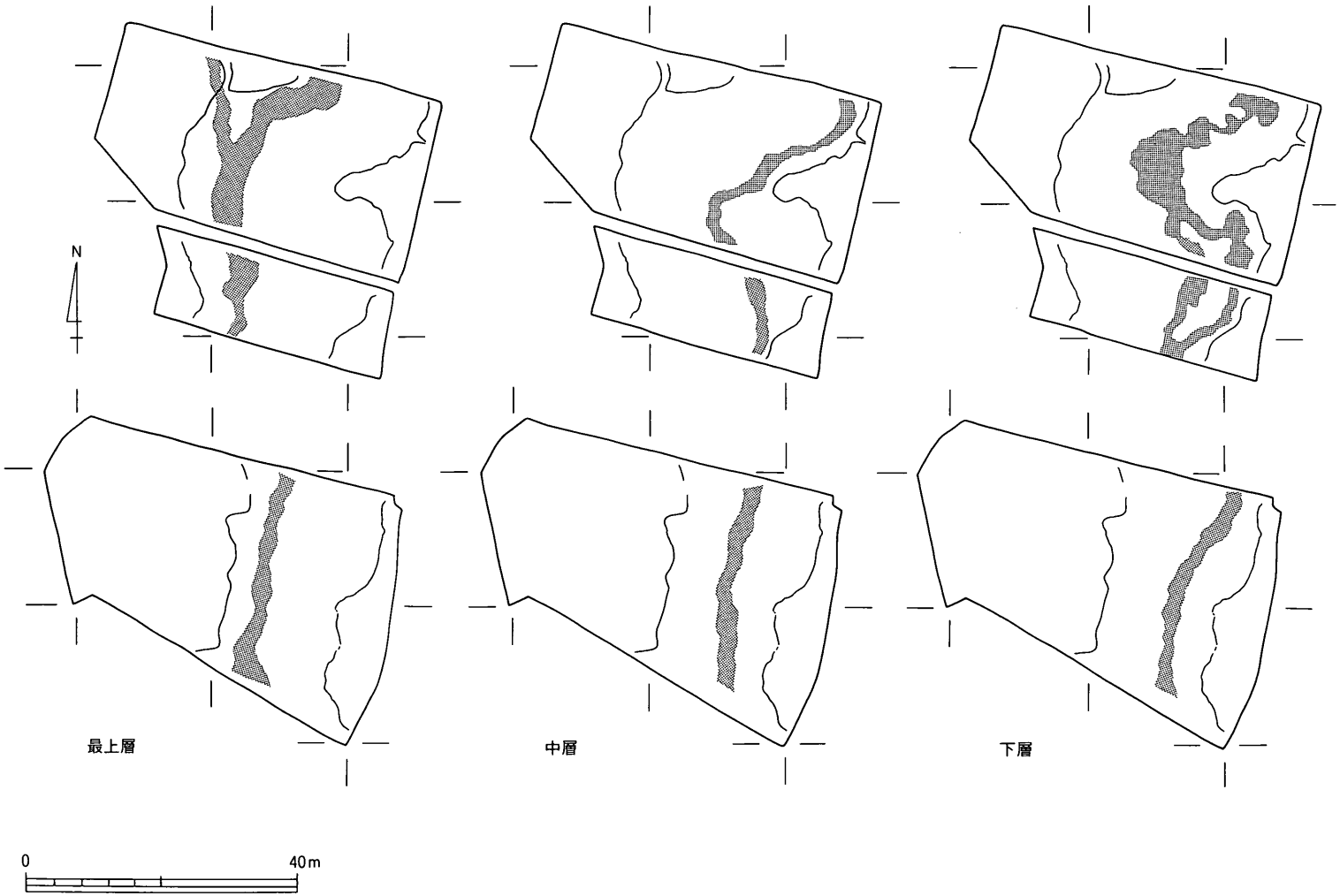
下層は，調査区北壁での観察で7層に細分された土層を一括する。谷底には，幅0.2～0.5m，深さ0.2m前後の黄褐色粗砂を埋土とする小溝（第11図104層に相当する）が，数列蛇行と交差を繰り返して走行し，上面に堆積した黒色系粘土層とは明確に区別され，谷が埋没する以前の流路と考えられた。この部分を最下層として当初認識していたが，下層出土の遺物と顕著な時期差が認められないため（123・165・172・198・201・203・229・236

～238等の遺物が最下層に相当する），一括して報告する。上述したように，下層の流路部分は基本的に谷の東部に偏在し，西半部には穏やかな環境下で堆積したと考えられる黒～灰色系粘土が水平に堆積する。この粘土層の上面には，層厚最大40cmに達する灰色細砂や灰褐色砂礫等の互層（第11図99層）が，粘土層をパックするように広く覆って堆積し，一次的な環境の変化，洪水のあったことが推察される。この洪水堆積層までを下層として把握する。層厚は，最大約1.2mを測る。下層からは，コンテナ24箱に及ぶ多量の遺物が出土しており，埋没が進行する当初より土器廃棄場所として利用されていた状況を示している。

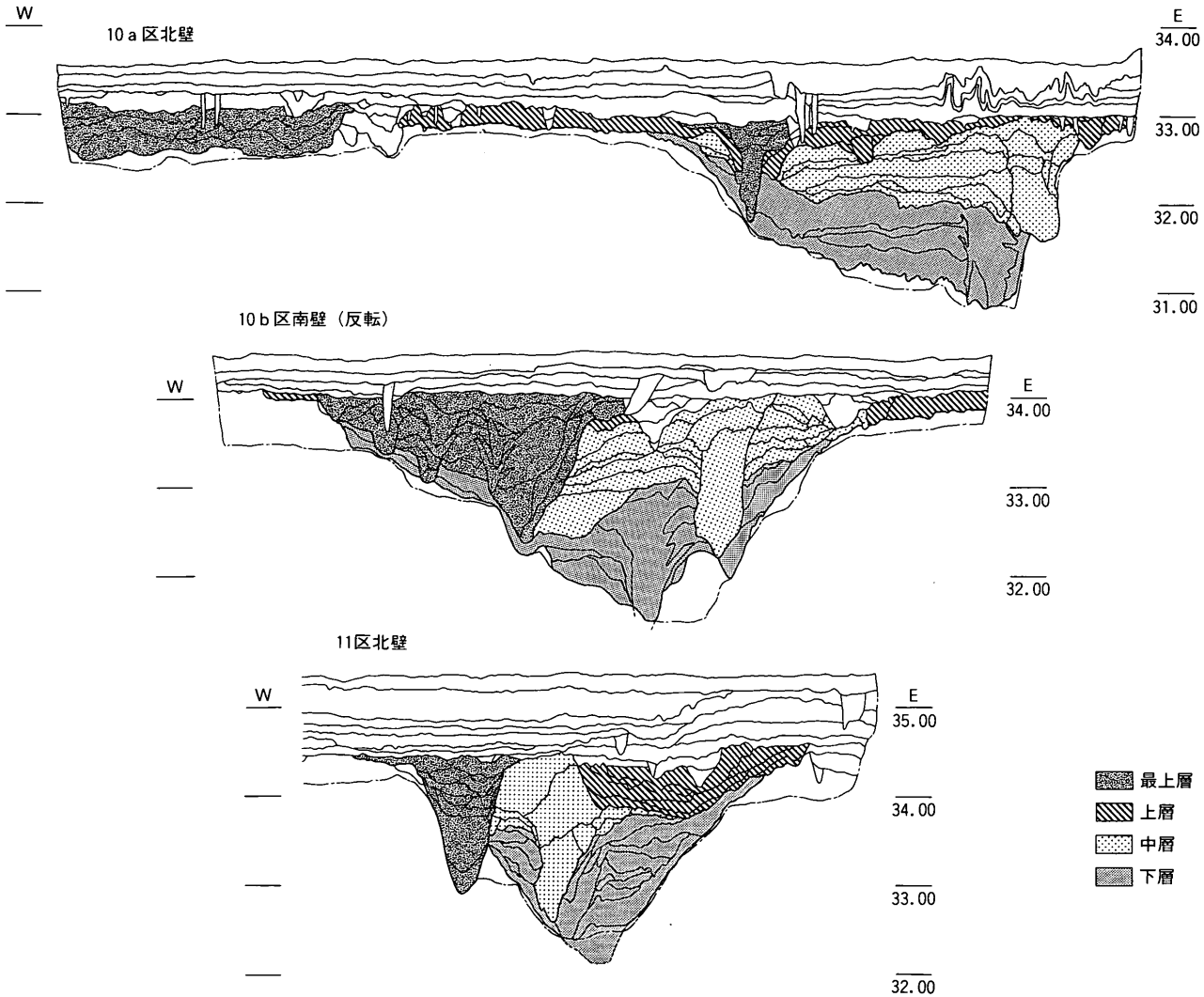
中層は，一転して再び穏やかな堆積環境に戻り，谷上面近くまで埋没が進行する。幅1.2mの流路部分はより谷東岸部に偏り，岸の一部を抉り込むようにして流下し，旺盛な水流のあったことを想像させる。流路部分以西の谷内部は，黒色系粘土層の水平堆積が連続する穏やかな低湿地状を呈しており，徐々に埋積が進行していったことが想像される。下層と異なる点は，僅かに埋土が茶味を帯び，粘性が弱くなる点である。おそらくはより乾燥した環境下で堆積したものであろうか。本層も下層と同様に，上面には灰褐色砂礫層（第11図86層）が広く覆って堆積し，一次的な洪水堆積によって明確に上位層と区分される。この洪水堆積層までを中層とし，その層厚は0.8～1.0mを測る。

中層の堆積によって，谷7はほぼ上面近くまで埋没を完了する。続く上層は，明確な流路部分は確認されず，黒褐色系粘土が水平堆積をなす。この段階では，ほぼ谷は流路域としての機能を停止し，低湿地状の窪地を呈していたものと考えられる。ただ，僅かに谷西半部で粘土層は斜めに垂れ込んだように堆積し，この部分に浅い流路の存した可能性はあるが，後述する最上層に撹乱され不明である。上層の堆積により，ほぼ谷の平準化は完了した。以後，中世段階に上面は大きく削平を蒙り屋敷地として利用される。そのため上層の層厚は，僅かに30cm程度を確認するにとどまる。本層からは，コンテナ44箱に達する多量の遺物が出土した。特に調査区北半部の谷東岸部分に多く集中しており，東側微高地に所在する集落域からの土器投棄をよく反映している。

最上層とした土層は，本調査区においては南半部において2流に分流して検出された。東側の流路は，谷西岸付近を大きく蛇行して流下する。一方西側流路は，谷西岸の丘陵Eより連続する微高地縁辺を削り込んで，直線的に北流する。調査段階では，2流の切り合い関係を把握できず，また微高地部分を掘り込んで西側流路が配されることなどから，自然地形とは異なる人為的な流路と誤認し，上位の中世段階の遺構と同時に調査を進めた。



第48図　谷７流路変遷図（１/1,000）



第49図　谷７土層断面図（天地１/80，左右１/320）

しかし，その後の各調査区の土層の検討によって，本流路は10ｂ・11区においても確認できること，それが本谷の範囲にほぼ納まること，人為的とするにはあまりに蛇行が大きいことなどが確認され，基本的には本谷の流路を踏襲するもので，谷埋没後の突発的な水流によって再掘削され堆積した土層と判断した。基本的に本層下面は，埋没の完了した本谷を大きく掘り込んで下層にまで達し，下層堆積物を巻き込みながら堆積する。東側流路での砂礫層部分（第11図73層）の層厚は90cmにも達し，水流の激しさを物語っている。なお，本層の堆積時期などについては，10ｂ区での所見をもとに記述する。

次に10ｂ区の状況を述べる。10ｂ区は，面積僅か400m²程の調査区であり，しかも全面が谷地形となる。工程上の都合で，10ａ区に先行して谷部分の調査を進めたため，基本層位との対応関係については，遺物取り上げ後に判断せざるをえなかった。しかしながら，谷の埋土の状況は，10ａ区のそれと大きく異ならず，10ａ区と整合性をもって捉えることが可能であった。本区においても，谷上面付近まで後世の削平が及んでいる。特に調査区南半部において，それは顕著である。

さて，下層は本区においても谷東半部に主流路を置き，北東方向に流下する。層厚は，10ａ区と比較してやや厚く，最大1.8mに達し，地山層を大きく削り込んで堆積する。10ａ区で述べた下層主流路は第12図79層が相当する。本層下位には，暗灰色砂礫（同図86層）を主流路とする別の流路が確認されたが，遺物がほとんど出土しておらず，具体的な堆積時期については不明である。したがって，本来的には最下層として扱うべきだが，遺物が出土していないこと，10ａ区北壁に対応する土層が見出し難いことから下層に含めて記述する。なお下層上面は，10ａ区同様洪水堆積の砂層（同図77層）によって覆われるが，上位の中・最上層による撹拌のため谷西半部では不明瞭である。

中層も10ａ区同様主流路をより東に移し，北東方向に流下する。主流路の砂礫層（同図60層）の堆積は，層厚1.8mにも達し，下層を大きく削り込んで層下面は一部地山層にまで達する。本区でも基本的には本層の堆積によって，谷上面付近まで埋没が進行する。

上層は，谷西半部を中心に検出された。しかしながら，谷埋没後に掘り込まれた遺構や谷最上層による撹拌によって，明確に層位として把握された範囲は乏しい。また，最上層との分離は必ずしも成功しておらず，最上層として掲載している遺物の大半は，本来的には本層出土の遺物であった可能性が高い。例えば851・852・854～856・858・860～868は，最上層と判断した黒色系粘土より一括投棄されたような状況で出土したが，６世紀代以降に下る遺物が混在せず，調査時に上層と誤認した可能性は高い。

最上層は，谷西半部に主流路が検出され，北西方向に流下する。上述したように，上層との分離は必ずしも明確ではない。中層までの流路と異なり，谷西半に大きく偏るため，中層の流路との間は谷底の地山層が中州状に盛り上がる。したがって本層の流下によって谷西岸部は大きく削られ，谷幅はこの部分で最も広がり起伏に富む。本地区では，本層の主流路部分は数条を確認しており，徐々に西へ移動しながら流路幅を減少させる。10ａ区で検出された東側流路，第11図73層を主流路とする流れは，本区の第12図48層を主流路とする流れに相当し，同様に西側流路の，第11図68層を主流路とする流れは，本区の第12図40～41層を主流路とする流れに相当すると考える。また出土遺物より，東側流路は６世紀末前後に，西側流路は８世紀代に位置付けることができる。したがって，本来的には最上層はさらに最低２層に細分すべきであるが，調査途上で必ずしも明確に両層の遺物を分離することはできなかったため一括して報告し，必要に応じて東側流路，西側流路と呼称する。また，上述した下層から上層までが，弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけて時期的に連続して堆積が進行していたのと比較して，本層の堆積までには時期的に大きな断絶が存在する。後述する11区では，布留式新相に併行する時期の堆積層が確認されたが，上層堆積後の洪水堆積は断続的であることにかわりはない。上流域の環境の変化が，こうした突発的な洪水堆積をもたらしたものと考えられるが，その具体的な要因は不明である。なお，本区では東側流路（第12図42層）を中心に，多量の流木や加工痕のある棒状材が出土した。材は，基本的に流路方向と平行して出土するものが多く（図版46），上流域より流されたものであることをよく示している。同時に出土した遺物（850～873）には，特にローリングを受けたものは少なく，比較的近い場所より流されてきたものと推定される。

最後に11区の状況を説明する。11区においても，谷上位の状況や埋没過程の様相は，他調査区と大きく異なるものではない。谷は，調査区東半部に偏り検出され，調査区内ではほぼ直線的に流下する。後述するように，最上層が谷西岸に偏っているため，西岸部は傾斜が強く掘り込まれるが，中・下層の流路は谷中央付近を流下し，従って東岸部は緩やかに落ち込む。谷上面は，基本的には旧耕土層直下において検出され，調査区北半部を中心に僅かに中世に遡る包含層（第13図11層）が，薄く堆積するに過ぎない。中世段階には大きく谷上面は削平されていたと考えられる。

さて，下層（同図96～114層）は谷中央部で確認され，ほぼ直線的に北東方向に流下する。谷底には，層厚80cm程度の青灰色砂礫層（同114層）が堆積し，その上位を黒灰色粘土（同113層）が覆う。本層は，10ｂ区で述べた最下層に相当すると考えられるが，10ｂ

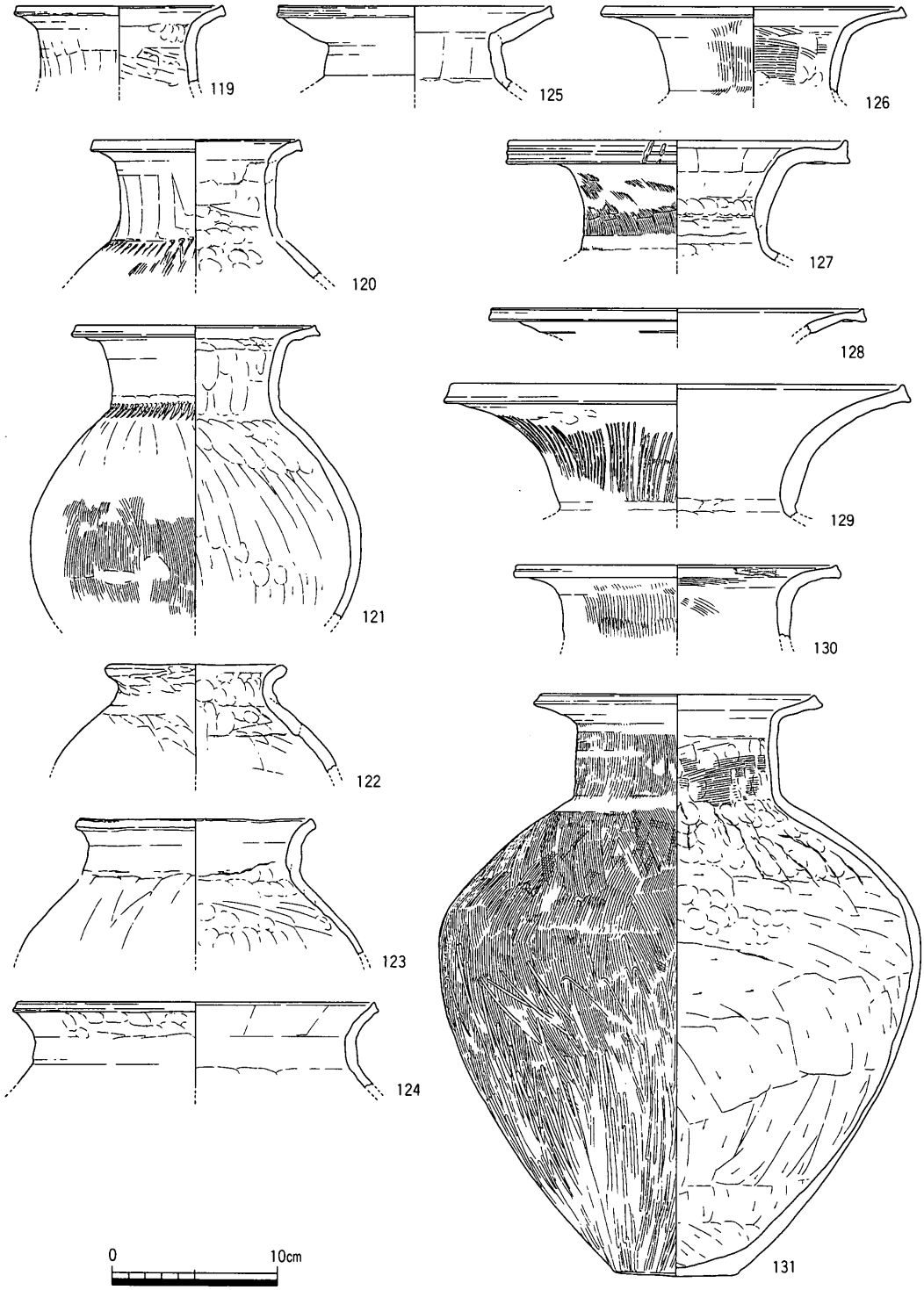
区同様出土遺物が僅少なため下層に含めて扱う。下層は，やや主流路を西に移し，谷底の地山層を一部削りながら堆積する。下面の標高は，調査区北壁部で32.3m前後である。主流路の東西には，粘土～シルトの薄層がレンズ状にやや谷中央部に傾斜して堆積する。その上面を覆う洪水堆積の砂礫層（同97層）は，谷西半部では辛うじて確認されたが，東半部などでは中・上層に撹乱され確認できなかった。

中層（同図81～90層）の主流路は，ほぼ下層のそれと重複して確認され，北東方向に直線的に流下する。活発な流水により下層を大きく削り込んで堆積しており，中央主流路部の砂礫層は厚く約1.9mに及び，谷上面にまで達する。下面の標高は，北壁部で32.5m前後である。東半部を中心として，灰～黒色系粘土～シルトのレンズ状堆積が連続し，多量の遺物が出土している。特に谷東半部の中層下位（同83・87層）に顕著であり，本区中層出土とした遺物の大半は，中層下位層からの出土である。上面は，後世の削平や上・最上層の堆積により，11区でみられた洪水堆積層は確認できなかった。

上層（同図71～79層）は，谷東半部においてのみ確認された。明らかに中層の東肩部を一部削り込んで堆積しており，微弱な水流のあったことが想像される。しかし，中・下層にみられる程旺盛なものではなく，埋没した谷上面を薄く削り取る程度のものであったろう。下面の標高は，北壁部で33.7～33.8mであり，層厚は0.6mと薄い。中央に砂礫層の薄層を挟みながらも，基本的には黒褐色系の粘土～シルトが水平に堆積しており，穏やかな環境下で徐々に堆積していったことが考えられる。

最上層は，谷西端に偏って確認され，直線的に北東方向に流下する。本区では，10区で認められた2条の流路は認められず，上述した2時期の流路は，単一流路の上位層（同図66層）と下位層（同図67層）として把握された。下位層は，灰色系砂礫層を主とした粘土や中砂などの互層であり，谷西斜面部の地山層を大きく削り込んで堆積する。層厚0.25mを測り，底面の標高は北壁部で32.9m前後である。10b区同様に，埋土中からは若干の木製品を含む多量の自然木などが出土した。一方，上位層（同54～66層）は，下位層上面をさらに削り込んで堆積しており，主流路部分の66層と，洪水堆積後の凹地に堆積した，粘土～シルトのレンズ状堆積を主とする自然堆積層の54～65層の大きく2層に細分され，上位層は低湿地状を呈して徐々に埋没したものと考えられる。しかしながら，出土遺物からはそれほど長期を要したものではないようである。

なお，11区中央部では谷に直交する位置に補助的な土層観察のためのアゼを設定した。この部分を中心に，布留式新相を中心とした遺物群が出土している（889～893）。出土層

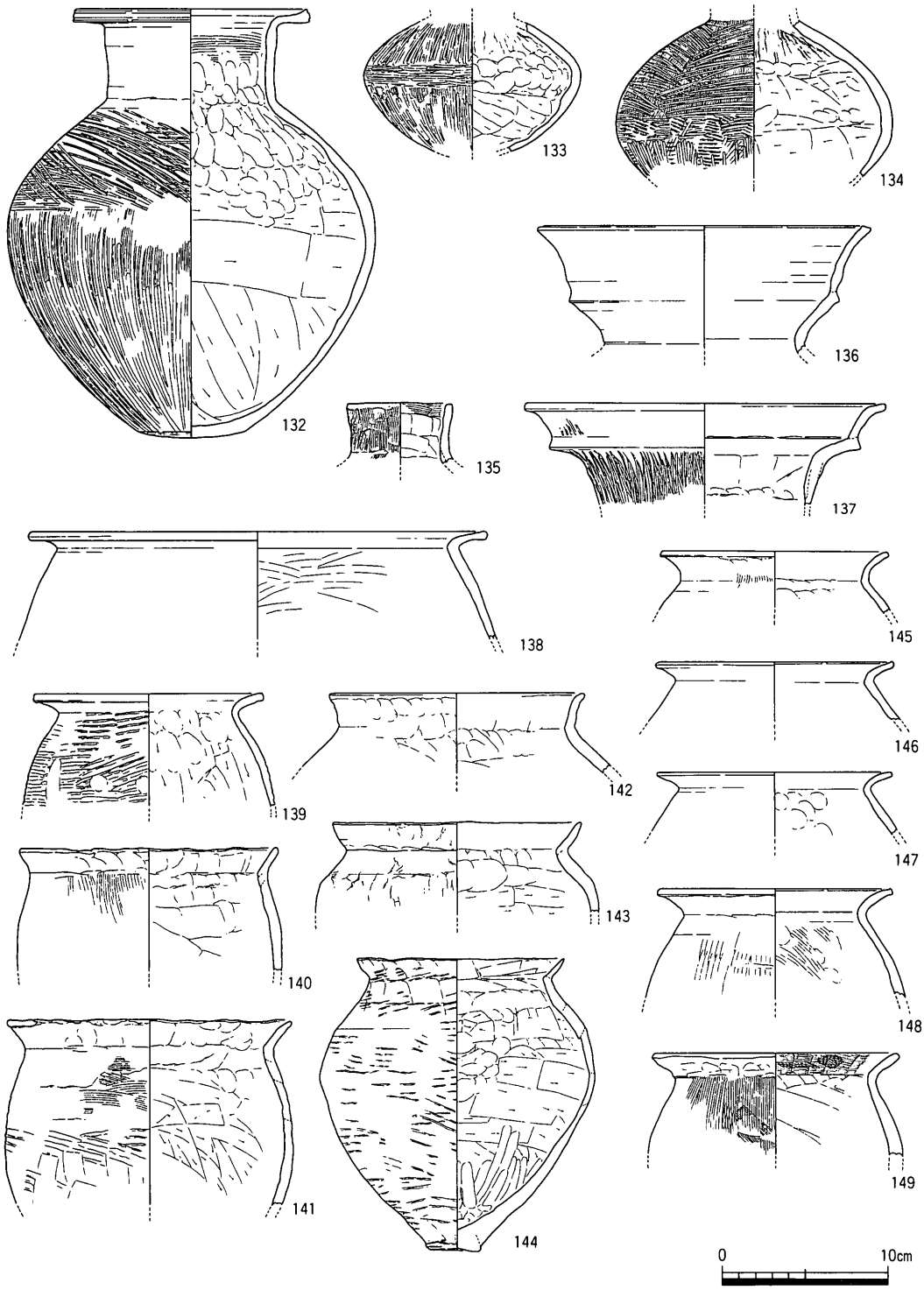


第50図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図１（１/４）

位は，上述した最上層に切られる褐灰色粘質土層であり，アゼ部分で幅約0.6m，深さ約0.6mを確認したに過ぎない。検出延長は数m程度であるが，平面的には明確に把握されたわけではない。本層からは，後出する遺物が出土しておらず，上述した最上層の一部ではなく，より古い時期の洪水堆積層の一部と考えられる。しかしながら，本区北壁及び他調査区では，最上層に撹乱され一切本層は確認されておらず，また当該期の遺物の出土も乏しいことから，その流路方向など詳細については不明である。ここでは，古墳時代前期初頭に谷がほぼ埋没した以降も，なお断続的ながら洪水堆積が繰り返された可能性を指摘するにとどめ，本層も谷埋没後の堆積であることから，最上層に含めて記述する。

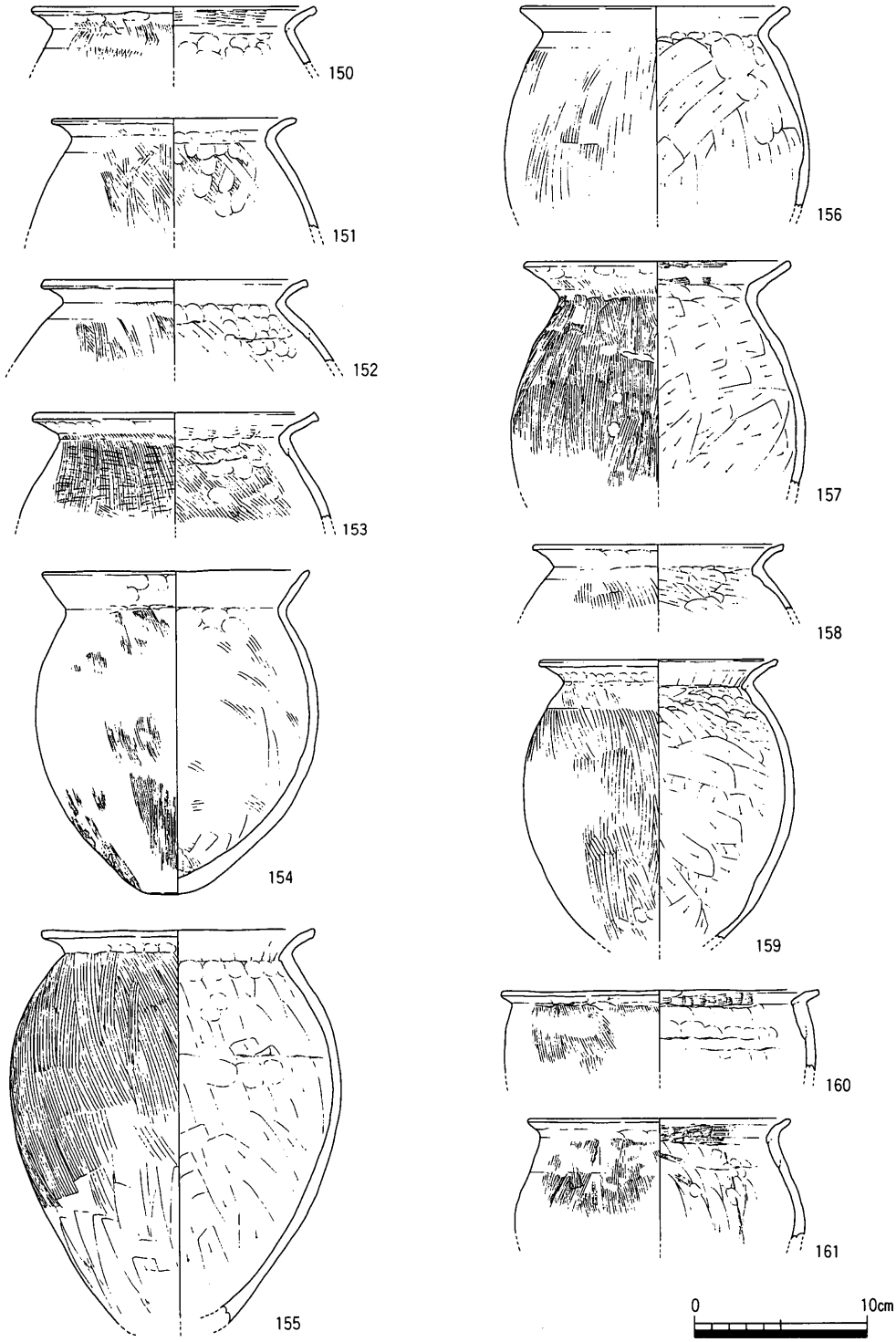
遺物は，コンテナ約180箱に達する。大半は上～下層の土器類が占める。このうち総数813点を選んで図示した。膨大な遺物の全てを掲載することはできず，ある程度の選択は行ったが，すべての器種・器形が掲載されるように努め，また出土量の少ない高坏や特殊遺物は細片を含め可能な限り図化した。従って掲載した遺物の比率は，おおよその傾向を示してはいるが，必ずしも実体を完全に反映したものではない。

119～240は10ａ区下層出土の遺物である。119～132は広口壺である。広口壺は口頸部形状より，長く直立する頸部を有するもの（119・120・130～132），内傾して立ち上がる頸部を有するもの（125），頸部が外傾するもの（121・126・127・129），頸部が短いもの（122～124）の４タイプに大きく分類される。最後尾短頸形態の広口壺については，いずれも胎土は粗く，調整手法も粗雑な粗製の壺で，他の広口壺とは明確に区別される。さて，上記広口壺はいずれも在地系譜の壺形態であり，量的な問題と，内傾する頸部を有する広口壺についてバリエーションが少ない点にやや難はあるものの，当該時期の広口壺の様相を一定程度反映すると考える。この点で120と121に示されるように，頸基部への刺突文の施文は，頸部形態は異にするものの本地域の後期初頭以降の伝統を色濃く残しているものと考える。なお，119・121・124・130～131の外面には，２次的被熱による煤が付着する。また，外傾する頸部より口縁部が強く折れて水平に開き，端部を大きく拡張して凹線文を施す127は，他の広口壺に比してやや後出する可能性を残す。また，131・132は下川津Ｂ類土器である。体部外面は肩部左下がり，体下半部は右下がりのそれぞれハケ調整の後，下半部に縦ミガキを施す131が，甕・壺に共通する通有の一般的な調整手法であるが，稀に肩部にハケ調整の後四分割の横ミガキ調整を加える132のようなものもある。これはＢ類高坏の坏部の四分割ミガキ調整と共通し，Ｂ類土器に特徴的な調整手法である。133・134は下川津Ｂ類細頸壺。玉葱型の体部に，細く伸びる口頸部が付す。内外面の調整手法は，133



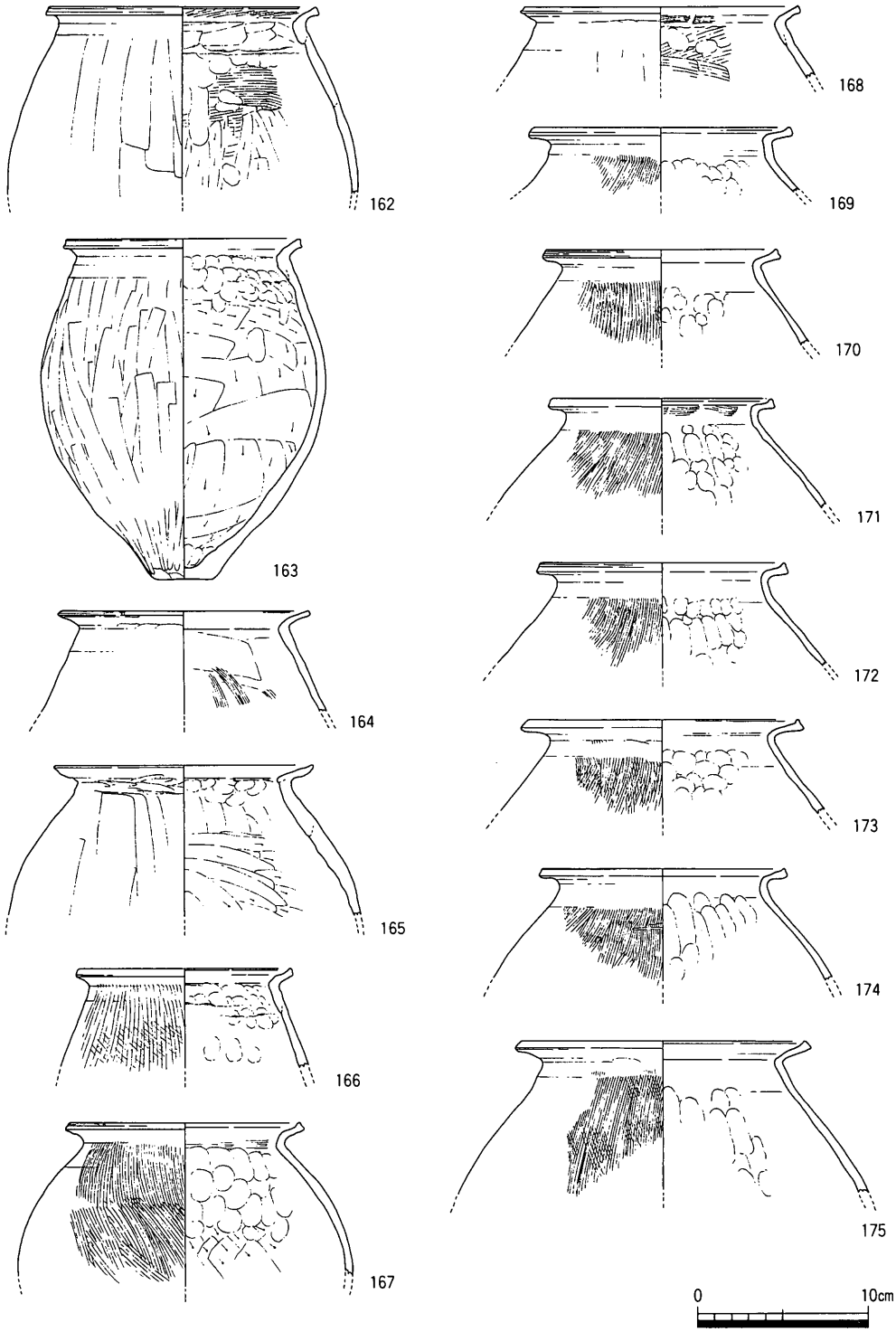
第51図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図２（１／４）

が一般的なものであるが，上記132と共通する肩部分割横ミガキを施す134のようなものも決して少なくはない。なお，133は破断面を含めて体部の一部に煤が付着する。おそらく破損後被熱した可能性が高い。135は直口壺口縁部小片である。胎土に精選された素地粘土が選択され，外面のハケも細かく精製品である。系譜関係については今一つ明確ではなく，本地域ではあまり主体とはならない形態である。136・137は二重口縁壺である。136は一次口縁の屈曲が弱く，二次口縁もあまり外反せずに大きく斜め上方へ開く形態で，類例は乏しい。より後出した形態は空港跡地遺跡ＳＤｅ115（蔵本他1997）の42にみることができる。137はやや長く伸びた頸部と，一次口縁部の端部上面に強く外反する二次口縁部を載せる点から，本地域ではより一般的な形態と捉えられる。二次口縁の発達が弱く，一次口縁端部の摘み出しが横方向である点等から，前記13・69よりは古く位置付けられる。また頸部外面には細かなミガキ調整を連続させる。138～190は甕である。138は中期中葉に遡る。外面を中心にかなりのローリングを受ける。139は「く」字口縁のタタキ甕。外面にタタキ痕を明瞭に残す本例のような形態は，当該時期には多数を占めない。140～144は粗製の甕。特に口頸部に粗雑さが顕現される。144は口縁部をタタキ出す。145～159は「く」字外反口縁の甕。口頸部形態には若干のバリエーションが認められ，端部を四角く納めるものが最もポピュラーな形態であるが，鈍く上方へ摘み上げる146・147・150は，Ｂ類甕との一定程度の親縁性を示すものと理解される。また，体部外面はハケ調整によりタタキメ痕を消し去るものが通例であるが，153のように辛うじてタタキメが判別できるものも存在する。体部内面は，ハケや板ナデ，ケズリ調整の後，上半部に指頭圧痕を認めるものが通例である。155～159のような頸部付近にまで達するケズリ調整は，基本的には在地系統にはない調整手法であり，搬入品か非在地系譜の甕の影響と考えられる。特に155・158・159は，胎土にやや多量の輝石と黒雲母細粒を含む緻密な素地粘土を選択し，暗灰色系を呈する堅緻な土器で，搬入土器の可能性が高い[(1)]。160～166・168・188も「く」字口縁甕に含まれるが，頸部内面の屈曲が強く，短い口縁部がやや直線的に開き，端部を小さく摘み上げる点で他にはない特徴を示す一群である。中でも，頸部内面に強い稜を認め，口縁部の外反度が強く，端部を上方へ摘み上げる162～166・168・188については，下川津Ｂ類甕の模倣もしくは一定程度の影響を受けた形態と理解してよいだろう。165～186は下川津Ｂ類土器甕及びその底部である。Ｂ類甕は２群に大別され，口縁部が短く退化し，頸部内面の稜が鈍く丸味を帯び，体部外面下半のミガキ調整に粗雑さが窺え，体部が球形を指向して肩部の張りを消失し，体部最大径がやや下方に位置する171・172・174・175・

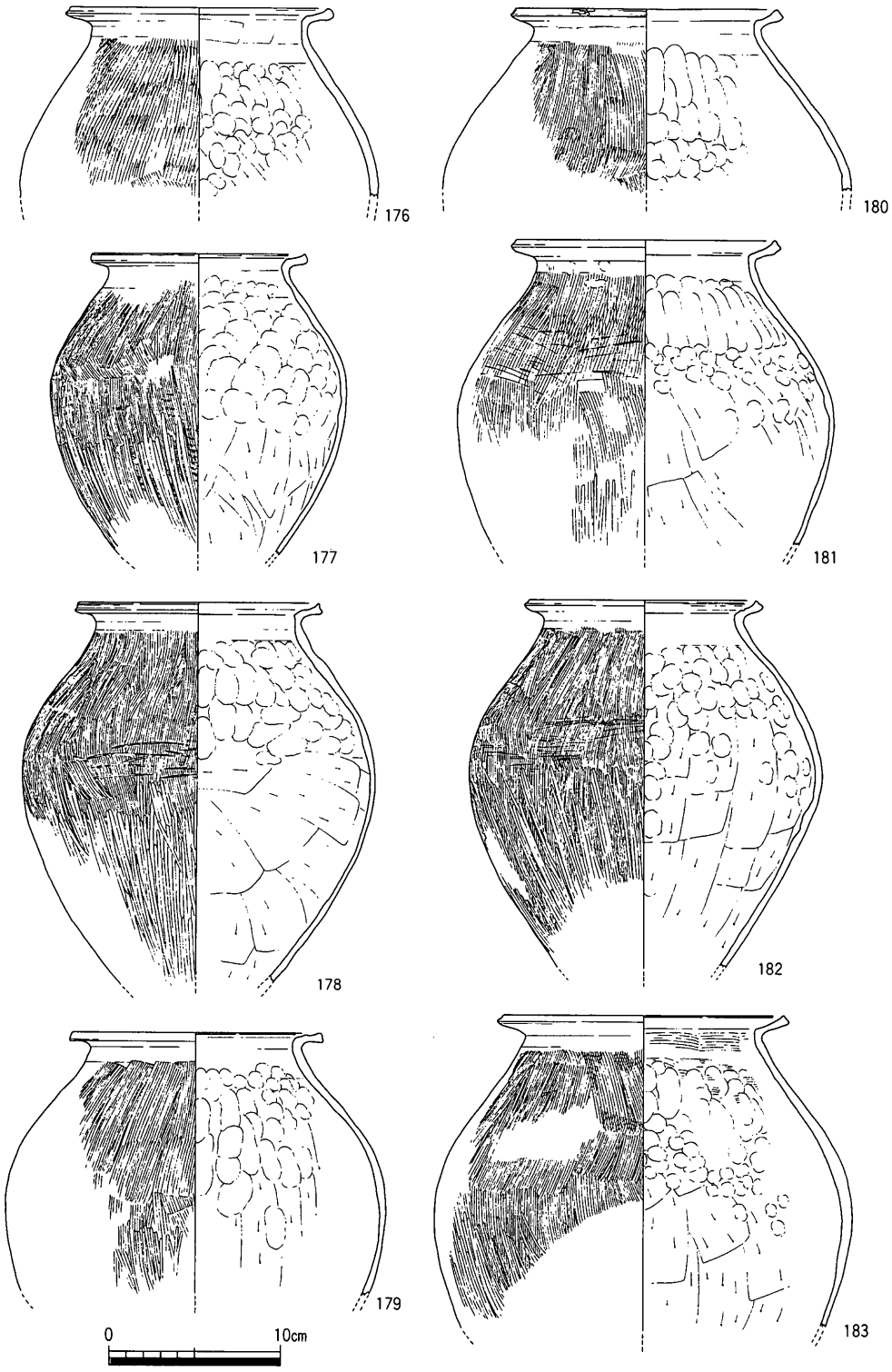


第52図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図３（１/４）

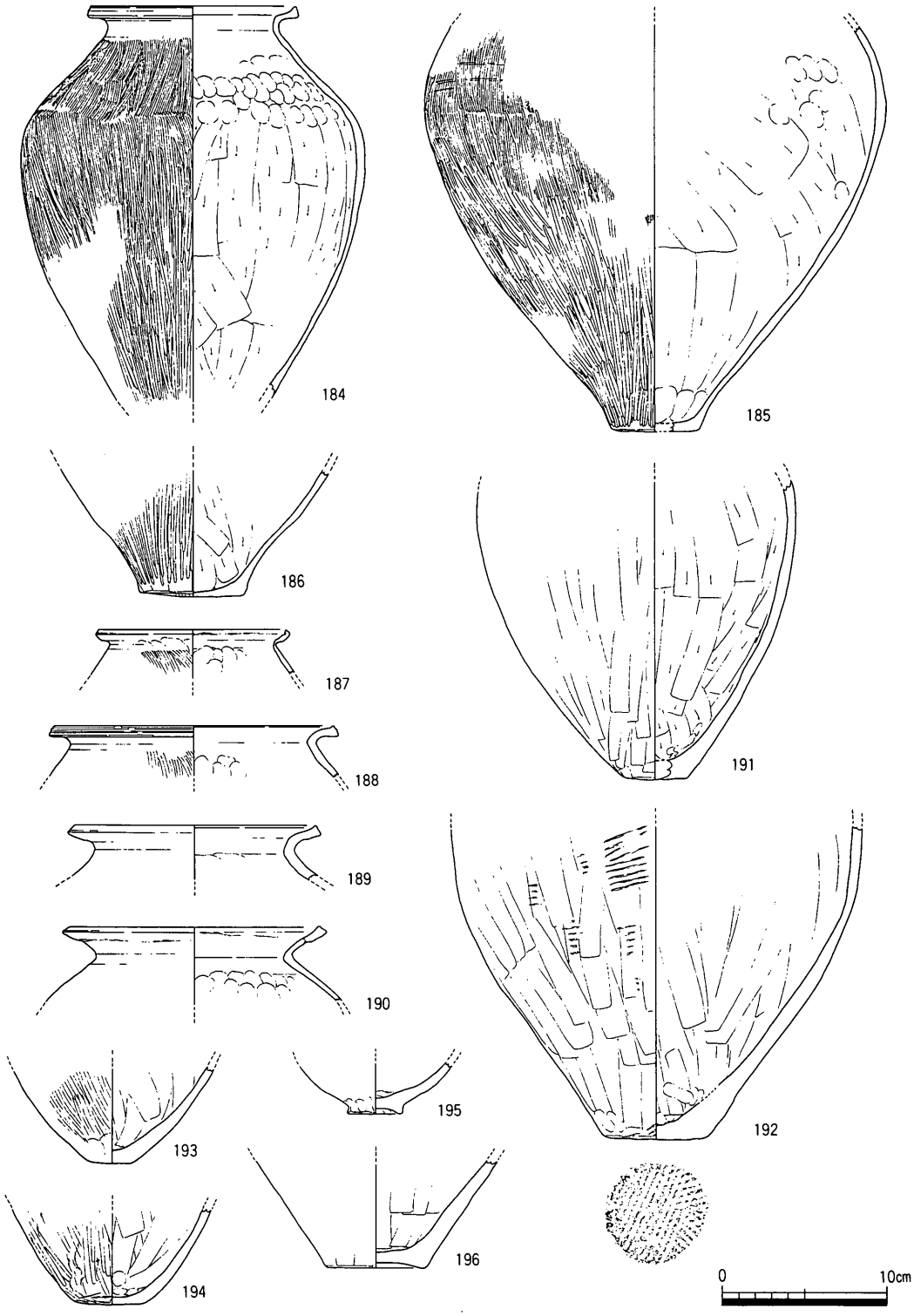
179・182・183などは，それ以外のものと比してやや新しい傾向を認め，大久保編年下川津Ⅴ式（大久保1997）に位置付けられると考える。なお，その他のものも同下川津Ⅳ式を遡ることはない。185・186はやや突出した平底形態を呈し，古い様相を多分に残すが，丸味を帯びた体部形状から少なくとも下川津Ⅳ式以前には遡らないと考える。167・187・189・190は甕Ｃである。布留式最古相併行期以降に，本地域で主流を占める形態であり，現状ではＢ類甕と供伴する可能性はないと考えている。本例をもって，当該時期に東阿波型甕の模倣形態として少量ながらも本地域の土器組成の中に組み込まれていると断定するには尚早であり，より良好な一括資料の提示を待たなければならない。191～196は土器底部。196の底面は内湾し上げ底状を呈しており，弥生時代中期に遡る。また器表面はかなりのローリングを受ける。195は底部周縁を摘み出して上げ底状を呈した形態で，鉢もしくは小形壺の底部と考える。上記以外は甕底部と考えられる。194を除いて張りの乏しい体部に小さな平底を呈しており，上記Ｂ類甕とほぼ同時期に位置付けられよう。なお，192の外底面にはタタキ痕跡を認める。194はやや安定した平底と外底面へのナデ調整の存在から，Ｂ類底部の模倣の可能性がある。197～212は高坏。197・198は弥生時代中期に遡るもので，いずれも坏底部は充塡法を採用する。198の脚裾部には現状で２孔の円形穿孔を認め，計５孔の穿孔が復元される。現状で内１孔は貫通していない。199～207・211・212は下川津Ｂ類高坏と同脚部片である。坏上半部が直立気味に立ち上がる199は，その他の高坏よりやや古く位置付けられる可能性がある。一方，坏上半部がやや大きく発達し，かつ外反度が強く，坏部が深くなる204は，相対的に新しい傾向を示し，下川津Ⅴ式に下る可能性がある。211は口径の小さい小形のタイプであるが，全体的な形状や調整手法は通有の形態のそれとほぼ異ならない。脚部はスカート状に広がる通有の形態。裾部径は坏部口径を凌ぐものではなく，裾端部の肥厚指向が強い，やや古い様相を示すものに限られる。208は椀状坏部を有する。脚柱部はやや長く，低脚形態とするにはやや難がある。いずれにせよ，本地域では主流とはならない形態である。209は坏部中位で屈曲する通有のタイプの高坏である。胎土中に角閃石と黒雲母を多量に含む搬入土器ではあるが，Ｂ類高坏とは異なる。高松市六条・上所遺跡ＳＫ01出土の16（北山1995）と比較すると，本例は坏上半部の発達が弱く坏部深が浅いことから，相対的に古く位置付けられると考える。210は細身でやや長い脚柱部を有し新しい傾向を呈するが，脚柱部内面は未だケズリ調整されておらず，Ｂ類高坏とほぼ同時期に位置付けられるものと考える。213～215・222～226は小形鉢。213・224は外反口縁を有する粗製の小形鉢。224はむしろ甕のミニチュア品に近い。214は



第53図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図４（１/４）

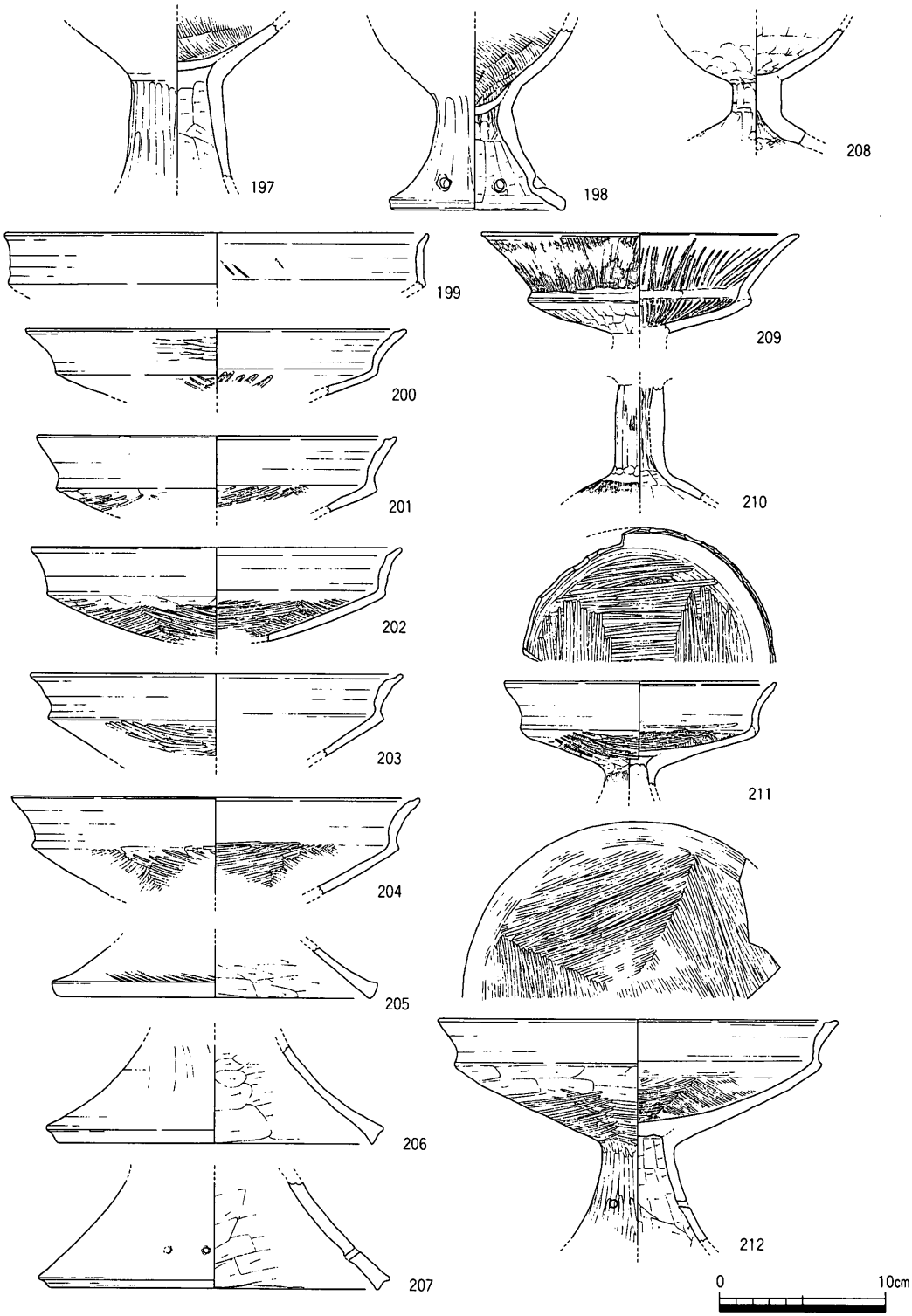


第54図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図５（１/４）

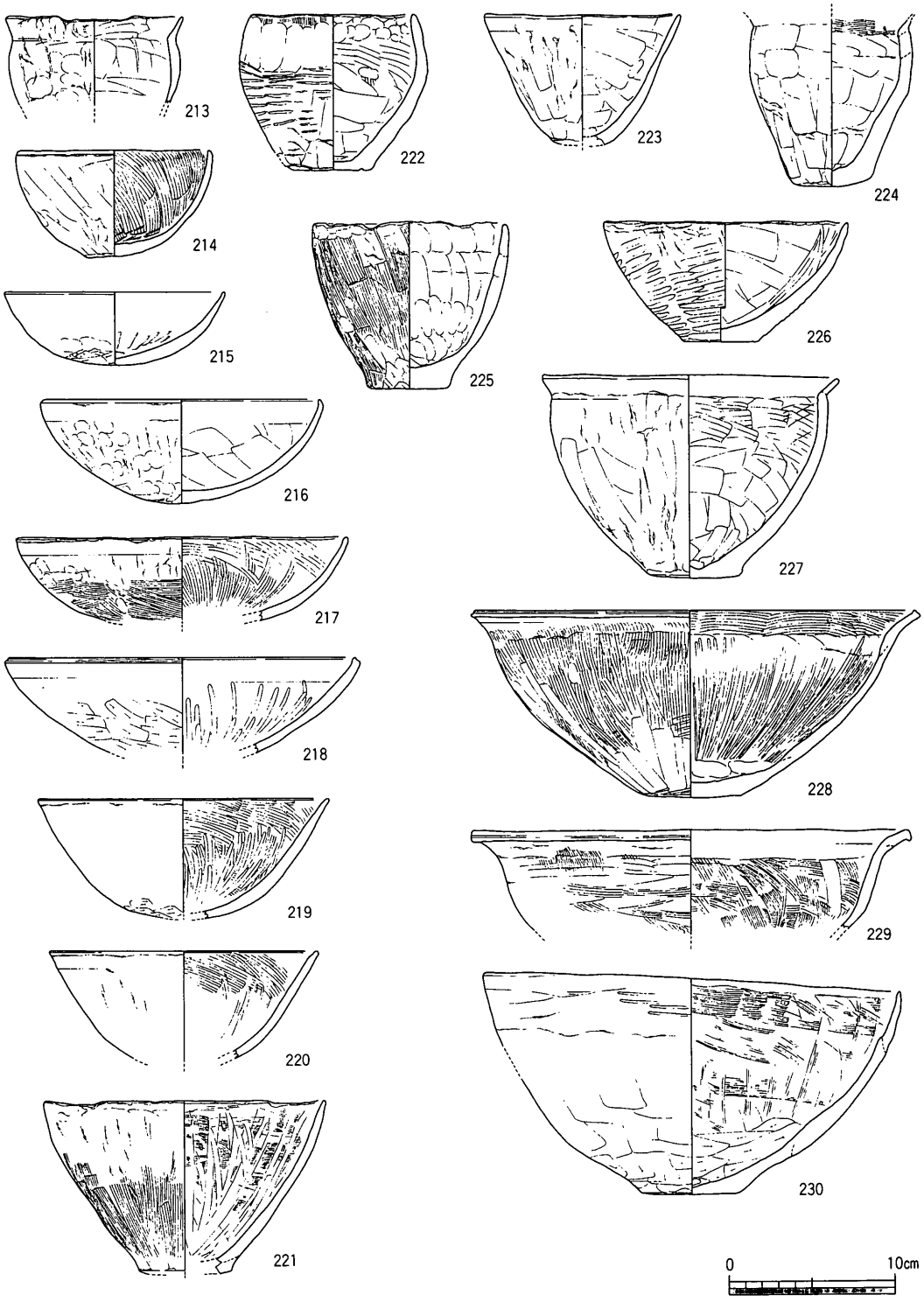


第55図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図６（１/４）

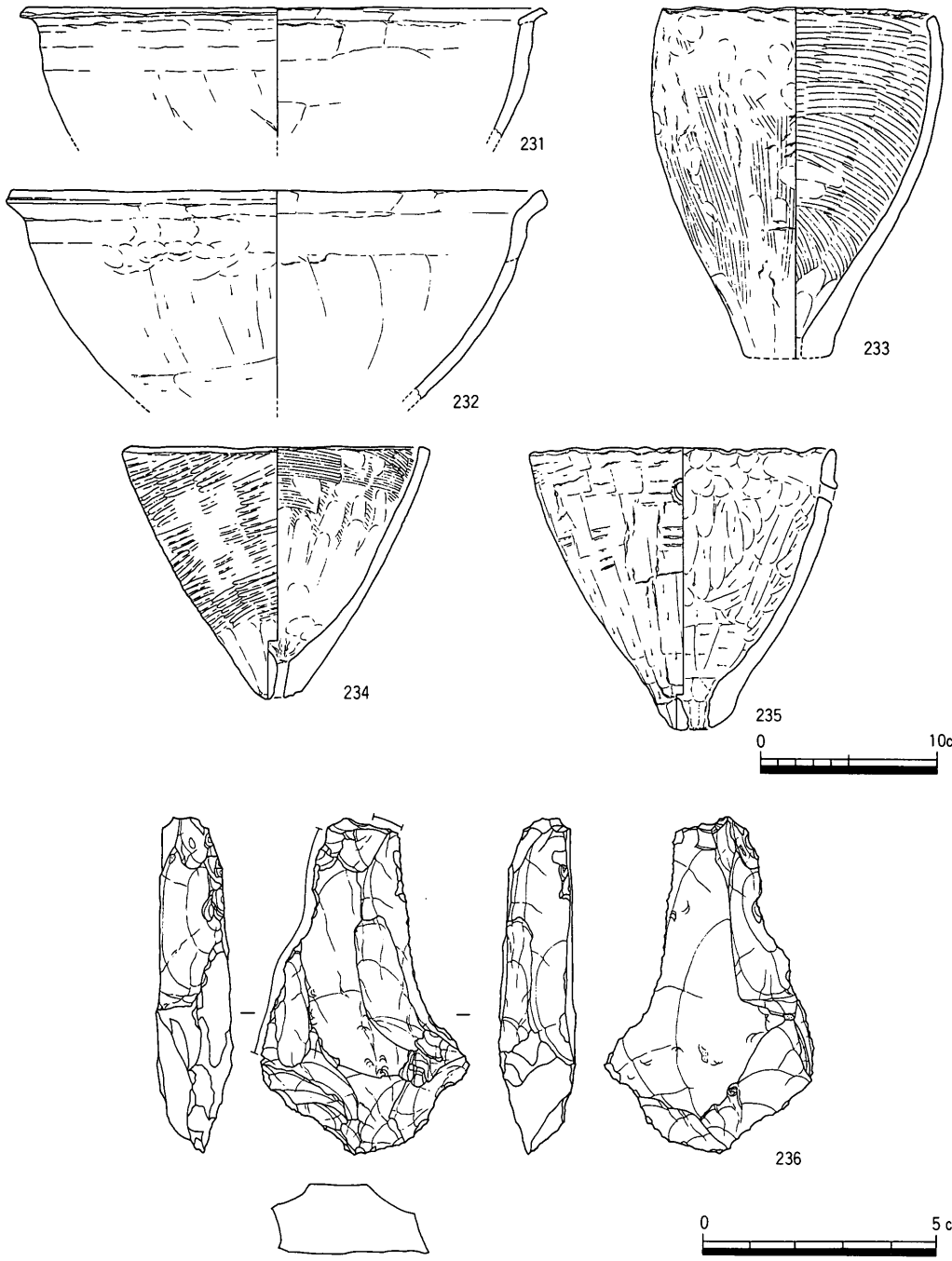
半球形を呈する鉢である。底部は辛うじて平底状を呈するが，この部分外底面は鋭利な工具でケズリ調整され丸底化を指向する。また，口縁部から体部外面には僅かにタタキ調整痕を認め，内面は丁寧に螺旋状のハケ調整が施される。215は通有の浅鉢形態。外底面は幾重にもケズリ調整が施され，丸底を達成する。その結果，この部分の器壁は周囲に比して幾分か薄い。222・225・226は安定した平底を有する小形鉢のうち，最も後出するものとなろう。216～221・227は中形鉢である。216～218は浅皿形態。219～221・227はやや深めの深鉢形態。いずれも内面の調整に比して，外面の調整は粗雑で省略が多い。218では内面に装飾的な放射状のミガキ調整がみられ，217ではそれが放射状のハケ調整に略される。219・220はほぼ同形態。219の外底面はケズリ調整により丸底化を指向する。221は粗製品で，内面の調整も一次調整の痕跡を完全に消去するまでに至っていない。口縁から体部は非常に堅緻に焼成されている反面，底部は器表面が剥落するように破損しており，焼成時かあるいは２次的被熱によるものだろう。227は外反口縁を有する。228～232は大形鉢。230を除いて外反口縁を有する一般的な形態である。230は僅かな口縁部状の破片から直口形態の鉢を復元したが，磨滅や剥離が顕著なこともあり，甕か壺の体・底部となる可能性も残る。228・229は大形鉢では精製品に属する。228の内底面には使用時のものと思われる殴打痕を認める。231・232は粗製品となろう。231のように口縁屈曲部内面が内側に鈍く突出する形態は，長尾平野東部の甕・鉢等に若干量みられる。233～235は底部穿孔鉢。233のように小平底を呈するものは類例に乏しい。また，体部外面のハケ調整は粗雑で，しかも器表面の1/2程度つまり片面しか施されず，もう片面は成形時のクラックがそのまま残されている。おそらく片手に土器を持って調整を加え，途中で中断したか意図的に省略したものと思われる。なお，底部は欠損が著しいが，残存する部分から推して底部穿孔鉢として間違いないと思われる。234・235が底部穿孔鉢としては一般的な形態。底部は尖底で，体部は漏斗状に開き口縁部は直口形態。235のように口縁部に一対の円孔を穿孔し，吊り下げて使用することが可能な形態は，後期初頭以来の本来的な機能を残存したより古い様相である。236～239は石器で，いずれもサヌカイト製である。236は横長剥片石核である。旧石器時代に遡る可能性がある。237は上下端に潰れがみられることから，楔形石器とした。238・239は剥片で，僅かに使用痕を認める。240は木製の曲柄又鍬である。中央で左右に半截し，また笠部頂と刃端部を欠損する。欠損部分が多くまた全面に劣化も進行しているが，おおよその形状は復元され，「木器集成図録」の曲柄又鍬ＤⅢ類（上原他1993）に分類される。なお，樹種は後掲する分析の結果アカガシであった。上記



第56図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図７（１/４）

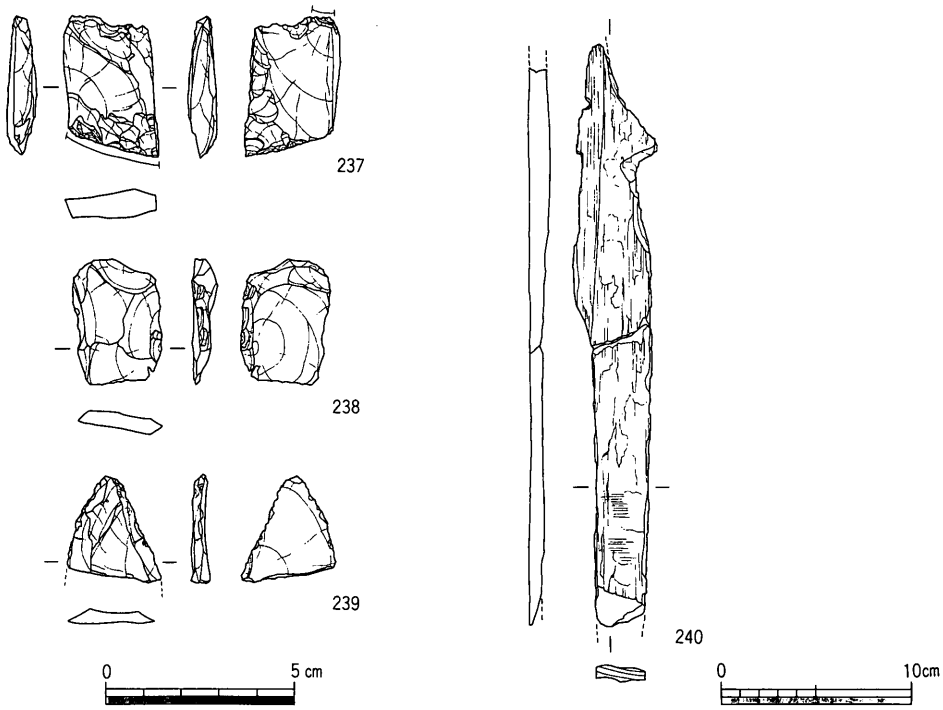


第57図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図８（１/４）



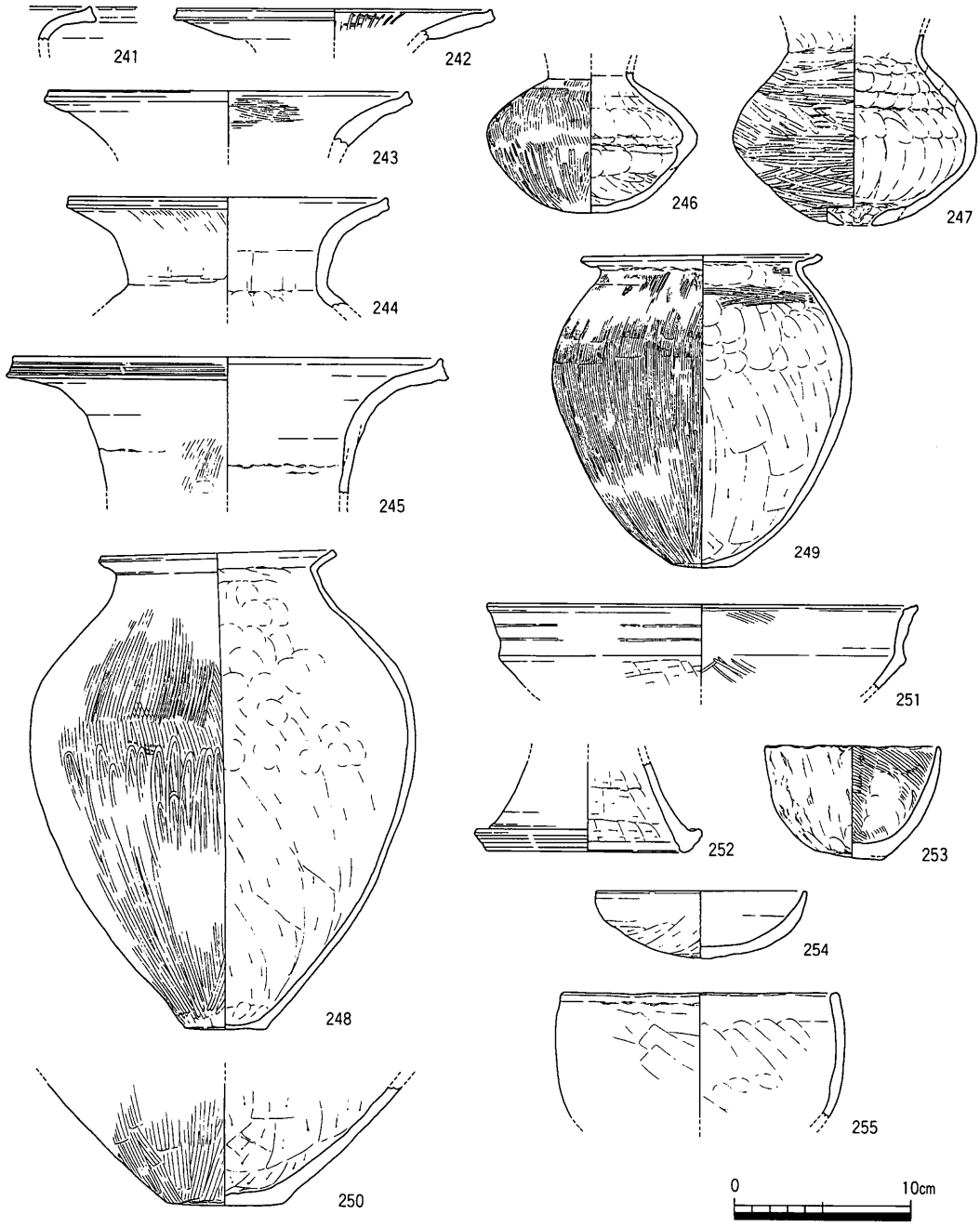
第58図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図９（１/４・２/３）

下層出土の遺物は，若干後出する可能性のある遺物群を含むものの，概ね弥生終末期前半の下川津Ⅳ～Ⅴ式期（大久保1997）に位置付けられるものと考える。



第59図　10ａ区谷７下層出土遺物実測図10（１/２・１/４）

241～255は10ｂ区下層出土の遺物である。241～245は広口壺である。いずれも在地系統の広口壺で，241のみ下川津Ｂ類広口壺である。241の口縁端面には僅かにベンガラとみられる赤色顔料の塗彩をみる。242は口縁部内面に放射状のミガキ調整が施される。246・247は細頸壺。246は下川津Ｂ類土器である。体下半部外面は縦方向にミガキ調整されるが，体上半部は縦ハケ調整され，また中央部の横ミガキ調整も省略され，通有の細頸壺の調整とはやや異質である。247は玉葱型の体部を有することから細頸壺としたが，頸部径が太くある種の広口壺もしくは短頸壺になるかもしれない。底部は内面より焼成後穿孔される。248・249は甕である。248は下川津Ｂ類甕の忠実な模倣形態。胎土が異なる他，調整の点では体部外面下半に施されたミガキ調整が，Ｂ類土器特有の下から上への一方方向ではなく，下から上へ工具を動かした後上端で工具を器面から離さずに下へ下ろす，上腕部のストロークを利用した反復作業により施されている点が唯一異なる。249は小形甕である。胎土中には角閃石と黒雲母粒を顕著に含むが，やや石英・長石粒が多く，また角閃石粒が通有のＢ類土器の胎土に比してやや少ない印象を受ける。形態的・調整手法上は，体部が丸味を増し，口縁部が矮小化し，頸部内面の稜が鈍化した下川津Ｖ式段階のＢ類甕の特徴をよく示す。250もＢ類土器の模倣形態と考える。平底の底部より大きく開く体部形状か

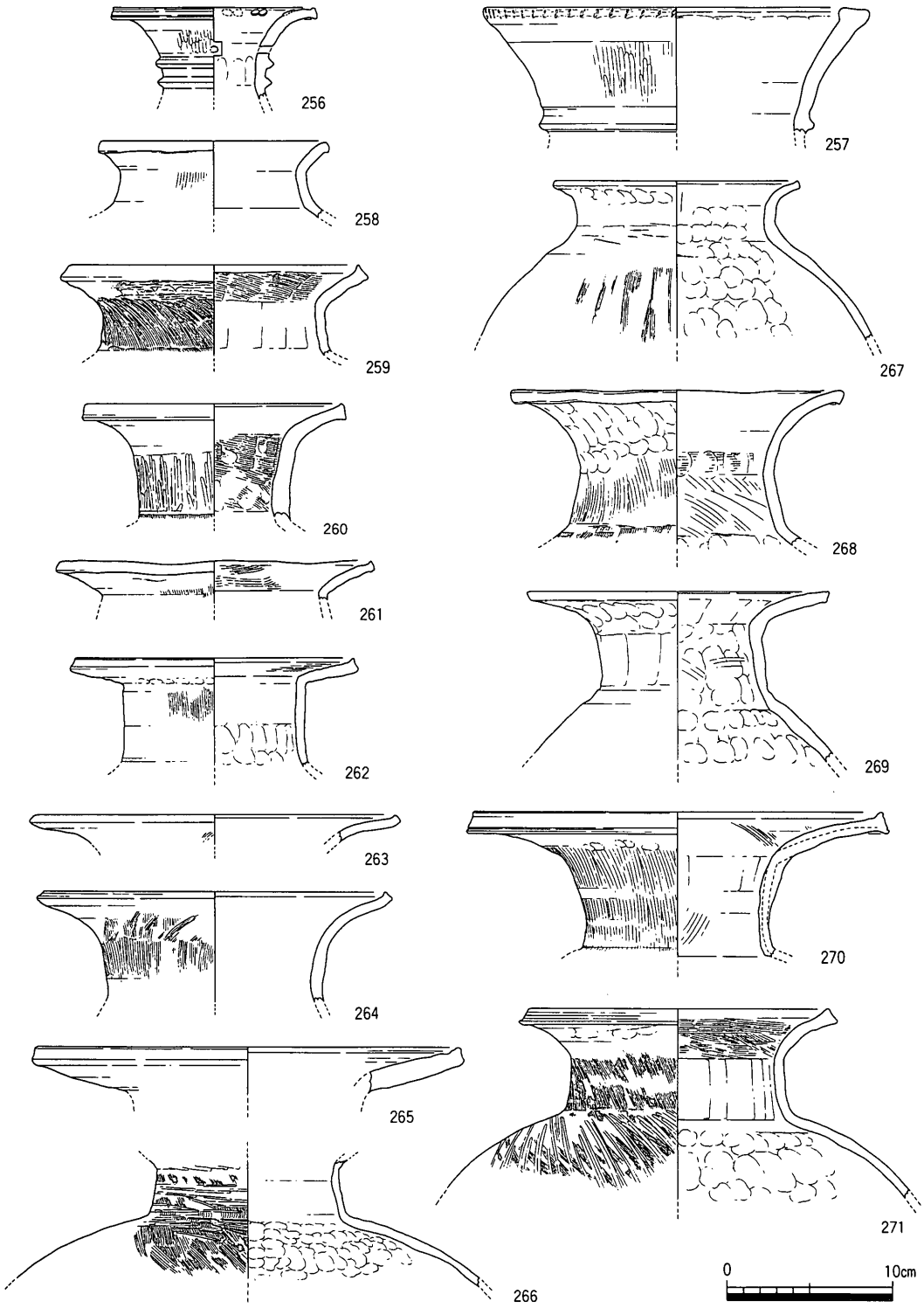


第60図　10ｂ区谷７下層出土遺物実測図（１/４）

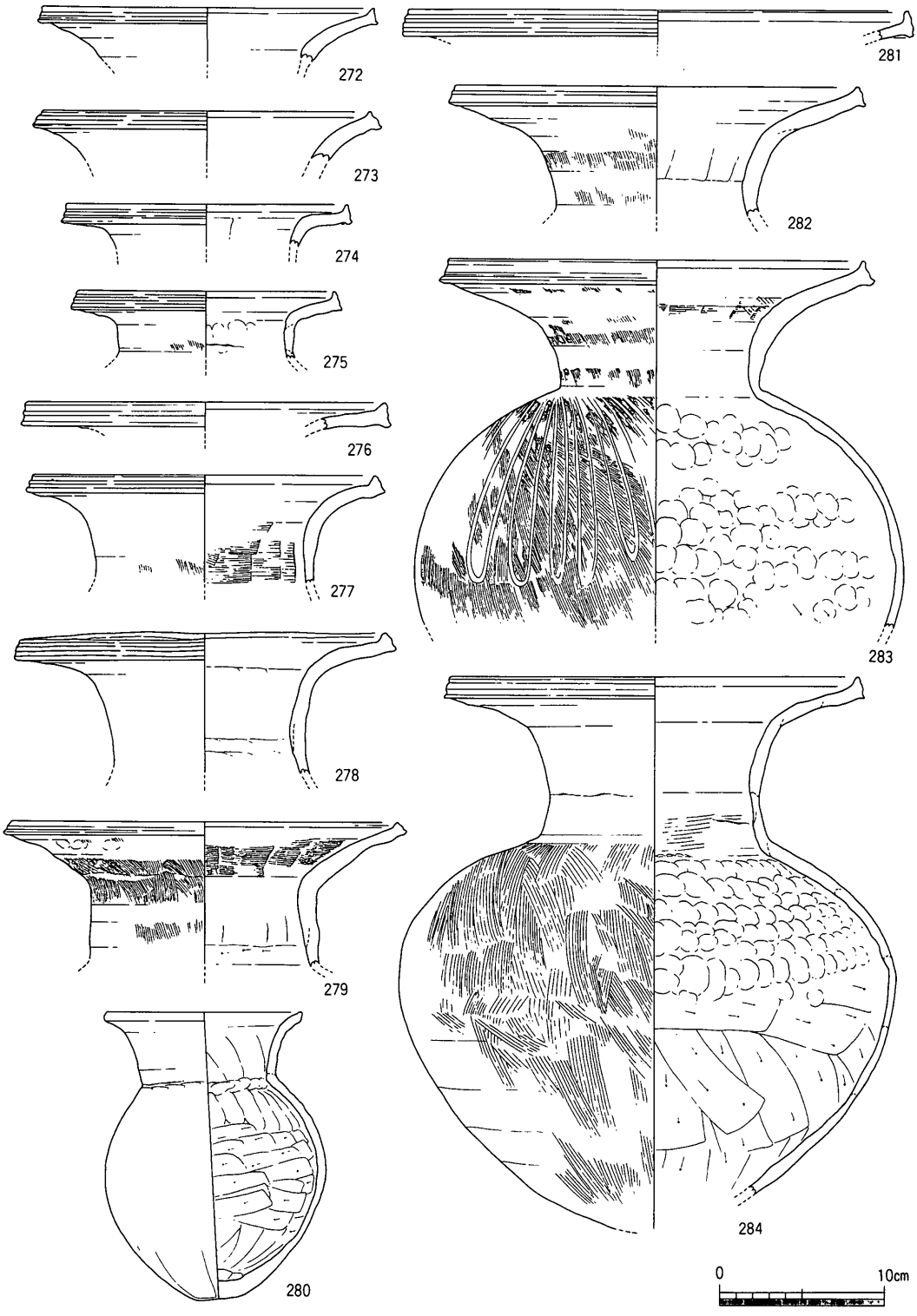
ら，壺底部となろう。外面はＢ類土器に通有の明確なミガキ調整ではなく，ヘラナデ調整といったものに近い。また，外底面にも同様の調整が施される点は，Ｂ類土器にも共通する手法である。251は下川津Ｂ類土器である。高坏坏部としたが，坏上半部の外反度が弱

く鉢となる可能性も残る。252は高坏脚部であろう。脚端部は主に上方へ摘み上げられ，端面には鈍い２条の凹線文を施す。弥生時代後期初頭前後に位置付けられ，胎土中には角閃石と黒雲母を多量に含む。253～254は小形鉢，255は中形鉢である。253は小碗形態で，外底面には円盤状の小粘土塊を貼付して不明瞭な平底をなす。256は浅皿形態で，底部外面のケズリ調整は口縁部直下にまで達する。上記した遺物は，やや時期の遡る252を除いて，10ａ区下層の遺物群とほぼ同時期，下川津Ⅳ～Ｖ式期に併行すると考えられる。

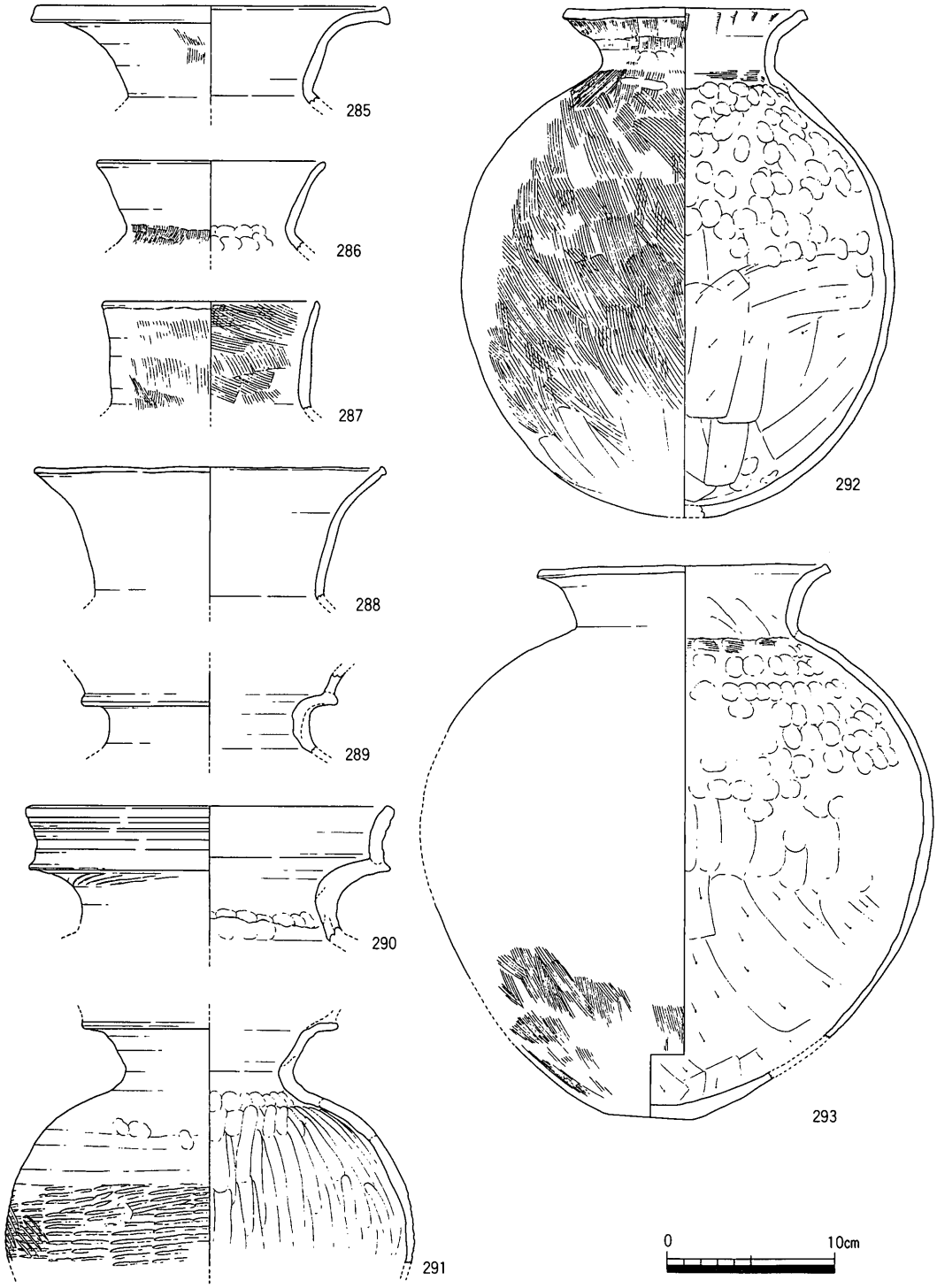
256～460は10ａ区中層出土の遺物である。256・257は弥生時代中期中葉に遡る広口壺である。256は善通寺市矢ノ塚遺跡ＳＤ85037・ＳＸ85005等に類似形態をみる。頸部外面の突帯上位に一対の小円孔を穿つ。258～286・288・292・293は概ね布留式最古相期，大久保編年下川津Ⅵ式（大久保1997）を中心とした時期に併行する広口壺と考える。口頸部を中心に様々なバリエーションを有するが，基本的な形態は先の下層での４分類に集約され，さらに緩やかに外反して開き端部の拡張に乏しい286・288が追加される。本資料についても内傾する頸部を有する形態（258・259・265・266？・271）が少ない点は，下層と共通する。地域色と捉えることも可能だが，やはり時期的に本形態の衰退期にある点は否めない。259の頸部外面には，ある種装飾的ともみえる斜め方向のハケ調整を施す。265は下川津Ｂ類土器でいわゆる鶴尾タイプとされる広口壺。口径の点から大形壺となろう。内外面ベンガラとみられる赤色顔料により塗彩される。266は口縁部を欠いているため，二重口縁壺となる可能性も残す。頸部から肩部外面にかけてランダムなミガキ調整を施すが，類例は乏しい。271は当該期の特徴をよく示す。口縁端部の形状は後述する甕Ｃのそれに近似し，肩部には右下がりの細かなハケ調整の後，283と共通する放射状の反復ミガキ調整を認める。260・262・279は頸部が直立するタイプの広口壺。概して東讃地域に多い。また，前記内傾頸部形態の広口壺と共に，当該期にはほとんど残存しない形態と考える。260は口縁端部が直立し，下層の時期まで遡る可能性が高い。262は下川津Ｂ類土器である。本形態のＢ類広口壺も当該時期まで残存するかどうかはまだ検討の余地があろう。279の口縁部内外面には煤が付着する。口縁端部の形状は甕Ｃのそれに近似し，当該時期に位置付けられる資料である。264・268・270・272・273・277・278・280・282～285・292・293・296は頸部が外傾する広口壺。当該時期において最も頻出する形態である。このうち口縁部が強く折れて水平に近く開く270・285・292・293・296と，口縁部の屈曲の緩やかな他の一群とに細分することが可能で，それぞれ系譜を異にすると考える。後者が当該期の中心となるタイプで，口縁端部への凹線文による加飾が著しい。前者はどちらかといえば



第61図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図１（１／４）

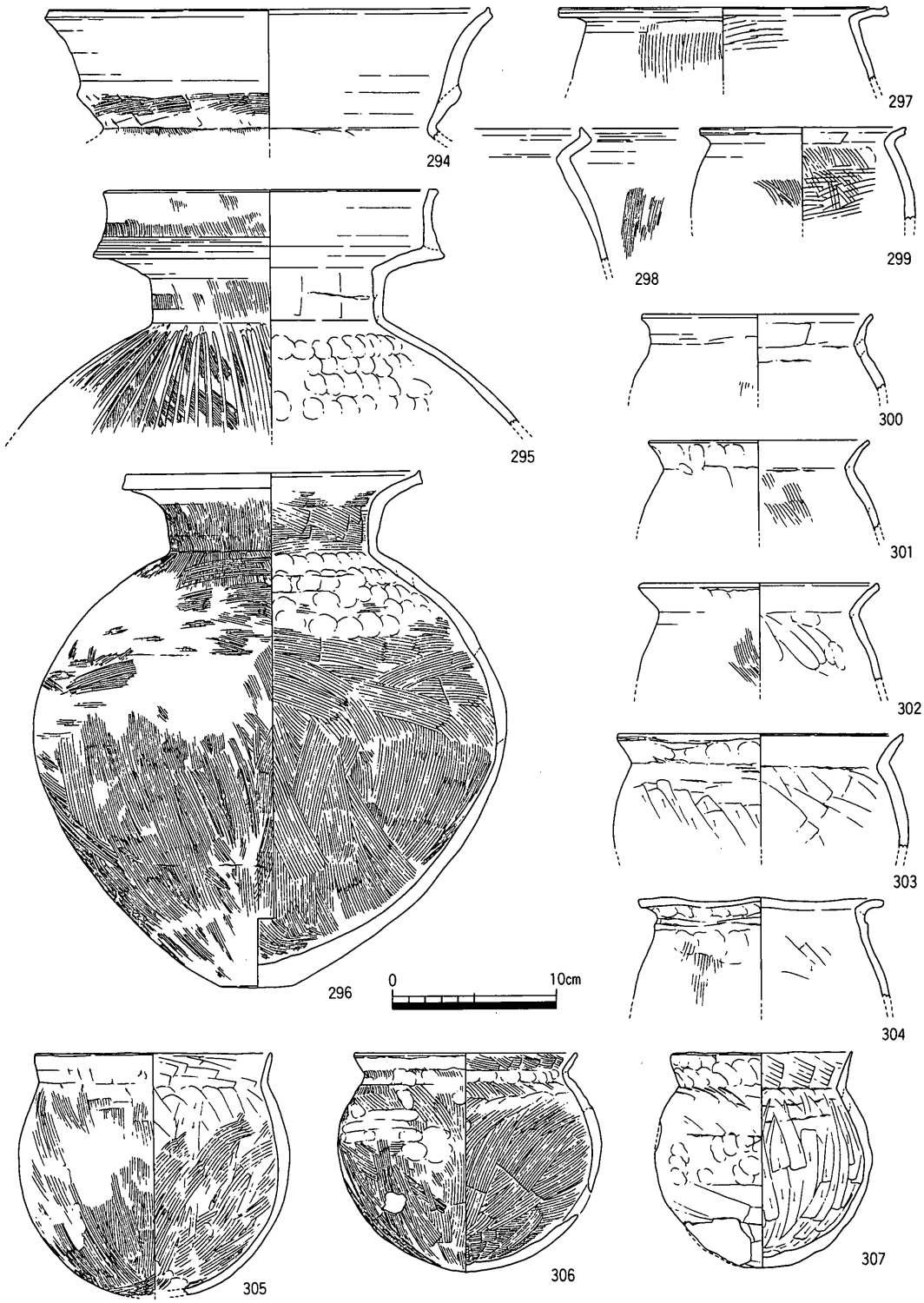


第62図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図２（１/４）



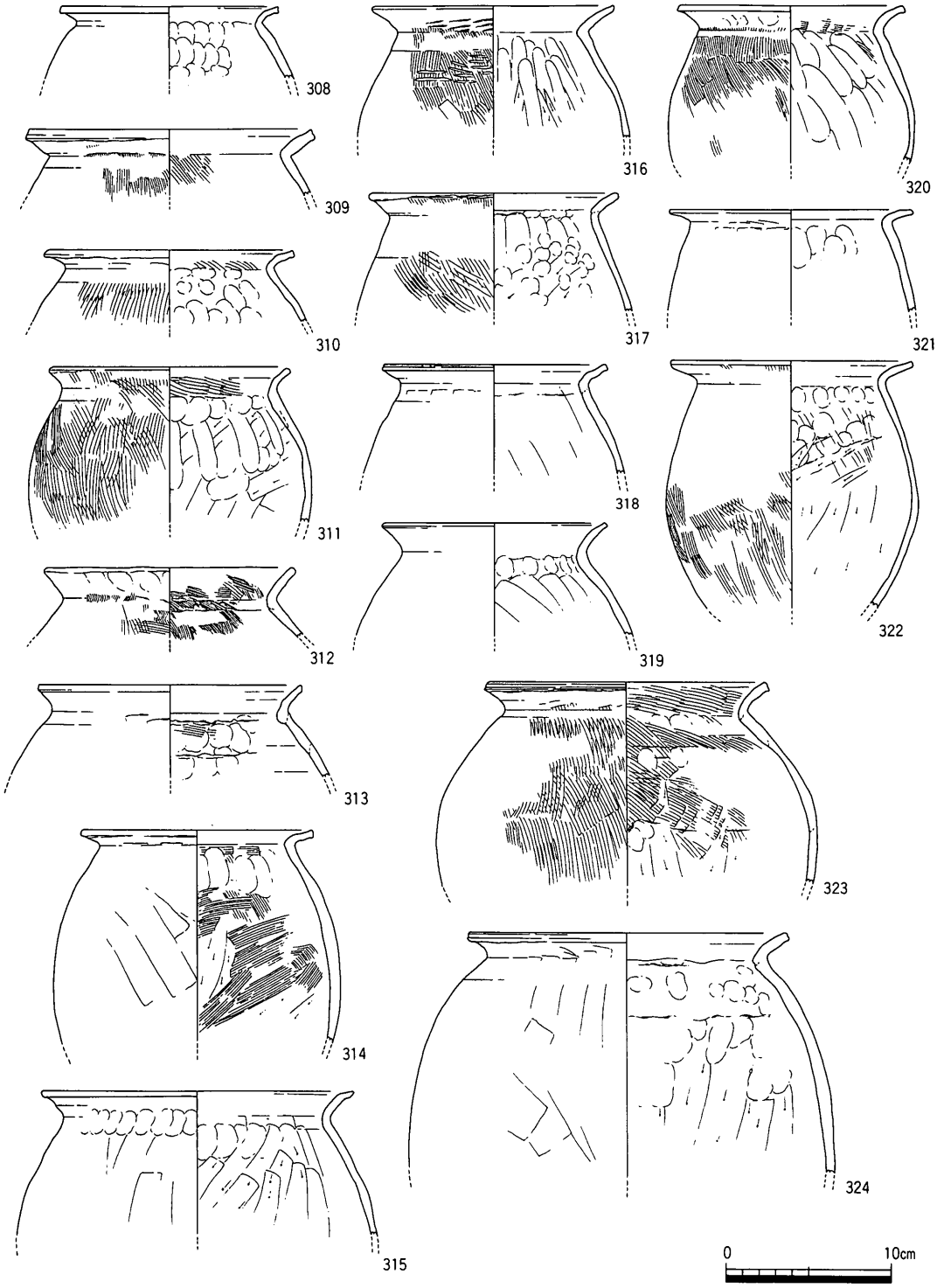
第63図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図３（１／４）

西讃域を中心に分布し，加飾に乏しい。後者には，口縁端部を上下に拡張し頸部が相対的に短い282・283と，上方に強く摘み上げ頸部がやや長く頸基部が内傾する277・278・284の２者があり，どちらも併存するものと考えている。268は粗製の壺であり，必ずしも当該分類には合致しない。また前者では，口頸部が大きく発達する270・282と，口頸部が矮小化した280・292・293・296がある。296の頸部は，外傾度は弱いが口頸部の形状はよく本類の特徴を示しており，また倒卵形を呈する体部に小さな平底を有する点から，当該時期に位置付けられるものと考える。この点で，体部球形化の進展した292は，より後出する可能性が高い。なお，270・274は胎土中に角閃石と多量の黒雲母粒を含み，Ｂ類土器に近似した素地粘土を選択する。しかしＢ類土器そのものではなく，この点は第３章で後述する。短頸形態の広口壺には267・275の２点のみ認められ，本形態も一貫して主流とはならない。最後に緩やかに外反しつつ開く286・288は，当該時期前後に出現すると考えられ，系譜関係については今一つ明らかではない。287は直口壺としたが，小片のため別器種となる可能性も残る。289～291・294・295は二重口縁壺である。291は口縁端部内面に，明瞭な剥離痕を認めることから二重口縁壺と判断した。体部外面にタタキメ痕を顕著に残す。二重口縁壺は，直立ないしはやや内傾する頸部を有する290・295と，明確な頸部を持たない294に大別され，さらに前者は直立気味に立ち上がり外反して開く口縁部形態の290と，やや内傾する口縁部形態の295に細分される。後者は，10ａ区下層の136と同系譜の二重口縁壺であり，一次口縁の外反度が弱くより二次口縁部と一体化が進んだ294が後出するものと考える。290は一次口縁外面に多条の鈍い凹線文が施され，阿波地域との親縁性が窺える。295は内傾して立ち上がる二次口縁部と，二次口縁部外面下端における凹線文の施文から，下川津Ｂ類二重口縁壺の系譜上にあることは間違いない。297～380は甕である。297・298は弥生時代中期中葉に遡る資料。先の壺同様，甕においても当該時期の遺物が極微量ながら出土している。器表面は一様にローリングを蒙っており，より上流域に当該時期の遺跡が展開した可能性を示唆する。なお，297は胎土中に多量の角閃石・黒雲母粒を含むが，典型的なＢ類胎土ではない。299以下が，下層からの混入を除けば布留式最古相併行期前後に下る資料である。甕については，搬入土器を除いても個体差が激しく，明確な基準で分類することは一見困難である。このことは甕本来の多機能的な側面と共に，甕の製作にあたって，工人の持つ伝統・技術が幾重にも折り重なって各個体に顕現されているからに他ならない。しかし，微細な個別要素を取捨すれば，「く」字外反口縁で，端部は四角く納め，頸部内面には明確な稜を認めず，体部外面はハケ調整が卓越する320・323・

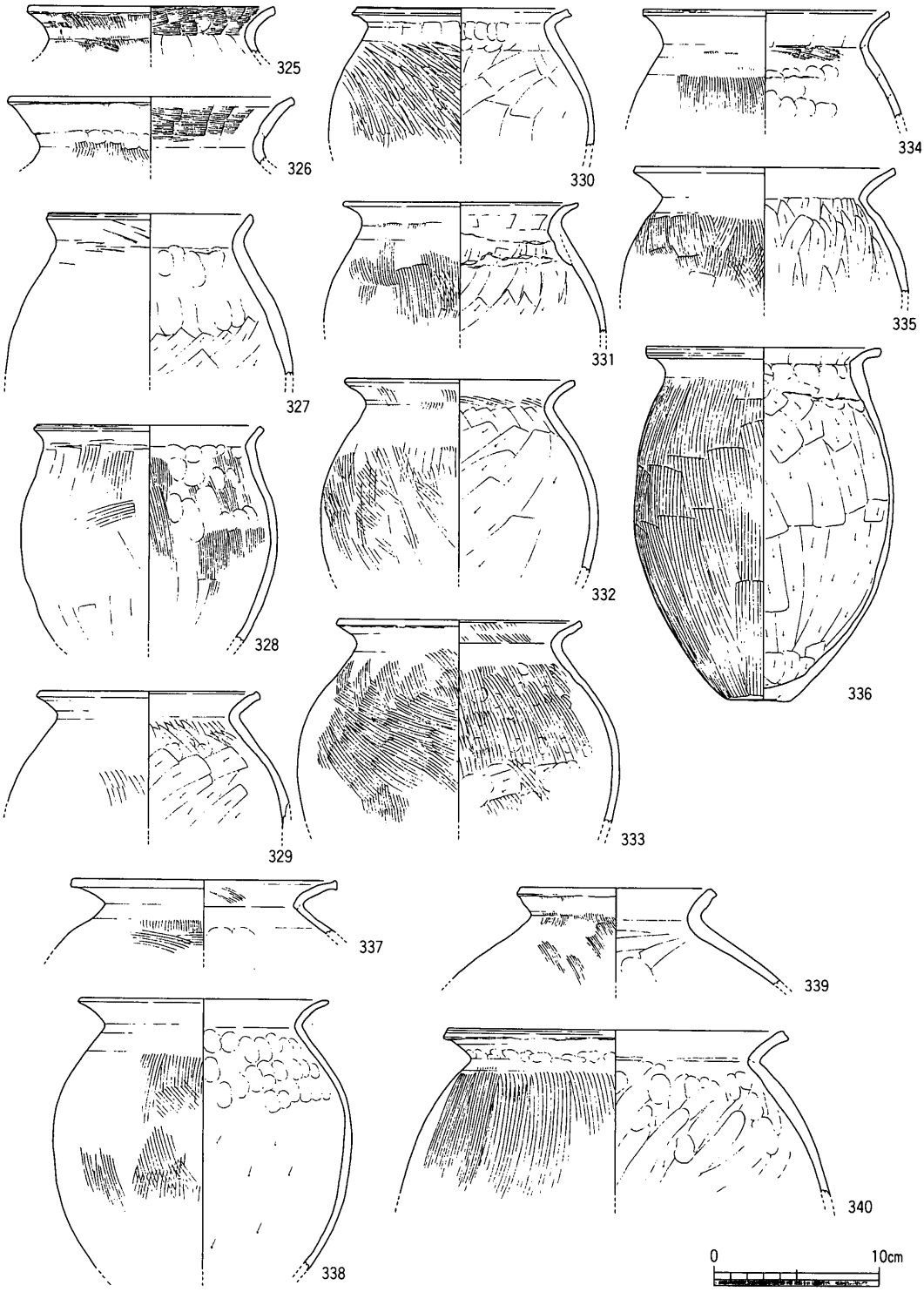


第64図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図４（１／４）

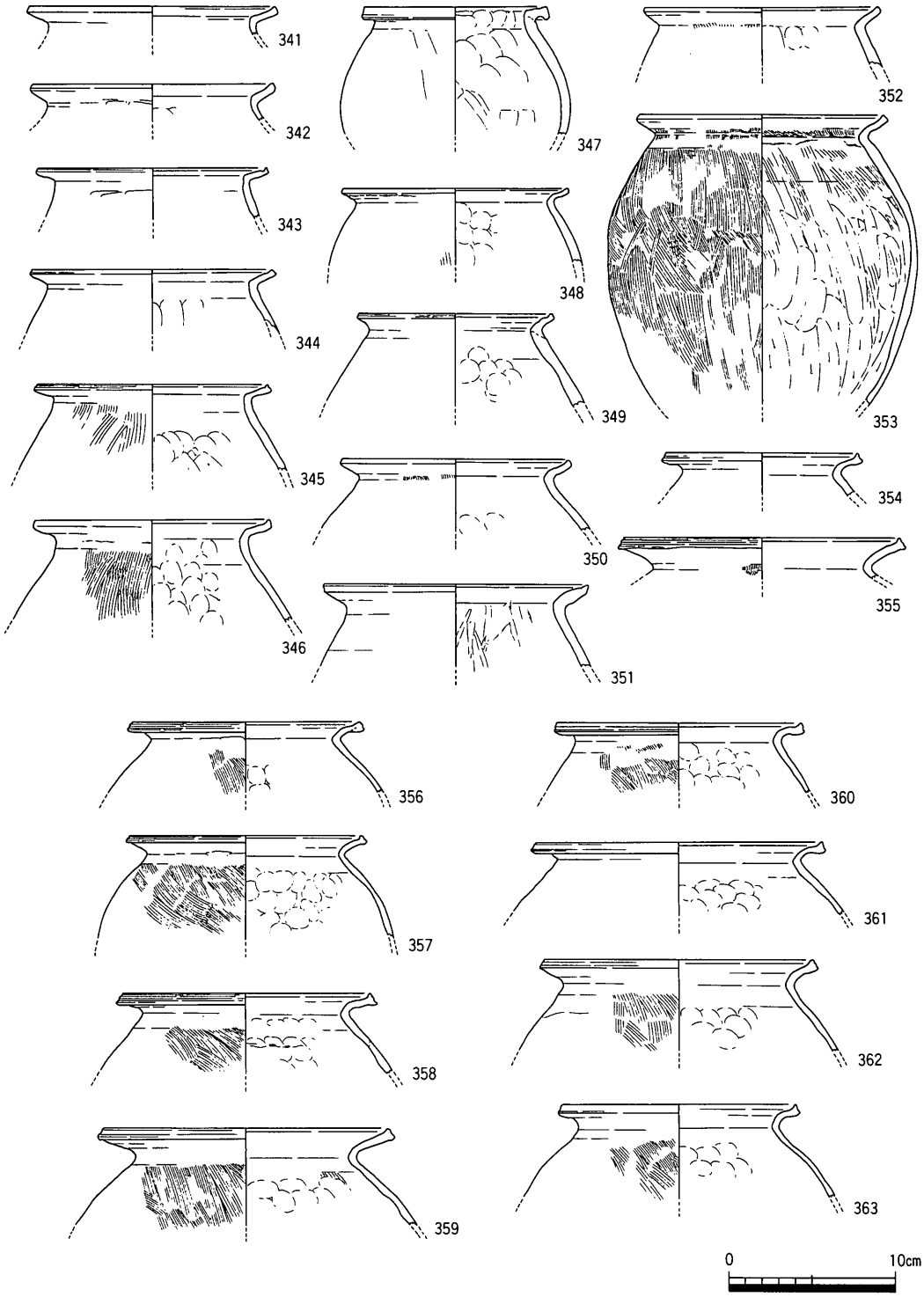
332・333・338等が，最もポピュラーで伝統的な形態として抽出されうる。一方で，下川津Ｂ類甕の系譜上にあり，当該時期より出現し盛行する形態として甕Ｃがある。299～308は小形の甕となろう。302のように口縁端部を上方へ摘み上げる形態は，甕Ｃの一定の影響を考慮すべきであろう。また体部外面はハケもしくはナデ調整が一般的であり，303のような縦方向のケズリ調整は例外的で，むしろ鉢に多用される。体部内面の調整も，ハケもしくはナデ調整が卓越し，307のようなケズリ調整は例外的である。306の体部には焼成後の穿孔が認められる。また307の体部外面には，４ヶ所の最大径４cm程の楕円形の剝離痕があり，さらに層状に剝離している部分も認められる。剝離面の色調は器表面の色調と同一であり，外面には２次的な煤の付着や使用痕は認められない。したがって，上記剝離痕等は，焼成時のものである可能性が高いと考える。309～340は「く」字外反口縁甕。口縁端部は四角く納めるものが多数を占め，端部を上方へ摘み上げる314・333・334等は，甕Ｃ等他系統の土器の影響によるものであろう。また端面を強くヨコナデし，端部が鈍く上下に張り出す337，口縁部が大きく発達する326も類例に乏しい。体部外面の調整はハケもしくはナデが一般的で，この部分をミガキ調整する330は例外的である。体部内面のケズリ調整が，頸部付近にまで達する315・331・332・335・336等も，本地域ではあまり例をみず，他系統の影響を想定すべきである。336は口縁部が強く折り返して短く，端部は四角く納めるが，端面は強く横板ナデが施され下方へ鈍く突出する。体部は張りの乏しい砲弾型を呈し，底部は小さな平底が付す。類似形態は，徳島県黒谷川郡頭遺跡ＳＤ115の34（菅原1987）にみることができ，黒谷川例よりはより後出する要素を備えるものの，阿波系統の模倣形態と理解される。341～346は下川津Ｂ類甕。いずれも頸部内面の稜は鈍く，口縁部は萎縮した最末期の様相を呈するが，Ｂ類甕が当該期まで残存する可能性は低く，下層資料の混在であろう。347は小形の甕で，口縁部は短く水平に開き，端部を下方へ摘み出す特徴的な口頸部形態を呈する。Ｂ類甕との一定の親縁性を有すると考える。348～353は下川津Ｂ類甕の模倣及びその影響を色濃く認める形態。体部形状からすれば，348は後の甕Ｃとの親縁性を考慮すべきかもしれない。349は胎土中に角閃石と多量の黒雲母粒を含むが，Ｂ類土器のそれではなく，第３章で後述する胎土３類に相当し，丸亀平野西部域等からの搬入の可能性が高い。いずれにしろ348を除いて，Ｂ類甕が衰退する当該期までは残存しない形態と考える。354～377が甕Ｃである。下川津Ｂ類甕及び東阿波型甕の影響下において当該期前後に出現し，以後本地域の甕形態の主流となる。しかし，その系譜関係については阿波地域の様相に不明な点が多く，今一つ明らかではない。甕Ｃについては



第65図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図５（１/４）

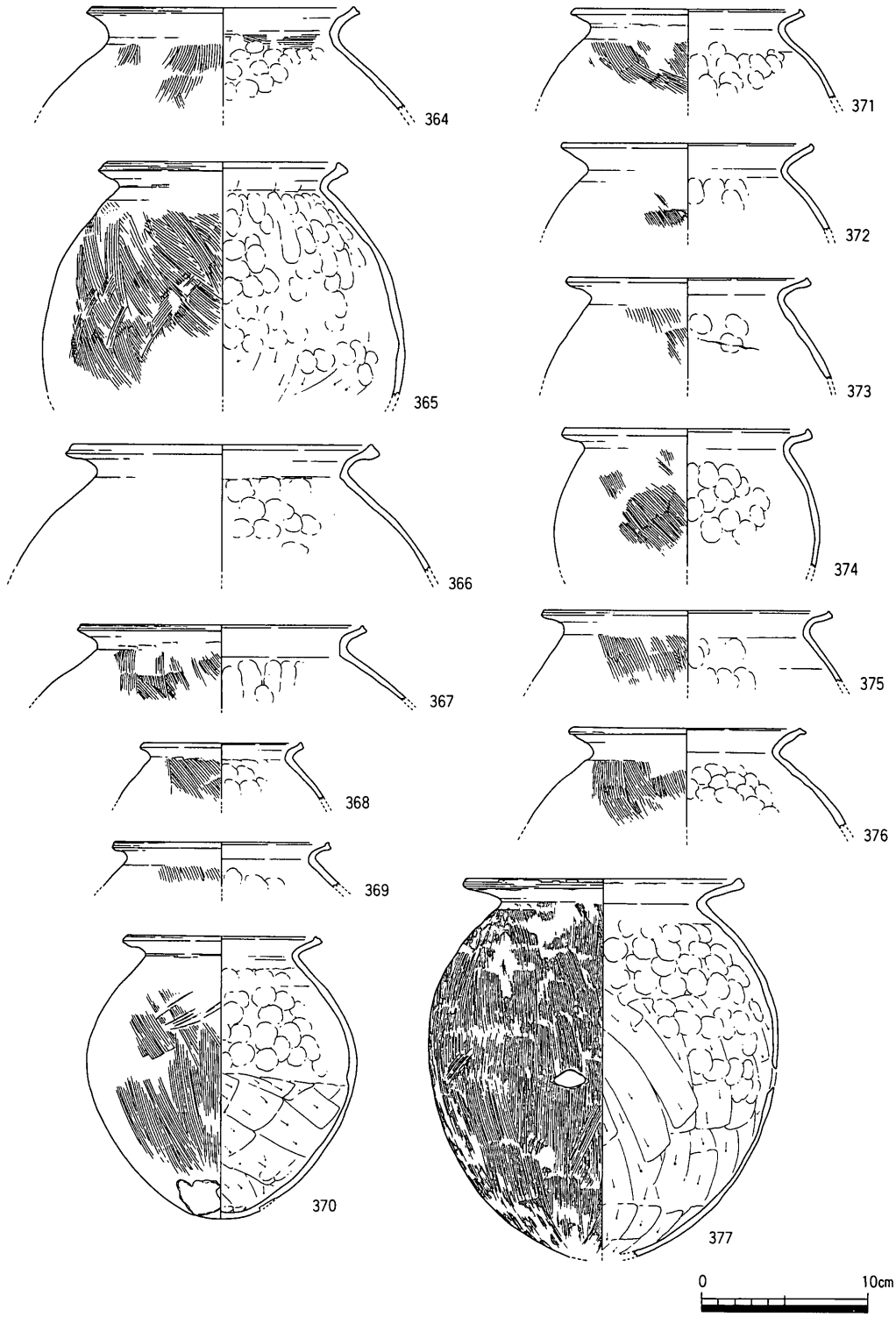


第66図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図６（１/４）



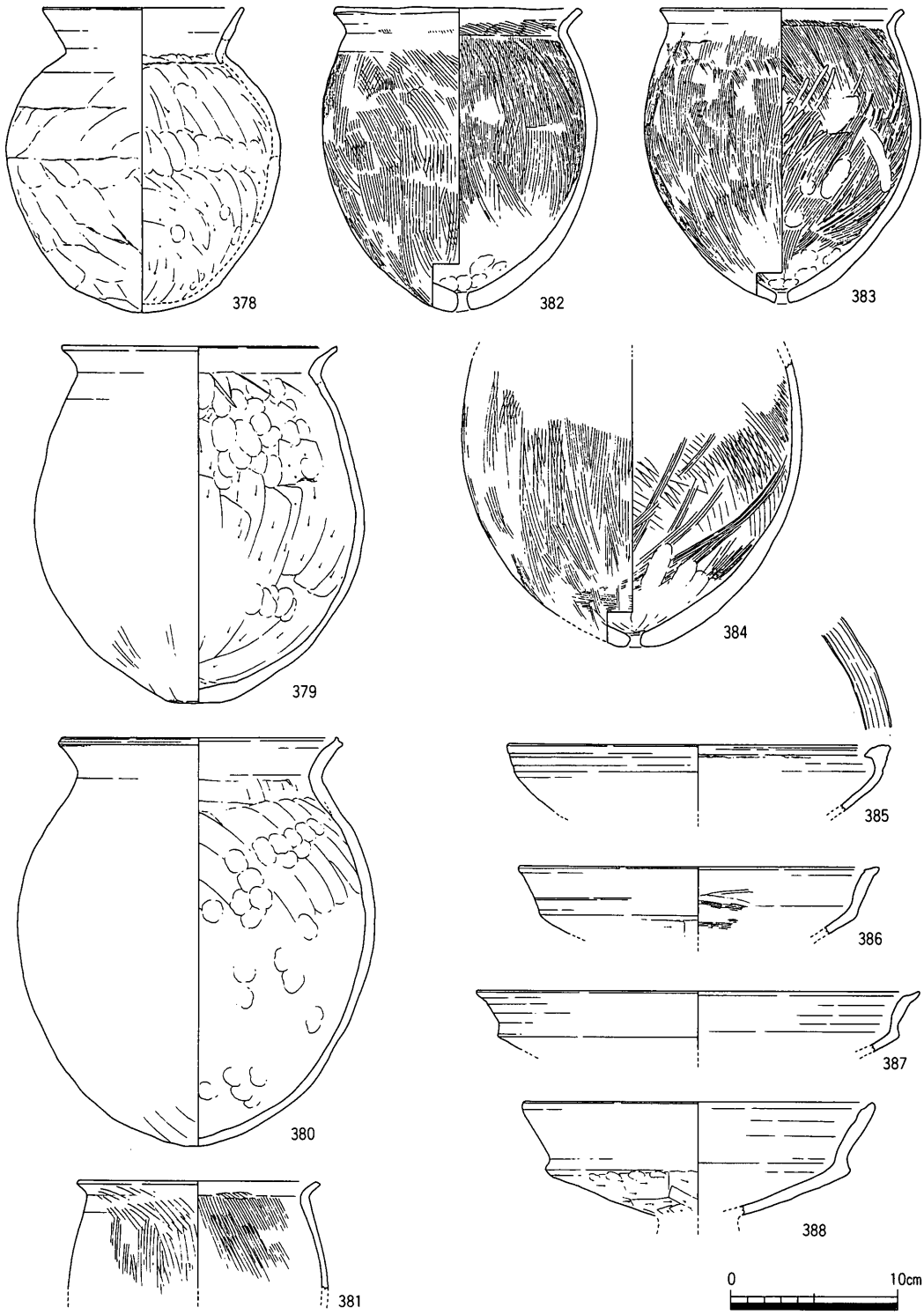
第67図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図７（１/４）

第４章で詳述する。甕Ｃは，小形形態の354・368～370と，通有の中形甕の355～363・371～377と，大形形態の364～367の３種に分かれる。いずれも形態的な差異は乏しく，口頸部は強く折り返して外反して開き，端部は上方へ摘み上げる。頸部内面はナデ付けられて，明確な稜を認めない。体部は倒卵形ないしは球形を呈し，底部は丸底となる諸点で共通する。口頸部及び体部形状と，体部外面のハケ調整が右下がりとなる点で，Ｂ類甕との間に差異を見出し，東阿波型甕との親縁性が高い。口縁端部の摘み上げが強く，端面に鈍い２条の凹線文が施され，口縁部がやや短い356・358・360・365等が東阿波型甕の特徴をよく反映して最も古く位置付けられ，端面の拡張がやや乏しく凹線文が鈍い窪みに退化し，やや口縁部が伸びた359・361・370・375・377等が後出し，端部が上方へ小さく摘み上げるのみで，端面にはもはや凹線状の段をも認めず，口縁部の器壁が薄くなる368・372・373等が最も新しく位置付けられ，布留式古相併行期以降存続するものと考える。しかし，上記３タイプは単に型式学的な変化であり，これら３者が当該期において併存する可能性は十分にあり得る。なお，377の体部中位には焼成後に穿孔を伴う。378はやや内湾気味に開く口縁部形態から，布留系甕の影響とみることもできよう。しかし，調整手法は在地系統のものである。379・380は「く」字外反口縁甕。379のような下膨れの体部形状は類例に乏しい。380は端部を上方へ僅かに摘み上げる点に，甕Ｃの影響を認める。体部はやや長胴化した球形を呈し，底部は丸底である。381～384はいずれも底部に焼成前に小円孔を穿つことから，底部穿孔甕とする。384は体上半部を欠損するが，残存部の形状が通有の穿孔鉢とは異なり体上半部が内傾することから，382等と同形態の底部穿孔甕と判断した。なお，381は胎土や形態から383と同一個体の可能性が高いが，接合できなかったため別個体として図示しておく。器表面はいずれもハケを多用して丁寧に調整されている。また精選された素地粘土が選択され，角閃石と黒雲母をやや多量に含み，第３章に記述する丸亀平野西部域等からの搬入土器と考える。381の口縁部及び383の体部外面の一部に，赤色塗彩を認める。なお，383の内底面は磨耗の度合いが他の部位と比してやや著しい。用途・機能を反映しているものともみられるが，詳細は不明である。さて，通有の底部穿孔土器は，外反する口縁部を有するものでも頸部があまり締まらず，体部最大径と口径に顕著な開きのない鉢形態をとるものが一般的であり，本例のような甕形態は類例に乏しい。本地域においては，現状で底部穿孔鉢は弥生時代後期初頭前後より器種組成の一端に加わるが，その最末期にあたる当該期には，口縁部の紐孔を欠落するものや，底部穿孔が一孔ではなく多孔形態のものなどバリエーションが増加し，本来的な機能を喪失しつつある状況が想

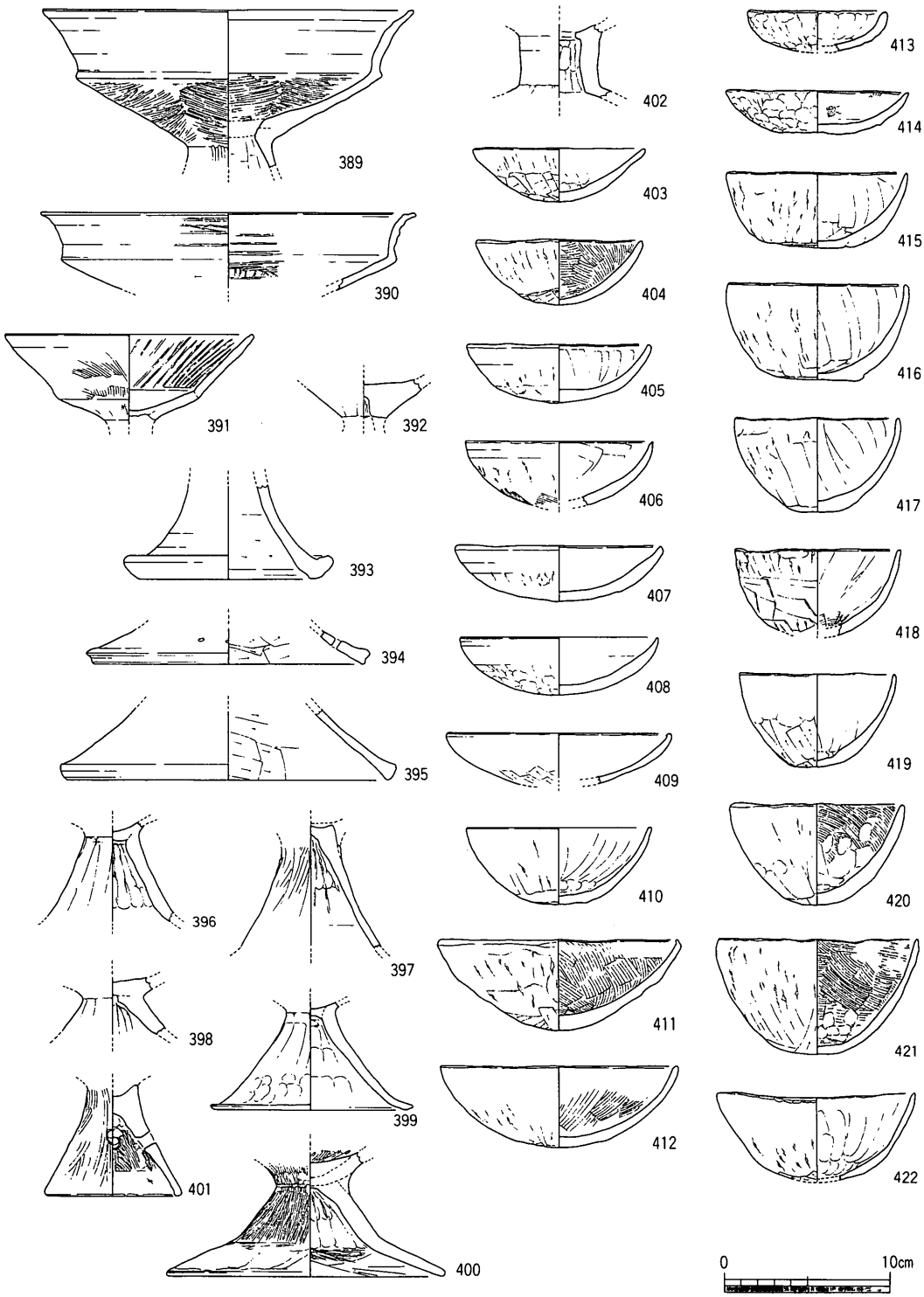


第68図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図８（１/４）

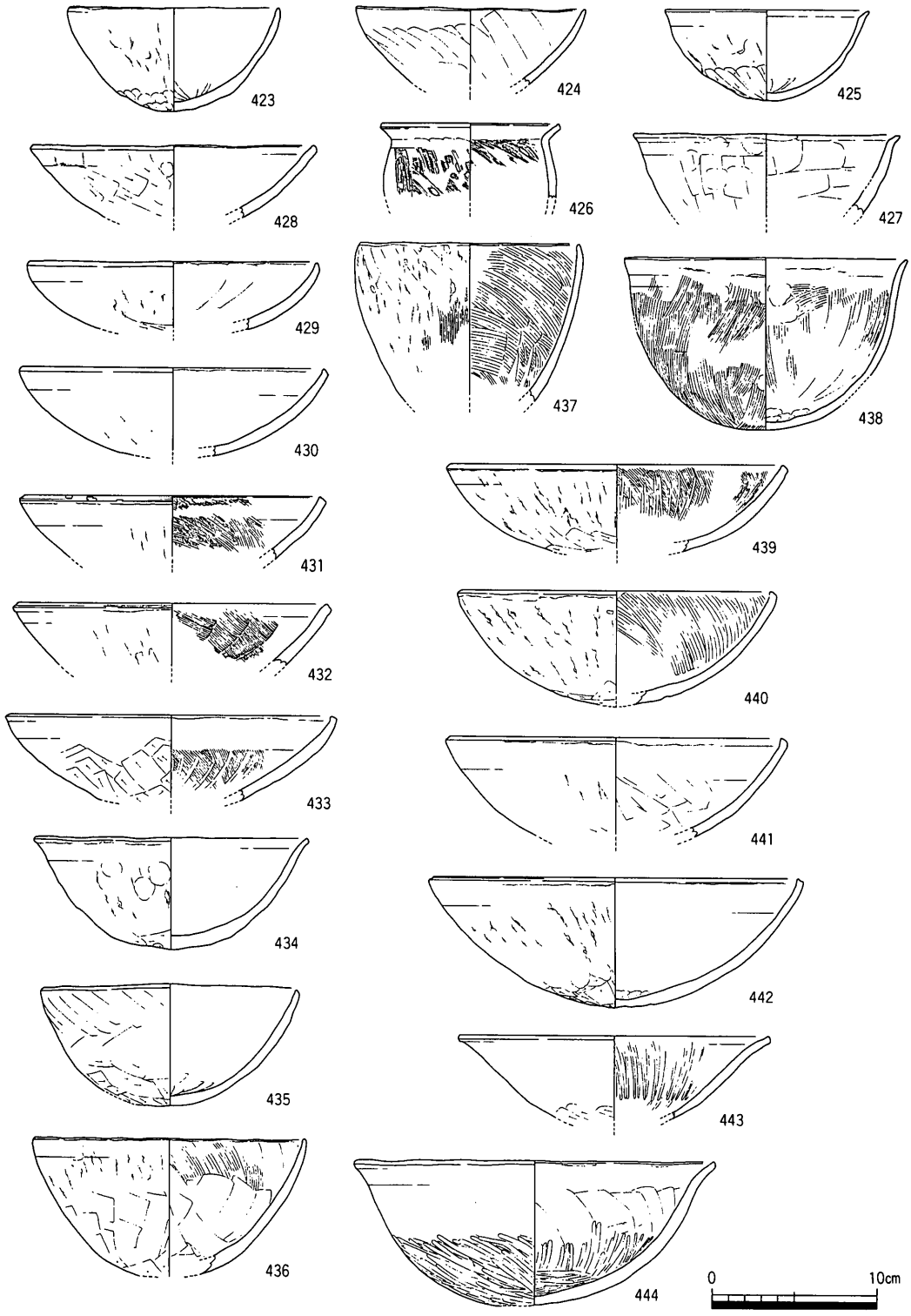
定される。本例もそうしたバリエーションの一つとして位置付けられるものと考える。385～400は高坏及び脚部である。385・393は弥生時代中期に遡る形態。いずれも顕著なローリングを受ける。また胎土中に多量の角閃石と黒雲母を含み，搬入品と考える。386・387・389・390・394・395は下川津Ｂ類高坏と同脚部。坏部の深い389がやや後出する形態となろうが，いずれにせよ当該時期まで残存するものではない。また，390は外面に辛うじて赤色塗彩を認める。388は胎土中に多量の黒雲母粒を含む，丸亀平野西部域等からの搬入品である。形態はＢ類高坏を模倣するが，端部形状にやや稚拙さを認め，また坏下半部内外面の分割ミガキを省略する点が異なる。391は，坏部中位で屈曲して上半部が直線的に大きく開く坏部形態を呈し，坏上半部内面に放射状のミガキ調整を施す。布留式古相併行期に中・東讃域で甕Ｃと共に普遍化する高坏であるが，当該時期に遡るかどうかは検討の余地を残す。392は明らかに布留式中・新相併行期に下る高坏坏部。調査時のミスにより，最上層から混入したものであろう。脚部形態には，脚柱部より屈曲して裾部が開く396・397・398・400と，緩やかに外反してラッパ状に開く399，内湾気味に開く401の３タイプがみられる。前者が一般的な形態であり，後２者は小形器台の脚部となる可能性も残る。なお，401は東海系の影響を想定することも可能と考えるが，より類例の増加を待ちたい。402は円柱状の脚柱部を有する形態で，受部中央に小円孔が穿たれることから，器台脚部であろう。403～414は浅皿形態の小形鉢，415～424は半球状ないしは小碗状を呈するやや深めの形態の小形鉢，425～427は外反口縁を有する小形鉢である。このうち426はむしろ甕のミニチュアとすべきか。胎土は精選された素地粘土が選択され，角閃石・黒雲母をやや多量に含み搬入品であろう。浅皿形態のものでは，丸底化は一応達成されており，この部分ケズリ調整を行う403・404・409・411・412と，ナデやハケ調整によりケズリが確認できない405～408・410，指頭圧痕が卓越する413・414の３者がある。先２者においては，成形時のクラックはもはや認められない。なお，406の外底面には籾圧痕を認める。411は口縁端部を内上方へ摘み上げ，内面には螺旋状のハケ調整を施すなど，本資料中においてはやや異質である。一方やや深めの形態を採る414以下では，底部が平底をとどめる415～419と，丸底化の進展したそれ以外のものに二分される。前者では外面に成形時のクラックを残すものが多い。外反口縁を有する425・426は，体部形状は半球形タイプのものとほぼ同一で，中・大形の同形態のものに比して口縁部は極めて萎縮し短い。428～447は中形鉢。中形鉢も小形鉢同様，浅皿形態の428～433・435～438と，半球形タイプの435・436，外反口縁を有する434・438・443～447の３者に分かれる。なお，円筒状を呈する437



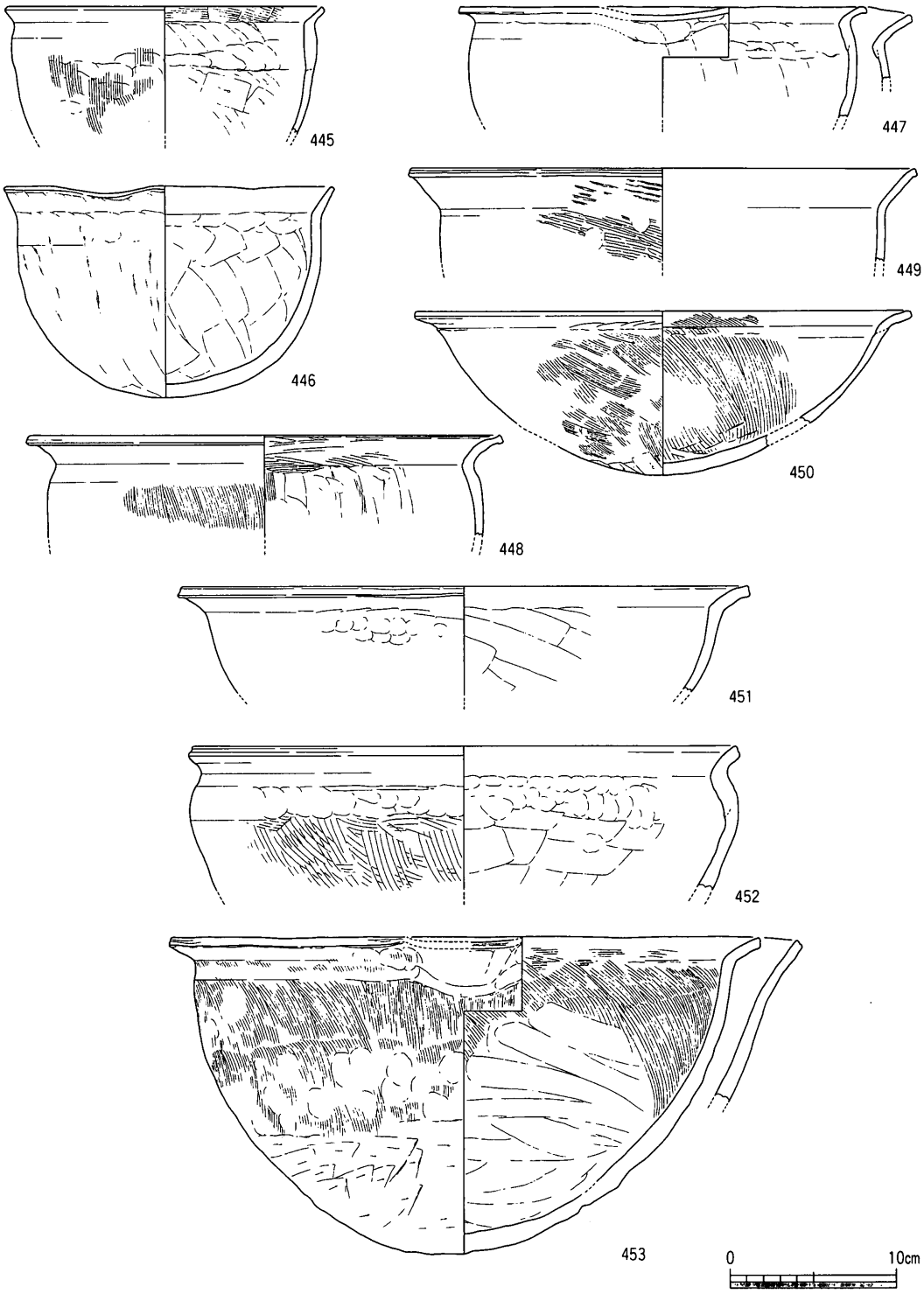
第69図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図９（１／４）



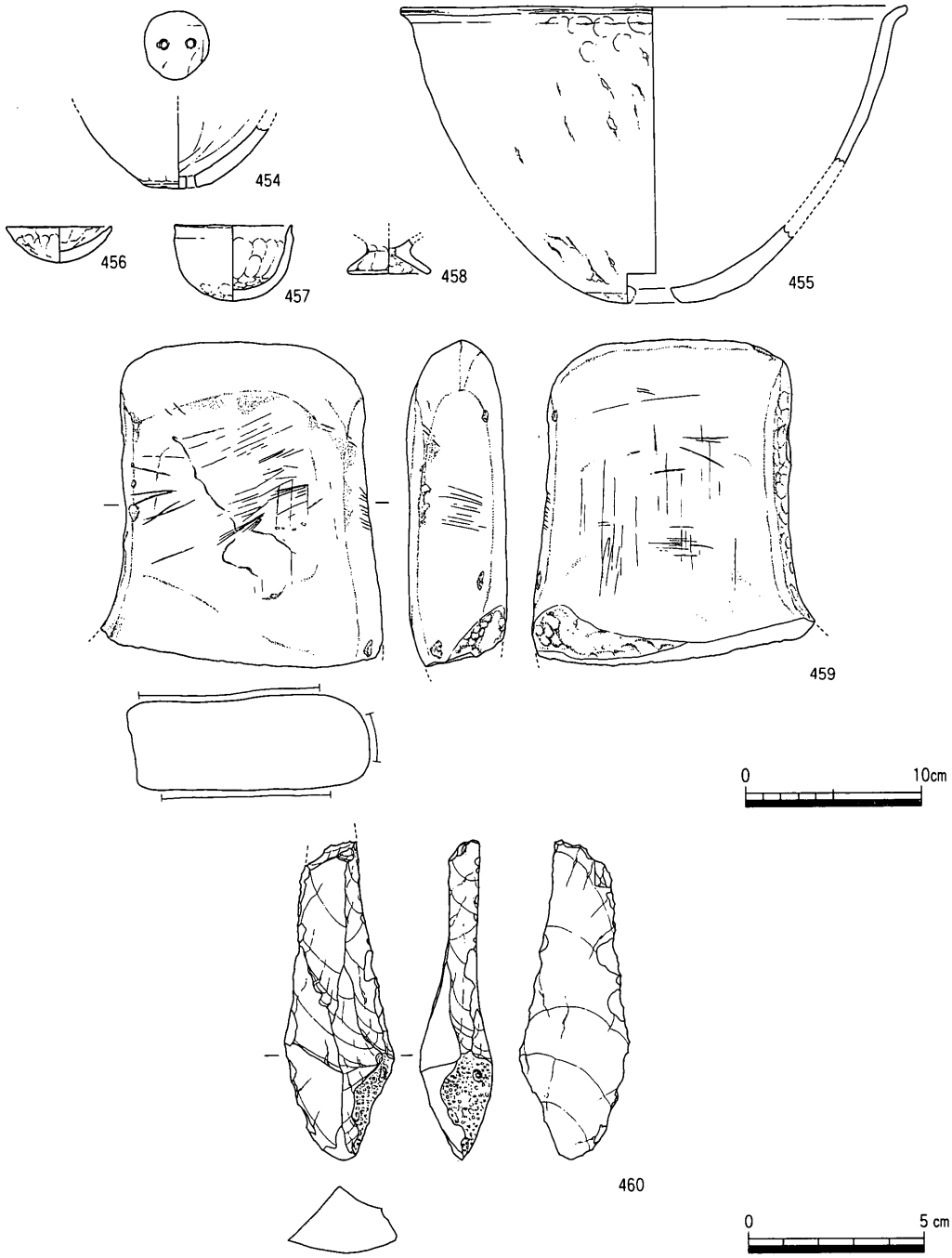
第70図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図10（１/４）



第71図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図11（１/４）



第72図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図12（１/４）

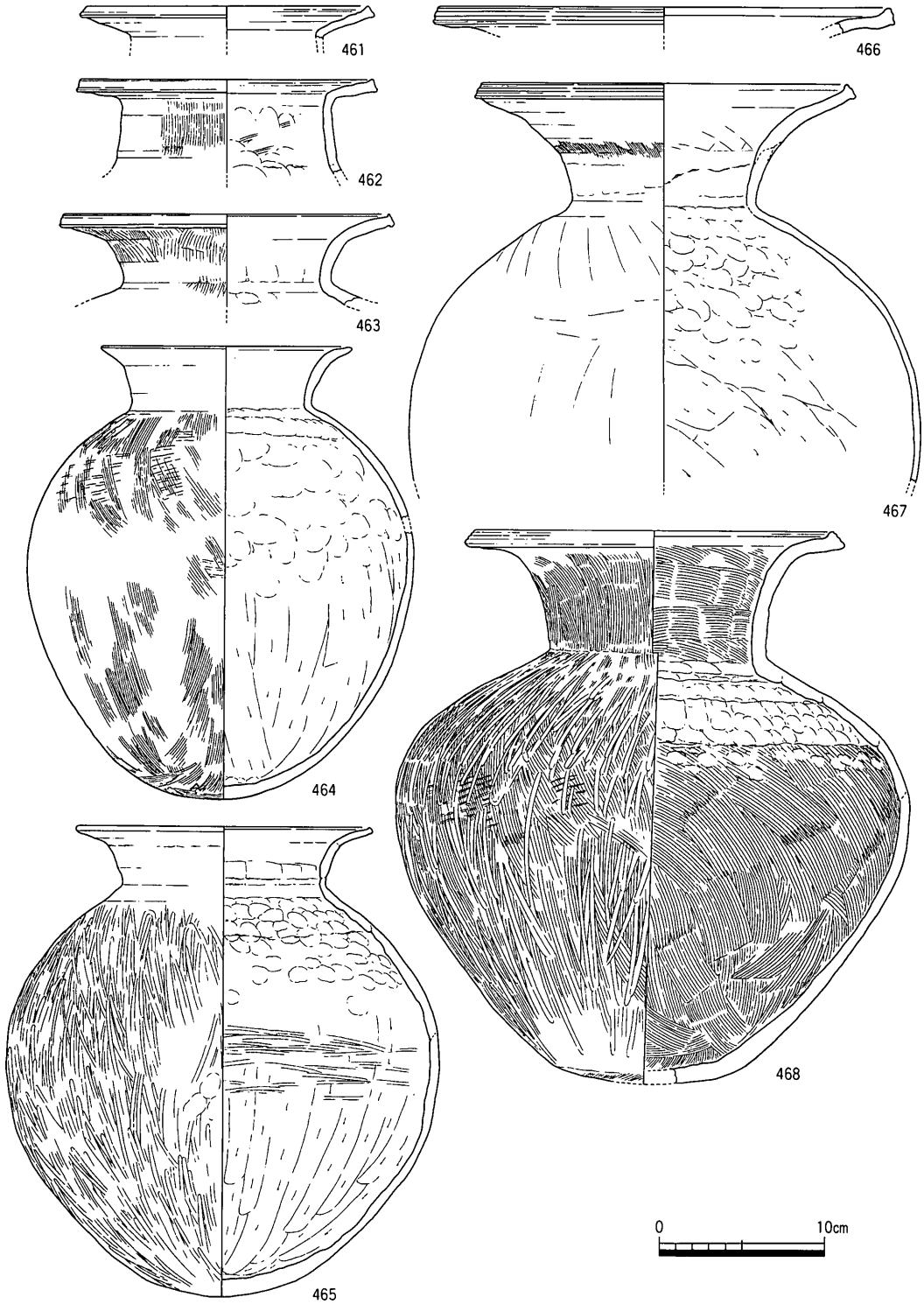


第73図　10ａ区谷７中層出土遺物実測図13（１/４・１/２）

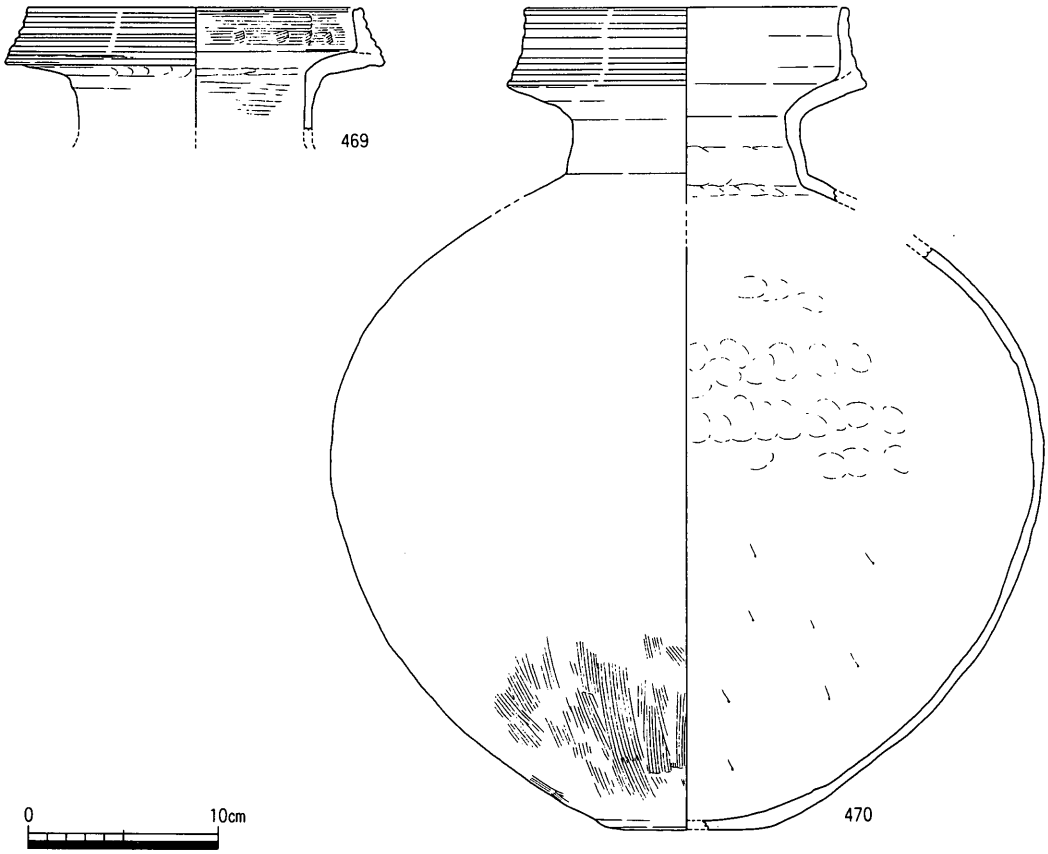
は，底部形状が不明ながら上記分類にそぐわず類例に乏しい。浅皿形態のものでは，口縁端部が四角く納めるのみの428・429・430・432と，内上方へ鈍く摘み出す431・433・439

～442に細分される。なお口縁部形態の差異に関係なく，外面にはクラックを認めるものが多く，底部はケズリ調整により丸底化を達成する。内面に放射状のミガキ調整を施すものは433・439の２例にとどまる。半球形タイプのものでは，小形鉢のように平底をとどめるものはない。外反口縁を有するものでは，器高の浅い444とバケツ状を呈した深鉢形態の445～447に二分される。概して後者に粗製のものがある。また447は口縁部の一端を強く折り曲げて片口となす。443は中形鉢としたが，内面に密な放射状のミガキ調整が観察され，高坏坏部となる可能性も残る。大形鉢では口縁部が外反する形態に限られる。口縁部を中心に若干のバリエーションをみるが，基本的には浅鉢形態の450と，深鉢形態の448・449・455に大別される。453のように後者に片口形態が多い。452のように頸部が強く締まるものはやや新しい傾向であろう。なお，450は胎土中に角閃石と多量の黒雲母粒を含み，丸亀平野西部域等からの搬入品と考える。455の底部には不整形な穿孔を認めるが，焼成前に意図的に穿孔したものではなく，底部穿孔鉢とは異なる。一方，454は口縁部形態が不明ながら，底部に２孔の焼成前穿孔を伴うことから，底部穿孔鉢として報告する。456・457はミニチュア土器鉢である。458は製塩土器脚部の小片である。459は砂岩製の砥石。両広端面と一側面に横及び縦方向の使用痕を認める。また全面に厚く煤が付着しており，火災にあったか炉の周囲で使用されていたものかもしれない。460はサヌカイト製の縦長剥片である。側縁の一部に自然面を残す。

461～529は10ｂ区中層出土の遺物である。基本的な器種組成や時期的な位置付けは，10ａ区のそれと大きな差異は認められない。布留式最古相併行期を中心とした時期に位置付けられる土器群である。461～468は広口壺である。頸部が内傾する461・462と外傾する463～468の２種がある。頸部直立タイプは認められず，頸部外傾形態が主体となる点は，当該期の一般的な傾向である。461・462は下川津Ｂ類広口壺を模倣した形態で，Ｂ類広口壺に特徴的な口縁部内面の凹線状の段を認める。465は体部球形化が進展しており，やや新しい傾向であろう。同様に体部球形化を指向した形態でも，464のように最大径の位置が体上半部にある形態は，倒卵形体部からの過渡的な形態と考えられる。一方で，張りの強い倒卵形体部を呈し，底部が鈍い凸面底となる468も，口縁端部の形状が甕Ｃに近似し，当該時期に位置付け得ると考える。なお，468の体部中位外面には煤が付着する。469・470は二重口縁壺。いずれも二次口縁部が内傾する下川津Ｂ類二重口縁壺の系譜を引くものである。口縁部外面には多条の鈍い凹線文が施され，直接的にＢ類壺の系譜を引き継ぐ。471～491は甕である。基本的には「く」字外反口縁形態の甕が主体となる。体部外面の調整

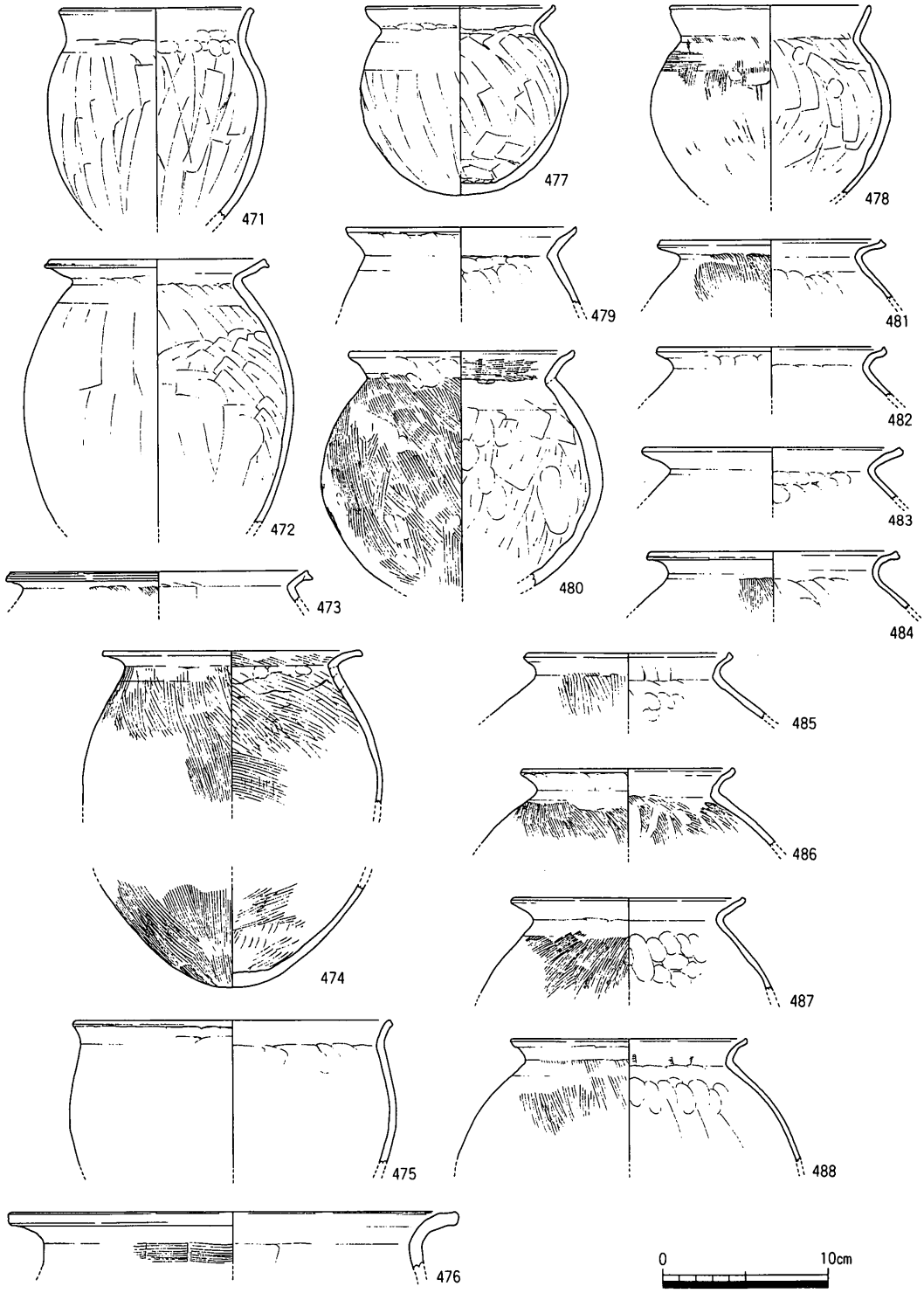


第74図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図１（１/４）



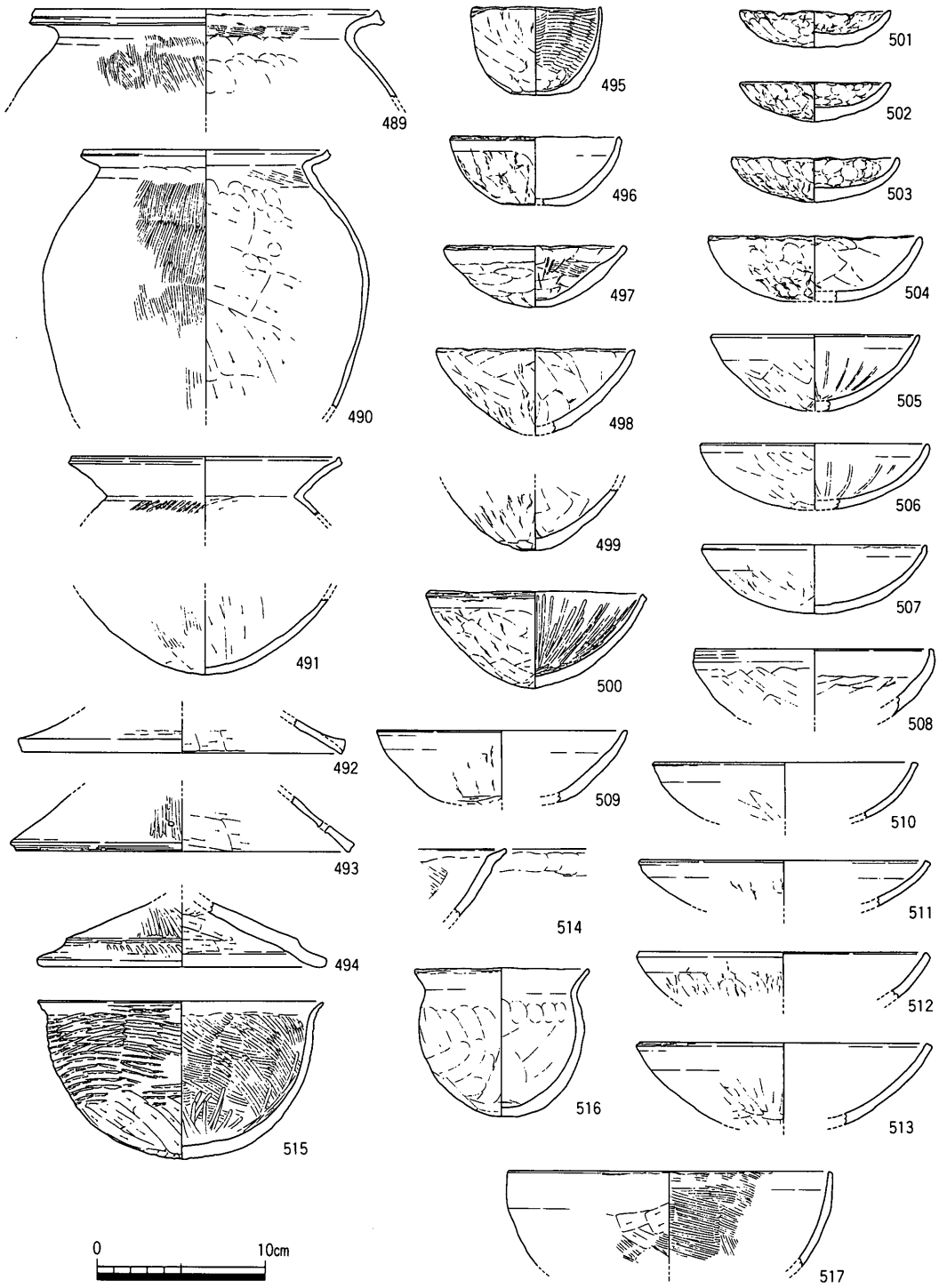
第75図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図２（１/４）

はハケ調整が卓越し，タタキメ痕をとどめるものは乏しい。476は頸部外面に断続的な横ハケ調整を認め，当該期の一般的な形態と開きが大きく，位置付けは困難。甕として報告するが，他時期の遺物の混在の可能性も残る。471・477・478は小形甕。球形体部に，丸底の底部を呈する。口縁部は内湾傾向が強く，布留系甕の影響を想定すべきか。また，口縁端部を下方へ鈍く摘み出す472～474は，徳島県吉野川下流域の阿波中枢部に類似形態の甕を認める。一定程度の影響は想定すべきであろう。475は甕として図示したが，頸部の屈曲が弱く，口径と体部最大径が近似する点から鉢とすべきかも知れない。481～489は甕Ｃである。485・486・488は頸部内面にやや鈍い稜を認め，口縁部の屈曲が弱く，また486の内面はハケ調整されるなど定型化した甕Ｃではない。487の体部外面の左下がりのハケ調整も，例外的なものである。489は拡張した口縁端面に２条の鈍い凹線文を施し，上記甕Ｃの中では最も先行する。胎土の面では，481・486・489は胎土中に角閃石と多量の黒雲母粒を含み，丸亀平野西部域等からの搬入の可能性を示す。甕Ｃにおいても，移動の可

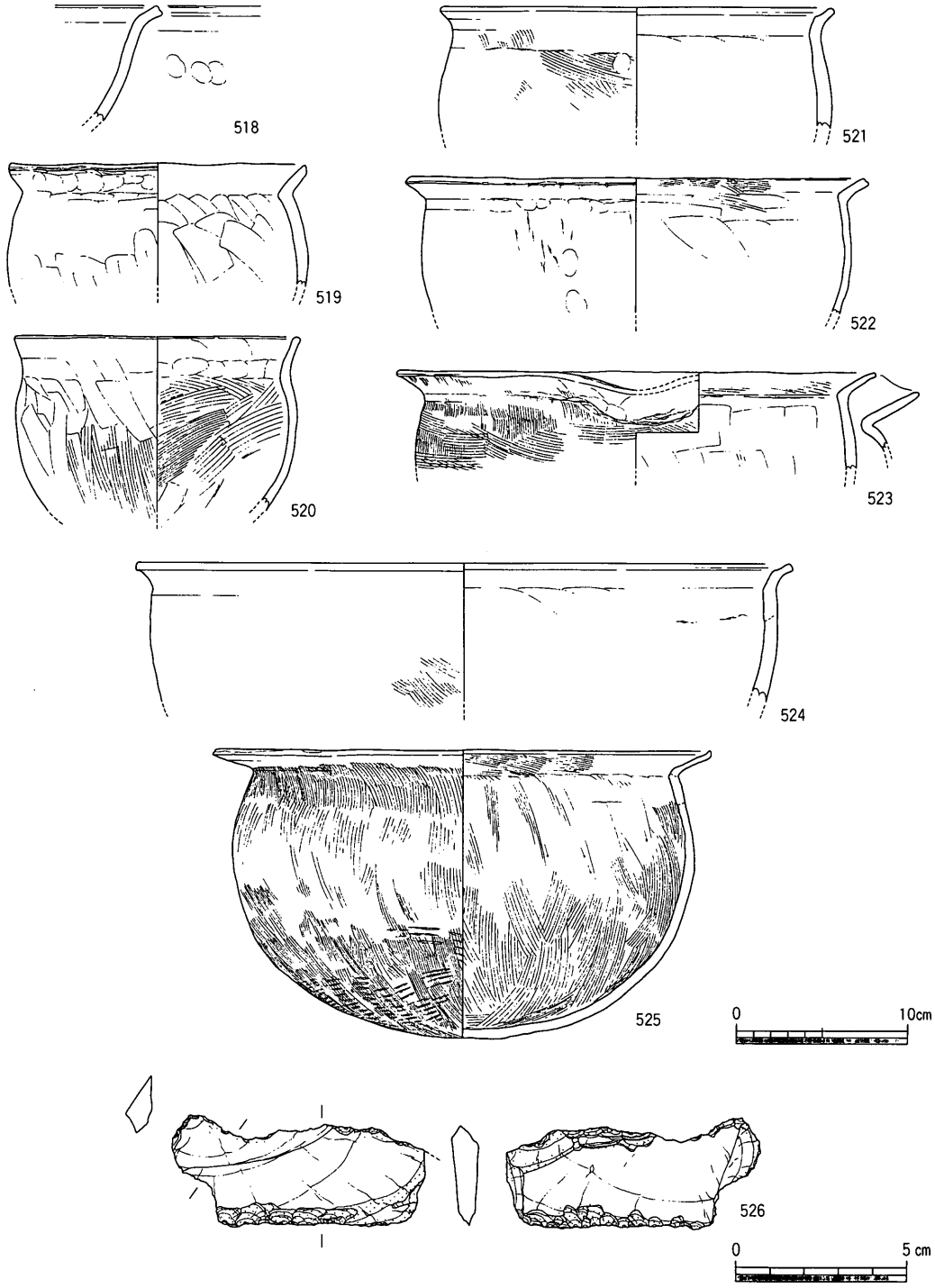


第76図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図３（１/４）

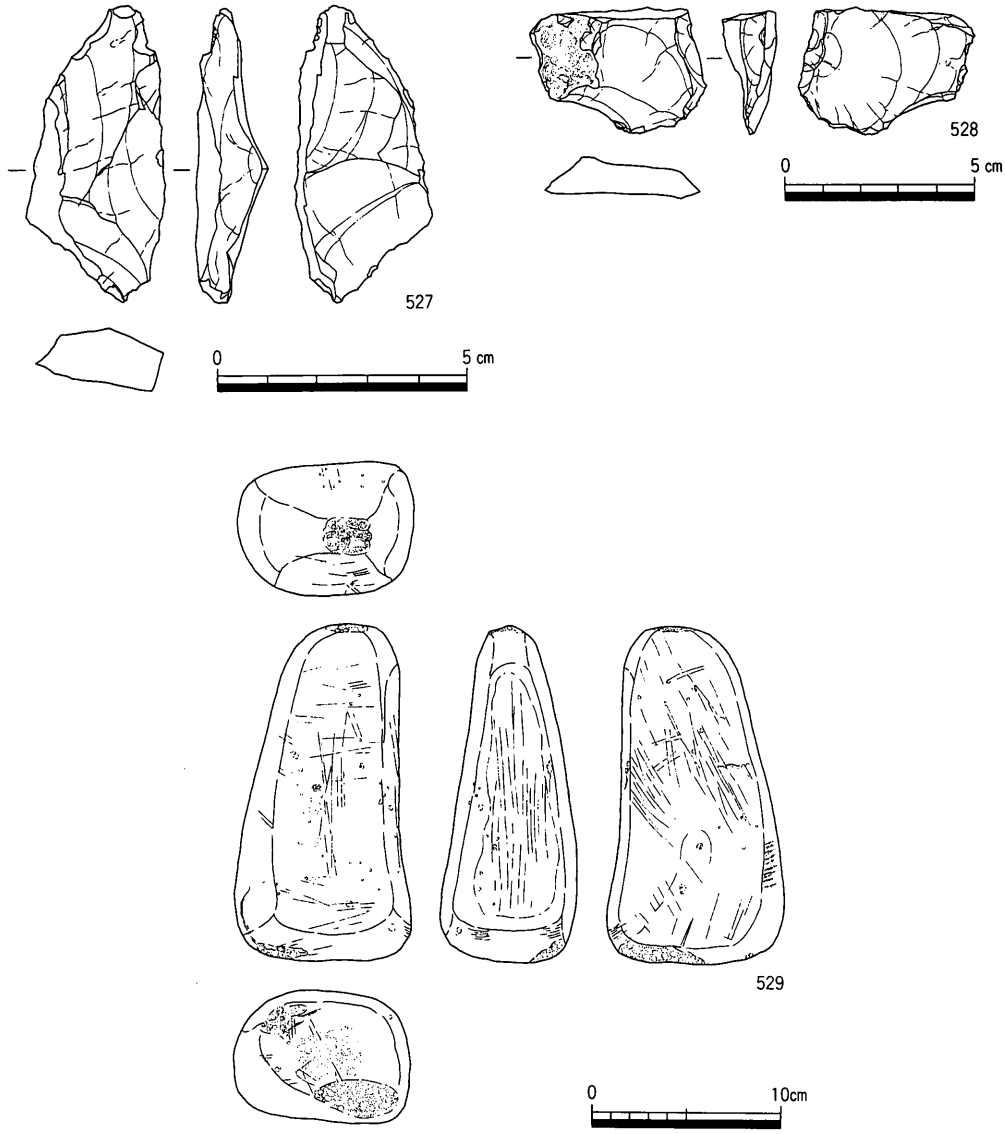
能性が指摘される点は重要であろう。490は口頸部及び体部形状から，下川津Ｂ類甕の模倣形態と考える。肩部外面も左下がりのハケ調整が施されるなど，Ｂ類甕を忠実にコピーされるが，体下半外面の縦方向のミガキ調整は省略される。491は河内型庄内甕である[(2)]。口縁部は大きく外反して開き，端部は上方へ摘み上げる。頸部内面はケズリ調整により鋭い稜をなす。体部外面は上半部左下がりのタタキメ，下半はタタキメの後縦ハケ調整が施される。底部は丸味を帯びた尖底状を呈し，庄内式中相の特徴をよく示す。本地域においては，庄内甕の影響を受けたとみられる在地産の土器は，極微量ながら散見されるが，庄内甕自体の搬入は本例のみに限られる。口頸部と底部の破片を図示したが，他に接合できない体部の破片が若干量出土している。いずれも近接して出土しており，同一個体と判断した。香川県内での確実な庄内甕の搬入例は，管見の及ぶ範囲では本例が唯一であり，今後も著しく増加することはないと考える。492～494は高坏脚部である。492・493は下川津Ｂ類土器。脚端部の形状から，493がやや後出するものと考えるが，いずれも下層からの混入であろう。494は脚裾部が２段に屈曲し，外面には装飾的な螺旋状のミガキ調整が施される。495～500は小碗状を呈するやや深めの小形鉢，501～510は浅皿形態の小形鉢，516は小形鉢として掲載したが，明確な頸部の屈曲をみることからむしろ小形甕とすべきか。小碗状を呈する前者には，平底形態の495・496と，尖底ないしは丸底形態の497～500の２者に大別される。後者の底部外面は，一様にケズリ調整により丸底化を指向する。口縁端部は一般的に丸く納めるものが多いが，500のように内傾する小端面をなすものも一定量存在する。また内面の放射状のミガキ調整は，上記形態差を超えて少数ながら認められる。浅皿形態は，器表面に指頭圧痕を多く残す手ずくねのタイプの501～503と，外型成形の可能性のある504～510に細分される。後者の口縁端部は，基本的に丸く納めるものが多数を占めるが，507・510のように内傾する小端面をなすものも微量ながら認める。外底面はケズリ調整されるが，一般に外面には成形時のクラックを多く残す。なお，509は胎土中に多量の黒雲母粒を含み，丸亀平野西部域等からの搬入土器である。511～515・517～520は中形鉢である。浅皿形態の511～513，半球形形態の517，外反口縁を有する514・515・518～520に細分される。浅皿形態では，口縁端部は内傾する小端面を有するものに限られる。515のように外面にタタキ調整が施されるものは，半球形タイプを中心に若干量存在し，外型成形以外の成形法により成形される。中形鉢では，やはり外反口縁を有するものが多数を占めるようである。521～525は大形鉢である。大形鉢は外反口縁を有するものに限られる。また523のように片口を有するものも少なくない。図示したものはいずれも深鉢タ



第77図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図４（１/４）



第78図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図５（１/４・１/２）

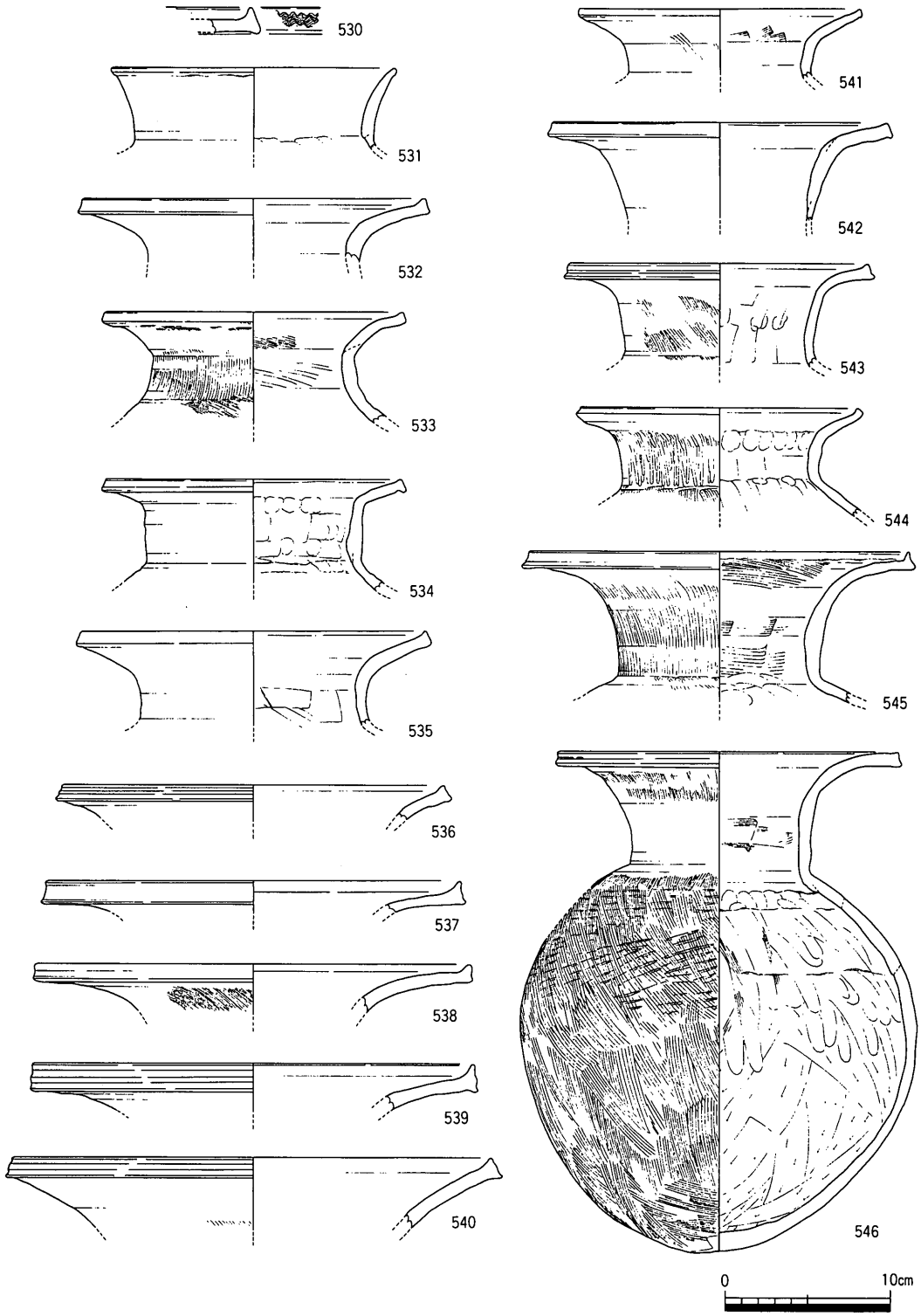


第79図　10ｂ区谷７中層出土遺物実測図６（２/３・１/２・１/４）

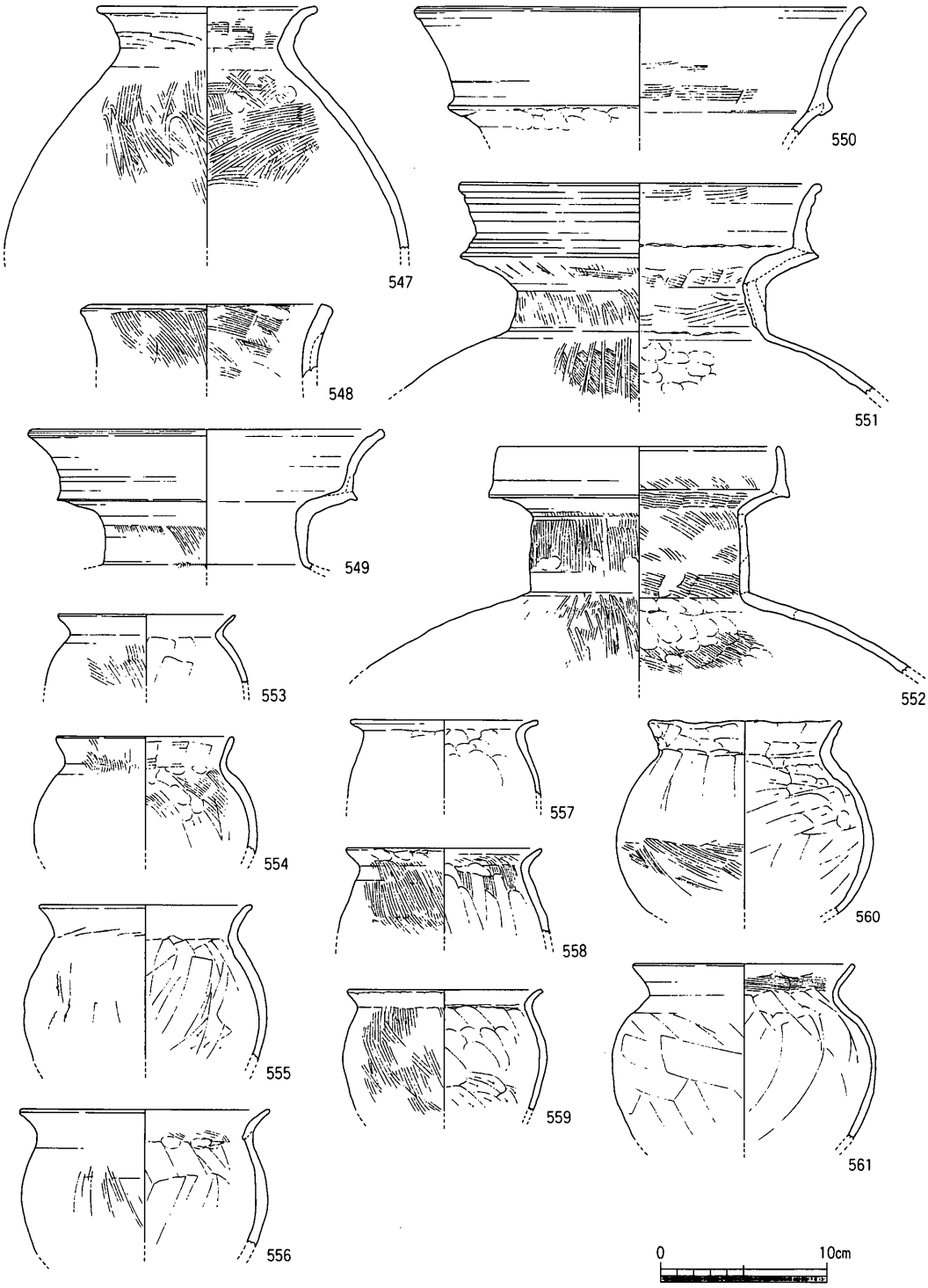
イプのものである。口縁部が長く，端部を小さく上方へ摘み上げ，頸部の屈曲が強い525は，他のものに比してやや新しい傾向であろう。526～528はサヌカイト製の石器である。526はスクレイパーで，下縁に連続した細かな調整剥離を認める。527は横長剥片石核と考える。旧石器時代に遡る。528は剥片。529は砂岩製の砥石である。上下両狭端面は殴打痕が認められ，叩き石としても使用されていたようである。また図示した３側面に使用による擦痕がみられ，主に縦方向の擦痕が顕著である。

530～681は11区中層出土の遺物である。本区出土の遺物群の器種組成や時期的な位置付

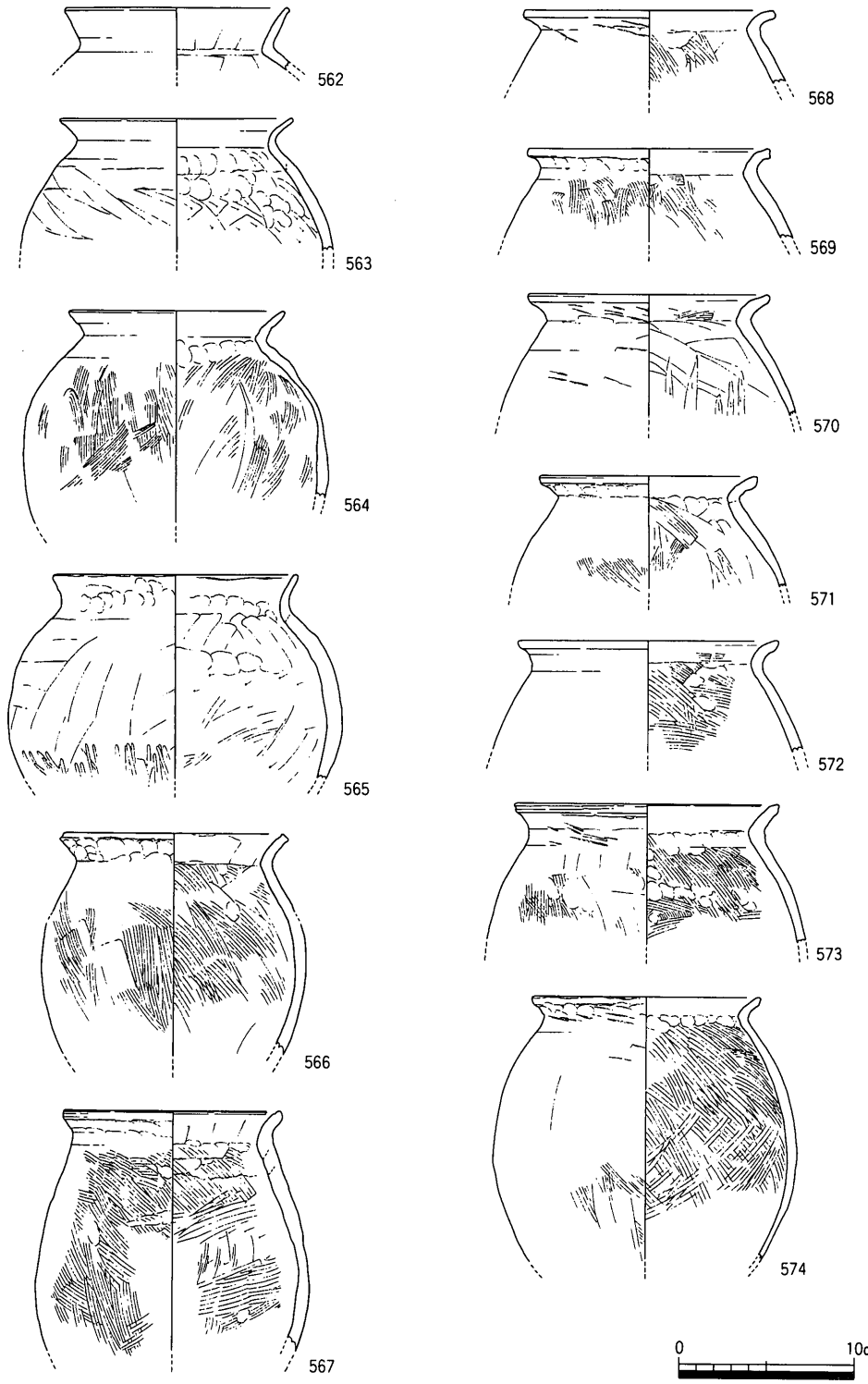
けは，10ａ区中層出土の遺物と大きな差異を認めない。530～547は広口壺である。広口壺の形態は，10ａ区同様基本的には４種に大別される。外傾頸部形態の540～547が卓越する点も当該時期の特徴で，他調査区と大差はない。530のような拡張した口縁端面に櫛描波状文等で加飾する手法は，丸亀平野西部域で多くみられる。536～540は外傾頸部の広口壺の口縁部と考えられるが，端部拡張の様相は一定のバリエーションを有しており，本期の特徴であろう。一般に上方拡張が卓越する537・538が新しい様相と考える。なお，538は口縁端面を赤色顔料により塗彩される。544の頸部外面は縦方向のミガキ調整が施されるが，一般的な調整法ではない。546の体部外面には煤が付着する。548は直口壺と考えたが，小片でもあり別器種となる可能性も残る。549～552は二重口縁壺である。549・551は従来東阿波型土器群とされた形態である。549の器表面にはスリップが掛けられ，丁寧にヨコナデ調整された精製品であろう。551のように口縁部に多条の凹線文を施文する手法は，徳島県吉野川下流域の二重口縁壺等に多見される。なお，胎土の面でも本遺跡で頻出する胎土ではなく，搬入品の可能性が高い。550は明確な頸部を認めない形態。一次口縁と二次口縁の屈曲部を強調する点に，10ａ区中層294例より先行する可能性を認める。552は類例に乏しいイレギュラーな形態である。口縁部が内傾する点に，辛うじて下川津Ｂ類二重口縁壺の系譜の可能性を認める。553～604は甕である。553～562・598は小形甕。口縁部が内湾傾向を示す布留系甕の影響を受けたとみられるものも少量存在する。中形甕では，「く」字外反口縁で，端部を四角く納めるものと，いわゆる甕Ｃとが拮抗する。567は類例に乏しく，他地域系統の土器と考える。582は口頸部にタタキメ調整が施され，口縁タタキ出し手法により成形される。576の頸部内面の強い稜や，583の肩部の張る体部形状，さらに585の体部外面下半の縦ミガキ調整は，Ｂ類甕との一定程度の親縁性を示していよう。また，577・585は口縁端部を四角く納めつつ，端面に強い横板ナデ調整を加えて下方へ鈍く突出させる。阿波中枢域からの影響が想定される。579の体部外面に施されたミガキ調整も，類例に乏しい。586～597・599～602は甕Ｃ及びその影響を認める在地系統の甕である。586～588・599は小形甕。甕Ｃは586に典型的に示される。587・599は甕Ｃの一定の影響を認めるが，定型化したものではない。中形甕では拡張した口縁端面に２条程度の鈍い凹線文を施す591・593等が古く，器壁が薄く端部を小さく上方へ摘み上げるのみの601等が，相対的に新しく位置付けられる。なお，589は小片のため胎土中に明確な片岩粒を認めなかったが，色調や砂粒の印象から阿波地域からの搬入品となる可能性が高い。一方600も，胎土中に角閃石と黒雲母粒を一定量含み，搬入土器であろう。602は大形甕となろう



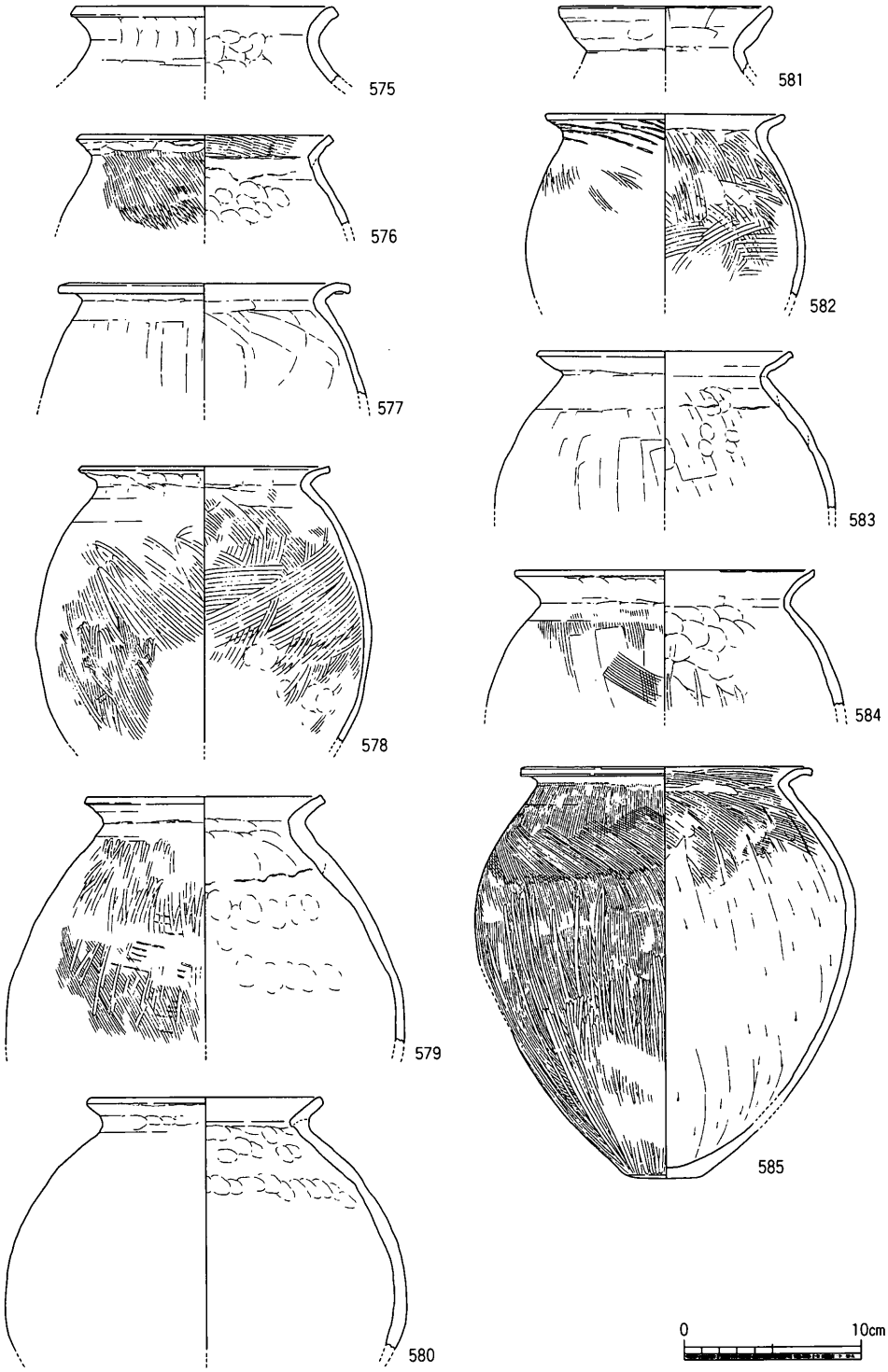
第80図　11区谷７中層出土遺物実測図１（１/４）



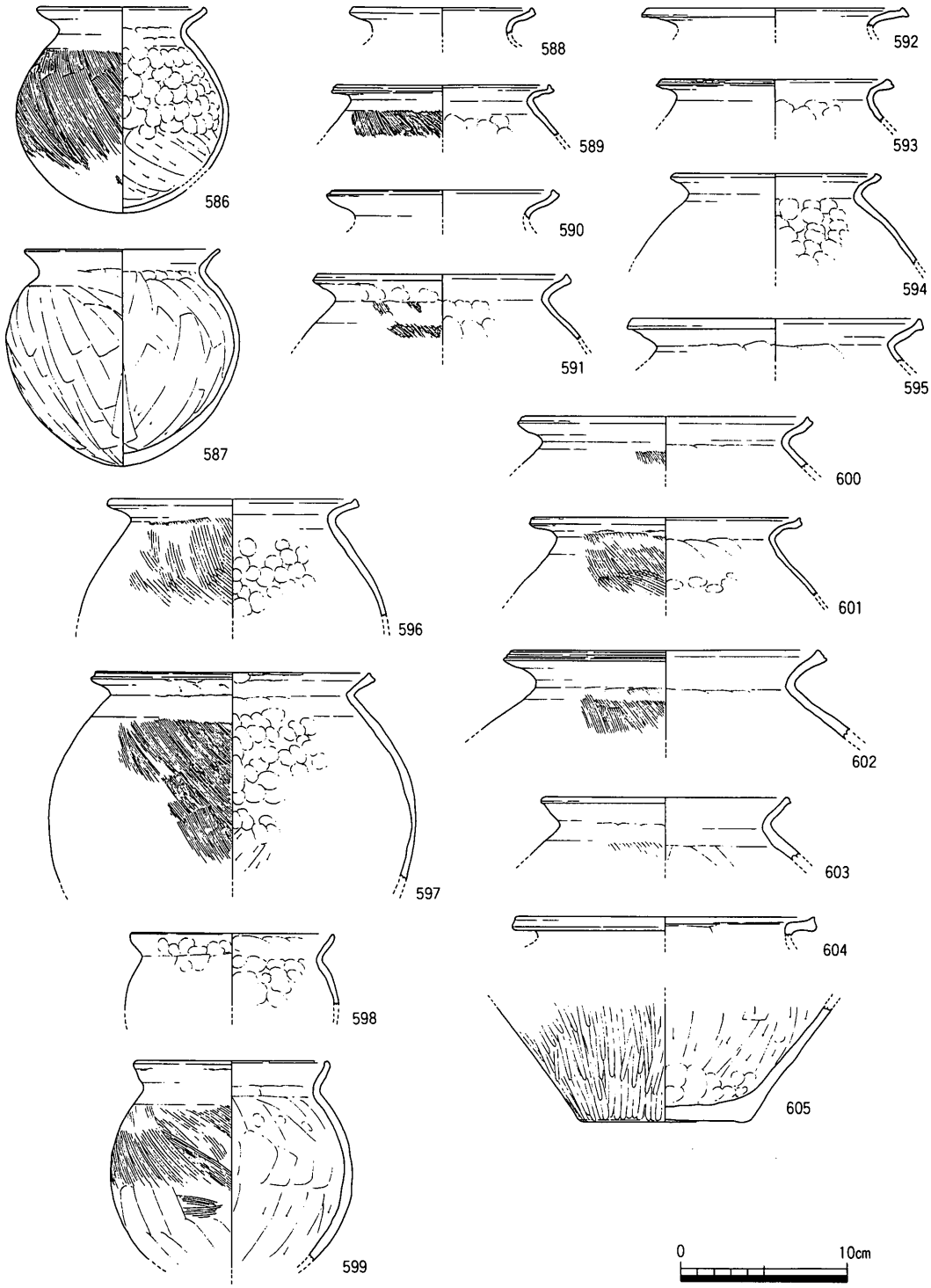
第81図　11区谷７中層出土遺物実測図２（１/４）



第82図　11区谷７中層出土遺物実測図３（１／４）

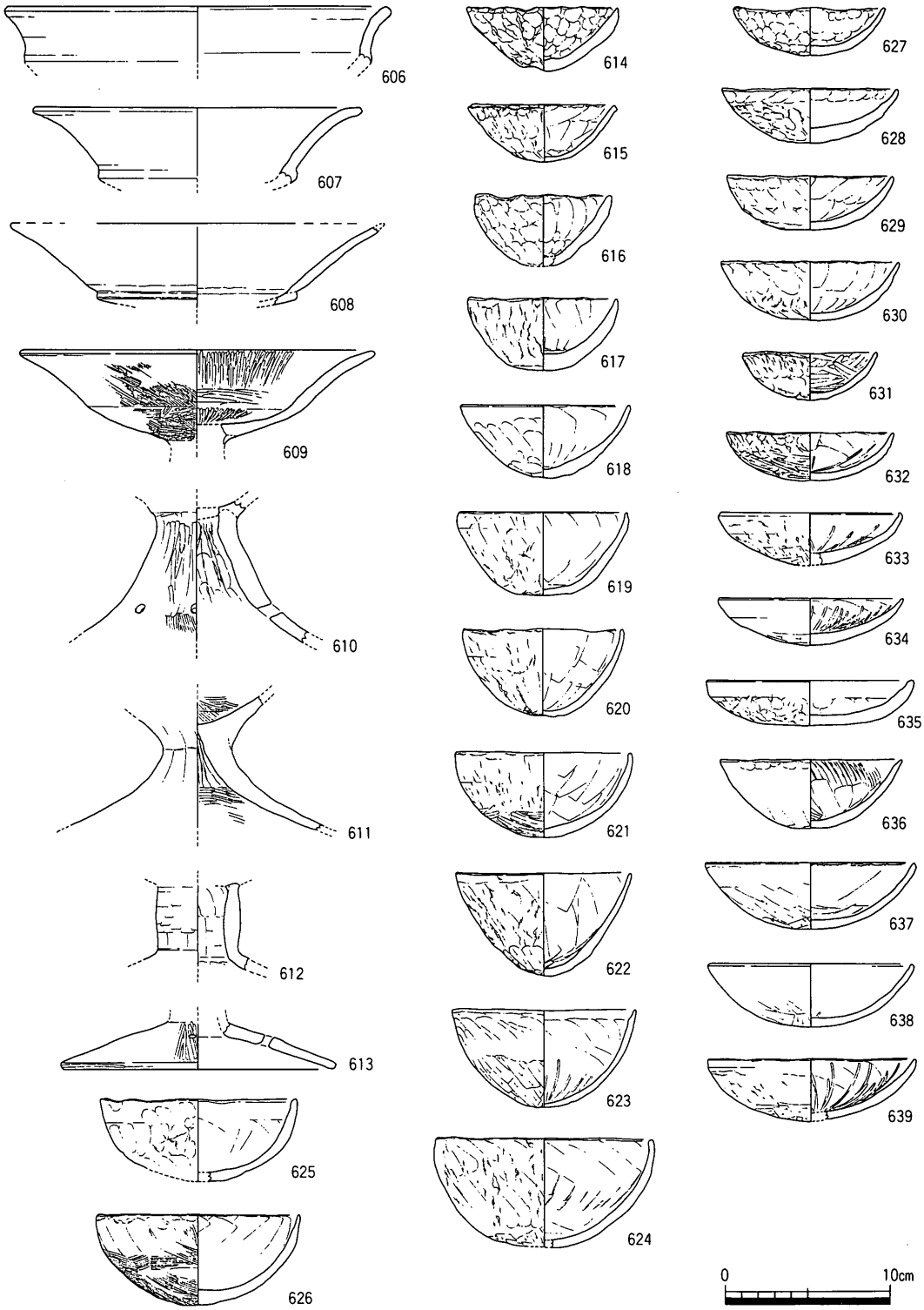


第83図　11区谷７中層出土遺物実測図４（１／４）

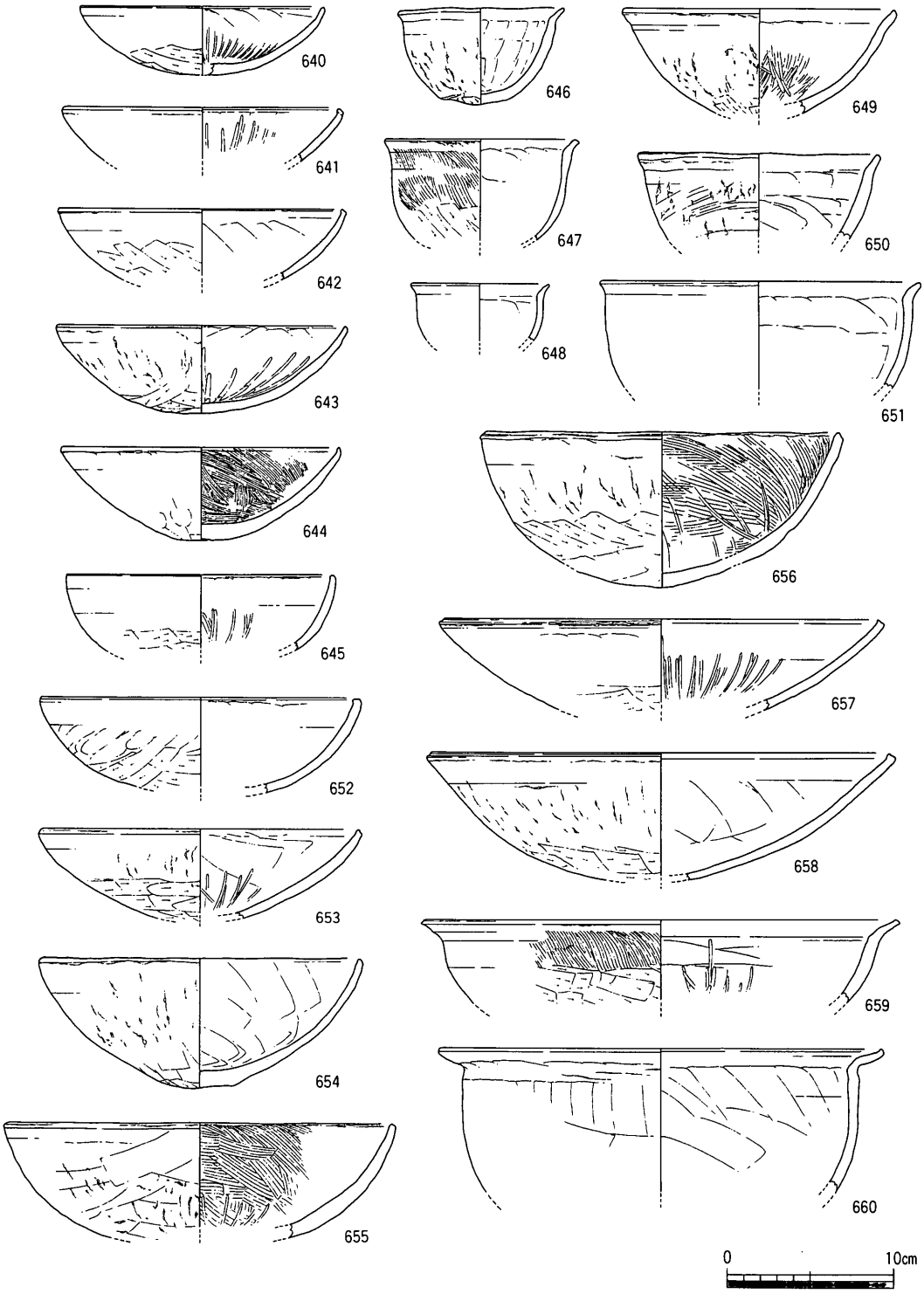


第84図　11区谷７中層出土遺物実測図５（１/４）

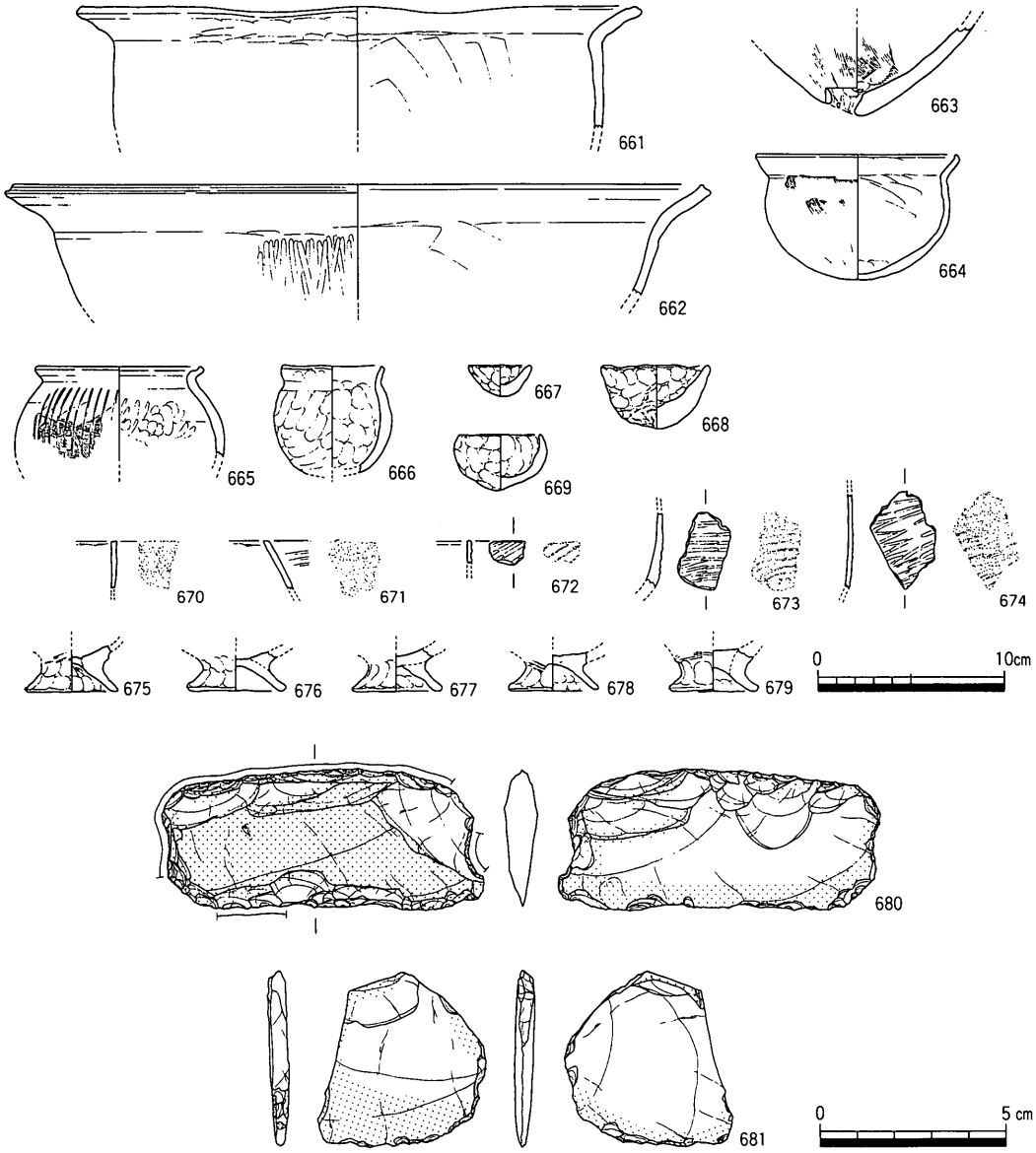
が，端部形状からすれば古く位置付けられる。604は下川津Ｂ類甕である。口頸部が極度に矮小化した最も後出する形態だが，当該時期まで残存するものではない。605は甕もしくは壺の底部と考えられる。外面に縦ミガキ調整され，安定した平底形態を呈することから，中期にまで遡る可能性がある。なお器表面はローリングを蒙る。606～613は高坏及び同脚部である。606は高坏坏部として図示したが，小片のため別の器種の可能性も残る。607～609は中位で屈曲する坏部形態の高坏。屈曲部が段状をなし明瞭な607・608と，鈍く折れるのみの609とがある。脚部も緩やかに外反して開く610・611と，脚柱部と裾部に明瞭な屈曲を有する612・613の２者を認める。614～640・646～648は小形鉢である。小形鉢も他調査区同様，半球形ないしは小碗形の614～626，浅皿形態の627～640，外反口縁を有する646～650に３大別される。小碗形のものは底部形状により，鈍い平底を有する617・619・620・624と，尖底ないしは丸底形態のものに細分される。後者の外底部は，ケズリやハケ調整が顕著であり，特に622のケズリ調整は金属器の使用を想像させるシャープな削痕を残す。なお，同様なケズリ調整は，637の外底面にも観察される。浅皿形態では，内外面指頭圧痕が顕著で手ずくね成形の可能性が高い粗製の627と，外面に成形時のクラックを顕著に認め外型成形の可能性のあるものに細分される。後者では外底面にケズリ調整を施すものが多く，また内面に放射状のミガキ調整が施されるのは後者に限られる。外反口縁形態のものも，口径が器高の２倍程度のより小形の形態の646～648と，同３倍程度のやや大形の形態の649・650に細分される。648は胎土中に多量の角閃石と黒雲母粒を含み，丸亀平野西部域等からの搬入土器であろう。641～645・651～656は中形鉢である。中形鉢も，浅皿形態の641～645・652・653と，ボウル状を呈するやや深めの形態の654・655・656，外反口縁を有する651に３大別される。浅皿形態のものは，基本的に小形鉢のそれと形態・調整法に大差はない。口縁端部を内上方へ小さく摘み出すのは，小形鉢にはなく同形態の中・大形鉢のみに共通する手法である。ボウル状を呈するものは，外底面にケズリ調整を加えて鈍い平底を作る654と，同様にケズリ調整により丸底化の進展した656に細分される。657～662は大形鉢である。浅皿形態の657・658と，外反口縁の659以下に大別される。662の体部外面は入念なミガキ調整を施すが，類例に乏しい。663は底部の小片だが，尖底形態の底部中央に焼成前の穿孔を伴うことから，底部穿孔鉢とした。664はやや強く括れる頸部より，小形丸底土器としたい。器表面は剥離が顕著だが，辛うじて外底面にケズリ調整を認める。665はミニチュア土器の甕。胎土は精選され，外面にはハケ調整の後体上半部に放射状のミガキ調整を施す精製土器である。なお，徳島県黒谷川郡頭遺跡ＳＥ



第85図　11区谷７中層出土遺物実測図６（１/４）



第86図　11区谷７中層出土遺物実測図７（１/４）

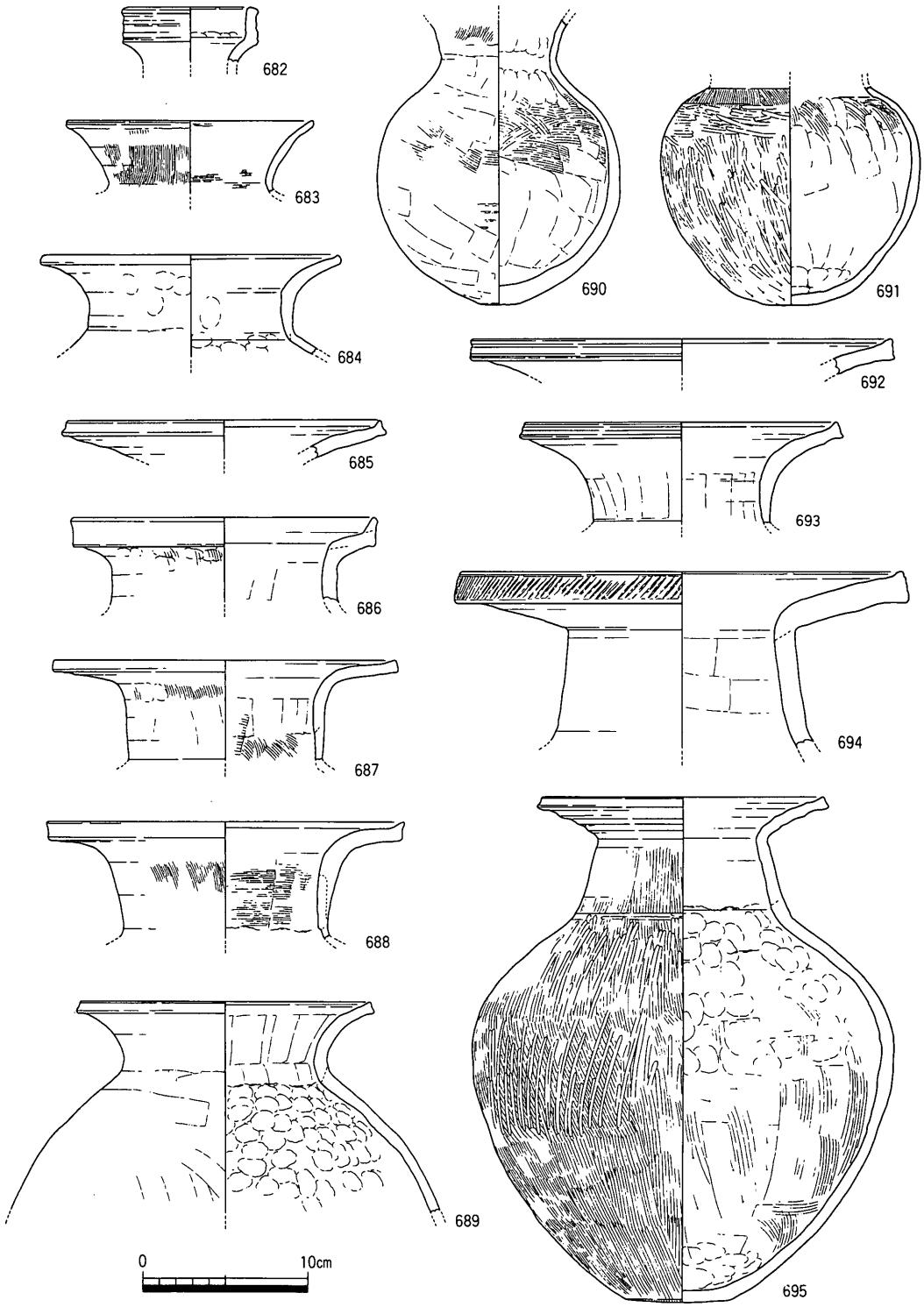


第87図　11区谷７中層出土遺物実測図８（1/4・1/2）

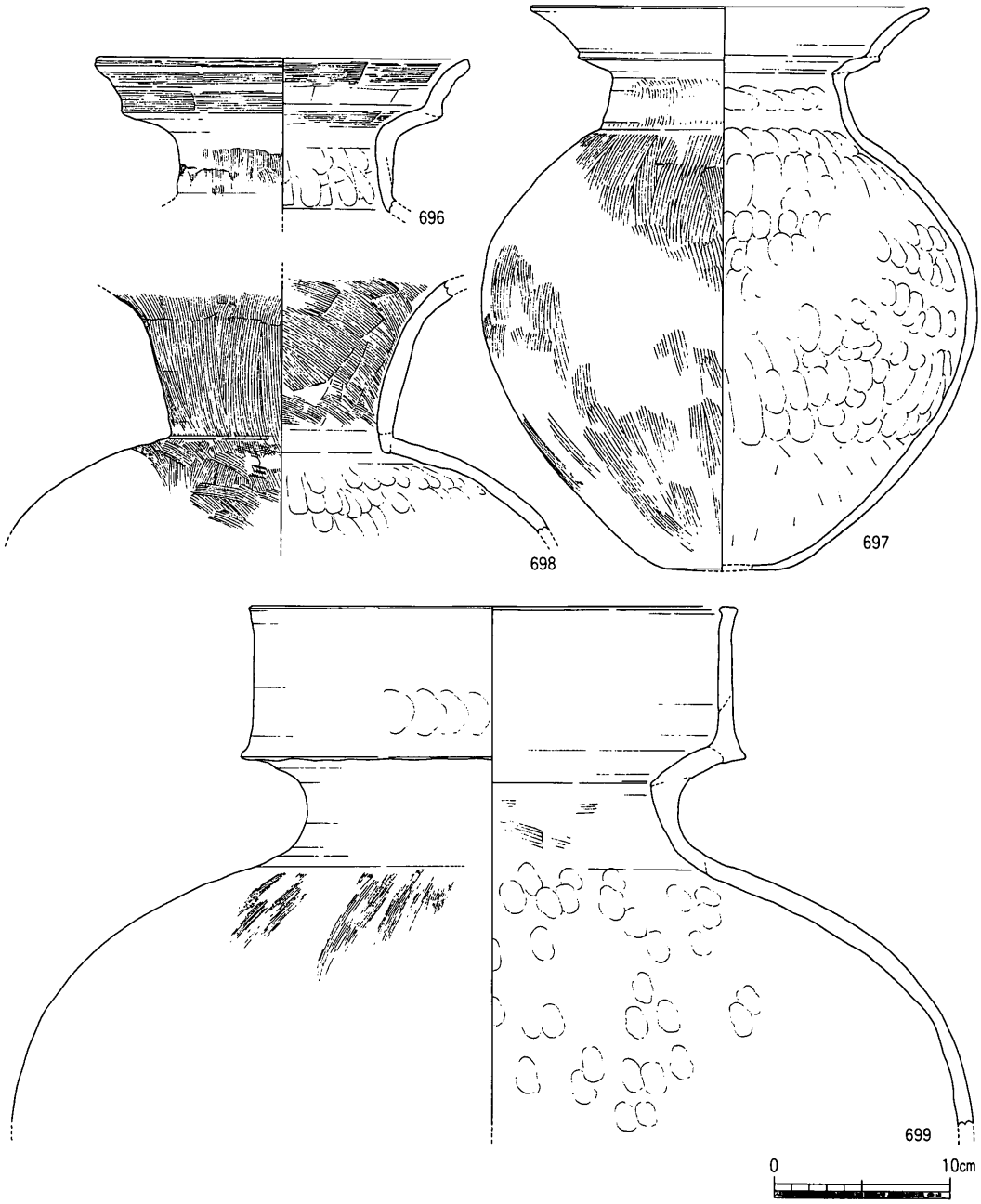
101の20（菅原1987）に酷似した形態を認める。頸部内面に明瞭な稜を認めず，口縁端部を上方へ摘み上げられている点から，甕Cを模したものと考える。666～668もミニチュア土器鉢である。いずれも器表面には指頭圧痕が顕著にみられる粗製の手ずくね土器である。670～679は製塩土器。体部外面にはいずれもタタキメ調整が施され，脚部は周縁が摘み出された小杯状を呈する。大久保編年のⅣａ式（大久保1992）に位置付けられよう。口縁端部はいずれも，鋭利な工具により削られたようなシャープな小端面をなし，端面が器壁に

対して水平になる670・672と，内傾する671とがある。680・681はいずれもサヌカイト製の石器である。680は打製の石庖丁である。側縁部には抉りが入り，背面には潰し加工を施す。刃部の調整剥離は浅い。表裏両面に顕著な磨滅痕を認める。681は二次加工のある剥片だが，下縁に浅い調整剥離を認め打製の石庖丁の可能性もある。

682～830は10ａ区上層出土の遺物である。682は中期に遡る壺口縁部である。683～689・692～695は広口壺である。口縁部を欠損するが，690・691・698も広口壺となる可能性が高い。広口壺については既にみてきたように，口頸部形態によって５タイプに大別される。本調査区においても各種タイプが揃って出土している。686は口縁端部を上方へ強く摘み上げる。端面には装飾をもたない。685では破断面から口頸部の成形手法が観察される。それによると，本例では頸部にまず直立する擬口縁を成形し，その外面には細かな斜ハケ調整を施し器面を整えおそらく一端乾燥させ強度を増した後，さらに外面側より粘土紐を継ぎ足して一気に大きく外反する口縁部を成形する。最終的には内面を横ハケ，外面を縦ハケによって調整される。こうした手の込んだ成形手法も，より器壁の薄い頸部や張りの強い体部に，大きく開く口縁部を載せるための工夫と考えられ，696等本地域の広口壺や二重口縁壺などに多用される。691の体部調整手法は類例に乏しい。外面は底部より頸部にかけて入念なケズリ調整を施した後，肩部に縦ハケを加え，さらに縦ミガキの後肩部に横ミガキ調整を施す。内面は外面に比してやや粗雑で，縦ハケ調整の後ナデを加えるのみである。なお，外面のミガキ調整は全面に密に施されるものではなく，部分的に一次調整のケズリ痕が散見される。694は大形広口壺。鈍く上下に拡張した口縁端面にヘラ描きの刺突文を施す。695は下川津Ｂ類広口壺の模倣形態。口縁部内面の凹線状の段など，細部についても忠実にコピーされる。しかし，体上半部外面には縦方向のミガキ調整が施され，内面にはケズリ調整の後粗いハケ調整を加えるが，こうした調整はＢ類広口壺には一般的に認めない。698は頸部外傾形態の大形広口壺であろう。口頸部内外面にはハケ調整が多用される。胎土中に黒雲母粒を多量に含み，丸亀平野西部域等からの搬入土器と考える。696・697・699は二重口縁壺。696は本地域通有形態の二重口縁壺。口縁部内外面には横板ナデ調整が多用される。屈曲部の強調が弱い点から，やや古く位置付けられる可能性がある。697は二次口縁の外反度が強く，また頸部が内傾する点からも，類例に乏しい形態。内傾頸部形態の広口壺に二次口縁を付加したイメージが強い。体部は張りの強い倒卵形を呈し，内外面の調整手法は本地域に通有のものである。胎土中に多量の黒雲母粒を含み，丸亀平野西部域等からの搬入土器である。699は大形の二重口縁壺。二次口縁部は

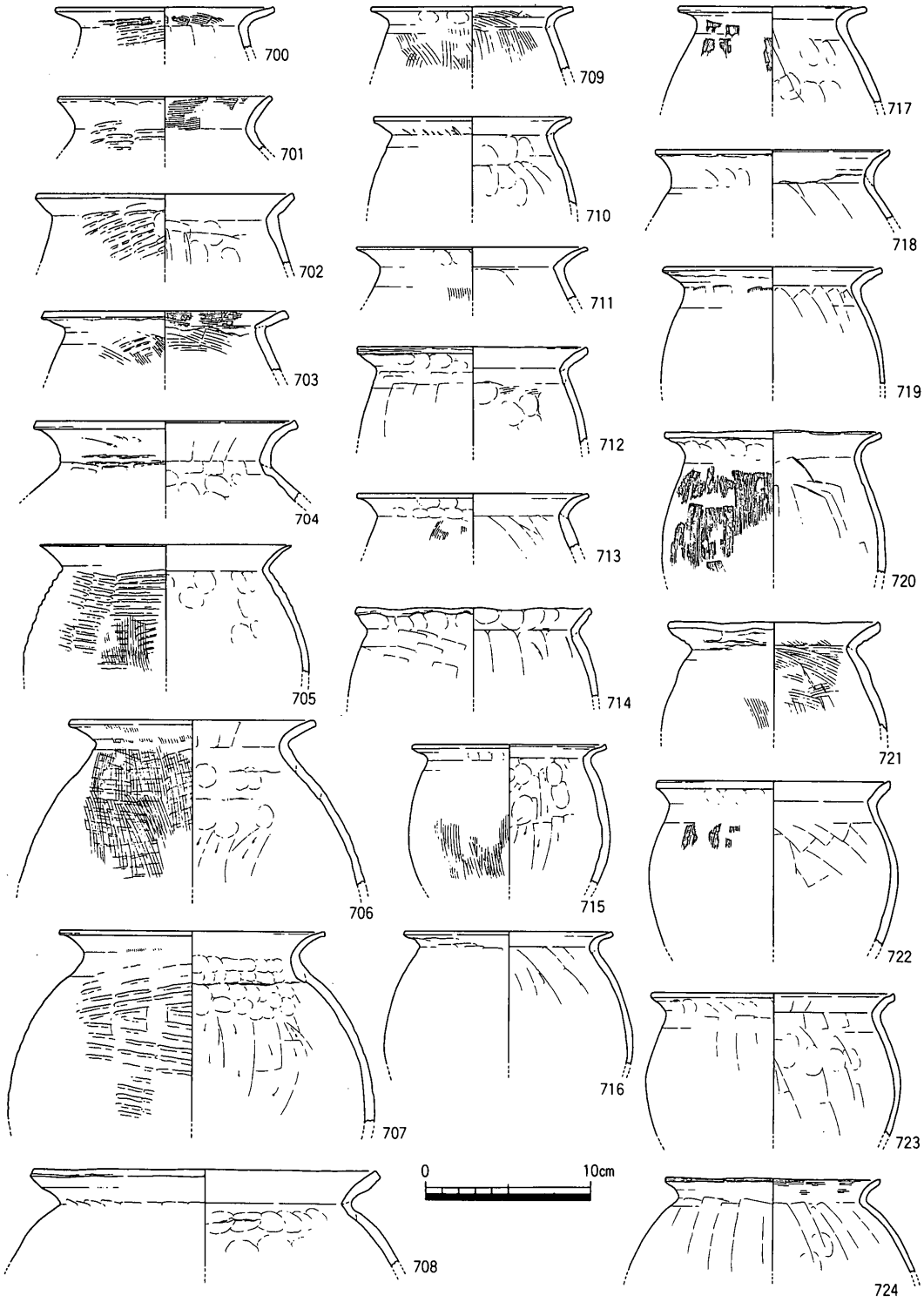


第88図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図１（１/４）

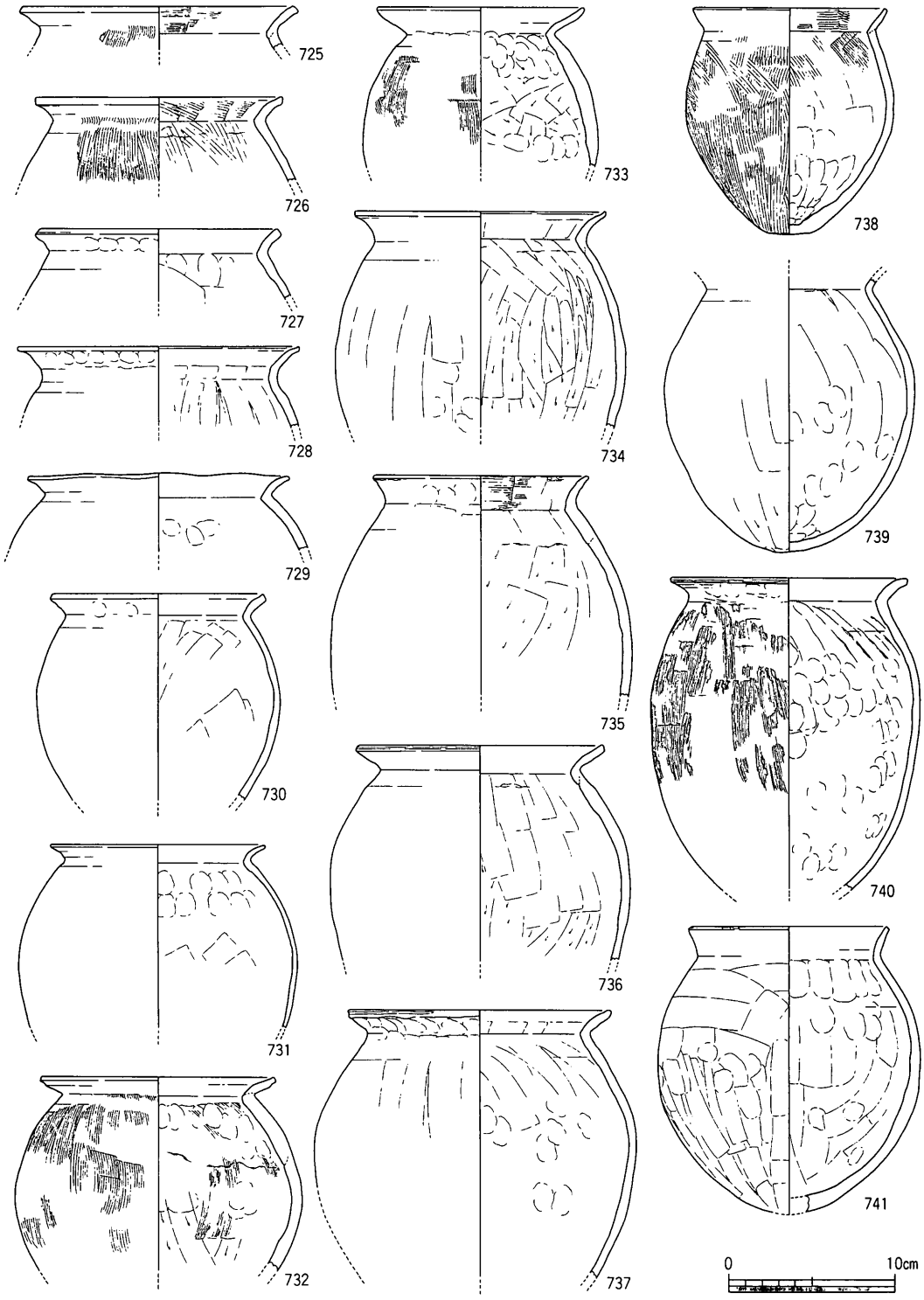


第89図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図２（１/４）

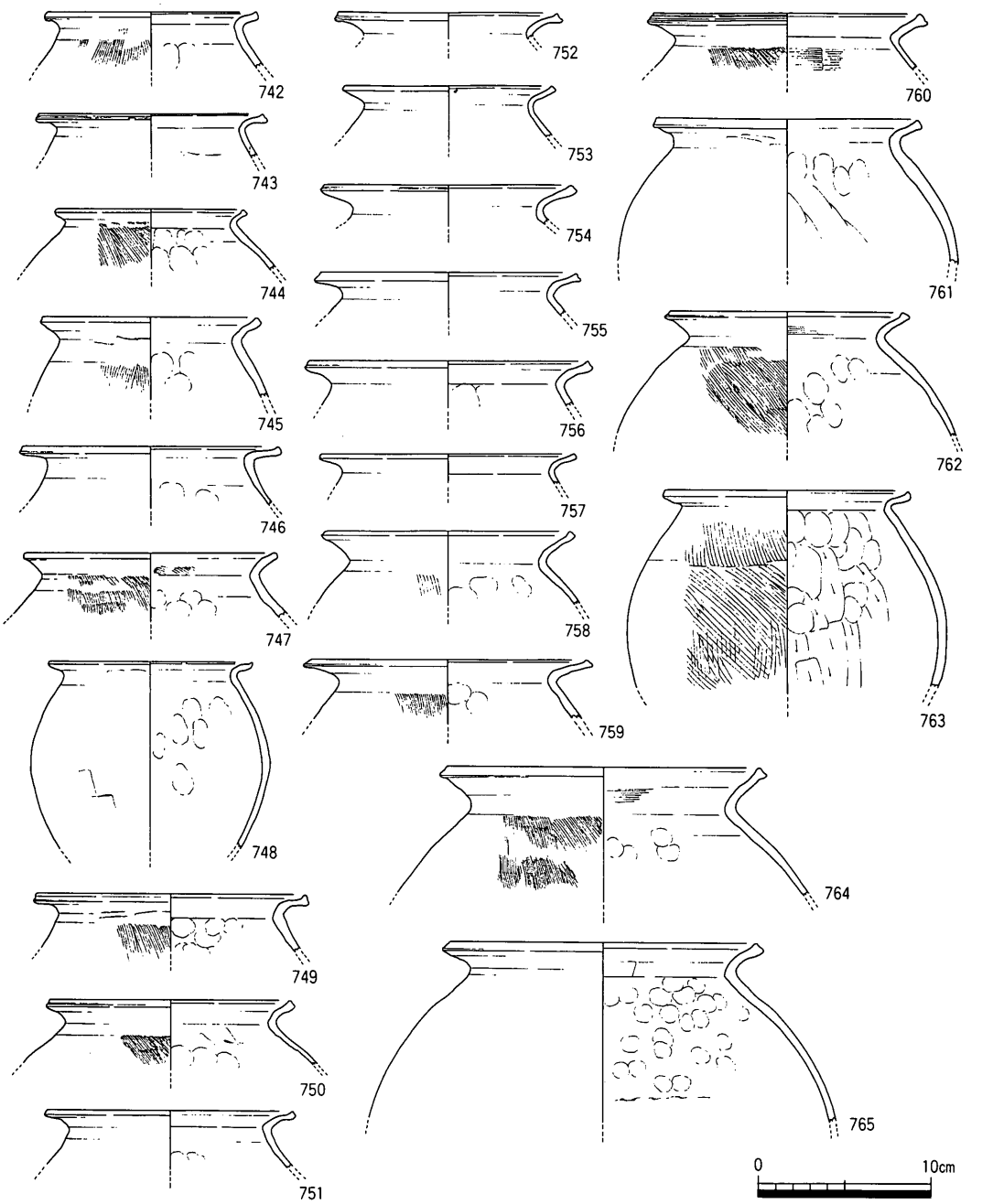
直立するが，系譜的には下川津Ｂ類二重口縁壺の後出形態であることは否めない。一次口縁端部は外方へ鋭く摘み出されるが，より後出する焼成土坑資料１・２（大久保他1996）では，この部分に断面矩形の突帯が貼付される。700～771は甕である。「く」字外反口縁甕がやはり多い。下・中層と異なる点は，体部外面にタタキ調整を残すもの（700～707・



第90図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図３（１/４）

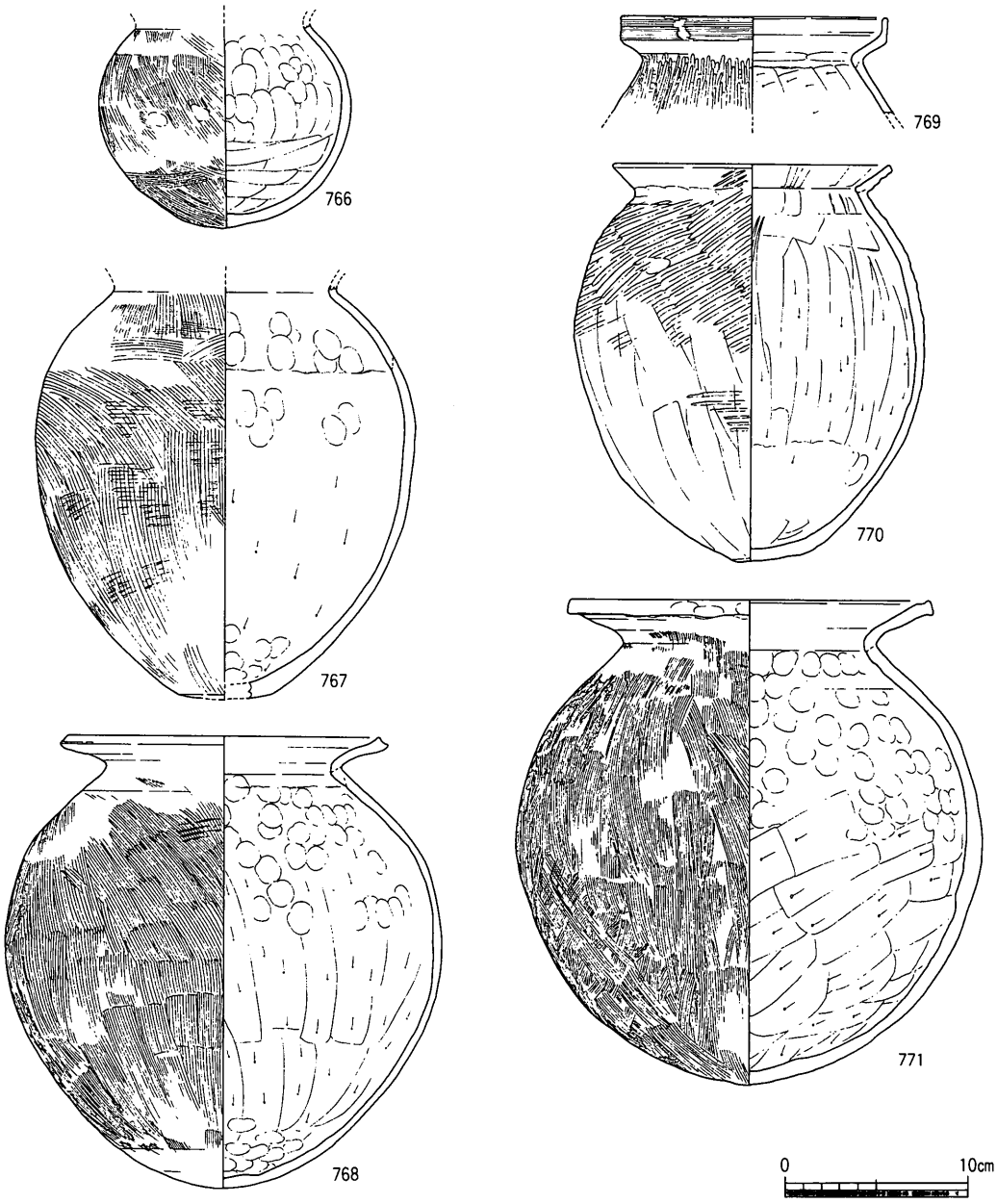


第91図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図４（１/４）



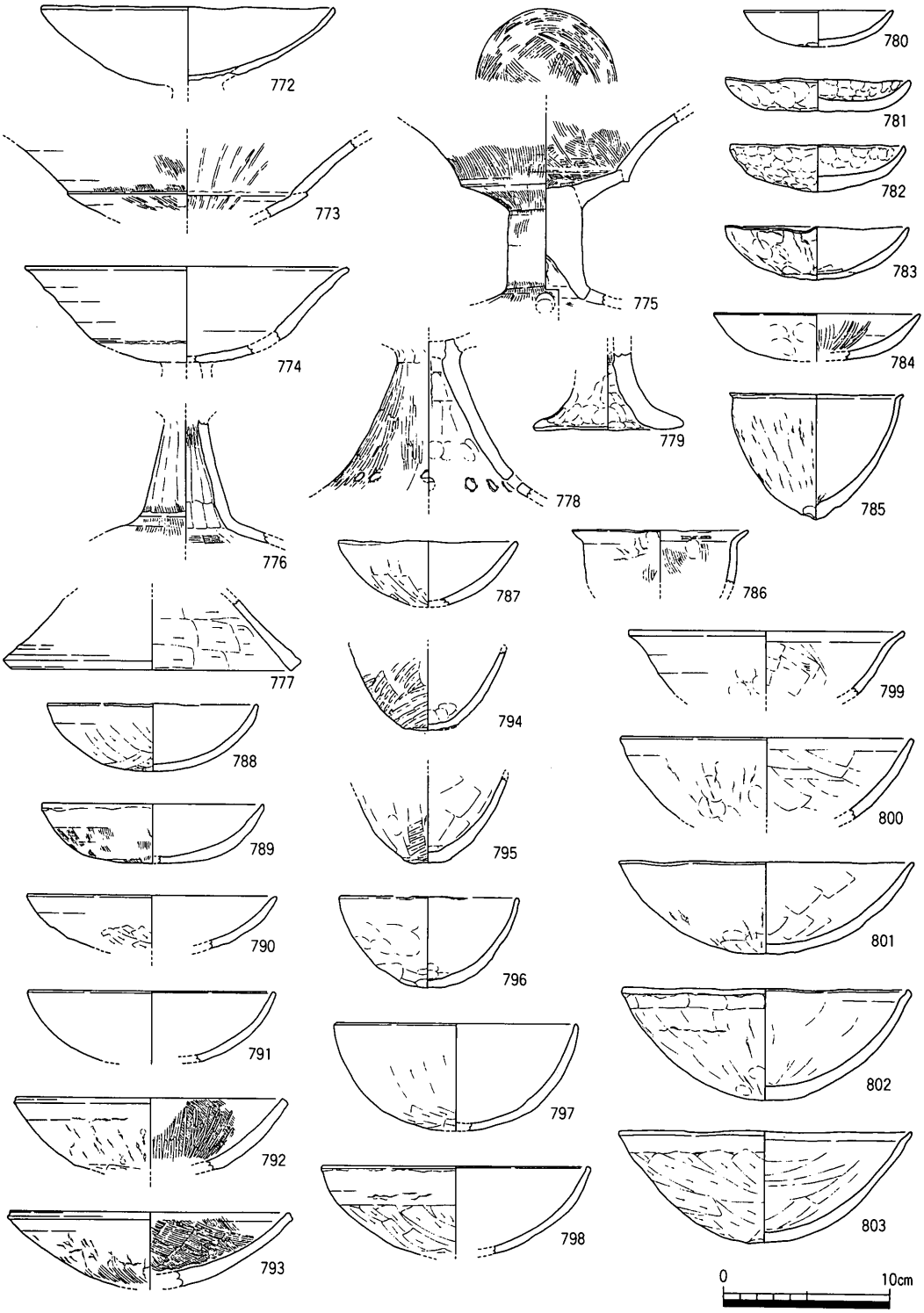
第92図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図５（１/４）

770）が少量ながら認められる点であろう。715・746・748は頸部内面に強い稜を認め，口縁端部を上方へ摘み上げる点等に，Ｂ類甕の模倣もしくは一定の影響を認める。733は球形体部に，内湾して開く口縁部を付し，端部は鈍く摘み出される。調整手法は在地系統だ



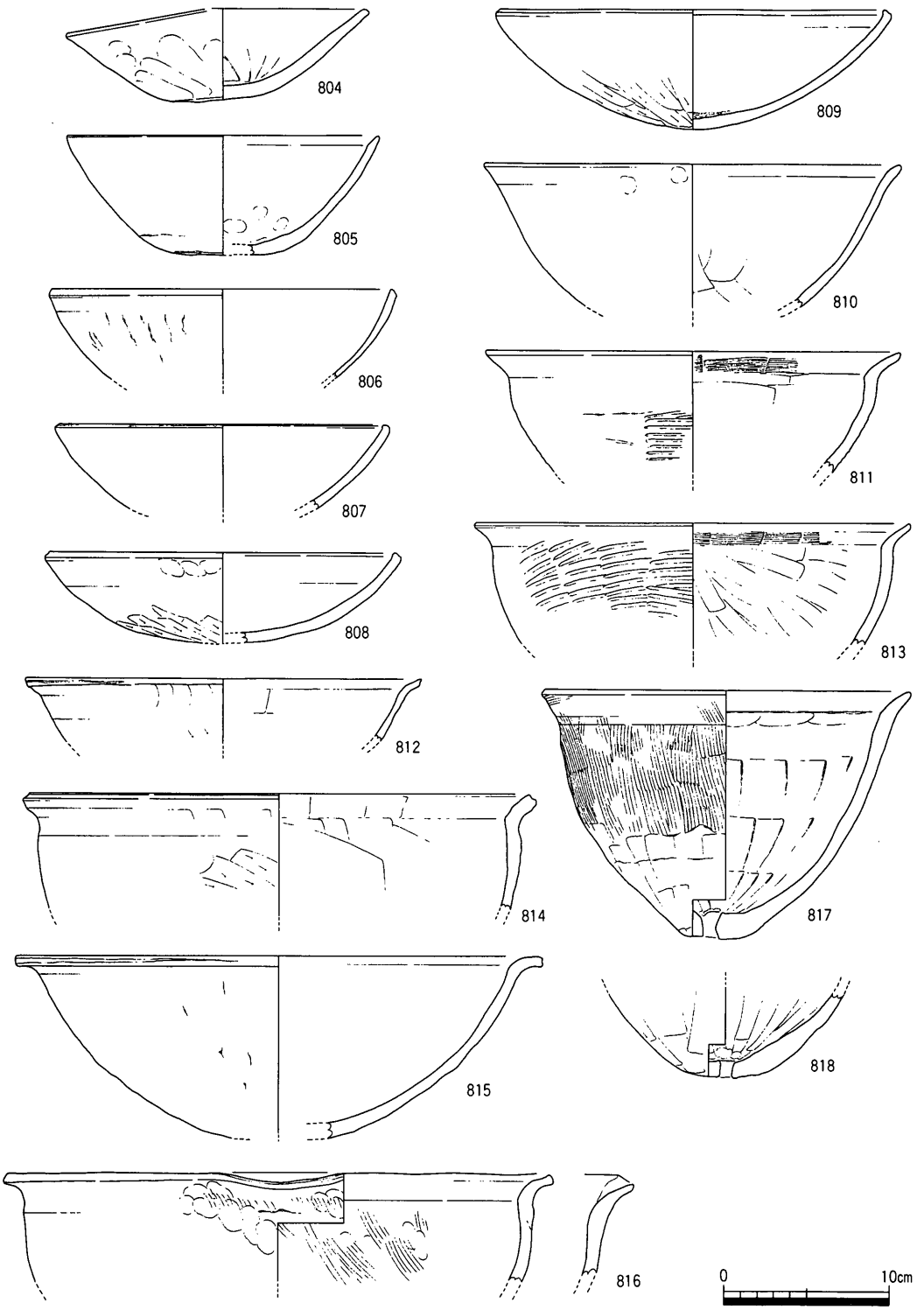
第93図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図６（１/４）

が，形態的には布留系甕の一定程度の影響を認めるべきだろう。742は形態及び胎土の点でも下川津Ｂ類甕に近似するが，胎土中に石英・長石粒を多量に含み，頸部外面の屈曲が鈍い点にやや違和感がある。743・744・749～765・768は甕Ｃ。744は小形甕になろうか。口縁部は萎縮し矮小化している。また，753・755・757・759・762・768等相対的に新しく位置付けられる資料が一定量含まれる。749・751は口縁部の屈曲が強く，頸部内面に鈍い

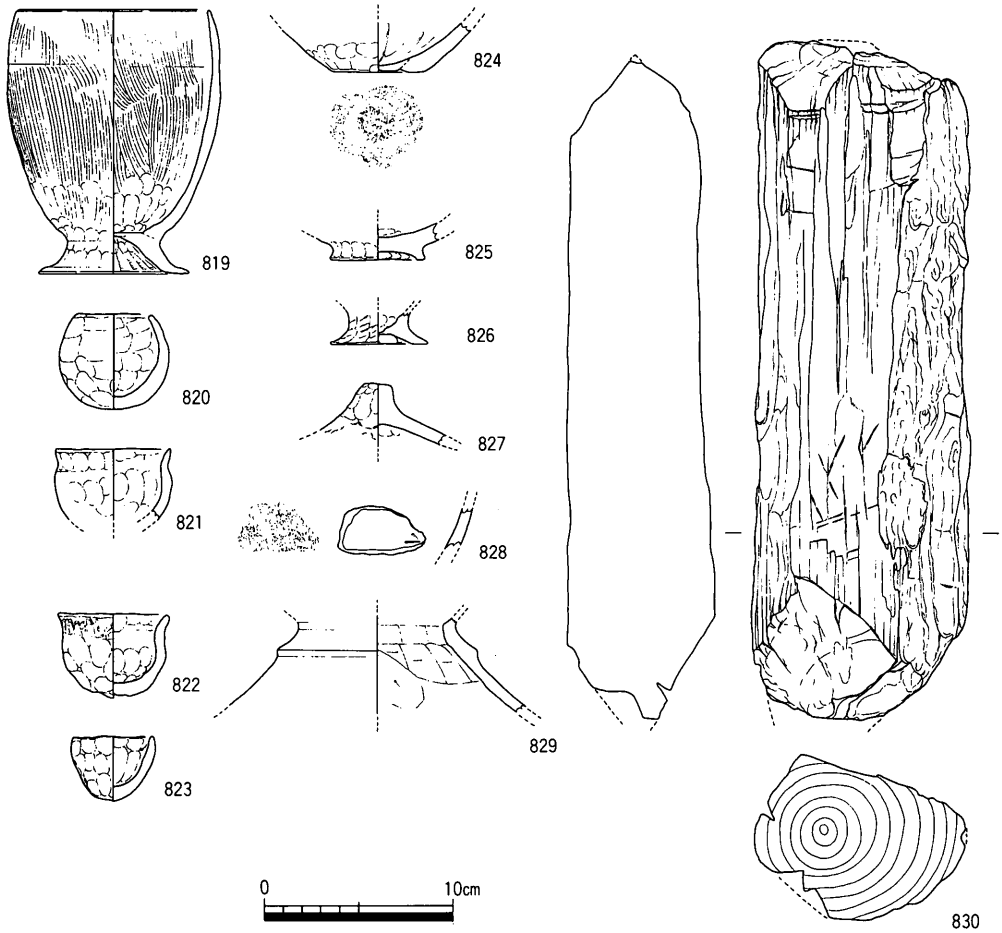


第94図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図７（１/４）

稜を認める点から，Ｂ類甕からの過渡的様相とみることもできよう。758は口頸部の屈曲がやや弱く，口縁部が内湾して開く形態で，布留系甕の影響を認める。764・765は大形甕になろうか。大型品には総じて古く位置付けられるものが多い。768は当該時期の甕Ｃの典型的形態。口縁端部形状は，ある種Ｂ類甕の系統を引き継ぎ，広口壺にも共通した手法をみるものである。体部は球形化し，底部は丸底を呈する。なお外底面は同心円状のナデ調整が施されるが，類例に乏しい。771は類似した体部形状を呈する甕。口縁端部は四角く納め，端面をヨコナデにより鈍く上下に肥厚する。甕Ｃの影響を多分に受けた在地系統の甕であろう。769は吉備系甕。いわゆるボウフラ甕と呼ばれる形態で，搬入土器である。香川県下においては，弥生後期後半以降遺跡により若干の多寡はあるが，吉備系甕は普遍的に出土する。772～779は高坏及び同脚部。坏部形態には，皿状を呈する772と，中位で屈曲して開く773～775の２者がある。前者は類例に乏しく，後者が一般的な形態である。しかし，775の中実の脚柱部形態は本地域では主体とはならない。776が脚部としては通有の形態である。脚柱部内面はケズリ調整が施され，やや後出する要素を備える。777は下川津Ｂ類高坏の脚部。下層からの混入であろう。779は粗雑な脚部形態。高坏脚部となるかどうかは不詳。780～796は小形鉢である。小形鉢も中層同様，浅皿形態の780～784・787～793と，半球形ないしは小椀形の794～796と，外反口縁を有する785・786の３タイプに大別される。780は口径9.0cmしかなく，むしろミニチュア鉢に近い。779・780は指頭圧痕が顕著な粗製の手ずくね土器。一方788・789・793等は，外面口縁部付近まで調整の及んだ精製品に近い。784の内面には通有のミガキ調整とは異なり，放射状のヘラナデ調整を施す。小碗タイプの794・795は外面タタキ調整を残し，小平底を呈する。当該時期とするにはやや違和感がある。尖底形態の785は，外底部を強い指押さえを加える。胎土中には多量の黒雲母粒を含み，丸亀平野西部域等からの搬入土器であろう。786も同様に搬入品の可能性が高い。口縁部内面には，僅かに赤色顔料の付着を認める。797～812は中形鉢である。中形鉢も基本的には３タイプに大別される点は，小形鉢と共通する。797はやや口径が小形だが，器高が高く内法量が大きいことから中形鉢とした。804のように鈍い平底を呈する浅皿タイプの中形鉢は，イレギュラーな形態で類例に乏しい。805は胎土中に多量の角閃石と黒雲母粒を含み，搬入土器の可能性が高い。809～811は，大形鉢とした813と口径の点で大差はなく，中形と大形の中間形態に相当し位置付けは困難。とりあえず，体部形状から推定される内法量により，中形鉢に分類しておく。809の内底面には，使用時のものと思われる敲打痕による小さな窪みを認める。食材の擦り潰しに使用されたもの

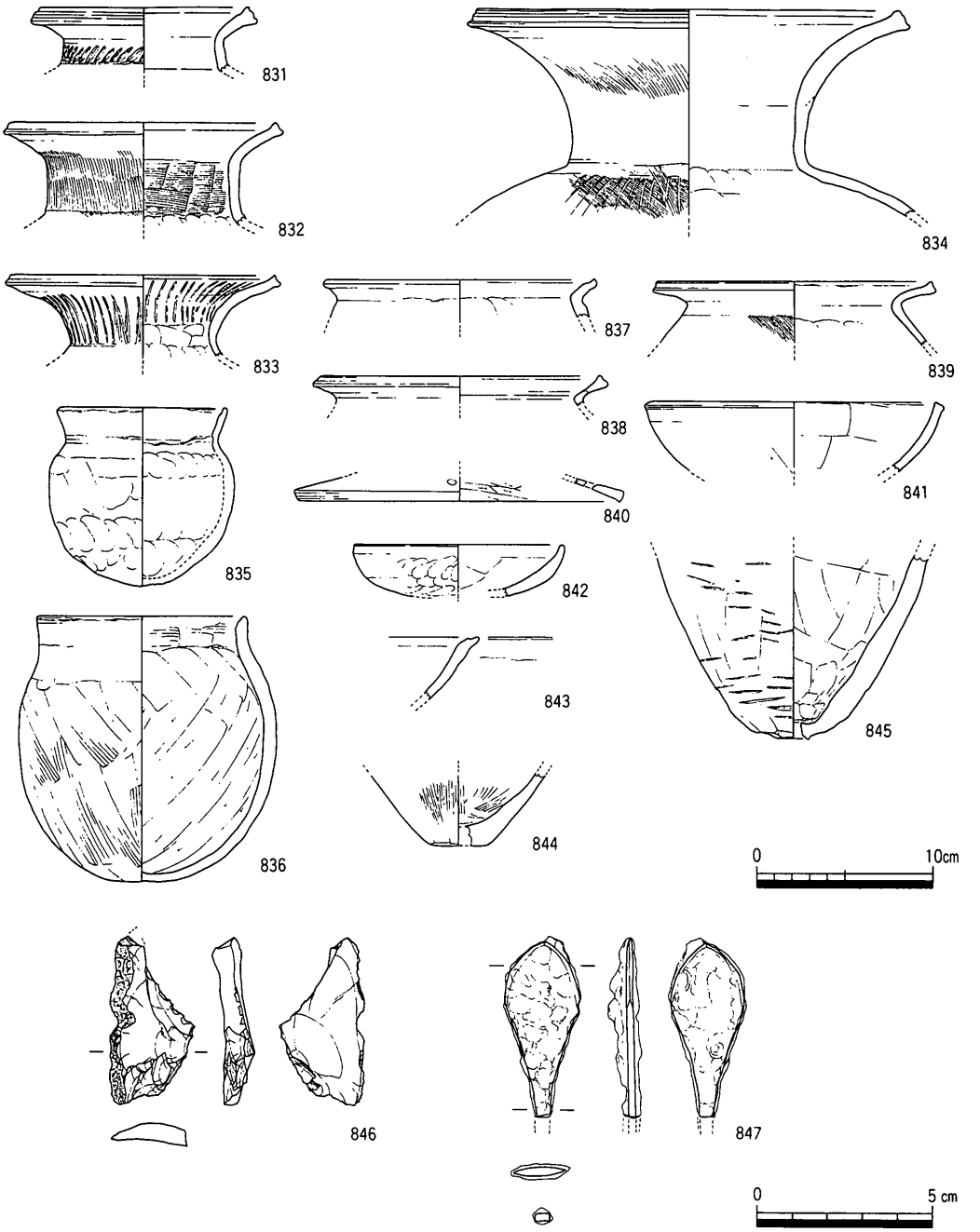


第95図　10 a 区谷 7 上層出土遺物実測図 8 （1 / 4 ）



第96図　10ａ区谷７上層出土遺物実測図９（１/４）

か。813～816は大形鉢である。大形鉢は外反する口縁部を有する形態に限られる。815は口縁部にひずみが大きく，図示した傾きにはやや難がある。バケツ状を呈する深鉢形態になる可能性がある。816は口縁部の一端に片口を付す。817は通有形態の中形鉢だが，底部に焼成前の穿孔を認めることから底部穿孔鉢とした。本形態のような穿孔鉢の場合，口縁部の破片からそれと判断することは困難である。胎土は粗く粗雑な調整は，穿孔鉢に共通してみられる特徴ではある。818も焼成前の穿孔がみられ，底部穿孔鉢となろう。819は形態上は製塩土器に近似するが，内外面ハケ調整が多用され，胎土も細かな素地粘土が選択され，一見して製塩土器より精製である。台付深鉢として報告するが，類例は多くはない。820～823はミニチュア土器鉢である。820はミニチュア土器として定型化した形態か。高松市空港跡地遺跡ＳＤｅ138の309（蔵本他1997）等に類例をみる。822の口縁部外面には，成形時の外型に使用したであろう篭状の器の圧痕を認める。824は土器底部。円盤充塡で



第97図　10ｂ区谷７上層出土遺物実測図（１/４・１/２）

成形される外底面に，木葉圧痕を認める。825は突出した底部周縁を摘み出し，上げ底状を呈する小形壺もしくは鉢の底部。826は製塩土器脚部である。外面には僅かにタタキ調整を認める。827は異形の土器で，頂部に摘み状の突起を有することから蓋と考える。828

は土器小片だが，内面に「V」字の記号文を有する。本例のような記号文は，後期初頭頃の高松市上天神遺跡をはじめ，空港跡地遺跡ＳＸｅ03の834（蔵本他1997）等，類例は多い。なお胎土中には角閃石や多量の黒雲母粒を認め，搬入土器の可能性が高い。829は山陰系の鼓型器台の脚部で，胎土の点から在地での模倣形態と考える。内面は横ケズリ調整され，上端には同形態の器台特有の括れを認め，内面はその部分面取りされるなど，比較的忠実にコピーを意図したものと考えられる。830は径12～13cm程度のツブラジイの加工材。長さ35cm程の丸太材を幅10cm，厚さ７～８cm程度の横断面長方形状に加工し，さらに上下両端を２方向から削って断面Ｖ字形に尖らせる。側縁の一部には樹皮が残されるなど，加工の度合いは低い。用途不明。

831～847は10ｂ区上層出土の遺物である。831は中期に遡る広口壺。頸部に刺突文を加える。832～834は古墳時代初頭頃の広口壺である。833は内外面縦方向のミガキ調整により加飾する。834は大形壺となろう。肩部外面に放射状のミガキ調整を加える。835～839は甕。835は粗製の小形甕である。836は甕としたが，頸部に括れの乏しい点からすれば，ある種の鉢となる可能性も残る。838は下川津Ｂ類甕。837はその模倣形態か一定程度の影響を認める。いずれも当該時期まで残存するものではなく，下層からの混入であろう。839は当該時期の甕の主体をなす典型的な甕Ｃ形態。840は下川津Ｂ類高坏の脚端部。下層からの混入であろう。841・842は小形鉢。843は小片だが，口縁部が外反する点から中形鉢として報告する。844は甕底部であろう。845は底部穿孔鉢である。通有の尖底形態ではなく，小さな平底をとどめる。846はサヌカイト製の剥片。847は柳葉形の鉄鏃である。

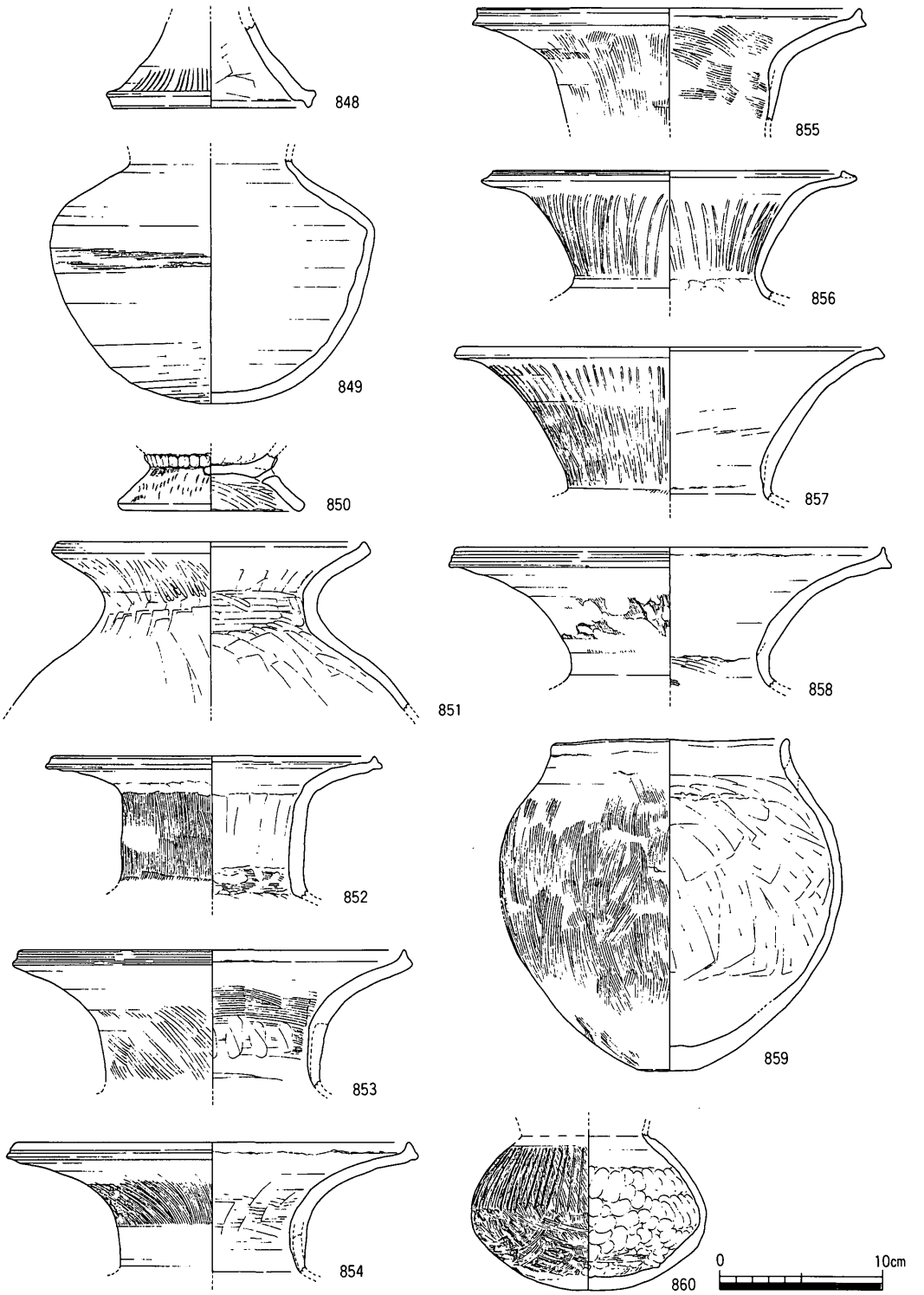
848・849は10ａ区上層出土の遺物である。848は弥生時代中期に遡る高坏脚部。裾部外面は細い垂下沈線で飾る。849は須恵器短頸壺。７世紀中葉前後に位置付けられると考える。

850～873・919・922・924～926・928～931は10ｂ区最上層出土の遺物である。850は弥生時代中期に遡る台付壺か。脚台部上端に刻み目突帯を貼付し，突帯下に小円孔を穿つ。外面にはハケ調整の後，ランダムな爪圧痕を認める。851～858は古墳時代前期初頭前後の広口壺各種。中・上層資料と大きな差異はない。859は短頸壺としたが，イレギュラーな形態であり分類になじまない。体部内外面の調整手法及び小さな平底を呈する形態から，広口壺と同時期と考えてよいだろう。860は細頸壺で，やや古く位置付けられる可能性がある。胎土は精選され，外面は細かなハケ調整の後肩部に放射状のミガキ調整を施す精製品である。861～868は同時期の甕である。861～863は小形甕。863は頸部形状から壺とな

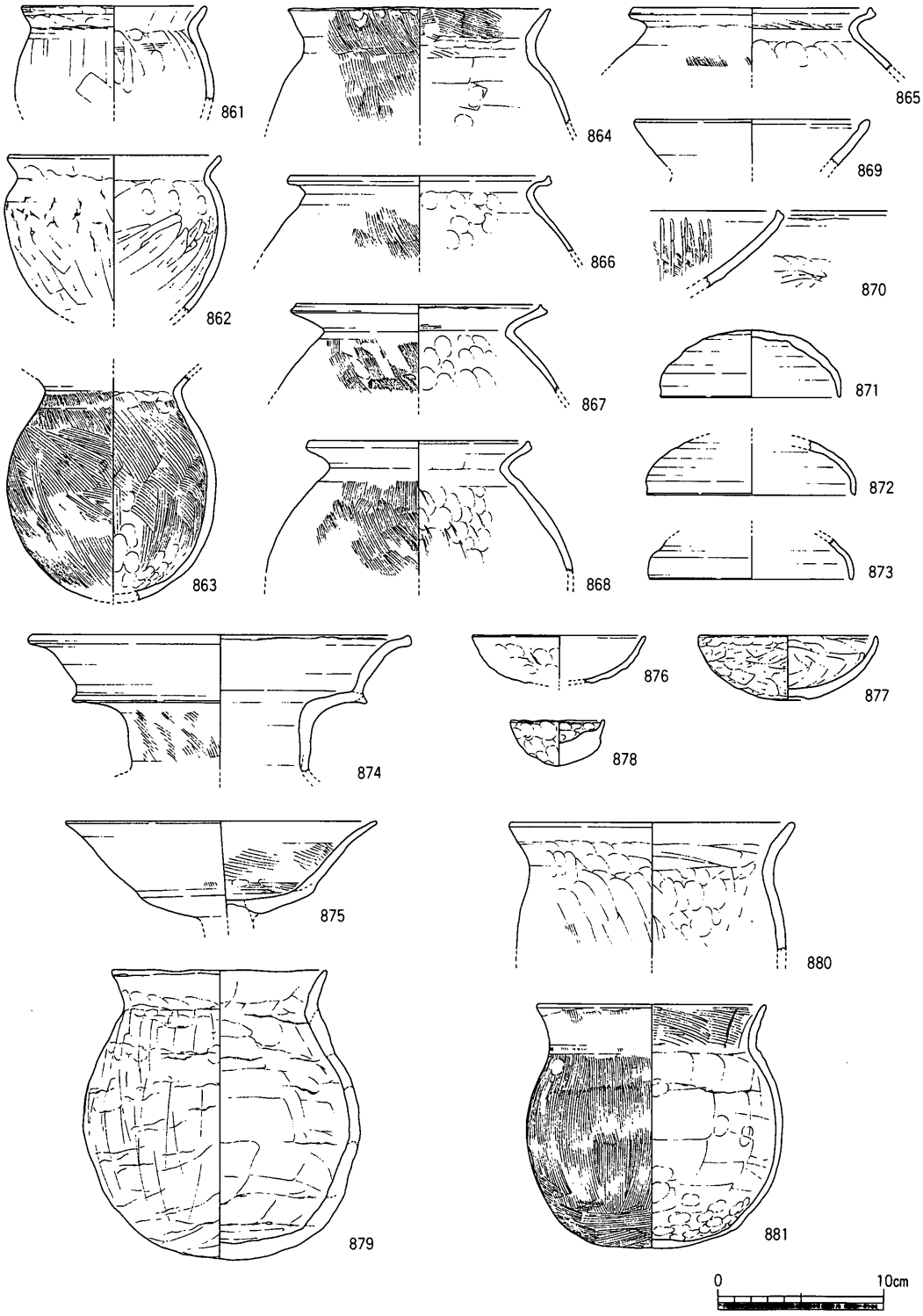
る可能性も残る。864は内外面ハケ調整が卓越する粗製の甕。外面体部から口縁部にかけて連続したハケ調整を施すものは，少数派である。865～868は甕C形態。口縁部が短い865・866にやや古い様相を認める。869は内湾して開く口縁端部を内側へ肥厚する典型的な布留系甕。胎土の面から在地での模倣形態と考える。後述する須恵器の一群と同時期に位置付けられるのか，上記甕Cに近い古墳時代初頭に遡るかは，出土状況から判断することはできなかった。870は古墳時代初頭前後の鉢。端部形状からすれば中形鉢になろうか。871～873は須恵器坏蓋。873は小片のため，復元した口径にやや難がある。形態上有蓋高坏の蓋となる可能性も残る。しかし，いずれもＴＫ217型式期に併行することは間違いない。919はナイフ形石器。下端を折損する。922は周縁に潰し加工をみることから楔形石器と考えた。いずれもサヌカイト製である。924～926・928～931は木製品である。924は刃部と把部を一体成形した短刀形木製品。樹種はアカガシ。刃部長約25cm，同幅約3.6cm，同厚約2.8cm，把部長5.5cm以上，同幅約4.0cm，同厚約3.5cmを測る。刃部はやや反りがみられ，断面形は整った五角形状を呈する。片刃の刃部の表現から抜き身と考える。把頭部及び側面の一部を大きく欠損する。断面形は台形状を呈すると思われるが，左右対称とならずややいびつである。925は柝の支え木。ほぼ中央付近で半截し，一端を欠損する。樹種はスギ。上端には方形の出柄が削り出される。握り部は断面半円形状に丁寧に加工されている。なお柄部には栓の孔は認められない。926は加工度の低い芯持ちの杭か。樹種はクヌギ。径約2.5cm，長さ26.0cm以上。下端部が３方向より削り込まれていることから杭と判断したが，削り部長は３cm程と短い。また，小枝は払われているが，樹皮は多く残されている。928・929はほぼ同形態の用途不明品だが，929は切り込みが１ヶ所でやや小形となる。両者共樹種はアカガシである。928は長さ46cm以上，径2.5cm程の芯持ちのやや反りのある棒状材の一端を両側５方向より削りＶ字状に尖らし，その上位２ヶ所に僅かな切り込みを入れる。切り込みの深さは３mm程と浅いが，細かな削り調整を重複させて丁寧に施されており，意図的に抉りを削り出そうとしたことが窺える。上端は欠損する。全体に小枝が払われる程度で，樹皮は多く残されており加工度は低い。下端をＶ字状に尖らせる。中位の反りや紐を掛けるのに適当な抉りの存在から，天秤棒などの器種が想定されるが，明確な用途は特定できない。なお，天秤棒とするには径が細くやや難がある。930・931は杭。930は長さ57cm以上，径３～４cmの曲がりの少ない自然木が選択されている。樹皮は多く残る。下端を５方向から削り込まれ尖らせる。樹種はヤシャブシ。下端の一部を欠損するのみで，ほぼ全形を窺うことができる。上端は周縁が僅かに削られており，断面台形状を呈する。931

も長さ68cm以上，径４cm前後の曲がりの乏しい自然木が選択されている。樹皮は多く残る。下端は３方向より削られて尖る。上端欠損。樹種はケヤキ。なお，本調査区からは量的には多くはないが，一定量の木製品の削り屑が出土しており，周辺で木器の加工等が行われていたことが推測される。

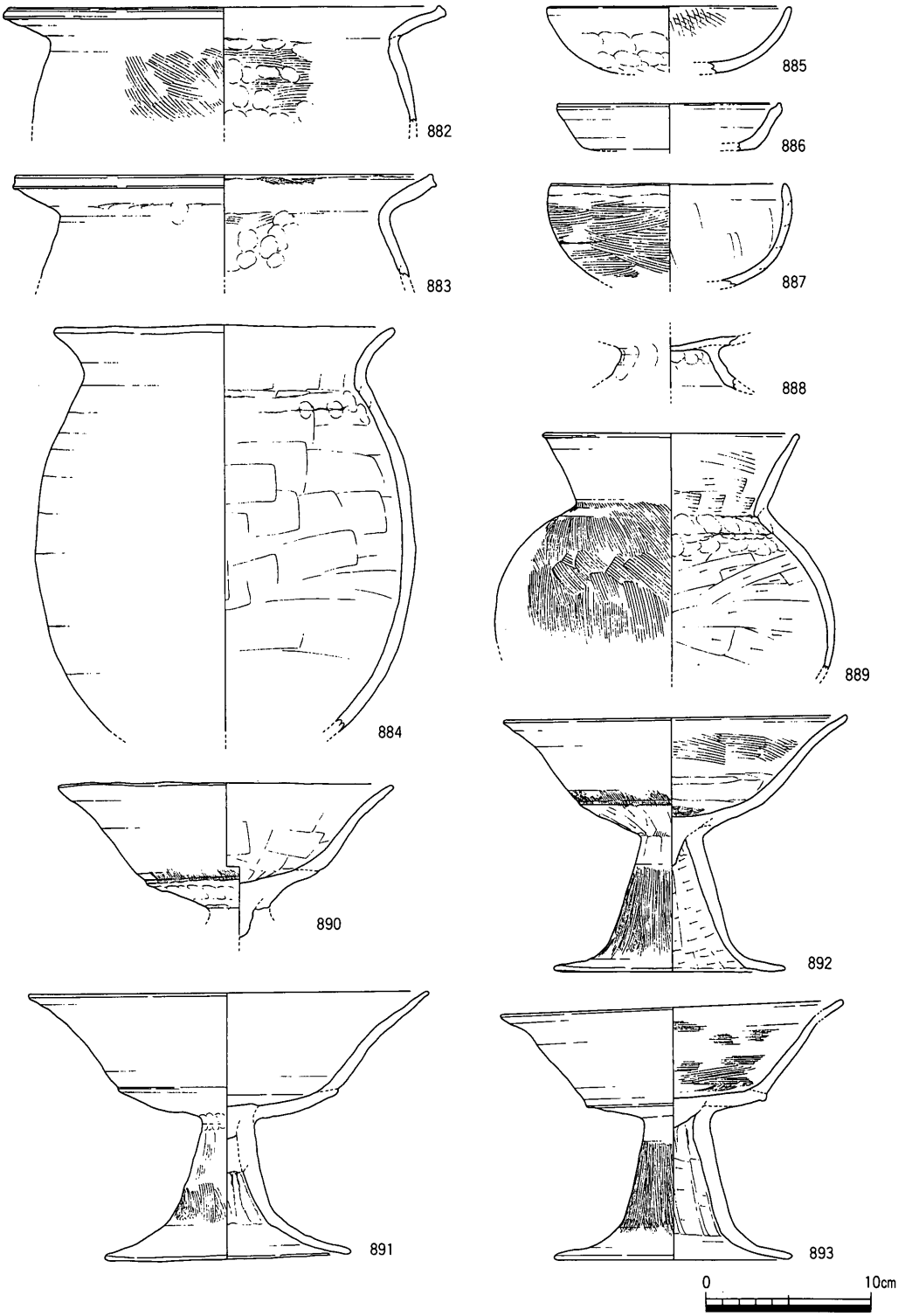
874～918・920・921・923・927は11区最上層出土の遺物である。874～878は古墳時代初頭の遺物で，上層以下の層位から混入した可能性が高い。874は二重口縁壺。当該期東四国地域に通有の形態である。875は高坏。坏部中位に鈍い段を認める。876・877は小形鉢。877外面には鋭利な工具で施されたシャープなケズリ調整が，口縁部付近まで認められる。878はミニチュア土器鉢である。器壁は厚く，指頭圧痕が顕著な粗製の手ずくね土器である。880～881は土師器甕。879は内法量1.9ℓ，881は同1.5ℓ程度の小形の球形形態である。879・880は調整が粗雑で，器表面に成形時の凹凸が顕著に残る粗製甕である。882～884は大形甕となろう。882・883は体部形状不明ながら，884同様の長胴タイプなる可能性が高い。いずれも口縁端部を上方に摘み上げる。884は前２者より口縁部の屈曲が緩やかだが，体部形状などから同時期に位置付けても無理はない。885～887は土師器坏。885・887はボウル状を呈する坏Ｇ形態。885は外面指頭圧痕が，887はハケ調整が卓越し，いずれもミガキ調整は施されない在地系統の粗製品である。887底部は意図的に打ち欠いた可能性が考えられる。886は口縁部が直線的に立ち上がる形態。885等よりは後出する。888は土師器台付皿。脚台部は中位で鈍く屈曲し外反して開く。器表面剥離が顕著で調整等は明瞭ではないが，凹凸が顕著で粗製品となろうか。889～893は11区中央部付近より出土した，布留式最新相に並行すると考える一括資料である。889は直口壺。口縁部は直線的に外上方に開き，端部を四角く納める。体部は球形を呈し，外面には右下がりのやや粗いハケ調整が施される。胎土は精選され粗粒を含まない。890～893は高坏。坏部は中位で屈曲して上半部は外傾して立ち上がり，口縁部付近で屈曲して外反して開く。脚部はやや太めの脚柱部より緩やかに屈曲して裾部は外反して開く。裾端部は丸く納める。脚柱部外面は縦ハケ調整，内面はケズリ調整が施される。坏部と脚部の接合はいずれも充塡法であり，粘土塊が脚部内面に強く突出する。坏部中位の屈曲がやや鈍く明瞭な段をなさない892と，段を強く強調する893等バリエーションを認めるが，大きな時期差を想定するものではない。894は土師器羽釜。口縁部は強く折り返して外反して開く。口縁端部は鈍く摘み上げる。頸部下位外面にやや内湾して斜め上方に伸びる口径より大きな鍔を付す。鍔端部は上方へ摘み上げ，端面はヨコナデにより鈍く窪む。上掲土師器は，879～885・887が後述する須恵器との関係よりＴ



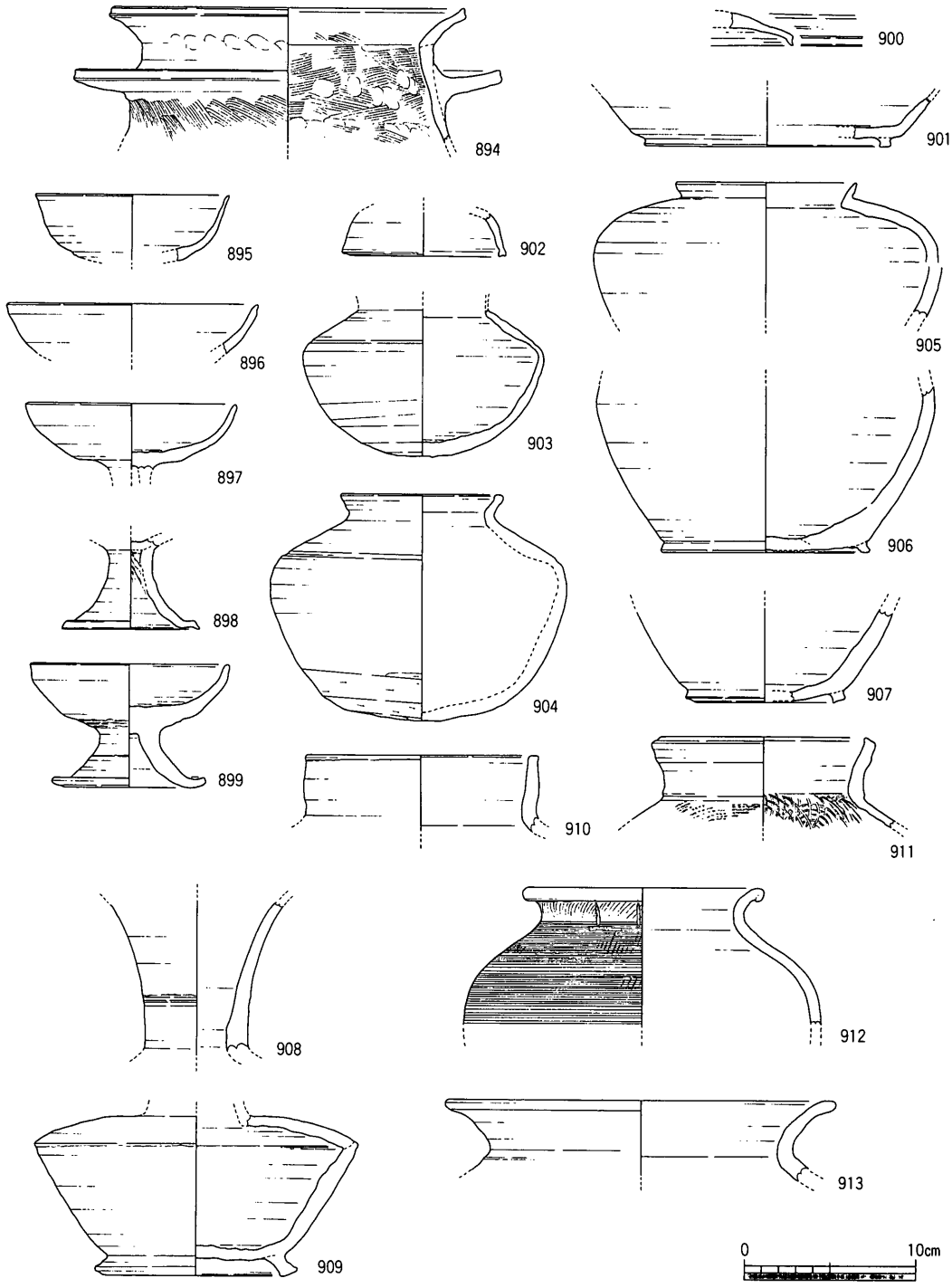
第98図　谷７最上層出土遺物実測図１（１/４）



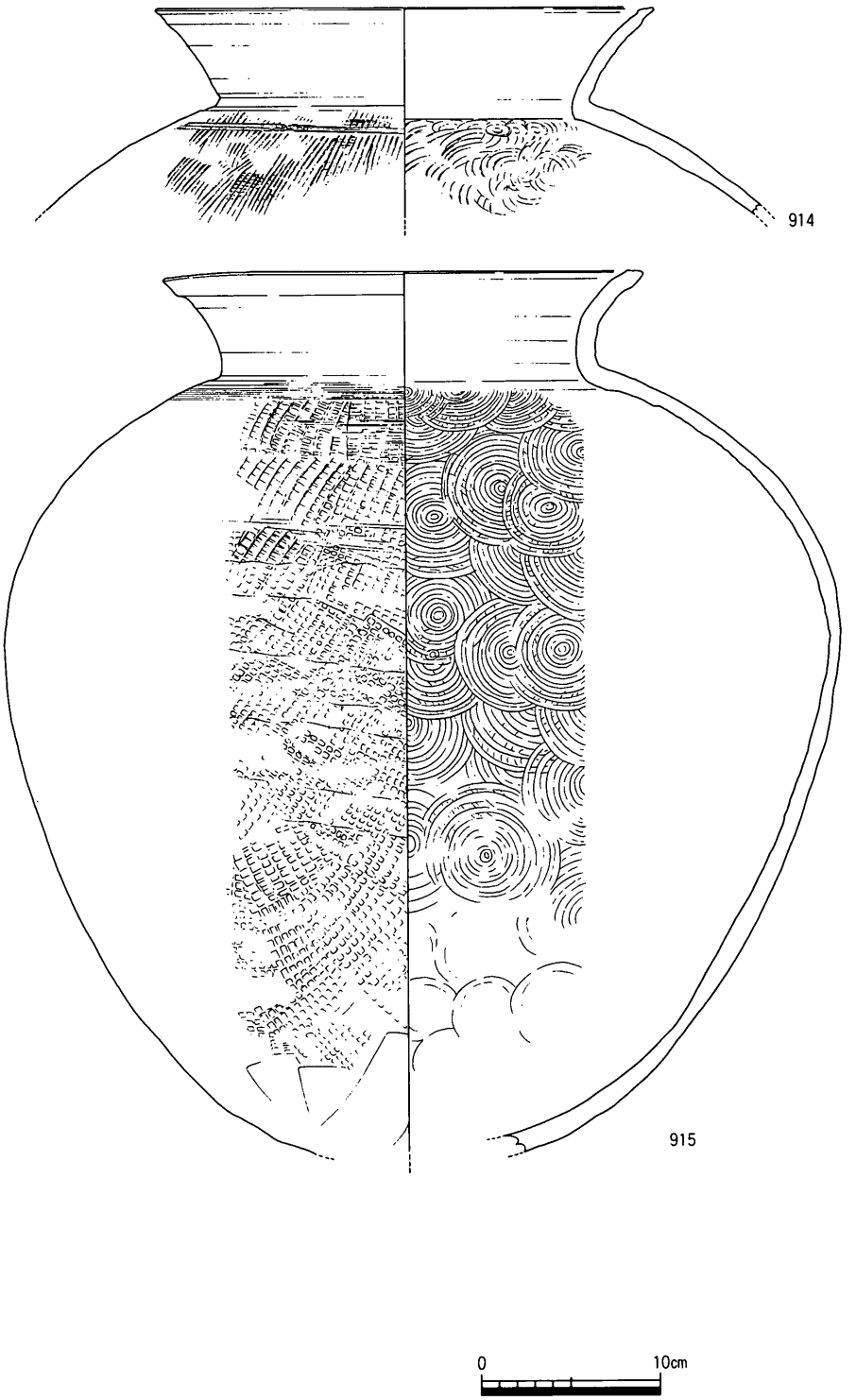
第99図　谷７最上層出土遺物実測図２（１/４）



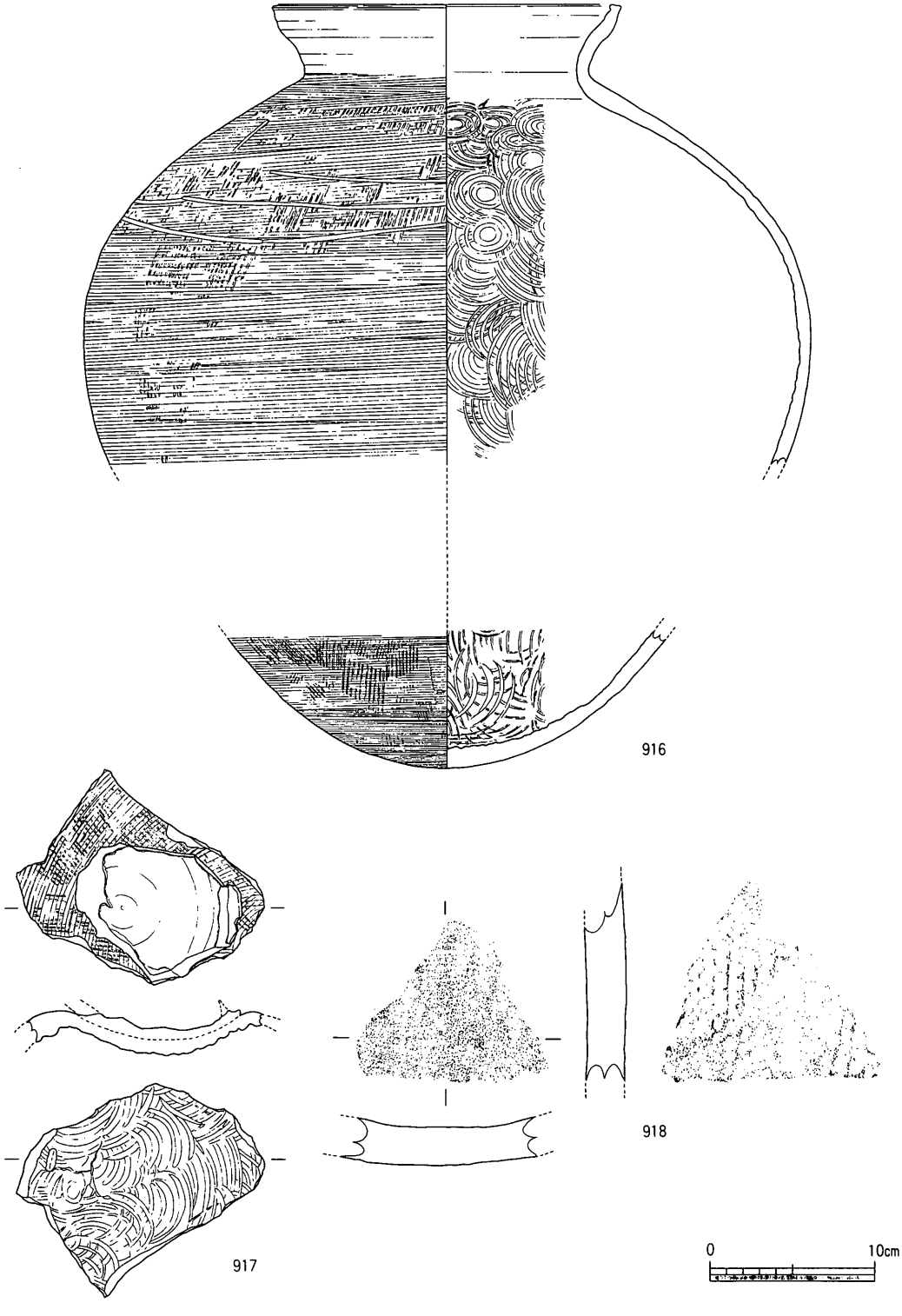
第100図　谷７最上層出土遺物実測図３（１/４）



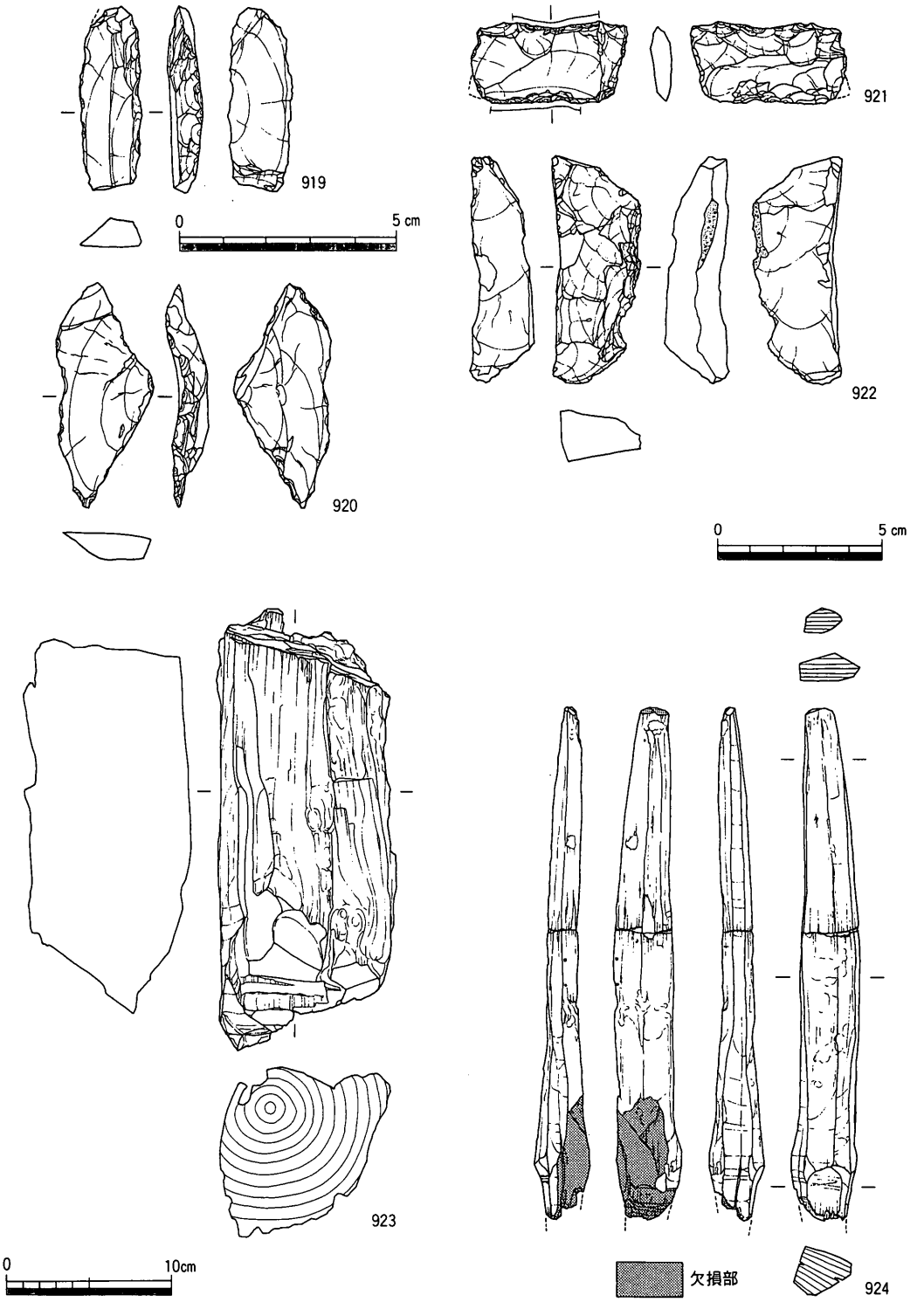
第101図　谷７最上層出土遺物実測図４（１/４）



第102図　谷７最上層出土遺物実測図５（１／４）

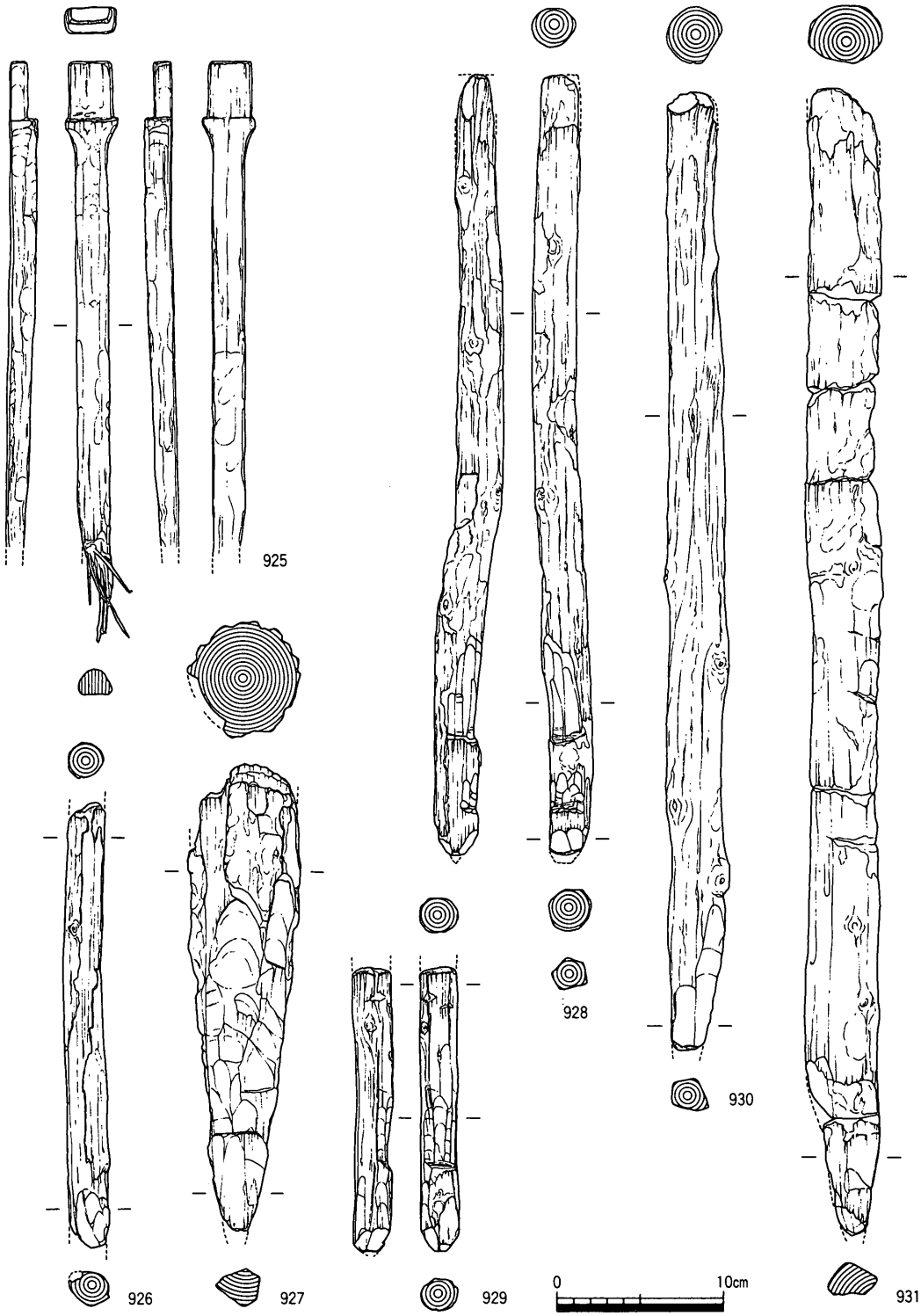


第103図　谷７最上層出土遺物実測図６（１/４）



第104図　谷７最上層出土遺物実測図７（2/3・1/2・1/4）

K217型式期前後に，886・894は後出し８世紀代にそれぞれ位置付けられよう。888は細片でもあり位置付けは困難で，上記年代幅の中で取りあえず理解しておきたい。895～917は須恵器である。895は口径がやや小さく全体に器壁が薄い点から坏身と考えたが，後述する無蓋高坏坏部となる可能性も残る。896～899は無蓋高坏。896は脚部を欠くが，897と同様な坏部形態から無蓋高坏坏部としておく。脚部は端部が屈曲して下方へやや強く摘み出す898と，鈍く外反して丸く納める899の２者があり，前者が通有の形態である。899は焼成がややあまく，胎土中に角閃石とみられる黒色微砂粒を多量に含み，他の高坏とは製作地を異にする可能性が高い。しかし，いずれも坏を反転した坏部形態と，短脚化した脚部形態からＴＫ217型式期に位置付けられよう。900は坏蓋口縁部小片。端部を下方へ摘み出し垂下させる。901は同坏。底部は直立する断面矩形の高台を付す。いずれも８世紀代には納まる。902～907は短頸壺及び同蓋である。肩部に強い張りがあり相対的に体部最大径の位置が高く，口縁部は短く外傾し，底部はやや直線的で，外底面に高台を付す905～907と，体部最大径の位置がやや低く，口縁部はやや内湾して端部を肥厚し，底部は丸味を有して高台を欠く903・904の２者に大別される。902は後者とセットになる。903は器壁が薄く，胎土・調整が精選された精製品，904は粗製品である。時期は，後者は共伴する遺物よりＴＫ217型式前後に位置付けられ，前者は８世紀代には納まると考えるが，細かな時期は不詳。なお，905と906は近接した位置から出土し，調整手法や法量の点からも同一個体の可能性が高いが，接合できなかったため別個体として報告する。908・909は長頸壺。別個体だが，顕著な時期差を認めない。７世紀代には納まるものと考える。909外底面には外方へ踏ん張る高台を有し，高台端は上方へ鈍く摘み出す。910は口縁部が直立する直口壺。端部は四角く納める。長頸壺とほぼ同時期か。911～913は小形の甕。911は焼成はあまく土師質に近い。器表面は炭素が吸着し，瓦質状を呈する。912の口頸部外面には２条のヘラ描きの記号文を有する。911・912共７世紀中葉頃を中心とした時期であろう。913は強く外反して開く口頸部を有する。やや後出し８世紀代前後に下る。914～916は大形の甕。いずれも体部外面は格子目タタキ調整が，内面は同心円の当て具痕が顕著である。916はタタキ調整の後，肩部に２条のヘラ描きの沈線文を施す。914は８世紀代に下る可能性があるが，それ以外は７世紀中葉を前後する時期に位置付けられよう。917は大形甕の底部片と考える。外底面には焼き台と考えるＴＫ217型式期頃の須恵器坏片が熔着する。918は須恵質の平瓦であるが，焼成はあまく土師質に近い。凸面には粗い格子目タタキがみられる。920はサヌカイト製の剥片で，側縁の一部に２次加工痕を認める。921はサヌカイト



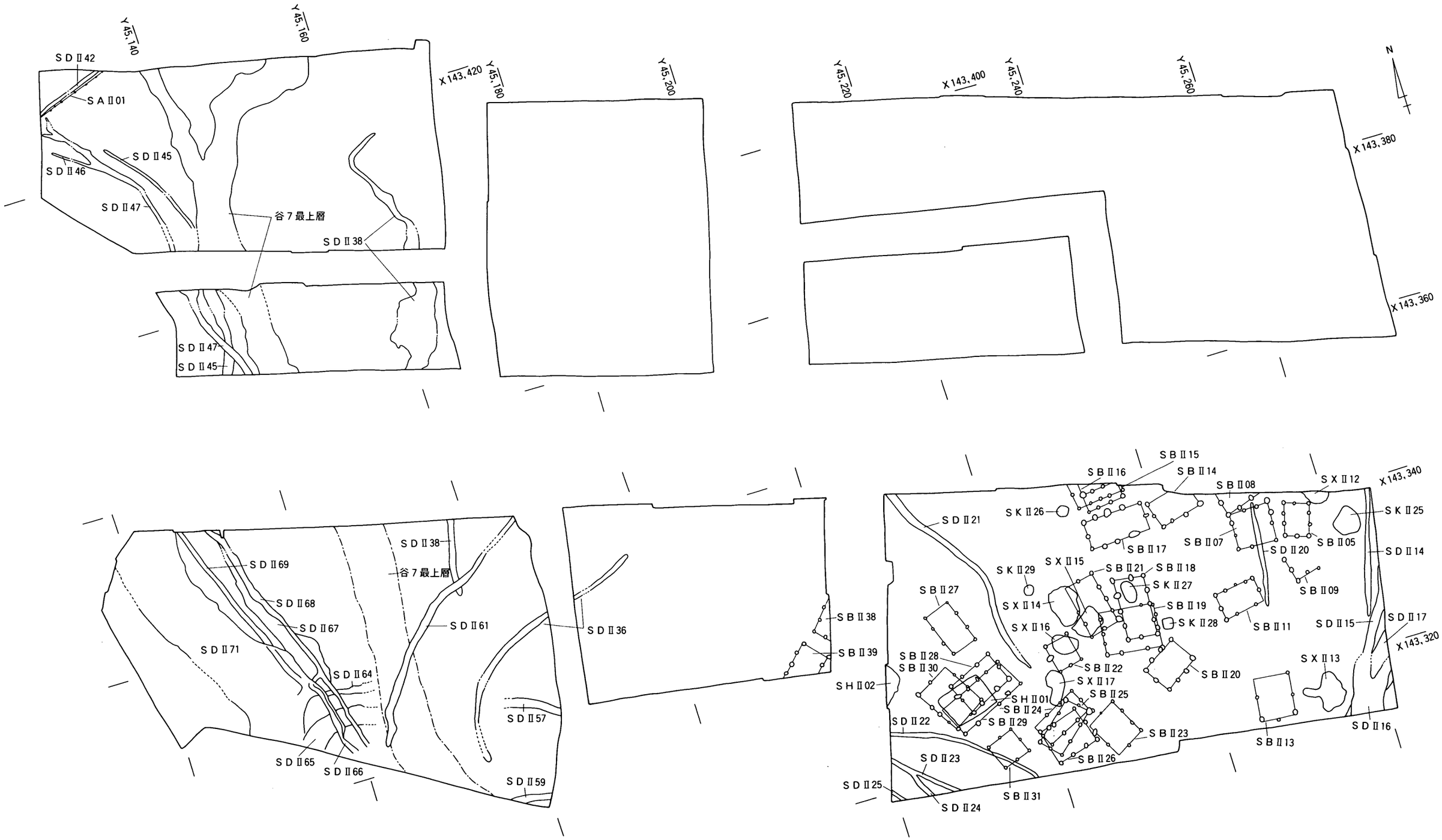
第105図　谷７最上層出土遺物実測図８（１/４）

製楔形石器。上・下側縁に潰し加工を認める。923・927は木製品。923は径14～15cm程の丸太材を1/4分割したミカン割り材。基本的に荒割りしたまま破断面は残されており，細かな調整は施されていない。また側面には樹皮がそのまま残される。上端は軸に垂直方向に粗くカットされ，下端は両側より削りV字形に尖らせる。大形の部材を加工した際に生じた端材か。樹種はコナラ。927は径6.5cm前後，長さ27cm以上の丸太材を利用した杭。下端を5方向より削られ尖らせる。削り部長は20cm以上に達し，細かな単位で調整痕がみられる。上端は欠損する。樹種はクヌギである。

本文註

1. 森岡秀人氏により，大阪府東大阪市周辺の河内平野低地部産の可能性が高いとのご教示を得た。
2. 本庄内甕内面には，多量の赤色顔料の付着が確認され，その種類等を特定するため蛍光X線分析を試みた。分析の結果，水銀朱は検出されず，赤色顔料はいわゆるベンガラである可能性が示唆された。また，器表面の僅かなクラックにも浸透して残存しており，液体状を呈した内容物として貯蔵？されていた可能性が考えられる。

なお，同分析に際して徳島県立博物館の魚島純一氏のお世話になりました。記して感謝致します。



第106図　古代主要遺構分布図（１/500）

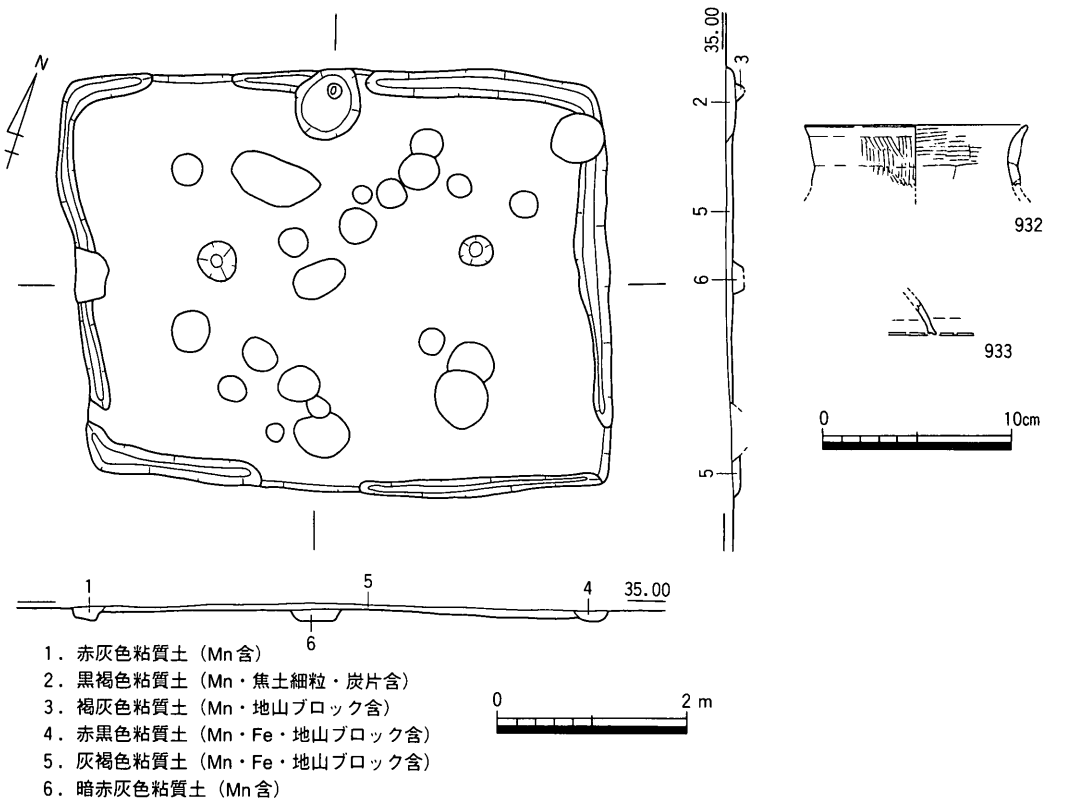
第３節　古代の遺構・遺物

竪穴住居

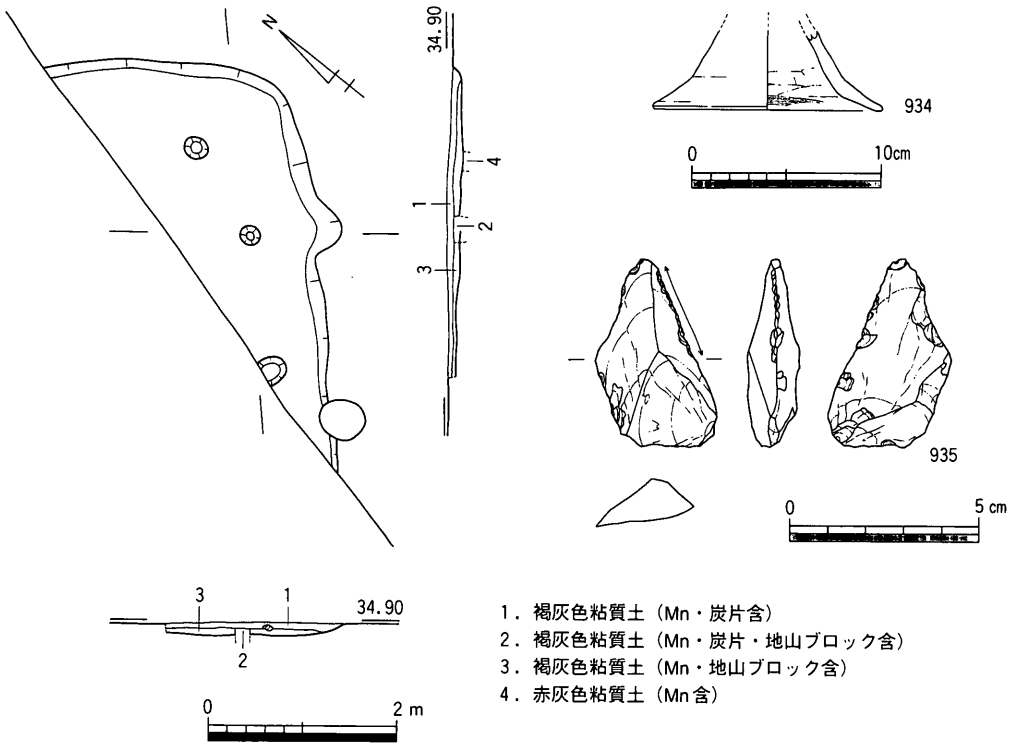
ＳＨⅡ01（第107図）

７ｂ区で検出された竪穴住居である。ＳＢⅡ28～30の３棟の掘立柱建物と重複し，柱穴の切り合い関係よりいずれの建物遺構よりも先行する。平面形は，長軸5.6ｍ，短軸4.45ｍ，主軸方向Ｎ72.0°Ｅの東西に長い隅丸長方形を呈する。主軸方向は，遺構面の傾斜方向と概ね一致する。床面積は24.9㎡を測り，当該期の竪穴住居の中では平均的な規模の部類に属する。残存深は僅か0.06ｍで，顕著な削平を蒙っている。埋土は地山層の小ブロック土を含んだ灰褐色粘質土の単層である。埋土上面より，壁溝と竈が掘り込まれており，埋土下面（地山層上面）で壁溝等は確認しておらず，貼り床層と考えられる。

壁溝は，部分的に途切れながらも四周に巡らされており，壁溝掘削後に北辺中央部に造



第107図　ＳＨⅡ01平・断面図（１/80），出土遺物実測図（１/４）



第108図　ＳＨⅡ02平・断面図（１/80），出土遺物実測図（１/４・１/２）

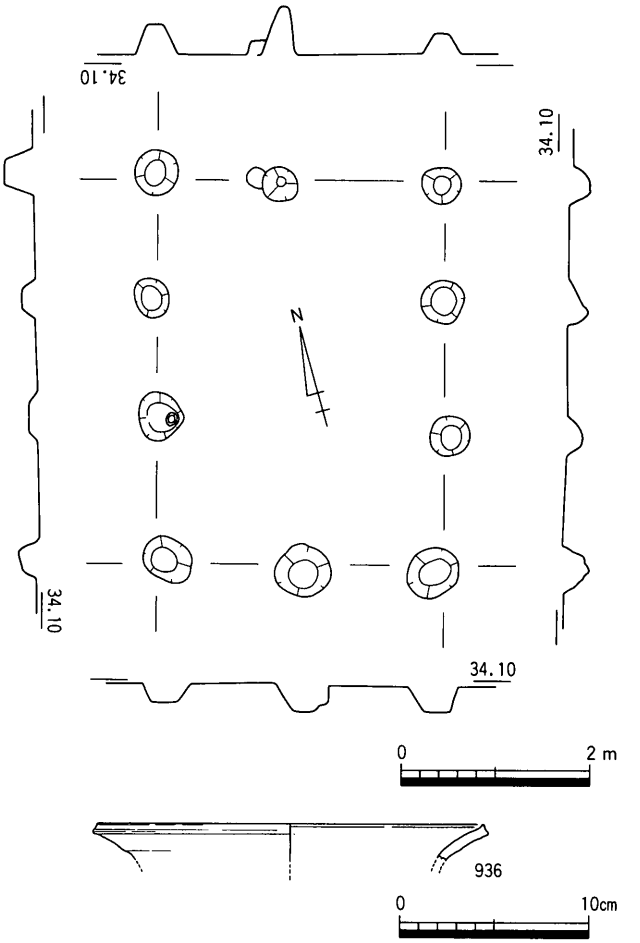
り付け竈を設けたことが，両者の切り合い関係より判断される。基本的に床面まで削平されているため，煙道を含め竈本体は残存しておらず，僅かに焼土や灰層を伴った長径0.75m程の平面楕円形を呈する浅い炉床が検出されたのみである。炉床は住居壁側は垂直に近く，前面は緩やかにそれぞれ掘り込まれ，断面形は概ね皿状を呈する。竈中央やや壁寄りの床面で，支柱痕と考えられる径0.1m程の小ピットを検出した。壁溝は，幅0.36m，深さ0.12mで，断面形は皿状を呈する。主柱穴は２本と考えられる。柱間間隔2.3mで，柱穴は径0.35m程の平面楕円形を呈し，残存深は0.28m程度であった。

遺物は，サヌカイト剥片４点，焼粘土塊10点のほか，土師器や須恵器の小片がコンテナ半箱程度出土しているに過ぎない。また，いずれも器種を特定できないまでに細片化している。この内２点をのみ図化した。いずれも貼り床層からの出土である。932は土師器甕である。内外面ハケ調整により整えられる。おそらく小形球形甕となろう。933は須恵器蓋である。端部は外方へ鈍く摘み出され，端面には浅い沈線状の段を認める。形状から有蓋高坏の蓋となる可能性が高い。933はＴＫ43型式期前後に位置付けられると考えるが，932はそれより若干後出する可能性が高い。上記資料より，６世紀後半代から７世紀初頭を前

後する時期に位置付けられると考える。

ＳＨⅡ02（第108図）

７ｂ区西端で検出された竪穴住居と考えられる遺構である。方形住居の北東隅のコーナー付近のみを検出したものと考えている。後述する平面形態と規模，埋土の状況，ＳＨⅡ01との位置関係などを根拠に，竪穴住居として報告する。規模は，東西辺2.5m以上，南北辺4.2m以上，主軸方向N44.5°Ｅを測る。残存深は0.15m程で，床面は平坦であった。埋土は，２層に細分され，上位は褐灰色粘質土，下位は地山小ブロック土を含んだ褐灰色粘質土が水平に堆積していた。両層の差異は明瞭ではないが，主柱穴と考えられる柱穴が下位層上面より掘り込まれていること，上位層は掘り形壁際付近で緩やかに皿状に窪み，平面的には捉えることができなかったが壁溝と考えられることなどから，下位層は貼り床層，上位層は住居廃絶後の堆積層と考えられる。竈は確認されていない。



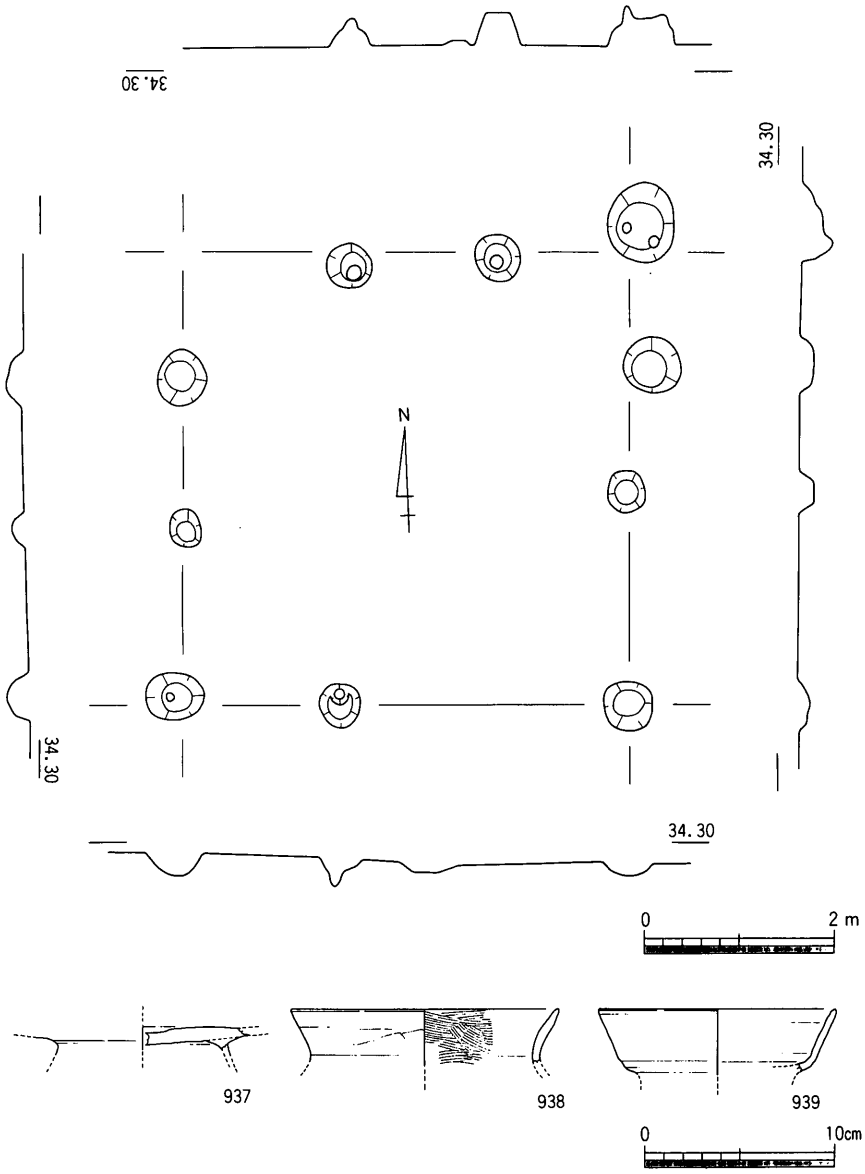
第109図　ＳＢⅡ05平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

遺物は，埋土中より土師器細片が若干量出土しているに過ぎない。また，器種を特定できないまでに細片化しており，遺物の面から時期を特定することは困難である。ＳＨⅡ01との位置関係より，近接した時期を想定しておく。２点を図示した。934は土師器高坏の脚部片である。鈍く折れて裾部は短く開く。脚柱部内面はナデ調整される。上記した本住居の時期と大きくは矛盾しないだろう。935はサヌカイト製の剥片。本住居に直接伴うものではない。側縁の一部に僅かに２次加工痕を認める。

掘立柱建物

ＳＢⅡ05（第109図）

７ａ区中央北端に位置する南北棟建物である。桁行３間（4.0m），梁間２間（3.0m），主軸の方向N17.1°Ｅ，床面積12.0m²の小規模な側柱建物に復元される。北側に庇のつく２間四方の建物としても復元可能だが，ここでは上記復元案により側柱建物としておく。柱穴掘り方は，径0.3～0.6mの楕円形を呈し，底面の標高は33.56～33.85mと一定しない。桁方向の柱間間隔は1.2～1.5mとやや揃わないが，柱通りは良い。梁間間隔は南列で2.8mだが，北列で3.0mとやや北に開く。



第110図　ＳＢⅡ07平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

遺物は，各柱穴より土師器，須恵器の細片が少量出土している。いずれも器種を特定で

きないまでに小片化している。936は土師器甕口縁部片である。端部は上方へ小さく摘み上げ，端面は鈍く窪む。細かな時期を特定するに足る遺物の出土はみられず，位置関係や埋土の特徴より，辛うじて当該時期に位置付けられると考える。

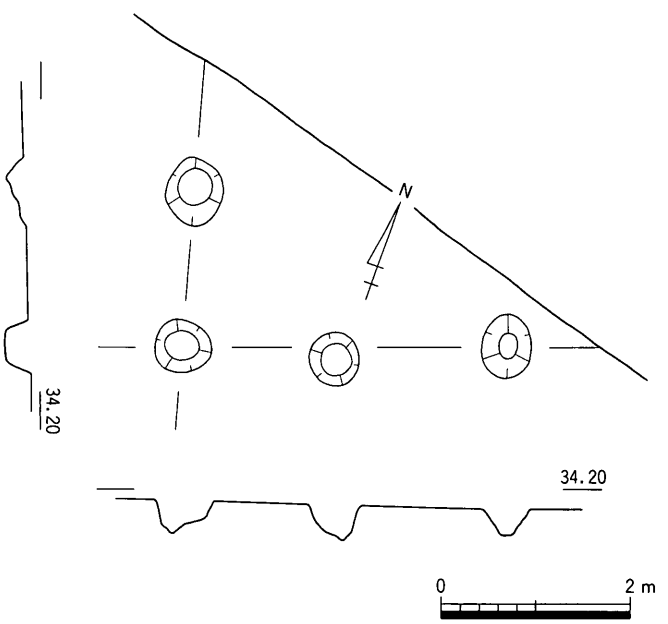
ＳＢⅡ07（第110図）

７ａ区中央北端に位置する東西棟建物である。ＳＢⅡ08と重複する。桁行３間（4.9m），梁間３間（4.4m），主軸方向N1.0°Ｅ，床面積21.6m²の側柱建物として復元したが，梁間方向に東西両列で約0.5m程の差があり，また北西隅の柱穴はＳＢⅡ08と共有するなどの点から，本遺構の復元案は参考資料としての提示に留めておきたい。柱穴の掘り方は，径0.3～0.7mの円もしくは楕円形を呈する。底面の標高は，掘り方底面に突出した柱基部の痕跡を除けば，概ね33.8m前後で一定する。

遺物は，土師器甕体部片を中心に他の建物に比してやや多く出土している。３点を図示した。937は土師器台付皿と考える。脚台部は基部で欠損する。外底面はケズリ調整が認められる。938は小形甕口縁部。端部は丸く納める。939は須恵器坏である。口縁端部は外面に内傾する僅かな面をもつ。また底部は欠損するが，辛うじて高台の剥離痕を認める。その他図示していないが，土師器暗文付杯？や須恵器壺等の小片が出土している。上記資料は，概ね８世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

ＳＢⅡ08（第111図）

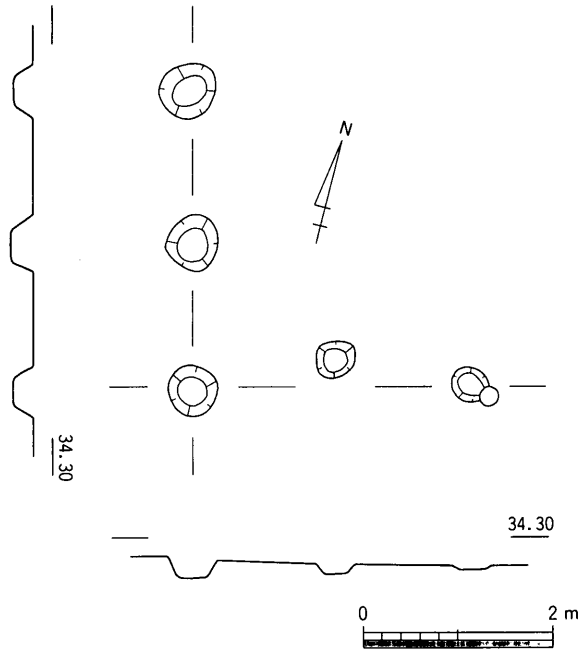
７ａ区西半北端に位置する東西棟建物。ＳＢⅡ07と重複する。北半部は調査区外に延長し，南辺の３穴と西辺の２穴を確認したにとどまるが，後述するように柱間間隔は一定し，柱通りもよいことから建物遺構として報告する。桁行２間（3.5m）以上，梁間１間（1.7m）以上，主軸方向N73.0°Ｅの側柱建物と考えられる。柱穴掘り方は，径0.6～0.7mの略円形を呈し，



第111図　ＳＢⅡ08平・断面図（1/80）

残存深は0.35～0.43mを測る。底面の標高は，33.68～33.75mとほぼ一定している。桁方向の柱間間隔は1.8m前後で揃っている。柱穴埋土は，暗褐色系粘質土が認められた。

遺物は，南西隅の柱穴より須恵器坏小片が出土している以外は，器種の特定の困難な土師器の小片が少量出土しているのみである。出土した遺物を最大限評価し，また建物の主軸方向から，７世紀中葉を中心とした時期を想定しておく。



第112図　ＳＢⅡ09平・断面図（１/80）

ＳＢⅡ09（第112図）

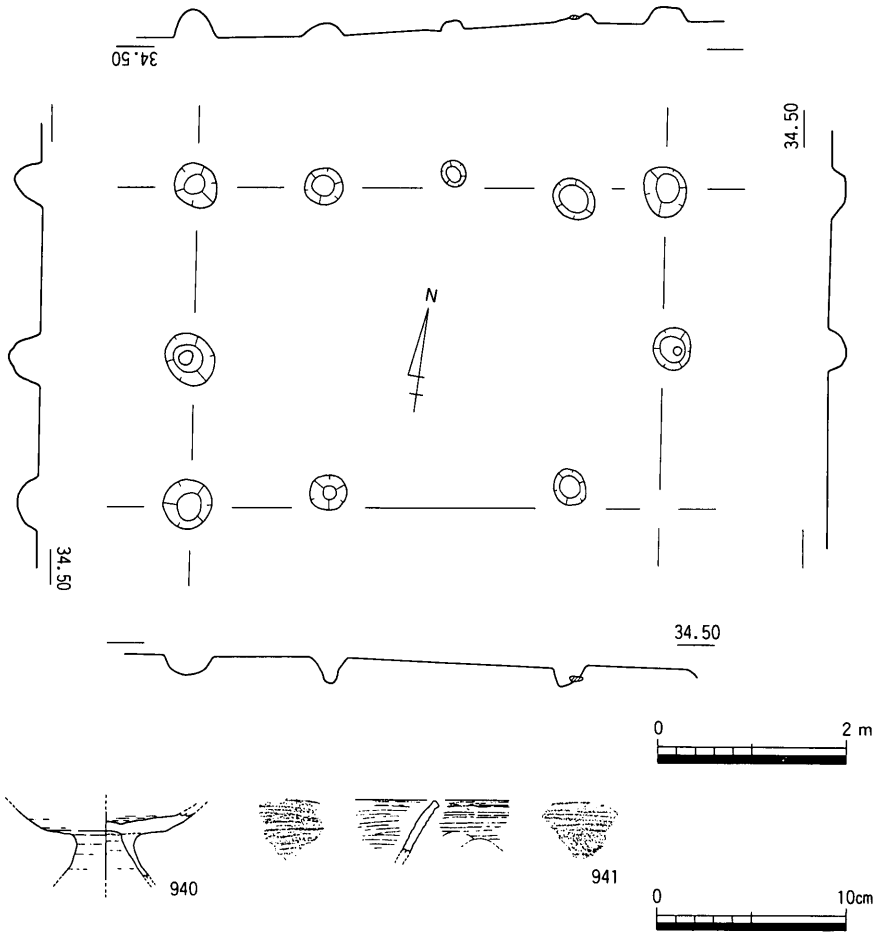
７ａ区北半中央で検出した南北棟建物と考えられる。西辺の３穴と南辺の３穴を確認したにとどまるが，ＳＢⅡ08同様整った位置関係を有することから建物遺構として報告する。桁行２間（3.1m）以上，梁間２間（2.9m），主軸方向N16.0°Wの側柱建物が復元される。柱穴掘り方は径0.4～0.6mの楕円形を呈し，残存深は0.08～0.24mと浅い。柱穴底面の標高は，33.86～33.92mで一定する。桁方向の柱間間隔は1.55～1.60mと揃っており，柱通りもよい。柱穴埋土は，暗褐色系粘質土が認められた。

遺物は，器種が特定できないまでに細片化した土師器片が少量出土したのみである。本建物も時期を特定できる資料の出土はみられない。

ＳＢⅡ11（第113図）

７ａ区西半中央で検出した東西棟建物である。桁方向南列中央穴と南東隅の柱穴を欠く。桁行４間（5.0m），梁間２間（3.3m），主軸方向N83.0°E，床面積16.5㎡の側柱建物に復元される。柱穴掘り方は径0.2～0.6mの楕円形を呈し，残存深は0.12～0.34mで，桁行北列の柱穴に浅いものが多い。柱穴底面の標高は34.06～34.24とほぼ一定する。桁方向の柱間間隔は1.0～1.5mと揃わず，柱通りもややずれるものがある。柱穴埋土は，暗褐色系粘質土であった。

遺物は，製塩土器や須恵器坏，土師器甕等の小片が少量出土している。２点を図示した。



第113図　ＳＢⅡ11平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

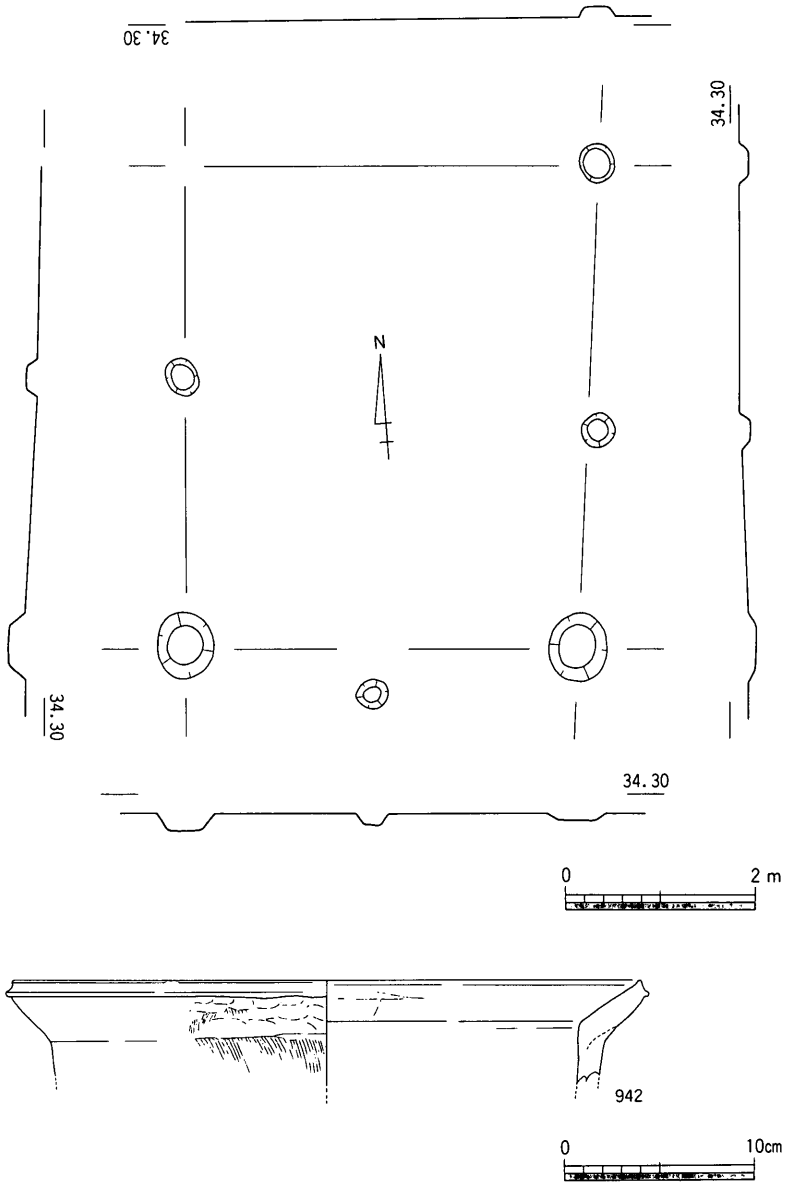
940は須恵器無蓋高坏。口縁部と脚端部を欠くが，短脚化した形態からＴＫ209ないしＴＫ217型式期に位置付けられる。941は縄文土器深鉢口縁部である。本遺構に直接伴うものではない。内外面に貝殻条痕を認めるが磨滅が顕著である。上記資料より本建物は７世紀前半代に位置付けられると考える。

ＳＢⅡ13（第114図）

７ａ区中央南端で検出した南北棟建物と考える。北西隅の１穴と北列中央穴を欠き，また柱間間隔も一定しないことから，参考資料としての提示に留める。桁行２間（5.0m），梁間２間（4.15m），主軸方向N6.2°Ｅ，床面積20.8m²の側柱建物に復元される。柱穴掘り方は径0.4～0.7mの楕円形を呈する。残存深は0.1～0.2mと浅く，上面は顕著に削平を蒙っているようである。底面の標高は33.92～34.11mと揃わず，また桁方向の柱間間隔も

2.3～2.8mと一定しない。柱穴埋土は，暗褐色系粘質土であった。

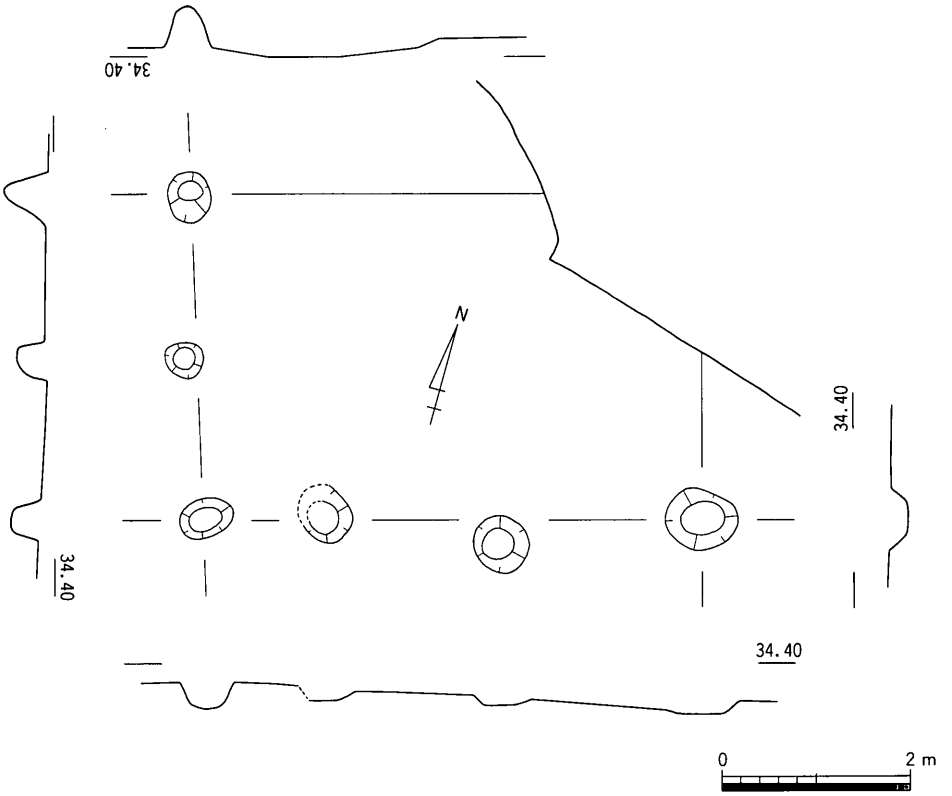
遺物は，図示したものを除いて，器種を特定できないまでに小片化した土師器片が極少量出土したのみである。942は土師器甕口縁部小片である。端部を上下に小さく摘み出し，端面は鈍く窪む。8世紀後半代前後に位置付けられると考える。



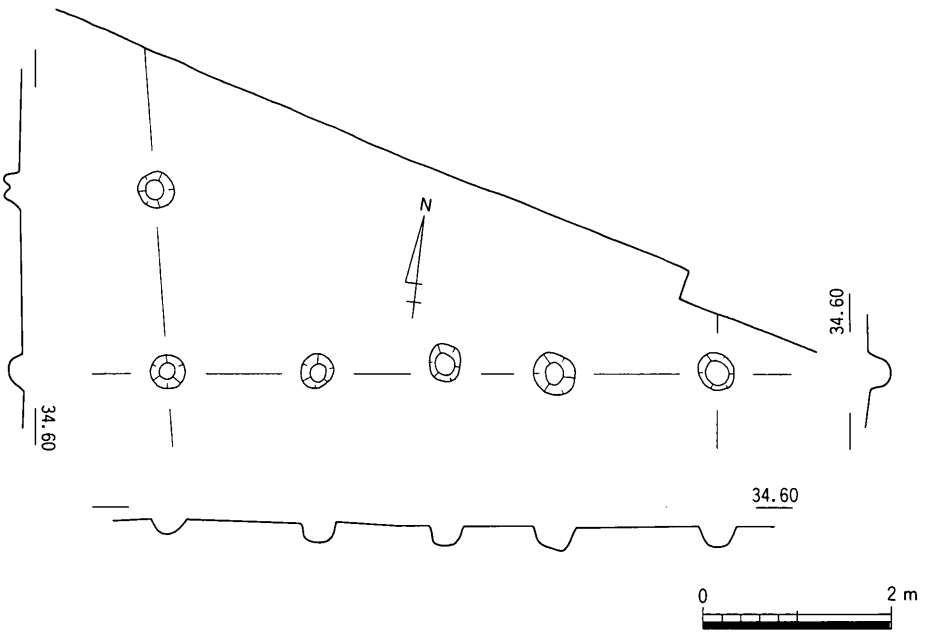
第114図　ＳＢⅡ13平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

ＳＢⅡ14（第115図）

7ａ・ｂ両区の北端で検出した東西棟建物である。北半部は調査区外へ延長し，西辺の3穴と南辺の4穴を確認したにとどまるが，整った位置関係から建物遺構として報告する。桁行3間（5.25m）以上，梁間2間（3.35m），主軸方向N72.4°Eの側柱建物に復元される。柱穴掘り方は径0.5～0.7mの楕円形を呈する。残存深は0.13～0.45mを測り，水田面の造成により7ａ区側での削平が顕著である。底面の標高は33.9～34.0mと概ね一定する。桁方向の柱間間隔は1.2～2.2mと一定しないが，柱通りは概ね揃っている。柱穴埋土は，暗褐色系粘質土であった。



第115図　ＳＢⅡ14平・断面図（１/80）

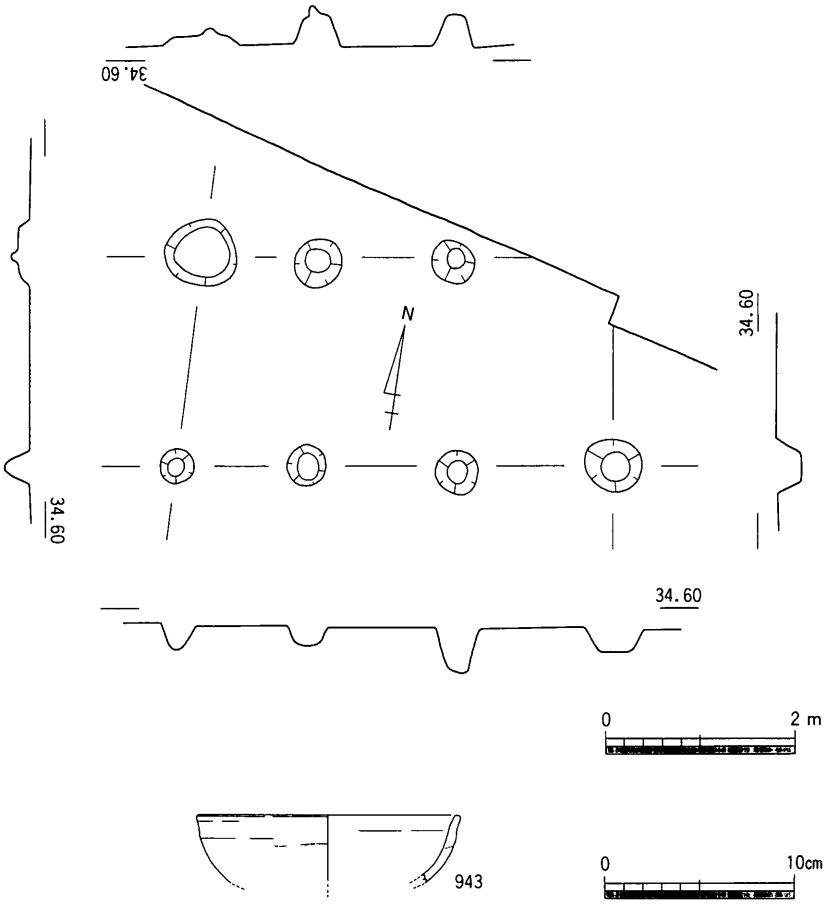


第116図　ＳＢⅡ15平・断面図（１/80）

遺物は，土師器細片２点が出土したのみであり，遺構の時期を特定することは困難である。

ＳＢⅡ15（第116図）

７ｂ区北東部で検出した東西棟建物と考えられる。ＳＢⅡ16と重複するが，柱穴に切り合い関係はなく，先後関係は不明である。主軸方向がほぼ合致することから，相前後して建てられた可能性が高い。北半部は調査区外へ延長し，西辺の２穴と南辺の５穴を確認したにとどまる。桁行４間（5.8m）以上，梁間１間（1.9m）以上，主軸方向N82.8°Ｅの側柱建物である。柱穴掘り方は径0.3～0.5mの略円形を呈し，残存深は0.16～0.26mを測る。底面の標高は34.12～34.30mと一定せず，西列の柱穴に浅いものが多い。桁行方向の柱間間隔は1.2～1.7mと一定しないが，柱通りは中央穴を除いて概ね揃っている。柱穴埋土は，暗褐色系粘質土であった。



第117図　ＳＢⅡ16平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

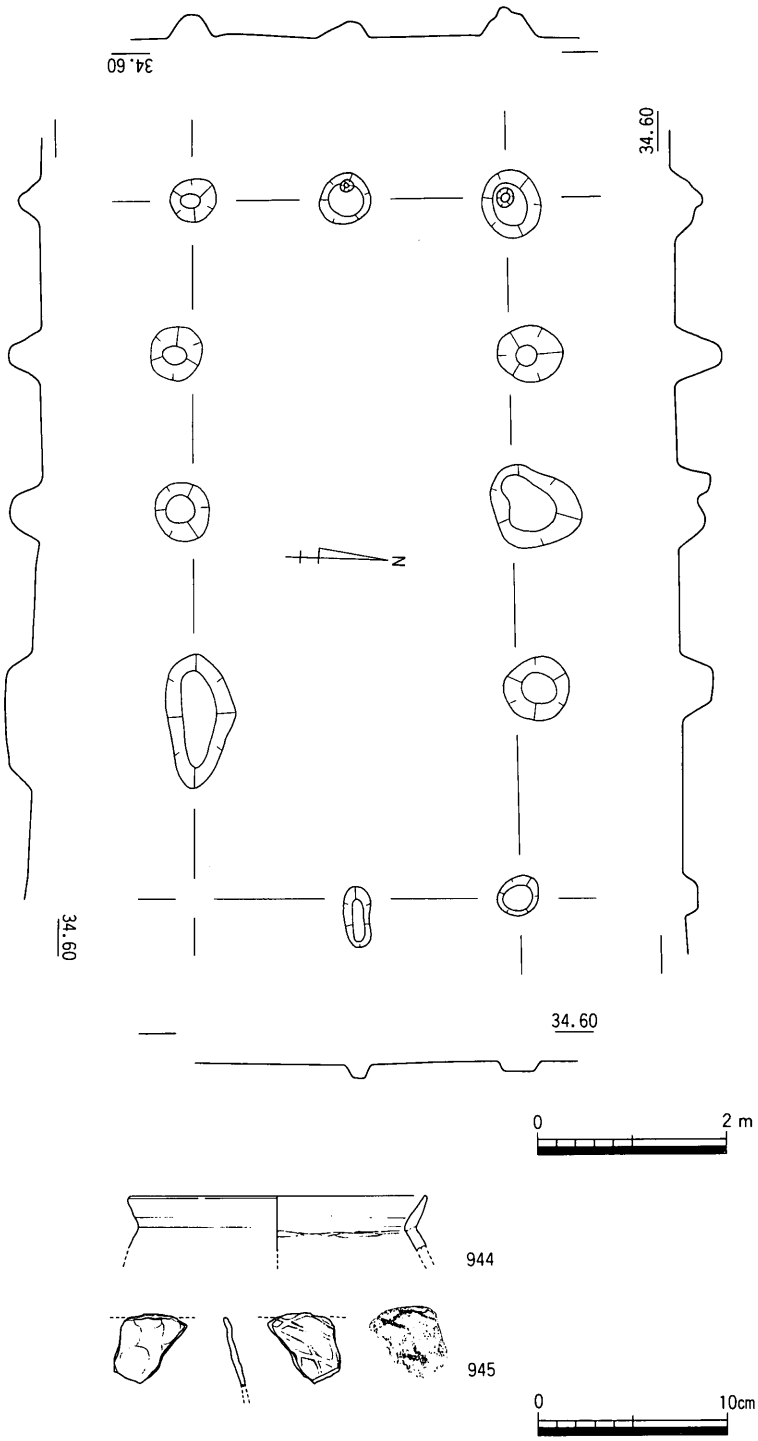
遺物は出土しておらず，遺構の時期を特定することは困難である。

ＳＢⅡ16（第117図）

７ｂ区北東部で検出した東西棟建物と考えられる。先述したようにＳＢⅡ15と重複するが，先後関係は不明である。北半部は調査区外へ延長し，南辺４穴と北辺３穴を確認したにとどまる。桁行３間（4.7m），梁間１間（2.2m）以上，主軸方向N83.2°Ｅの総柱建

物と考えられる。総柱建物として復元可能な遺構は，本例1棟のみである。柱穴掘り方は，北西隅の1穴を除いて径0.4～0.5mの略円形を呈する。底面の標高は33.9～34.2mと揃わず，また桁行方向の柱間間隔も1.3～1.6mと一定しない。柱通りは概ね揃っていることから，建物遺構として報告する。

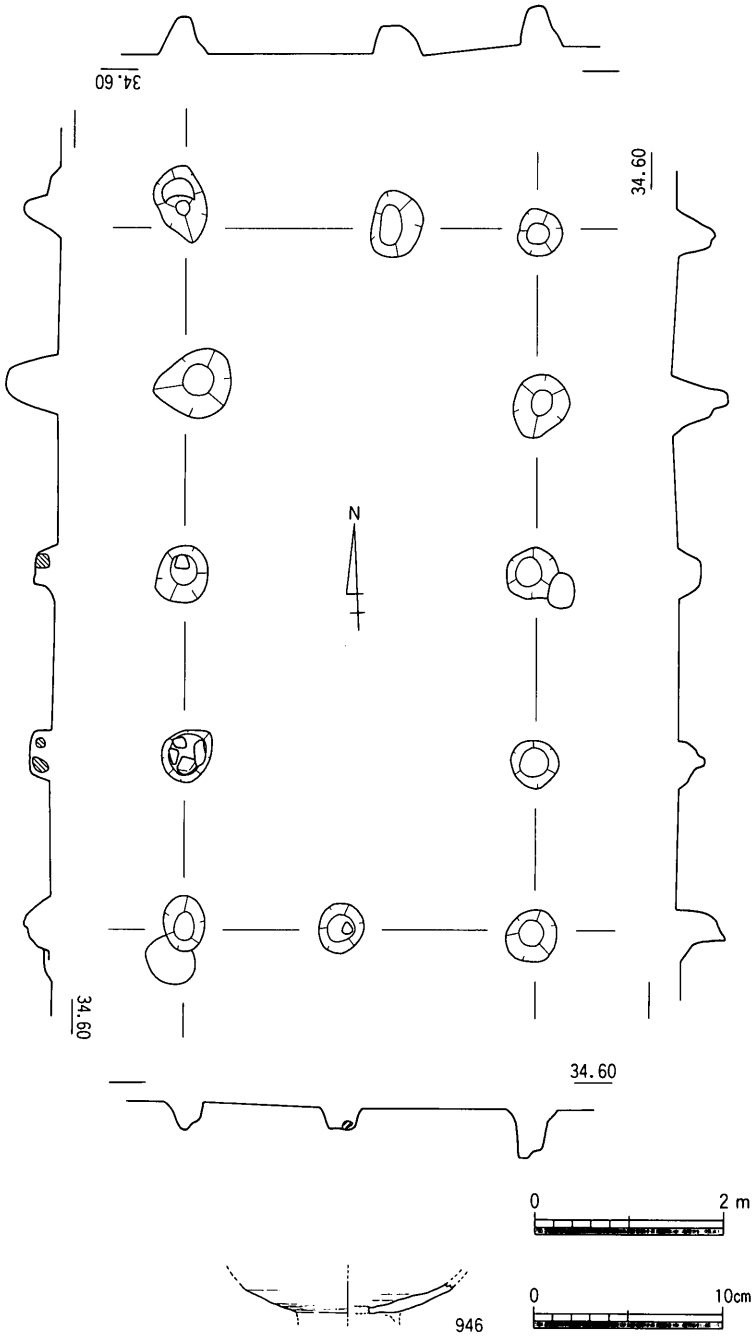
遺物は，弥生土器広口壺口縁部や土師器小片等が少量出土しているのみ。1点のみ図示した。943は土師器坏である。器表面は剥離が顕著であり，調整等は不明である。鈍く屈曲して外反して開く口縁部形態は，在地産の坏Gにみることができ，7世紀前半代に位置付けられると考える。



第118図　ＳＢⅡ17平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

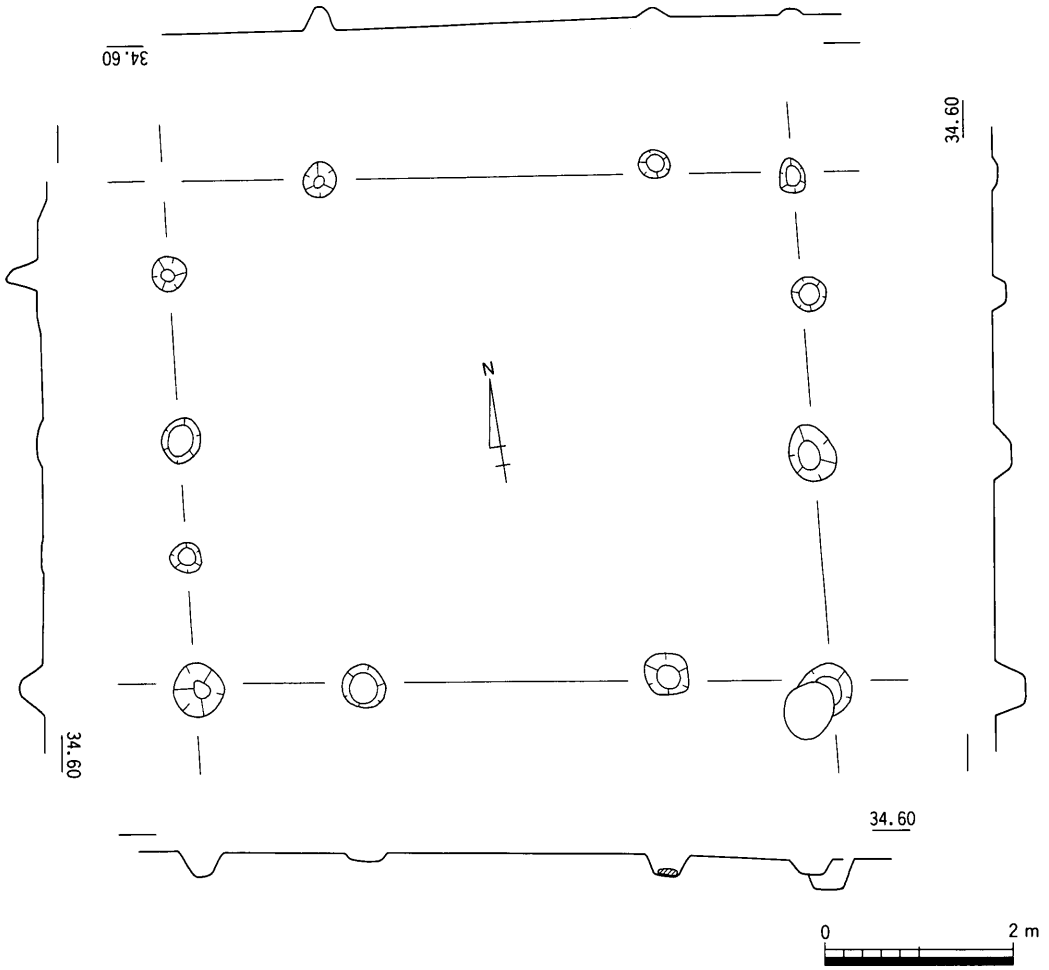
ＳＢⅡ17（第118図）

７ｂ区北西部で検出した東西棟建物である。南東隅の１穴を欠く。桁行４間（7.4m），梁間２間（3.3m），主軸方向N85.2°Ｅ，床面積24.4m²の側柱建物と考えられる。柱穴掘り方は，抜き取りの可能性のある南列東より２穴目などを除いて，径0.6m前後の略円形を呈し，残存深は0.16～0.49mを測る。北東隅の柱穴には，根石が認められた。底面の標高は33.94～34.19mと一定しない。桁行方向の柱間間隔は1.55～2.15mと一定しないが，柱通りは概ね揃っている。



第119図　ＳＢⅡ18平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

遺物は主に北列の柱穴より多く出土した。暗文付土師器杯や土師器鉢，須恵器甕体部等の小片がみられる。２点を図示した。944は弥生土器甕口縁部片。本遺構に直接伴うものではない。器表面は磨滅が顕著である。945は製塩土器口縁



第120図　ＳＢⅡ19平・断面図（１/80）

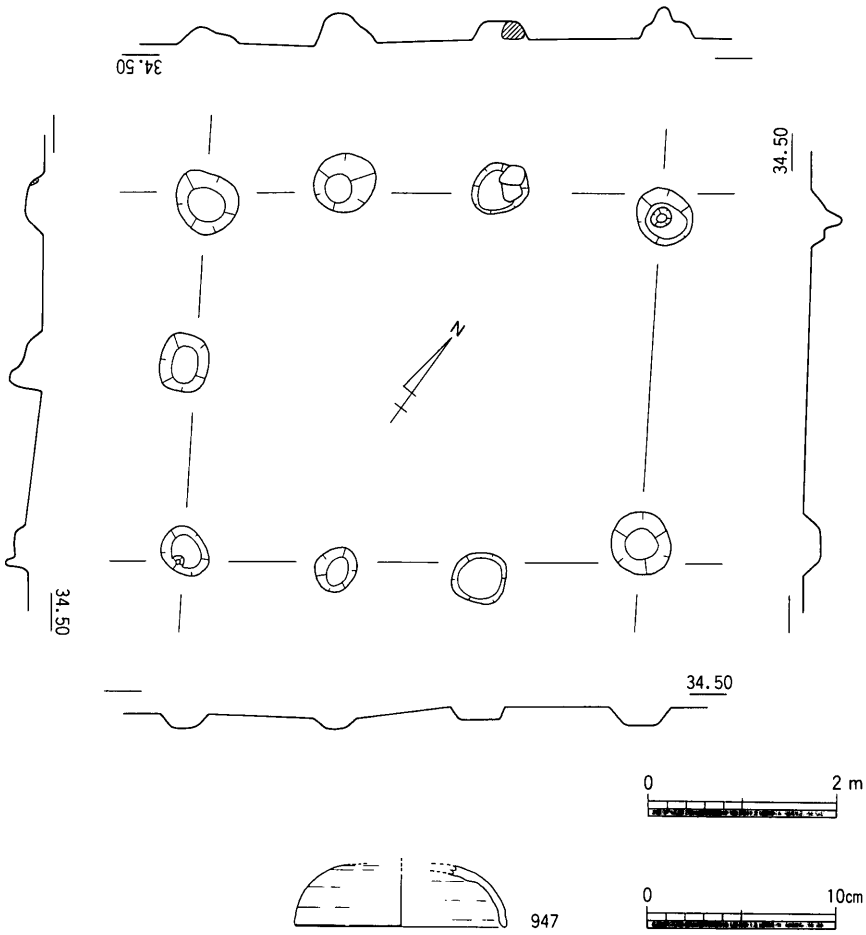
部小片。外面には斜格子状のタタキ痕を認める。大久保氏の編年の備讃Ⅵ式（大久保1992）に位置付けられよう。上記遺物より本遺構は７世紀前半代を中心とした時期と考える。

ＳＢⅡ18（第119図）

７ｂ区東端中央で検出された南北棟建物である。柱穴の切り合い関係よりＳＢⅡ19より先行し，建物主軸の方向が概ね合致することから，近接した時期に立て替えられたものと判断される。桁行４間（7.36m），梁間２間（3.68m），主軸方向N2.6°Ｅ，床面積27.1m^2の側柱建物に復元される。柱穴掘り方は径0.4～0.8mの楕円形を呈し，残存深は0.22～0.60mを測る。底面の標高は33.78～34.18mと一定せず，西列に浅いものが多い。桁行

方向の柱間間隔は1.75～1.95mと概ね一定し，柱通りはよく揃っている。柱穴埋土は，暗褐色系粘質土であった。

遺物は，内面に同心円タタキの施された土師器片や平瓶と考えられる須恵器小片の他，土師器小片が一定量出土している。１点のみ図示した。946は，黒色土器碗底部片である。外底面には高台の剥離痕を認める。10世紀代に下る資料であり，他の遺物との時期差が大きく本遺構に直接伴う遺物ではないと考えておく。



第121図　ＳＢⅡ20平・断面図（１/80），出土遺物実測図（１/４）

ＳＢⅡ19（第120図）

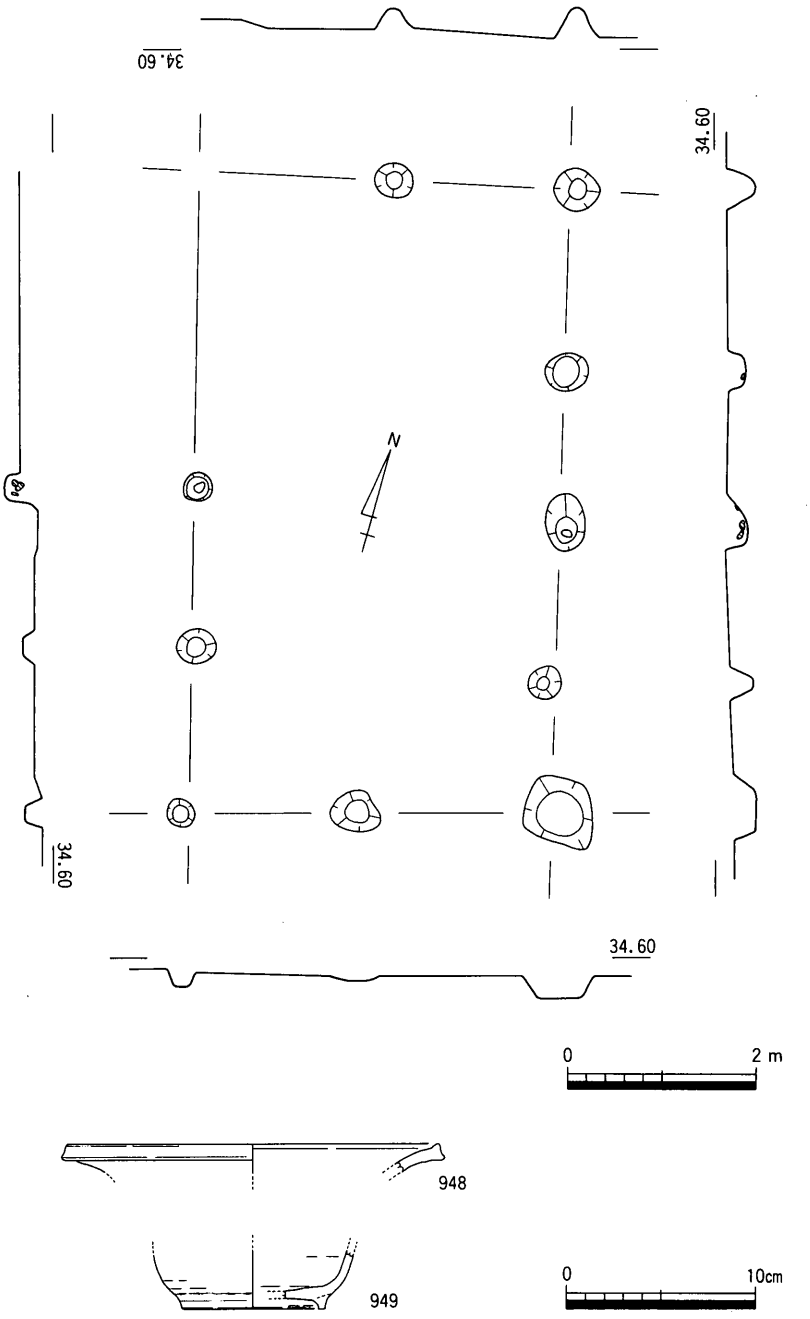
７ｂ区東端中央で検出された東西棟建物である。ＳＢⅡ18・20と重複し，柱穴の切り合い関係より両建物より後出する。またＳＸⅡ15と重複するが，両遺構の埋土は近似しており，明確に先後関係を捉えることはできなかった。北西隅の柱穴と東列南より２穴目の柱穴を欠く。桁行３間（6.70m），梁間４間（5.45m），主軸方向N4.8°Ｅ，床面積36.5m²の側柱建物に復元される。柱穴掘り方は径0.3～0.5mの楕円形を呈する。残存深は0.02～0.29mと浅く，上面はかなりの削平を蒙っていると考える。底面の標高は34.1～34.4mと一定しない。桁行方向の柱間間隔は1.5～3.65mを測り，東より２穴目と３穴目の間は

南・北両列共やや広く開けられる。柱通りは概ね揃っている。柱穴埋土は，暗褐色系粘質土であった。

遺物は，暗文付土師器杯や土師器甕口縁部，製塩土器等の小片の他，器種を特定できないまでに細片化した土師器片が少量出土したのみである。上記資料には7世紀中葉前後に遡るものも混在するが，本遺構は出土遺物より8世紀代に位置付けられると考える。

ＳＢⅡ20（第121図）

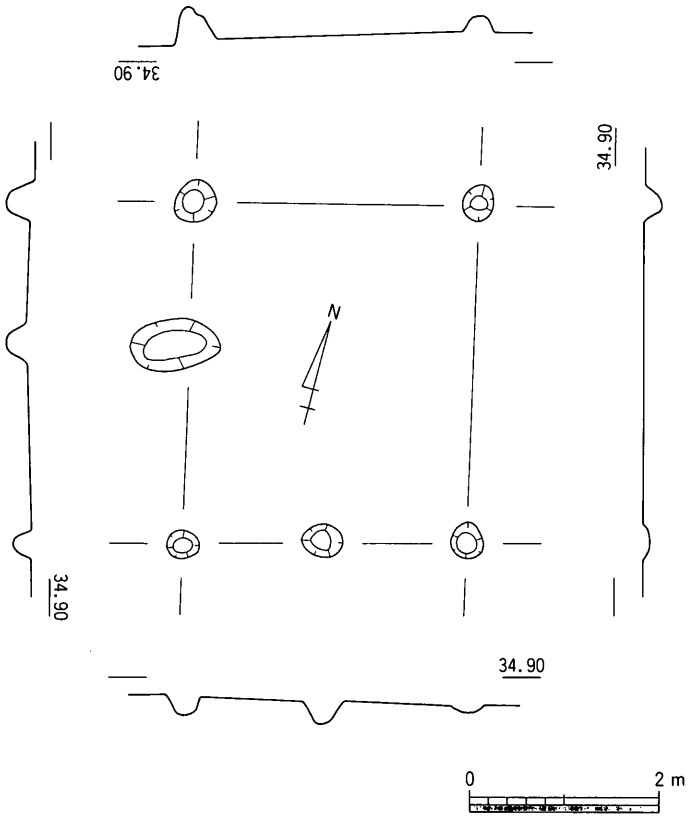
7ａ・ｂ区に跨って検出された東西棟建物である。東列中央穴を欠く。ＳＢⅡ19より先行する。桁行3間（4.75m），梁間2間（3.60m），主軸方向N59.0°Ｅ，床面積17.1m²の側柱建物に復元される。柱穴掘り方は径0.45～0.65mの略円形ないしは楕円形を呈し，残存深は0.11～0.33mと浅い。底面の標高は，33.98～34.2mと一定しない。



第122図　ＳＢⅡ21平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

桁方向の柱間間隔は，1.5～1.7mと概ね一定間隔に配され，柱通りもほぼ揃っている。柱穴埋土は，暗褐色系粘質土であった。

遺物は，在地産粗製の土師器坏Gや須恵器坏の他，器種の特定困難な土師器小片が少量出土したのみである。947は須恵器坏蓋。TK209ないしはTK217型式期に位置付けられる。上記資料より本遺構は7世紀中葉を前後する時期と考える。



第123図　SBⅡ22平・断面図（1/80）

SBⅡ21（第122図）

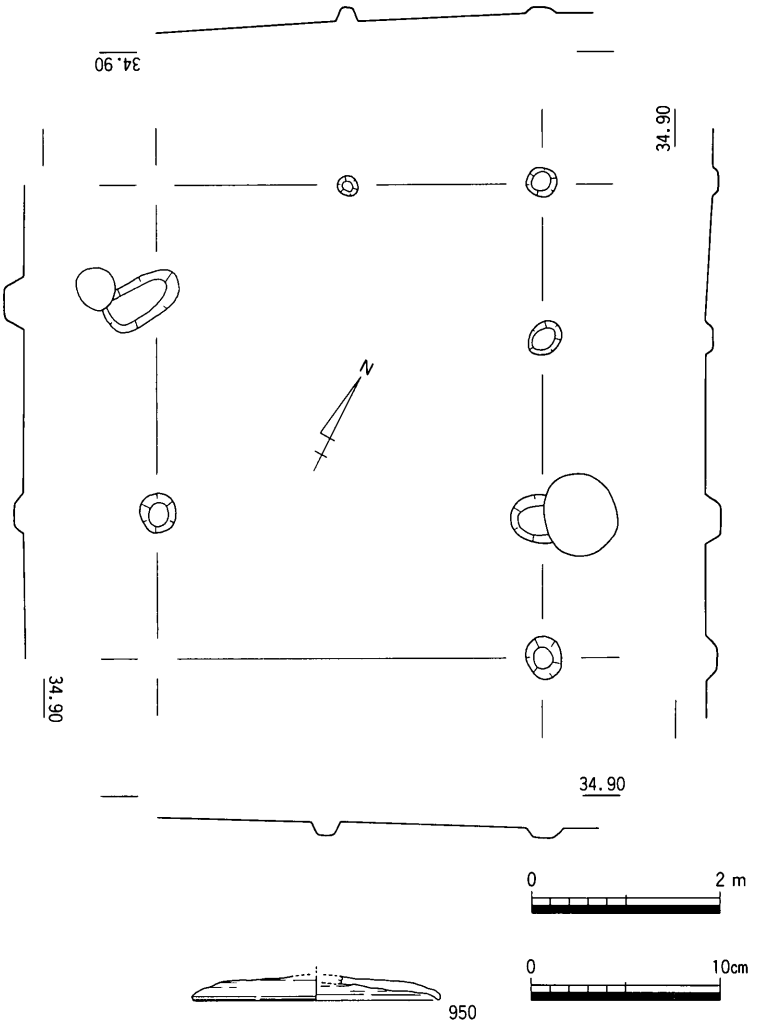
7b区東半部で検出した。北西隅穴と西列北より2穴目を欠く。SXⅡ14・15と重複し，切り合い関係よりいずれよりも後出する。桁行3間（6.6m），梁間3間（4.0m），主軸方向N13.1°W，床面積26.4m²の側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は径0.4m前後の楕円形を呈する。底面の標高は34.1～34.3mとやや一定せず，桁方向の柱間間隔も1.3～1.9mと揃わない。柱通りは概ね揃っている。また，各柱穴に根石や詰石を多くもつのも本遺構の特徴である。

遺物は，土師器竈・甕・暗文付坏，須恵器小片等の他，器種を特定できない土師器小片が一定量出土しているのみである。948は土師器甕口縁部小片。端部は上下に鈍く摘み出され，端面は凹線状に窪む。949は須恵器坏。底部には直立する断面矩形の低い高台を付す。時期は7世紀代に遡ると考えられる遺物を含むが，暗文付杯や須恵器坏の形態から8世紀中葉を前後する時期に位置付けられる。

SBⅡ22（第123図）

7b区中央で検出した南北棟建物である。SXⅡ16・17と重複し，切り合い関係より両遺構より後出するものと考えられる。桁行2間（3.55m），梁間2間（3.0m），主軸方向

N13.5° W，床面積約10.7m²の小規模な側柱建物に復元される。柱穴掘り方は，抜き取りの可能性のある西列中央穴を除いて，径0.3～0.4mの略円形を呈する。残存深は0.08～0.4mと浅く，底面の標高は34.34～34.50mとやや一定しない。桁方向の柱間間隔は，中央穴が北に偏しているため1.5mと2.0mと一定しないが，柱通りは概ね揃っている。

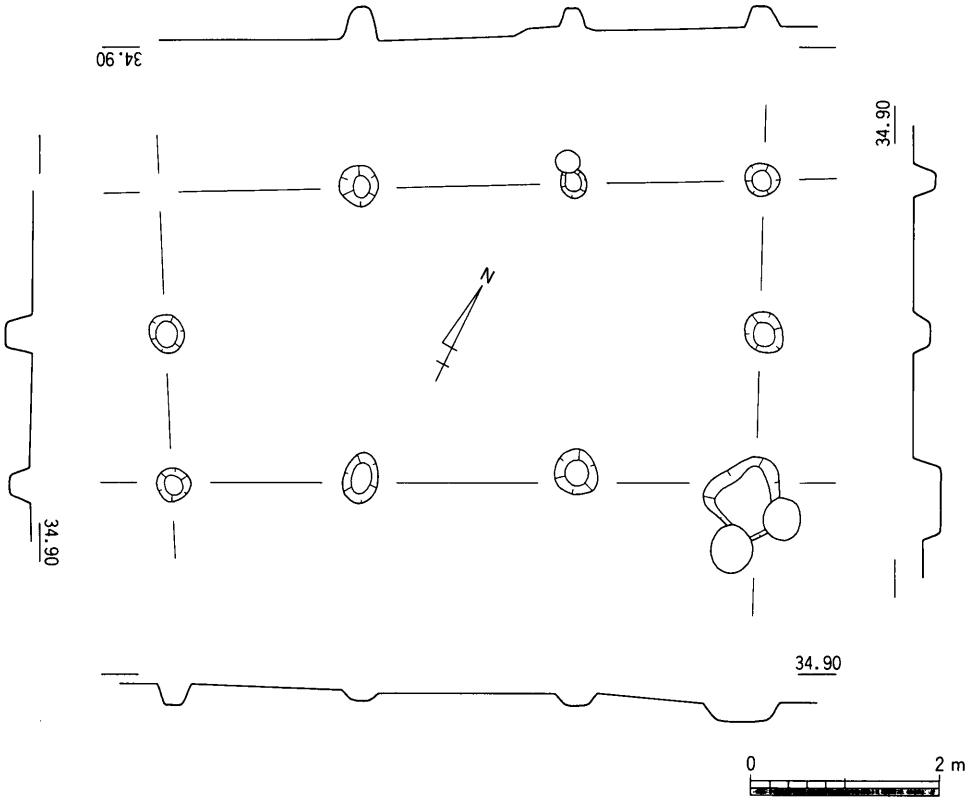


第124図　ＳＢⅡ23平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

遺物は，西列中央穴より器種を特定できないまでに小片化した土師器片が数点出土したのみである。建物の主軸方向はＳＢⅡ21とほぼ近似し，ＳＢⅡ21の南列のライン延長上に本建物の桁方向の中央穴が位置する等，建物配置に規格性が認められる点から，ＳＢⅡ21と相前後する時期に位置付けられると考える。

ＳＢⅡ23（第124図）

７ｂ区中央南端で検出した南北棟建物である。北西隅と南西隅の柱穴を欠く。桁行３間（5.0m），梁間２間（4.0m），主軸方向N26.1° W，床面積20.0m²の側柱建物に復元される。柱穴掘り方は径0.3～0.5mの略円形を呈し，底面の標高は34.42～34.58mとやや一定しない。桁方向の柱間間隔は，中央の柱間が1.9～2.3mと広く，両端は1.5～1.6mと狭い。前者の間隔は，梁間のそれとほぼ一致する。柱通りは概ね揃っている。柱穴埋土は暗褐色



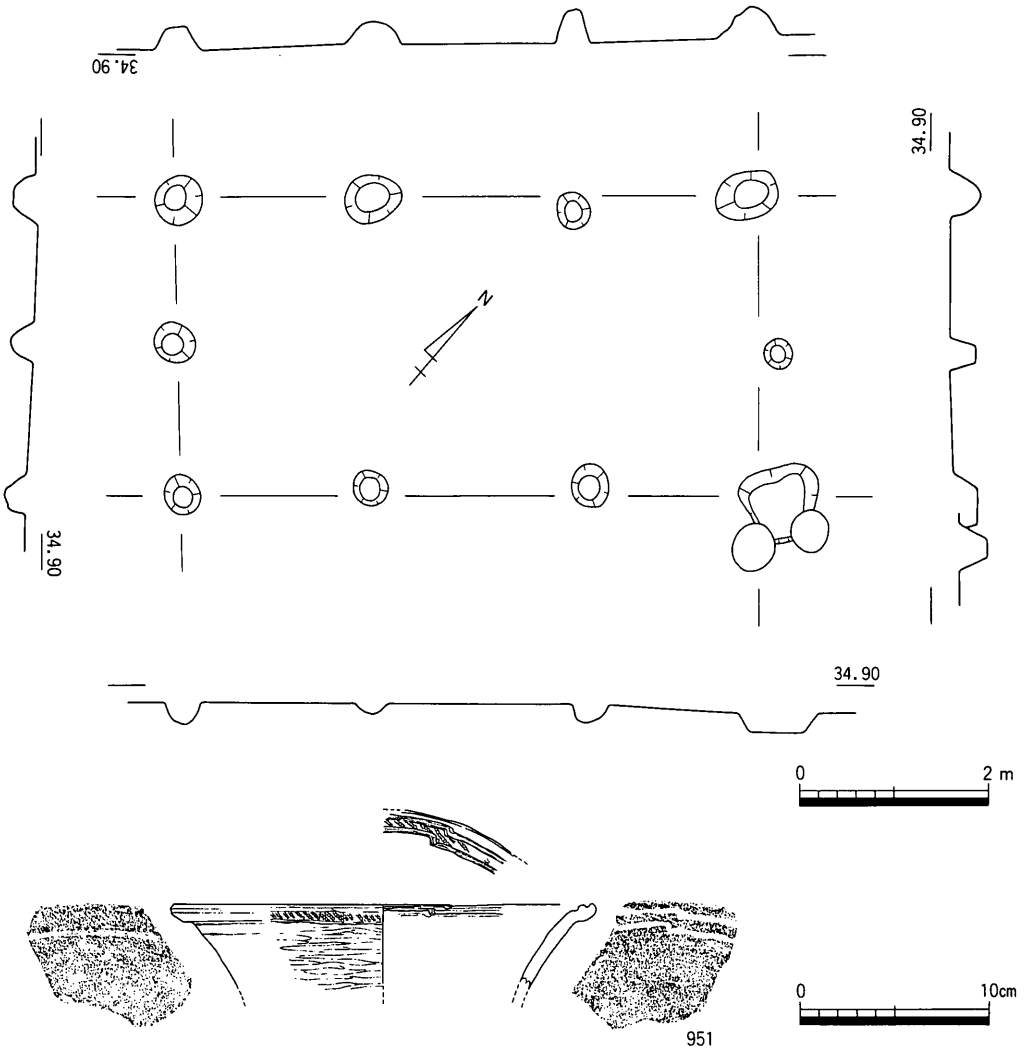
第125図　ＳＢⅡ24平・断面図（１/80）

系粘質土であった。

遺物は，図示した遺物を除いて，器種を特定できないまでに小片化した土師器片が２点出土したのみである。950は須恵器坏蓋。口径が小さく，また器高も低く，端部の下方への摘み出しも弱いことから８世紀前半代に位置付けられる。

ＳＢⅡ24（第125図）

７ｂ区中央南端で検出した東西棟建物である。北西隅の柱穴を欠く。南東隅の柱穴は，ＳＢⅡ25とほぼ同位置に配されるが，明確な切り合い関係を捉えるまでには至らず，両建物の先後関係は不明である。北列東より２穴目の柱穴は，ＳＸⅡ17床面で検出され，ＳＸⅡ17より先行するものと考えられる。桁行３間（6.2m），梁間２間（3.2m），主軸方向N 62.3°Ｅ，床面積19.8m²の側柱建物である。柱穴の掘り方は，径0.3～0.4mの略円形を呈し，残存深は0.12～0.22mと全般的に浅い。底面の標高は，34.41～34.63mと一定しない。桁方向の柱間間隔は，中央の柱間が2.3m前後とやや広く，両端は2.0m前後で狭い。柱通



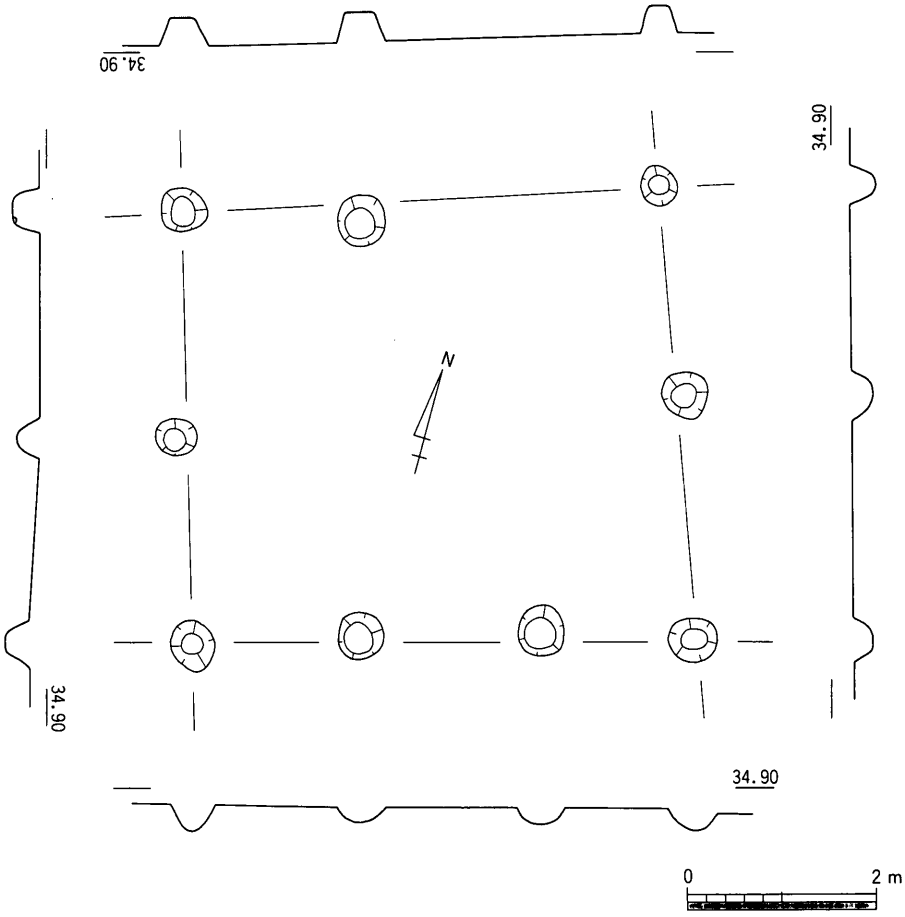
第126図　ＳＢⅡ25平・断面図（１/80），出土遺物実測図（１/４）

りはよく揃っている。柱穴埋土は暗褐色系粘質土であった。

遺物は，東列中央穴より小形の甕口縁部小片が１点出土している以外は，器種を特定できない土師器細片が少量認められるのみである。遺構の先後関係から導かれる時期と，出土遺物の年代観に矛盾はなく，本建物は７世紀中葉を前後するものと判断された。

ＳＢⅡ25（第126図）

７ｂ区中央南端で検出した東西棟建物である。ＳＢⅡ24・26と重複するが，建物の構築順序は明確ではない。主軸方向と規模の近似するＳＢⅡ24とは，相前後した時期の建て替えの可能性が高い。桁行３間（6.1m），梁間２間（3.1m），主軸方向N48.0°Ｅ，床面積18.9



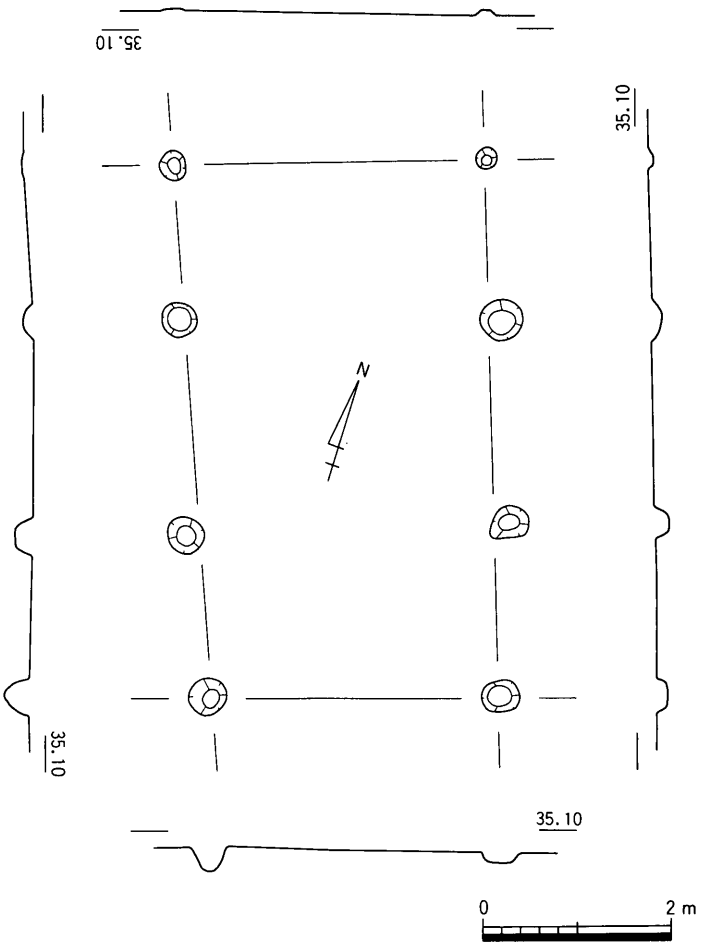
第127図　ＳＢⅡ26平・断面図（１/80）

m²の側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.3～0.5mの楕円形を呈し，残存深は0.15～0.23mと全般的に浅い。底面の標高は，34.41～34.66mと一定しない。桁方向の柱間間隔は，中央の柱間が2.1～2.3mとやや広く，両端は2.0m前後とやや狭い。柱通りはよく揃っている。柱穴埋土は暗褐色系粘質土であった。

遺物は，土師器甕口縁部小片の他，器種を特定できない土師器片が若干量出土しているに過ぎない。951は縄文土器深鉢口縁部。口縁部内面に２条の沈線を配し，沈線間には縄文を認める。縄文後期中葉を前後する時期に位置付けられる。出土遺物から時期を特定することは困難だが，前記したＳＢⅡ24との位置関係から近接した時期を想定しておきたい。

ＳＢⅡ26（第127図）

７ｂ区中央南端で検出された東西棟建物である。ＳＢⅡ24・25と重複するが，先後関係は不明である。北列東より２穴目を欠く。桁行３間（5.4m），梁間２間（4.6m），主軸方向N73.0°Ｅ，床面積24.8m²の側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.4～0.5mの略円形を呈し，残存深は0.16～0.26mと全般的に浅い。底面の標高は，西列北より２穴が34.6m前後とやや深くなる他は，34.5m前後でほぼ一定している。桁方向の柱間間隔は，1.7～1.9mとほぼ等間隔に配され，柱通りもほぼ揃っている。

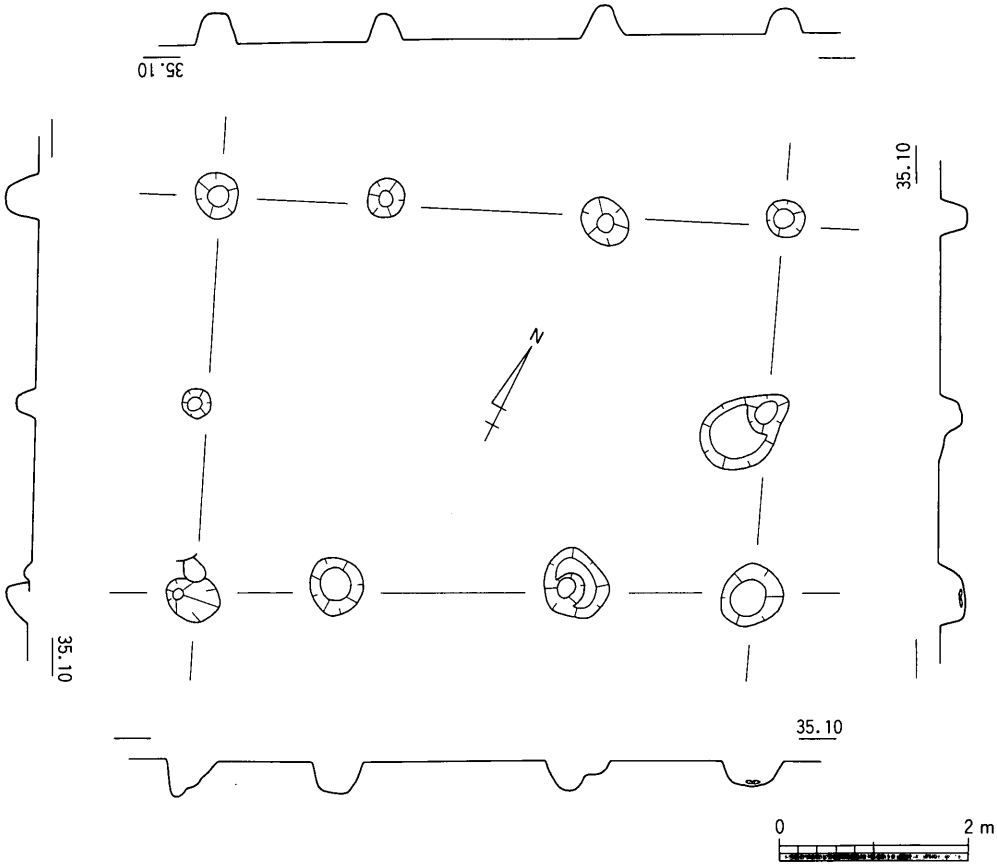


第128図　ＳＢⅡ27平・断面図（1/80）

遺物は，南東隅の柱穴より須恵器小片１点が出土している他は，器種を特定できない土師器小片が少量出土しているに過ぎない。上記資料より時期を特定することは困難である。

ＳＢⅡ27（第128図）

７ｂ区中央西端付近で検出された南北棟建物である。桁行３間（5.6m），梁間１間（3.2m），主軸方向N20.0°Ｗ，床面積17.9m²の側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.2～0.4mの略円形を呈し，残存深は南西隅の柱穴を除いて，0.1～0.2mと浅いものが多い。底面の標高も，南西隅の柱穴を除けば34.8m前後でほぼ一定する。桁方向の柱間間隔は，中央の柱間が2.18mと，両端の1.65～1.85mに比してやや広くなる。柱通りは概ね揃っている。柱穴埋土は暗褐色系粘質土であった。



第129図　ＳＢⅡ28平・断面図（１/80）

遺物は，北西隅の柱穴より土師器小片１点が出土しているのみで，遺物の面から時期を特定することは困難である。建物東列の延長上に，後述するＳＢⅡ28の東列が配され，両建物の配置に整った規格性が窺えることから，近接した時期に位置付けられるものと考える。

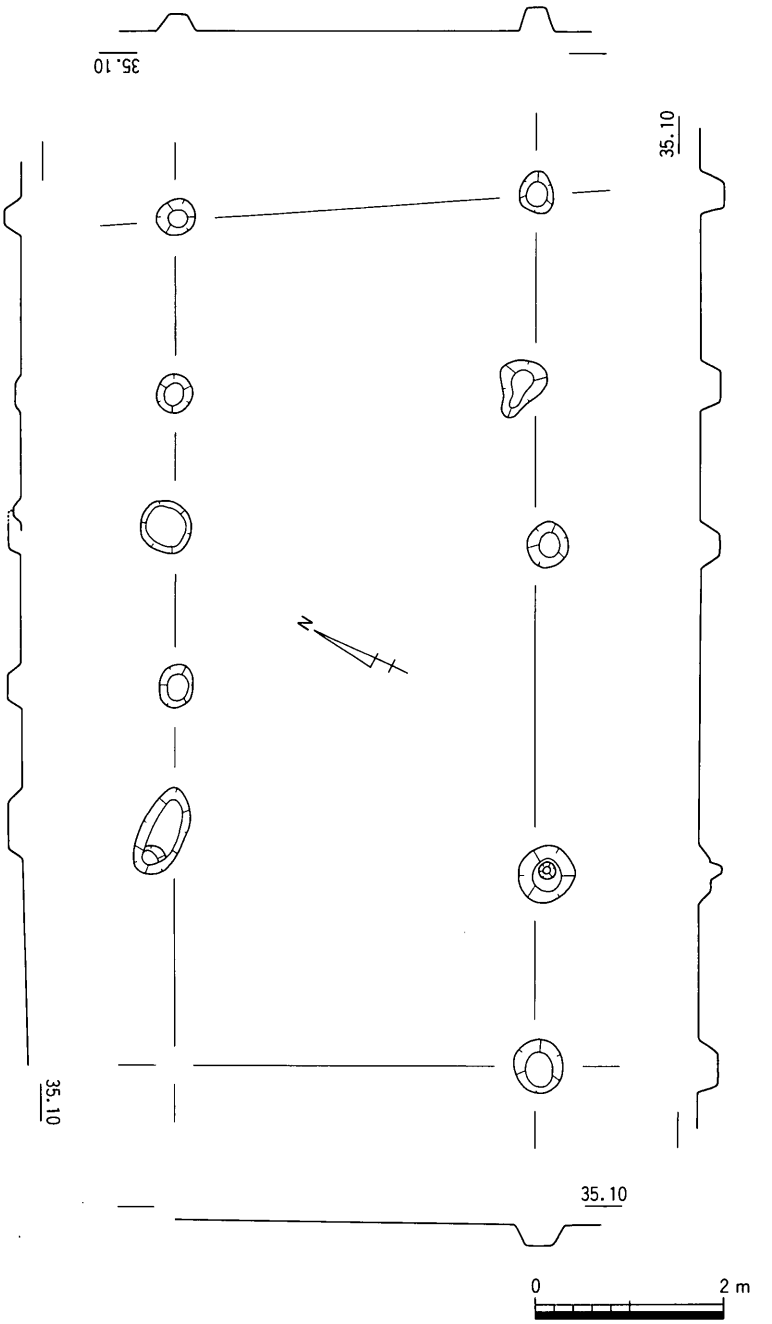
ＳＢⅡ28（第129図）

７ｂ区西端付近で検出された東西棟建物である。ＳＨⅡ01とＳＢⅡ29・30と重複し，柱穴の切り合い関係からＳＨⅡ01とＳＢⅡ30より後出する。桁行３間（6.0m），梁間２間（4.1m），主軸方向N65.2°Ｅ，床面積24.6㎡の側柱建物である。柱穴の掘り方は，径0.4～0.7mの楕円形を呈し，残存深は0.3m前後と他の建物と比して深い。底面の標高は，34.53～34.67mとやや一定しない。桁方向の柱間間隔は，中央の柱間が2.4m前後とやや広く，両端は1.6～2.0mと若干狭い。柱通りは概ね揃っている。

遺物は，北西隅の柱穴などより縄文土器小片数点が出土している他は，器種を特定できない土師器小片が少量出土しているに過ぎない。ＳＨⅡ01より後出することは確実だが，細かな時期を特定することは困難である。

ＳＢⅡ29（第130図）

７ｂ区西端付近で検出された東西棟建物である。ＳＨⅡ01とＳＢⅡ28・30と重複し，柱穴の切り合い関係よりＳＨⅡ01・ＳＢⅡ30より後出する。北西隅と南列西より３穴目の柱穴を欠く。桁行５間（9.2m），梁間１間（3.8m），主軸方向N64.5°Ｅ，床面積35.0m²のやや大型の側柱建物である。柱穴の掘り方は，径0.4～0.6mの楕円形を呈し，残存深は0.2mと全般的に浅い。底面の標高は，34.7m前後で概ね一定する。桁方向の柱間間隔は，1.5～2.0mと一定しない。

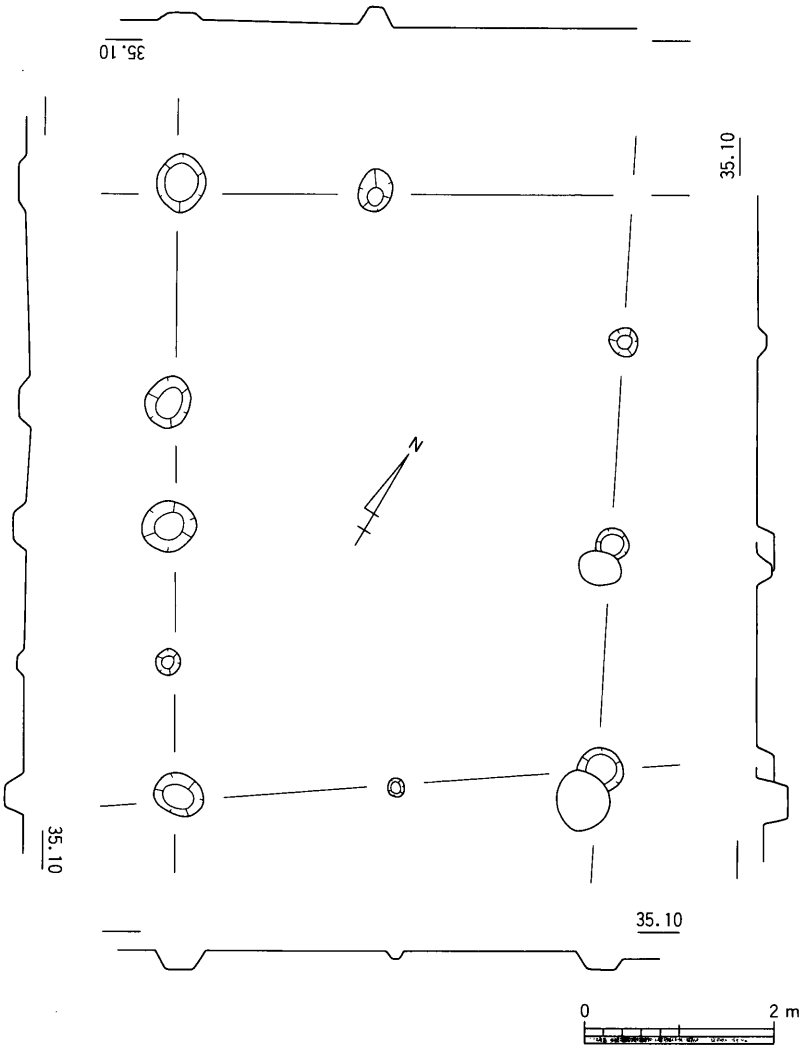


第130図　ＳＢⅡ29平・断面図（1/80）

遺物は，縄文土器，土師器小形甕口縁部等の小片の他，器種を特定できない土師器や須恵器小片が少量出土しているのみである。遺物の面から建物の時期を特定することは困難である。

ＳＢⅡ30（第131図）

７ｂ区西端付近で検出された南北棟建物である。上記したように，ＳＨⅡ01よりは後出し，ＳＢⅡ28・29より先行する。北東隅の柱穴を欠く。桁行４間（6.4m），梁間２間（4.5m），主軸方向N32.0° W，床面積28.8m²の側柱建物である。柱穴の掘り方は，径0.3～0.5mの楕円形を呈し，残存深は0.1～0.2mと浅く顕著な削平を蒙っている。底面の標高は34.7～34.8mで概ね一定し，柱通りも揃っている。桁方向の柱間間隔は，1.3～2.4mと一定しない。埋土は暗褐色系粘質土であった。



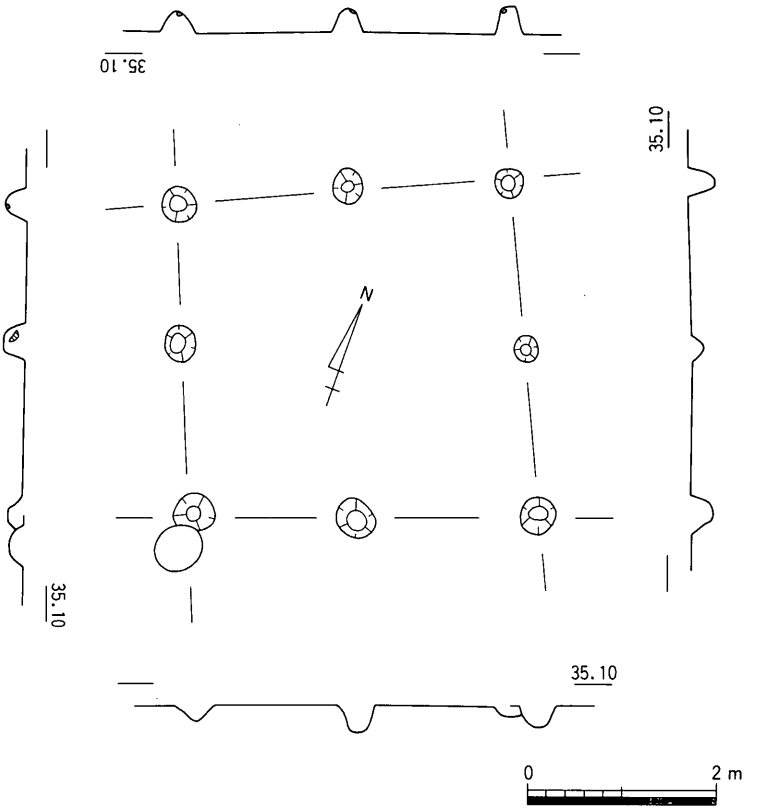
第131図　ＳＢⅡ30平・断面図（1/80）

遺物は，西列の柱穴を中心に須恵器坏蓋口縁部小片，土師器甕口縁部小片，縄文土器？小片，焼粘土塊少量が出土した以外は，器種を特定できない土師器小片が若干量出土したに過ぎない。出土した遺物には７世紀中葉を前後する時期のものが含まれるが，建物の時

期を特定するまでには至らない。

ＳＢⅡ31（第132図）

７ｂ区南西隅付近で検出された東西棟建物である。ＳＤⅡ22と重複し，切り合い関係よりＳＤⅡ22より後出する。桁行２間（3.6m），梁間２間（3.4m），主軸方向N68.1°Ｅ，床面積12.2m²の側柱建物である。柱穴の掘り方は，径0.3～0.4mの略円形を呈し，残存深は0.1～0.2mと浅い。底面の標高は，34.61～34.78mとやや一定しないが，柱通りはよく揃っている。桁方向の柱間間隔は，1.8～1.9mとほぼ均等に配される。埋土は暗褐色系粘質土であった。



第132図　ＳＢⅡ31平・断面図（1/80）

遺物は，東列中央の柱穴より土師器小片が２点出土しているのみである。遺物の面から本建物の時期を特定することは困難だが，建物主軸の方向を重視し，当該時期に位置付けられるものと判断した。

ＳＢⅡ38（第133図）

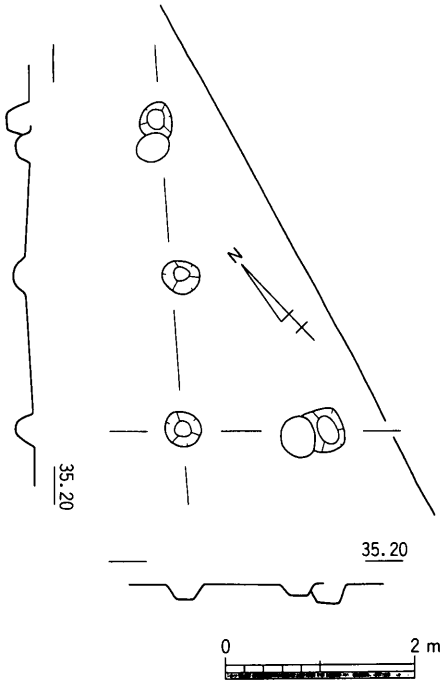
９区南西隅で検出した南北棟建物と考えられる。北半部は調査区外へ延長し，西辺の３穴と南辺の２穴を確認したにとどまる。桁行２間（3.3m）以上，梁間１間（1.5m）以上，主軸の方向N43.5°Ｅの側柱建物と考えられる。柱穴の掘り方は，径0.4m前後の楕円形を呈し，残存深は0.1～0.2mと極めて浅い。底面の標高は，34.75m前後で概ね一定である。桁方向の柱間間隔は1.6mと均等に配され，柱通りも整っている。埋土は暗褐色系粘質土であった。

遺物は出土しておらず，建物の時期を特定することは困難である。

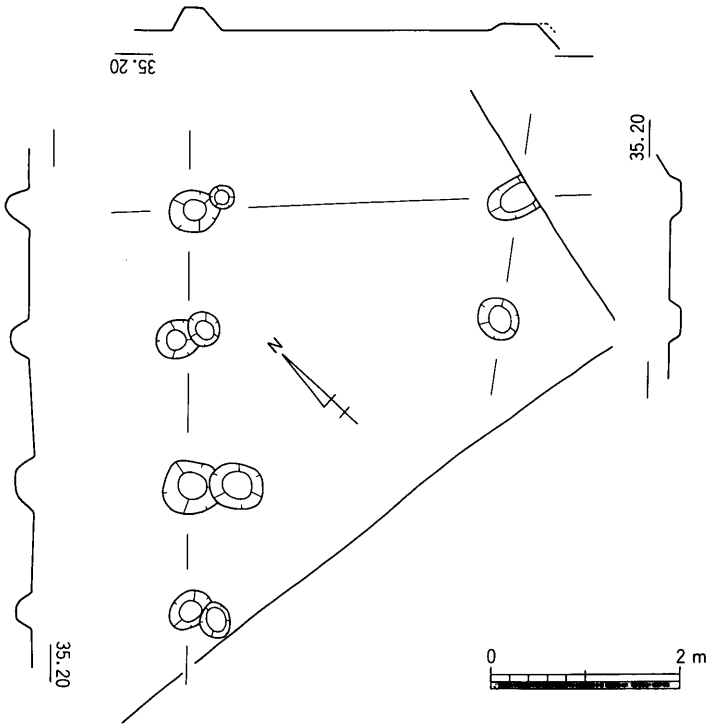
ＳＢⅡ39（第134図）

９区南西隅で検出した南北棟建物である。南半部は調査区外へ延長し，西辺の４穴と東辺の２穴を確認したにとどまる。上記したＳＢⅡ38とは約1.5m離れて南接し，西列の柱通りや主軸方向，柱穴底面の標高値などが概ね合致することから，同時期に併存していた可能性が考えられる。桁行３間（4.3m）以上，梁間１間（3.5m），主軸の方向N47.5°Ｅの側柱建物と考える。西列の柱穴はいずれも他の柱穴が重複し，東列には確認できなかったが，ほぼ同位置に建て替えられた可能性が高い。柱穴の掘り方は，径0.5～0.6mの楕円形を呈し，残存深は0.1m前後と極めて浅い。底面の標高は，34.7～34.8mで概ね一定である。桁方向の柱間間隔は1.3～1.5mと概ね均等に配され，柱通りも整っている。埋土は暗褐色系粘質土であった。

遺物は，南西隅の柱穴より土師器小片１点が出土しているに過ぎず，建物の時期を特定することは困難である。



第133図　ＳＢⅡ38平・断面図（１/80）



第134図　ＳＢⅡ39平・断面図（１/80）

柱穴（第135図）

7区を中心として，埋土の特徴や出土遺物の点などから，当該時期に位置付けられる柱穴を多数検出している。そのうち構築物として復元できなかったものについて，図化し得た遺物を参考資料として以下提示する。

7a区SPⅡ013　3点を図示した。952は須恵器坏蓋。蓋として図示したが，小片のため坏身となる可能性も残る。TK217型式期前後に位置付けられよう。953は土師器皿。外面は丁寧に横ミガキされ，内面には放射状の縦ミガキを認める。8世紀代に位置付けられる。954は土師器甕口縁部小片。端部は上方へ鈍く摘み上げ，端面は凹線状に窪む。

7a区SPⅡ148　955は須恵器皿となろう。口径の縮小化は未だ進展しておらず，8世紀後半代には納まる。

7a区SPⅡ161　956は須恵器坏。外底面には強く外方へ踏ん張る高台を付す。焼成はややあまい。7世紀代には納まるものと考える。957は土師器竈小片。おそらく焚き口部の小片であろう。

7a区SPⅡ215　958は須恵器坏。口縁部はやや内湾して開く。8世紀代に位置付けられよう。

7a区SPⅡ197　959・960は須恵器坏。口縁部は直線的に開き，やや深めの形態。8世紀中葉以降に位置付けられる。

7b区SPⅡ014　961は黒色土器碗。外面は剥離が顕著だが，内面は丁寧な横ミガキ調整される。8世紀後半代に位置付けられるか。964は土師器甕。端部は上方へ摘み上げ，端面は鈍く凹線状に窪む。

7b区SPⅡ102　962は須恵器坏。底部はやや厚く，TK217型式期に位置付けられる。963は須恵器皿。浅く内湾して立ち上げる形態から，8世紀前半代に下る。

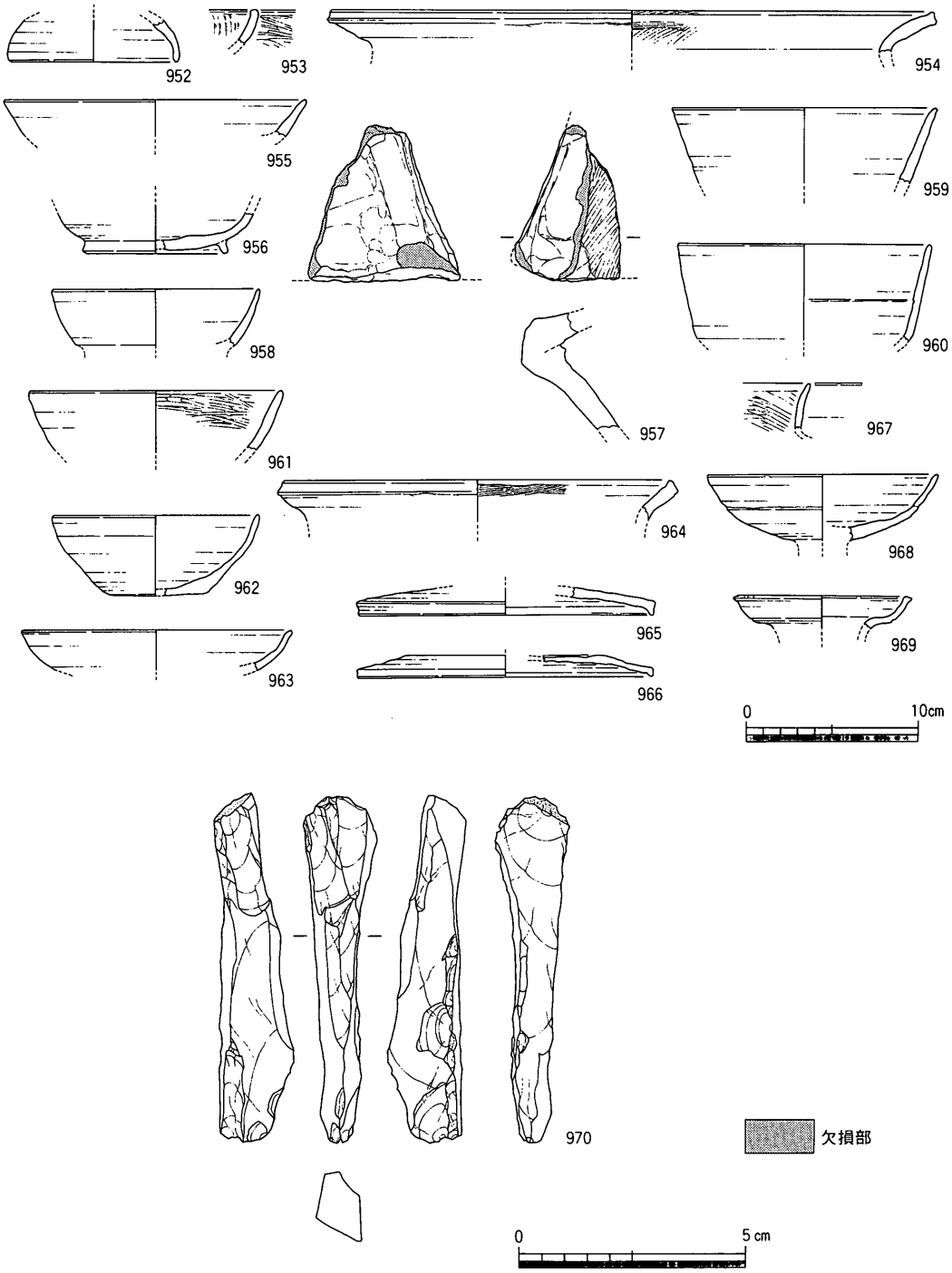
7b区SPⅡ018　965は須恵器蓋。端部は強く下方へ垂下させ，丸く納める。8世紀後半代に位置付けられる。

7b区SPⅡ021　966は須恵器蓋。扁平な形態より9世紀前半に下る。

7b区SPⅡ106　967は土師器甕口縁部小片。8世紀前半には納まる。

7b区SPⅡ121　968は須恵器無蓋高坏。坏部は有蓋高坏蓋と形態上近似する。TK43型式期に位置付けられる。969は須恵器碗。口縁部は退化し縮小が著しく，TK217型式期に下る。

7b区SPⅡ006　970はサヌカイト製の縦長剥片である。

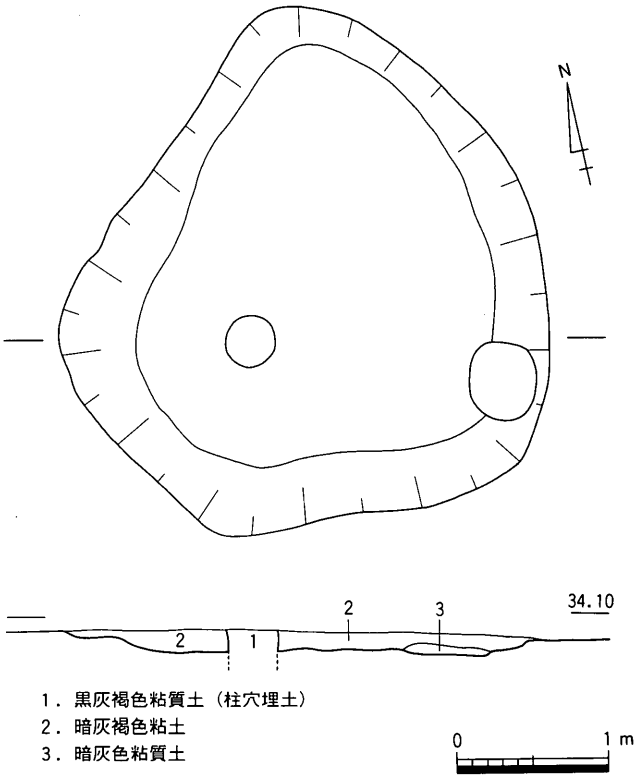


第135図　柱穴出土遺物実測図（1/4・2/3）

土坑

ＳＫⅡ25（第136図）

７ａ区北東部で検出した浅い土坑である。上面より柱穴２穴が掘り込まれる。平面形は，南北3.4ｍ，東西3.2ｍでやや南北に長い不整形な四辺形を呈する。深さは0.15ｍしかなく，断面形は浅い皿状を呈する。周壁は緩やかに掘り込まれ，検出面下0.05ｍの位置で僅かなテラス部が認められた。底面は概ね平坦であった。埋土は２層に細分された。下位層は，土坑東端付近のみに認められ，土坑底面より僅かに下がった窪地状部分に堆積した土層である。堆積状況から，本来的に本土坑に伴うものではなく，重複する別の遺構の埋土の残存の可能性もある。



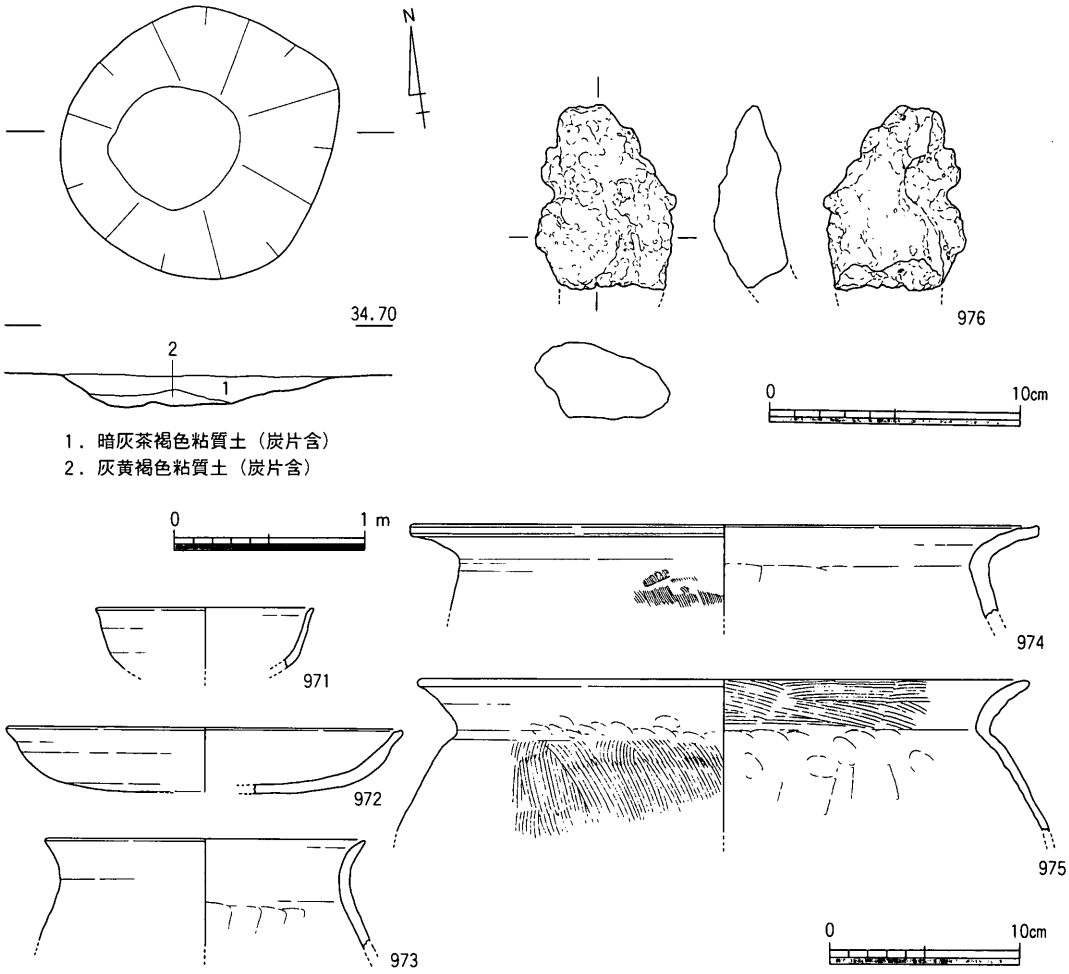
第136図　ＳＫⅡ25平・断面図（１/50）

遺物は，器種が特定できないまでに小片化した弥生土器と土師器片が30～40点程度出土したのみである。遺物から時期を特定することは困難であり，位置関係より８世紀代に位置付けられるものと考えるが，より遡る可能性もある。

ＳＫⅡ26（第137図）

７ｂ区北部で検出した土坑である。平面形は，一辺1.3～1.4ｍのいびつな隅丸方形状を呈する。深さは0.2ｍ前後と極めて浅く，断面形は周壁が緩やかに掘り込まれた皿状を呈する。底面の標高は，34.3ｍ前後であった。埋土は２層に細分され，灰褐色系粘質土が堆積していた。そう多量ではないが炭片を含むことが注意される。

遺物は，土師器・須恵器の細片が小袋１袋程度と鉄滓１点が出土している。６点の遺物を図示した。971は，須恵器坏。口縁部は外反して開き，端部は丸く納める。ＴＫ217型式期に位置付けられよう。972は土師器皿。口縁部は外反し，端部は丸く納める。内外面に



第137図　ＳＫⅡ26平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/３・１/４）

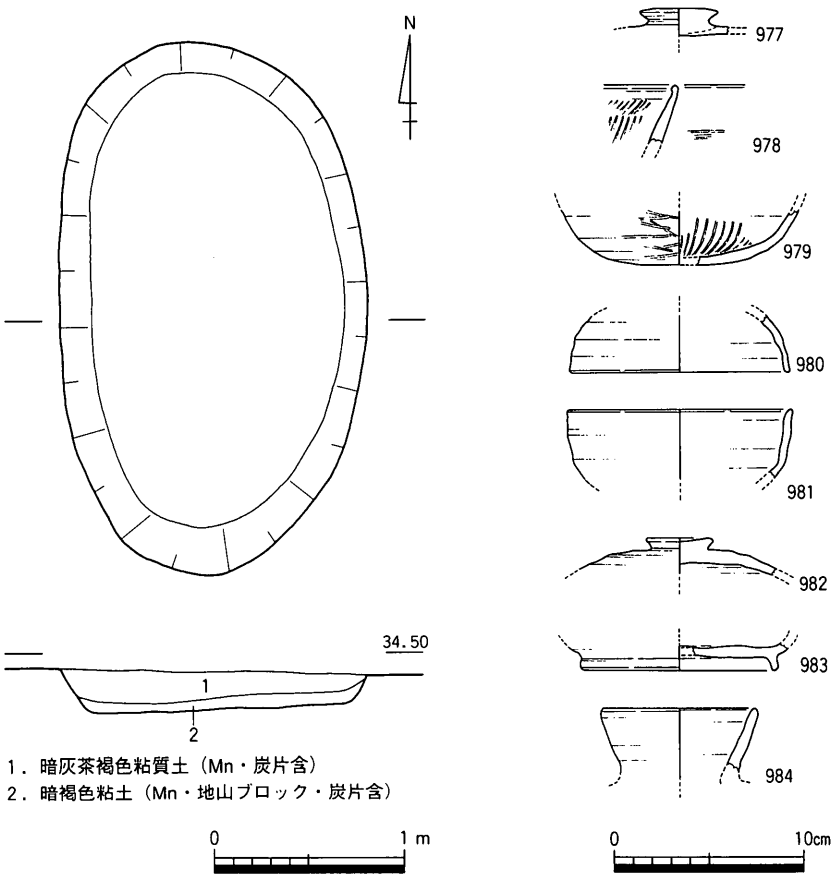
は土中のマンガン分が付着し，調整は不明瞭である。僅かに口縁端部内面に，鈍い沈線１条を認める。971と同時期としても違和感はない。973～975は土師器甕。973は小形甕。口縁部は外反し丸く納める。大形甕では，口縁端部を上方へ摘み上げる974と，単純に丸く納めるのみの975がある。976は椀形鍛冶滓。分析結果を第３章に記す。上記資料より概ね７世紀中葉を前後する時期に位置付けられよう。

ＳＫⅡ27（第138図）

７ｂ区東部で検出した土坑である。ＳＢⅡ18との位置関係より，建物に伴う貯蔵穴などの可能性も考えられたが，やや北に偏って配されることから，重複する別遺構として報告する。長軸2.8m，短軸1.6mを測り，平面形は南北に長い整った隅丸長方形を呈する。主軸方向はＮ８°Ｗである。深さは約0.2mと浅く，断面形は底面が平坦な逆台形状を呈す

る。底面はやや西に傾斜して，西端が数cm程深くなる。底面の標高は，最深部で34.20mを測る。埋土は2層に細分され，水平堆積する。

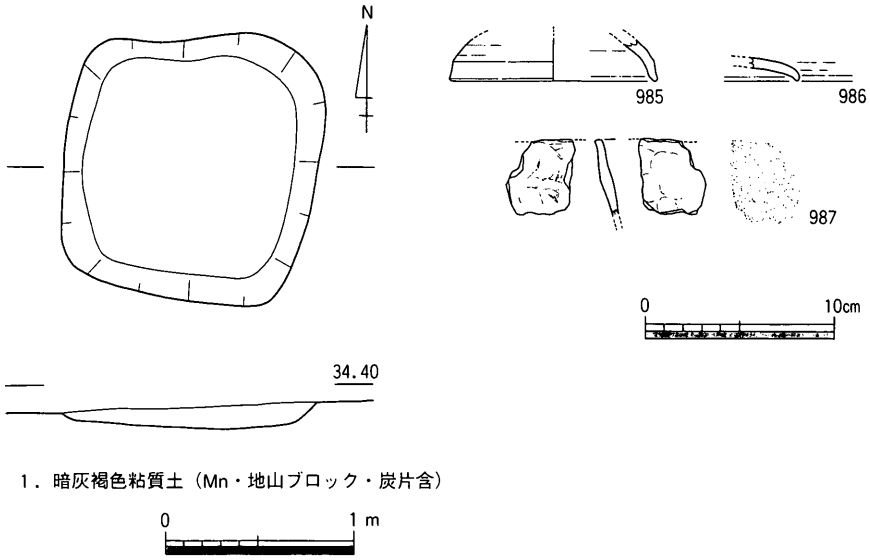
遺物は，土師器・須恵器の小片が少量とサヌカイト剥片2点が出土している。この内，器種が判明したものを中心に8点を図示した。977は土師器蓋である。頂部に円盤状の扁平な摘みを付す。胎土は後述する978・979と共に精選された素地粘土が選択される。978・979は土師器坏。内面には放射状の縦ミガキが施される暗文付土師器である。978は口縁部内面に2段のミガキが認められ，飛鳥Ⅳに併行し7世紀後葉～末に位置付けられる。977・979もほぼ同時期としてよい。980・981はより遡る須恵器坏。いずれもＴＫ217型式期に位置付けられる。982は須恵器蓋。天井部に中央の窪んだ扁平な摘みを付す。983と共に8世紀前半代に位置付けられる可能性がある。983は須恵器坏もしくは皿底部。外底部に外方へ踏ん張る高台を付す。984は須恵器平瓶の口縁部であろう。980等とほぼ同時期に位置付けられよう。上記資料より本遺構は，8世紀前葉を前後する時期に位置付けられる。



第138図　ＳＫⅡ27平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

ＳＫⅡ28（第139図）

7ｂ区東端で検出した土坑である。ＳＢⅡ19の東に位置し，整った位置関係にあることから，何らかの有機的関係も想定される。東西約1.4m，南北約1.3m，平面形は比較的



第139図　ＳＫⅡ28平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

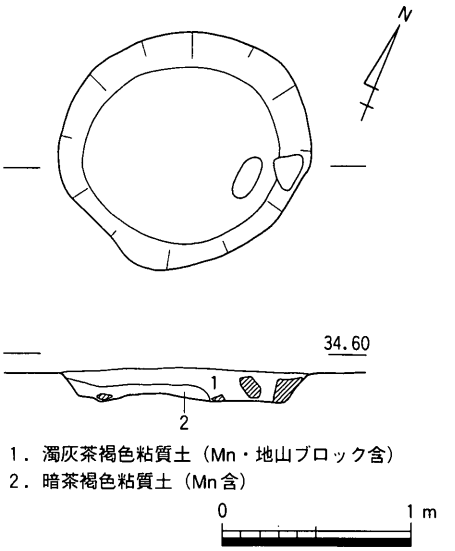
整った隅丸方形を呈する。深さは0.15m程しかなく，断面形は浅い皿状を呈する。底面は概ね平坦だが，やや東に傾斜する。底面の標高は，最深部で34.15mを測る。埋土は暗灰褐色粘質土の単層で，地山層のブロック土を含み，人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は，土師器・須恵器の小片が少量出土したのみである。この内，器種が判明したものを中心に３点を図示した。985・986は須恵器坏蓋。985は小片のため坏身となる可能性も残る。いずれにしろＴＫ217型式期を前後する時期に位置付けられる。986はより後出し，７世紀末以降に下る。987は製塩土器口縁部。器表面は剥離が顕著なため調整は不明瞭。外面は明確なタタキ痕跡を認めず，ナデつけられていたものと考えられる。985に近似した時期に位置付けられよう。上記資料より時期を判断することは困難だが，８世紀前半代を前後する時期に位置付けておきたい。

ＳＫⅡ29（第140図）

７ｂ区中央で検出した土坑である。平面形は，径1.3m程度の比較的整った楕円形を呈する。深さは0.15m程しか残存せず，断面形は逆台形状を呈する。底面は細かな起伏が認められるが，概ね平坦である。土坑東半部には，長径10～15cm程の花崗岩礫が数石出土している。意図的に据え置かれた形跡は認められなかった。埋土は灰褐色系粘質土が堆積し，２層に細分された。上位層に地山層のブロック土がやや混在する以外，大きな差異は認められない。

遺物は，器種を特定できないまでに小片化した土師器片が，10点程度出土したのみである。遺物より時期を特定することは困難であり，位置関係や埋土の特徴などからも，９世紀代以降には下らないと考えるが，より遡る可能性は高い。

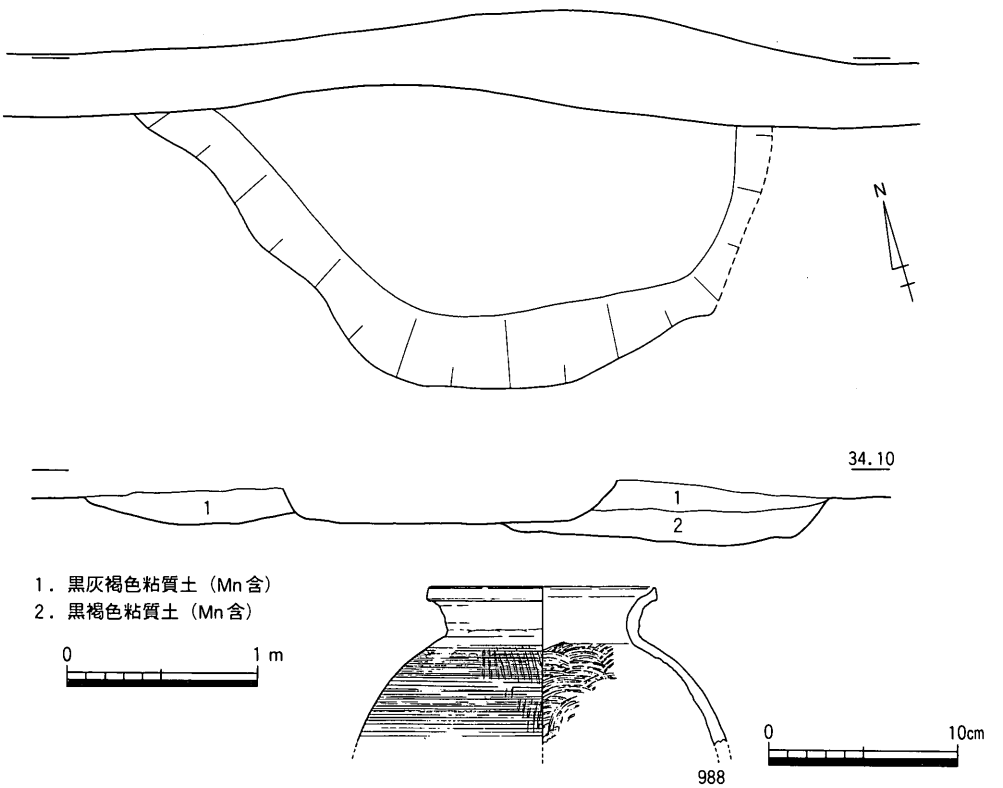


第140図　ＳＫⅡ29平・断面図（１/40）

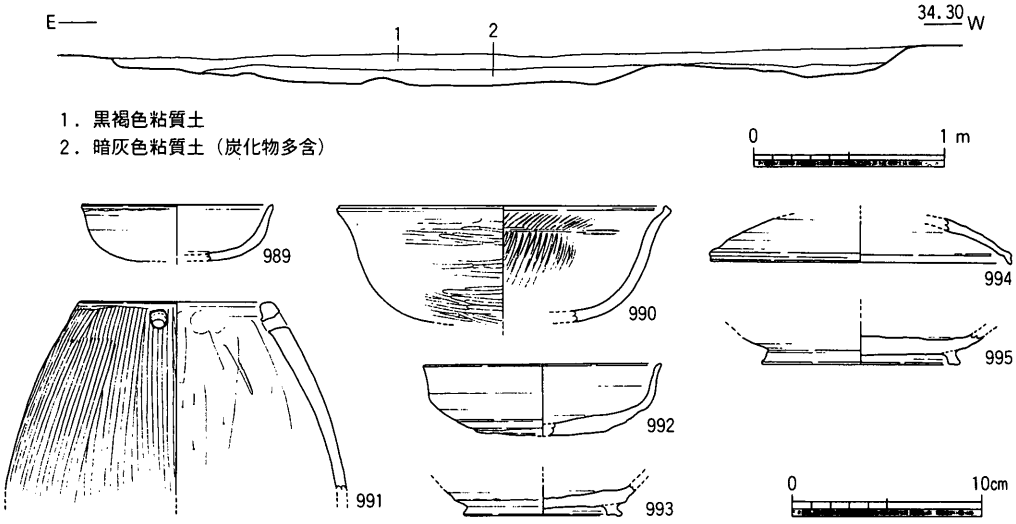
不明遺構

ＳＸⅡ12（第141図）

７ａ区北東隅に位置する土坑状の浅い落ち込みである。北半部の大半は調査区外へ延長し，遺構本来の南端付近を検出したに過ぎないものと思われる。検出部分で，東西3.3m，南北1.4



第141図　ＳＸⅡ12平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）



第142図　ＳＸⅡ13断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

ｍのいびつな台形状を呈する。深さは0.3ｍ前後を測り，底面は概ね平坦で，断面形は逆台形状を呈する。調査区北壁での観察で，埋土は黒褐色系粘質土が堆積し２層に細分された。

遺物は，器種を特定できないまでに小片化した土師器片等が，微量出土しているにすぎない。１点のみ図示した。988は須恵器甕。小形の形態。口縁端部は上方へ主に摘み上げ，直立する端面を作る。大部は平行タタキメの後カキメを施す。内面には同心円当て具痕を認める。８世紀代に下ることはないだろう。出土遺物より時期を特定することは困難であり，とりあえず７世紀代を中心とした時期を想定しておく。

ＳＸⅡ13（第142図）

７ａ区東南隅で検出した不定形な浅い落ち込みである。平面形は，長軸4.8ｍ，短軸2.7ｍの南北に長いいびつな隅丸方形部の西に，長さ約２ｍ，幅約１ｍ程の浅い溝状の突出部が付す。深さは東側の土坑部分でも0.2ｍ程で，断面形は浅い皿状を呈する。底面は若干の起伏を認めるが概ね平坦であった。底面の標高33.90ｍである。埋土は２層に細分され，下位層に炭化物粒を多量に含む点が注意される。しかし，底面に明確な被熱痕跡は認められず，投棄もしくは流入したものと想像される。平・断面形状や埋土の特徴から，自然地形の窪地状の部分に堆積した包含層の残存と考えておきたい。

遺物は，図示したもの以外に，少量の須恵器や土師器細片とサヌカイト剥片１点が出土している。989は土師器皿。990同様胎土は精良な粘土が選択される。990は土師器坏。外面は丁寧な横ミガキ調整され，内面には上下２段に放射状の暗文状ミガキを認める。989

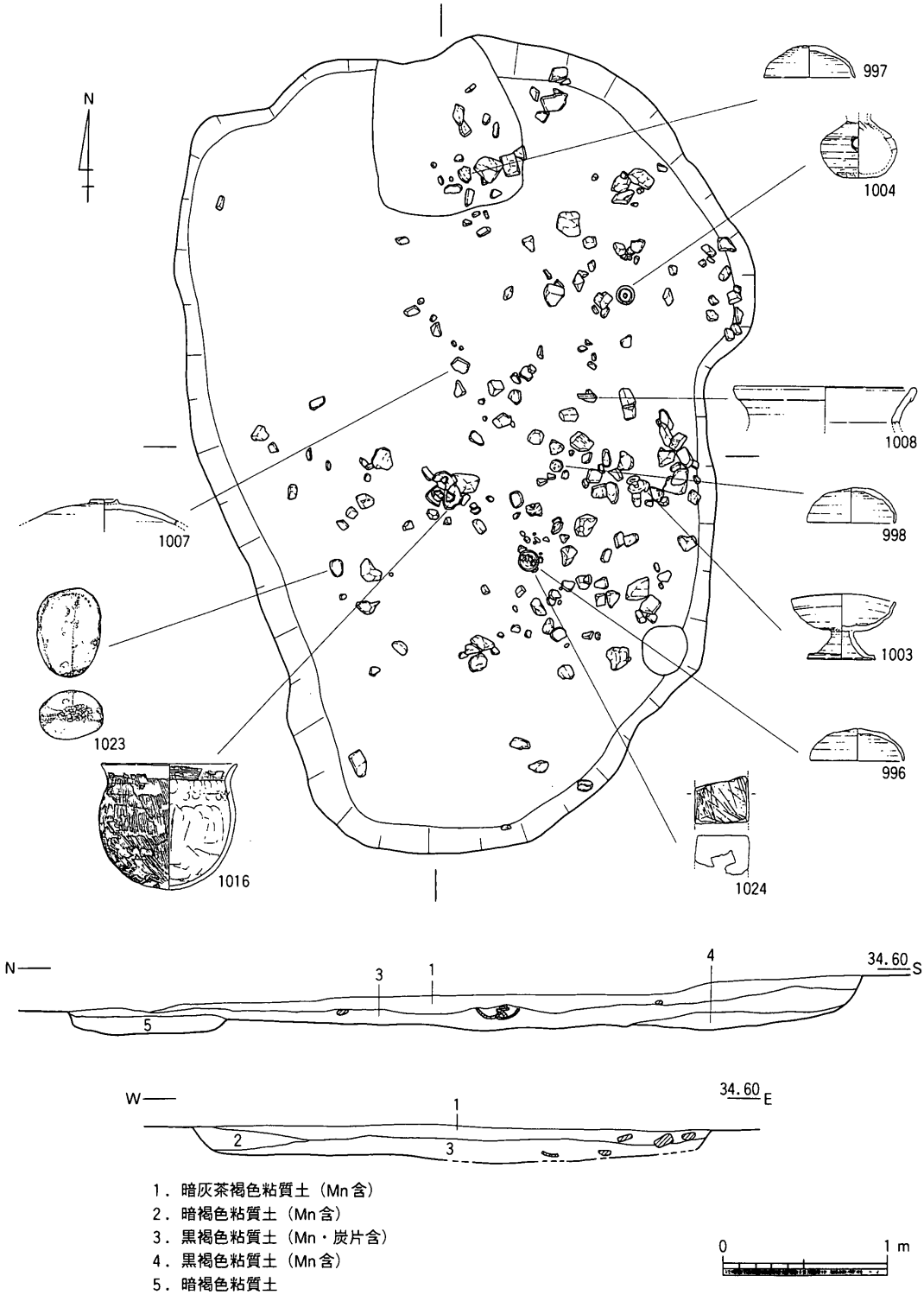
と共に８世紀前半代に位置付けられ，また搬入品の可能性がある。991は土師器蛸壺。口縁部は内傾し，端部は四角く納める。口縁端部付近に径８㎜程度の円孔を穿つ。本来は１対の円孔が穿たれていたのであろう。外面は縦ハケ調整され，内面には板ナデ圧痕を認める。992・993は須恵器坏。992は平底状を呈する坏で，ＴＫ217型式期に位置付けられる。993は外底面に外方へ踏ん張る高台を付す。いずれも８世紀中葉以降には下らない。994は須恵器坏蓋。口縁端部は下方へ垂下させ，外端面は鈍く凹線状に窪む。上記坏とほぼ同時期と考えられる。995は須恵器底部。外底面には高台を付すが，高台径が大きく，また器壁も厚いことから，坏以外の可能性を考える。上記資料は，若干時期が遡るものも含むが，概ね８世紀前半代に位置付けられると考える。

ＳＸⅡ14・15・16・17（第143～149図）

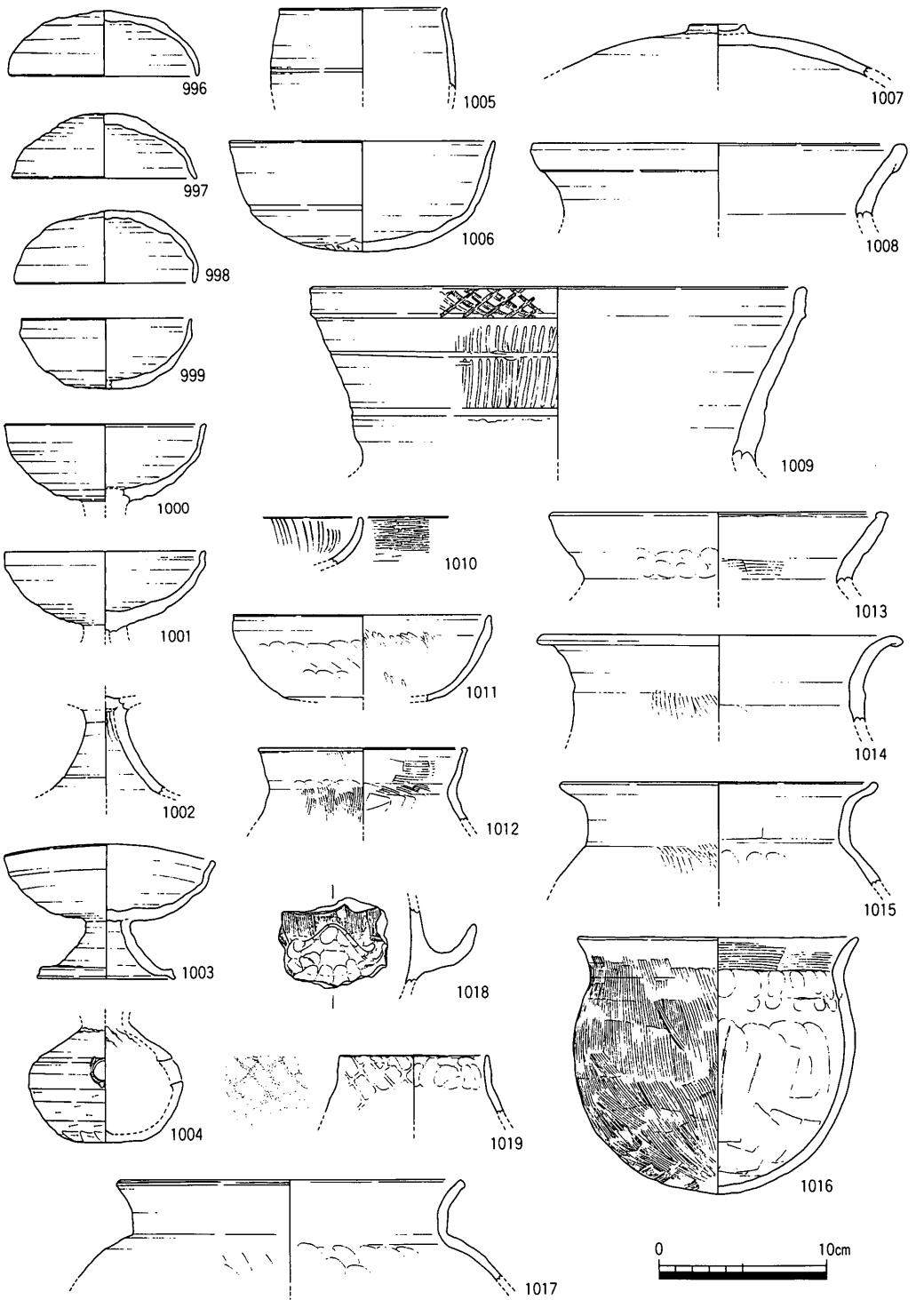
いずれも７ｂ区中央付近で検出した不整形な浅い落ち込みである。ほぼ直線的に，北東方向より南西方向に列状に並ぶ。平面形状や規模は各々やや異なるが，不整形な平面プランや断面形状，埋土の特徴や遺物の出土状況に近似した内容を有しており，大きな機能差，時期差を想定し得ない遺構群である。

ＳＸⅡ14は，長軸4.8m，短軸3.5mを測り，平面形は南北に長いいびつな隅丸方形状を呈する。４基の遺構の中では最も規模が大きい。前記したようにＳＢⅡ21より先行する。主軸の方向は概ねＮ５°Ｗであった。深さは最大でも0.35mしかなく，平面規模に比して極めて浅い遺構である。底面は若干の起伏を認めるが概ね平坦で，北端部床面で，長軸0.95m，短軸0.9mの平面台形状の浅い土坑状の落ち込みを伴う。位置関係より本遺構に伴う可能性が高いが，遺物の出土はなく確証を欠く。埋土は，黒褐色系粘質土が堆積し，５層に細分された。最下層（５層）は，土坑状の落ち込みに伴う埋土である。埋土間に大きな差異は認められず，比較的短期間の内に埋没したものと考えられる。遺物は主に東半部の下位層中（２・３層）より出土した。多量の長径５～20㎝程度の自然礫とともに投棄されている。礫群は，大半が周辺の地山層中に含まれる花崗岩系統の自然礫であったが，若干量の安山岩板石や砥石，本遺構に本来的に伴うかどうかは明らかではないが，磨石なども出土している。なお，自然礫の中には，集落内で何らかの用途に使用された可能性のある，被熱により赤変した石材も微量含まれている。

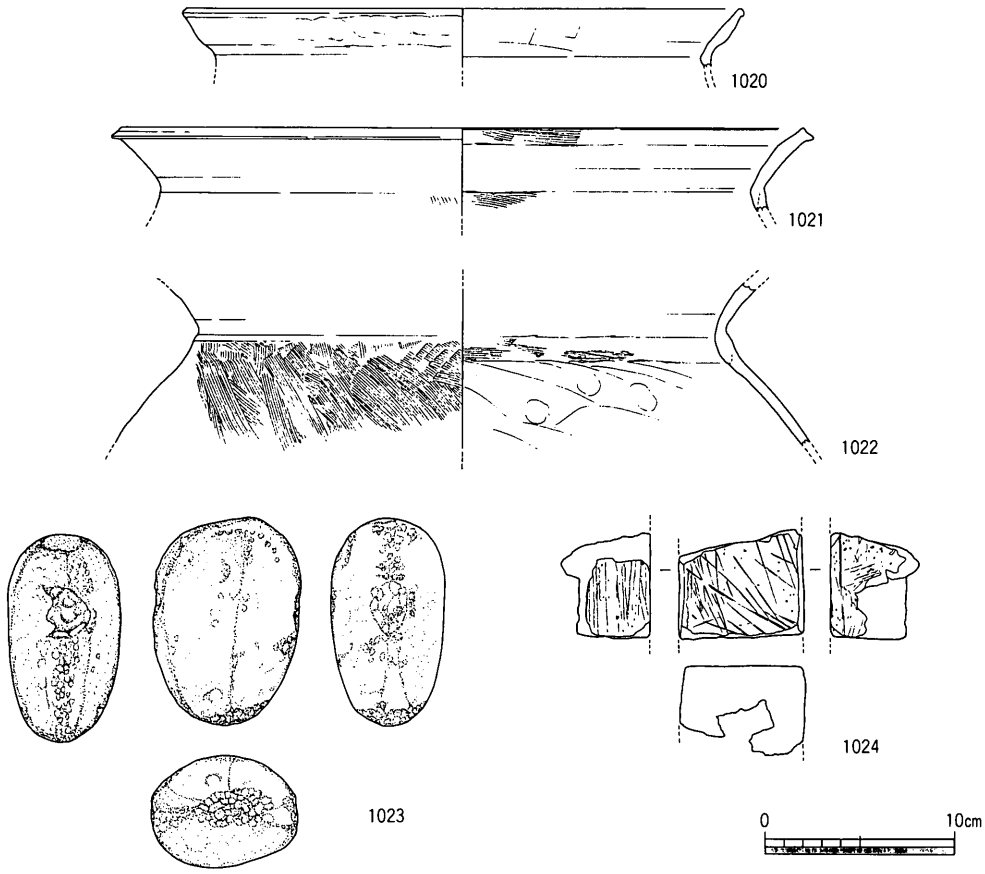
遺物は図示したものの他，製塩土器細片や焼粘土塊などがある。996～998は須恵器坏蓋。天井部が丸味を有していることから，後の坏身とは区別した。いずれも天井部外面は，回転ヘラ切り後未調整である。なお，998は同一個体の破片がＳＸⅡ15より出土している。999



第143図　ＳＸⅡ14平・断面図（１/40）

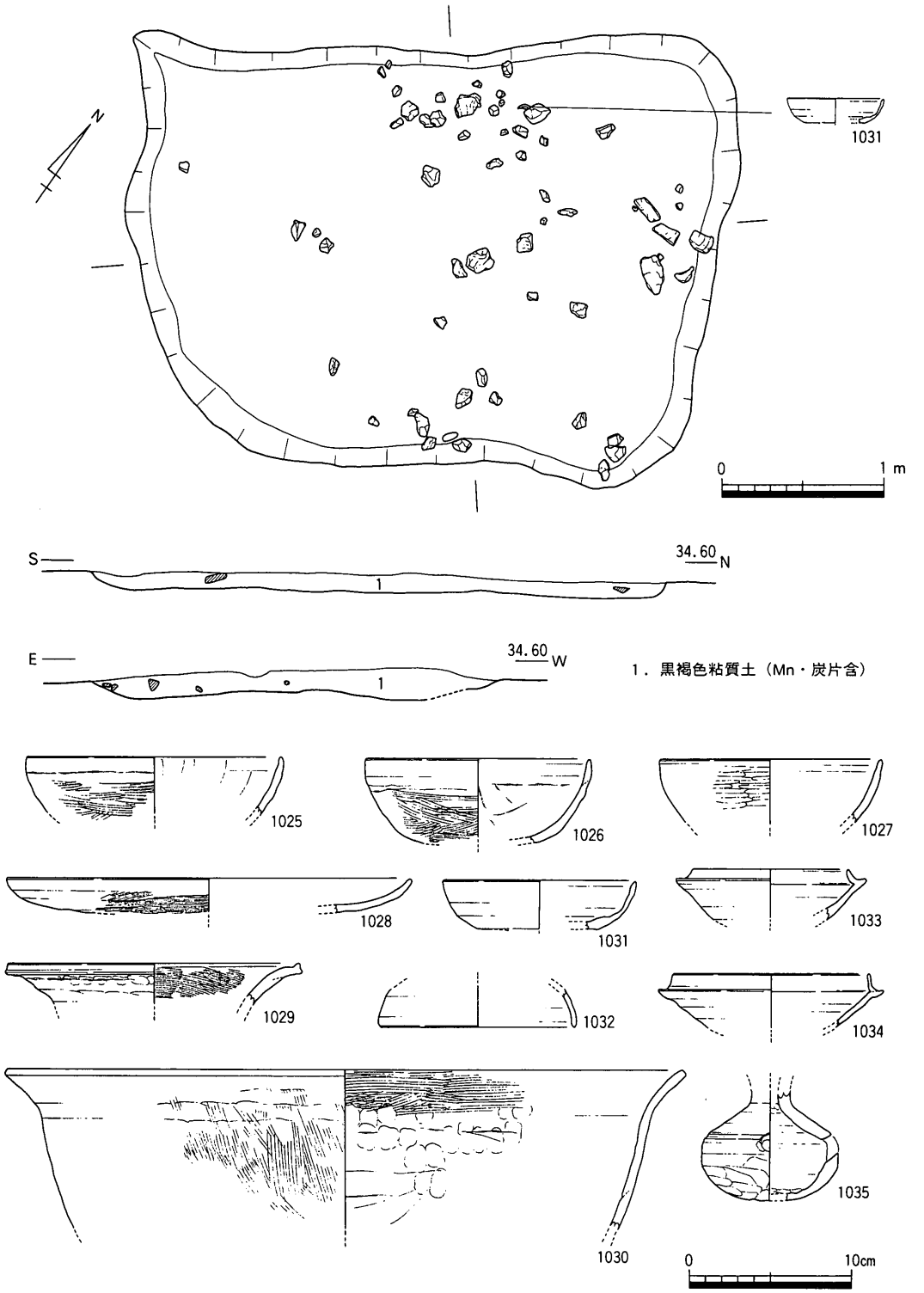


第144図　ＳＸⅡ14出土遺物実測図１（１／４）



第145図　ＳＸⅡ14出土遺物実測図２（１/４）

は同坏身。口縁部が鈍く屈曲して直立し，底部が平底状を呈することから坏身とした。外底面は蓋同様ヘラ切り未調整である。1000～1003は須恵器無蓋高坏。坏部形状は同時期の坏身と共通し，緩やかに外反して開く脚部を付し，脚端部は屈曲して下方へ摘み出す。1004は須恵器碗。外底面は回転ケズリ調整の後，不整方向のナデ調整を施す。1005は台付碗。口縁端部は小さく外反し丸く納める。外面に１条の沈線を認める。1006は須恵器鉢。底部外面上端に沈線１条を認め，外底面は回転ケズリの後不整方向のケズリ調整を加える。1007は須恵器蓋。天井部には中央部が著しく窪んだ，円環状の摘みを付す。1008・1009は須恵器甕。1008の口縁部は外反して開き，端部を断面矩形に肥厚する。1009は大形甕の口頸部。口縁部外面は格子状の刺突文を，頸部外面は縦方向の櫛描き文を施し２条の沈線で区画する。一般的に大形甕は口頸部の装飾が顕著である。大阪府陶邑窯跡群ＭＫ113号窯に類似形態を認める。1010は土師器皿口縁部小片。外面は入念な横ミガキ調整が施され，内面は放射状のミガキ調整を認める。胎土は精良な素地粘土が選択され，搬入品であろう。1011

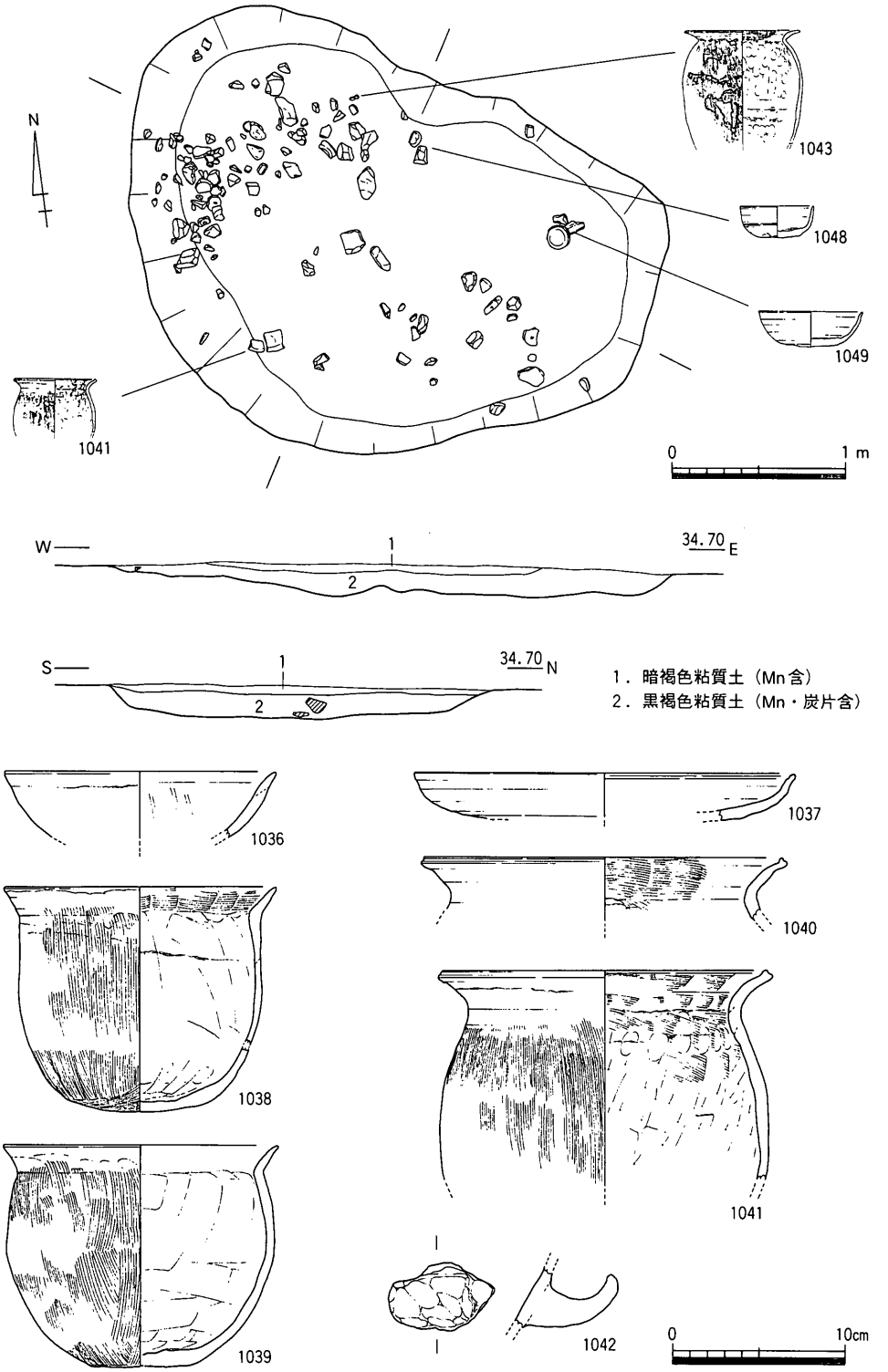


第146図　ＳＸⅡ15平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

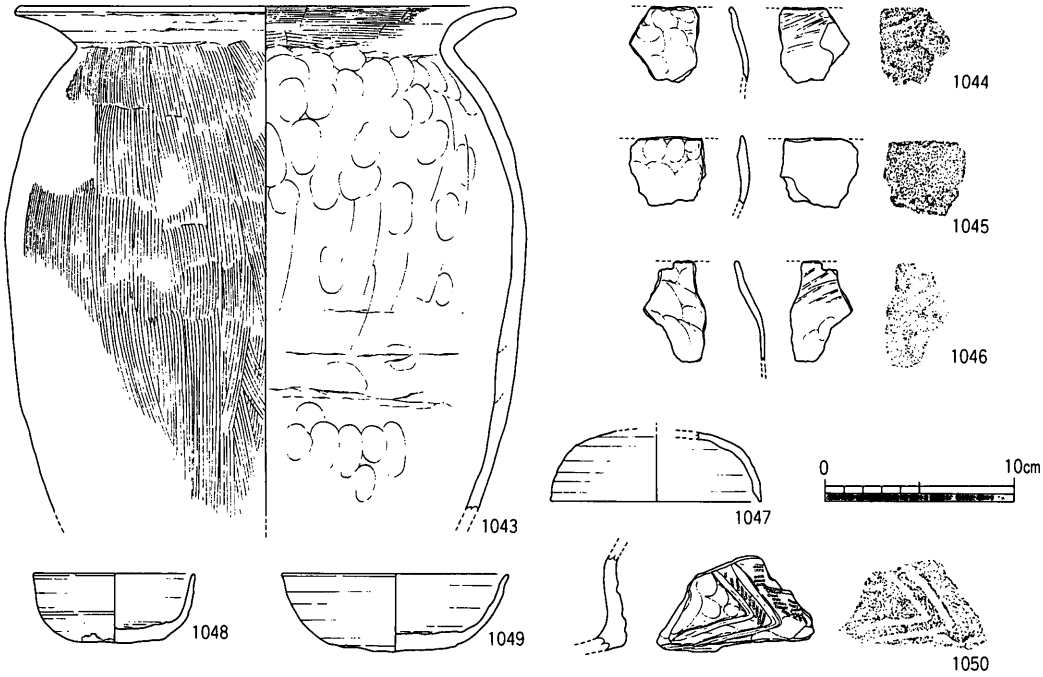
は在地粗製の土師器坏G。内面には辛うじてミガキ調整を認めるが，暗文状を呈するものではない。1012～1017は土師器小・中形甕。口縁部形態にはかなりのバリエーションを認める。1013は口縁端部を内側に肥厚する布留系統の甕。1016は小形球形甕だが，内法量は約1.7ℓとやや大きい。1018は土師器把手付甕の把手部分。正面三角形状を呈する。1019は製塩土器口縁部小片。外面には格子タタキ痕を認める。1020～1022は大形甕口頸部。口縁部形態は小・中形甕同様若干のバリエーションを認める。なお，接合はしなかったが1021と同一個体と考えられる破片がＳＸⅡ15より出土している。1023は砂岩製の叩き石。本遺構に直接伴うものかどうかは不明。下端面と両側面に敲打痕を認める。また正面左半部を中心に石目が潰れており，磨石としても使用したようである。1024は流紋岩製の砥石。12片以上に細かく破砕されて，須恵器坏蓋996の内部より出土した。確認される３面全面に使用痕があり，主に長軸に平行して擦痕を認める。上記資料はいずれも７世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。遺構の性格からすれば若干の時期幅を考慮する必要があるが，本資料による限り型式差の乏しい一括資料と理解される。

ＳＸⅡ15はＳＸⅡ14の南に接して検出した。両遺構の間には，僅かな地山層の隆起がみられるのみで，本来的に個別の遺構として捉えてよいかどうかは，上面の削平により明らかではない。現状で，長軸3.7m，短軸2.5mを測り，平面形は東西に長い不整形な隅丸長方形を呈する。主軸の方向はN59°Ｅで，ＳＸⅡ14とは斜交する。残存深は0.15m程度，底面の標高は34.4m前後で，ＳＸⅡ14よりやや浅い。埋土は，ＳＸⅡ14下位層に近似した黒褐色粘質土の単層であった。ＳＸⅡ14同様埋土中に，若干量の焼粘土塊や炭片，被熱痕のある自然礫などを伴うが，底面には被熱の痕跡は認められず，遺構内部で火を焚いた可能性は乏しい。

遺物はＳＸⅡ14に比してやや少なく，東半部を中心に出土している。完形に復元されるものはない。図示した以外には，焼粘土塊が少量出土しているに過ぎない。また，前記ＳＸⅡ14に比してやや土師器の比率が高い。９点を図示した。1025～1027は土師器坏。1025・1026は在地産粗製の坏Ｇである。外面には横方向のハケ調整が施される。同一個体の可能性もあるが，接合せずまた口径も異なるため別個体として図示した。1027は精製器種。外面は丁寧な横ミガキ調整が施される。1028は1025等と同系統の土師器皿。外面にはハケ調整を施す。1029は土師器甕。口縁端部を上方へ摘み上げ，端面は鈍く窪む。1030は土師器鍋。口縁部は緩やかに外反して開き，端部は四角く納める。屈曲部内面の稜は鈍く，やや古い特徴を認める。また，後述するＳＸⅡ16より同一個体の破片が出土している。1031



第147図　ＳＸⅡ16平・断面図（１/40），出土遺物実測図１（１/４）



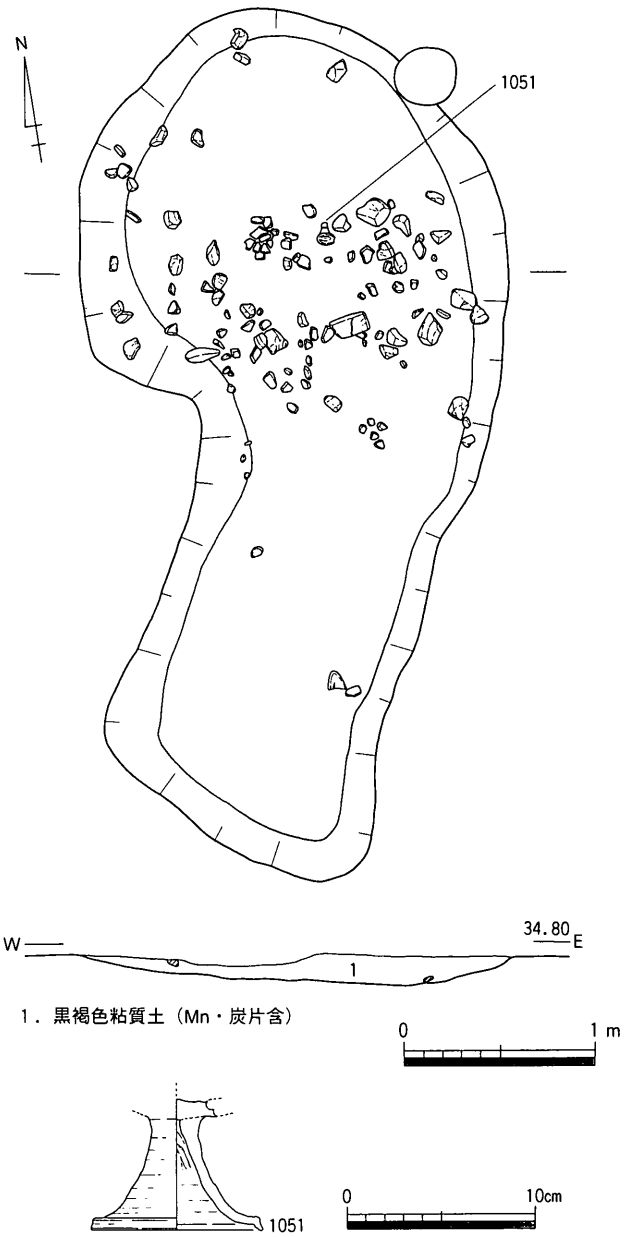
第148図　ＳＸⅡ16出土遺物実測図２（１/４）

・1032は須恵器坏蓋。1031は天井部がやや平坦なため坏身となる可能性も残す。1033・1034は同坏身。1034は口縁部が大きく直立して立ち上がり，坏身よりはむしろある種壺の蓋となる可能性もある。1035は須恵器碗。外底面は不整方向のケズリ調整の後ナデ調整される。上記資料も，位置付けにやや苦慮する1029を除いて，ＳＸⅡ14と大きな時期差を認めない。

ＳＸⅡ16は４基の落ち込みの中でほぼ中央に位置する。東西3.2m，南北2.4mを測り，平面形は東西に長いいびつな隅丸台形状を呈する。深さは0.2m程度，底面の標高は34.4m前後で，断面形は西壁を中心に緩やかに掘り込まれ皿状に近い。埋土は，ＳＸⅡ14下位層に近似し，２層に細分されたが大きな差異はない。

遺物は西半部を中心に出土している。ＳＸⅡ15と異なり，完形に復元される個体を含み，量的にもまとまっており，出土傾向はＳＸⅡ14のそれに近い。図示したものの他，焼粘土塊片などが少量出土している。15点を図示した。1036は弥生土器の小形鉢である。本遺構に直接伴うものではない。内面には放射状のミガキ調整を辛うじて認める。1037は土師器皿。外面は横ミガキ調整された可能性があるが，磨滅のため詳細は不明。1038・1039は土師器小形甕。内法量1.3～1.4ℓを測る。口縁部は外反して開き，端部は丸く納める。底部は鈍い平底ないしは丸底を呈する。1039の底部外面には「X」字のヘラ記号を有する。1040・1041は中形甕。口縁部は外反して開き，端部は上方へ小さく摘み上げ，端面は凹線状に

鈍く窪む。体部内面にケズリ調整を認める以外，小形形態と大きな差異はない。1042は土師器の把手。正面長方形状を呈し，おそらくは甑の把手となろう。1043は土師器大形甕。長胴形態の甕で，口縁部は強く外反し端部は丸く納める。1044～1046は製塩土器片。1044と1046は口縁部外面に平行タタキ痕を認め，色調は橙色系を呈し，胎土中に一定量の黒雲母粒を含む。1045は外面剥離等が顕著だが，タタキメ痕跡を認めず，色調は黄色系を呈し，前者と胎土も異なる。両者はほぼ同時期に位置付けられるものと考えられ，製作地の相違を反映しているものと考える。1047は須恵器坏蓋。天井部外面は回転ケズリの後回転ナデ調整される。1048・1049は須恵器坏身。1048は胎土・調整共に精製品。外底面はヘラ切り後ナデ調整される。口縁部下端外面に１条の沈線を認める。1049は底部外面ヘラ切り後ナデ調整される。底部が厚く，また口縁部が鈍く外反することから坏身としたが，坏蓋となる可能性も残る。1050は縄文土器である。注口土器体部片と考えられるが，小片のため土器の傾きにはやや難がある。善通寺市永井遺跡ＳＲ8507の1351（渡部1990）に類似形態を認める。上記資料は一部他の遺物と大きく時期が隔たるものも含むが，概ね前記ＳＸⅡ14と近似した時期に位置付けられると考える。



第149図　ＳＸⅡ17平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

ＳＸⅡ17は南端に位置する。長軸4.5m，短軸1.3～2.3mを測り，平面形は北半部がやや膨らみを有する不整形な長方形状を呈する。深さは0.15m，底面の標高は34.6m前後で，他の３基とは若干の比高差を有する。周壁は緩やかに掘り込まれ，断面形は浅い皿状を呈する。埋土の特徴はＳＸⅡ16にほぼ等しい。

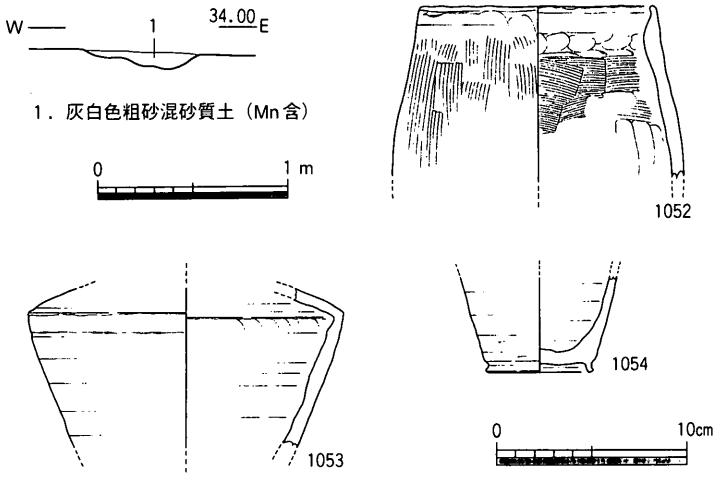
遺物は北半部に集中し，出土傾向はＳＸⅡ16のそれに近い。１点のみ図化し得た。**1051**は須恵器高坏脚。おそらく無蓋高坏脚部と考えられる。脚端部は強く折り返して，下方へ摘み出す。短脚形態からＴＫ217型式期に位置付けられよう。

上記遺構群については，平面プランや断面形状などに人為的な痕跡は認められなかったが，遺物の出土状況は混入や流入といったものではなく，一定の廃棄行為を反映していると考えてよい。しかしながら，量的に少なく，継続性や反復性を有したものではない。自然地形の窪地部分などに，単発的に投棄された遺物群と考えられる。また，各遺構間で接合する遺物が存在することは，各遺構の埋没時期の同時性を示していると考える。

溝状遺構

ＳＤⅡ14（第150図）

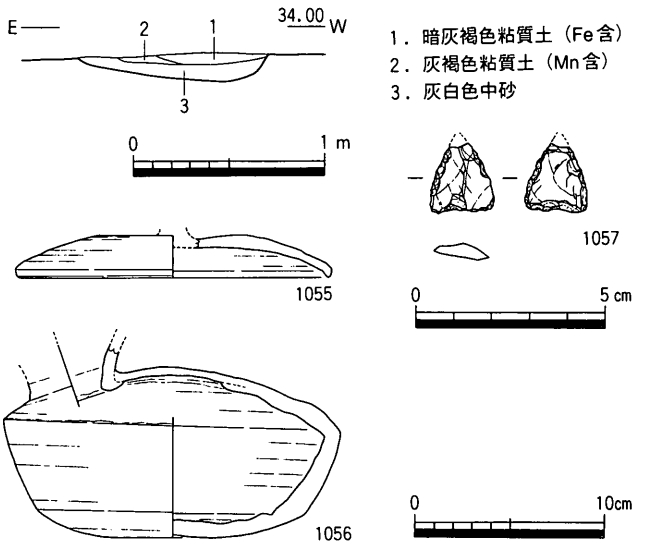
７ａ区東端で検出した直線溝である。北端は調査区外へ延長し，南端は調査区内で途切れる。延長15.7mを検出した。延長方向に近世溝ＳＤⅡ03が配される。位置関係からすれば，ＳＤⅡ03の開削によって本溝が消失した可能性もある。流路方向N16.5°Ｅ。底面の標高は南端で33.80m，北端で33.68mを測り，底面の高低差からすれば緩やかに北へ流下する。深さは0.1mしかなく，断面形はいびつな浅い皿状を呈する。埋土は，灰白色砂質土の単層であった。



第150図　ＳＤⅡ14断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

遺物は図示したものの他，土師器細片が10点程度出土しているにすぎない。**1052**は土師器蛸壺。おおよその形状や法量，調整手法等は前記ＳＸⅡ13出土の**991**に近似するが，口

縁端部に相違を認める。供伴する遺物より，おそらくは時期差を反映した可能性が高い。1053は須恵器壺で，おそらく長頸壺体部となろう。肩部の稜は強く，体下半部は直線的に下る。1054は須恵器底部片。小形の壺底部と考える。外底面端にはやや外方へ踏ん張る低い高台を付す。８世紀後半から９世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。上記資料より遺構の時期を特定することは困難だが，周辺遺構との関連を重視して，８世紀後半代を中心とした時期に位置付け，やや後出する可能性も想定しておきたい。



第151図　ＳＤⅡ15断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4・1/2）

ＳＤⅡ15（第151図）

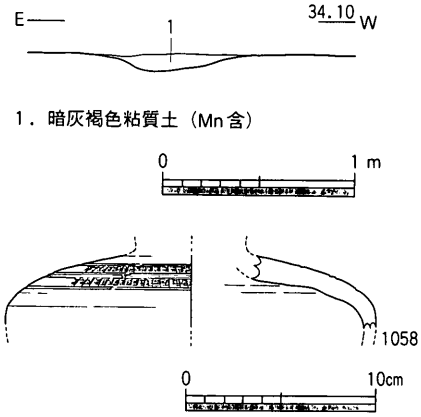
７ａ区東南隅に位置し，やや緩やかに蛇行しつつ南北流する溝状遺構である。南北両端は調査区外へ延長する。南端付近で，東にＳＤⅡ16が分岐して北東流する。また，ＳＤⅡ17と重複し，切り合い関係よりＳＤⅡ17より後出する。延長18.1ｍを検出した。溝は，幅1.0ｍ，深さ0.15ｍで，断面形は浅い皿状を呈する。南半部は幅2.2ｍと広くなるが，これは西壁部分に浅いテラス部を伴うためである。流路方向はＮ26.2°Ｅで，北端部分で鈍く屈曲する。底面の標高は，南端で33.80ｍ，北端で33.68ｍを測り，底面の高低差からすれば緩やかに北東方向に流下する。埋土は２ないし３層に細分され，基本的には穏やかな堆積環境を示し，北半部底面に流水下の堆積と思われる灰白色中砂層が残存する。

遺物は図示したものの他，器種を特定できないまでに小片化した土師器・須恵器片が若干量出土しているに過ぎない。1055は須恵器坏蓋。口縁部は小さく摘み出して垂下させる。器高は低く後出するものではない。1056は須恵器平瓶。体部は丸味を失い，長胴化がやや進展している。1055と共に８世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考えられ，本遺構の時期を示す。1057はサヌカイト製の石鏃。平基式の小形の石鏃で，周縁の調整剥離は深くまで及ばない。

ＳＤⅡ16（第152図）

ＳＤⅡ15より分岐して，北東方向に延びる溝である。幅1.0m前後，深さ0.1で，断面形は浅い皿状を呈する。溝両肩には幅広の浅いテラス部を伴い，溝底幅は0.35m程度に過ぎない。埋土は単層で，ＳＤⅡ15上位層と近似し，ほぼ同時期に埋没したものと考えられる。

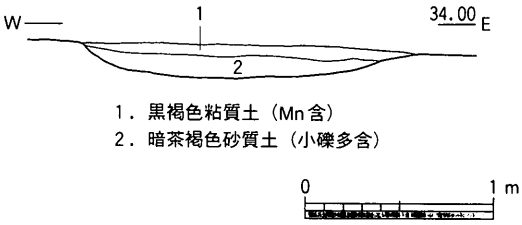
遺物は，器種を特定できないまでに細片化した土師器・須恵器片が，10点程度出土しているにすぎない。内１点のみ図示した。1058は須恵器壺体部小片。肩部外面は２段の櫛描刺突文と４条の沈線で飾る。時期的な位置付けは困難だが，上記ＳＤⅡ15出土遺物よりは先行する可能性がある。



第152図　ＳＤⅡ16断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

ＳＤⅡ17（第153図）

７ａ区東南隅で検出した溝状遺構である。ＳＤⅡ15・16とかなりの部分が重複し，検出範囲は限定される。確認した部分で，幅1.85m，深さ0.4m，流路方向N43.5°Eの直線溝と考えられる。底面の標高は33.7m前後で一定し，流下方向を特定するまでには至らない。埋土は２層に細分され，下位層中央部には小礫を多量に含む暗褐色系砂質土が堆積し，水流下の堆積が想定される。上位は黒褐色系粘質土で，溝廃棄後の自然堆積層であろう。



第153図　ＳＤⅡ17断面図（１/40）

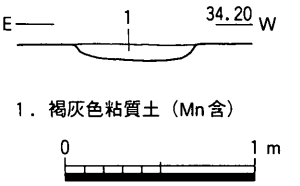
遺物は図示したものの他，器種を特定できないまでに小片化した土器片やサヌカイト剥片等が少量出土したに過ぎない。出土遺物より時期を特定することは困難である。上記ＳＤⅡ16等と流路方向を概ね等しくすることから，大きく時期が隔たることはないと考えておきたい。

ＳＤⅡ20（第154図）

７ａ区中央東半で検出した直線溝である。南北両端は調査区内で途切れ，延長12.8mを検出した。流路方向Ｎ８°Ｅ。底面の標高は，南端で34.14m，北端で33.98mを測り，底面の高低差から緩やかに北に流下する可能性が考えられる。幅0.6～0.8m，深さ0.1mで，

断面形は浅い皿状ないしは箱形を呈する。埋土は，褐灰色粘質土の単層であった。

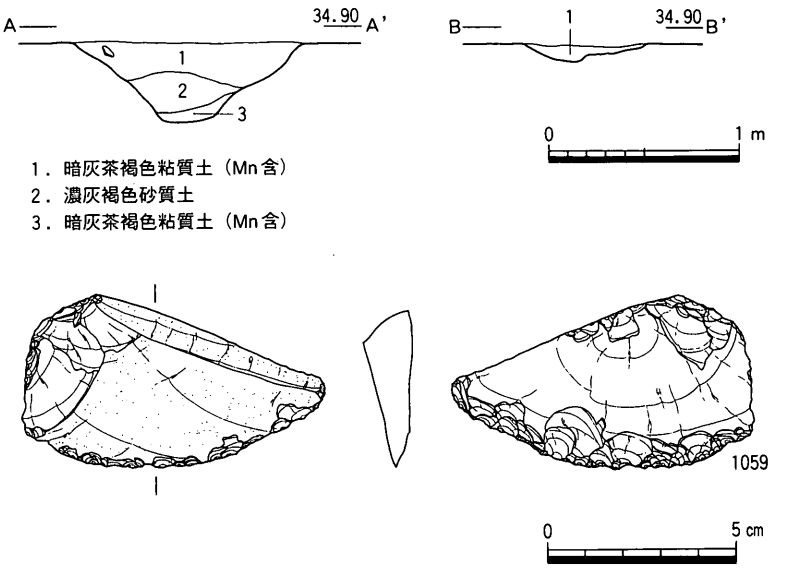
遺物は，土師器細片が２点出土しているのみである。出土遺物から時期を特定することは困難だが，位置関係や形態，流路方向より，ＳＢⅡ07・13等と有機的な関連が想定される。



第154図　ＳＤⅡ20断面図（１/40）

ＳＤⅡ21（第155図）

７ｂ区西半部をやや蛇行して，北西方向に流下する溝状遺構である。北端部は調査区外に延び，延長約27.5ｍを検出した。流路方向は概ねＮ21°Ｗを示し，ＳＢⅡ27とほぼ平行する。当該期の遺構の希薄な部分を中心に開削され，流路方向も地形の傾斜方向との関係が乏しいことから，何らかの区画を意図したものとも考えられる。溝は南半部で幅0.65ｍ，深さ0.1ｍ，底面の標高34.7ｍ前後，北端部で幅1.2ｍ，深さ0.5ｍ，底面の標高34.4ｍ前後と北端部４ｍ付近で急速に幅・深さを増す。断面形は，南半部で皿状を，北端部で逆台形状を呈する。埋土は北端部で３層に細分された。上位１層は，南半部と共通する。基本的に粘質土で充填されており，顕著な流水の存在を窺わせる砂礫の堆積は認められない。



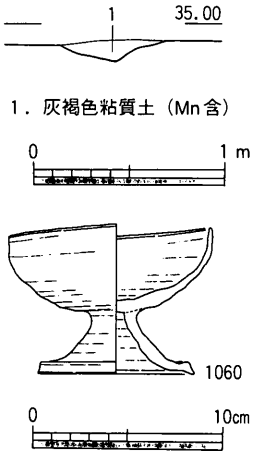
第155図　ＳＤⅡ21断面図（１/40），出土遺物実測図（１/２）

遺物は，土師器甕等の小片が若干量出土している他は，器種を特定できない小片が大半を占め，遺物から遺構の細かな時期を判断することは困難である。本遺構の時期を示すものではないが，参考資料として１点のみ図示した。1059はサヌカイト製のスクレイパーである。下縁に両面より施された調整剥離を認める。

ＳＤⅡ22（第156図）

７ｂ区南西隅で検出した溝状遺構である。緩やかに弧状を呈して東西に検出され，両端は調査区外へ延びる。延長約18.5ｍを検出した。切り合い関係より，ＳＢⅡ31より先行する。幅0.5ｍ前後，深さ0.1ｍで，流路方向は概ねＮ55.5°Ｗである。底面の標高は，34.7ｍ前後で一定し，流下方向は不明。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質土の単層であった。

遺物は，図示した須恵器無蓋高坏１点がほぼ完形に近い状態で溝中央より横転して出土した以外は，縄文土器，弥生土器等の小片が30点程度出土したのみである。1060は短脚化の進展した無蓋高坏で，ＴＫ217型式期に位置付けられる。

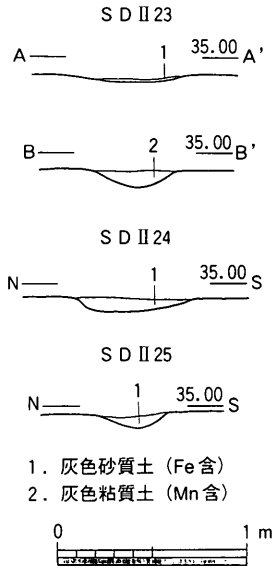


第156図　ＳＤⅡ22断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

ＳＤⅡ23（第157図）

７ｂ区南西隅で検出した小溝である。ＳＤⅡ22の南西に位置し，流路方向はＮ48.5°Ｗと概ねＳＤⅡ22と平行する直線溝である。中央部でＳＤⅡ24が南に分岐する。東西両端は調査区外へ延長し，検出長は9.3ｍ程にとどまる。幅0.4～0.5ｍ，深さ0.1ｍ前後で，西端では上面の削平により深さは数cm程を確認しえたに過ぎない。底面の標高は34.8ｍ前後で一定し，流下方向は不明。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰色砂質土の単層であった。

遺物は，土師器甕，須恵器等の小片が10点程度出土したのみであり，図化しうる遺物は出土していない。遺物の面から遺構の時期を特定することは困難である。ＳＤⅡ22との位置関係や流路方向等から，ＳＤⅡ22と近接した時期に位置付けられるものと考える。



第157図　ＳＤⅡ23～25断面図（1/40）

ＳＤⅡ24（第157図）

ＳＤⅡ23より分岐して，南に延びる直線溝である。延長3.5ｍを検出したに過ぎない。流路方向Ｎ24.5°Ｗで，ＳＤⅡ23と内角約24°で斜交する。幅0.6ｍ前後，深さ0.1ｍ前後で，断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は34.8ｍ前後で一定し，ＳＤⅡ23より数cm程高いが，流下方向を決定するには至らない。埋土はＳＤⅡ23と同一である。

遺物は，土師器小片２点と須恵器甕体部小片１点が出土したのみである。

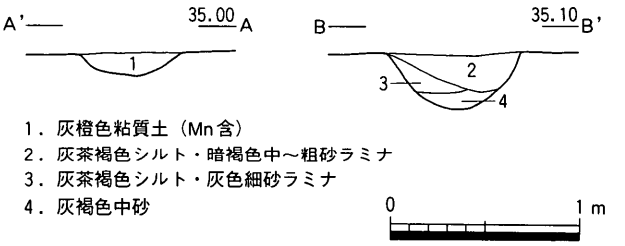
ＳＤⅡ25（第157図）

７ｂ区南西隅に位置する直線溝である。僅かに延長2.2ｍを検出したにとどまる。流路方向N41.5°Ｗで，ＳＤⅡ23にほぼ並行する。幅0.3～0.4ｍ，深さ0.1ｍ前後で，断面形は浅い皿状を呈する。埋土はＳＤⅡ23とほぼ共通し，ＳＤⅡ24を介してＳＤⅡ23に連絡し，上記３溝が同時期に併存していた可能性が高い。

遺物は，土師器小片が３点出土したのみである。

ＳＤⅡ36（第158図）

11区谷７上面より緩やかに孤を描きながら，９区西端部にかけて，地形の傾斜にほぼ沿うように検出された流路である。ＳＫⅡ40・ＳＤⅡ58より先行する。延長約35ｍを検出した。底面の標高は，11区南端部で34.7ｍ前後，９区で34.6ｍ前後を測り，基本的には北東方向に緩やかに流下するが，底面は起伏が顕著であり，局部的に深い溜まり状の部分が点在する。幅0.5～0.7ｍ，深さ0.1～0.3ｍで，断面形は皿状を呈する。埋土は，11区ではシルトと細砂の互層が主体を占めるが，９区ではシルトへと変化し，砂層の堆積はみられない。流下方向や平・断面プラン，埋土の状況などから，人為的に掘削された溝とみることにはやや躊躇があり，後述するＳＤⅡ38同様，谷７最上層の流路に伴う単発的な洪水堆積の一部と考えることもできよう。

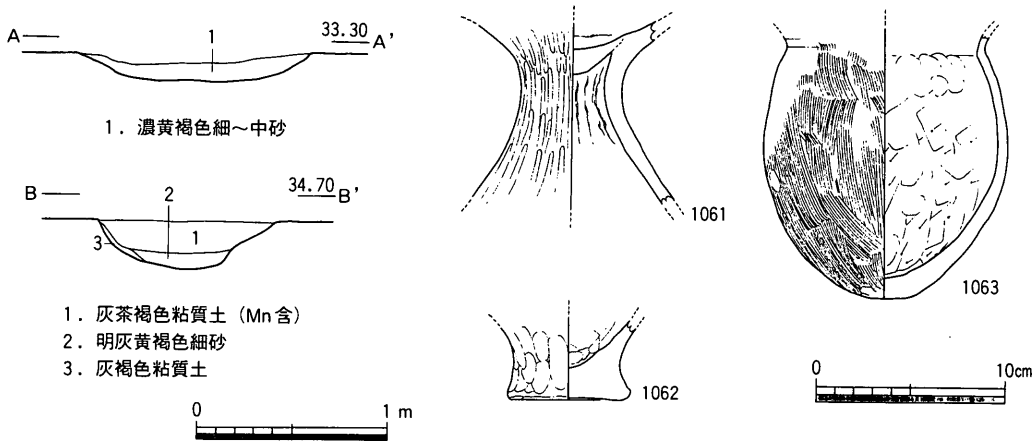


第158図　ＳＤⅡ36断面図（1/40）

遺物は，弥生土器小片が２点出土したのみである。出土遺物より遺構の時期を特定することは困難であるが，当該時期を大きく遡ることはない。

ＳＤⅡ38（第159図）

11区から10区東端にかけて検出された溝状遺構である。いずれも谷７上層を掘り込み，ＳＤⅡ12より先行する。ほぼ直線状に11区から10ｂ区を流下し，北端部10ａ区ＳＢⅡ40西側で，くの字状に屈曲して建物を迂回するように配される。調査時にはＳＢⅡ40との関連を考えたが，出土遺物や埋土の特徴から，同時期とするにはやや困難と判断した。10ａ区で幅1.2ｍ前後，深さ0.15ｍ前後で，底面の標高33.0～33.2ｍ，10ｂ区で幅3.0ｍ程度，深さ0.5ｍ，底面の標高33.4～33.7ｍ，11区で幅0.9ｍ前後，深さ0.25ｍ，底面の標高34.3



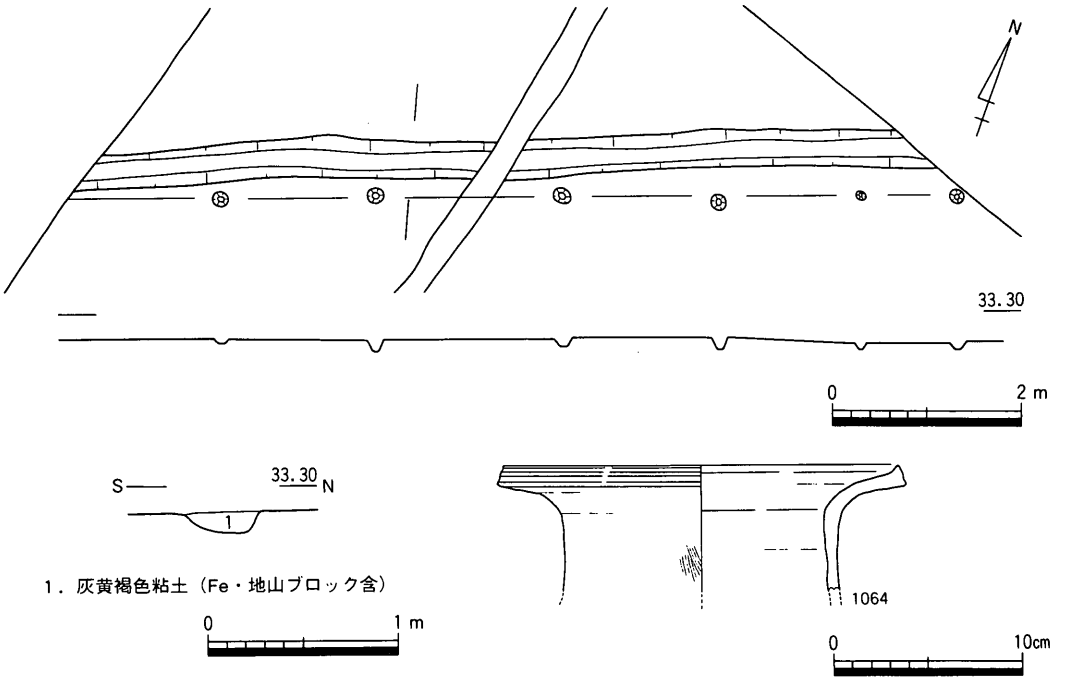
第159図　ＳＤⅡ38断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

～34.5mを測り，ややきつく北に流下する。10ａ区北半部では，底面の標高は33.2m前後で一定し，徐々に浅くなり途切れる。埋土は，基本的に３層に細分され，10ｂ区では拳大程度の礫を含む褐色系砂礫層が上面を覆う。10ａ区北半部では礫の混入はなくなり黄褐色系細～中砂の単層へと変化し，11区では同質の砂層が底面に堆積するなど，地点によって埋土は大きく異なり，安定した堆積状況を示さない。流下方向や平・断面プランなどからも，人為的に掘削された溝とするにはやや躊躇があり，先に谷７において詳述した単発的な洪水堆積の一部とみるべきかも知れない。

遺物は，10ａ区で土器細片３点，11ｂ区で器種が判断できないほど小片化した弥生土器や土師器片が20～30点が出土したのみである。この内３点を図示した。いずれも11ｂ区より出土した弥生土器で，谷７中・上層からの混入と考えられる。1061は高坏脚部。後述する1062と共に弥生時代中期に遡る。外面は辛うじてミガキ調整を認める。坏部との接合はおそらく充塡法による。1062は底部片。強く突出した平底を呈し，甕底部となろう。1063は終末期に下る甕体部片である。底部はやや厚めの鈍い平底を呈する。

ＳＤⅡ42・ＳＡⅡ01（第160図）

10ａ区北西隅部で検出された柵列を伴う溝状遺構である。ＳＤⅡ42は，東西に配された直線溝で，両端は調査区外に延び，延長8.8mを検出しえたに過ぎない。ＳＤⅡ44より先行する。溝は，幅0.4m，深さ0.1mで，断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は，灰黄褐色粘土の単層である。流路方向はN68.5°Ｅ，底面の標高は，西端で33.06m，東端で33.03mとほぼ一定し，明確な流下方向は特定できなかった。



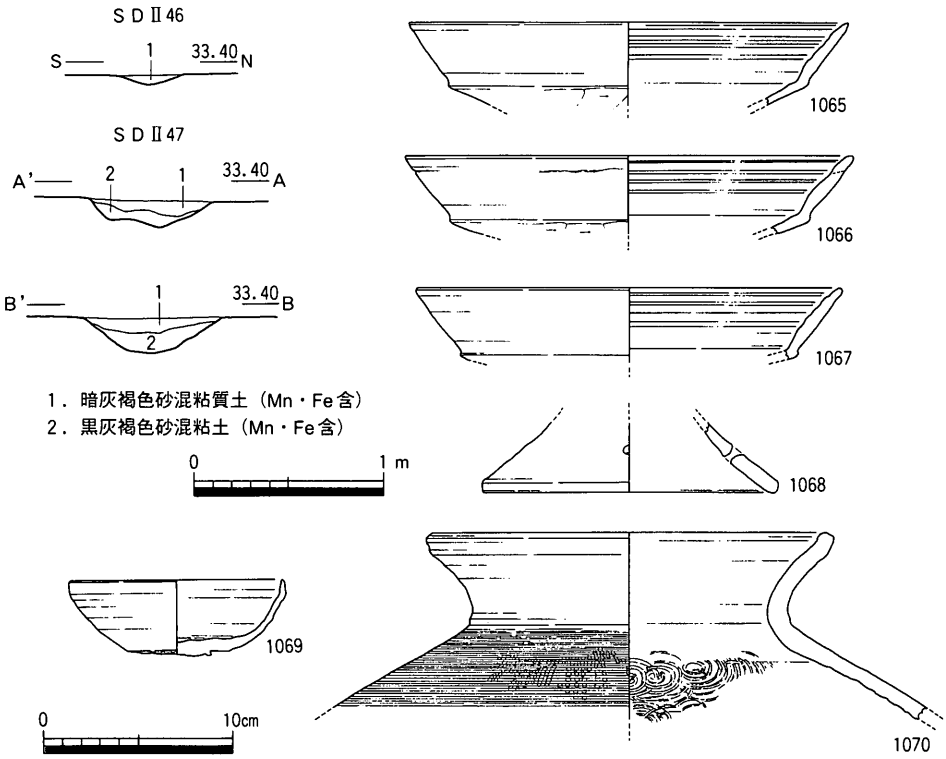
第160図　ＳＤⅡ42・ＳＡⅡ01平・断面図（１/80・１/40），出土遺物実測図（１/４）

柵列ＳＡⅡ01は，ＳＤⅡ42より南に0.1～0.2m離れて平行して検出した。調査区内で，方向を等しくする他の遺構は存在せず，溝に近接することから，ＳＤⅡ42と有機的な関連を想定しうるものと判断した。柱穴は５間（7.8m）分検出され，東西両端は調査区外へ延長する。柱穴は，径0.1～0.2mの略円形を呈し，残存深は0.05m前後と極めて浅い。底面の標高は33.10～33.15mと概ね一定するが，柱間間隔は1.0～1.95mと揃っていない。

遺物は，ＳＤⅡ42より弥生土器小片が数点出土したのみである。溝の時期を直接示すものではないが，弥生土器広口壺１点（1064）を図示した。本来的には，谷７西岸の第２面包含層に伴う遺物と考えられる。上方拡張した口縁端部に鈍い凹線文を多用した，終末期の東四国通有の広口タイプの壺である。後述する幹線水路ＳＤⅡ71とほぼ直交する位置関係にある点を重視して，８世紀後半代以降に位置付けられると考えるが，細かな時期を特定するまでには至らない。

ＳＤⅡ46・47（第161図）

10区の谷７上面から西岸の包含層Ⅲ層上面にかけて，谷西側の丘陵Ｅ縁辺に沿って緩やかに孤を描くように検出された溝状遺構である。10ａ区西端付近で，南にＳＤⅡ46が分岐して西流する。中世溝ＳＤⅡ12・43・48より先行する。10ｂ区南壁での土層観察では，本



第161図　ＳＤⅡ46・47断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

溝埋土は谷７最上層の洪水堆積に連続する堆積として捉えられ，人為的な溝状遺構である可能性は乏しい。しかし，後述する本溝埋土には，洪水堆積を示す証左は得られず，本水路の位置付けを困難にしている。10ｂ区谷７西岸部を緩やかに孤を描いて北流し，10ａ区では大きく屈曲して北西方向に流下する。ＳＤⅡ47は，幅0.7～1.6m，深さ0.2～0.3mであり，断面形は逆台形ないしは皿状を呈する。埋土は灰褐色系の粘質土であり，10ａ区では２層に細分されたが基本的に大差はない。底面の標高は，10ｂ区南端で33.50m，10ａ区で33.15m前後を測り，緩やかに北西方向に流下する。

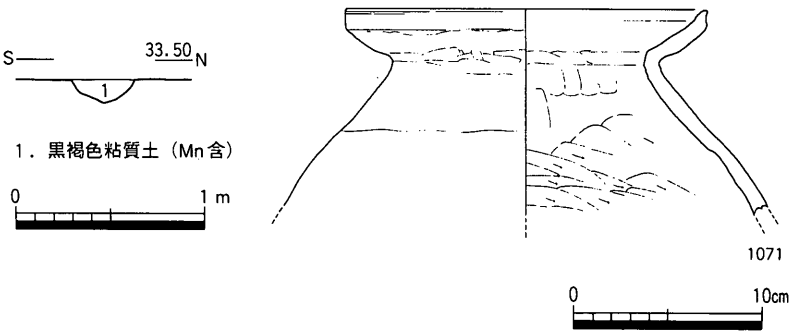
ＳＤⅡ46は，幅0.3m前後，深さ0.05m程であり，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は，ＳＤⅡ47上位層と同質の粘質土が堆積する。底面の標高は，33.28m前後とＳＤⅡ47上位層底面のレベル値と概ね一致する。

遺物は，弥生土器甕・高坏，須恵器坏等の小片が若干量出土したのみである。出土遺物は，谷７埋土中に本来包含されていたものと考えられるものが大半を占める。参考までに６点の遺物を図示した。1065～1068は10ａ区より出土した弥生時代終末期の高坏である。いずれも下川津Ｂ類土器と考えるが，1066のみ胎土中に黒雲母の含有が多く，やや異質で

ある。1069・1070は10ｂ区より出土した。1069は須恵器坏。底部は平底状を呈することから坏身として図示したが，蓋となる可能性も残る。底部外面はヘラ切り後未調整である。ＴＫ217型式期前後に位置付けられる。1070は須恵器甕。口縁端部はやや上方へ摘み上げ気味に四角く納める。坏とほぼ同時期と考えて無理はない。上記資料はいずれも土層の堆積状況から推定される時期と隔たり，本溝の埋没時期を直接示すものではない。谷７最上層堆積直後に流下・埋没した可能性を想定する。

ＳＤⅡ45（第162図）

10区西半，谷７及び10ａ区第２面包含層上面で検出された溝である。切り合い関係よりＳＤⅡ47より先行する。流路方向や検出位置は上記ＳＤⅡ47とほぼ重複し，また10ｂ区南壁での土層堆積状況も同様に谷７最上層に連続する洪水堆積の様相を呈しており，ＳＤⅡ47と近似した性格を付与することができよう。溝は，幅0.3～1.6m，深さ0.1～0.6mであり，断面形は比較的整った逆台形ないしは皿状を呈する。遺構面の削平深度の深い10ａ区では，辛うじて溝底部分が確認されたに過ぎない。埋土は褐色系粘土が堆積し，底面の標高は，10ｂ区南端で33.40m，10ａ区で33.25mを測り，緩やかに北西流する。



第162図　ＳＤⅡ45断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

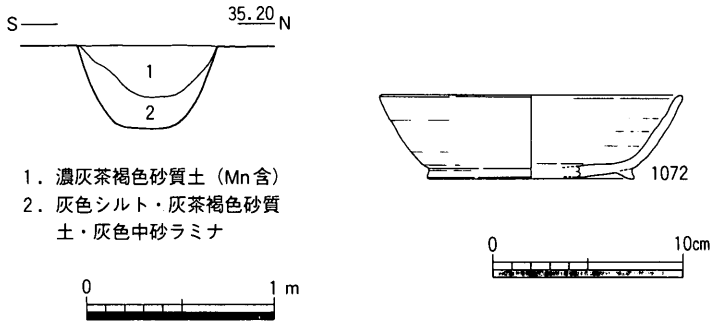
遺物は図示したものの他，古式土師器等の小片20点程度が出土した。本溝の遺物も，谷７埋土中に本来包含されていたものが多く混在する。直接的に本溝の埋没時期を示すものではないが，参考までに１点のみ図示した。1071は，弥生時代終末期に位置付けられる広口壺。内傾する頸部形態の広口壺と考えるが，頸部と体部は一体化が進展し，明瞭な屈曲を喪失している。

ＳＤⅡ59（第163図）

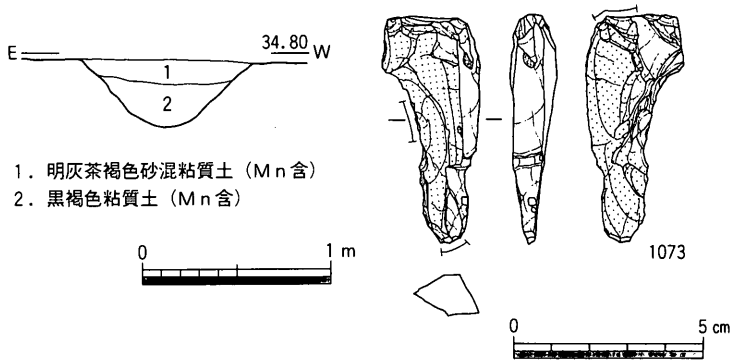
11区南東隅谷７上面で検出した溝である。調査区南東隅を僅かに弧を描くように東西に配される。延長4.3m程度が検出されたに過ぎない。幅0.7～0.9m，深さ0.45m前後，流路方向は概ねN78°Ｗを測る小溝である。断面形は壁面が直に近く掘り込まれた逆台形状

を呈する。底面の標高は34.65m前後で一定する。埋土は2層に細分され，下位層はシルト～中砂の互層が堆積する。

遺物は1点のみ図示した。1072は須恵器坏。口縁部はやや内湾気味に外傾して開く。底部は外方へ踏ん張る低い高台を付す。8世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。



第163図　ＳＤⅡ59断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）



第164図　ＳＤⅡ61断面図（1/40），出土遺物実測図（1/2）

ＳＤⅡ61（第164図）

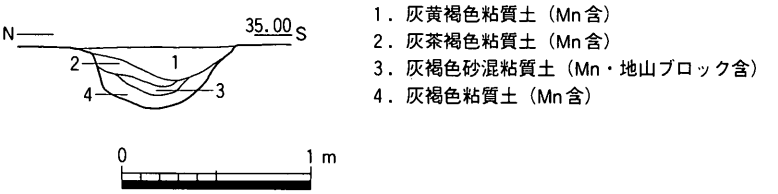
11区東部谷7上面を，緩やかに孤を描きながら北東流する流路である。谷7最上層埋没後に開削される。幅0.5～1.0m，深さ0.4mで，断面形は緩やかに掘り込まれたU字状を呈する。底面の標高は，南端で34.8m，北端で34.3mを測り，僅かに蛇行しながら，N55°E方向に流下する。埋土は，2層に細分された。褐色系粘質土が堆積し，砂層の堆積は認められない。流路方向をほぼ等しくするＳＤⅡ36とは，埋土が大きく異なり，ＳＤⅡ58との関係からも，両者に有機的関係を想定することは困難であろう。

遺物は，想定される遺構の時期を直接示すものではないが，参考までに石器1点を図示しておく。1073はサヌカイト製で，上・下縁と側縁の一部に潰し加工を認めることから楔形石器と考える。

ＳＤⅡ64（第165図）

11区中央南半で検出された東西溝である。ＳＤⅡ65の北側にほぼ並行して配される。西端はＳＤⅡ71上層によって削平され，延長方向は不明である。後述するＳＤⅡ69に繋がる可能性も考えられたが，上面の削平により確認できなかった。現状から，ＳＤⅡ71より分岐して東へ流下する支流の一つと捉えておきたい。なお，明確な切り合い関係を確認しな

いまま谷７最上層より先行すると判断して調査を進めたが，ＳＤⅡ71との関係を考慮すれば，最上層堆積より後出する可能性が高く，本溝の明確な位置付けを行うことはできない。溝は幅0.7～0.8m，深さ0.35mを測り，断面形は概ね逆台形状を呈する。底面の標高は，34.60m前後である。検出長が短いため流下方向は判断できない。埋土は４層に細分された。中位層（第165図３層）には，地山粘土のブロック土が混在するが，人為的な埋め戻しを想定するものではない。上位層（同図１層）は，溝幅を大きく広げて，中位層を掘り込んで堆積しており，改修後の堆積層と考えられる。

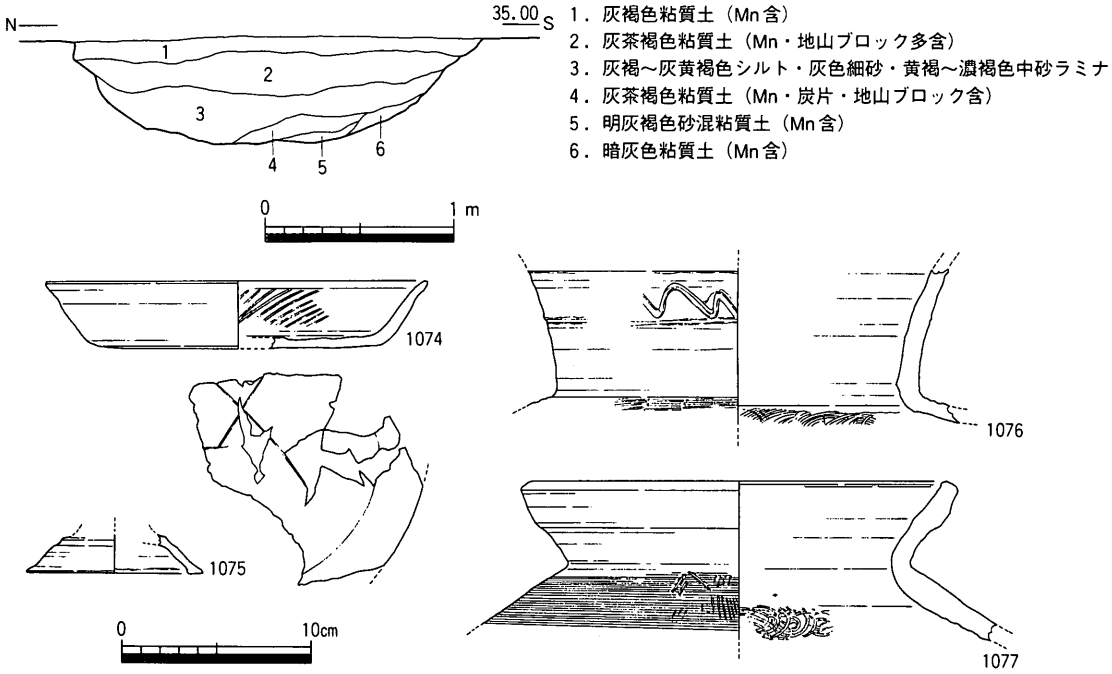


第165図　ＳＤⅡ64断面図（１/40）

遺物は，想定される遺構の時期を直接示すものではないが，弥生土器広口壺口縁部や須恵器高坏脚端部，土師器等の小片が極少量出土している。遺構の時期は，ＳＤⅡ65との位置関係を重視して，近接した時期を想定しておく。

ＳＤⅡ65（第166図）

11区中央南端で検出された，平面逆Ｌ字状に配された溝状遺構である。上記ＳＤⅡ64と同様な理由から，谷７最上層との関係については捉えられず，本溝の明確な位置付けを得るまでには至らなかった。なお，流路方向や規模等の点からＳＤⅡ57に繋がる可能性が想定される。溝西半部は，ＳＤⅡ71上層より先行し，ＳＤⅡ71東岸のテラス部で大きく屈曲して南へ折れる溝底面を僅かに確認した。南端は調査区外へ延長する。なお，調査区南端でＳＤⅡ71上層によって大きく削平され，中・下層との対応は捉えられなかった。しかし，位置関係よりＳＤⅡ71より分岐して東に流下する支流となることも想定される。後述する遺物の示す時期からすれば，ＳＤⅡ71開削時に本溝も掘削された可能性も示唆されるが確証は得られていない。流路方向は，東西溝で概ねN80～85°Wに配される。溝は幅2.0～2.2m，深さ0.5～0.6mを測り，断面形は側壁が緩やかに掘り込まれた逆台形状を呈する。底面は概ね平坦であった。東西溝での土層観察では，埋土は６層に細分された。下位３層（第166図４～６層）は，溝底南半部に斜面堆積する灰色系粘質土である。４層中には地山層のブロック土が混在し，南壁の小規模な崩落により堆積した可能性が高い。中位層（同図３層）は，灰色系シルト・中砂等の互層で，流水下の堆積が想定される。層厚0.3mと



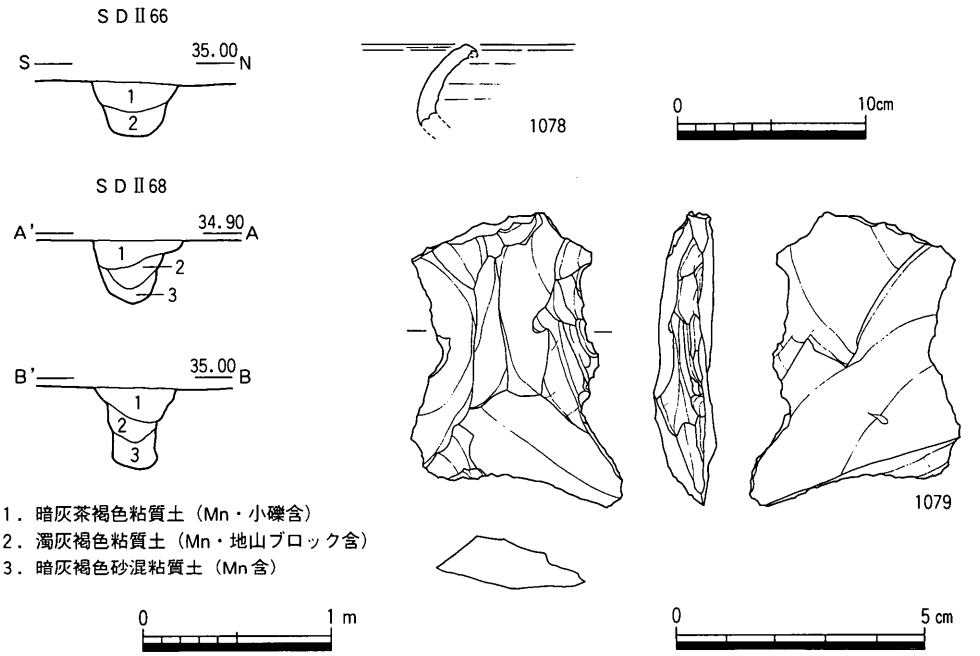
第166図　ＳＤⅡ65断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

厚く，旺盛な水流により堆積したのであろう。上位層（同図２層）は地山ブロック土を多量に含んだ褐色系粘質土である。溝上面付近まで堆積しており，人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は，４点を図示した。1074は土師器皿。内面口縁部に暗文状のミガキ調整を，外底面に「×」字のヘラ記号を認める。1075は須恵器脚台。緩やかに内湾して下り，脚端部は内外へ鈍く摘み出す。おそらく小形壺もしくは台付瑞の脚部となろう。ＴＫ43型式期に遡る。1076・1077は須恵器甕。1076は口縁部を欠損するが，頸部外面にヘラ描きの波状文を施す。また1077の肩部外面には，傘状のヘラ記号を認める。いずれも1075と大きな時期差を認めない。上記資料より1075等若干遡る遺物を含むが，1074より８世紀中葉から後半を前後する時期に位置付けられよう。

ＳＤⅡ66・68（第167図）

11区西部ＳＤⅡ71東岸を，ＳＤⅡ71とほぼ並行して北流する幹線水路の支流群と理解される。ＳＤⅡ64・65・67より後出し，ＳＤⅡ71上層堆積よりは先行する。ＳＤⅡ71との層位的な繋がりは確認できなかったが，位置関係を重視して支流群として理解する。南端はいずれも調査区外へ延長するため，幹線水路からの取水位置は，後述するＳＤⅡ67とは異



第167図　ＳＤⅡ66・68断面図（1/40），出土遺物実測図（2/3・1/4）

なり，より上流側に想定される。

ＳＤⅡ68は東側を南北流する直線溝で，幅0.4～0.5m，深さ0.3～0.4mを測る。底面の標高は，南端で34.5m，北端で34.4mとなり，緩やかに北へ流下する。断面形は，側壁が直に掘り込まれた箱状を呈するが，上位0.1m程は周壁の崩れにより擂鉢状を呈する。埋土は3層に細分された。いずれも褐色系粘質土が堆積し，水流の存在を窺わせる砂層の堆積は認められない。また，中位層のレベルで溝幅がやや広がり，下位層上面を掘り込むように堆積することから，人為的な改修が行われた可能性が想定される。さらに，中位層中には地山層のブロック土が多く混在し，人為的に埋め戻された可能性も高い。この地山ブロックの混在は，後述するＳＤⅡ66でも共通して認められ，これら2溝が同時期に埋め戻された可能性が想定される。上位層は，さらに中位層を掘り込んで堆積しており，埋め戻し後に再掘削されたものともみられる。このように，本溝は複雑に改修を繰り返して一定期間存続している。こうした改修の要因は，後述するＳＤⅡ71の改修と密接に連関するものと考えられ，谷部に設けられた潅漑水路網の維持の至難さを端的に示しているものともみられる。

ＳＤⅡ66は，調査区南端より「く」字形に屈曲しつつ約10m程北流し，緩やかに東へ屈

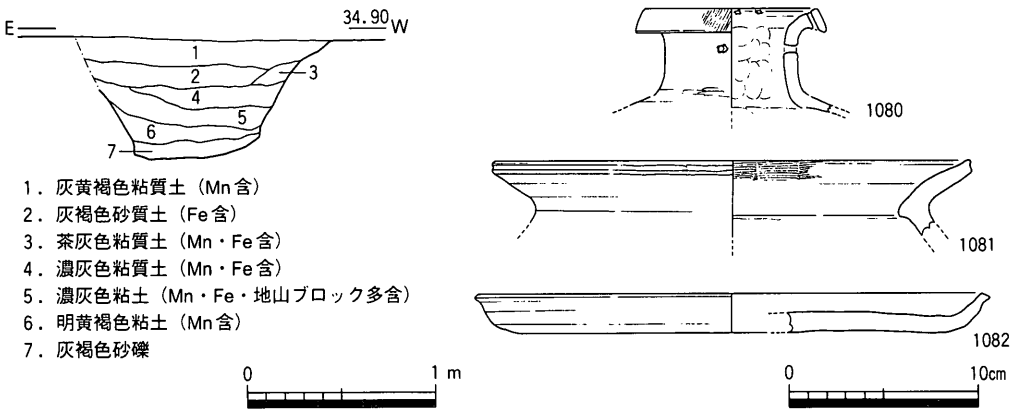
曲してＳＤⅡ68へ合流する。ＳＤⅡ71上層により，大きく上面は削平されるが，同溝東岸のテラス部で辛うじて溝底部分を確認した。溝は幅0.4～0.5m，深さ0.3m，断面形はＵ字状を呈する。埋土は２層に細分され，灰褐色系粘質土が堆積する。底面の標高や埋土の特徴から，ＳＤⅡ68上位２層に対応するものと思われ，開削時期はＳＤⅡ68の改修時期に相当するものと考えられる。

遺物は，２点を図示した。いずれもＳＤⅡ68より出土した遺物である。1078は須恵器甕口縁部小片。口縁部は緩やかに外反して開き，端部を小さく外方へ引き出す。８世紀代に下る。1079はサヌカイト製の剥片。表面は白色風化が進展しており，旧石器時代に遡る。

ＳＤⅡ67（第168図）

11区西部で検出した，幹線水路ＳＤⅡ71より東に分岐し，北にほぼ並走する支流と理解される溝状遺構である。同様な性格を有する支流群ＳＤⅡ68・69より先行する。ＳＤⅡ71上層堆積よりは先行し，同層下面のテラス部の地山層上面で延長部分を辛うじて確認した。前記ＳＤⅡ65同様層位的な繋がりは確認できなかったが，ＳＤⅡ71中層以前の流路と併存すると考える。なお，分岐部でＳＤⅡ67へ揚水するための水利施設等は認められなかった。ＳＤⅡ71より分岐して東へ約3.5m程延び，強く北へ屈曲してほぼ直線状に北西方向に流下する。南北溝の流路方向はＮ25°Ｗである。屈曲部東壁は緩やかに掘り込まれて，大きく東へ張り出す。おそらくは流下する水流が直接壁面に当たり，壁面が洗われ浸食されたのであろう。活発な水流の証左は，後述する土層堆積によく示される。溝は南北溝部分で幅0.8～3.5m，深さ0.4～0.7mを測り，北端部は上面の削平により規模を大きく減じる。上位0.1～0.2mは緩やかな断面擂鉢状を呈し，それより下位は直に近く掘り込まる。底面は，幅0.6m前後の平坦面をなす。本来的には，断面形は箱状を呈していたと想像され，壁面の崩落により溝上面幅を広げたものと考えられる。土層の堆積状況もそうした傾向を示し，中位層（第168図３～５層）は東西側壁より溝心部へ向けて緩やかに傾斜して堆積し，５層中には側壁の崩落に伴うとみられる地山粘土のブロック土を混在する。なお，溝底には小礫を顕著に含む砂礫土が厚0.1m程堆積し，旺盛な水流のあったことが想像される。溝廃絶後は，上記したように，側壁の崩落を伴いながら穏やかに埋没していったものと考えられる。

遺物は３点を図示した。1080は弥生時代中期に遡る壺口頸部。本溝の時期を直接示すものではないが参考までに掲載した。口縁部に２孔，頸部に１孔の小円孔を穿つ。1081は土師器甕。口縁部は強く外反して開き，端部を小さく上方へ摘み上げる。また，頸部内面は



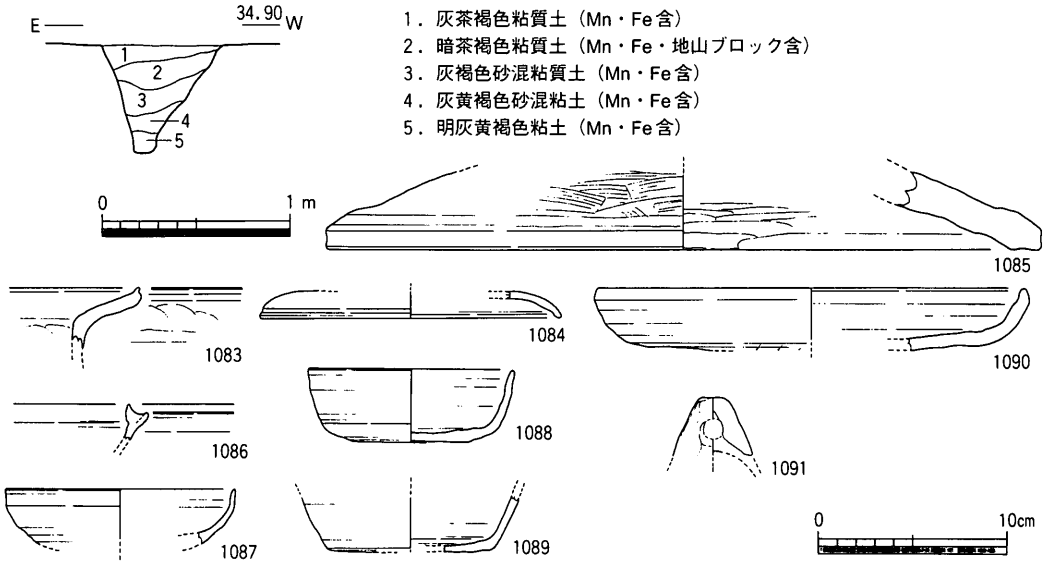
第168図　ＳＤⅡ67断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

鈍く内側へ突出する。７世紀中葉前後の土師器甕に類似形態を認めるが，小片のため時期を特定するまでには至らない。1082は須恵器皿。本溝の時期を直接示すと考える。口縁部は緩やかに外反気味に開き，端部を外方へ小さく摘み出す。８世紀後半代に下る。

ＳＤⅡ69（第169図）

11区西半部ＳＤⅡ71東岸付近で検出された直線溝である。北端は調査区外へ延長し，南端はＳＤⅡ71上層に削平され，延長は判然としない。前記ＳＤⅡ64に繋がる可能性も考えられたが，上面の削平等によって確認はできなかった。流路方向N20～23°Wに配され，概ねＳＤⅡ67・68・71と並行する。流路方向や位置関係より，ＳＤⅡ71東岸支流群の一つと判断した。なお，ＳＤⅡ64とは内角約122°でもって斜交する。溝は幅0.6m，深さ0.55mで，底幅は僅かに0.1m程しかなく，断面形はＶ字状に近い。底面の標高は，南端で34.5m，北端で34.1mとなり，底面の高低差からすれば緩やかに北流する。埋土は５層に細分された。いずれも灰褐色系の粘土及び粘質土であり，ほぼ水平に堆積する。上位層（第169図２層）は，地山粘土のブロック土を多量に含み，人為的に埋め戻された可能性が考えられる。この点は，上記支流群と共通し，おそらくは幹線水路の溝底レベルの上下によって，頻繁に支流の付け替えや変更が行われたことを推測させる。

遺物はやや多く，９点を図示した。1083は土師器甕口縁部小片。口縁端部は上方へ摘み上げ，端面は鈍く凹線状に窪む。1084は土師器蓋。皿の可能性も考えられるが，極めて浅い器形となるためやや難があり，蓋として図示した。口縁端部内面は鈍く段状に窪み，外面には１条の沈線を認める。７世紀後半から末前後に位置付けられる。1085は土師器蓋としたが，類例に乏しく器種は不明。胎土中には砂粒を多量に含み粗い。外面は概ね平滑に

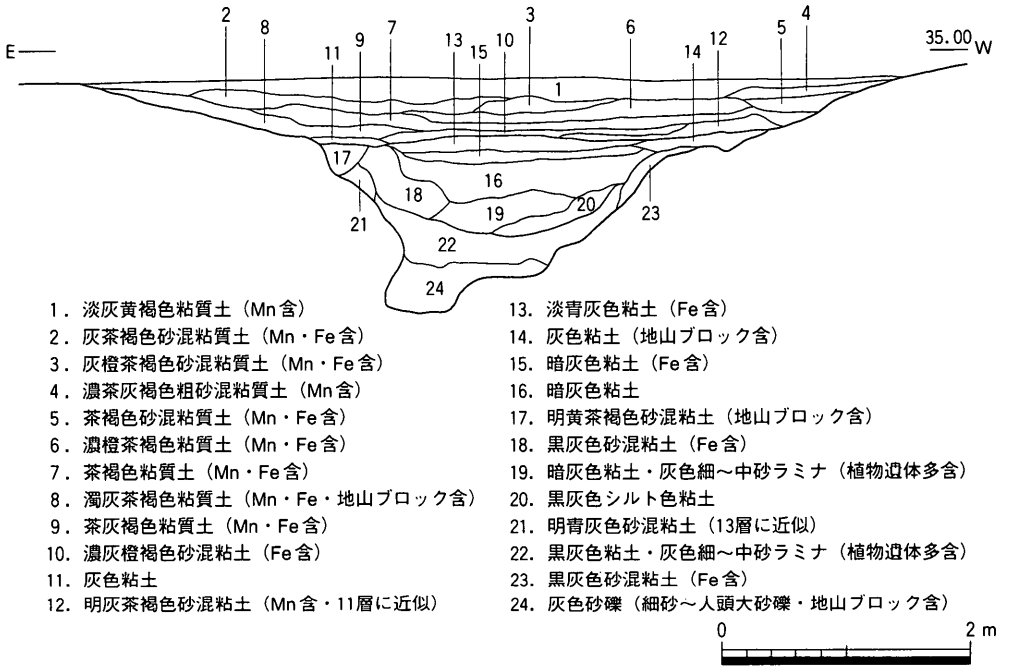


第169図　ＳＤⅡ69断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

仕上げられるが，内面はナデによる凹凸が顕著に残される。端部は四角く納め，端面は凹線状に鈍く窪む。1086～1089は須恵器坏。1086は口縁部にカエリを有するタイプで，坏身として図示したが小片のため蓋となる可能性も残る。1087も底部の器壁が厚いため坏身としたが，蓋となる可能性も残る。以上２点はＴＫ217型式期前後に位置付けられよう。1088の外底面は回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整を加える。上記２点よりは若干後出し，1084とほぼ同時期と考えられる。1089はより後出する形態で，８世紀代に下る。1090は須恵器皿。底部側縁は面取り状のケズリ調整及びナデ調整が施された後，回転台より外されて外底面に一定方向のケズリ調整を加える。調整手法としては一般的なものではない。８世紀後半から９世紀初頭に位置付けられる。1091は釣鐘形の蛸壺頂部小片。径６㎜程度の円孔を穿つ。上記資料より本溝は，９世紀初頭を中心とした時期に位置付けられると考えられ，後述する幹線水路の開削時期に近接して掘削された可能性がある。

ＳＤⅡ71（第170～173図）

11区西端，丘陵Ｅ東縁の傾斜変換点付近をほぼコンターラインに沿って，やや蛇行しながら北流する流路である。後述する規模や形状，及び継続期間より幹線水路として位置付けられる。南北両端は調査区外へ延長する。南端より北へ約８ｍの位置で西へクランク状に屈曲し，より以北はやや蛇行しながらＮ15～19°Ｗの方向へ延びる。底面の標高は，南端で33.4ｍ，北端で32.8ｍとなり，底面の標高差から緩やかに北へ流下すると考える。幅

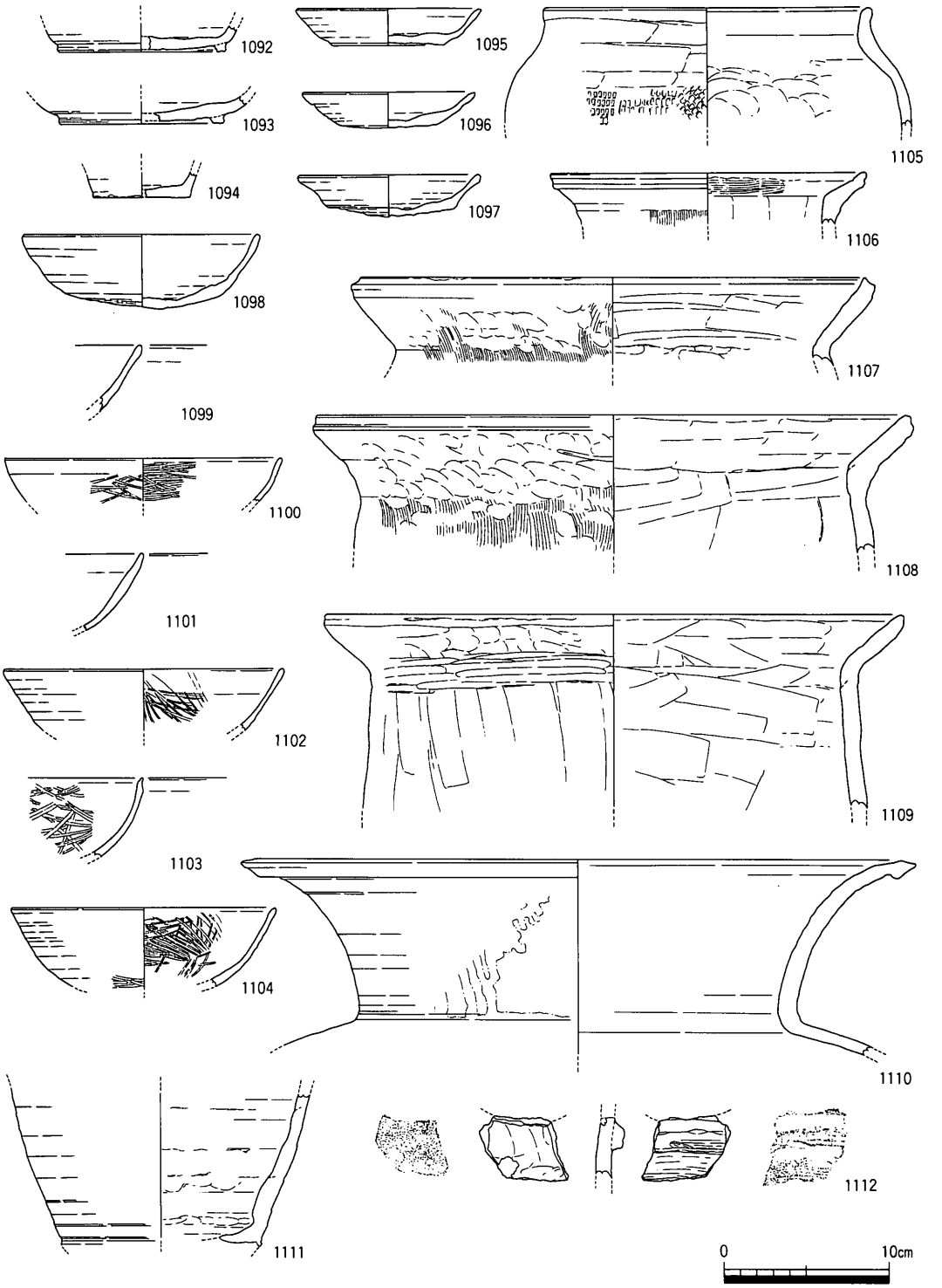


第170図　ＳＤⅡ71断面図（1/60）

7～11m，深さ1.5～1.9mを測る大型の幹線水路である。断面形は，上位0.4m程はテラス状を呈して緩やかに落ち込み，それより下位はやや強く掘り込まれて，上面幅2.8m程のいびつな逆台形状を呈する。埋土の堆積状況もこの断面形に概ね合致し，テラス部より上位には上層が，下位には中・下層が堆積する。下層（第170図22～24層）は，溝底面で確認された灰色系の砂礫層及び粘土と砂層の互層である。特に下位層は，強い水流による堆積と想像され，人頭大の礫や溝底面が削られ再堆積した地山ブロックを多く含み，溝底面は小溝状の掘り込みが顕著で起伏に富む。下層上位の互層は，溝底面より0.9m前後の位置まで達し厚く堆積しており，比較的短期間に溝の埋没が進行したことが想像される。本層内には，多数の植物遺体と共に，若干量の木製品が出土している。なお，溝両肩部には，地山層の崩落に起因すると考えられる斜面堆積層（同図21・23層）がみえ，掘り方上面の浸食も早くから進行していたことが想定される。中層（同図13～20層）は，下層上面を大きく掘り込むように堆積する粘土及び砂層である。溝中央下位には，灰色系粘土と中砂の互層がレンズ状に堆積し，上位は灰色系粘土が水平堆積する。形状より，下層堆積後の人為的な掘り込みの可能性が窺え，いわゆる溝さらいが行われたものと推測する。下位と上位の堆積状況は大きく相違し，下位層堆積後さらに人為的な改修の可能性を想定する

ことも可能であろう。また，上位層はもはや顕著な水流の可能性は窺えず，湿地状を呈して穏やかに埋没したことが想像される。こうして本溝は，数度の改修を経ながらも，下層堆積後は比較的短期間に埋没が進行したものと考えておく。なお，中・下層は調査時には明確に両層を分けることができず，一括して遺物の取り上げを行った。したがって，土層の堆積から窺われた細かな改修の時期を，遺物の面から特定することはできなかった。上層は，12層程度に細分された粘土及び粘質土によって構成される水平堆積層である。水流を伴った砂層の堆積は基本的には認められず，溝廃絶後の浅い窪地部分に埋積する自然堆積層と考えられる。

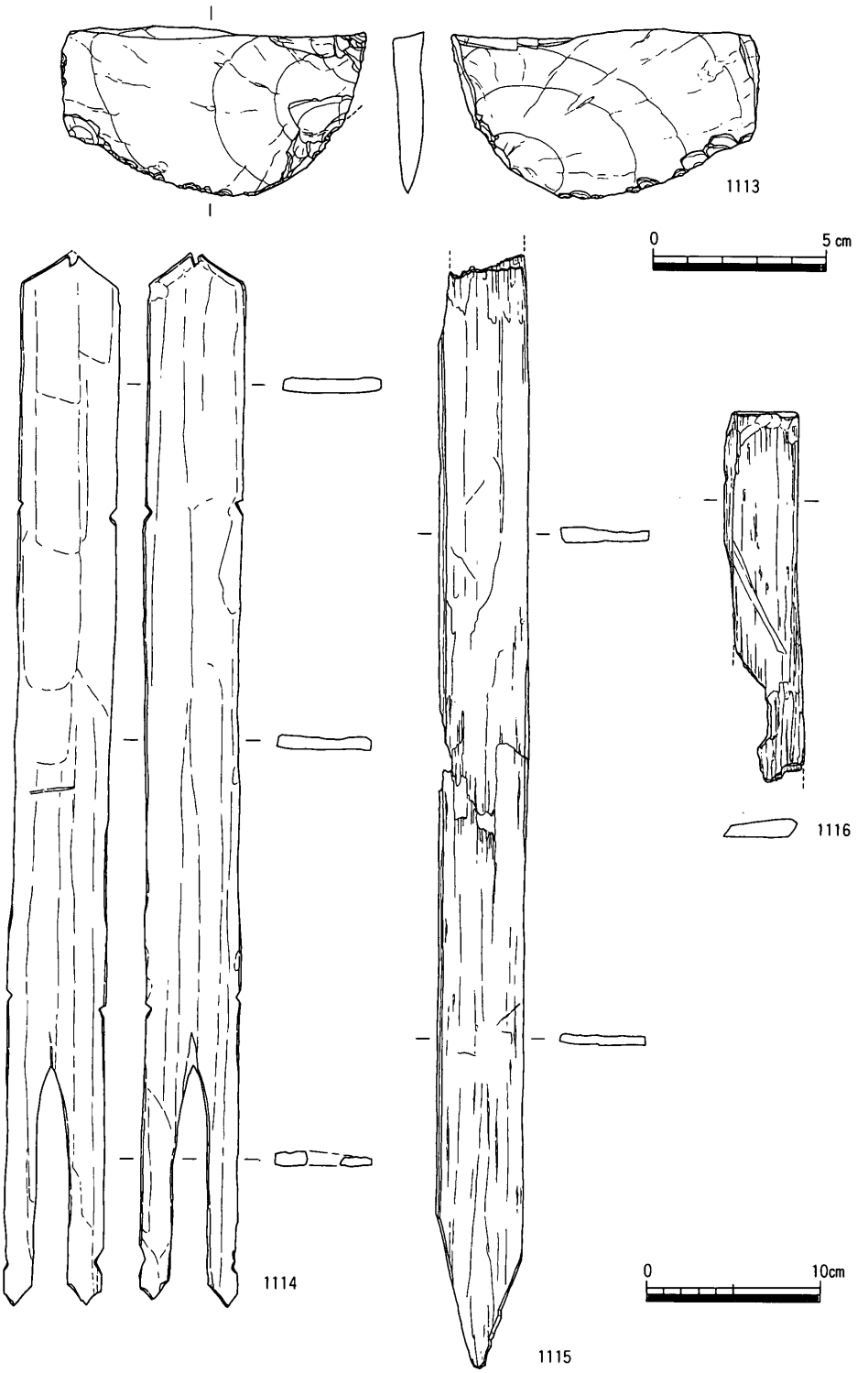
遺物はコンテナ4箱程度出土している。内41点を選んで図示した。1092～1116は下層出土の遺物である。上記したように調査時には中層と区別せずに遺物を取り上げたため，中層の遺物が若干混在する。確実に下層より出土したものは，1092～1095・1098・1101～1106・1108・1110・1114・1115・1116の16点である。ここでは一括して下層出土の遺物として報告する。1092・1093は須恵器坏。外底面には断面矩形の低い高台を付す。8世紀代に位置付けられると考える。1094は須恵器底部。小形の壺底部となると思われる。外底面は回転ヘラ切り後ナデ調整される。9世紀代に下るか。1095～1097は土師器皿。いずれも外底面は回転ヘラ切り調整される。器高は浅く，11世紀代前半代に位置付けられる。1098は土師質土器坏。本例も回転台との切り離しは回転ヘラ切りによる。皿よりは若干後出する可能性があり，12世紀前半代に位置付けておきたい。なお胎土中には火山ガラスを多量に含み，搬入品の可能性がある。1099も口縁部外面に碗に特徴的なヨコナデによる段を認めないことから土師質土器坏と考える。1100～1104は黒色土器碗である。器表面のローリングの顕著な1101を除いて，内面には特徴的なミガキ調整を認める。1100はミガキ調整が他と比較して密で，器形も浅く最も先行すると考えられ，11世紀代に遡る。他はいずれも12世紀前半代に位置付けられると考える。1105は瓦質土器の壺としたが，イレギュラーな形態であり不明。体部外面には格子目タタキ痕が，内面には円形の当て具痕を認める。1106～1109は土師器甕。口縁部が短く，頸部の屈曲が強い1106が最も後出し10～11世紀代に下る。それ以外は，8世紀から9世紀前半代に位置付けられると考える。口縁端部を小さく摘み上げる1107が若干先行し，四角く納めるのみで全体的にややだれた形態の1109が後出する可能性がある。1110は須恵器大形甕。口縁端部は矩形に肥厚させ，やや外方へ引き出す。頸部外面は自然釉が垂れる。7世紀後半から8世紀前半代に位置付けられよう。1111は須恵器底部。おそらく中形壺の底部となろう。1112は須恵質の円筒埴輪片。外面に突出



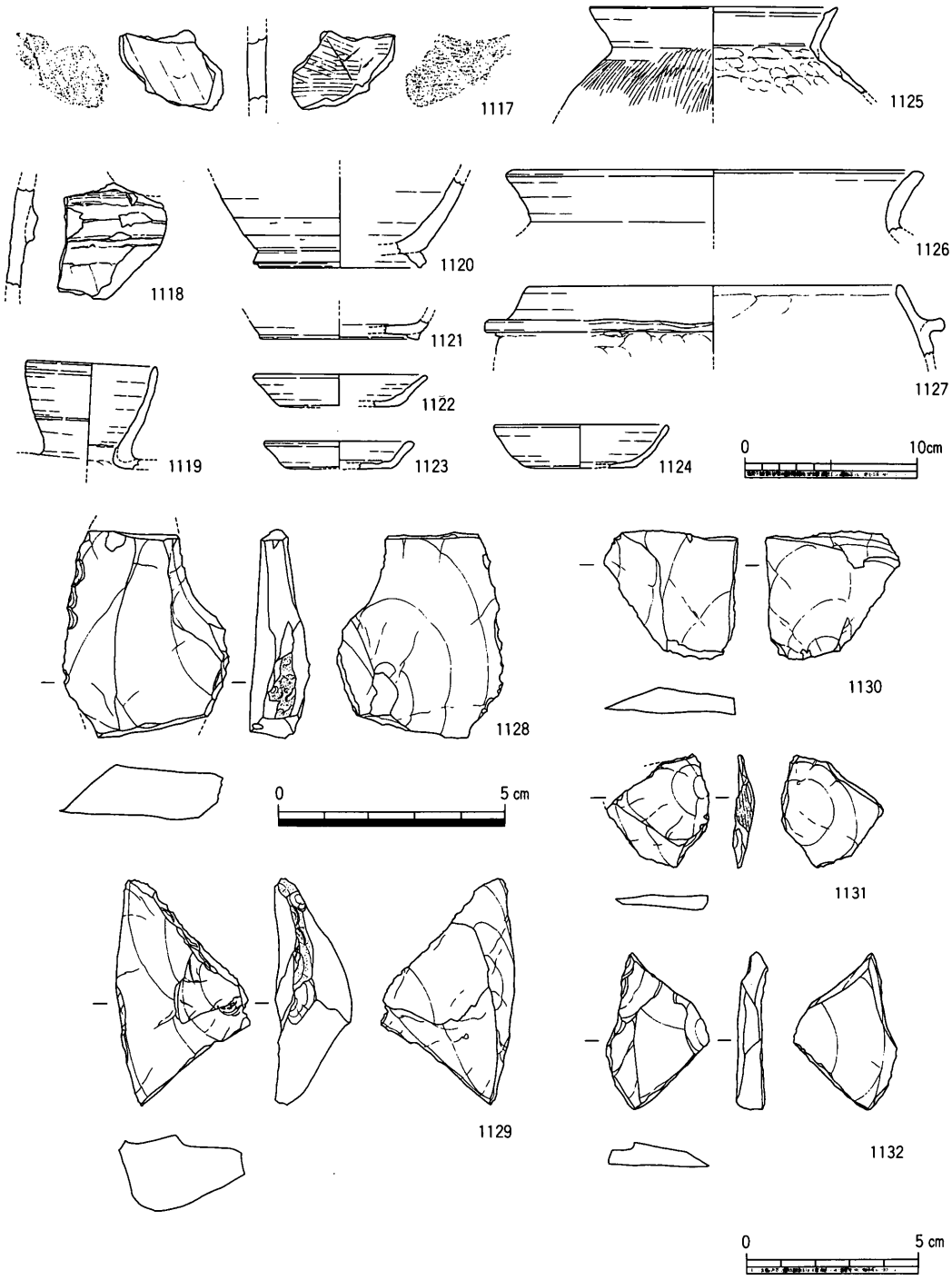
第171図　ＳＤⅡ71下層出土遺物実測図１（１/４）

度の低い断面台形の突帯が付され，上端には辛うじて円形の透し孔を認める。突帯下位は横ハケ調整を認める。古墳時代中期後半代に位置付けられる。1113はサヌカイト製のスクレイパー。下縁に僅かな剥離を認める。1114～1116は溝北半部より出土した木製品。1114は人形。幅5.6cm，長さ60.4cm，厚さ0.8cmの板材を加工する。樹種はマツ科モミ属と考えられる。肩と腰，足首は両側縁より三角形状の切り欠きを施して表現する。両脚は中央にレンズ状の切り込みを入れて表現するが，両腕は表現されない。頭部は圭頭状を呈し，両脚下端部は三角形状に尖らせる。表面には鉋痕が僅かに観察される。1115は板状の木製品。上記人形と近接して出土していること，後述する形状等から斎串と判断した。幅5.0cm，長さ63.7cm以上，厚さ0.9cmのスギの板材を加工する。下端は両側縁を削り剣先状に尖らせる。削り位置は両側縁で異なり，また粗雑で右側では段がついている。上端は欠損するが，僅かに数cmほど上端部両側縁に切り込みを認める。切り込みの位置も左右で異なり対象ではない。1116は板状の木製品。下端を欠損する。樹種はサワラ。上記資料より，人形・斎串がほぼ完形に近い状態で溝底付近より出土しており，土器類は時期幅を認めるが，8世紀後半から9世紀前半代の比重が高く，人形等の形態から想定される年代と違和感が乏しいことなどから，本溝の開削時期は9世紀前半ないしそれをやや遡る時期と考えられる。また下層中より11～12世紀代の遺物も出土しており，おそらくは溝底付近まで当該時期に改修が及んだものと考えられる。なお，下層からは上記した遺物の他に，動物遺体1点が出土しており，その同定・分析結果は第3章を参照されたい。

1117～1132は上層出土の遺物である。1117は須恵質の円筒埴輪片と考える。焼成はあまく，器表面は黄褐色を呈し土師質に近い。埴輪とは断言できないが，胎土，焼成，器表面の調整及び本溝中より他に円筒埴輪片が出土している点等から，本例も埴輪の一部として報告する。1118も須恵質の円筒埴輪片。断面M字形の低い突帯を付す。突帯上位に僅かに横ハケを認める。上記2点共1112とほぼ同時期に位置付けられる[1]。1119は須恵器平瓶の口縁部。外面中位に2条の沈線を施す。6世紀後半から7世紀中葉前後に位置付けられる。1120は須恵器底部。おそらくは長頸壺の底部となろう。外底面には外方へ踏ん張る高台を付す。7世紀代には納まるだろう。1121は須恵器坏底部。外底面には断面矩形の極めて低い高台を付す。8世紀後半から9世紀前半代に位置付けられよう。1122は土師器皿。外底面はヘラ切り調整。1095等と同様に11世紀前半代に位置付けられる。1123は西村産瓦質土器皿。本例も外底面はヘラ切り調整である。12世紀中葉から13世紀前半に位置付けられる。1124は土師質土器皿。外底面はヘラ切り調整。14世紀前半代に下る。1125は土師器甕。布



第172図　ＳＤⅡ71下層出土遺物実測図２（１/２・１/４）



第173図　ＳＤⅡ71上層出土遺物実測図（1/4・2/3・1/2）

留系の甕。口縁端部は内側に鈍く瘤状に隆起する。6世紀代まで下るかどうかは疑問。1126は須恵器甕口縁部。端部は四角く納め，内側に小さく突出する。6～7世紀代に遡る。1127は土師質土器足釜。口縁部は内傾し，端部は丸く納めるのみ。14世紀中葉前後に下り，1124とほぼ同時期と考える。1128～1132はサヌカイト製の剥片。1128の側縁の一部に2次加工痕を認める。なお1128のみ旧石器時代に遡る可能性がある。上記資料より，少なくとも14世紀中葉前後には確実に溝としての機能を停止し，埋没が完了しつつあったと考えられる。上記下層出土資料中に13世紀代に下るものが出土していないため，13世紀代から14世紀前半にかけての様相は今一つ不明瞭だが，基本的には中層堆積時には，徐々にその機能が衰退していたことは明らかであり，中層の堆積が完了する12世紀後半から末頃には自然地形の窪地状を呈し，もはや別系統の潅漑体系に移行されていたものと考える。

本文註

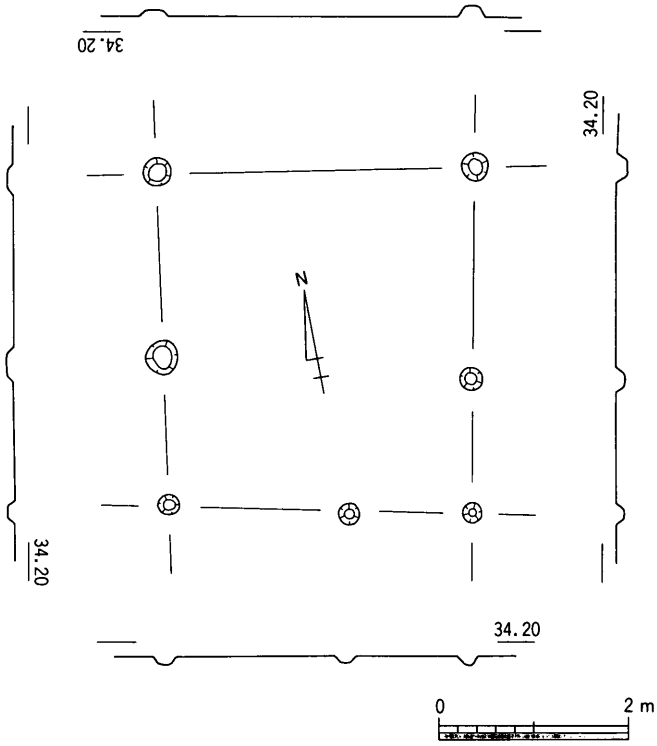
(1) 本遺跡西半部5区の調査によって，当該時期の円筒埴輪を伴った古墳2基が調査されている（大久保1996）ことも，傍証の一つとなろう。

第４節　中世の遺構・遺物

掘立柱建物

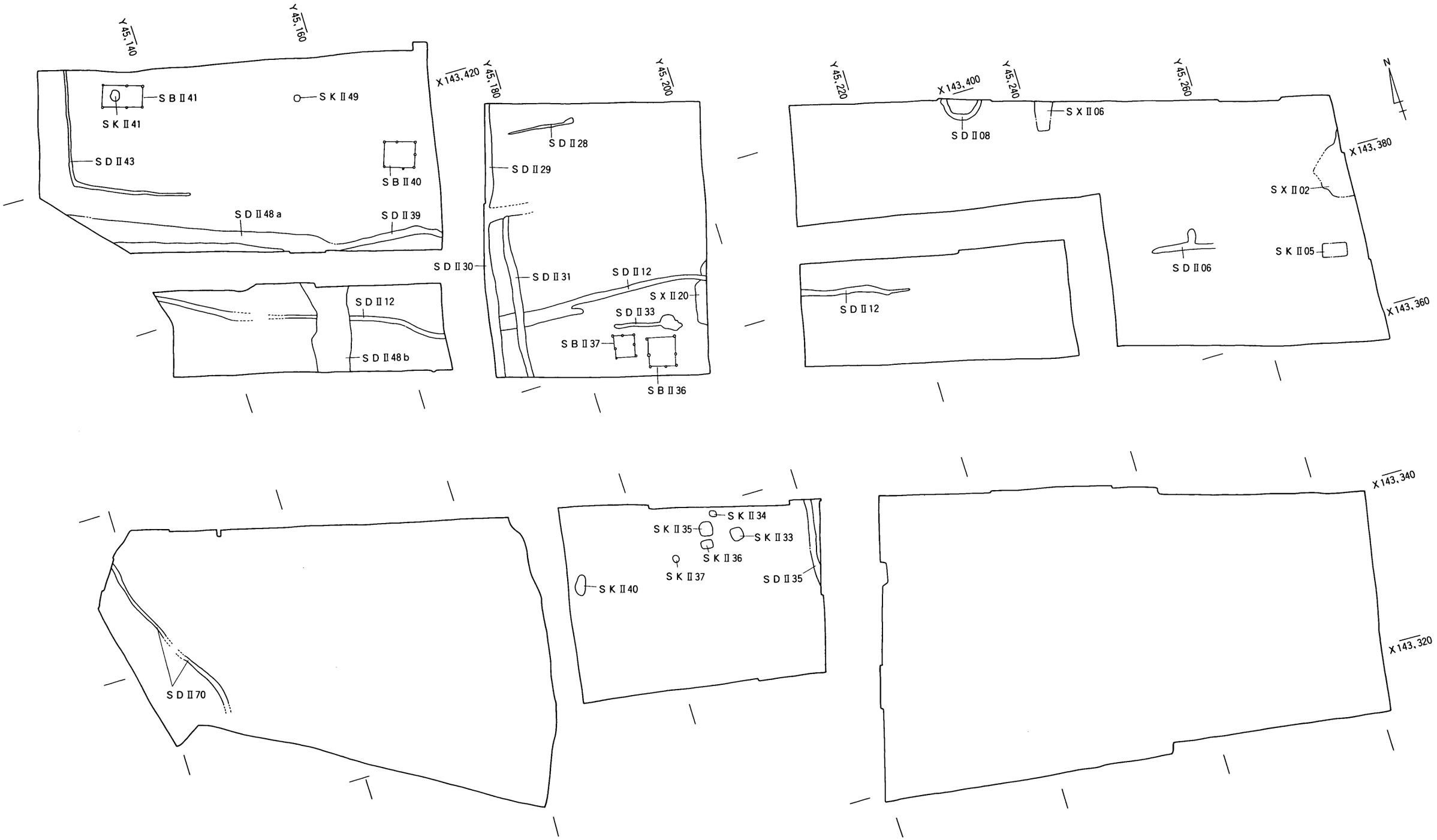
ＳＢⅡ36（第175図）

８区南東部で検出された南北棟建物である。北列中央穴を欠く。桁行２間（3.6m），梁間２間（3.3m），主軸方向N11.4°Ｅ，床面積12.2m²の側柱建物に復元される。建物方向は，後述するＳＢⅡ37・40・41と共に概ね現状の地割りの方向と一致する。柱穴の掘り方は，径0.3m前後の略円形を呈し，残存深は0.1m程度と極めて浅く，顕著な削平を蒙っているようである。柱穴底面の標高は，33.96m前後で一定する。桁方向の柱間間隔は，1.5～2.2mと揃わず，また柱通りも整っていない。柱穴埋土は灰褐色系粘質土であった。



第174図　ＳＢⅡ36平・断面図（1/80）

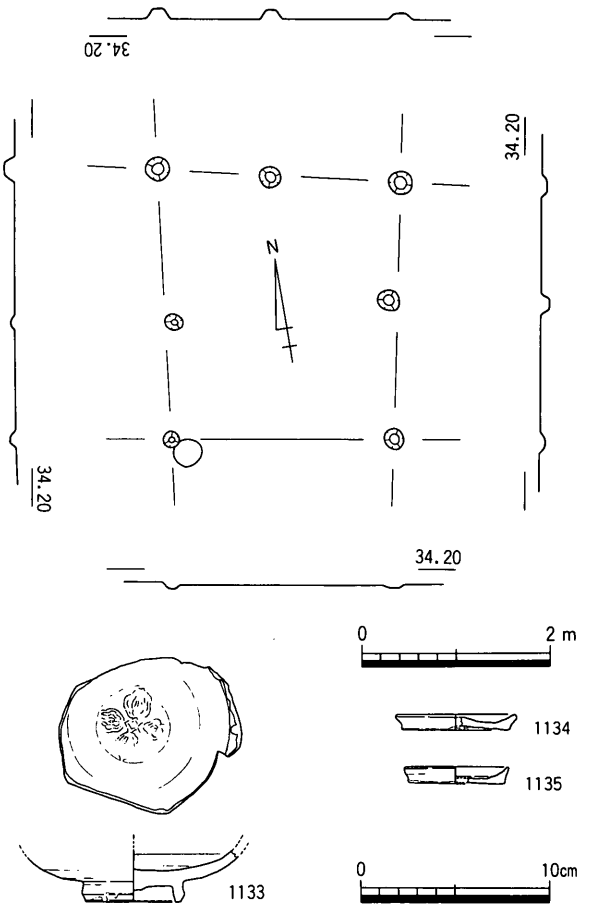
遺物は，北東隅の柱穴より土師質土器坏または皿の小片が微量出土したのみである。出土遺物から建物の時期を特定することは困難だが，後述するＳＢⅡ37との関係や主軸の方向などから，当該時期に位置付けられるものと判断した。



第175図　中世主要遺構分布図（1/500）

ＳＢⅡ37（第176図）

８区南東部で検出された南北棟建物である。南列中央穴を欠く。桁行２間（2.8m），梁間２間（2.5m），主軸方向N9.1°Ｅ，床面積7.0m²の小規模な側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.2～0.3mの略円形を呈し，残存深は0.1m程度と極めて浅く削平が著しい。柱穴底面の標高は，33.95m前後で一定する。桁方向の柱間間隔は，1.3～1.6mと一定していないが，柱通りは概ね整っている。柱穴埋土は灰褐色系粘質土であった。



第176図　ＳＢⅡ37平・断面図（1/80），出土遺物実測図（1/4）

遺物は，図示したものの他，北列の柱穴より土師質土器皿と須恵器の小片各１点が出土している。1133は，東列中央穴より出土した中国産青磁碗の底部である。高台外面まで薄く施釉され，畳付及び高台内底部は無釉。内面見込みに十字花文が押印されている。上田分類のＤ類に相当する（上田1982）。1134・1135は北西隅の柱穴より出土した土師質土器皿である。円盤状の粘土塊の周縁を小さく摘み上げて口縁となす。外底面はいずれも回転ヘラ切りである。上記資料より14世紀代に位置付けられる。

ＳＢⅡ40（第177図）

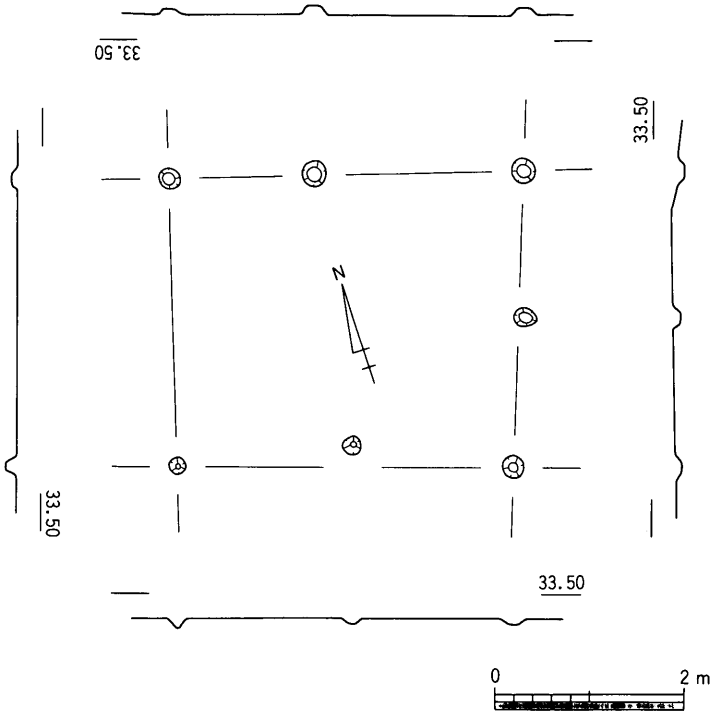
10ａ区東端で検出された東西棟建物である。西列中央穴を欠く。桁行２間（3.6m），梁間２間（3.0m），主軸方向N72.5°Ｗ，床面積10.8m²の側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.2～0.3mの略円形を呈し，残存深は0.1m前後と極めて浅い。柱穴底面の標高は，33.17m前後で一定する。桁方向の柱間間隔は，1.5～2.3mと一定していないが，柱通りは概ね揃っている。柱穴埋土は灰褐色系粘質土であった。

遺物は出土しておらず，時期を特定することは困難だが，位置関係や主軸方向等の点から，当該時期に位置付けられるものと判断した。

ＳＢⅡ41・ＳＫⅡ41

（第178図）

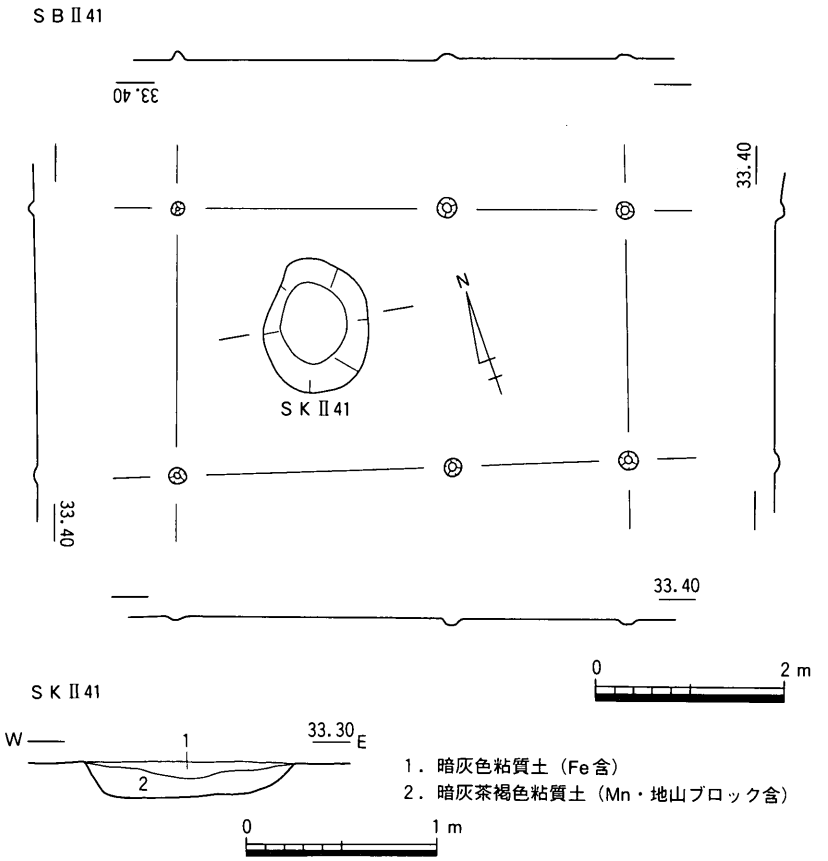
10ａ区北東部で検出された東西棟建物と，それに付随すると考える土坑である。ＳＢⅡ41は，桁行２間（4.8ｍ），梁間１間（2.6～2.7ｍ），主軸の方向N72.3°Ｗ，床面積12.8㎡の側柱建物に復元される。柱穴の掘り方は，径0.2ｍ前後の略円形を呈し，残存深は0.1ｍ程度と浅い。柱穴底面の標高は，33.14ｍ前後で一定する。桁方向の中央穴は，やや東に偏しており，その柱間の広くなった建物西半部分に，ＳＫⅡ41がうまく納まることから，屋内に設けられた貯蔵穴等の可能性が考えられる。



第177図　ＳＢⅡ40平・断面図（1/80）

ＳＫⅡ41は，長軸1.3ｍ，短軸1.1ｍの平面形はやや南北に長い楕円形を呈する。深さは0.2ｍで，断面形は周壁が緩やかに掘り込まれた逆台形状を呈する。底面の標高は33.0ｍで，概ね平坦であった。建物の柱穴よりは，やや深く掘り込まれている。埋土は２層に細分された。上位層は暗灰色粘土，下位層は暗灰茶褐色粘土が堆積し，下位層中にはベース粘土のブロック土が含まれていた。人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

ＳＢⅡ41，ＳＫⅡ41共に遺物は出土しておらず，時期を特定することは困難である。しかしながら，後述する区画溝ＳＤⅡ43と整った位置関係にあることから，当該時期に位置付けられるものと判断した。



第178図　ＳＢⅡ41平・断面図（１/80），ＳＫⅡ41平面図（１/80）・断面図（１/40）

柱穴（第179・180図）

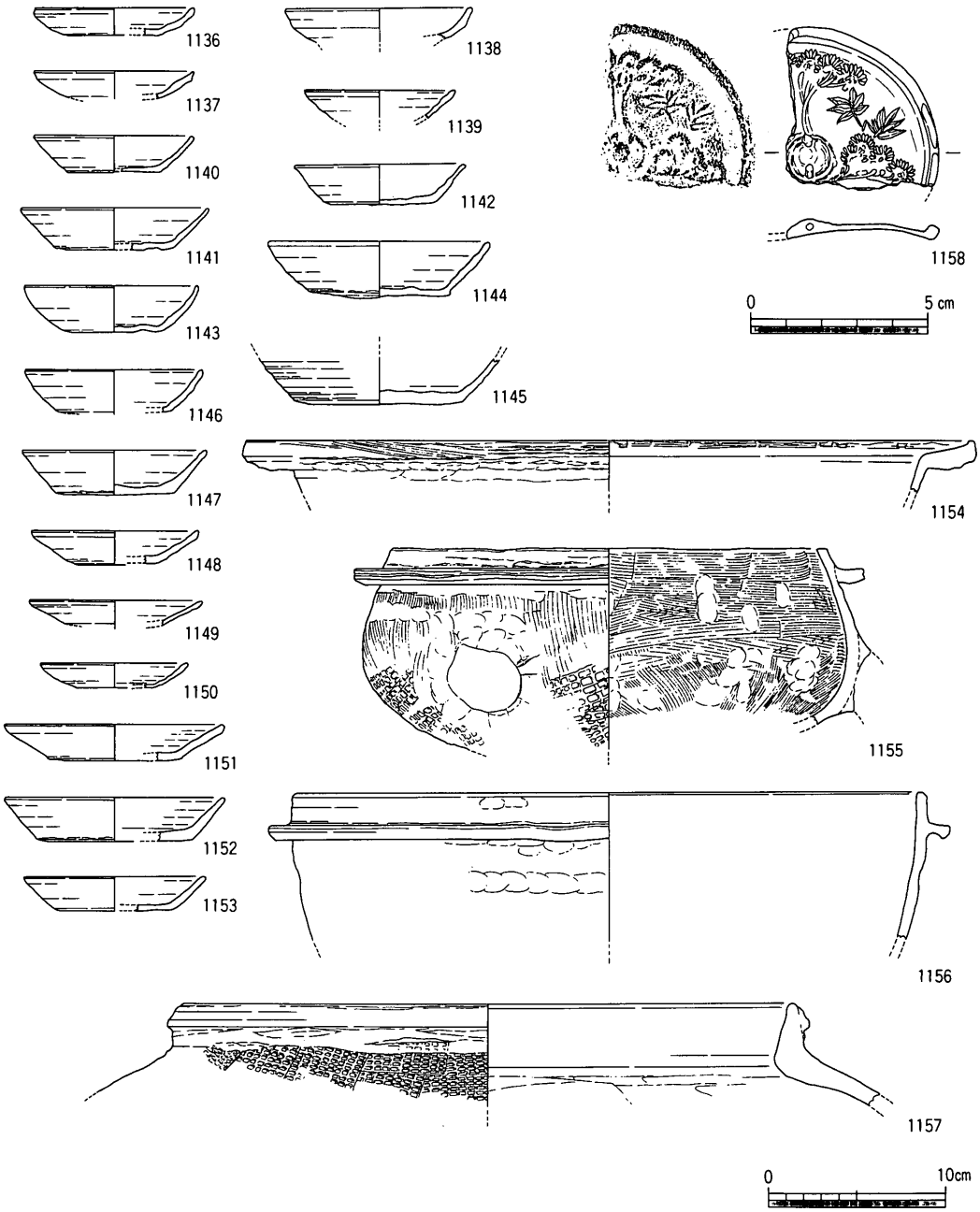
当該時期の柱穴と考えられる遺構は，７ａ・８・９・10ａ区で検出している。その内建物遺構として復元されたのは僅かに４棟であり，大半はその性格を特定するまでには至っていない。以下ではこれら柱穴より出土した遺物について，当該時期の様相を理解する参考資料として掲載する。

６ａ区ＳＰⅡ318　1136は土師質土器皿。外底面はヘラ切りか。

６ａ区ＳＰⅡ368　1137は土師質土器皿。口縁端部は斜上方へ摘み上げ，外傾する鈍い小端面をなす。

６ａ区ＳＰⅡ367　1138は瀬戸美濃系陶器皿。内外面に細かな貫入の入った，浅黄色の釉が掛けられる。大窯期の灰釉丸皿で，16世紀後半代に位置付けられる。

６ａ区ＳＰⅡ406　1139は土師質土器皿。



第179図　柱穴出土遺物実測図１（１/４・１/２）

６ａ区ＳＰⅡ330　1158は銅製の小形和鏡。面径3.6cmに復元され，懐中鏡と考えられる。全形の約１/４程度の破片で，土圧によるためか鏡背側に湾曲する。鈕は分銅形素鈕。鏡背の文様は細線の単圏線の内外に笹や菊花を認めるが，全体に磨耗が顕著であり一部文様の判然としない部分もある。縁は直角式細縁であろう（広瀬1974）。中世末から近世に位

置付けられる。

8区ＳＰⅡ012　1140は土師質土器皿。外底面は回転ヘラ切りである。

8区ＳＰⅡ043　1141～1143は土師質土器皿。外底面はいずれも回転ヘラ切りである。1144は西村産瓦質土器坏。口縁部上半内外面に炭素が吸着する。外底面はヘラ切り調整。13世紀後半代に位置付けられる。1145は土師質土器坏。口縁部は内湾しつつ開き，外面にはロクロ目が顕著にみられる。外底面は皿と同様に回転ヘラ切りである。他の遺物より先行し，12世紀代に遡る。混入と考える。

8区ＳＰⅡ056　1146・1147は土師質土器皿。1147の外底面は回転ヘラ切り。

8区ＳＰⅡ093　1148は土師質土器皿。外底面は回転ヘラ切り。

8区ＳＰⅡ102　1149は土師質土器皿。口縁端部は四角く納め，外傾する小端面をなす。1148と同形態だが，やや浅い。

8区ＳＰⅡ072　1154は土師質土器鍋。口縁部は水平に折り返し，端部は四角く納めつつ上方へ小さく摘み上げる。外端面には粗い斜め乃至横方向のハケ調整を認める。胎土中に黒雲母粒をやや多量に含み，楠井窯産とは異なる。13世紀中葉から14世紀初頭前後に位置付けられる。

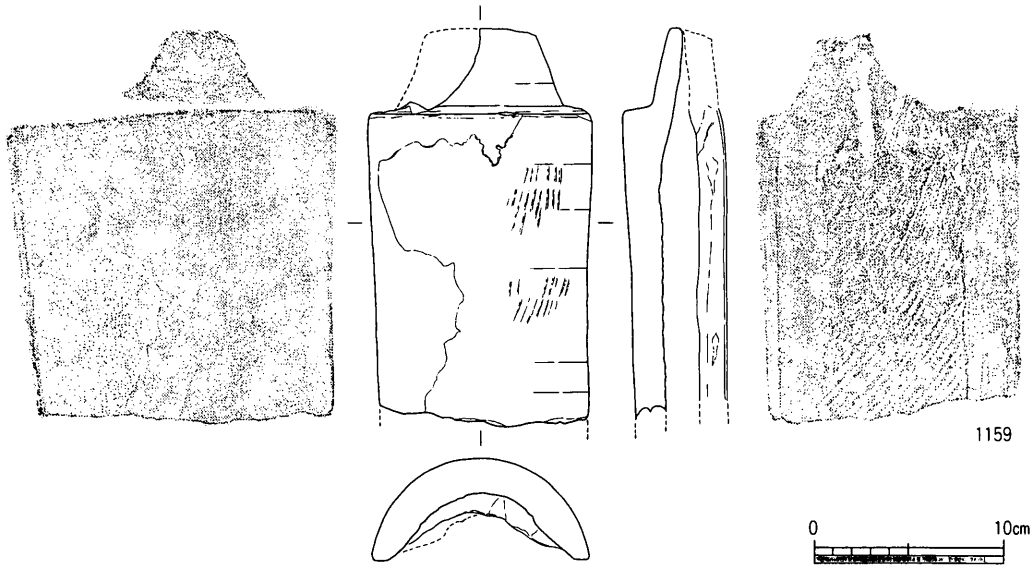
8区ＳＰⅡ084　1155は土師質土器足釜。口縁部は内傾し，端部はややシャープに四角く納める。体部外面に３足を付すが，基部より欠損しており不明。上記1154とほぼ同時期に位置付けられる。

9区ＳＰⅡ043　1150～1152は土師質土器皿。口縁部形状に若干の差がみられ，1151では端部を四角く納め，直立気味の小端面をなす。

9区ＳＰⅡ170　1153は土師質土器皿。外底面は回転ヘラ切り。1156は土師質土器羽釜。直立する口縁部直下に，ほぼ水平に伸びる鍔を付す。国分寺町楠井遺跡土器溜り１第Ⅲ層出土740（佐藤1995）に近似する。胎土の面でも，楠井窯産として違和感はない。13世紀後半から14世紀初頭に位置付けられる。

9区ＳＰⅡ170　1157は土師質土器甕。口縁部はやや外傾して開き，端部は玉縁状に肥厚する。体部外面には向かって右方向から左へ格子状タタキを施す。口頸部は萎縮し短く，15世紀代に下る。

9区ＳＰⅡ023　1159は玉縁付丸瓦。やや細身の形態で，玉縁側が幅広で，木口面側が細くなる。丸部凸面にはおそらく縄目タタキ痕とみられる圧痕を認め，丁寧に横方向のナデ調整を施される。出土位置や形状から中世後半代に位置付けられると考えたが，より後出



第180図　柱穴出土遺物実測図２（１/４）

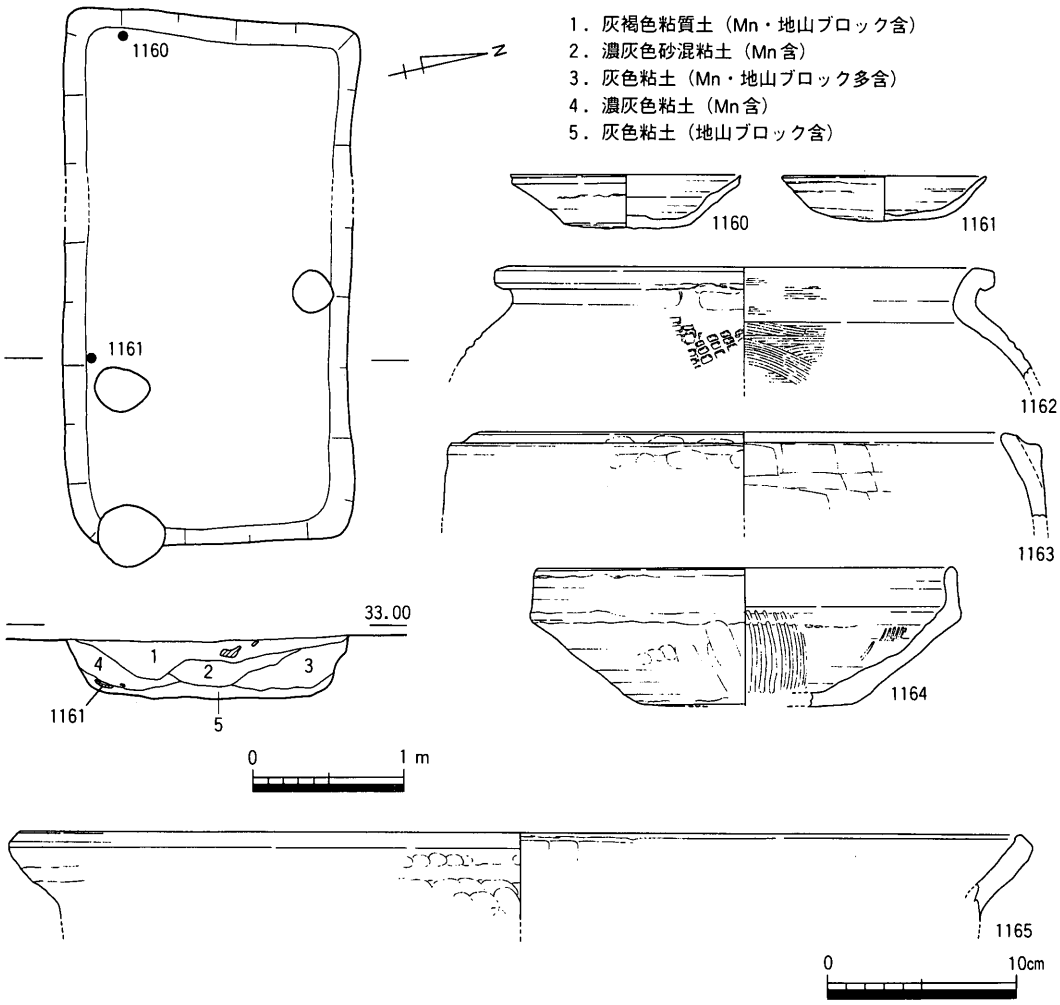
する可能性もある。

土坑

ＳＫⅡ05（第181図）

６ａ区東部で検出された方形土坑である。長軸3.0m，短軸1.85m，深さ0.4mの平面形は整った長方形を呈する。底面での規模は，長軸2.7～2.8m，短軸1.4～1.5mとなり，周壁は60°程の傾斜で掘り込まれ，底面はほぼ平坦で，断面形は逆台形状を呈する。底面の標高は32.5m前後であった。主軸の方向はN88°Eで，ほぼ正方位に配される。埋土は５層に細分された。灰色系の粘土・粘質土によって充填されており，いずれも地山層のブロックの混在が確認された。特に中位層にブロック土の混在が顕著で，周壁より土坑中央へ傾斜して堆積していることから，土坑周囲より人為的に埋め戻された可能性も考えられる。最下位層は，グライ化した灰色粘土層であり，ブロック土の混在はみられるものの，土坑底面に均等に薄く水平堆積することからすれば，土坑掘削後一定期間オープンな状態であって，滞水下のもとに自然堆積したものと考えられる。

遺物は，西壁と南壁の土坑底面より数cm程浮いた最下位層上端付近より，それぞれ完形の土師質土器坏各１点（1160・1161）が底部を下にやや内側に傾いて出土した。その他は，土師質土器甕・足釜・鍋・擂鉢，備前焼大甕などの小片が，中位層より上で散在して出土



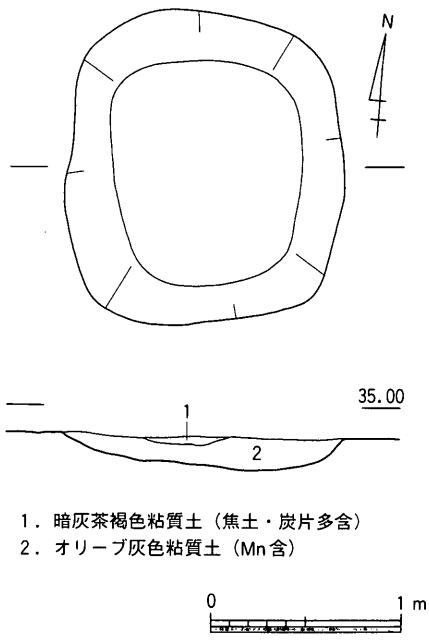
第181図　ＳＫⅡ05平・断面図（1/50），出土遺物実測図（1/4）

している。土師質土器坏の外底面はいずれも回転ヘラ切り調整である。口縁部形態は大きく相違し，1160では端部上端が強く横方向に引き出され，端面は沈線状に窪むが，1161では丸く納めるのみである。しかし，端部の調整を口縁部外面の回転ナデ調整より先行して施している点は共通する。1162は土師質土器甕。口縁端部は外方へ強く折り返して玉縁状を呈し，端部は強い回転ナデにより断面矩形を呈する。国分寺楠井遺跡甕ＡⅡ類（佐藤1995）に相当する。1163は土師質土器鍋。口縁部は短く内傾し，鍔部は瘤状の隆起に退化している。1164は備前焼擂鉢。器高7.4cmと浅く，小形品である。口縁部は大きく上方へ立ち上がり，端部は丸く納める。外面には回転ナデにより僅かな凹凸を認める。片口形態となるが，小片のため図化していない。内面には1単位7条の摺目が間隔を開けて施され

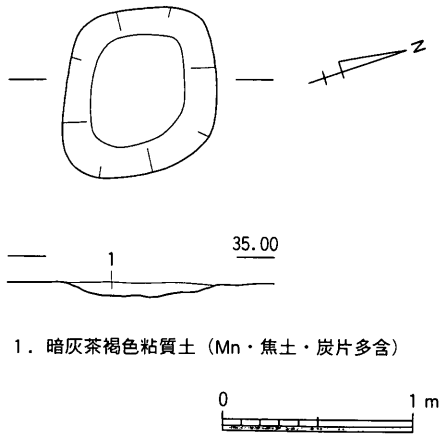
るが，よく使い込まれて磨耗している。備前焼Ⅳ期後半でもより後出するものと思われる（間壁1991）。1165は土師質土器鍋。小片のため復元した口径にはやや難がある。口縁部はやや内湾気味に開き，端部は四角く納めつつ上方へ摘み上げる。上記資料中には若干の時期幅を認めるが，おおよそ15世紀後半代に位置付けらると考える。

ＳＫⅡ33（第182図）

９区北部でやや集中して検出された，方形土坑群の東端の土坑である。上面は顕著な削平を蒙り，遺構の残りは悪く，基底部付近が検出されたに過ぎないと考える。この点は，後述する当調査区の当該期の遺構に共通して認められる。平面形は，東西1.4～1.5m，南北1.6～1.7mのやや南北に長い整った隅丸方形状を呈する。深さは0.17mと浅く，断面形は皿状ないしは逆台形状を呈して，やや東半部が深くなる。主軸の方向はＮ５°Ｗを示す。底面の標高は34.67m前後と，後述する土坑群より若干深く掘り込まれる。埋土は２層に細分された。上位層中に，焦土や炭片を多量に含む点が注意される。



第182図　ＳＫⅡ33平・断面図（１/40）



第183図　ＳＫⅡ34平・断面図（１/40）

遺物は図示したものの他，弥生土器，土師質土器脚，備前焼大甕などの小片数点の他，器種不明の小鉄片１点が出土したのみである。出土遺物より中世後半代に位置付けられるが，細かな時期については不明である。

ＳＫⅡ34（第183図）

９区北部方形土坑群の１基と考えられる。平面形は，東西0.8～0.9m，南北0.7～0.8mの東西に長いややいびつな隅丸長方形を呈する。深さは0.07m程しかなく，断面形は浅い皿状となる。底面の標高は34.78mであった。埋土は，暗灰茶褐色粘質土の単層で，埋土

中にＳＫⅡ33と同様焦土や炭片を多量に含む点が注意される。

遺物は出土しておらず，時期を特定することは困難である。埋土や平・断面形状が，ＳＫⅡ33と類似した内容を有しており，当該時期に位置付けられるものと判断した。

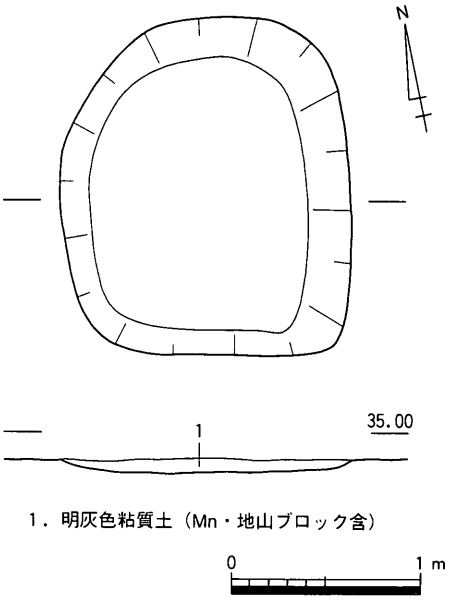
ＳＫⅡ35（第184図）

９区北部方形土坑群の１基と考えられ，群中最大規模の土坑である。東西1.5～1.6m，南北1.7～1.8mの隅丸長方形を呈する。上面の顕著な削平により，残存深は0.07mを残すに過ぎない。従って断面形は浅い皿状を呈する。主軸の方向はN13.5°Ｅを示し，ＳＫⅡ34・36とほぼ一致する。底面の標高も34.78mと，ＳＫⅡ34・36とほぼ同深度に掘り込まれており興味深い。埋土は明灰色粘質土の単層であった。

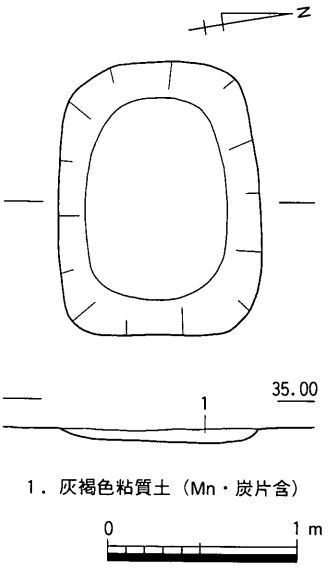
遺物は，須恵器，土師質土器脚等の小片が数点出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが，ＳＫⅡ33との位置関係より，当該期に位置付けられるものと判断した。

ＳＫⅡ36（第185図）

９区北部土坑群の１基と考えられる。ＳＫⅡ35と整った位置関係にあることから，何らかの有機的な関係が想定される。平面形は，東西1.4m，南北1.0～1.1mのやや東西に長い整った隅丸長方形を呈する。本土坑も上面の削平により，残存深は0.07mと浅く，断面形は皿状となる。埋土は灰褐色粘質土の単層であった。



第184図　ＳＫⅡ35平・断面図（１/40）



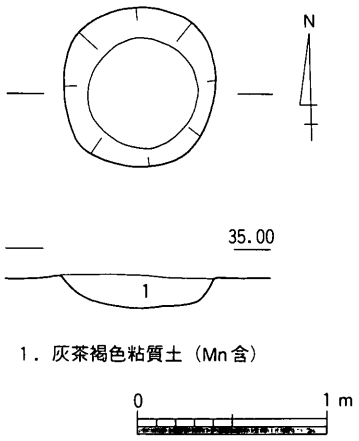
第185図　ＳＫⅡ36平・断面図（１/40）

遺物は出土しておらず，時期決定の根拠は乏しい。上記したような主軸方向や掘削深度の類似から，当該時期に位置付けられるものと判断した。

ＳＫⅡ37（第186図）

９区北半部で検出した土坑である。上記土坑群より南西に約３ｍ程離れており，土坑群の１基に含めるかどうかはやや躊躇を伴う。平面形は，東西0.8ｍ，南北0.7ｍの円形に近い隅丸方形状を呈する。深さは0.16ｍとやや深く，断面形は整った逆台形状を呈する。底面は概ね平坦で，標高は34.70ｍを測る。埋土は灰茶褐色粘質土の単層であった。

遺物は，器種を特定できないまでに小片化した土師質土器片１点が出土したのみである。遺物より時期を特定することは困難だが，埋土の特徴などから，当該時期に位置付けられるものと判断した。

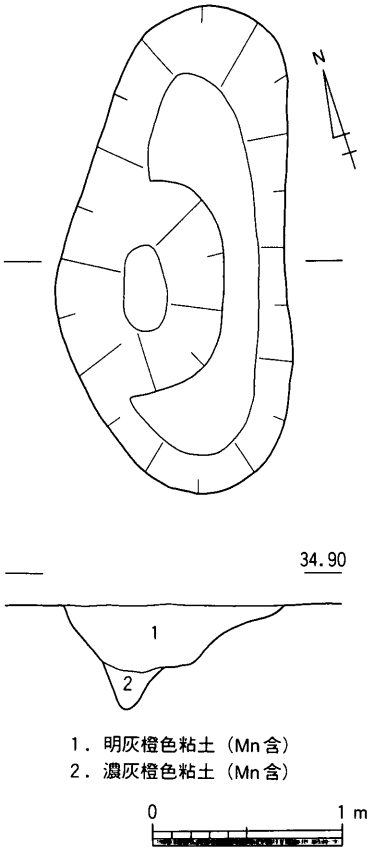


第186図　ＳＫⅡ37平・断面図（１/40）

ＳＫⅡ40（第187・188図）

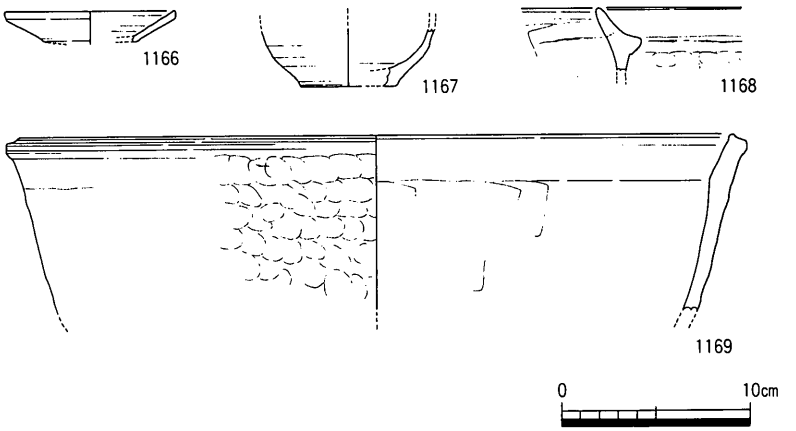
９区西端で検出された土坑である。ＳＤⅡ36より後出する。平面形は，東西1.1～1.2ｍ，南北2.5～2.6ｍのいびつな長楕円形状を呈する。主軸の方向Ｎ19°Ｅであった。掘り形は，上面より0.3ｍの位置で僅かなテラス面に達し，中央西壁付近で２段に掘り込まれた径0.3～0.5ｍ，深さ0.2ｍ前後のピット状の掘り込みを伴う。土層もこの断面形状によって２分されたが，顕著な差異は認められない。最深部の標高は34.2ｍに達する。

遺物は，主に上位層中より土師質土器や須恵器片等の破片及びサヌカイト剥片が少量出土したのみである。この内，器種が特定できるものを中心に４点を選んで図示した。1166は土師質土器皿。口縁端部は四角く納め，直立する端面をなす。1167は土師質土器坏。底部は円盤状に突出する平底を呈し，内湾しつつ立ち上がる。丸亀平野西部以西の西讃域に多出する形態である。おそらく搬入品であろう。1168



第187図　ＳＫⅡ40平・断面図（１/40）

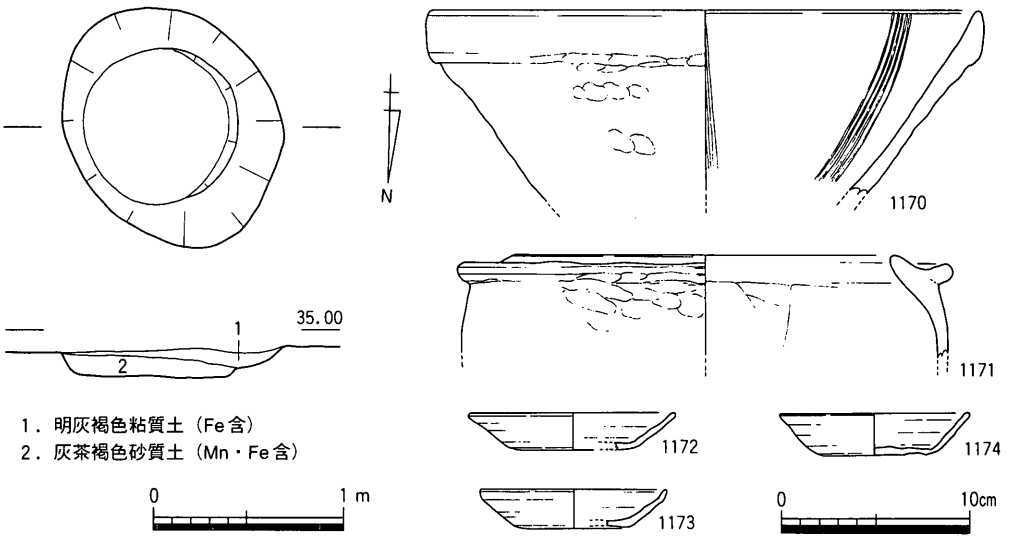
は土師質土器足釜小片。口縁部はやや萎縮し，鍔部も断面蒲鉾形を呈する突起状のものに退化している。1169は土師質土器鍋。口縁部と体部は一体化が進展し，鈍く屈曲するに過ぎない。外面に比して内面の調整は丁寧。口縁端部は主に外側に肥厚させて，端面は鈍く窪む。上記資料について，1168はやや先行し15世紀代に遡るが，他は16世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。



第188図　ＳＫⅡ40出土遺物実測図（１/４）

ＳＫⅡ48（第189図）

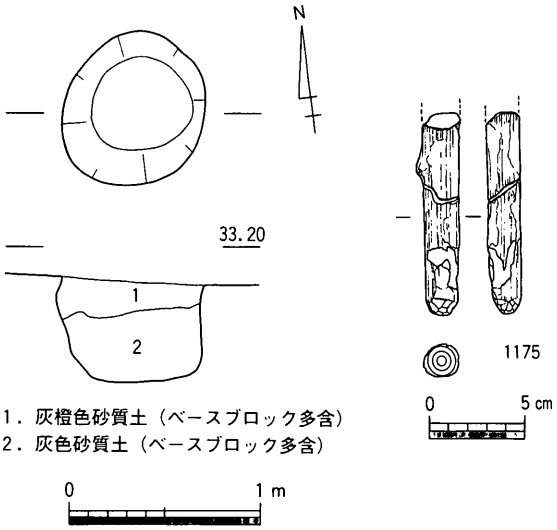
11区中央谷７上面で検出された土坑である。幹線水路ＳＤⅡ71を除いて周辺に当該期の遺構が希薄な点は，本遺構の性格を一端を反映していると考える。平面形は，径1.1～1.2ｍの楕円形を呈する。埋土は２層に細分され，上位層は大きく西に偏って堆積し，下面は



第189図　ＳＫⅡ48平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

土坑西壁部でテラス面をなす。堆積状況から，別遺構もしくは再掘削に伴う土層の可能性を考えたが，結論付けるまでには至っていない。深さは0.15mと浅く，上面は顕著な削平を蒙っているようである。底面の標高は34.75mを測る。

遺物は５点を図示した。1170は瓦質土器擂鉢。口縁部は玉縁状に肥厚する。内面には５条１単位の摺目をやや間隔を開けて施す。国分寺楠井遺跡擂鉢ＡⅢ－３類に相当し，胎土の面でも楠井産としても違和感はない。1171は土師質土器足釜。口縁部は強く内傾する。胎土中にやや多量の黒雲母粒を含み，楠井窯以外の生産地が想定される。1172～1174は土師質土器皿。口縁部形態から，単純に丸く納める1172・1174と，端部をやや上方へ摘み上げ，外傾する小端面をなす1173に２分される。1174の外底面は回転ヘラ切りされる。上記資料より概ね15世紀前半代を中心とした時期に位置付けられる。



第190図　ＳＫⅡ49平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

ＳＫⅡ49（第190図）

10ａ区１面北部で検出された土坑である。平面形は，径0.7～0.8mの略円形を呈する。深さは0.5mあり，底面の標高は32.5mとなる。底面はほぼ平坦で，壁面は直に近く掘り込まれ，断面形は箱状を呈する。西壁上端付近で壁面の僅かな抉れがみられる。埋土は２層に細分され，ほぼ水平に堆積する。いずれも灰色系の砂質土層で，ベース谷７埋土の黒褐色系粘土のブロック土を多量に混在する。土層の堆積状況から，掘削後短期間の内に人為的に埋め戻された可能性が考えられる。なお，谷７を掘り込んで構築されているため調査時には湧水が激しく，素掘りの井戸の可能性も考えたが，埋土から積極的に肯定する材料は得られなかった。

遺物は，下位層中より木製品１点が出土したのみである。1175は径1.7cm程の棒状の木製品。上端を欠損する。下端部を周囲より細かく削り尖らせるが，削り位置は浅く，杭としての用途はなさない。先端は使用に拠るためか潰れている。先端部の加工以外は，小枝が払われる程度で樹皮が残され加工度は低い。樹種はツブラジイ。出土遺物より時期を特

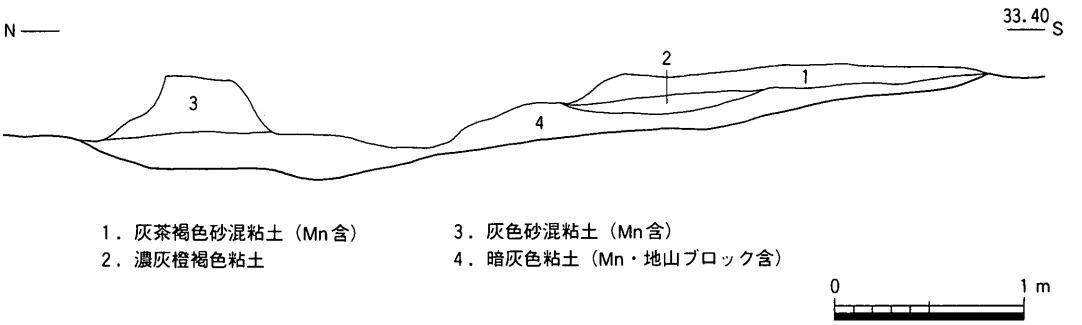
定することは困難であり，遺構掘り込み面や周辺遺構との関連より，当該時期に位置付けたが，より後出する可能性も残される。

不明遺構

ＳＸⅡ02（第191・192図）

６ａ区東端で検出した不整形な落ち込みである。東半部は調査区外に延長し，全形を窺うことはできない。検出した西半部での平面形は，東西４ｍ，南北７ｍ程のいびつな半円形を呈し，北に２ｍ程溝状に突出する。ＳＫⅡ03，ＳＤⅡ01，ＳＸⅡ03等近世の遺構が重複し，検出し得た部分でもかなりの撹乱を蒙る。周壁は緩やかに掘り込まれ，断面形はやや深い皿状を呈する。埋土は，調査区東壁の観察で，４層に細分された。上位３層（13・14・23層）は，灰～褐色系粘土層でレンズ状に堆積し，自然堆積層と考えられる。最下層（15層）は，グライ化した粘性の強い暗灰色粘土層で，滞水下の堆積の可能性が考えられる。周辺地形からみて，単純な自然地形の窪地とは考えられず，人為的な掘り込みを伴った何らかの遺構とは考えられるものの，調査範囲の僅少さからその性格を論じるまでには至っていない。土層の堆積状況から，埋没までの一定期間オープンな状態であったと考えられ，浅い池か水溜状を呈していた可能性が想定される。

遺物はコンテナ半箱程度出土している。大半は，最下層からの出土であるが，特に層位毎に分けて取り上げは行っていない。従って一括して報告する。また，取り上げ時のミスにより，極微量の近世の遺物が混入している他は，中世以前の遺物によって占められる。出土した土器類は，比較的大きな破片の遺物が多い。10点を選んで図示した。1176は鞴の羽口。外径9.4cm，孔径2.0cmの円筒状を呈し，上端は１cm程が斜めにカットされ断面台形



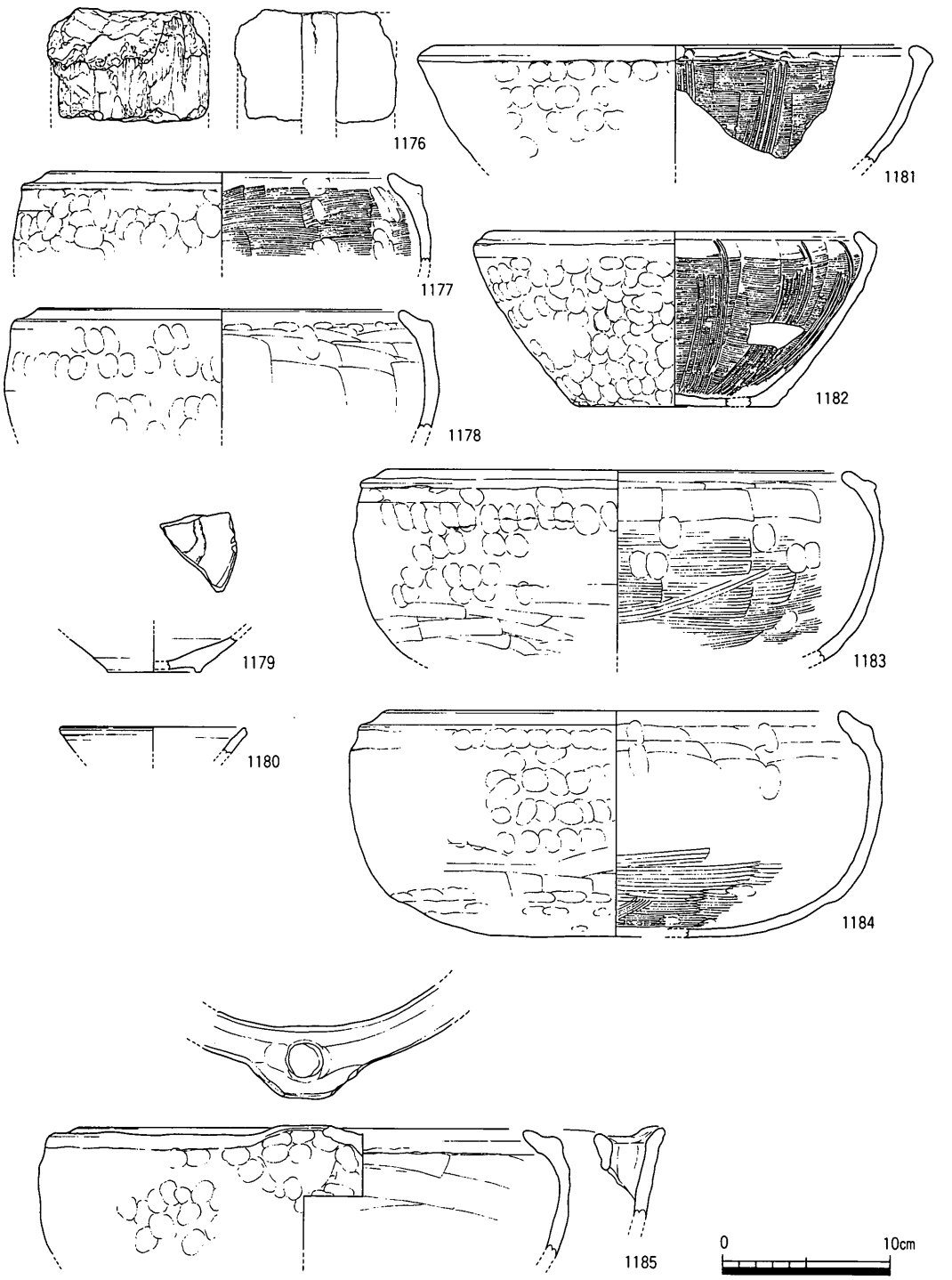
第191図　ＳＸⅡ02断面図（１/40）

状を呈する。先端部外面は溶融ガラス化する。胎土中には黒雲母粒を多量に含む点が注意される。第３章で金属学的分析結果を報告する。1177・1178・1183～1185は土師質土器鍋。三足付釜の脚部が欠落し，代わりに口縁部外面に１対の外耳を伴う。口縁部は著しく萎縮が進展し，口縁部下の鍔部はもはや痕跡的な隆起をみせるのみ。体部外面はナデ・指頭圧痕が顕著，外底部は横板ナデが施され器面の調整は粗い。内面の調整は外面に比して丁寧で，板ナデが卓越する1178・1184・1185と，横ハケが卓越する1177等の２者があるが，全体的な形状は差異に乏しい。1179は肥前系陶器の灰釉皿。内面見込みに砂目積痕を認める。17世紀前半に下り，重複する近世溝ＳＤⅡ01からの混入の可能性を考えておく。1180は瀬戸美濃系陶器皿。大窯期の灰釉皿で，16世紀後半代に位置付けられる。1181・1182は土師質土器擂鉢。強く折れて内傾する口縁部を有し，底部は安定した平底となる。1181では６条１単位，1182では７条１単位の摺目が，横ハケ調整の後やや間隔を置いて底部より口縁部へ向けて引かれる。1182の横ハケ調整は，口縁部より底部までの幅をもった工具で，器面より工具を離すことなく３～４㎝程度で静止痕を刻みながら工具を１周させ，１回で調整を終える。内面に比して外面の調整は粗雑で，指頭圧痕が多数残され，２次的な調整は加えられていない。1181では，体部外面には煤が付着し，鍋として使用されていた可能性がある。なお，丸亀市郡家田代遺跡ＳＸ03（佐藤1996）等に類似形態がみられ18世紀代へ系譜が追える。田代遺跡例では，口縁部の屈曲があまく肥厚し，本例よりは明らかに後出する。

図示はしていないが，備前焼大甕や瀬戸・美濃系の天目碗小片が出土している。上記資料より，16世紀後半代に位置付けられると考える。

ＳＸⅡ06（第193・194図）

６ａ区西半北端で検出した，集石を伴った土坑状の浅い落ち込みである。北端部は調査区外に延長する。検出部分で，長軸3.5m以上，短軸2.2mの南北に長い隅丸長方形を呈する。中央やや南よりを撹乱溝により一部壊されている以外は，比較的旧状を保っている。深さは0.2m前後，底面の標高は33.2m前後であった。周壁は，一部を除いて比較的直に近く掘り込まれており，断面形は浅い箱形を呈する。底面は，概ね平坦であったが，集石の認められた中央東半部は，0.1m程深く掘り込まれていた。埋土は灰褐色粘質土の単層であった。集石は，遺構中央やや東よりに集中して出土した。石材は，長軸25㎝程度を最大に，拳大程度の小礫が無造作に投棄した状況で出土した。中央部で２～３石が積み重なる部分も認められたが，周辺部は散在し重なりは認められない。大型の石材も中央部に偏



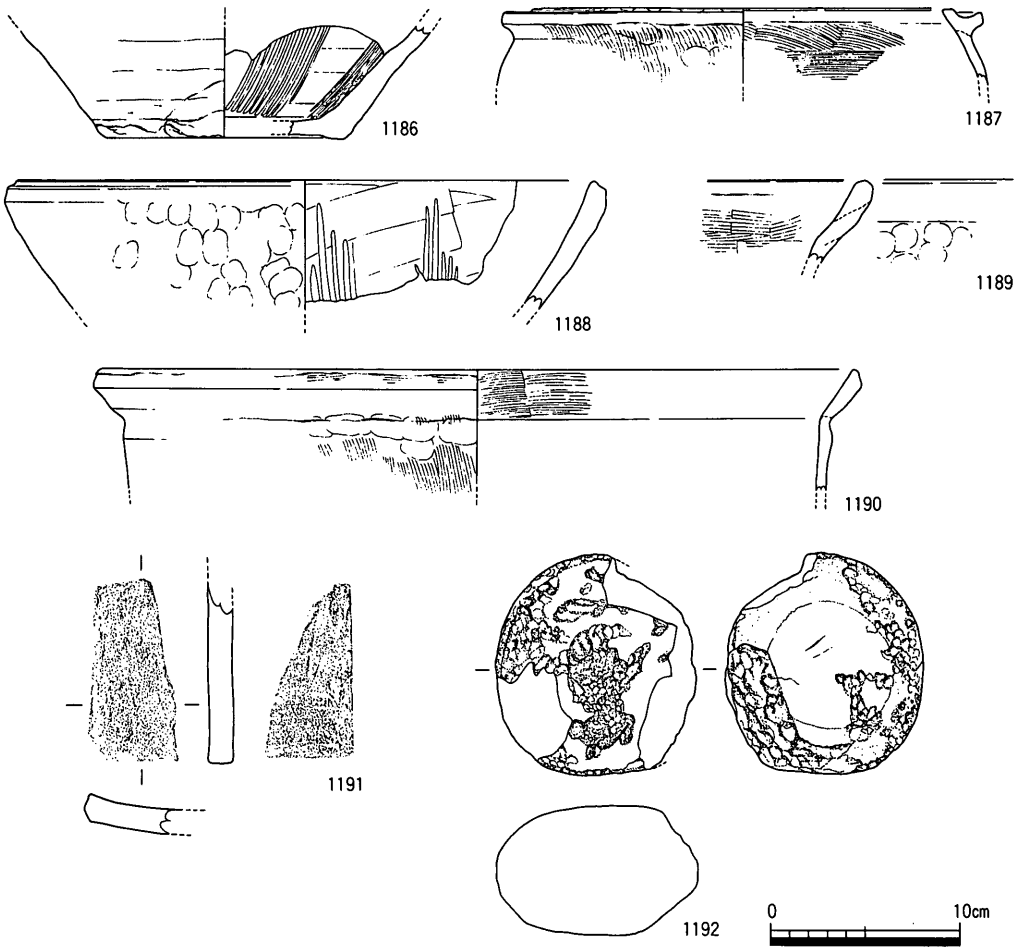
第192図　ＳＸⅡ02出土遺物実測図（１／４）

在するが，特に据え置いた傾向は認められない。石種には，砂岩系統，安山岩系統，花崗岩系統の角礫及び亜円礫がある。

遺物は，集石の間隙を中心に若干量が出土している。このうち７点を図示した。なお，図示したものの他に，土師質土器足釜・擂鉢・土鍋・平瓦小片，備前焼擂鉢・大甕体部小片，及び９世紀代の須恵器坏等の小片がある。1186は備前焼擂鉢。内面には10条１単位の摺目が施される。よく使い込まれており，底部付近は磨耗が顕著である。備前焼Ⅳ期後半代に位置付けられる。1187は土師質土器足釜。口縁部は萎縮し，鍔部も突出度は弱い。内外面の調整はハケ調整が卓越する。国分寺楠井遺跡足釜Ａ類の系譜上に位置付けられ，楠井遺跡で出土しているものよりは後出すると考える。1188は土師質土器擂鉢。４条１単位の摺目を施す。口縁部は四角く納め，内傾する端面は鈍く凹線状に窪む。1189・1190は土師質土器鍋。1189は内湾する口縁部を有する形態。14世紀後半代に出現し，以後16世紀代まで系譜が辿れる。本例は内湾傾向が弱く，より後出する形態であろう。1190は外反する口縁部を有する鍋。端部は四角く納める。口縁部の屈曲は弱く，15世紀代以降に下る。1191は平瓦片。凸面に離れ砂が付着する。焼成はややあまく土師質に近い。1192は磨石。砂岩円礫を使用する。被熱によるためか層状に剝離が顕著。右面中央部はよく使い込まれ石目が潰れている。また周縁と左面には顕著な敲打痕を認める。上記資料は概ね15世紀後半代に位置付けられると考えるが，より後出する可能性もある。

第193図　ＳＸⅡ06平・断面図（１/40）

さて，後述する近世の集石遺構と比較すると，石材の種類や大きさなどは共通するが，



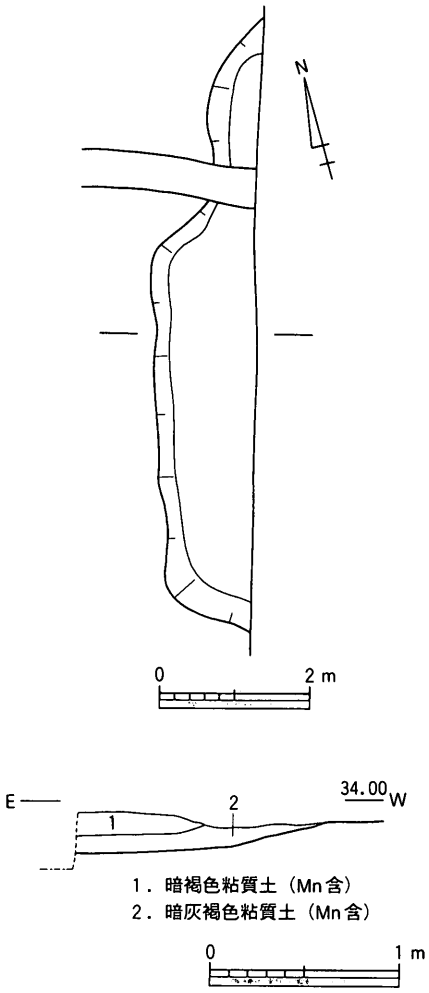
第194図　ＳＸⅡ06出土遺物実測図（１/４）

石臼や砥石など石製品を含まず，また掘り方が比較的大きいこと，集石が掘り方一面に均等に広がらないこと，集石下面に構造物が認められなかったことなどから，やはり性格を異にすると考えられる。特に，主軸方位が周辺地割りの方向に合致している点は，遺構が単なる廃棄土坑として掘られたものではないことを示していよう。類似した中世の集石遺構は，空港跡地遺跡ＳＸ13・14（蔵本1995），百相坂遺跡ＳＸ08（片桐1997）など，高松平野周辺部でも類例が増加してきている。この内，百相坂遺跡では塚の下部構造の可能性が想定されているが，調査成果には積極的に肯定する材料が乏しい点は否めない。また，上記集石遺構が同一の性格を有するものとも判断できないが，今後良好でかつ精緻な調査例の増加を期待したい。

ＳＸⅡ20（第195図）

８区南東隅付近で検出した浅い落ち込みである。遺構東半部は里道の下に潜るため，調査し得たのは西端部分に限られる。南北8.0m以上，東西1.4m以上を測り，平面形は確認部分で隅丸方形状を呈する。西辺は北部でややいびつな形になるものの，ほぼ現状の地割りに平行して検出されており，単なる自然地形の落ち込みとは考えがたい。深さは0.2m程と浅く，断面形は緩やかに掘り込まれた皿状を呈する。底面の標高は33.7m前後を測り，概ね平坦であった。埋土は２層に細分された。いずれも粘質土層が東に傾斜して堆積し，穏やかな自然堆積の様相を呈する。

遺物は，弥生土器，土師質土器皿・足釜などの小片が若干量出土したに過ぎない。大半は，器種を特定できないまでに小片化した土器片であり，図化し得るまでには至らなかった。なお，土師質土器皿類の底部は，確認されたものすべてヘラ切りであった。時期は出土した遺物から，中世前半代に位置付けられるが，細かな時期を決定することは困難である。

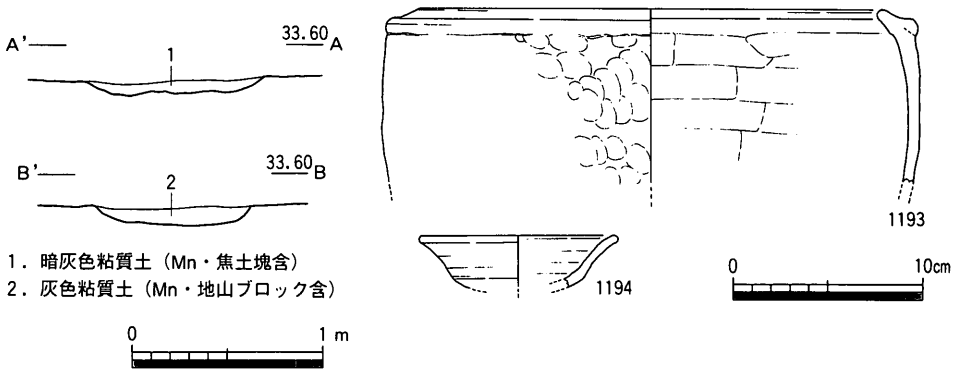


第195図　ＳＸⅡ20平面図（１/100）・断面図（１/40）

溝状遺構

ＳＤⅡ06（第196図）

６ａ区東半中央で検出した，浅い溝状遺構である。東西方向にほぼ直線状に延び，中央付近で北に分岐する溝が取り付く可能性があるが，検出部分が約1.8mと限られるため詳細は不明である。この部分を含めて，ＳＤⅡ06として報告する。西端は調査区内で途切れ，東端は地下げにより削平され，延長約7.6mを検出したにとどまる。流路方向はN78°Ｗで，ほぼ現在の地割りの方向に合致する。幅1.65～1.9m，深さ0.12～0.18mで，断面形は浅い皿状を呈する。壁面は緩やかに掘り込まれ，底面に起伏は認められない。底面の標高は，32.95m前後で一定している。埋土は，焦土塊や地山層の小ブロック土を含んだ灰色粘質土の単層であった。



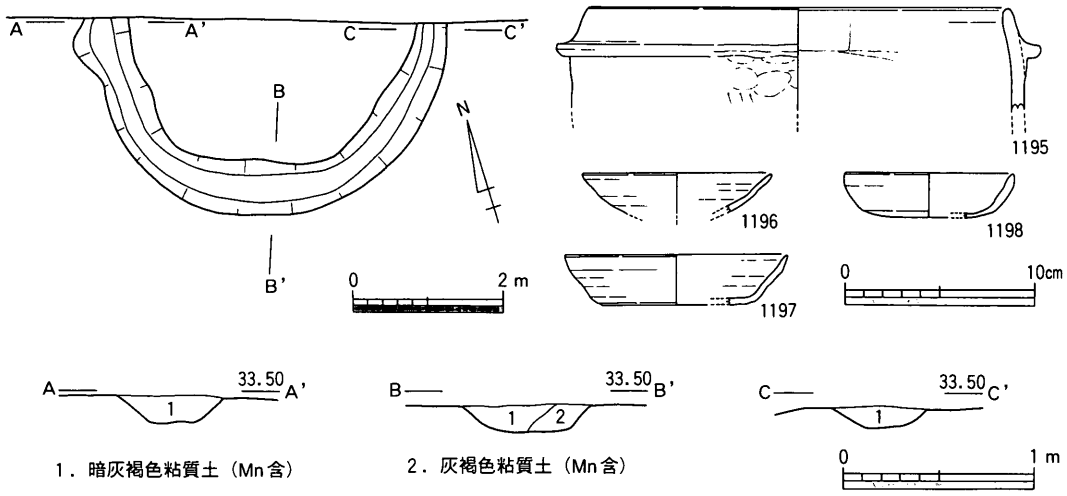
第196図　ＳＤⅡ06断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

遺物は，コンテナ半箱程度が出土している。２点を図化した。1193は土師質土器鍋と考える。足釜となる可能性もあるが，欠損部分が大きく判断できないため，ここでは鍋として報告する。口縁部下端の鍔部の退化傾向は著しく，内面にはハケ調整に近い横方向の板ナデ調整が施される。体部下半には煤が顕著に付着する。1194は備前焼の小坏である。胎土はレンガ色を呈しており，焼成は良好。備前焼Ｖ期の年代を想定する。以上図示したものの他，弥生土器，須恵器皿，土師質土器皿・擂鉢・足釜・火鉢，備前焼大甕・壺，鞴の羽口小片等があり，一部遡る遺物を除けば，概ね16世紀中葉から後半代に納まると考えてよい。また，焦土塊は他遺構に比してやや多量に出土しており，鞴の羽口の出土ともあわせ，近在に鍛冶関連の遺構が存した可能性が推定される。

ＳＤⅡ08（第197図）

６ａ区西半北端で検出した，円形周溝である。平面形は，内径約3.9m，外径約4.9mの整った半円形を呈する。北半は調査区外に延びるため，環状を呈するかどうかは明らかではない。溝は，幅0.6m，深さ0.15mで，断面形は浅い逆台形状を呈する。底面に顕著な起伏は認められず，ほぼ平坦であった。底面の標高は33.3m前後で，若干南側が深くなるが，これが遺構の性格を反映するものかどうかは明確ではない。埋土は灰褐色系粘質土が堆積し，部分的に２層に細分されたが，顕著な差異は認められない。

遺物は，土器等の小片が若干量散在して出土したに過ぎない。このうち４点を選んで図示した。1195は土師質土器足釜。体部から口縁部にかけて一体成形した後，外面に粘土紐による鍔部を貼付する。楠井遺跡足釜ＢⅡ類に相当する。1196・1198は土師質土器皿。1197は土師質土器坏である。1197の口縁部は鈍く上方へ折り曲げられる。外底面は回転ヘラ切りである。図示したもの以外に，土師質土器鍋，サヌカイト剥片等がある。上記資料より14



第197図　ＳＤⅡ08平面図（１/100），断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

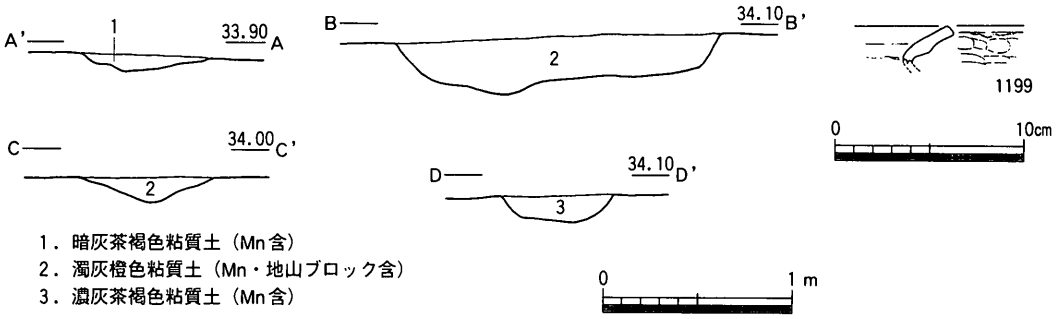
世紀前半代に位置付けられると考えるが，資料数が乏しくやや後出する可能性もある。

本溝は，平面形状から通有の給排水溝ではなく，何らかの区画溝と考えられる。しかしながら，北半部の形状が不明なこと，区画内部に遺構が検出されなかったことから，区画本来の目的については明らかにすることはできなかった。

ＳＤⅡ12（第198図）

10ｂ区より６ｂ区にかけて，調査区北部を東西に横断して検出された溝状遺構である。緩やかに蛇行しながら３調査区に跨って検出され，検出延長は約90ｍに達する。流路方向は，大きく蛇行しているため正確な数値を示せないが，概ねＮ75°Ｅ前後に配される。底面の標高は，10ｂ区西端で33.80ｍ前後，８区西端で最も低くなり33.70ｍ，８区東端で33.78ｍとなり再び上昇し，６ｂ区で33.9ｍ前後を測る。溝底面の高低差からは東西どちらか一方への流下は想定しがたい。一方，８区西端には後述するように，中世後半代に下る南北方向の幹線水路ＳＤⅡ31が開削されている。本溝は，この幹線水路に時期的に先行するが，上記溝底の比高差を考慮すれば，調査では確認できなかった８区と10区の境の里道下に，ＳＤⅡ31に先行する南北溝が存在し，これに向けて本溝は流下していた可能性が高いと考えられる。なお，各調査区によって遺構上面の削平などにより検出状況が異なるため，以下では各調査区毎に本溝の調査成果を記述する。

10ｂ区では，第１面より調査区中央部を東西に横切り検出された。西端部では，丘陵Ｅの東縁辺が調査区内に張り出すためか，若干北に屈曲する。逆に調査区東端では，鈍く屈



第198図　ＳＤⅡ12断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

曲して南に折れる。幅0.4～0.6m，深さ0.15m前後で，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は，暗灰褐色粘質土の単層であった。溝底には，顕著な流水の存在を窺わせる砂層の堆積は認められず，この点は各調査区での土層全般に共通し，給・排水路としての性格を積極的に評価することはやや困難で，南北溝を補完する意味合いが強い溝であったと考えておきたい。

８区では，西半部はやや溝幅が拡がり，小溝が南に分岐する。本流部分と小溝とは，埋土に顕著な差はなく，同時併存していたようである。本流部分は緩やかに北から南へ蛇行する。重複関係より，前記ＳＤⅡ30・31より先行し，ＳＸⅡ20より後出する。幅は，西半部で1.5～1.7m，東半部で0.7m，深さは，西半部で0.3m，東半部で0.15mと西に深いが，これは大きくは遺構上面の削平深度に起因する。なお，溝幅の拡大は，単に小溝が分岐するためではなく，前記した南北溝との取り付き部に位置することを積極的に傍証すると考える。埋土は，濁灰橙色粘質土の単層。10ｂ区とは色調は相違するものの，土質に大きな差異はみられなかった。

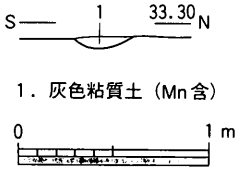
６ｂ区では，調査区西壁より延長約13m程で途切れる。溝底がほぼ平坦なことから，東への延長は削平により消失したと理解される。幅0.6m前後，深さ0.15mで，断面形は逆台形状を呈する。

遺物は，各調査区より弥生土器，土師器，須恵器坏・甕類，土師質土器足釜等の小片が，コンテナ半箱程度出土している。本来谷７に帰属していたであろう遺物群で，器種を特定できないまでに小片化した弥生土器片が大半を占め，当該時期に下る資料は極少量に限られる。こうした出土遺物の量的な僅少さは，集落域との距離によって左右されるのであろう。さて，この内溝本来の帰属時期を直接示すものではないが，弥生土器１点（1199）を図示した。本溝の時期は，出土遺物より14世紀代前後に位置付けられると考えるが，細か

な時期を特定するには至っていない。

ＳＤⅡ28（第199図）

８区北半部で検出した東西方向の小溝である。上面は旧水田面の造成により顕著な削平を蒙り，延長8.0ｍを検出したに過ぎない。幅0.3ｍ，深さ0.05ｍ，断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は33.2ｍ前後を測り，僅かに西に傾斜するが，これが本来的な流下方向を示すかどうかは判断できていない。なお，周辺には当該時期の多数の柱穴群が存在し，建物遺構こそ復元はされなかったが，これら柱穴群に付随する遺構である可能性が高いと判断された。埋土は，灰色粘質土の単層で，柱穴群の埋土に近似する。



第199図　ＳＤⅡ28断面図（1/40）

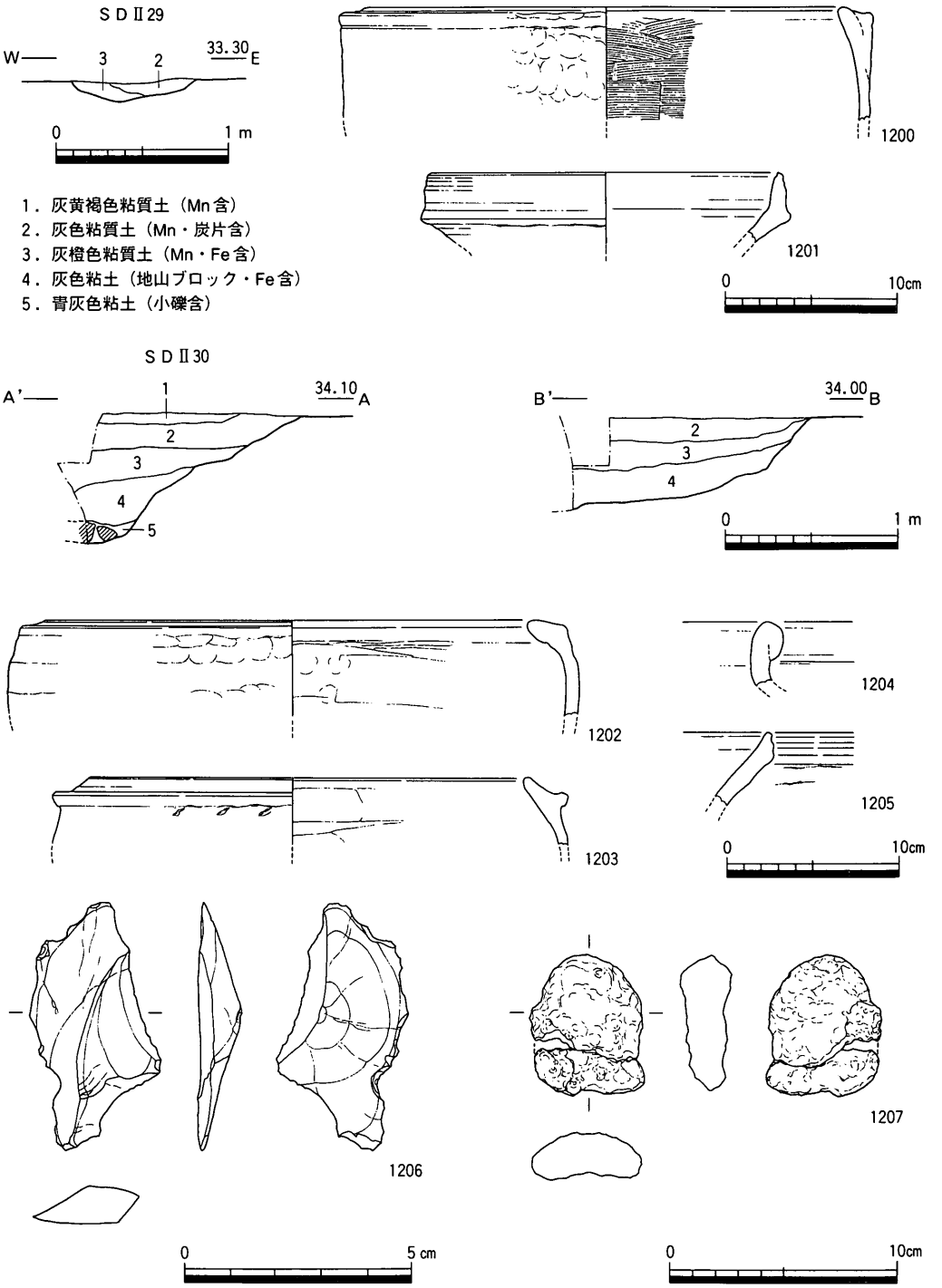
遺物は，土師質土器細片３点とサヌカイト剥片１点が出土したに過ぎず，細かな時期を特定するまでには至らなかった。

ＳＤⅡ29・30（第200図）

８区西端で検出した南北溝と，それに直交して東に延びる溝状遺構である。ＳＤⅡ12・27より後出する。調査区中程で，旧水田面の造成による比高0.4ｍの段差が存在し，南北溝の北半部（ＳＤⅡ29）と南半部（ＳＤⅡ30）はこの段差によって分離され連続せず，また東西溝部分は延長3.5ｍ程が確認されたに過ぎない。この段差部分で，両溝底面の標高に約0.1ｍの比高差が生じている。また，両溝の規模は，上面の削平を考慮してもなお大きな隔たりがあり，後述する埋土の点やＳＤⅡ30の溝底部の位置関係からも，両溝を連続した一連の溝と捉えることは困難であった。しかしながら，両溝の出土遺物に顕著な時期差は認められず，流路方向や位置関係からも，全く別の溝と理解することも困難であり，ＳＤⅡ29は，ＳＤⅡ30より分岐し併走する溝として理解するのが妥当と判断された。

ＳＤⅡ30は，流路方向Ｎ10°Ｅ前後に配され，現状の地割りにほぼ並行し，やや弧状を呈しながら北に流下する。西肩は調査区外に位置するため，溝東半部のみが調査され，溝底まで確認できたのは溝南半部の一部に限られる。幅1.5ｍ以上，深さ0.8ｍ以上，断面形は緩やかに掘り込まれた概ね逆台形状を呈し，検出面下0.3ｍで僅かなテラスが存在し段掘りとなる。想定される溝幅は約３ｍに達し，幹線水路と目される。埋土は，上下２層に大別され，両層の境は上記テラス部に相当する。上層は，灰色系粘質土が堆積し３層に細分される。ほぼ水平に堆積しており，溝の機能廃絶後の自然堆積層であろう。下層は溝機能時の堆積層と考えられ，グライ化した灰色系粘土がレンズ状に堆積する。

一方，ＳＤⅡ29は，幅0.7ｍ，深さ0.1ｍ程の小溝である。南端部でＳＤⅡ30東岸に取り



第200図　ＳＤⅡ29・30断面図（１/40），出土遺物実測図（１/３・２/３・１/４）

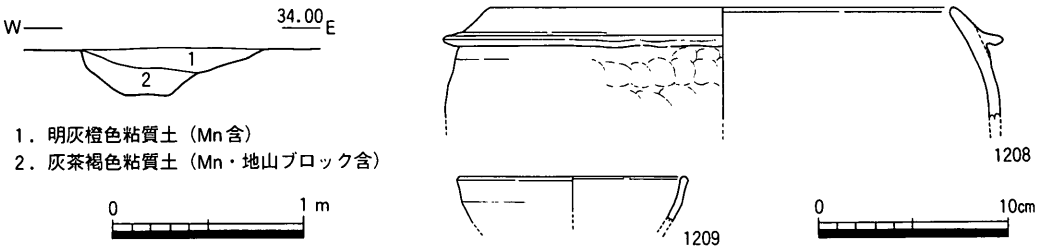
付くように若干湾曲し，北に流下する。なお，ＳＤⅡ29では下層の堆積は認められず，上層下位２層のみが堆積する。

遺物は両溝より図示したものの他，弥生土器，須恵器，土師質土器擂鉢・足釜・鍋，備前焼甕等の小片や，サヌカイト剥片等が若干量出土した。出土遺物中過半を占めるのは，本来的にはＳＸⅡ21に包含されていたであろう弥生土器である。1200・1201がＳＤⅡ29，1202～1207がＳＤⅡ30の出土遺物である。1200・1202は土師質土器鍋。両者とも口縁部と鍔部は一体化し，もはや鍔本来の機能は窺うことはできない。1202の口縁部はやや強く内傾し，より後出する可能性がある。また胎土中に黒雲母粒を多量に含む。出土遺物中最も後出すると考えられ，16世紀代に位置付けられる。1201は備前焼擂鉢口縁部。内面には僅かに条数不明の摺目を認める。口縁部は上方へ長く引き伸ばされる。備前焼Ⅳ期後半を想定する。1203は土師質土器足釜。14世紀後半代に遡るが，本溝の開削時期を示すかどうかは不詳。1204は備前焼甕。口縁部はやや外傾し，端部は玉縁状に肥厚する。備前焼Ⅲ期に位置付けられる。1205は瓦質土器鉢口縁部。おそらく擂鉢となろう。口縁端部は上方へ摘み上げられ，直立する端面には２条の凹線を認める。15世紀前半代を前後する時期であろう。1206はサヌカイト製の横長剥片。1207は椀形鍛冶滓。分析結果は第３章に記す。上記資料中には若干の時期幅を認めるが，それが溝の継続期間を示しているかどうかまでは捉えることができなかった。しかし，15世紀代の遺物は一定量出土しており，本溝が幹線水路となることを考慮すれば，15～16世紀にかけて本溝が使用されていた可能性は高い。

ＳＤⅡ31（第201図）

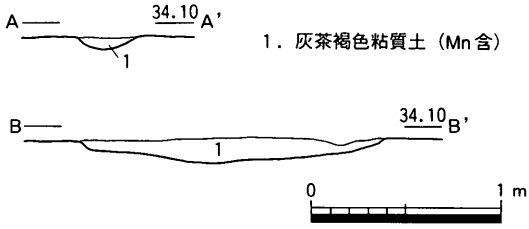
８区西端付近で検出された直線溝である。ＳＤⅡ12より後出する。上記ＳＤⅡ30と1.8ｍ程離れて南北に並走する。北端は旧水田面の造成により損なわれ，南端は調査区外へ延長し，約20ｍを検出した。幅1.0ｍ，深さ0.25ｍ前後を測り，断面形は浅い逆台形ないしは皿状を呈する。底面の標高は南端で34.0ｍ前後を測り，ＳＤⅡ30と比して0.7ｍ程高い。埋土は，ＳＤⅡ30上層に近似した灰褐色系粘質土が堆積し，２層に細分された。位置関係や後述する出土遺物の点からＳＤⅡ30と併存していた可能性が高く，ＳＤⅡ30の補完的な水路と考えられる。

遺物は図示したものの他，弥生土器，須恵器，土師質土器皿・足釜などの小片20～30点程度の他，焦土粒などが若干量出土した。２点を図示した。1208は土師質土器足釜。楠井遺跡足釜ＢⅡ類に相当する。胎土の面でも楠井窯産として無理はない。14世紀代に位置付けられ，混入の可能性が高い。1209は中国産青磁碗。上田分類Ｅ類（上田1982）に相当す



第201図　ＳＤⅡ31断面図（１/40），出土遺物実測図（１/４）

る。15世紀後半から16世紀初頭前後に位置付けられ，ＳＤⅡ30の時期とほぼ重なる。



第202図　ＳＤⅡ33断面図（１/40）

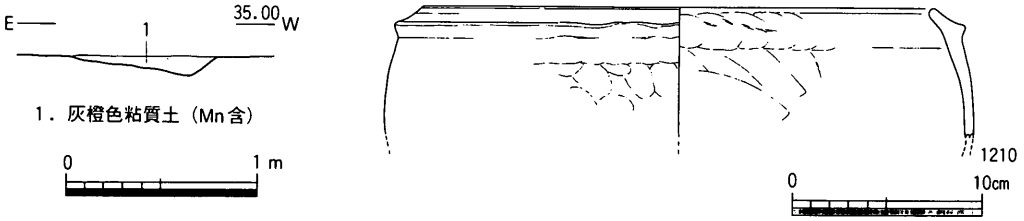
ＳＤⅡ33（第202図）

８区南半部で検出された小溝である。東西方向に配され，東端に南北1.6m，深さ0.15m程の溜まり状の浅い落ち込みを伴う。東への延長方向は，ＳＸⅡ20南端に合致する。落ち込み部を含めた延長8.3m程を検出したに過ぎない。幅0.3m，上面は顕著な削平を蒙っており，残存深は0.05mを極めて浅く，断面形は皿状を呈する。流路方向はN74°Wで，ほぼ現在の地割りの方向に合致する。底面の標高は33.9m前後でほぼ一定し，流下方向は不明である。なお，周辺には当該時期の多数の柱穴群が存在し，溝南側にはＳＢⅡ36・37の２棟の建物遺構が配される。直接建物遺構との関連を問うことは困難だが，柱穴群に付随する可能性が高いと判断された。埋土は，灰茶褐色粘質土の単層であった。

遺物は，土師質土器皿・碗・足釜・鍋等の小片が，少量出土したのみである。ほぼすべて，図化し得ないまでに小片化している。出土遺物からすれば中世前半代に位置付けられようが，周辺遺構との関連からすればより後出する可能性も残される。

ＳＤⅡ35（第203図）

９区東端で検出された溝状遺構である。調査区東端より僅かに屈曲して，N10°Eの方向に直線状に配される。流路方向は，概ね現在の地割りの方向に合致する。南北両端は調査区外へ延び，延長約11mが確認されたに過ぎない。底面の標高は，南端で34.8m，北端で34.7m前後と，僅かながら北へ傾斜する。幅0.7～0.8m，深さ0.1mと浅く，断面形は西半部がやや深くなる皿状を呈する。埋土は灰橙色粘質土の単層であった。



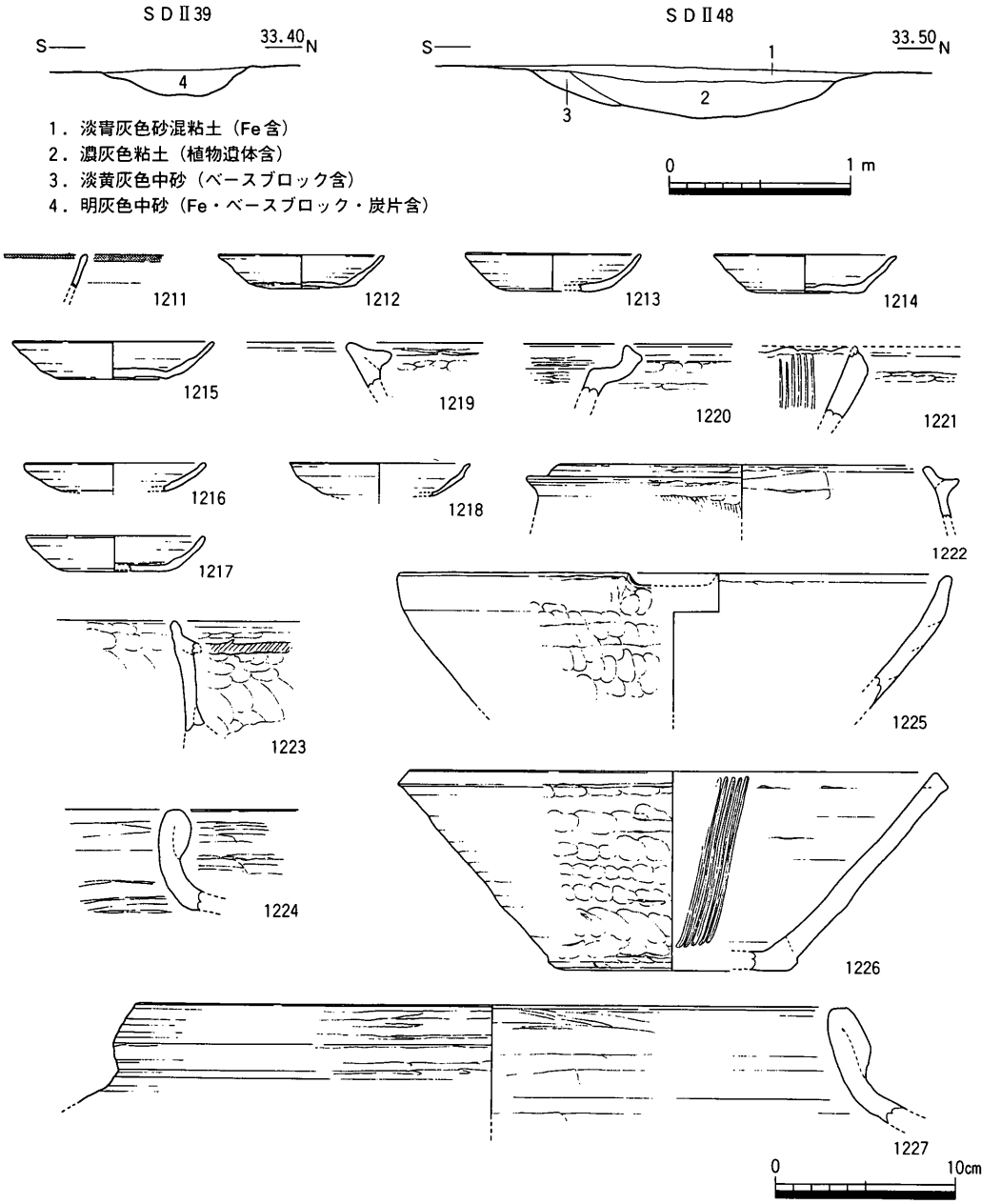
第203図　ＳＤⅡ35断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

遺物は，弥生土器，須恵器坏蓋，土師質土器脚等の小片が，少量出土したに過ぎない。1点のみ図化した。1210は土師質土器足釜。楠井遺跡足釜ＢⅣないしはＣ類に相当し，15世紀代に位置付けられる。

ＳＤⅡ39・48（第204図）

10ａ区第1面南端より10ｂ区第1面へ逆Ｌ字状に屈曲する水路（ＳＤⅡ48）と，屈曲部より分岐して東流する水路（ＳＤⅡ39）である。10ａ区で検出された東西溝部分をＳＤⅡ48ａ（以下，ａ溝と略す），10ｂ区で検出された南北溝部分をＳＤⅡ48ｂ（以下，ｂ溝と略す）と呼称する。重複関係より，ＳＤⅡ12・38より後出する。

ＳＤⅡ48は，幅1.6～2.6m，深さ0.2～0.6mを測る幹線水路と目される大溝である。ａ溝の流路方向N70.0°Ｗ，ｂ溝のそれはN15.2°Ｅに配され，現状の地割りの方向に概ね合致する。また，西・南両端は調査区外へ延長する。なお，ａ溝は後述する屋敷地の区画溝ＳＤⅡ43とほぼ平行し，中心間の距離は4.80mを測る。底面の標高は，ａ溝西端で33.17m，屈曲部で33.06m，ｂ溝南端で33.40mをそれぞれ測り，底面の高低差からすれば，ａ溝は緩やかに東流し，ｂ溝は同様に北流する。したがって，ａ・ｂ両溝屈曲部が最深部となり，後述するＳＤⅡ39へ流下していた可能性が高い。なお，ＳＤⅡ39との分岐点では，調査区際であったこともあり，堰等の水利施設は確認していない。土層断面図は，ここではａ溝をのみ図示しておく。ｂ溝の土層堆積状況も，後述する下層が溝最深部で検出された以外ａ溝と大差はない。埋土は3層に細分された。下層は，中層に大きく削られ南壁際のみに辛うじて残存する淡黄灰色中砂である。地山粘土のブロック土をやや混在し，強い水流によって溝底面を抉りながら，ほぼ溝上面付近まで一気に堆積した可能性が想定される。さらに，この下層部分で溝底面は僅かな立ち上がりをみせており，さらに北側は大きく削り込まれて中層が堆積する。こうした断面観察から，本溝開削時は幅0.9m程の溝であったと推定され，洪水砂層と思われる下層の堆積によって溝の機能は一端途絶し，中層段階に大きく改修され，規模を増大させたものと判断された。なお，中層は植物遺体を多



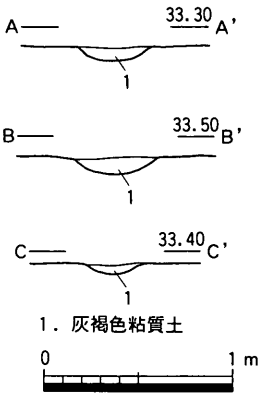
第204図　ＳＤⅡ39・48断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

く含む強粘質の濃灰色粘土層で，出土遺物の大半は本層より出土している。もはや中層段階では顕著な水流の存在は窺えず，低湿地状を呈した穏やかな環境下で埋没が進行したものと思われる。上層は，溝上面を広く覆って堆積する淡青灰色粘土で，溝埋没後の窪地に堆積した自然堆積層である。

遺物は，弥生土器，須恵器坏蓋・甕，土師質土器小皿・坏・足釜・鍋，瓦質土器擂鉢，備前焼大甕体部等の破片が若干量出土した他，サヌカイト剥片１点，炭化材片１点等がある。大半は，器種を特定できないまでに小片化しており，谷７上面に位置することから，古代以前の遺物の比重が高い。この内，11点を選んで図示した。1212～1214はａ溝上層，1216～1218・1222～1224・1226・1227がａ溝中・下層，1211・1215・1219～1221はｂ溝上層，1225がｂ溝下層出土のそれぞれ遺物である。1211は西村産瓦質土器碗。口縁端部内外面に炭素が吸着する。13世紀前半代には納まるものと考える。本溝の開削時期の一端を反映している可能性は高いが，小片でもあり断定するまでには至らない。1212～1218は土師質土器皿。外底面は確認される個体はすべて回転ヘラ切り調整される。1216・1217のみ器壁が他と比して厚く，調整もやや粗雑な一群である。1215は小片のため復元された口径にはやや難がある。他はほぼ同法量の皿であり，大きな時期差は想定し得ない。1219・1222・1223は土師質土器足釜。1222は楠井遺跡足釜ＢⅢ類，他は同ＢⅣ類に相当する。14世紀後半から15世紀前半代に位置付けられる。1220は土師質土器鍋。口縁部は内湾し，端部を内上方へ摘み出す。楠井遺跡鍋ＢⅢ類に相当する。しかし，胎土中に黒雲母粒をやや多量に含み，楠井窯産とは異なる。1221・1225・1226は瓦質土器擂鉢。1225は小片のため内面に摺目は確認できなかったが，形状から擂鉢となる可能性が高い。口縁部を四角く納めつつ上端を小さく摘み上げる1221・1226と，口縁部を鈍く屈曲させ上方へ引き伸ばす1225の２者が認められる。1221は内面に６条１単位の，1226は５条１単位のそれぞれ摺目を施す。楠井遺跡擂鉢ＡⅠないしはＡⅡ類に相当する。1225は口縁部の一端に片口を有し，擂鉢ＡⅢないしはＢ類に相当し，上記２例よりはやや後出する。1224・1227は備前焼甕。1224の口縁部は直立して立ち上がり，玉縁状に肥厚する。1227では口頸部は内傾し，玉縁状に肥厚した後上方へ引き伸ばされる。前者は備前焼Ⅲ期，後者は同Ⅳ期に位置付けられる。上記資料は概ね14世紀から15世紀代の時期幅を有しており，後述するような理由からもＳＤⅡ30との併存の可能性が想定される。

ＳＤⅡ39は，ＳＤⅡ48ａ東端より分岐し，Ｎ86°Ｗ方向へ約11ｍ程延び，鈍く折れて調査区外へ延長する。底面の標高は，東端で33.0ｍ前後，ＳＤⅡ48との合流部で33.15ｍを測り，上記したようにＳＤⅡ48より分岐して緩やかに東へ流下する。なお，８区では延長部を確認していないことから，ほぼ同時期に併存していたと想定されるＳＤⅡ30へ合流するものと考えておきたい。溝は幅0.8～0.9ｍ，深さ0.1～0.2ｍで，断面形は概ね逆台形状を呈する。溝上面は調査時に掘り込んでしまったため，検出した規模はＳＤⅡ48と比して

かなり小規模だが，調査区東壁での観察によれば，ＳＤⅡ48とほぼ同規模の溝に復元される。埋土も，ＳＤⅡ48の埋土に近似し３層に細分された。上層の色調が若干異なるのみで，ＳＤⅡ48と堆積状況に大きな差異は認められないことから，ほぼ同時期に開削され埋没したものと考えられる。遺物は，土師質土器皿等の小片が３点出土したのみである。



第205図　ＳＤⅡ43断面図
（1/40）

ＳＤⅡ43（第205図）

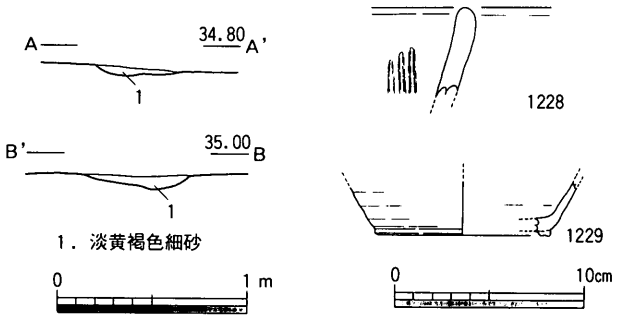
10ａ区第１面西半部で検出した平面Ｌ字状を呈する溝状遺構である。南北溝をＳＤⅡ43ａ（以下，ａ溝と略す），東西溝をＳＤⅡ43ｂ（以下，ｂ溝と略す）と呼称する。両者の埋土に大きな差異はなく，同時併存した一連の溝である。前述したように，ＳＢⅡ41と整った位置関係にあり，建物は１棟が復元されたのみだが，屋敷地の西・南辺を区画する区画溝として機能すると考える。

ａ溝は延長約14.5ｍを検出した。幅0.2～0.4ｍ，深さ0.1ｍ前後を測る小溝で，断面形は皿状を呈する。流路方向はＮ12.5°Ｅに配される。底面の標高は，南端屈曲部で33.29ｍ，北端で33.08ｍを測り，底面の高低差からすれば緩やかに北に流下する。埋土は灰褐色粘質土の単層である。

ｂ溝は，幅0.3ｍ前後，深さ0.05ｍで，断面形は浅い皿状を呈する。流路方向は，やや蛇行し明確な方向を示さないが，概ねＮ69°Ｗに配されａ溝とは斜交する。上面は顕著な削平を蒙っており，残存深はかなり浅く，延長13.8ｍを検出して東端は徐々に浅くなり途切れる。底面の標高は，溝東端で33.3ｍ前後で一定し，高低差は乏しく明確な流下方向を示さない。埋土は単層で，ａ溝と同質である。

さて，調査区内で，屋敷地東辺を区画する施設は何ら検出していない。区画が敷地の２ないし３辺に限られるとは考え難く，東辺を区画する施設の存在が予想され，後世の削平により消失したか，あるいは調査区外の里道下に区画溝が所在するかのどちらかが可能性として想起される。もし仮に，前者の場合，溝の位置は先のＳＤⅡ48との関係から，ＳＤⅡ48ｂ溝の延長ラインが最も可能性が高いと判断され，東西幅約27ｍ，敷地面積460m^2以上の屋敷地が復元される。さらに，後者の場合，屋敷地の東西幅は約50ｍに達し，面積700m^2以上の屋敷地が復元される。ここでは２案を提示するが，論拠に乏しいためこれ以上の推測は控える。

遺物は，器種を特定できないまでに小片化した土器片４点が出土したのみである。出土遺物より，遺構の時期を特定することは困難であり，上記周辺遺構との位置関係などから，14～15世紀を中心とした時期に位置付けられるものと判断した。

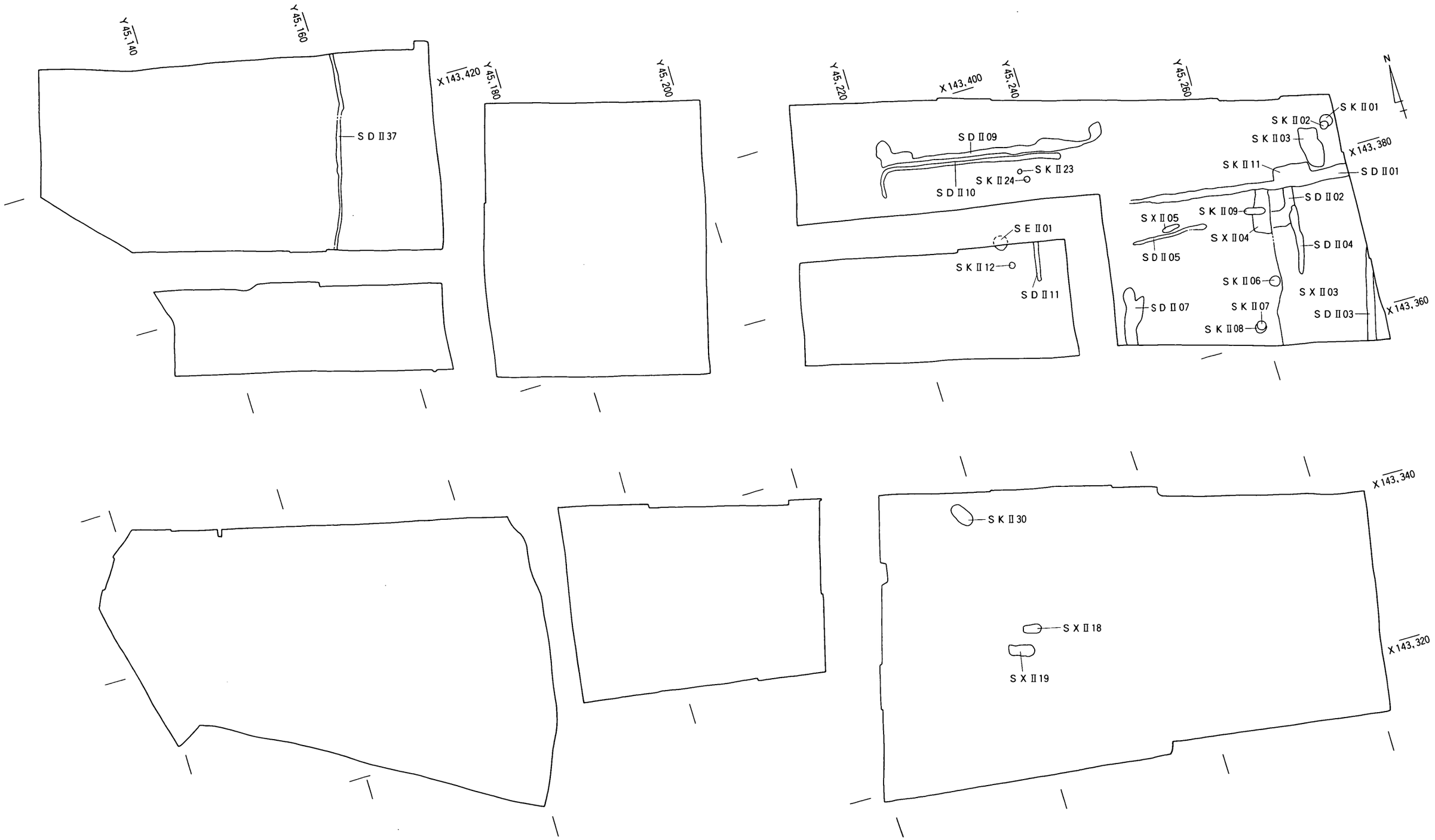


第206図　ＳＤⅡ70断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4）

ＳＤⅡ70（第206図）

11区西端，ＳＤⅡ71西岸上面で検出した小溝である。ＳＤⅡ71上層埋没後上面より掘り込まれている。ＳＤⅡ71にほぼ沿って，緩やかに蛇行しながら北流すると考えるが，上面の著しい削平によって，断続的に検出されたのみである。流路方向の一致から，ＳＤⅡ71の後継水路と考えるには余りにも規模の相違が著しく，本溝西岸が丘陵Ｅの地形変換点に位置することから，丘陵部からの落ち水を流下させる排水溝として開削されたと考える。つまり，本調査区の平準化，耕地化と本溝の開削を相互に関連させて考えることができよう。溝は，幅0.4～0.6m，上面は著しい削平を蒙り，残存深は0.05～0.1mしかなく，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は，淡黄褐色細砂の単層であった。底面の標高は，34.59～34.80mを測り，緩やかに北に流下する。

遺物は，須恵器や土師質土器の小片が10点程度出土したのみである。この内器種を特定できない小片を除いて，２点を図示した。1228は土師質土器擂鉢。口縁部は鈍く屈曲し，端部を丸く納めるのみ。内面には簡略化された３条１単位の摺目が施される。楠井遺跡擂鉢ＢⅡ類に相当する。15世紀後半代を前後する時期に位置付けられると考えられ，本溝の継続期間の一端を示す。1227は須恵器坏。外底面に低い高台が付され，８～９世紀代に遡る。ＳＤⅡ71からの混入であろう。



第207図　近世主要遺構分布図（1/500）

第５節　近世の遺構・遺物

柱穴（第208図）

当該時期の柱穴と推測される遺構は，６区を中心に多数検出している。しかし，本章第１節で記したように，遺構面の削平深度が深いこともあって，明確な建物遺構の復元には至らなかった。柱穴と推測される遺構より出土した遺物について，当該時期の遺構の参考資料とすべく以下報告する。

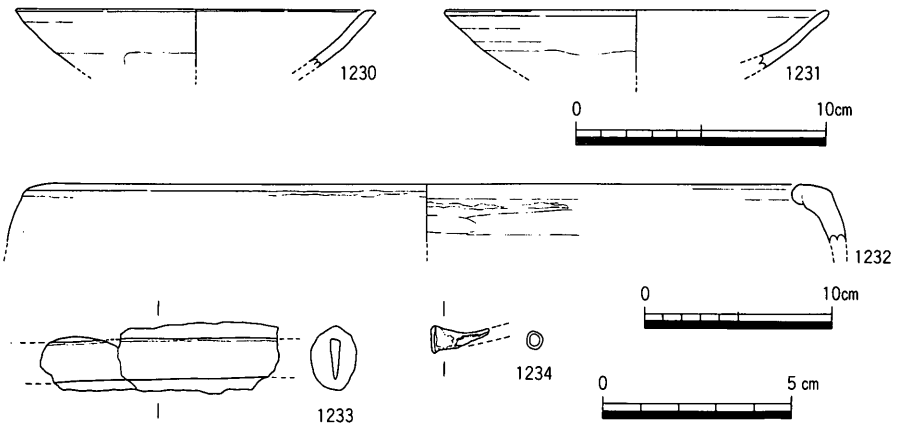
６ａ区ＳＰⅡ061　1230は肥前系陶器灰釉皿。17世紀前半代に位置付けられる。

６ａ区ＳＰⅡ063　1231も肥前系陶器灰釉皿。1230とほぼ同時期と考える。

６ａ区ＳＰⅡ285　1232は土師質土器焜炉。口縁部の小片のため火鉢の可能性も残る。胎土中には多量の黒雲母粒が含まれる。

６ａ区ＳＰⅡ359　1233は不明鉄製品。錆が著しく詳細は不詳だが，断面形状から刀子と考えた。

６ａ区ＳＰⅡ694　1234は煙管の吸口と考える円筒状の銅製品。

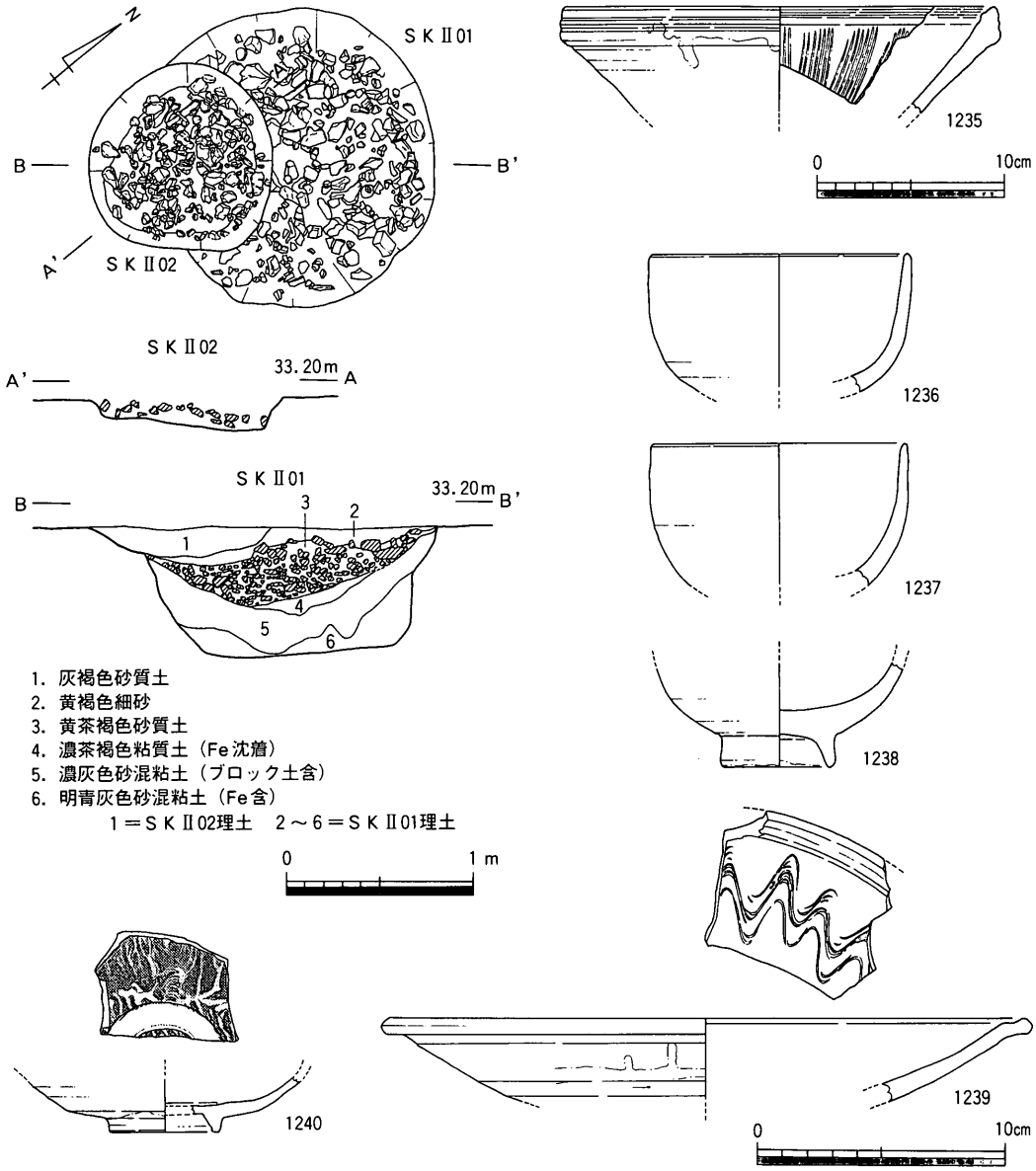


第208図　柱穴出土遺物実測図（１/３・１/４・１/２）

土坑

ＳＫⅡ01（第209図）

６ａ区北東部で検出した土坑である。後述するＳＫⅡ02と重複し，切り合い関係よりＳ



第209図　ＳＫⅡ01・02平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/4・1/3）

ＫⅡ02より先行する。平面形は，直径1.55mの略円形を呈し，深さは0.65mを測る。断面形は，上位0.2mは緩やかに掘り込まれ擂鉢状を呈し，それより下位では直に近く掘り込まれ箱状を呈する。底面は，概ね平坦であった。埋土は3層に大別された。上層は，遺構上面を覆う堆積層で黄褐色細砂である。最深部で20cmの層厚を有し，均質な土質を呈することからすれば，人為的な埋め戻し土とも考えられる。中層は2層に細分される。上位には，拳大から人頭大の礫を多量に含んだ黄茶褐色砂質土が堆積し，本層も人為的な埋め戻

し土であろう。下位は，やや量は少ないが拳大の礫を含んだ濃茶褐色粘質土で，基本的には上位層と同質と考えられるが，鉄分の沈着が顕著であることから細分した。下層も２層に細分された。いずれもグライ化した灰色系砂混粘土層が堆積し，上位層下面は起伏が顕著に認められ，また下位層は周壁上位の崩落に起因すると考える地山層のブロック土を含む。なお，下層はいずれも滞水下の堆積が想定される。

遺物は，主に中位層中より出土した。５点を図示した。1235は産地不詳の陶器擂鉢。摺目は７条１単位で比較的密に施される。よく使い込まれており，内面は磨耗が顕著。内面及び外面口縁部に塗土が施される。1236～1238は肥前系陶器の呉器手碗である。各々釉調は異なり，別個体である。いずれも２次的被熱を被っており，部分的に釉の変色や剥落が認められる。1239は肥前系陶器のいわゆる唐津刷毛目皿である。本例も２次的被熱によって釉は融落し，痕跡程度しか確認できない。内面に波状の刷毛目文を認める。上記資料は，いずれも17世紀後半から18世紀前半代に位置付けられる。また，図示した遺物の他，須恵器，土師質土器皿・足釜・擂鉢？，肥前系陶器刷毛目碗・鉢，肥前系陶胎染付碗，備前焼小壺・甕・擂鉢，瓦質焼成の平瓦小片等の土器・陶磁器類が若干量と，漆器椀１点が出土している。漆器椀は，中層上位の礫間隙より出土したが，出土時には木質部は既に腐朽しほとんど遺存しておらず，漆膜のみが認められた。内面赤漆，外面黒漆の中椀と考えられる。また，本土坑出土遺物には２次的な被熱の痕跡のあるものが散見され，さらに同種同一器形のものが複数個体確認され，時期的にも一部の混入と考えられる遺物を除けばまとまるため，火災等による廃棄の可能性が想定される。

ＳＫⅡ02（第209図）

６ａ区北東部で検出した集石土坑である。ＳＫⅡ01南西部上面より掘り込まれる。平面形は，径1.0ｍのややいびつな円形を呈する。深さは0.15ｍあり，断面形は逆台形状を呈する。底面は概ね平坦であるが，やや北に深く傾斜する。集石は，長軸２～10cm程度の石材が埋土中に散在して出土した。本来的には，先のＳＫⅡ01に包含されていたものが，再堆積したものと推測され，やや小形の石材のみを選択して投棄されている。埋土は，灰褐色砂質土の単層であり，掘削後短期間の内に埋め戻されたものと推測される。

遺物は，石材の間隙より土器・陶磁器が出土したが，いずれも小片であり接合可能な資料はない。出土遺物の大半は，ＳＫⅡ01からの混入と考えられる。１点のみ図示した。1240は，肥前系陶器の小皿である。高台は低いが鋭く削り出され，見込みを蛇の目釉剥ぎする。底部を除く内外面に施釉され，内面には打刷毛目文が施される。18世紀前半代に位置付け

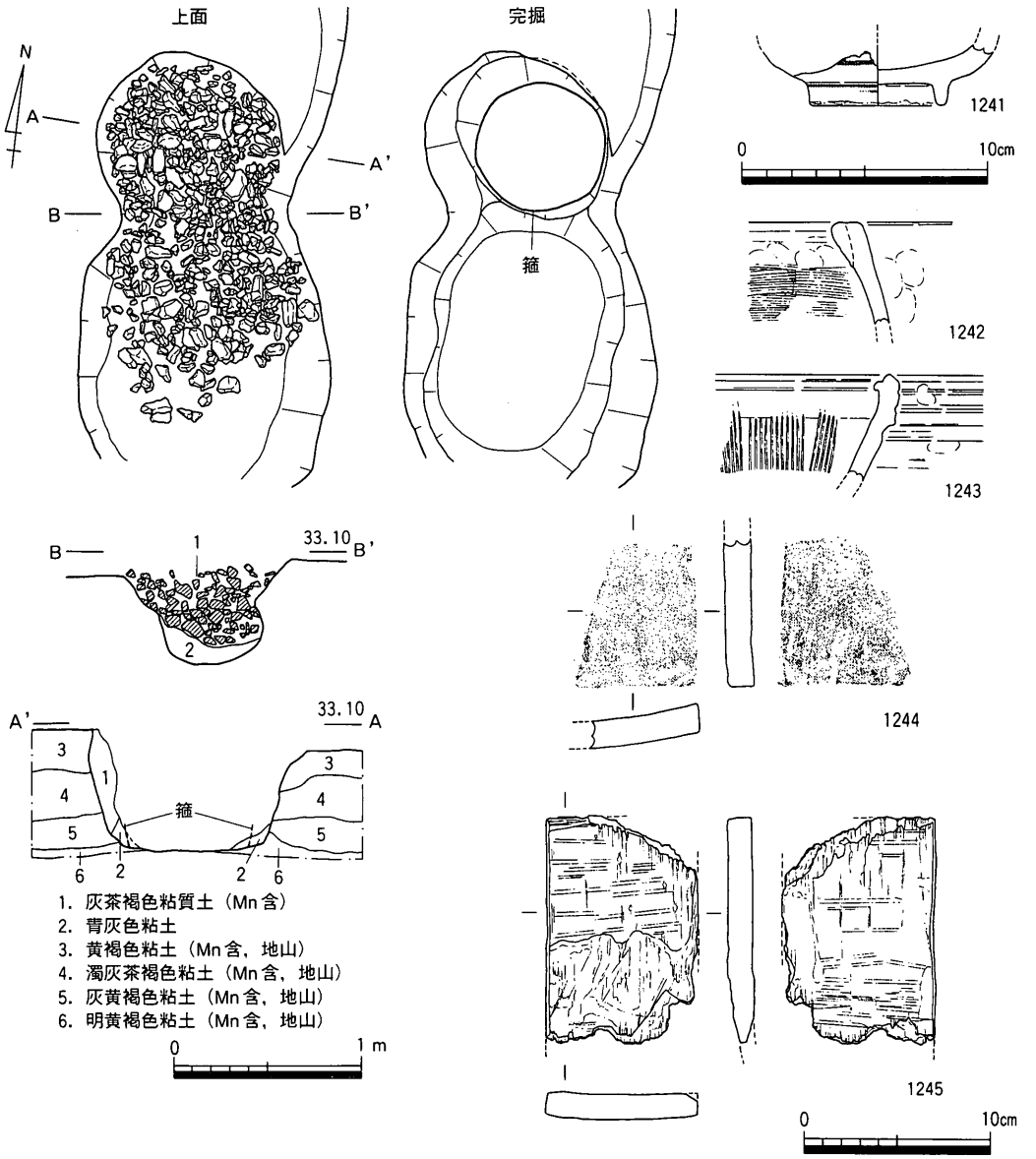
られる。遺物は図示したものの他，須恵器，土師質土器，肥前系陶器刷毛目碗の小片が各々１点出土したのみである。

ＳＫⅡ03（第210図）

６ａ区北東部で検出した土坑である。平面形は，長軸約5.0m，短軸約2.3mの南北に長い，いびつな隅丸長方形を呈する。主軸の方向はＮ１°Ｅと，ほぼ真北に近い。底面は概ね平坦で，断面形は浅い皿状を呈する。この落ち込みの東縁辺に接して，長軸2.4～2.5m，短軸1.0～1.3mの平面円形と隅丸方形の土坑が，落ち込み床面より南北に連結して検出された。これら２基の土坑を含めて，ＳＫⅡ03として報告する。土坑の平面プランは，いびつで変則的な形状を呈するが，両土坑は礫を多量に含んだ灰褐色粘質土で充填されており，同時期に人為的に埋め戻されたものと考えられる。両土坑の底面の標高はほぼ等しく各々概ね平坦で，中央部に両土坑を分かつ高さ10cm程の高まりが認められた。埋土の状況は，両土坑の埋没時期の同時性を示してはいるが，土坑底面の形状からすれば，その掘削時期は異なっていた可能性もある。断面形状は，基本的には検出面下20～30cmは緩やかに掘り込まれ，それより下位の傾斜は強くなり一部袋状を呈する部位も認められる。円形土坑の中央底面より，箍が出土している。箍は，幅２cm程の竹４～５本を組紐状に回したもので，２段分程が出土した。本来は，桶が据えられていたものと考えられるが，桶の側板等は出土せず，土坑廃棄時に抜き取られたものと考えられる。また，箍径は70cm程度で土坑掘り方の径とほぼ等しく，桶設置時の裏込めの土層も確認されなかったことから，当初より桶を据え付ける目的で，桶外径に合わせて本土坑を掘削したものと考えられる。

埋土は３層に細分された。上位層は長軸約5.0mの上位落ち込み部を覆う人為的な埋め戻し土と考えられる土層で，地山ブロック土を含んだ灰色砂混じり粘土である。中位層以下が，落ち込み床面で確認された土坑部の埋土となる。中位層は，上記礫混じりの灰茶褐色粘質土で，土坑上面より40cm程の厚さで堆積していた。下位層は，グライ化した青灰色粘土層で，滞水下の堆積層と考えられる。上記箍は，本層中より出土しており，桶抜き取り後一定期間，土坑床面付近が滞水するようなオープンな状態であったことが想像される。なお，土坑は地山粘土層を掘削して構築されるが，透水層である砂礫層までは達しておらず，飲用水を目的とした井戸の可能性は低い。類似した遺構は，丸亀市郡家田代遺跡などでも検出されており，水溜め状の機能が想定されている（佐藤1996）。

遺物は，方形落ち込み部の土坑部の中位層中より主に出土した。遺物量は少なく，下記５点を図化し得たに過ぎない。1241は肥前系の陶胎染付碗である。1242は土師質土器の焜



第210図　ＳＫⅡ03平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3・1/4）

炉もしくは火鉢と考えられる口縁部小片である。胎土中に多量の黒雲母粒を含むことを特徴としており，類似した胎土を有する焜炉に，丸亀市郡家田代遺跡例（佐藤1996）がある。1243は堺もしくは明石産と考えられる陶器擂鉢である。内面は，11条1単位の摺目をやや密に施し，摺目上端は回転ナデによりナデ消される。口縁部形態から，白神典之氏の分類のⅠ型式に位置付けられる（白神1992）。1244は瓦質焼成の平瓦片である。焼成はややあまく，一部土師質に近い焼成を呈する。胎土は石英微砂粒を含む程度で，概ね精良である。

1245は板材。幅8.1cm，長さ12.1cm以上の板目材を使用する。樹種はマツ科の針葉樹。横断面形状がやや湾曲することから，桶側板の一部かとも考えられるが，箍痕跡は認められず，また小片でもあるため断定するまでには至らない。遺物は図示したものの他，土師質土器足釜，備前焼甕等の小片等が出土している。上記資料より，18世紀中葉から後半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

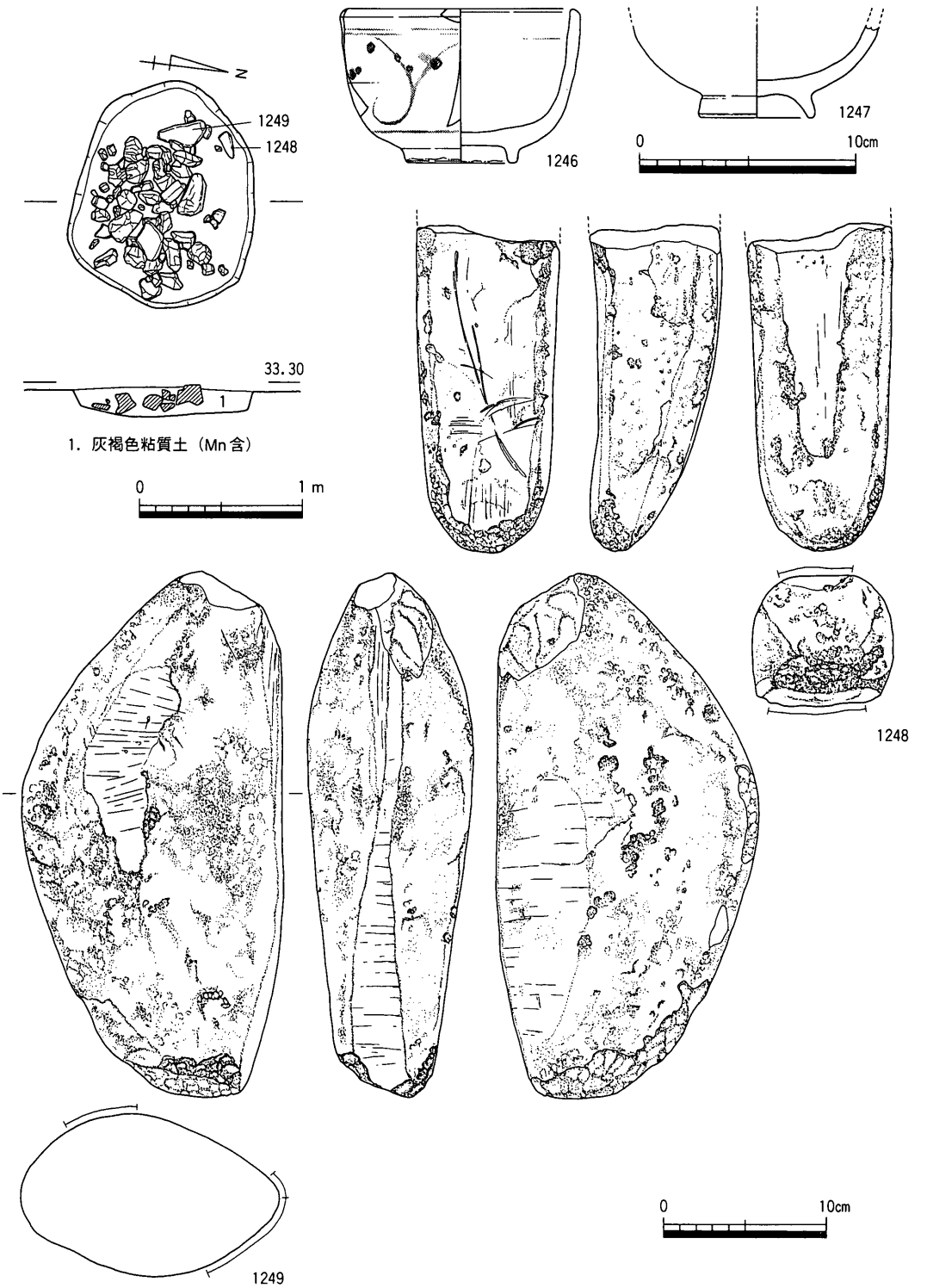
ＳＫⅡ06（第211図）

６ａ区中央南部で検出した集石土坑である。平面形は，長軸1.4m，短軸1.2mの東西にやや長いいびつな隅丸方形状を呈する。断面形は，概ね箱形を呈し，底面は平坦であった。埋土は，灰褐色粘質土の単層であった。集石は土坑やや南部に偏って検出され，一見平面プランは矩形を呈する。しかしながら，石材の長軸方向に統一性はみられず，また一部の石材は土坑底面より数cm程浮いており，上面のレベルも揃っておらず，石材の重なりも見られるなど，必ずしも意図的に据え置かれたとは断定できない。石材の大きさは，拳大程度のものから長軸30cm程度のものまでややばらつきがある。石材の種類には，砂岩，花崗岩系統，安山岩系統の３種の角礫，亜角礫がみられ，特に花崗岩系統の石材が多い。いずれも周辺の地山層中に含有されるもので，特に遠方より持ち運ばれたものはみられない。周辺部の整地もしくは何らかの掘削作業に伴って掘り出されたもののほか，砥石２点などが含まれることから，屋敷地内で使用していたものをも投棄したものと考えられる。

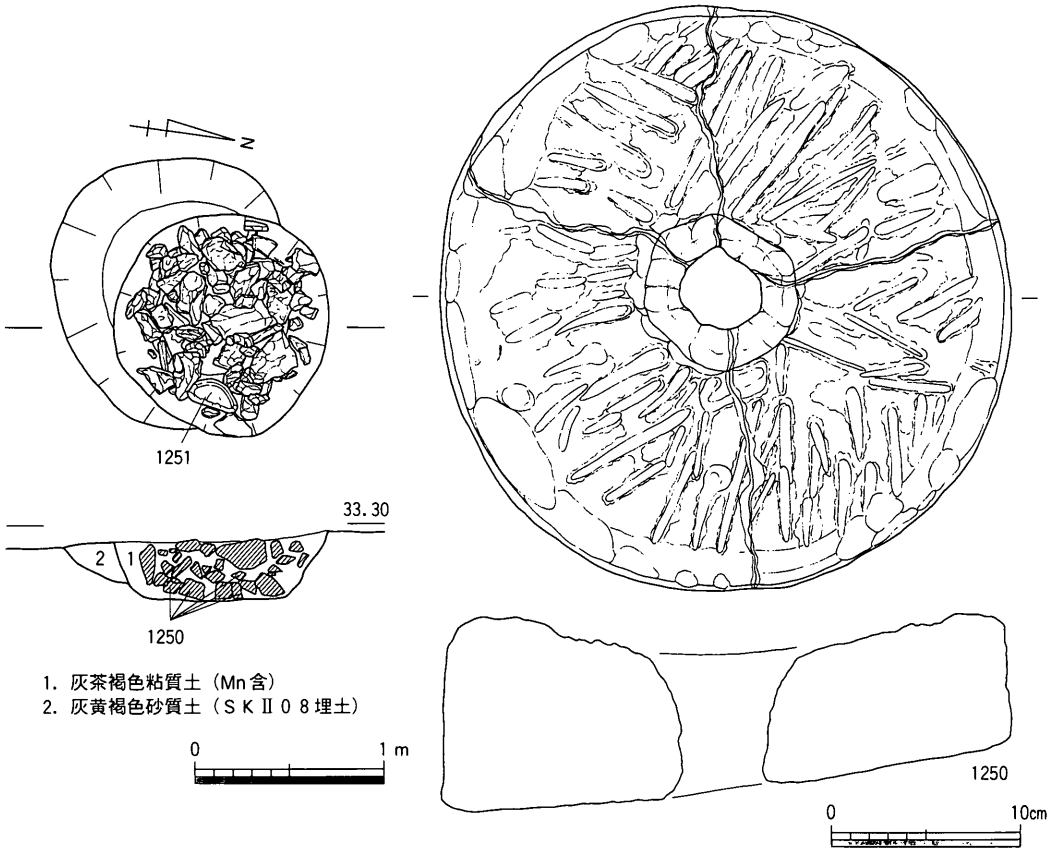
遺物は，多くは集石の間隙より細片となって出土した。コンテナ半箱程度の土器・陶磁器類が出土したが，完形に復元されるものはない。1246は肥前系陶器の陶胎染付碗である。外面に唐草文を描く。1247は肥前系陶器の呉器手碗である。いずれも17世紀後半から18世紀前半代に位置付けられる。1248は砂岩製の砥石。幅8.8cm，長さ20.1cm以上の棒状の石材を利用する。中央で半截され，上半部を欠損する。上下２面に縦方向の擦痕を認め，よく使い込まれて石目は潰れている。また被熱によるためか，部分的に赤変部分を認める。1249も砂岩製の砥石。最大幅16.1cm，長さ32.3cmの大形の自然礫を使用する。上下２面と１側面に使用痕を認めるが，側面を除いて擦痕は顕著ではない。なお，図示したものの他，弥生土器鉢，須恵器高坏，土師質土器皿・足釜，肥前系磁器小片等が出土している。上記資料より，18世紀中葉を前後する時期に位置付けられると考える。

ＳＫⅡ07（第212・213図）

６ａ区東半南端で検出した集石土坑である。ＳＫⅡ08と重複し，切り合い関係よりＳＫⅡ08より先行する。平面形は，径1.1m程の整った円形を呈する。深さは0.35mあり，底



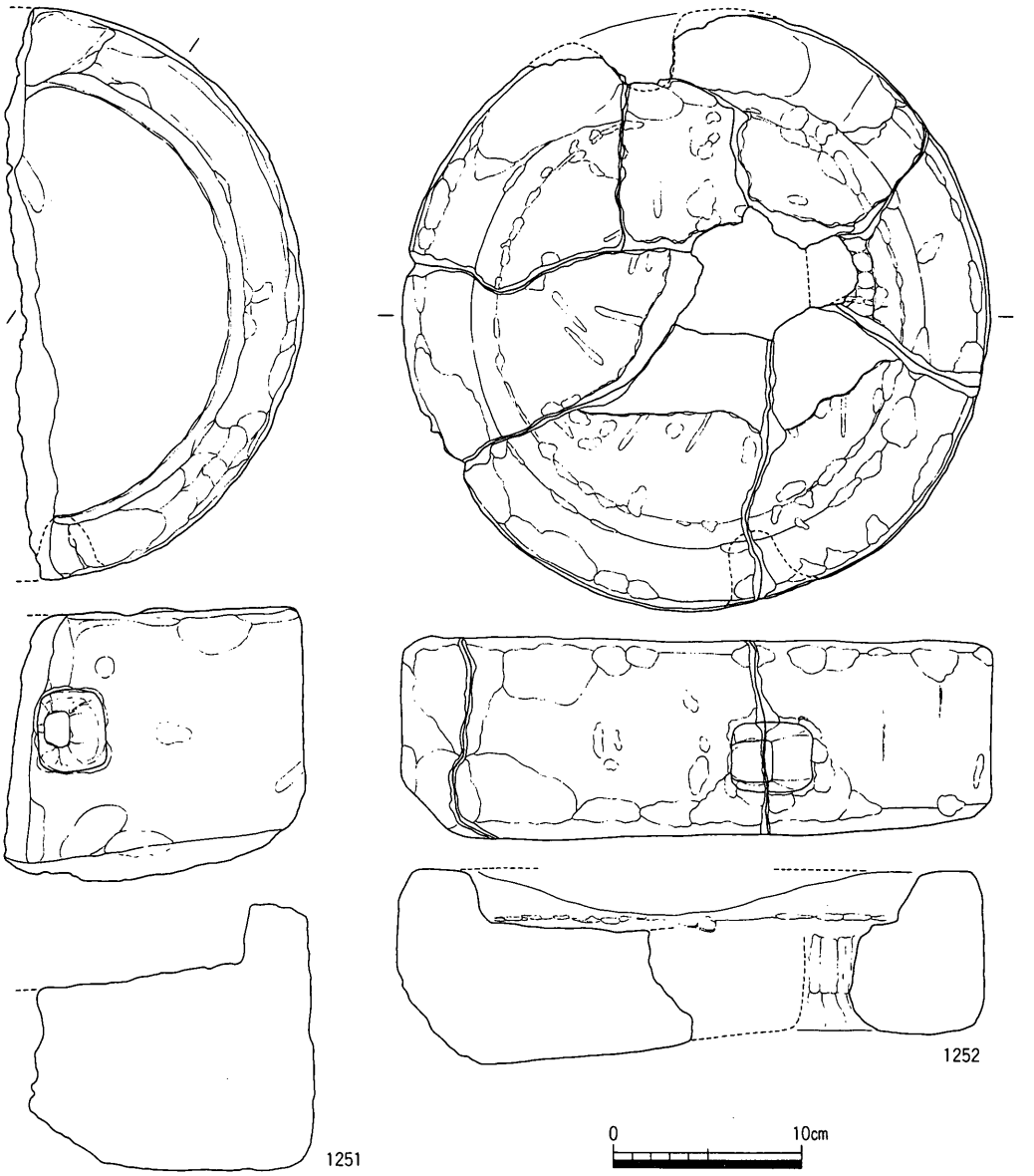
第211図　ＳＫⅡ06平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/３・１/４）



第212図　ＳＫⅡ07平・断面図（１/40），出土遺物実測図１（１/４）

面の標高は32.90mであった。断面形は逆台形状を呈し，底面はほぼ平坦であった。埋土は，灰茶褐色粘質土の単層であった。集石は，土坑ほぼ全面において出土し，むしろ石材の間隙に土砂が流入したといった感が強い。石材の大きさは，拳大程度のものから長軸30cm程度のものまでややばらつきがある。石材の種類には，花崗岩系統の角礫，亜角礫を主として，砂岩，安山岩系統のものが出土している。主体となる石材には，他の土坑と大きな差異は認められないが，特に片岩系統の石材が１点出土しており，これは徳島県吉野川南岸地域などから搬入された可能性が高い。この他，土坑底面を中心に，破砕された３個体分の石臼が出土している。土器・陶磁器類の出土は僅少なことから，一般的な生活残滓を破棄した廃棄土坑とは，やはり区別されるべきであろう。

遺物は，図示した石臼３点の他は，土師質土器大甕の底部破片や，土師質の平瓦片が少量出土したのみである。1250は角礫凝灰岩製の下臼である。上面には反時計回りに４分割・７～８条の条線が刻まれているようだが，使用時の追刻や剥離・磨耗などによって明瞭



第213図　ＳＫⅡ07出土遺物実測図２（１/４）

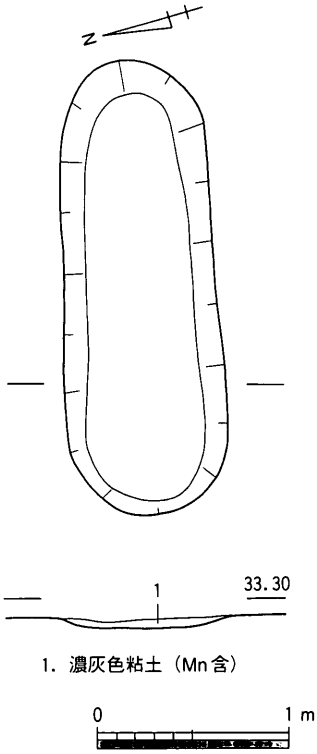
ではない。中央には軸受孔が貫通している。下面は平坦で，上面は周縁部が若干縁状に盛り上がり，中央軸受孔部へ向けて擂鉢状に窪むが，こうした形態は高松市東山崎・水田遺跡（蔵本他1992）や郡家田代遺跡（佐藤1996）など本地域の下臼に一般的に認められる。1251・1252も同じく角礫凝灰岩製の上臼。1251は中央で半截している。下面は凸面状を呈しており，上臼のこうした形態が，上記下臼の上面形状に対応するものであるかも知れな

い。1252の側面には１ヶの横打穴を認める。横打穴は側面に１対穿たれるのが通例のため，欠損部にもう１ヶの横打穴が穿たれていたものと考えられる。下面はよく使い込まれて，凹面状を呈する。土器類の出土が僅少なため，時期を特定することは困難だが，周辺遺構との関連などから，18世紀後半代を中心とする時期を想定しておきたい。

ＳＫⅡ09（第214図）

６ａ区東半中央で検出した土坑である。ＳＸⅡ04より後出する。主軸方向は，N78°ＷでＳＤⅡ01と概ね平行する。平面形は，長軸約2.4m，短軸0.9mの整った隅丸長方形を呈する。深さは，0.05m程と極めて浅く，上面はかなりの削平を蒙っているものと考えられる。底面の標高は33.15mであった。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は，濃灰色粘土の単層であった。

遺物は，土師質土器小片２点が出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが，ＳＸⅡ04より後出することから，当該時期以降に下ることは間違いない。



第214図　ＳＫⅡ09平・断面図（1/40）

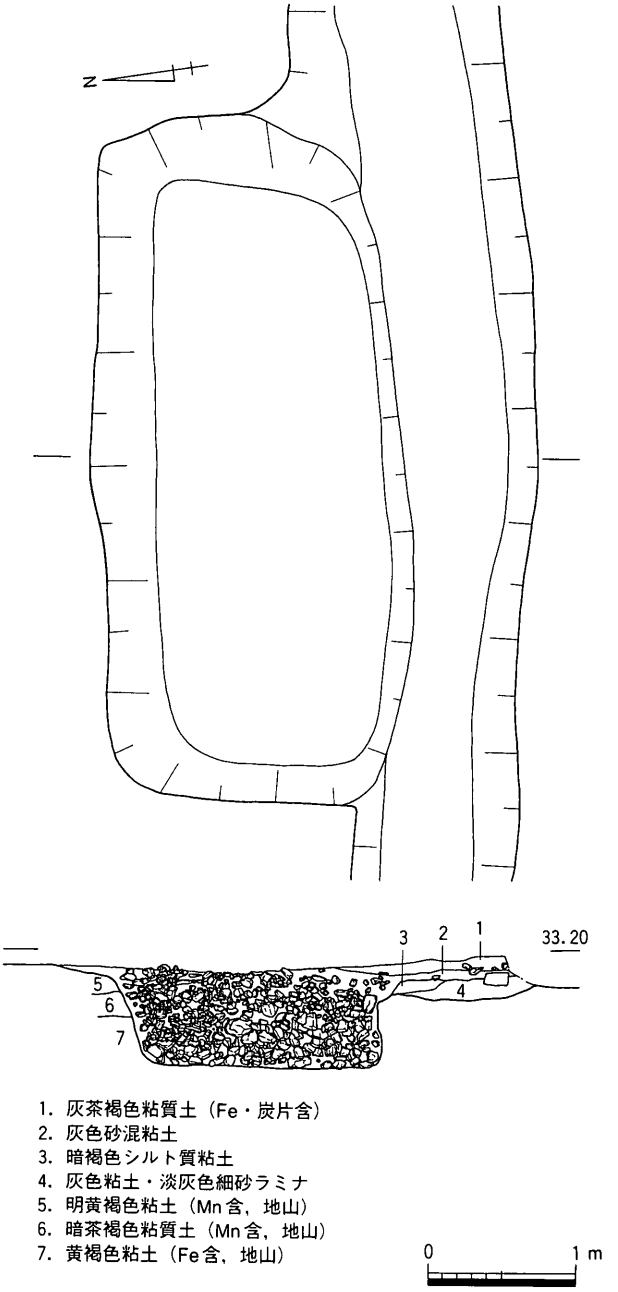
ＳＫⅡ11（第215～226図）

６ａ区東部で検出した土坑である。後述するように，溝ＳＤⅡ01と共に人為的に埋め戻されていることから，溝に付随する施設であり，水溜等の性格が想定される。しかし，土坑周壁には石積等の施設を伴っておらず，長期間の滞水条件に耐えられるものではない。長軸4.5m，短軸1.8m，深さ0.55mで，主軸の方向はＳＤⅡ01に一致する。平面形は整った長方形を呈し，断面形は概ね逆台形状を呈するが，南辺部は直に掘り込まれ，一部抉れて僅かに袋状となる部位もある。底面の標高は32.40m前後で，ほぼ平坦であった。

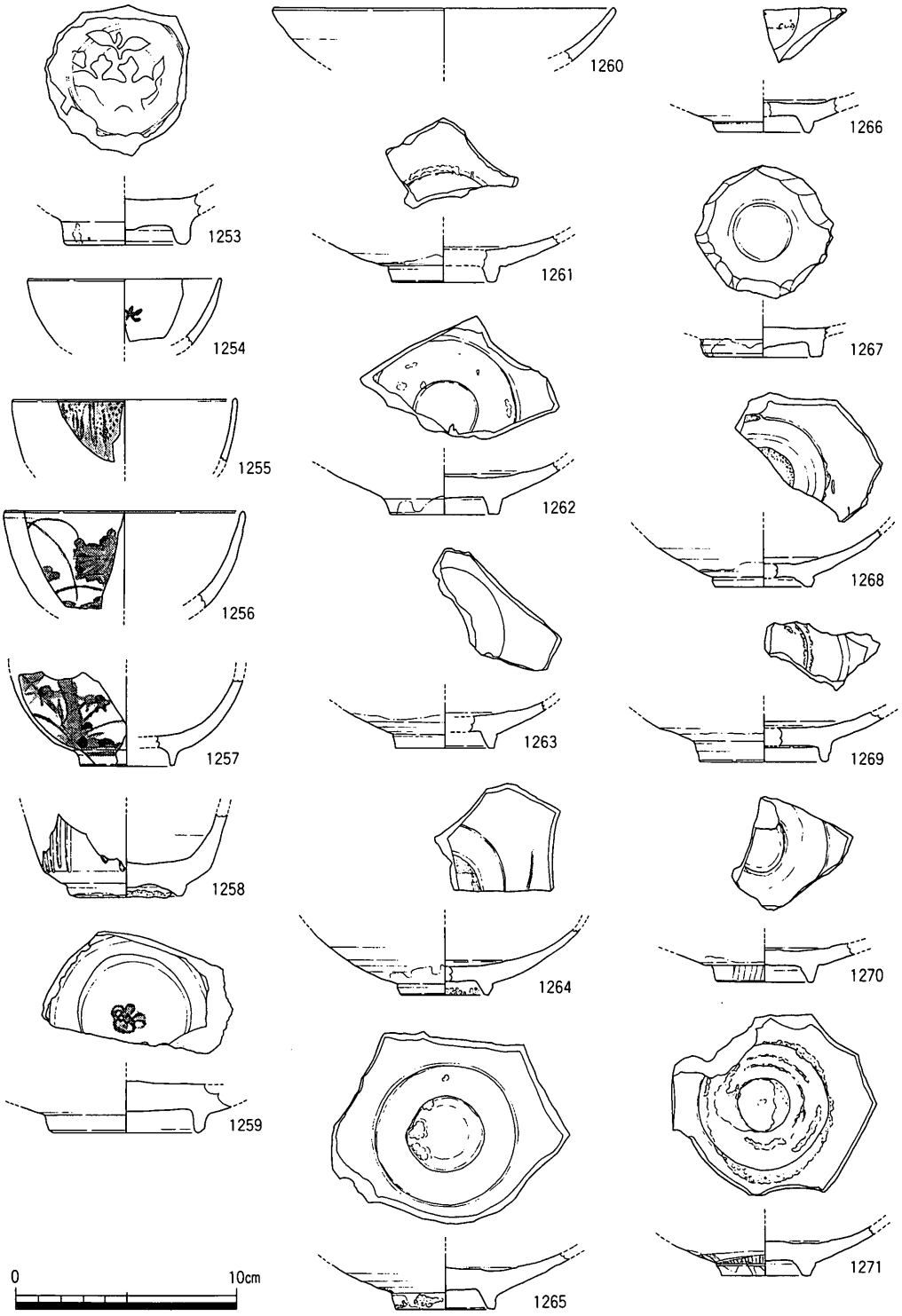
埋土は，２層に分層された。図示した３・４層は，後述するＳＤⅡ01下層に対応する。下層堆積後にＳＤⅡ01は改修が行われており，土層堆積状況からすれば，本土坑は改修時に掘削された可能性が高い。土坑は，ほぼ上面まで灰色粘土を少量混じえた径５～20cm程の自然礫によって埋没しており，人為的に埋め戻されたものと考えられる。しかしこの礫の性格については不明である。底面や周壁際にも土坑機能時の堆積層は認められず，掘削後短期間で埋め戻された可能性が高い。上面には，ＳＤⅡ01を含めて灰茶褐色粘質土層が

レンズ状に僅かに認められたが，これは礫を含まず，埋没後の窪地に溜まった自然堆積層であろう。

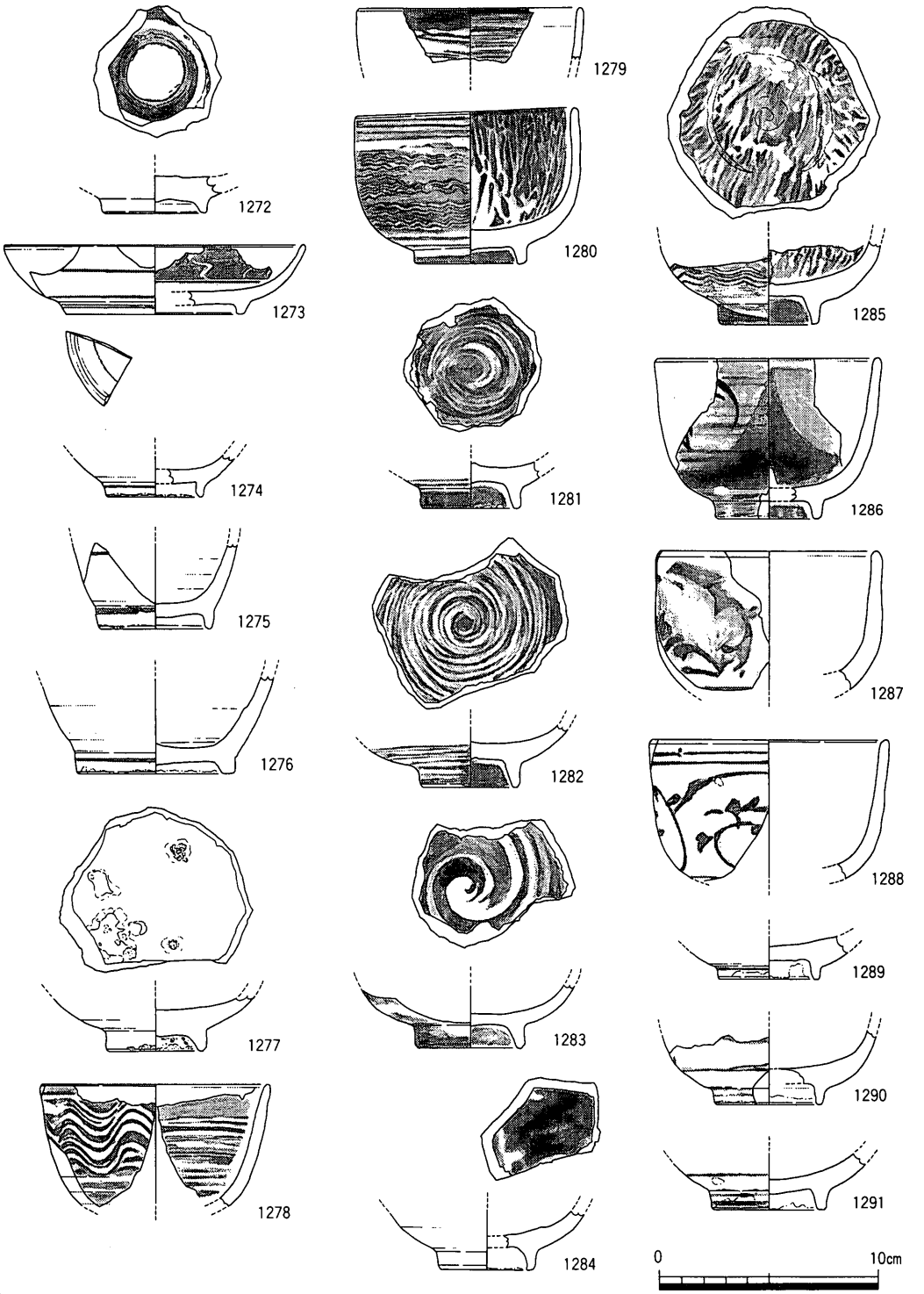
遺物は主に，下層の灰色礫層より礫の間に混入するような状況で出土した。完形に復元されるものはなく，遺構内で接合する個体もままみられたが，土坑周辺で破損した後投棄されたと考えられる。また７点の動物遺体と数点の貝類遺体（図版89）も出土した[1]。動物遺体の同定・分析結果については第３章に記す。土器・陶磁器類を中心に122点を抽出した。1253は中国産龍泉窯系の青磁碗。見込みに陰印刻草花文を施し全面施釉後，高台端畳付部と高台内の釉を環状に掻き取る。釉は厚く施釉され，見込みの草花文は明瞭ではない。中世14世紀代に盛行するタイプで混入と考えられる。1254～1259は肥前系磁器の碗。1254は色絵磁器碗である。内面に花文を描く。1255～1257は口径から中碗となろう。1255では外面に雨降り文が描かれる。1256では外面にはコンニャク判の桐と草花文を認める。1257はくらわんか碗で，外面に竹笹草文を描く。1258は外面に６～７条１単位の縦位の鎬目を等間隔に施し，その間を染付文様で埋めるが，小片のため文様の細部は不明。高台部には多量の目砂が付着する。1259は高台部の小片であるため器形は判然としないが，器壁が厚く高台径が小さいことから，大碗もしくは中碗と



第215図　ＳＫⅡ11平・断面図（１/50）

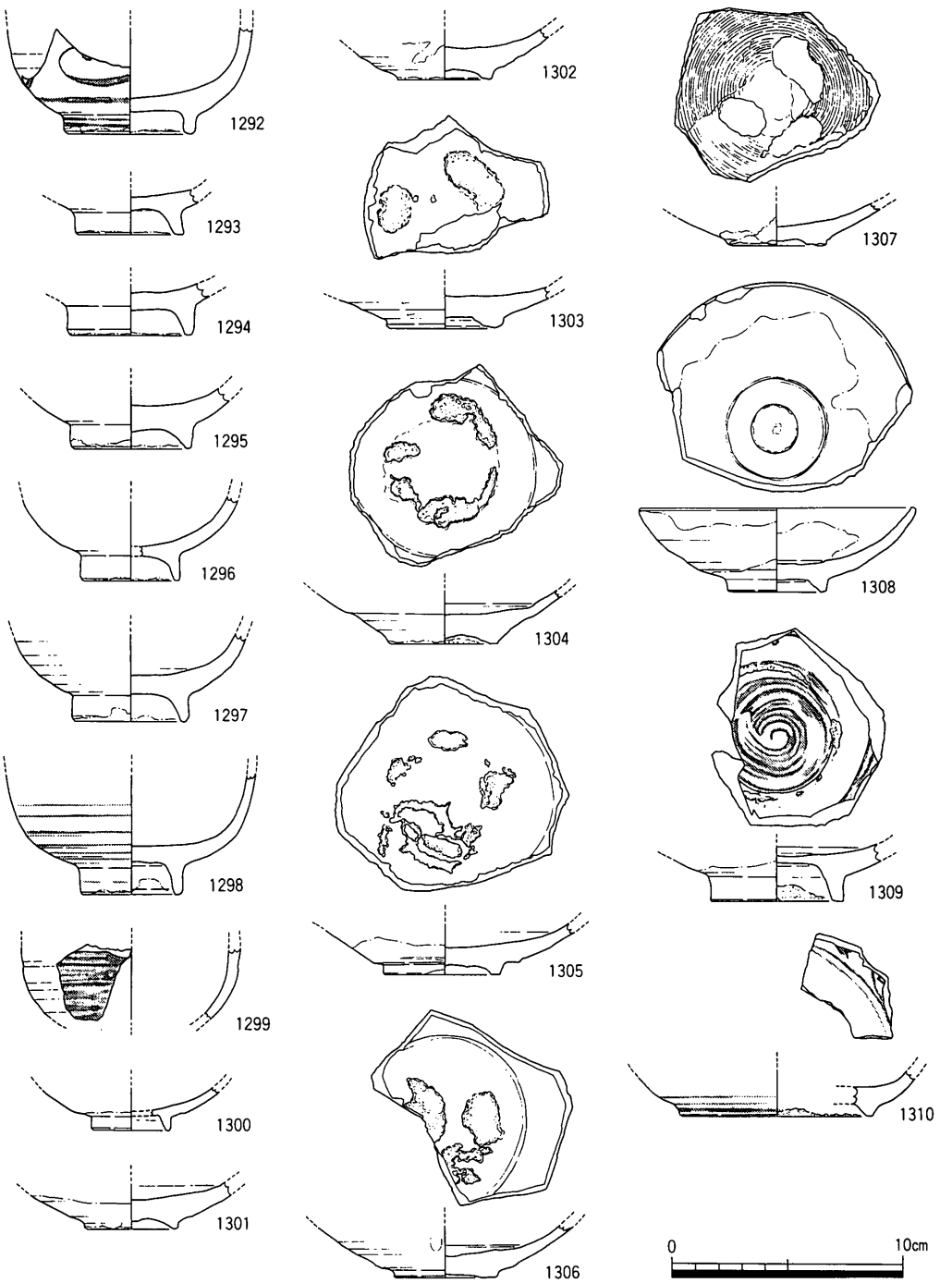


第216図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図１（１／３）



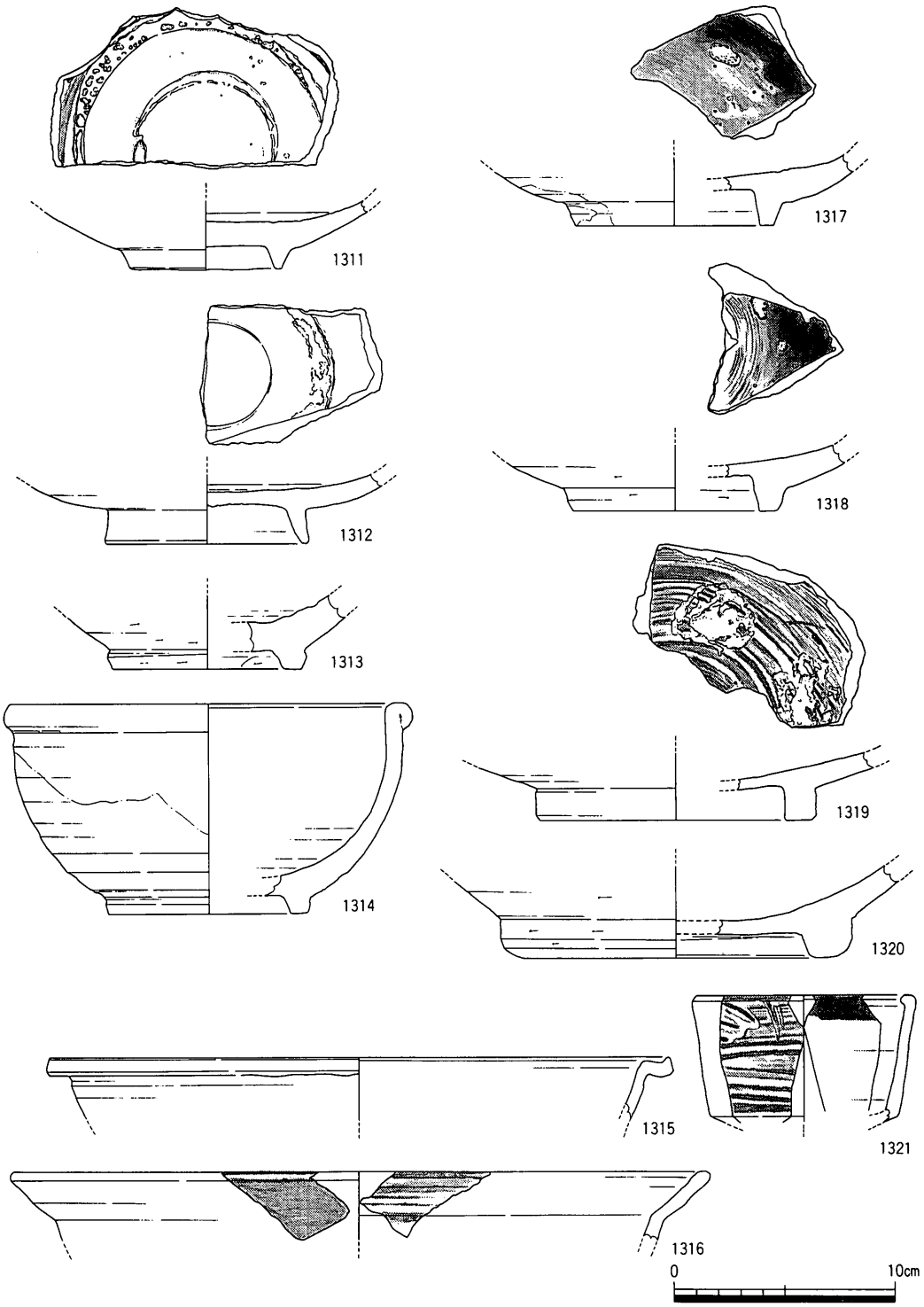
第217図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図２（１／３）

考えられる。見込みを蛇の目釉剝ぎし，中央に花文が描かれる。1260～1273は肥前系の磁器皿である。1261～1271の見込みは蛇の目釉剝ぎされ，18世紀前半代に多出する小皿。また1264・1268には線状の簡単な染付文様を認める。1272は見込み蛇の目釉剝ぎされた部分に鉄泥を塗る。1273は染付皿で，口縁部内面に墨弾き捻花文を，外面には草繋ぎ文？をそれぞれ描く。1274・1275は肥前系磁器底部。内面は施釉されず，高台径からすればいずれも神前徳利のような小瓶の底部となろう。1276も肥前系磁器底部だが，高台径がやや大きく中瓶となるものと思われる。1277～1291は肥前系陶器碗。1277は肥前系の灰釉碗。内面見込みには２ヶ所の胎土目痕を認める。17世紀前半代に遡るものと思われる。1278～1285はいわゆる刷毛目唐津碗。内外面の刷毛目文には，波状や打刷毛目，螺旋状などのバリエーションがみられる。また胎土の色調も，赤褐色のいわゆるレンガ色を呈する1278・1280・1281・1284～1286と，黄褐色系を呈するものの２タイプがある。1287～1292は肥前系陶胎染付碗。1288・1292の外面には通有の唐草文が描かれる。1287の文様は不明。1293・1294・1296・1297は肥前系のいわゆる呉器手碗。1295は陶胎染付碗と思われるが，２次的被熱により変色がみられ不明。1298は肥前系の陶器碗。内外面に薄くオリーブ味の強い灰釉が施される。1299は瀬戸・美濃系のいわゆる腰錆釉碗。1300は京焼風陶器の碗であろうか。1301～1307は肥前系陶器の灰釉皿。1301・1302を除いていずれも砂目積痕を認める。1301は胎土目積か。1308は肥前系陶器の銅緑釉皿。外面は透明釉を施した後，口縁端部のみに銅緑釉を施釉。見込み蛇の目釉剝ぎされ，２次的被熱による煤付着。1309は肥前系陶器の刷毛目皿。内面に螺旋状の刷毛目文を施す。見込みは蛇の目釉剝ぎされ，砂目痕を認める。1310は肥前系の陶胎染付皿。口縁部内面に辛うじて唐草文を認める。高台端部には目砂付着。1311も陶胎染付皿。見込み蛇の目釉剝ぎされ，一面に目砂が付着し，周辺部は気泡状を呈する。1312は京焼風陶器の中皿か。見込み蛇の目釉剝ぎされ，高台端を除いて透明釉が施される。1313～1320は肥前系陶器の鉢。1313は見込み刷毛目文と思われるが，２次的被熱により釉調が変色。1314は口縁部外面と内面に鉄釉が施される。1315は大鉢。口縁部外面に帯状の白泥をみる。1316～1320はいわゆる刷毛目唐津の大鉢。1317の見込みには胎土目痕？を，1318・1319には砂目痕をそれぞれ認める。1321は肥前系陶器の香炉。外面には横方向の刷毛目文を上下２段に施す。1322は肥前系陶器の片口鉢。1314も同形態と思われる。1323は須恵器甕口縁部。８世紀代以前に遡り，混入と考える。1324・1325は備前焼大甕口縁部。玉縁の形態から備前焼Ⅳ期前半に位置付けられると考える。1326は備前焼擂鉢。卸目は金属製の工具で下から上へ周縁が盛り上がるほど強く引かれる。口縁帯上下端

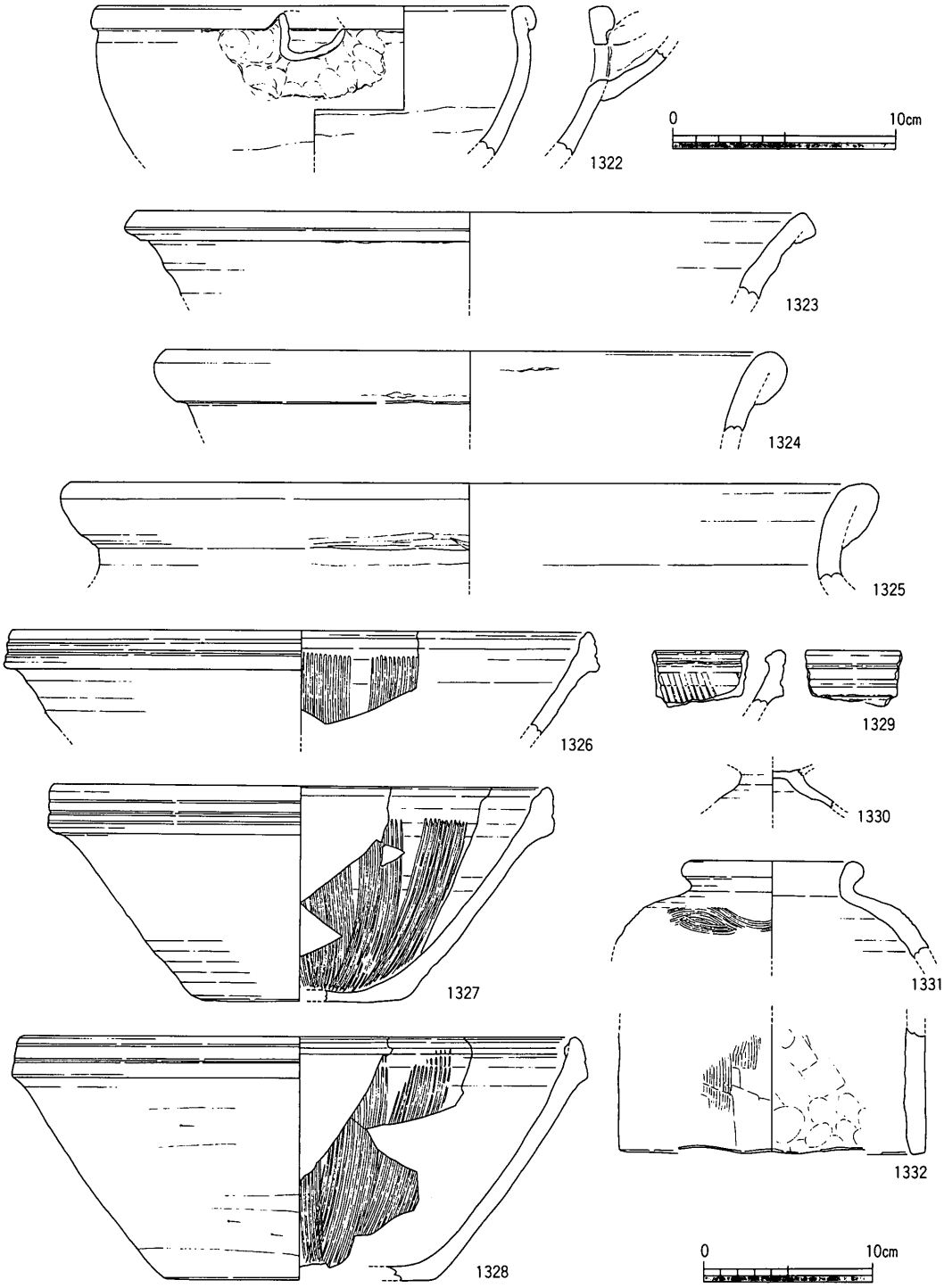


第218図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図３（１/３）

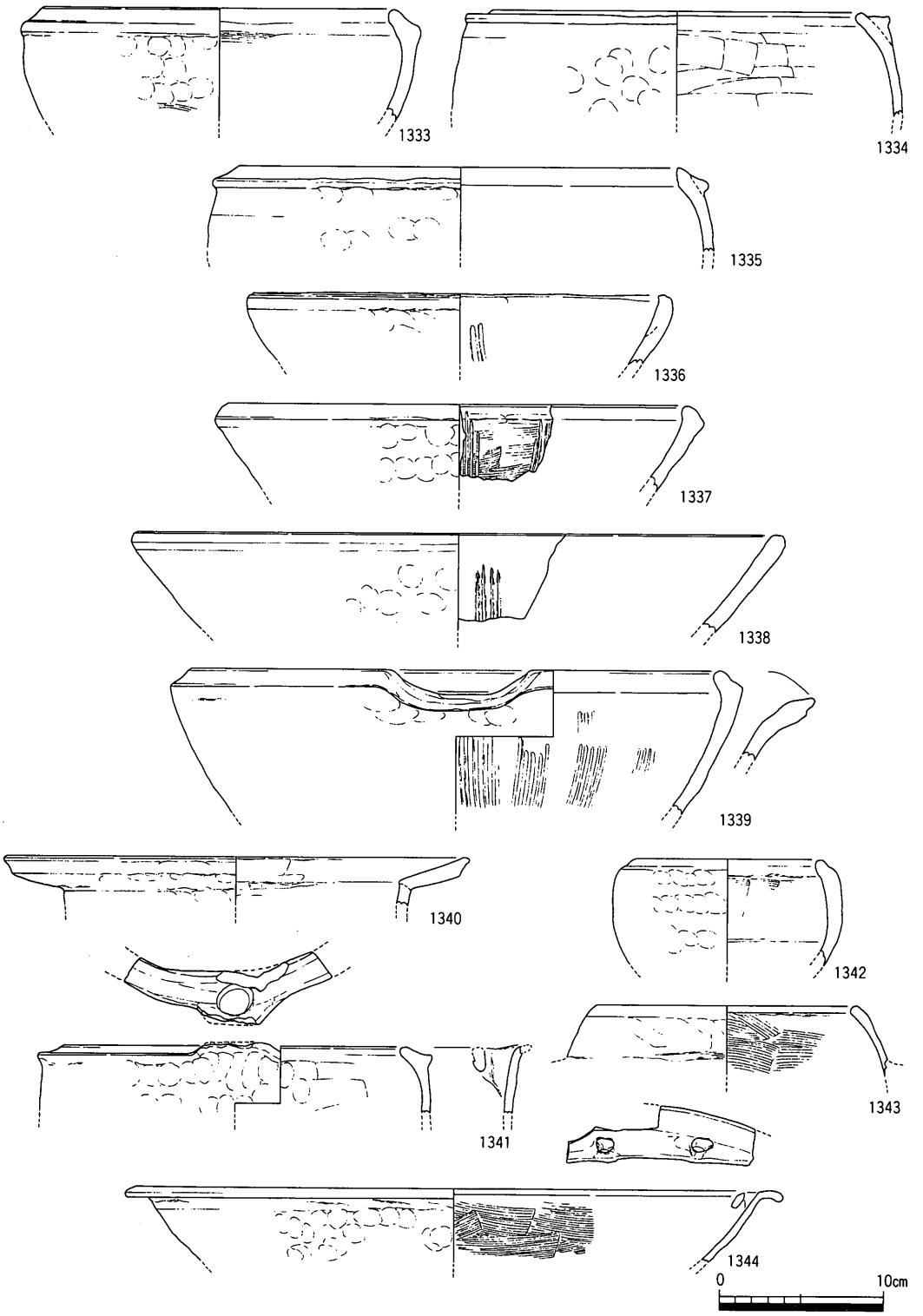
部に焼成時の重焼痕をみる。1327～1329は堺もしくは明石産の陶器擂鉢。1327・1328は口縁部形状は備前焼のそれに近いが，1329では口縁部内面の突帯がやや上方へ移動し，突帯上位の鈍い凹線状の窪みが明確な沈線へと変化している。しかし，いずれも口縁部は肥厚せず，白神編年のⅠ型式（白神1992）には納まるものと思われる。1330は須恵器脚部か。小片のため器種は明確ではない。1331は備前焼壺。肩部に櫛描の波状文を施す。備前焼Ⅳ期後半代（間壁1991）に位置付けられる。1332は須恵質の円筒埴輪基底部として報告する。外面は縦ハケ調整の後，下端は横方向の板ナデ調整される。1333～1335は土師質土器足釜。1333は形状から鍋となる可能性も残る。いずれも当該時期までは残存しない形態と考える。1336・1337・1339は土師質土器擂鉢。1337・1339は口縁部が内傾し，中世末前後に多出するタイプ。口縁部形状から当該時期までは残存しないと考える。1336も中世後半代に遡る。1338は瓦質土器擂鉢。焼成はあまく，むしろ土師質に近い。本例も当該時期まで下る形態ではない。1340・1341は土師質土器鍋。1340は小片のため別形態となる可能性も残る。当該時期に位置付けられるかどうかは不明。1341は中世末前後に通有の鍋で，当該時期まで残存する形態ではない。1342は土師質土器鍋。小形の形態で，把手を付した同型品が郡家田代遺跡包含層（佐藤1996）より出土している。胎土中に黒雲母粒を多量に含む。また，体部外面には２次的な煤が付着し，実用に供された可能性が高い。1343は土師質土器羽釜。郡家田代遺跡の類例から，当該時期に位置付けられると考える。1344～1346は土師質土器焙烙。1345は御厩系の焙烙鍋で，口縁部内面に付された内耳の円孔は貫通する。1345は岡本焼系の焙烙鍋。胎土中には黒雲母粒を多量に含む。なお，本遺跡で出土した岡本焼系の焙烙鍋は，現状では分布域の東限となる。1346は焙烙鍋と考えたが，小片のため別器種となる可能性もある。参考資料として提示するに留める。1347～1351は土師質土器焜炉もしくは火鉢。若干のバリエーションを認めるが，口縁部が内傾する点で共通し，復元された口径からいずれも焜炉として報告する。1351を除いて，いずれも胎土中に黒雲母粒を一定量含む。意図的に黒雲母粒の多い素地粘土が選択されたと考えられ，あるいは器壁の耐火性を増すことを意図したとも考えられる。1352は土師質土器土鍋。焙烙鍋とするには器高が深いため土鍋として報告する。口縁部は強く外反して開き，内面には２条の縦線の間に「×」字の記号文をヘラ描きする。胎土・焼成の点から中世段階まで遡るものではない。1353・1354は土師質土器大甕。いずれも鈍く外反して開く口縁部を有し，端部は内外へ大きく肥厚して，端面に鈍い凹線状の段を認める。また，胎土中には多量の黒雲母粒を含む。1353は小片のため，口径の復元にはやや難がある。1355は軒丸瓦。左巻きの巴文の周囲に，13



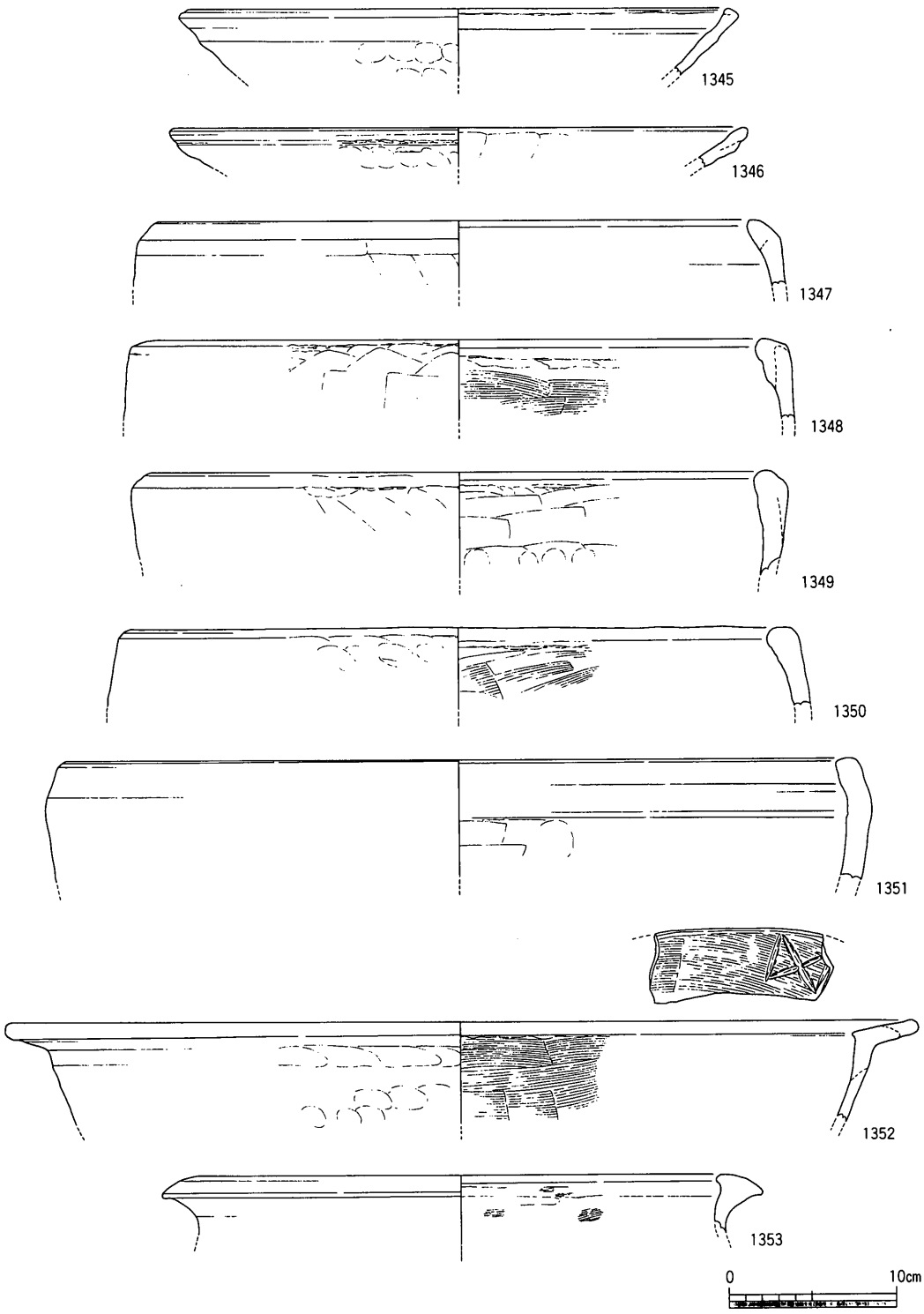
第219図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図４（１/３）



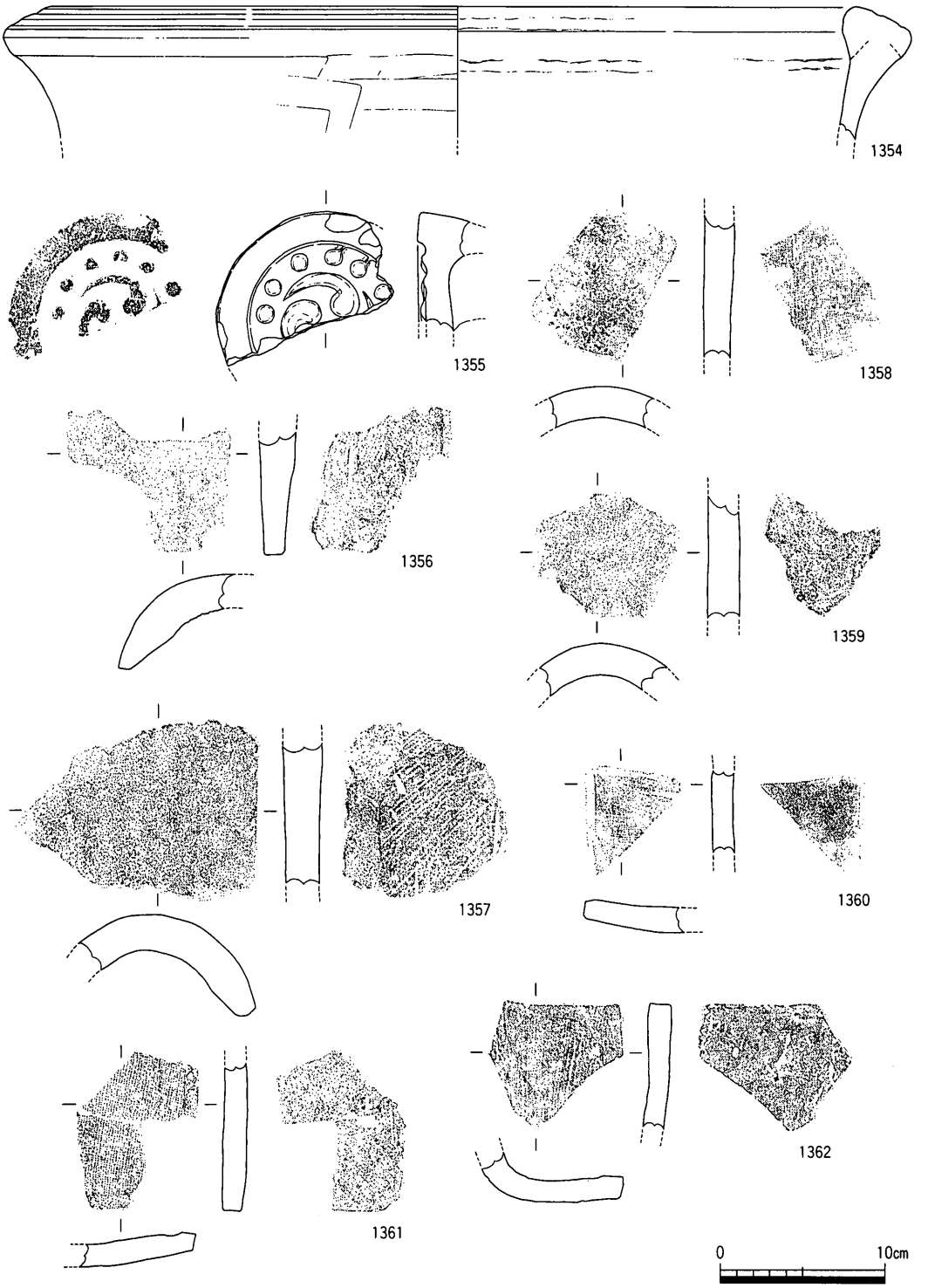
第220図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図５（１/３・１/４）



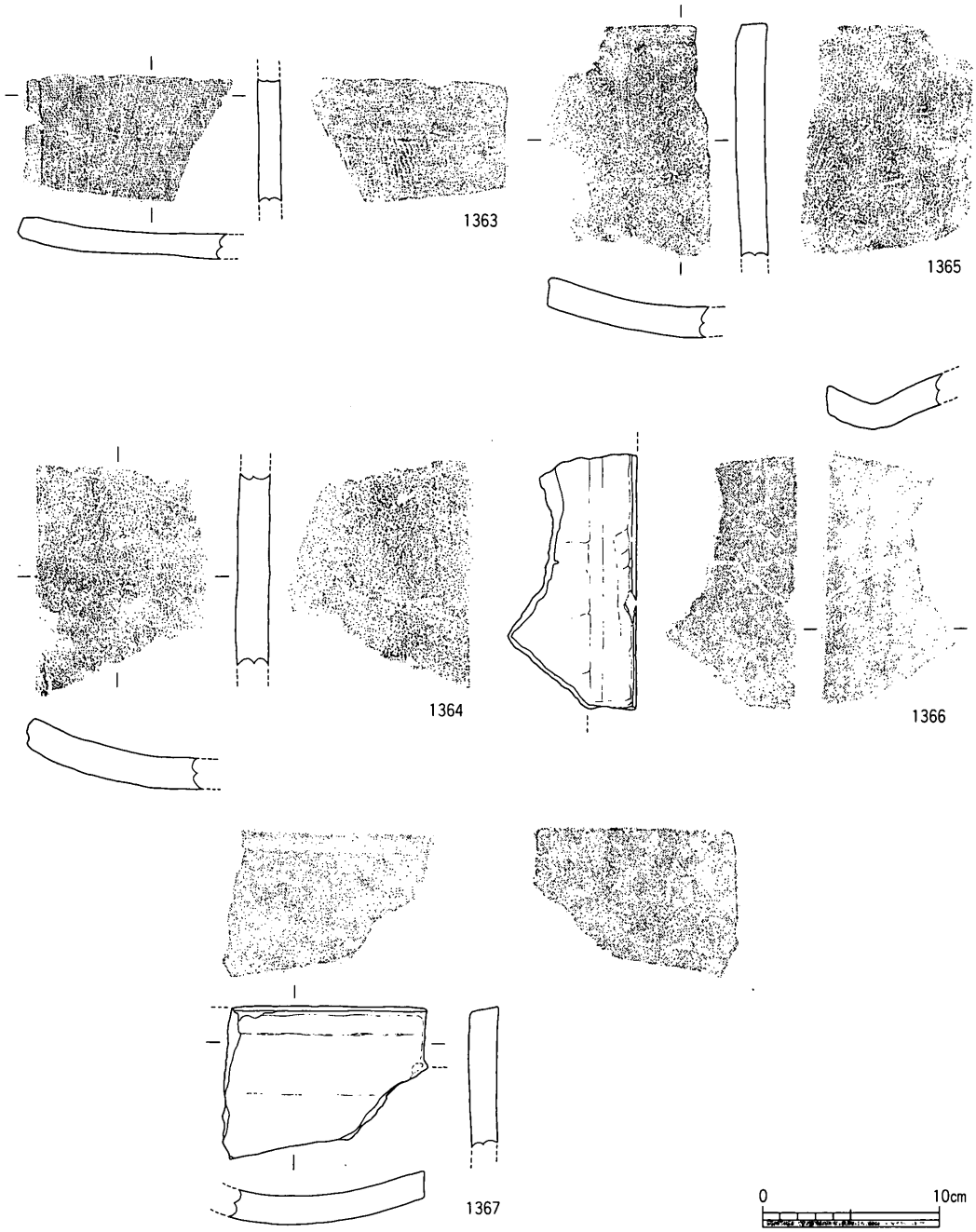
第221図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図６（１/４）



第222図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図７（１/４）

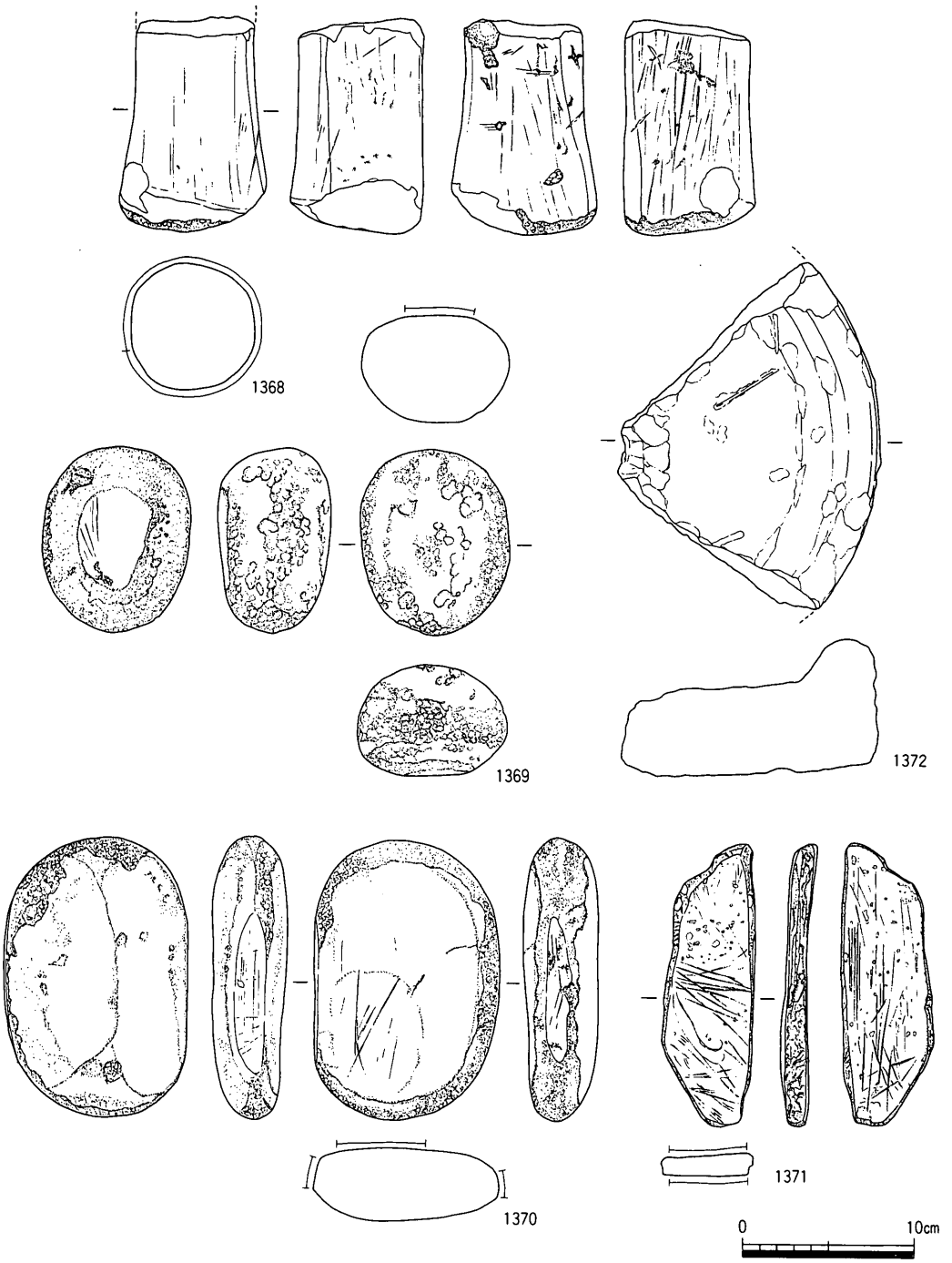


第223図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図８（１／４）



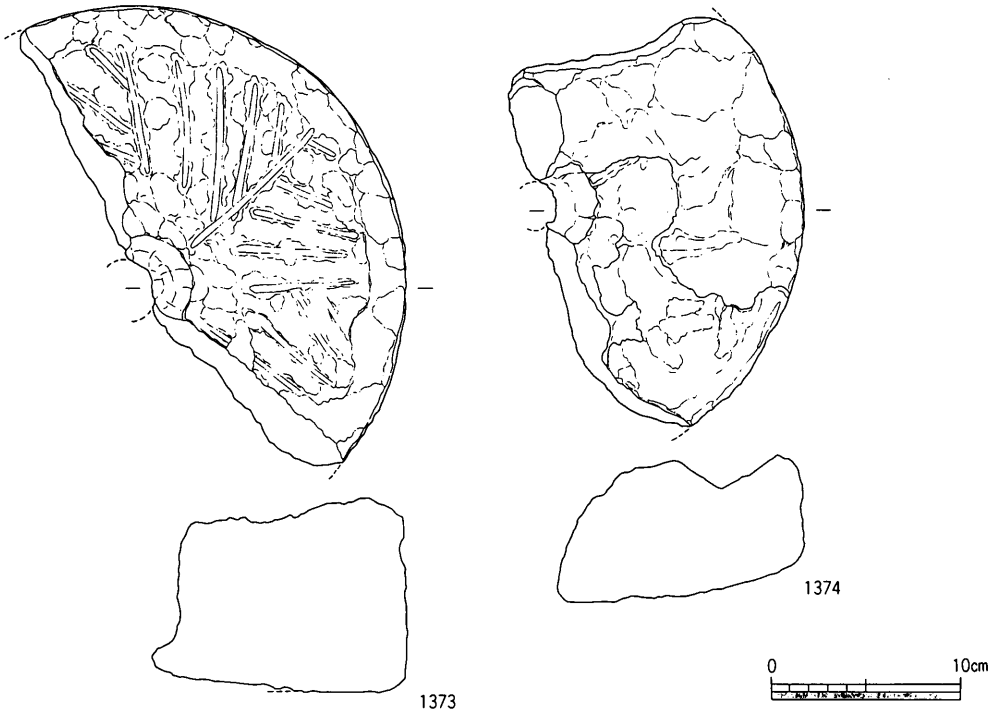
第224図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図９（１/４）

個の朱文が復元される。なお，右上の朱文２個には，笵傷とみられる周縁に繋がる凸線を認める。1358は須恵質焼成の丸瓦片。凹面は布目痕が顕著に認められ，凸面は薄く自然釉が掛かる。1357・1359は中世に遡ると考える土師質焼成の丸瓦。いずれも凹面には布目痕



第225図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図10（１/４）

を認める。1357では凹凸両面に炭素を吸着させて黒化を意図するが，焼成はあまく瓦質を呈するまでには至らない。1356は瓦質焼成の丸瓦片。焼成は良好で，炭素の吸着にも優れ

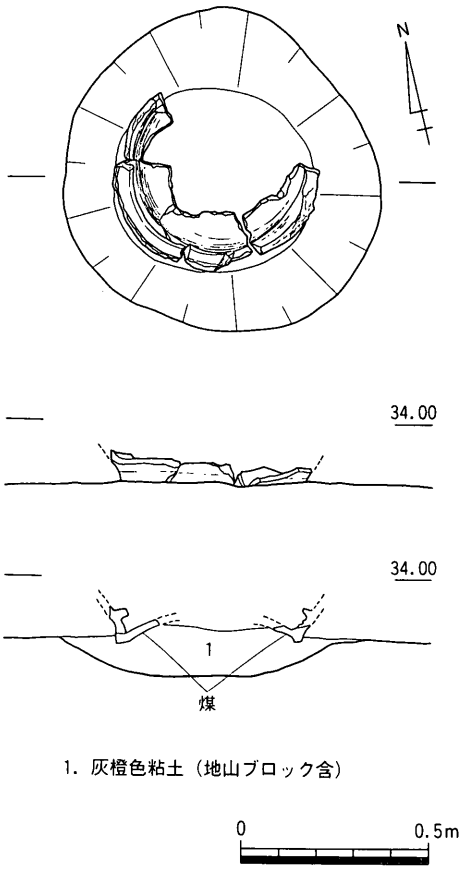


第226図　ＳＫⅡ11出土遺物実測図11（１/４）

ている。凸面は縄目タタキの可能性がある。1360～1363は古代に遡る須恵質焼成の平瓦片。器壁は薄く，側縁はシャープに削られる。凹面は布目痕がよく残されるが，布目の疎密によりいずれも別個体であることが確認される。1363の凸面には縄目タタキの痕跡を認める。1364は土師質焼成の平瓦片。凹面は磨滅が顕著なものの布目痕を認め，凸面には離れ砂がやや多量に付着する。おそらく中世に遡る。1365は瓦質焼成の平瓦片だが，焼成はあまく土師質に近い。凸面には布目痕状の縦方向の細かな条線を認めるが，磨滅のため判然としない。1366・1367は瓦質焼成の桟瓦片。凸面は粗く横板ナデ，凹面は丁寧な横ナデ調整され，部分的に２次的被熱による煤が付着する点でも共通する。おそらく同一個体と思われるが，接合関係にはなく別個体として報告する。1368は砂岩製の砥石。隅丸の方柱状を呈し，側面の４面全面が顕著に使用される。1370は扁平な砂岩円礫を使用した砥石。主に両側面の使用が顕著で，よく使い込まれて凹面状を呈する。1371は流紋岩製の砥石。風化の進んでいない扁平な板状の石材を使用する。縦方向を中心に細かな擦痕を認めるが，顕著な使用痕は認められない。1372～1374は石臼。いずれも１/４～１/２程度に破砕されて出土した。1372・1373は角礫凝灰岩製。1372は上臼で，1373は下臼である。1373の上面には

8分割・5～6条の条線が刻まれる。条線の残存も良好で，器高も高いことから，長期間の使用は想定されない。1374は砂岩製の下臼。中央に軸受孔が穿たれていることから，辛うじて下臼と判断された。表面は剥離や磨耗が顕著で，条線等は認められない。

上記資料中にはかなりの時期幅が想定される。中世以前に遡る資料は他遺構からの混入として除外しても，最大17世紀初頭から18世紀末前後までの時期幅を見積もることができる。上記した遺構の特徴から想定される時期幅で，これら資料を捉えることは困難であろう。しかし，上記資料の中心となるのは17世紀後半から18世紀中葉を前後する資料であり，その中で一定量の資料が2次的被熱を蒙っていることは注意される。特に当該時期の瓦類にも被熱痕が見られる点は，建築物の火災を反映するものと考えられる。したがって，上記時期幅を屋敷の継続期間として，18世紀末前後に想定される火災により焼失した生活資材残滓を，当該遺構に廃棄した可能性を示唆するものと考える。なお，本遺構廃絶後もほぼ同位置にＳＤⅡ01が再掘削されていることから，屋敷地が廃絶した後も基本的な地割りの変更は行われなかったものと考えられる。



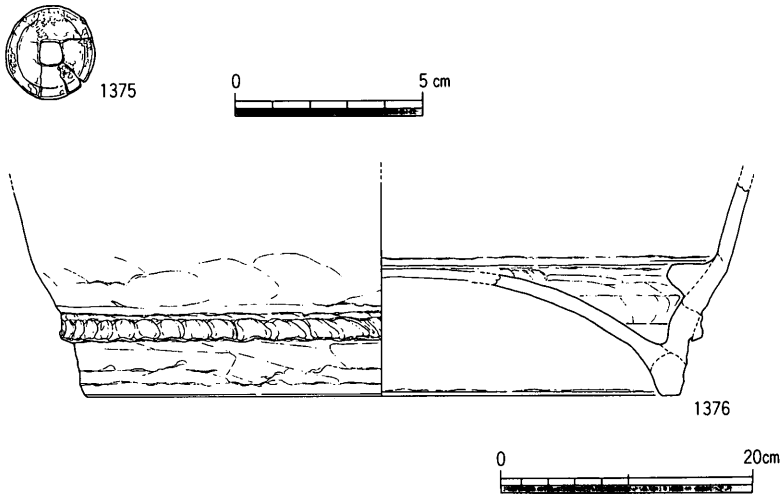
第227図　ＳＫⅡ12平・側・断面図（1/20）

ＳＫⅡ12（第227・228図）

6ｂ区北東部で検出された土坑である。平面形は，径0.8m程度の整った円形を呈する。周壁は緩やかに掘り込まれ，断面形は逆台形状を呈する。遺構上面は，埋土に濁りがあり不明確であったため，10cm程掘り下げて平面プランを確認した。したがって掘り方で確認されたのは，土坑中央に据えられた土師質土器風呂釜の底部より下位である。掘り方底面の標高は，33.75mであった。埋土は灰橙色粘土の単層で，地山砂質土の小ブロック土が混じる。比較的均質な強粘質粘土であり，おそらくは人為的な置土と考えられる。また風呂釜底面は埋土に密着し，燃焼部となる空隙は存在しないことから，風呂釜本来の使用は

想定できず，水溜め等として転用された可能性が高い。類似した遺構に，丸亀市郡家一里屋遺跡Ⅱ区ＳＫ62・ＳＫ69等がある（和田1993）。

風呂釜は，底部半周ほどが残存し，体部より上位は破砕され周囲に破片すら認められなかった。土坑中央に正置の状態で据えられ，また土器底面を中心に煤が付着しており，一定期間は本来の用途で使用されたことを推測させる。また炊き口や排水口は欠損しており，細部の形状は不詳である。

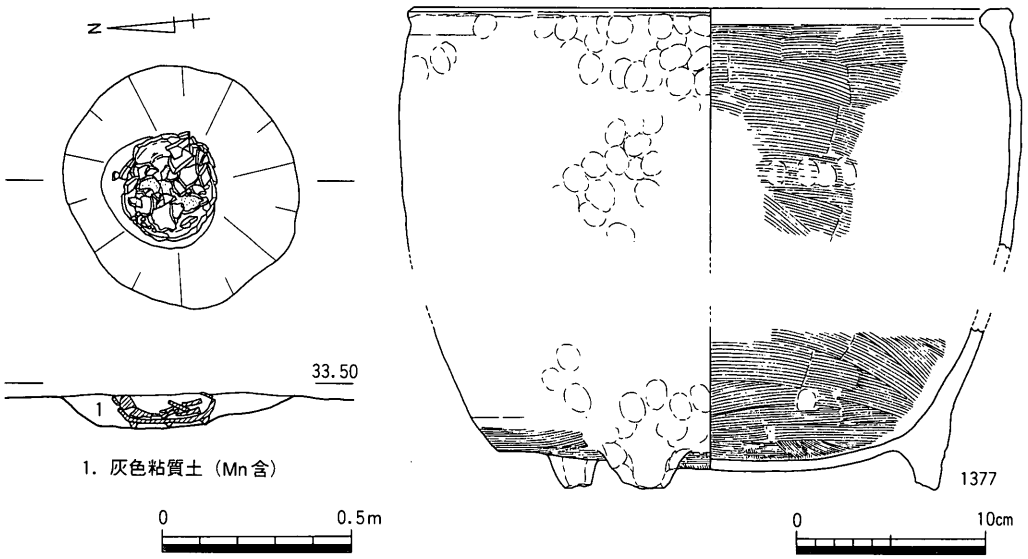


第228図　ＳＫⅡ12出土遺物実測図（1/2・1/6）

なお，遺物は上述した風呂釜の他，土坑上面付近より銅銭１点が出土したのみである。1375は銅銭。表面の腐食が進行しており，肉眼では文字を判読できず，銭種は不明である。1376は土師質土器の風呂釜である。底部は底面が半球状に大きく内湾した上げ底状を呈し，外面上端には刻み目突帯を巡らせる。内面体部下端周囲には，断面台形状の突帯を貼付し底板の受け部となす。内底面上端は受け部とほぼ同じ位置まで内湾する。なお，胎土中には多量の角閃石と黒雲母粒を含む。

ＳＫⅡ23（第229図）

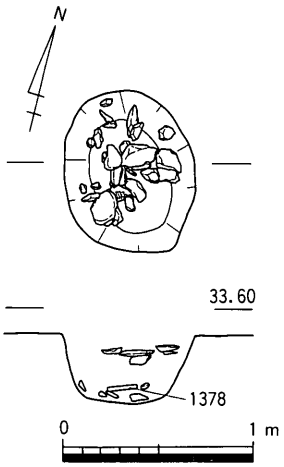
６ａ区西半で検出した土坑である。平面形は，径約0.6m程の比較的整った円形を呈する。深さは0.1m程しかなく，底面の標高は33.4m前後であった。断面形は，南辺がやや緩やかに掘り込まれた浅い皿状を呈する。埋土は，灰色粘質土の単層であった。土坑ほぼ中央で，床面に接して土師質土器火鉢１点が，正置の状態で出土した。火鉢は，底部を中心とした破片で，破砕された体部等の破片が土器内部に折り重なって出土した。完形に復元することはできなかったが，土坑上面の削平と内部より口縁部の破片が出土している点を考慮すれば，本来的には完形品かそれに近い状態のものを据え付けたものと考えられる。遺物は他に，土師質土器大甕や平瓦の小片が，埋土中に混入した状況で極少量出土しているのみである。土坑本来の用途は不詳だが，土器内埋土はグライ化した灰色粘土が堆積し



第229図　ＳＫⅡ23平・断面図（１/20），出土遺物実測図（１/４）

ていたことから，火鉢を転用した水溜状の性格が付与される。

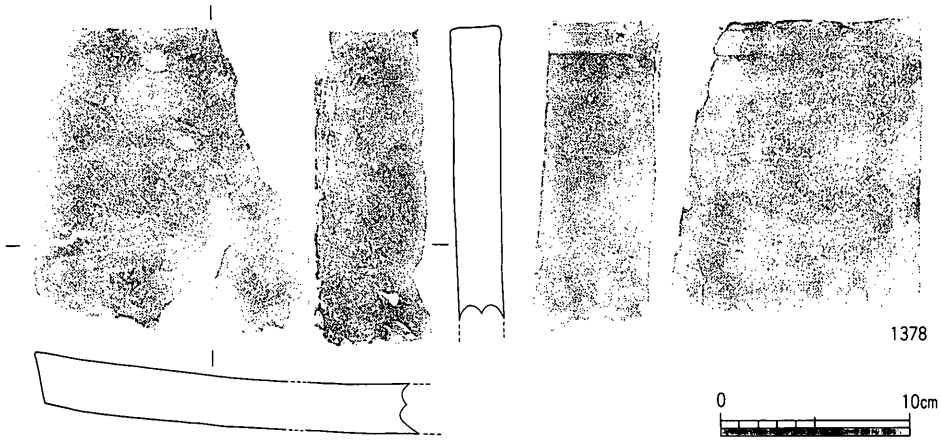
出土した遺物の内，1377の火鉢のみ図示した。体部上半部と底部は接合関係にはなかったが，上記出土状況や土器自体の観察からも同一個体としてほぼ誤りないものと考える。観音寺市一の谷遺跡群出土例（西岡他1990）からすれば，図示したものよりやや器高が深くなるものと考える。底部より口縁部にかけてやや内湾しつつ立ち上がり，全体として円筒状を呈する。口縁端部は内外に肥厚して，頂端面は鈍い平坦面をなす。体部外面は指オサエやナデにより調整され，外底面及び内面はハケ調整を多用する。18世紀代に位置付けられると考えるが，細かな時期を特定するまでには至らない。



第230図　ＳＫⅡ24平・断面図（１/40）

ＳＫⅡ24（第230・231図）

６ａ区西半で検出した土坑である。ＳＫⅡ10と重複し，切り合い関係よりＳＫⅡ10より後出する。平面形は，長軸0.85m，短軸0.7mの隅丸方形を呈する。深さは0.4m，底面の標高は33.1m前後であった。断面形は，周壁が直に近く掘り込まれた箱状を呈し，底面は概ね平坦であった。土坑上面付近と底面付近よりそれぞれ，若干量の石材が出土している。石材の種類・大きさは他の集石土坑としたものと差異は認められないが，量は及ばず一般



第231図　ＳＫⅡ24出土遺物実測図（１/４）

的な廃棄土坑として大過ないものと考える。

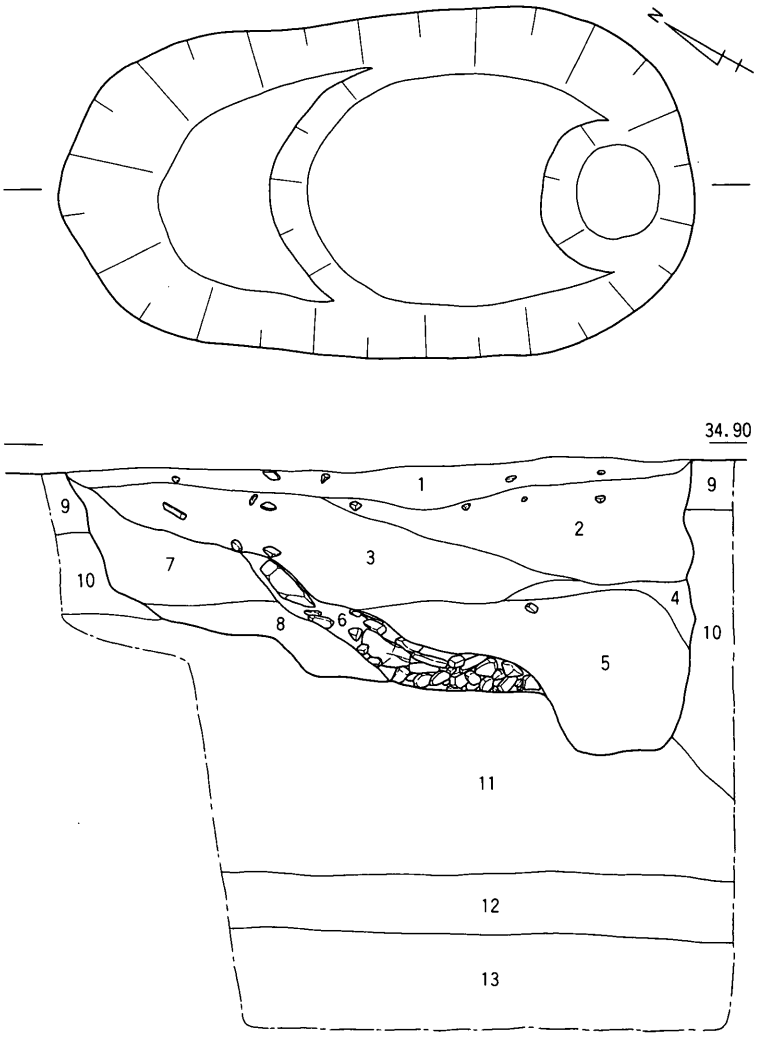
遺物は，床面付近より瓦質焼成の平瓦片が１枚分出土したのみである。1378は瓦質焼成の平瓦片。焼成は良好。器壁の厚さは約2.5cmあり，他の資料と比してやや厚い。出土資料より当該時期に位置付けられるが，細かな時期を特定することは困難である。

ＳＫⅡ30（第232・233図）

７ｂ区北端で検出した大型の土坑である。平面形は，長軸3.3m，短軸1.7mの長楕円形を呈する。主軸方向はN28°Wで，周辺地割りの方向とは一致しない。周壁は概ね直に掘り込まれるが，底面は土坑南東隅の径0.7m程が，北西部に比して0.3m程深く掘り込まれ小土坑状を呈する他，僅かな起伏が若干認められ，底面は東に下る階段状を呈する。底面の標高は，最深部で33.25mを測り，残存深は1.55mと他の土坑等に比してかなり深い。埋土は８層に細分され，おおよそ４層に大別された。下層（第232図７・８層）は，土坑北西隅に水平堆積した灰色系粘土・粘質土である。下位層のグライ化した青灰色粘土は，滞水下の堆積の可能性が高く，また上位層は，地山層や下位層のブロック土が混在することからすれば，人為的な埋め戻し土と考えられる。本層上端は，土坑上面まで達しており，おそらくは一旦本土坑は埋め戻されたものと考えられる。中層（６層）は，下層を切り込んで南東に傾斜して堆積した，石礫を多量に含む粘質土である。後述する上層の一部とも考えられたが，内容が大きく異なるため中層として分離する。包含される石材の主軸方向は，土層の傾斜方向に沿って南東に傾斜して堆積しており，つまり北西方向より投棄されたものと考えられる。本層も，基本的には人為的な埋め戻し土である。上層（２～５層）

は，中層をさらに切り込んで水平堆積した灰色系粘土・粘質土である。下位２層は，グライ化した灰色系粘土層であり，滞水下の堆積が考えられ，上面には鉄分の沈着が認められる。上位層は，北西より斜めに傾斜して堆積することから，北西方向より埋め戻されたものと考えられる。最上層（１層）は，土坑上面を広く覆って堆積しており，上層堆積後の窪地部に自然堆積した土層と考えられる。

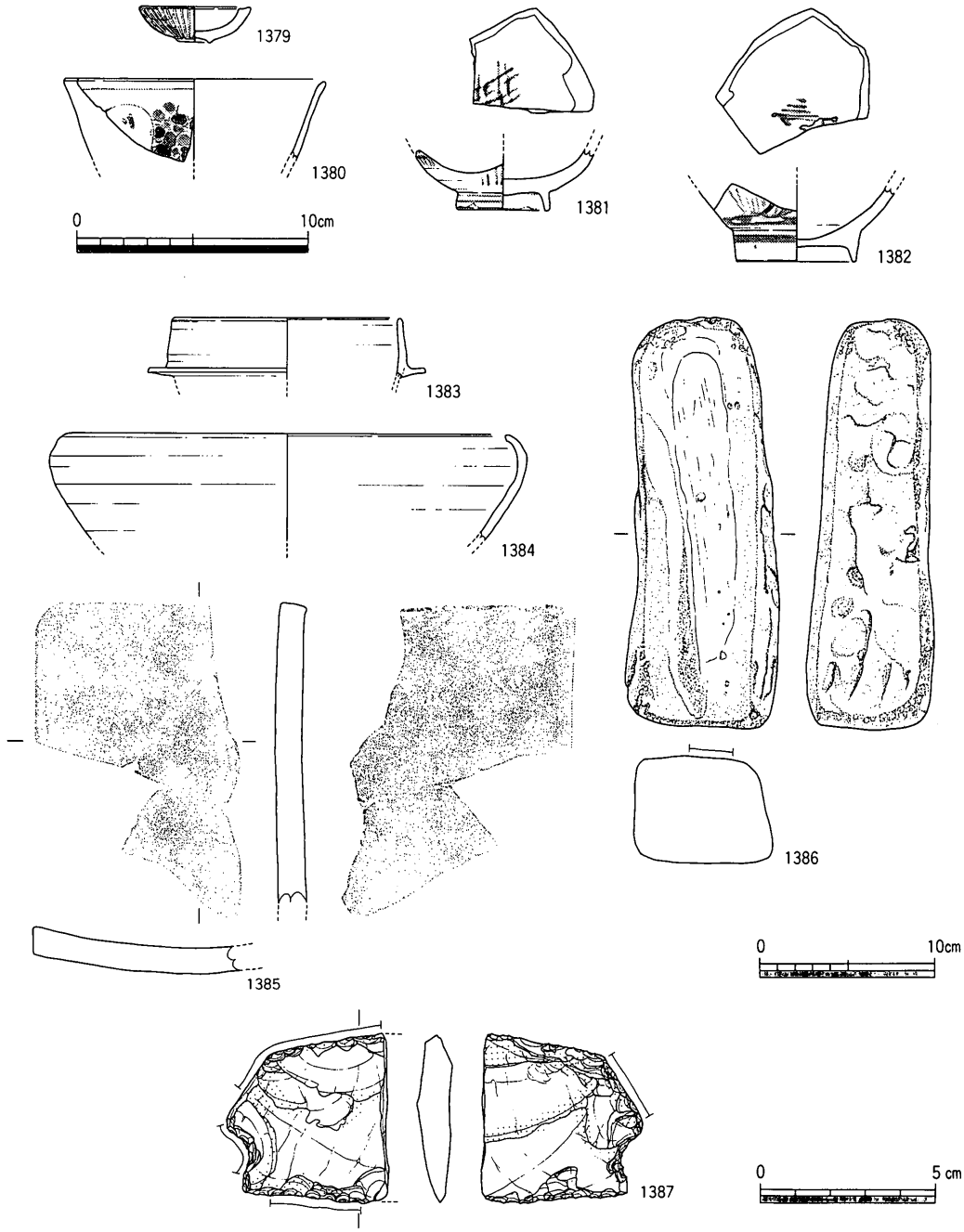
さて，本土坑は，他の土坑に比して掘削深度が深く，上記したように埋め戻しと再掘削を継続して繰り返しており，また下位層に滞水下の堆積が想定されるグライ化した粘土がみられ，桶等を据えたともみられる底面の円筒状の小土坑が認められる点，後述するように



1. 明灰黄褐色粘質土（Mn・Fe含）
2. 黄褐色粘質土（Mn・Fe含）
3. 灰茶褐色粘質土（Mn・Fe含）
4. 灰色砂混粘土（Fe沈着）
5. 青灰色砂混粘土
6. 濃茶褐色粘質土（Mn沈着）
7. 灰褐色粘質土（Mn・Fe・５・11層ブロック含）
8. 青灰色砂混粘土
9. 暗灰褐色粘質土（Mn含，地山）
10. 黄褐色砂礫（地山）
11. 明灰黄褐色粘土（Mn含，地山）
12. 明灰橙色粘土（地山）
13. 灰色粘土・灰茶褐色粘質シルト・灰色粗砂ラミナ（地山）

0　1 m

第232図　ＳＫⅡ30平・断面図（１/40）



第233図　ＳＫⅡ30出土遺物実測図（1/3・1/4・1/2）

枠材として使用されたと想定される土師質土器大甕の体部片が相当量出土している点などを特徴とする。こうした諸点より本土坑は，一般的な廃棄土坑ではなく，水溜めあるいは肥溜め様の性格が想定される。

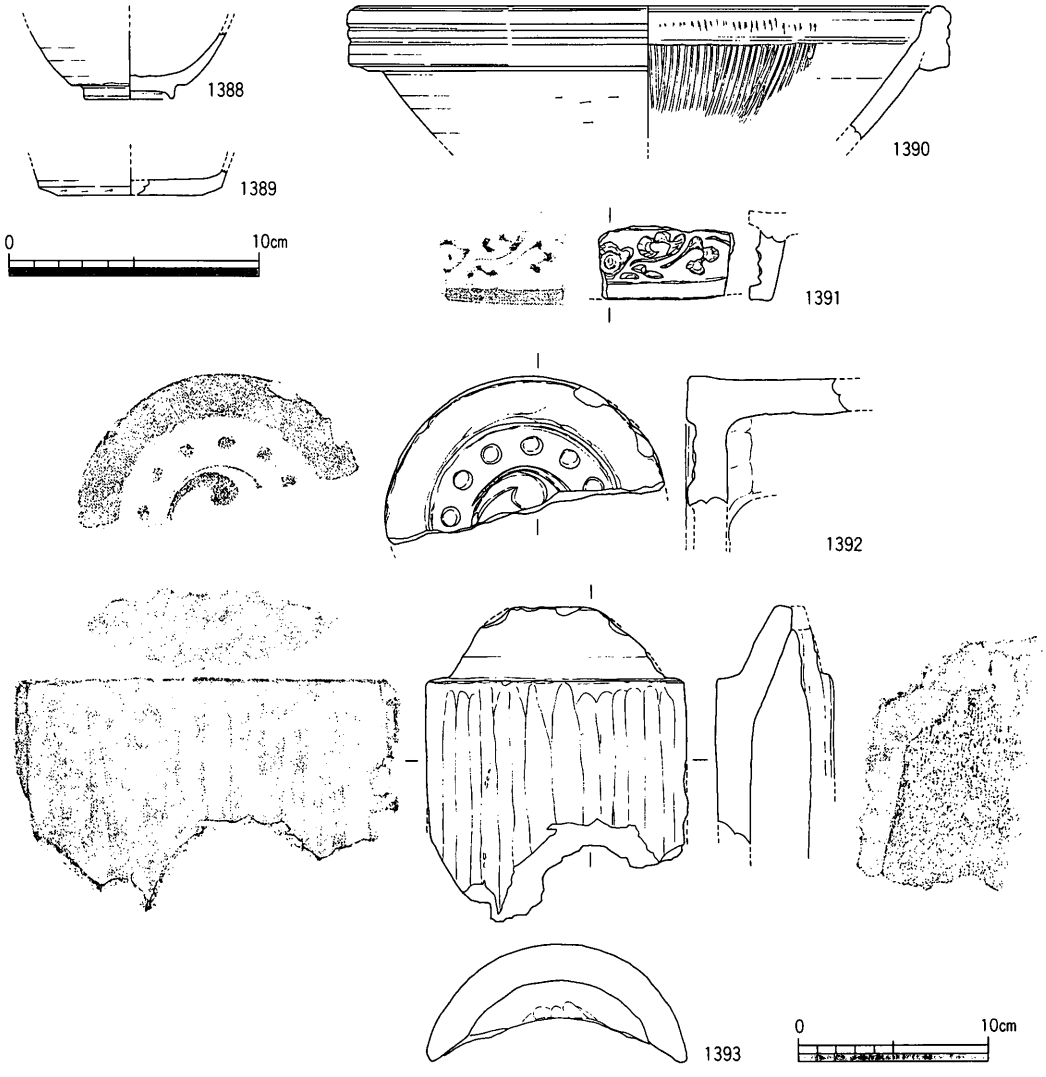
遺物は図示したものの他，須恵器，土師質土器竈，肥前系陶器鉄釉？鉢・刷毛目鉢，瀬戸・美濃系陶器瓶，備前焼大甕，平瓦，サヌカイト剥片等がコンテナ６箱程度出土した。大半は，土師質土器の大甕片である。また，上層より貝類遺体１点が出土している（図版89）。９点を選んで図示した。1379は菊花形を呈する磁器紅猪口。内面から外面口縁部にかけて白磁釉が施釉される。1380は肥前系？色絵磁器碗。端反形の中碗で，外面に草花文を赤・緑などで上絵付けするが，一部釉が剥げ落ちて不鮮明である。1381は肥前系の磁器碗。見込みに井桁文を描く。２次的被熱により釉調変質。1382も肥前系磁器碗で，いわゆる広東碗である。1383は瓦質土器羽釜。直立して立ち上がる口縁部下端外面に，水平に伸びる鍔を付す。胎土は極めて精良。鍔部下面に顕著に煤が付着していることから，ミニチュアではなく実用品であったろう。1384は須恵器鉢。いわゆる鉄鉢形の鉢で，器壁は薄くシャープな作りで，回転ナデを多用する。８世紀中葉頃に位置付けられる。1385は瓦質焼成の平瓦片。炭素の吸着はやや悪いが，一部光沢を有する。胎土中に多量の黒雲母粒を含む。1386は砂岩製の砥石。長さ23.0cmの方柱状の自然礫が選択され，一側面のみ使用痕が認められる。1387はサヌカイト製の打製石庖丁。側縁には抉りが入り，背面には明瞭な潰し加工をみる。上記資料より本土坑は19世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

井戸

ＳＥⅡ01（第234図）

６ｂ区北東隅部で検出した石組み井戸である。掘り方上面の平面形は，径約2.2ｍの整った円形を呈する。周壁は，検出面よりほぼ直に近く掘り込まれており，検出面下約2.8ｍで石組みを検出した。石組み上位の壁面は，部分的に小規模な崩落が認められるのみで，旧状を大きくは損なっていないことから，後述するように本来的には検出面付近まで石組みが構築されており，井戸廃棄後短期間の内に埋め戻されたものと考えられる。石組み上面は，枝を落とした松の丸太材10本を並べ，さらにその上を松葉の付いたままの枝で覆っていた。石組み上位の埋土は，基本的には井戸廃棄後の人為的な埋め戻し土であり，４層に細分された。地山のブロック土を含んだ灰色系の粘土・粘質土で充填されており，下位３層は地下水の影響によるためかグライ化しており，土層断面の観察で帯状に鉄分の沈着が認められた。

石組みは，砂岩及び花崗岩系統の石材を基本的には小口積みとし，上から見て反時計回



第234図　ＳＥⅡ01出土遺物実測図（1/3・1/4）

りの螺旋状に積み上げられていた。石組みの内径は1.2m程で，ほぼ垂直に積み上げられている。石組み部分での掘り方の径は，約1.7m程であり，石組みとの間５～10cm程は裏込め土により充塡されていた。石組みの石材の大きさは，人頭大程度のものを主として，間隙に拳大程度の石材が混在する。石組み上面は，ほぼ水平に保たれていたが，地山土に近似した褐色系粘質土を僅かばかり除くと，裏込めの拳大程度の石材が出土した。石組みは，５～６段程度，高さ0.6m程を検出したが，既に検出面より３m以上掘削して，透水層である灰色砂礫層に達して湧水も激しく，底面までの調査は危険なことから行えなかっ

た。石組み内部は，調査部分0.6m程は埋め戻されておらず水没していたが，より下位は石組みに類似した石材を含んだ灰色砂礫で充塡されていた。石組み検出位置が異常に深いことから，おそらくは上位の石組みを壊しながら，埋め戻されたものと考えられる。

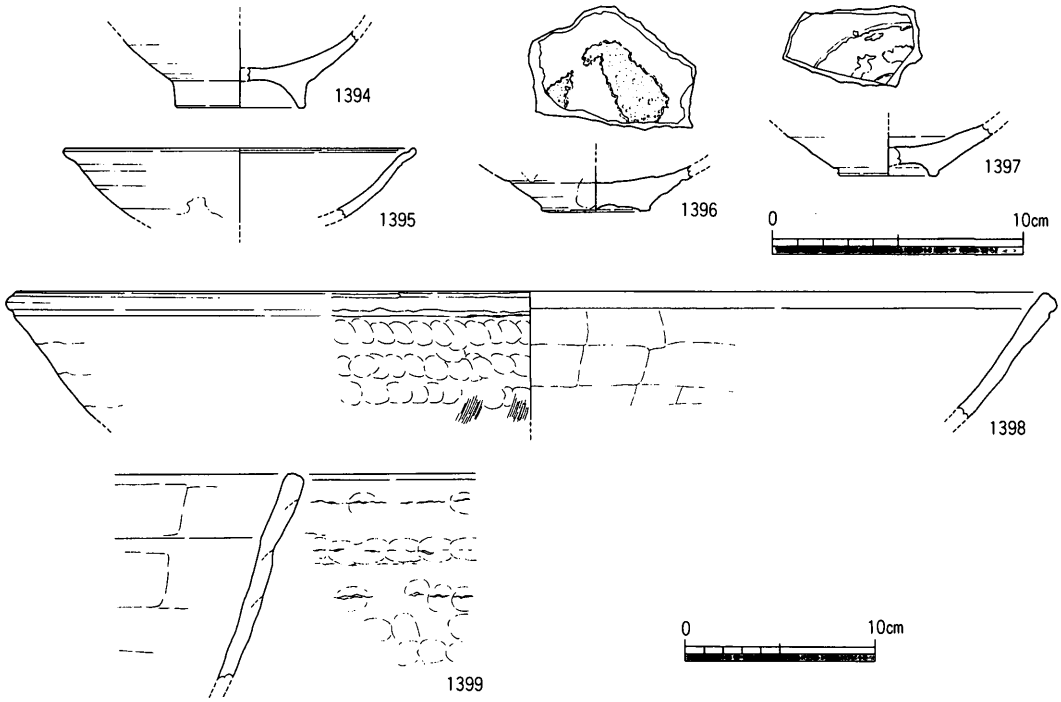
遺物は，すべて石組み上位の埋め戻し土中より出土した。したがって出土した遺物は，井戸廃棄時の下限を示しているにすぎない。6点を図示した。1388は信楽系の京焼風陶器碗。底部は直立する小さな高台が鋭く削り出される。1389は瀬戸・美濃系陶器の蓋か。内面のみ施釉され，外面は回転ケズリ調整のまま残される。口縁部はかなり薄く仕上げられ，土瓶の蓋になる可能性がある。1390は堺もしくは明石産の陶器擂鉢。1単位9条の擦目が密に施され，擦目上端は回転ナデにより消される。白神編年のⅡ型式（白神1992）に位置付けられよう。1391は軒平瓦。簡略化された花文の左右に唐草文を配する。1392は軒丸瓦。左巻きの巴文の周囲に12個の朱文を配する。1393は玉縁付丸瓦。丸瓦部凸面は縦方向のケズリ調整が顕著にみられる。遺物は上記したものの他，弥生土器，土師質土器火鉢・風呂釜，瀬戸美濃系陶器染付碗・植木鉢，備前焼大甕，平瓦，丸瓦等の小片がコンテナ3箱程度出土している。上記資料は概ね18世紀後半から19世紀前半代に位置付けられ，屋敷地の廃絶時期とほぼ近接した時期に本井戸も廃棄されたと考えられる。

不明遺構

ＳＸⅡ03（第235図）

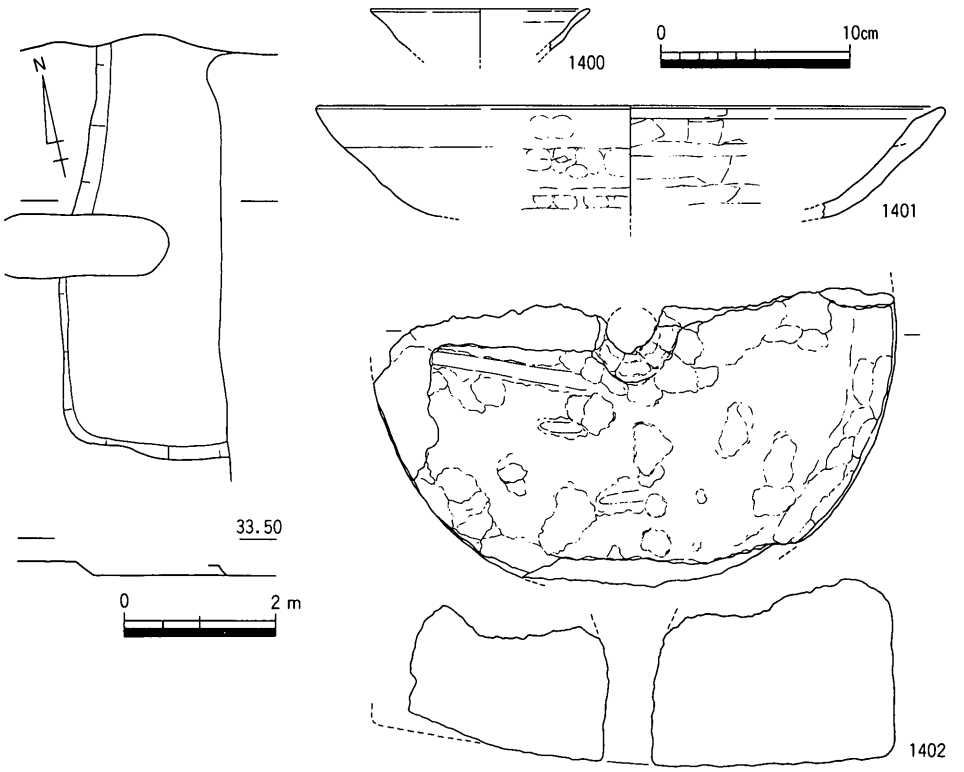
6ａ区東半部で検出した，整地層と考えられる浅い落ち込みである。遺構の切り合い関係より，ＳＫⅡ05，ＳＤⅡ02・04より後出し，ＳＤⅡ01・03より先行する。掘り方の西辺は，ほぼ直線状に検出された。北辺はＳＤⅡ01に切られ，より北側では確認されなかった。同様に東辺は，南東部でＳＤⅡ03に切られ，より東には延長しない。南限は，調査区内で確認することはできなかった。以上より，東西10.2m以上，南北19m以上の平面台形状を呈する大きな削平面と捉える。

埋土は，灰色系粘土が堆積し，部分的に4層に細分された。この埋土の相違は，数度に亘る連続した掘り込みとして捉えられるが，遺物の取り上げは土層単位ではなく，一括して行ったため，個別の掘り込み時期は捉えることはできなかった。しかしながら，北辺と東辺が，それぞれＳＤⅡ01・03に規制されている点，重複した遺構の切り合い関係などから，ＳＤⅡ01・03の開削時期に近接して行われた整地もしくは土壌改良の痕跡と考えられる。深さは0.2m前後で，断面形は浅い箱形を呈し，底面は概ね平坦であった。



第235図　ＳＸⅡ03出土遺物実測図（１/３・１/４）

遺物は若干量が出土し，いずれも破片である。４点を図示した。1394は肥前系陶器の呉器手碗である。高台畳付部を除く全面に薄い黄味がかった透明釉が施され，細かな貫入が入っている。17世紀後半～18世紀代に位置付けられよう。1395～1397は肥前系陶器の皿である。1395はいわゆる溝縁皿で，２次的被熱によるためか釉は白濁色と呈する。1396も同系統の皿と思われ，見込みに砂目積みされる。いずれも17世紀前半代に遡る。1397はやや後出する肥前内野山窯系統の灰釉皿で，見込みを蛇の目釉剥ぎし目砂を置く。17世紀後半代に位置付けられよう。1398は土師質土器の焙烙である。明確な口縁部を有さず，体部より直線状に外傾して大きく開き口縁部に至る。口縁端部は四角く納め，外面には端部を外面側に折り返した際に生じたと思われる沈線状の窪みを認める。いわゆる「岡本系」される一群に属し，18世紀代前後に位置付けられよう。1399は中世に遡る土師質土器鍋であろう。なお，図示した以外に，弥生土器，須恵器，土師質土器皿・足釜・火鉢・擂鉢，瓦質土器羽釜，備前焼大甕・擂鉢，肥前系陶器灰釉皿・折縁皿・銅緑釉皿・壺，同磁器染付皿・碗，同陶胎染付碗，瀬戸美濃系陶器碗，京焼風陶器碗等の小片や，サヌカイト剥片があり，いずれも19世紀代までには納まるものである。



第236図　ＳＸⅡ04平・断面図（１/100），出土遺物実測図（１/４）

ＳＸⅡ04（第236図）

６ａ区東半中央部で検出した落ち込みである。ＳＫⅡ09，ＳＤⅡ01，ＳＸⅡ03と重複し，切り合い関係よりそのいずれもより先行する。平面形は，北辺と東辺が撹乱され不明瞭だが，残る南辺と西辺より，長軸5.5m以上，短軸2.4m以上の隅丸方形を呈する可能性が高い。深さは0.2m程あり，底面の標高は33.0m前後である。断面形は逆台形状を呈し，底面は概ね平坦であった。

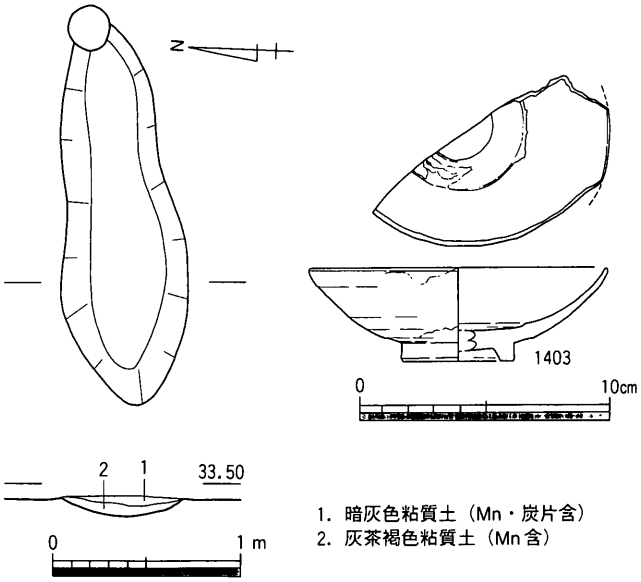
遺物は，須恵器や土師質土器皿・火鉢・足釜等の小片が少量出土したのみである。そのうち３点を図示した。1400は土師質土器皿。剥離が著しく調整不明。1401は土師質土器の焙烙。前記1398同様岡本系の焙烙鍋だが，1398と異なり口縁端部は丸く納める。胎土・調整手法は異ならず，また他遺跡の類例からも，ほぼ同時期のバリエーションと理解される。1402は角礫凝灰岩製の石臼。下面を中心に煤が付着する。一部破断面も煤けているため，破砕後被熱した可能性が高い。表面は剥離が顕著で，条線等は認められない。中央軸受孔より，辛うじて下臼であることが確認できる。上記資料より18世紀代を中心とした時期が

想定される。

ＳＸⅡ05（第237図）

６ａ区東半中央で検出した浅い落ち込みである。平面形は，長軸2.0m，短軸0.65mの東西に長いいびつな溝状を呈する。深さは約0.1m，底面の標高は33.3m前後である。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色系粘質土が堆積し，２層に細分された。

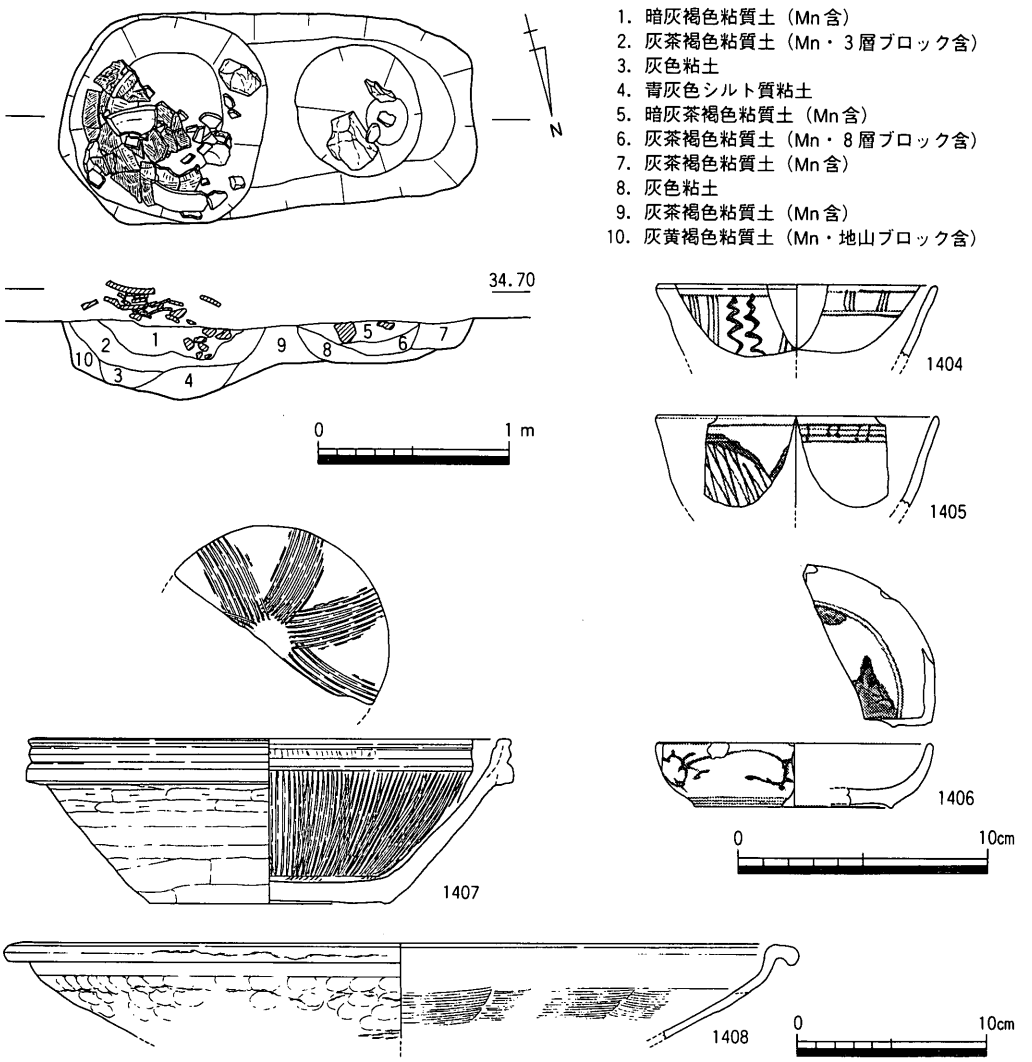
遺物はいずれも小片である。御厩系の土師質土器焙烙や同大甕・焜炉，京焼風陶器碗等が少量出土したに過ぎない。１点のみ図示した。1403は肥前系陶器の青緑釉皿。見込みは蛇の目釉剝ぎされる。17世紀後半から18世紀前半代に位置付けられる。本遺構は上記資料より18世紀前半代を中心とした時期が想定される。



第237図　ＳＸⅡ05平・断面図（１/40），出土遺物実測図（１/３）

ＳＸⅡ18（第238図）

７ｂ区中央で検出した土坑状の落ち込みである。上面検出時に，旧耕土層との識別が困難であったため，遺物を残して地山面まで掘り下げて遺構平面プランの確認を行った。上位層は旧耕土層と非常に近似しており，旧耕土層と同時期かやや後出する時期の遺構と判断される。地山面での平面形は，長軸約2.3m，短軸約1.1m，主軸方向N76°Wの東西に長いややいびつな隅丸長方形を呈する。土層断面の観察の結果，この長方形の掘り形の上面より，円形の掘り形をもつ土坑２基以上が重複して掘り込まれていることが判明した。平面的には２基の円形土坑が確認されたのみであるが，断面の観察からは３～４基の土坑の重複の可能性が考えられる。周囲に同時期の円形土坑はなく，方形掘り形内にうまく円形土坑が納まること，後述するＳＸⅡ19が近似した内容を有する等の点から，各々個別の遺構として捉えるのではなく，一括して報告するのが妥当と判断された。したがって，方形の掘り形部をＳＸⅡ18ａ，上面で確認された東側の円形土坑部をＳＸⅡ18ｂ，西側の円形土坑部をＳＸⅡ18ｃとしてそれぞれ報告する。ＳＸⅡ18ａの主軸方向は，基本的には地割りの方向と合致する。



第238図　ＳＸⅡ18平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3・1/4）

ＳＸⅡ18ｂは，平面径1.1m程のややいびつな楕円形を呈し，遺物出土位置からの残存深0.6mで，断面形は概ね逆台形状を呈する。底面は平坦ではなく，やや南が深くなる。また，ＳＸⅡ18ａの底面を0.3m程掘り抜いている。上面より，土師質土器の大甕が破砕され，石礫と共に投棄されて出土した。後述するＳＸⅡ19では，同形態の大甕が据えられて出土しており，本例も本来は円形土坑内に据えられていたものが，廃棄時に大きく打ち割られて投棄されたものと判断される。埋土は，４層に細分された。下位２層はグライ化した青灰色系粘土層が堆積し，滞水状態にあったことが想定される。上位２層は，黄褐色系粘質土であり，ブロック土の混在や遺物の出土状況から人為的な埋め戻し土と判断される。

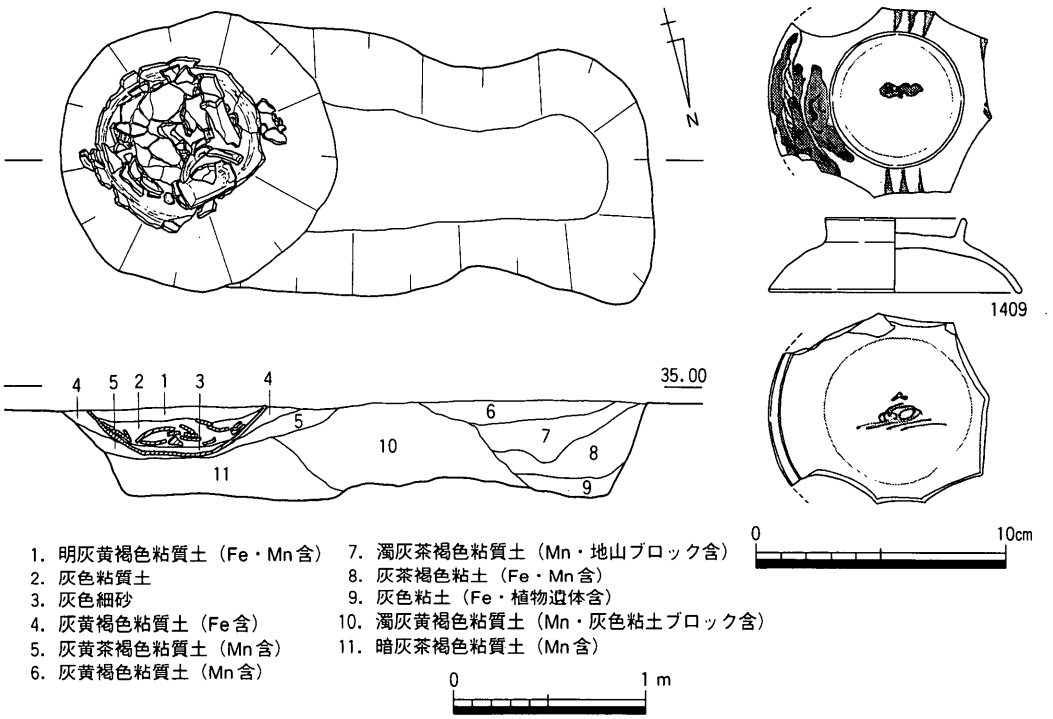
ＳＸⅡ18ｃは，平面径0.7m程の比較的整った楕円形を呈し，残存深0.2mとＳＸⅡ18ｂより小規模である。埋土上位より石材は出土したが，遺物の出土はみられなかった。埋土の堆積状況から，グライ化した灰色系粘土の下位層（８層）と，それを切り込む上位層（５・６層）に大別される。上位層部分をＳＸⅡ18ｃとして理解したが，下位層も遺構上面より掘り込んで堆積していることからすれば，同位置への土坑の重複と捉えられる。

上記したように，本遺構は単純な掘削・埋没を経ているのではなく，方形土坑内の東西にそれぞれ円形土坑が配され，さらに各円形土坑にも連続した埋没と再掘削の可能性が考えられた。こうした点から，本来方形素掘りの土坑であったものが，埋没後並列する円形２基の土坑に更新され，耕地区画の更新時まで比較的長期間に亘って継続利用された可能性が考えられる。さらに，本遺構は旧地割りの耕地区画の境付近に位置し，周囲に宅地の存在を窺わせる遺構の存在は認められず，旧耕土に近似した埋土を有する点などからすれば，耕作域に関連した遺構，例えば水溜めや肥溜めのような性格が想定されよう。

遺物は，ＳＸⅡ18ｂ上層を中心に，弥生土器，土師質土器擂鉢・火鉢・大甕，肥前系磁器広東碗，備前焼大甕，備前系擂鉢，丸瓦，平瓦等がコンテナ３箱程度出土している。大半は土師質土器大甕の破片であり，その他の遺物は小片化したものが多く，遺構の最終的な廃棄に伴い生活残滓と共に一括投棄されたものであろう。５点を選んで図示した。1404・1405は肥前系磁器碗。1404は広東碗になろうか。1406は同青磁染付の小皿である。内面口縁部には青磁釉が施釉される。底部は蛇の目凹形高台で，高台高は低く古いタイプとなろう。1404はおそらく明石産の陶器擂鉢。擦目は１単位12条で，非常に密に施される。内底面には特徴的な７～８単位の放射状の擦目を認める。白神編年のⅡ型式に位置付けられよう。1408は御厩系の瓦質土器焙烙。瓦質としては焼成はややあまく，炭素の吸着も充分なものではない。体部上端は垂直に立ち上がり，強く折り返して口縁部は水平に開く。上記資料より18世紀後半から19世紀初頭を中心とした時期が想定される。

ＳＸⅡ19（第239・240図）

７ｂ区中央で検出した長方形の落ち込みであり，前記ＳＸⅡ18にほぼ並行して配され，ＳＸⅡ18と近似した内容を有する。平面形は，長軸3.1m，短軸1.4mのいびつな隅丸長方形状を呈する。本遺構もＳＸⅡ18と同様に，複数の円形土坑が上面より穿たれる。この内東側の土坑をＳＸⅡ19ｂ，西側のそれをＳＸⅡ19ｃと呼称する。なお，ＳＸⅡ19ｃは上面では確認できず，後の土層断面の観察からそれと判断したため，平面プランについては充分な資料化はなされていない。



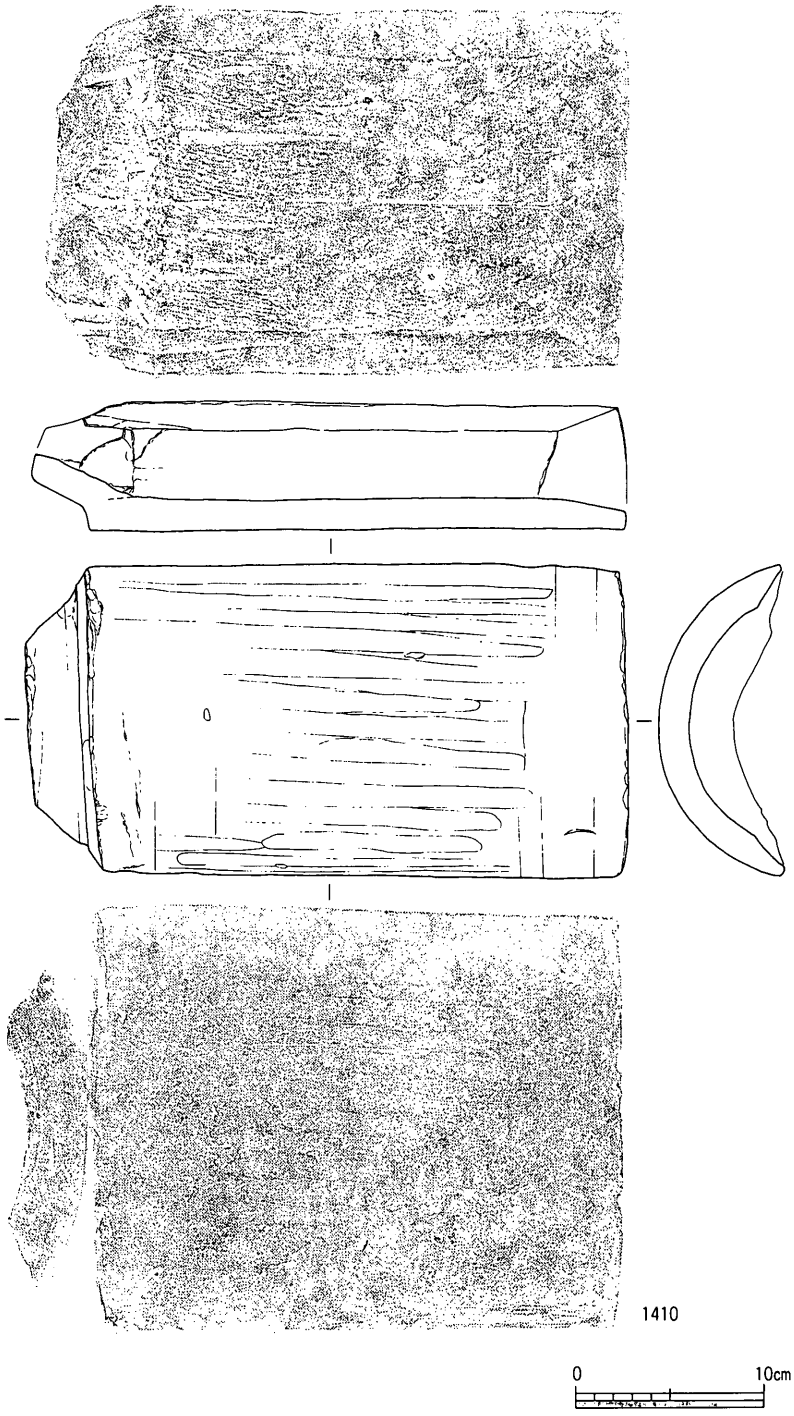
第239図　ＳＸⅡ19平・断面図（１/40），出土遺物実測図１（１/３）

ＳＸⅡ19ｂは，方形土坑東端に掘り込まれた，平面径1.4ｍ程の円形土坑である。周壁は比較的緩やかに掘り込まれ，断面形は残存深0.3ｍ程の浅い逆台形状を呈する。底面は，方形土坑底面までは達しない。土坑ほぼ中央底面に接するように，土師質土器大甕の底部片が正置の状態で出土した。大甕周囲の埋土は２層に細分されたが，基本的に大差はなく，大甕設置時の埋め戻し土である。大甕内の埋土は３層に細分された。下層は遺物を全く含まない灰色細砂層で，大甕使用時の滞水下の堆積が想定され，水溜としての用途を窺わせる。層厚は２～３㎝と薄く，堆積の度に頻繁に掻き出され，いわゆる底さらいがなされていたのであろうか。中層は，灰色粘質土で，本土層も滞水下の堆積の可能性が想定されるが，破砕した大甕の体部片や石礫，瓦などの遺物を多量に含むことからすれば，大甕廃棄後の堆積と考えられ，廃棄後も一定期間オープンな状態であった可能性がある。上層は，黄褐色系粘質土で，遺構廃絶時の人為的な埋め戻し土の可能性がある。

ＳＸⅡ19ｃは，西端に掘り込まれた，径1.2ｍの平面円形を呈すると推定される土坑である。残存深は0.5ｍと深く，底面は方形土坑底面に達する。底面には，滞水下の堆積が想定されるグライ化した植物遺体を含む灰色粘土が堆積する。

本遺構も，ＳＸⅡ18と同様に耕地の片隅に設けられた水溜めか肥溜めの可能性が想定される。

遺物は，ＳＸⅡ19ｂの大甕内の埋土中を中心に，須恵器，土師質土器大甕，瓦質土器羽釜，肥前系陶器鉄釉鉢，平瓦等が出土した。２点のみ図示した。1409は肥前系磁器碗蓋。形状からいわゆる広東碗の蓋となろう。釉調はやや悪く黄味を帯びる。18世紀末から19世紀中葉を前後する時期に位置付けられる。1410は玉縁付丸瓦。ほぼ完形で出土した。玉縁長は3.2cmと長く，側縁の面取りも内傾する。

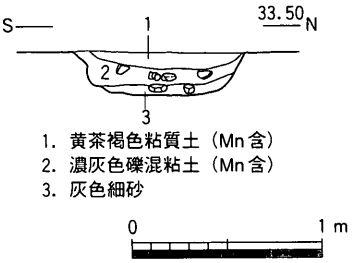


第240図　ＳＸⅡ19出土遺物実測図２（１/４）

溝状遺構

ＳＤⅡ01（第241～248図）

６ａ区東半中央で検出した直線溝である。西端は攪乱によって途切れ，東端は調査区外に延長する。ＳＤⅡ02，ＳＸⅡ02・04と重複し，切り合い関係よりそのいずれよりも後出する。延長26.8mを検出した。溝東半部でＳＫⅡ11が伴う。溝は，幅0.9～1.45m，深さ0.2～0.5mで，断面形は逆台形状を呈する。ＳＫⅡ11の東側と西側とでは規模は大きく異なり，東側が広くなる。底面の標高は，東端で32.58m，西半部で33.15mを測り，溝底面の傾斜からすれば流下方向は東である。溝幅の差は，こうした流下方向に規制されたものと考えてよい。また，流路方向もＳＫⅡ11の東西で若干異なり，東側でN89.5°W，西側でN80.5°Wであった。東側部分での検出延長は4.2m程度であり，こうした方向のぶれが局所的なものかどうかは判断できなかった。なお，西側部分での流路方向は，ほぼ現在の地割りの方向と合致する。

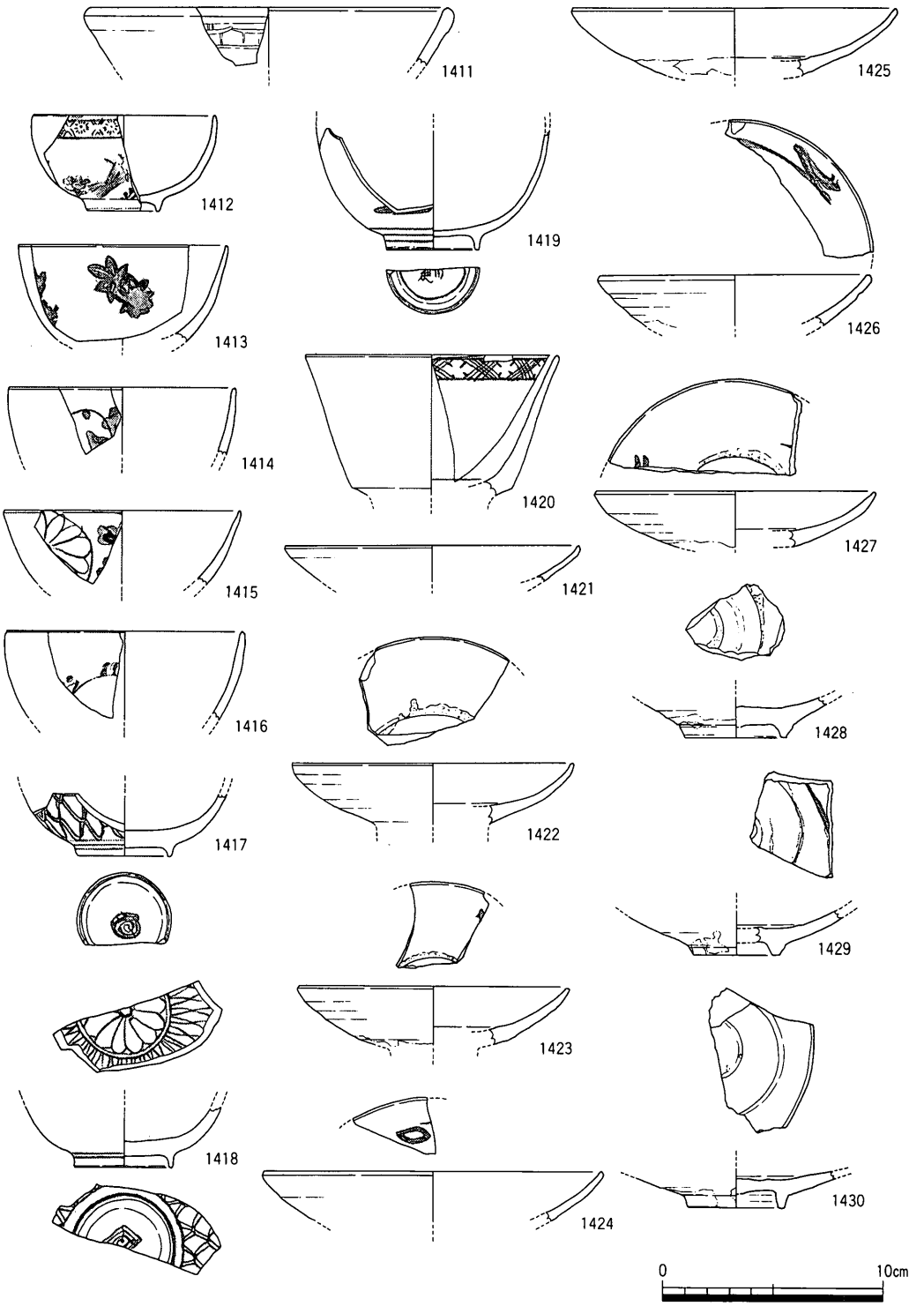


第241図　ＳＤⅡ01断面図（1/40）

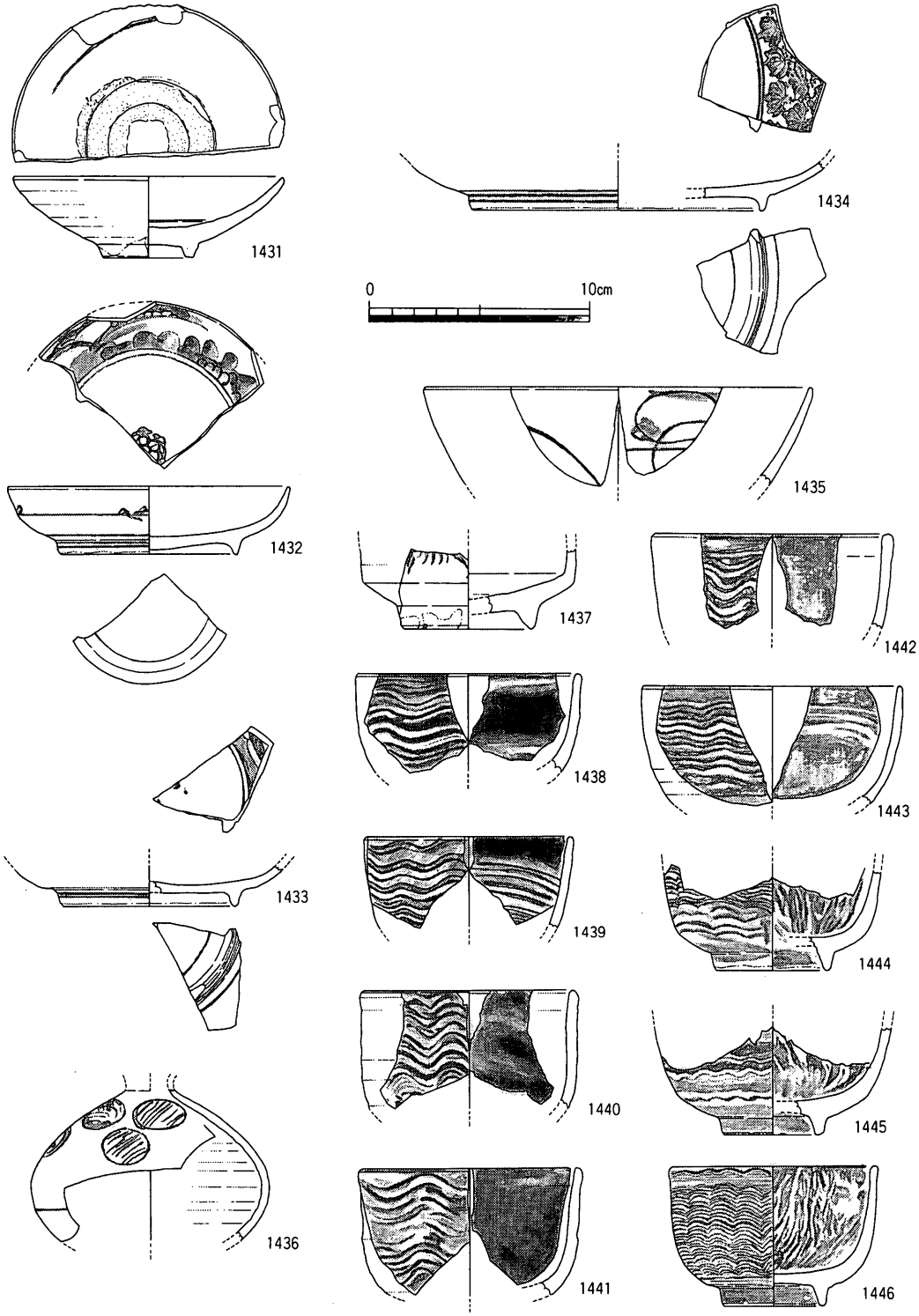
埋土の状況も，ＳＫⅡ11西側と東側で若干異なる。西側では，下層に径５～10cm程の礫を多く混じえた灰色細砂が堆積し，通水時の堆積層と考えられる。礫は上位の濃灰色粘土層（中層）に多く混在しており，下層のそれは中層からの混入と考えられ，下層堆積後人為的に投棄されたものであろう。上層は黄茶褐色粘質土がレンズ状にみられ，礫の混入がみられないことからすれば，自然堆積層と考えられる。一方東側では，西側下層の灰色細砂層は粘性を増し，灰色粘土層に置き換わる。下層上位には，暗褐色粘土層が堆積する。溝の機能が衰退し，低湿な条件下で徐々に埋没が進行したのであろう。上層は下位２層を切り込んで，多量の径５～20cmの礫を混じえた灰色粘土が堆積する。下層堆積後に，いわゆる「溝さらい」といった改修が行われたことが推測される。先のＳＫⅡ11埋土に，下層に相当する土層がみられないことからすれば，おそらくこの段階で，ＳＫⅡ11は掘削されたと考えられる。本土層は，西側中層に対応し，ＳＫⅡ11を含めて人為的に本溝が埋め戻された可能性が高い。時期は18世紀後半頃と考えられ，これ以後の遺構が周辺にみあたらないことからすれば，おそらくは屋敷地の廃絶に伴い，周辺域が整地された段階で投入されたことが想定される。

遺物は，主に中層より出土したが，調査段階で明確に層位毎に遺物を峻別して取り上げたわけではないので，以下一括して報告する。103点を図示した。1411は中国産青磁碗。

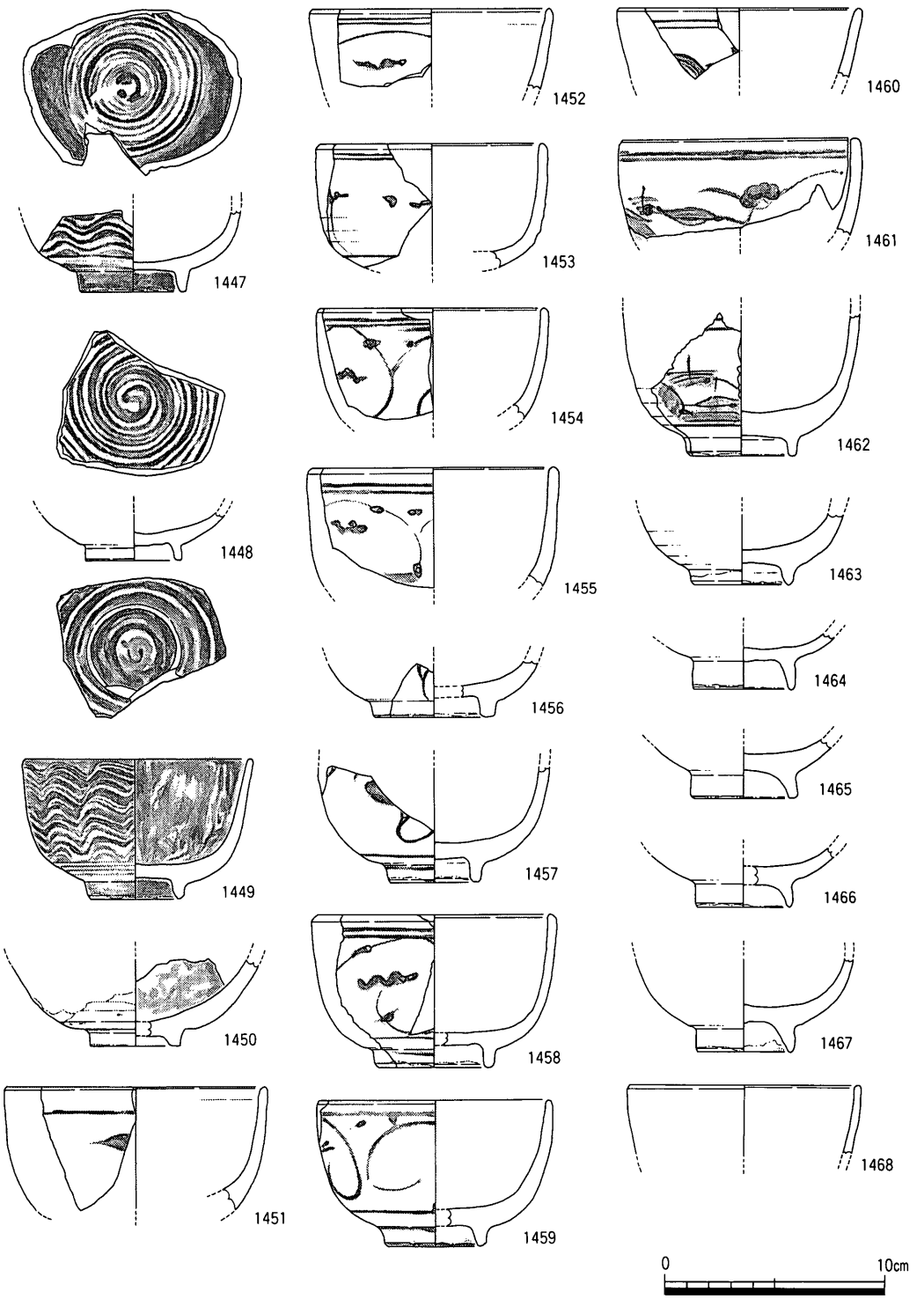
口縁部外面には簡略化された雷文を配する。中世14世紀頃に多出する形態で，他遺構からの混入であろう。1412～1419は肥前系の染付磁器碗。1412は小碗で，外面に稲束と草花文を描く。1413はいわゆるコンニャク判により，松と紅葉が染付される。1414～1418は波佐見系のくらわんか碗。いずれも18世紀前半から中葉前後に位置付けられる。1420は肥前系の青磁染付の碗。外面に厚く青磁釉を施す。18世紀中葉を前後する時期か。1421～1431は肥前系磁器の皿。見込みを蛇の目釉剥ぎした後目砂を置く。高台部無釉。口縁部内面に線文様を中心とした簡単な染付文様を描く。17世紀後半から18世紀初頭に多出する形態。1432は肥前系染付磁器の皿。見込みにコンニャク判の五弁花を描く，くらわんか手の皿。18世紀後半代に下る。1433・1434も肥前系染付磁器皿。1434では型紙刷により桐文を描く。17世紀末から18世紀初頭頃に位置付けられる。1435は肥前系磁器鉢。大碗とするには口径がやや大きく，中鉢として報告する。1436は肥前系磁器瓶。体部最大径に比して器高が低いいわゆる「香油壺」あるいは「髪油壺」と呼ばれるものに分類される。肩部にやや緑味の呉須で，丸文によろけ縞文や秋草文を描く。17世紀後半から18世紀前半代に位置付けられる。1437は肥前系磁器の香炉。内面と高台部は無釉。外面に笹文あるいは草花文がやや濃い呉須で描かれる。釉調や呉須から18世紀代と考えられる。1438～1449は肥前系陶器のいわゆる刷毛目碗である。口縁部外面は波状文を主に施文され，内面には螺旋状文や打刷毛目文などをみる。また口縁部形状から，直立して開く1438・1440～1442・1446と，外傾気味に開く1439・1449の２者がある。なお1445は２次的被熱を蒙る。1450も肥前系陶器碗。1451～1462は肥前系の陶胎染付碗。外面には1452以下の唐草文が一般的だが，少数1461・1462の山水図などをみる。上記刷毛目碗と同様口縁部形態から，直立する1451・1453～1455・1457～1459・1461・1462と，外傾する1452・1460に２分される。なお1455は２次的被熱を蒙る。1464～1469は肥前系の呉器手碗。概ね17世紀後半代に位置付けられるが，高台径が小さく小型化した1466・1469は18世紀代に下る。1470・1471は肥前系の京焼風陶器の碗。1471の鋭く削り出された高台内には，「柴」銘の刻印が押される。17世紀後半代に位置付けられる。1472・1474・1475は京焼系色絵陶器の碗。1474は上絵付によって笹？が描かれるが，剥落が著しく不明瞭。1475は草花文が赤・青・緑の上絵付される。18世紀後半代か。1473は京焼系陶器の半球形碗。高台脇は面取りされる。18世紀中葉前後に位置付けられる。1476は瀬戸・美濃系陶器の灰釉丸碗。高台はシャープに削り出される。17世紀後半代に位置付けられる。1477は瀬戸・美濃系陶胎染付の梅文茶碗。19世紀初頭に下る。1478も瀬戸・美濃系陶胎染付の半筒茶碗。外面には青味の強い呉須で草花文を描く。上半部を中心に



第242図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図１（１／３）

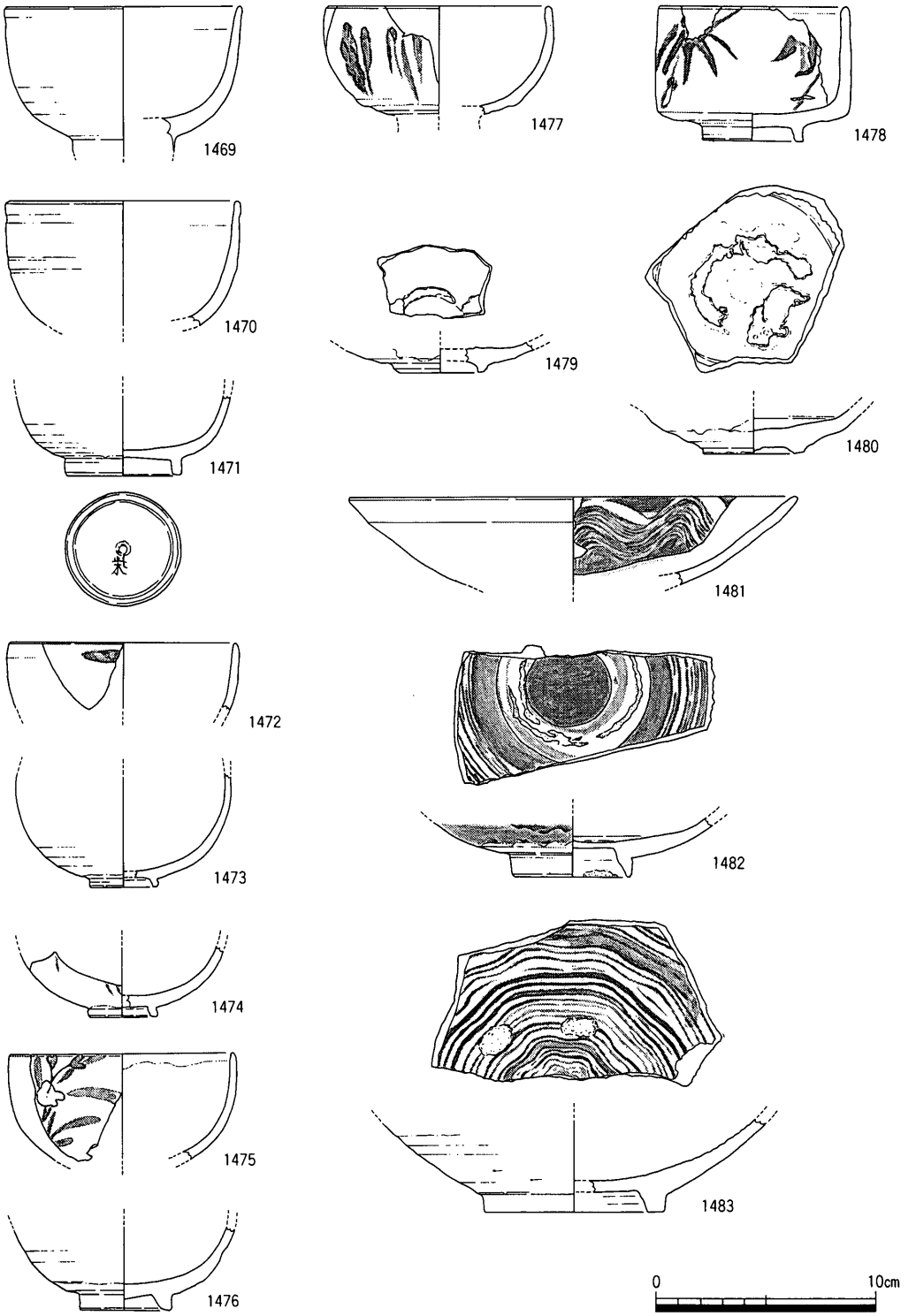


第243図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図２（１／３）

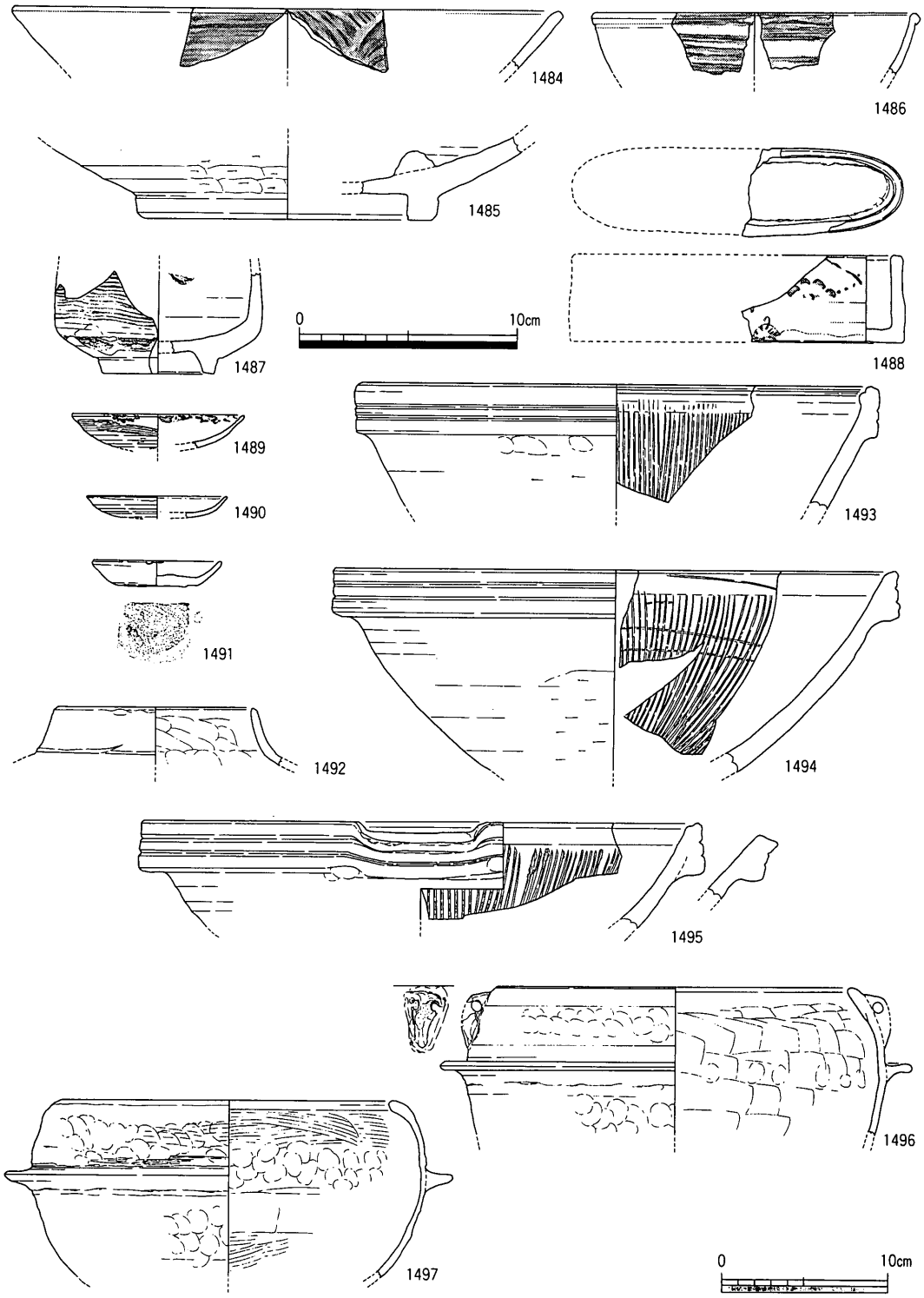


第244図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図３（１／３）

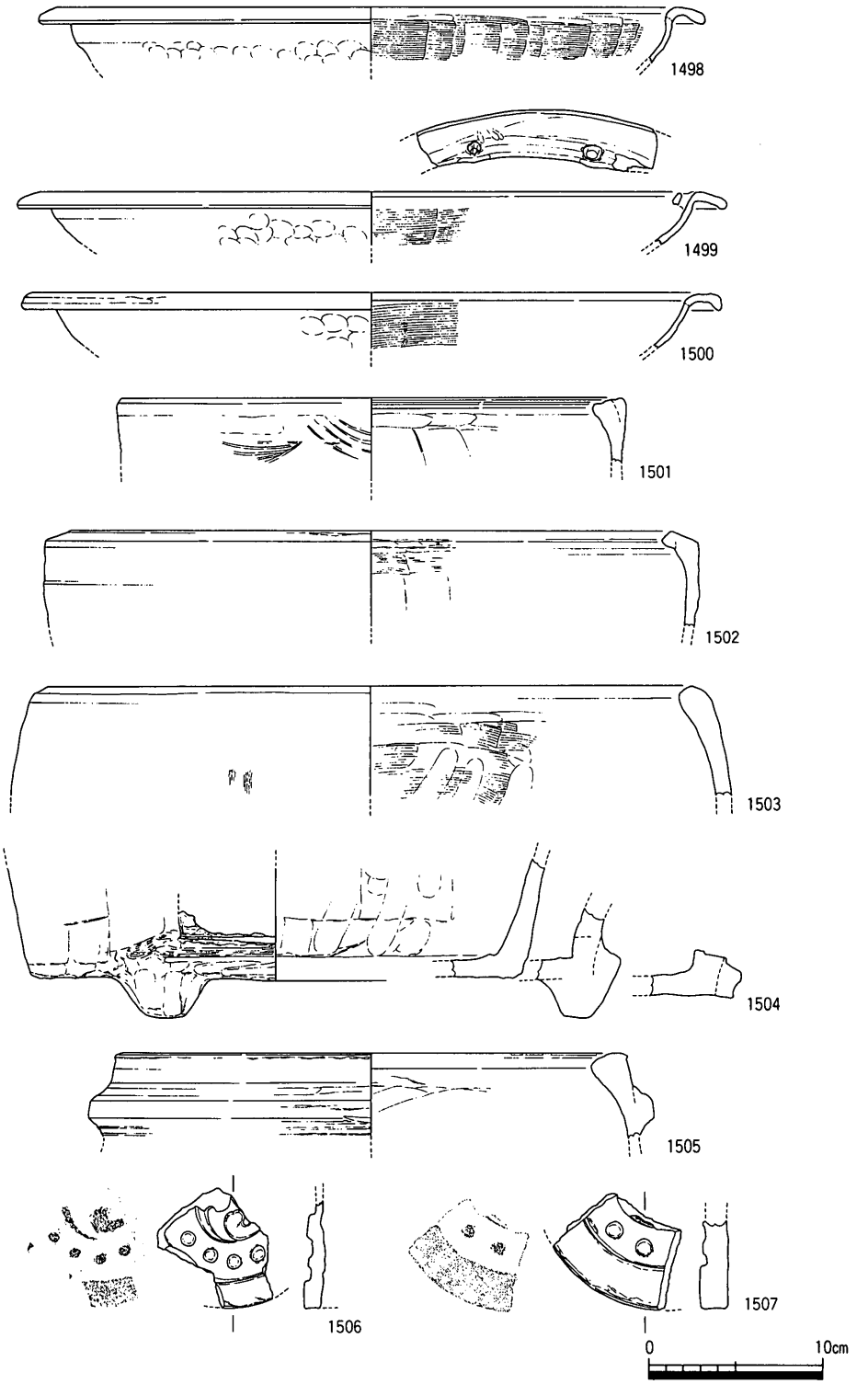
２次的被熱を蒙り，破断面にも煤が付着する。18世紀末から19世紀初頭頃に位置付けられる。1479・1480は肥前系陶器の灰釉皿。見込みに砂目積み痕を認める。1481～1485は肥前系陶器の刷毛目皿。いずれも器高に比して口径が大きいことから皿として報告する。1482は見込みを蛇の目釉剝ぎし砂目が残る。1483は内面白泥の刷毛目の後，緑釉を流し掛けする。また見込みには砂目積み痕を認める。1485は見込み砂・胎土目積みされる。また破断面を中心に２次的被熱を蒙る。いずれも17世紀後半から18世紀前半代に位置付けられると考える。1486は肥前系陶器の刷毛目鉢。現川焼に類似形態をみる。口縁部は玉縁状に小さく肥厚する。17世紀末から18世紀中葉頃に位置付けられる。1487は18世紀代の肥前系陶器の刷毛目香炉。底部と内面を除いて透明釉が掛けられる。1488は瀬戸・美濃系陶器の鉢で，いわゆる「鬢盥」と呼ばれているもの。正面に鉄釉で型紙刷の花文を描く。器高はやや浅く，17世紀末から18世紀初頭前後に位置付けられる。1489は備前系陶器の皿。口縁端部内外に煤が付着し，灯明皿として使用されたと考えられる。口縁部外面は回転ナデの後，左上がりのハケ調整を１回施す。1490は瓦質焼成の皿。外底面には緻密な回転ケズリ調整が施され，口縁部には透明釉が薄く掛けられる。1491は土師質土器皿。外底面は静止糸切り調整され，中世段階のヘラ切り調整主体とは異なる。灯明皿として使用されたのか，口縁部の一端に煤が付着する。1492は瓦質土器羽釜。体部より明瞭に屈曲して内傾しつつ立ち上がる口縁部を有する茶釜形の羽釜である。1493は堺もしくは明石産の陶器擂鉢。口縁部内面には瘤状の隆起を認める。体部内面の擦目は１条12単位でやや密に施される。白神編年のⅡ型式に相当し，18世紀後半代を中心とした時期を想定する。1494・1495は口縁部の重ね焼痕から備前焼擂鉢と考える。体部内面にはいずれも１単位７条の擦目が施される。また1495は片口を有する。いずれも18世紀前半代には納まる。1496・1497はほぼ同形態の土師質土器羽釜。口縁部外面には一対の外耳を付す。鍔部は短く水平に伸び，上下面を比較的丁寧にヨコナデ調整されるが，下面の調整はあまく，接合痕が残される。体部より口縁部にかけて一体的な作りとなっており，鍔部を貼付することによって，口縁部を区別する。1498・1499は土師質焼成の，1500は瓦質焼成のそれぞれ御厩系の焙烙である。土師質焼成のものは基本的な形態で瓦質焼成のものと大差はないが，外面調整において口縁部の回転ナデ調整がやや広い範囲に施され，体部上端にまで及ぶ点が相違点として指摘される。瓦質焼成の1500が若干後出するが，概ね18世紀代には納まるものと考えられる。1501～1504は土師質土器の焜炉。口縁部片の1501～1503は焜炉と断定するまでには至らないが，底部の1504のみ側面に穿たれた風口を認める。また1502を除いて胎土中に一定量の黒雲母粒を



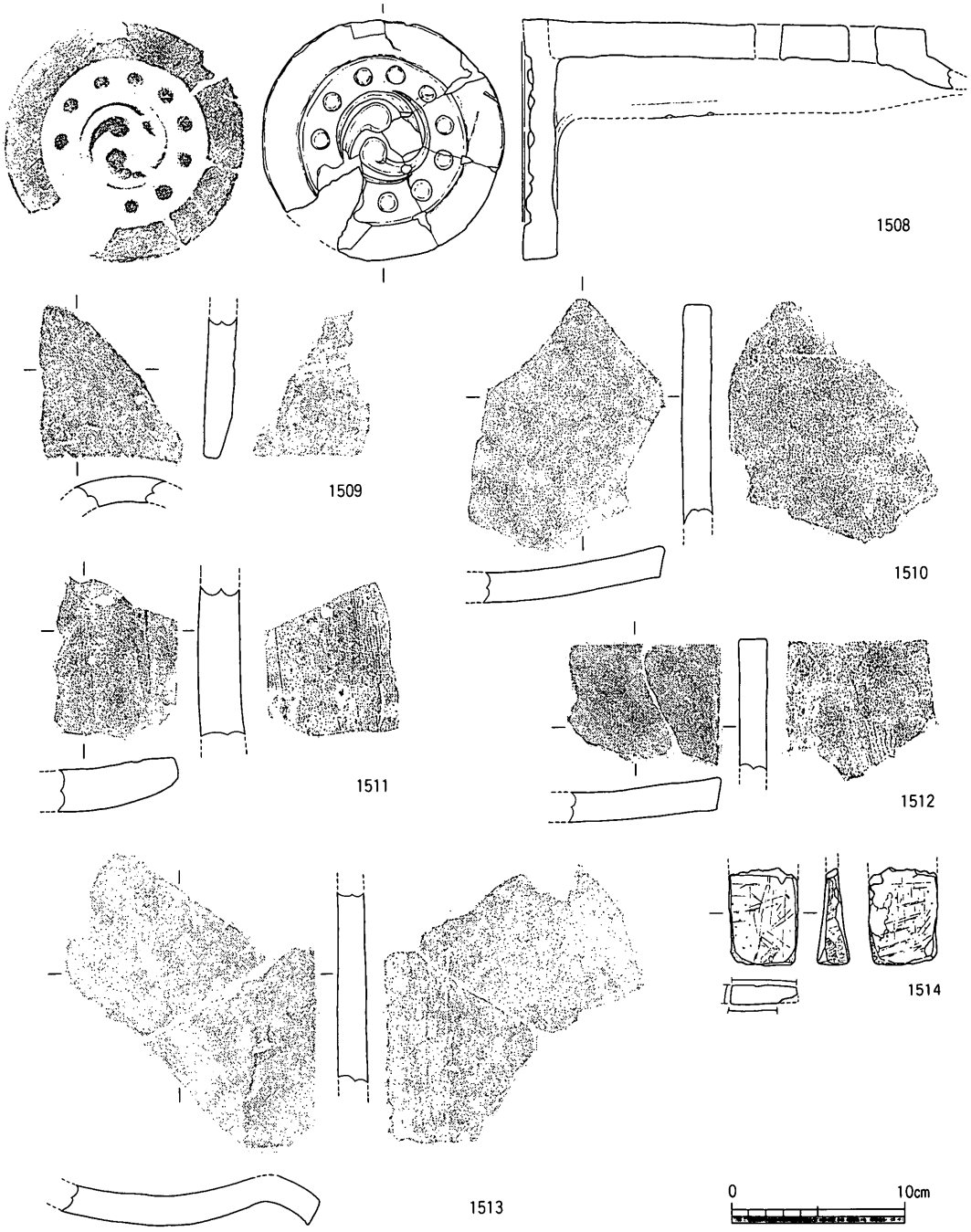
第245図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図４（１／３）



第246図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図５（１/３・１/４）



第247図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図６（１／４）



第248図　ＳＤⅡ01出土遺物実測図７（１/４）

含む。1505は土師質土器の甕。小片のため復元された口径にはやや難があるが，器壁の厚さからすれば口径40cm程度の大甕となろう。破断面を中心に内面の一部に被熱痕を認める。1506～1508は巴文の軒丸瓦。1507を除いて左巻きの巴文の周囲に11～12個の朱文が配され

る。1509は瓦質焼成の丸瓦基部片。1511は古代に遡る須恵質焼成の平瓦。凸面は縦方向のケズリ調整が施され，薄く自然釉がかかる。1510・1512は瓦質焼成の平瓦。1513は同桟瓦片である。1514は流紋岩製の砥石。扁平な板状を呈するまでによく使い込まれている。遺物は図示したものの他，弥生土器，須恵器，亀山焼甕，備前焼大甕，土師質土器足釜・擂鉢・火鉢，焼土塊，サヌカイト剥片等がコンテナ６箱程度出土している。中世遺構との重複のためか，やや中世に遡る遺物が量的に多い。上記資料は，17世紀後半から18世紀前半代の遺物が主体を占め，19世紀初頭頃までの時期幅が認められ，前記ＳＫⅡ11の内容とほぼ共通する。

ＳＤⅡ02

６ａ区東半中央で検出した，平面逆Ｌ字状を呈する溝状遺構である。重複関係より，ＳＸⅡ03とＳＤⅡ01・04より先行するが，ＳＸⅡ04との前後関係については，調査時に充分な確認を怠ったため不明である。延長方向は，重複する遺構に乱され，検出範囲は南北溝で最長4.3m程に限られる。南北溝の主軸方向Ｎ10.3°Ｅで，ほぼ現状の地割りの方向に合致する。溝の規模は，南北溝の幅1.1～1.2m，東西溝の幅1.8～1.9mで，やや東西溝が幅広である。上面はＳＸⅡ03によって大きく削平を蒙っており，残存深は0.1～0.15mと浅く，断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。底面の標高は，南北溝で32.83m，東西溝で33.90mを測り，僅かながら北に深くなる。埋土は灰茶褐色粘質土の単層であった。本溝は，地割りに合致した主軸方向を示し，整った形状を呈することからも，何らかの区画溝となる可能性が考えられるが，遺構の重複が著しく，検出範囲が限られるため，明確な性格については捉えることができなかった。

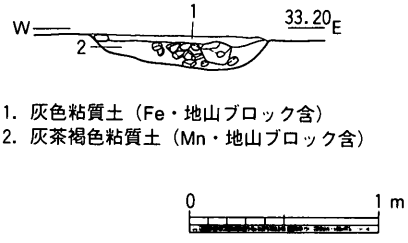
遺物は，土師質土器，肥前系磁器皿，備前焼擂鉢等の小片が数点出土したのみである。図化しうる遺物の出土はみられず，明確に時期を特定することは困難である。遺構の重複関係より，18世紀前半代頃までに位置付けておきたい。

ＳＤⅡ03（第249～251図）

６ａ区南東隅で検出した直線溝である。南北両端は調査区外に延び，延長約11mを検出した。上述した整地層と考えられるＳＸⅡ03と南端付近で重複し，切り合い関係よりＳＸⅡ03より後出する。溝は，幅0.95m，深さ0.2mで，断面形は浅い皿状ないしは逆台形状を呈する。流路方向は，Ｎ15.0°Ｅであった。側壁は緩やかに掘り込まれ，底面に起伏は乏しい。底面の標高は33.0m前後で，検出部分での溝底の比高差は顕著ではない。

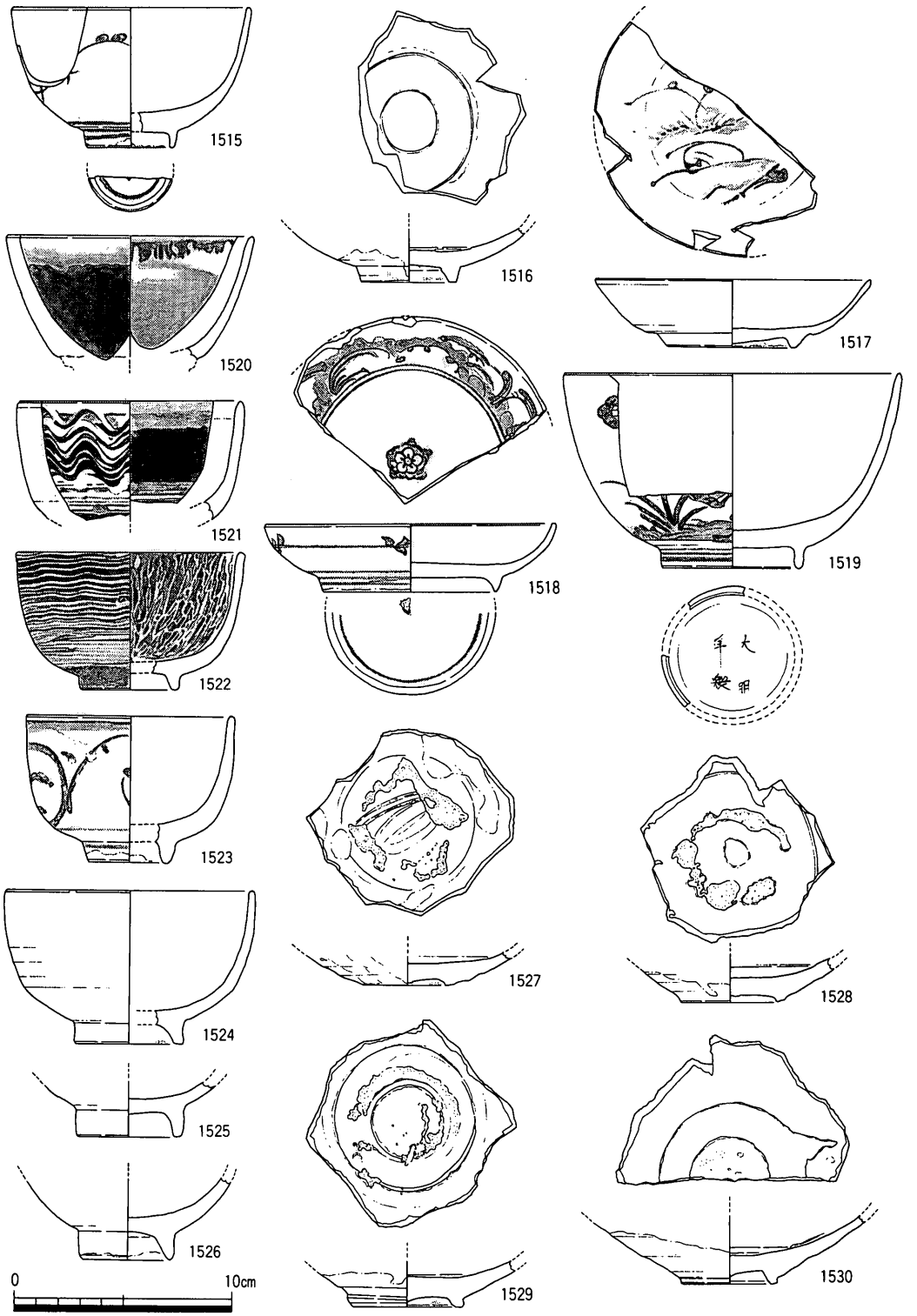
埋土は２層に細分された。下層は径５～20cm程度の礫や地山のブロック土を多量に含ん

だ灰茶褐色粘質土で，先のＳＤⅡ01中層と近似する。礫やブロック土の混入から，人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物の点からも，本溝とＳＤⅡ01が同一時期に廃絶した可能性が指摘できる。しかし，ＳＤⅡ01と本溝は斜交し，必ずしも整った位置関係にはないが，埋土の特徴から同一時期に埋没したものと判断した。上層は，地山の小ブロック土を少量含んだ灰色粘質土であり，礫の混入は認められなかったが，下層と近似した性格が推定される。

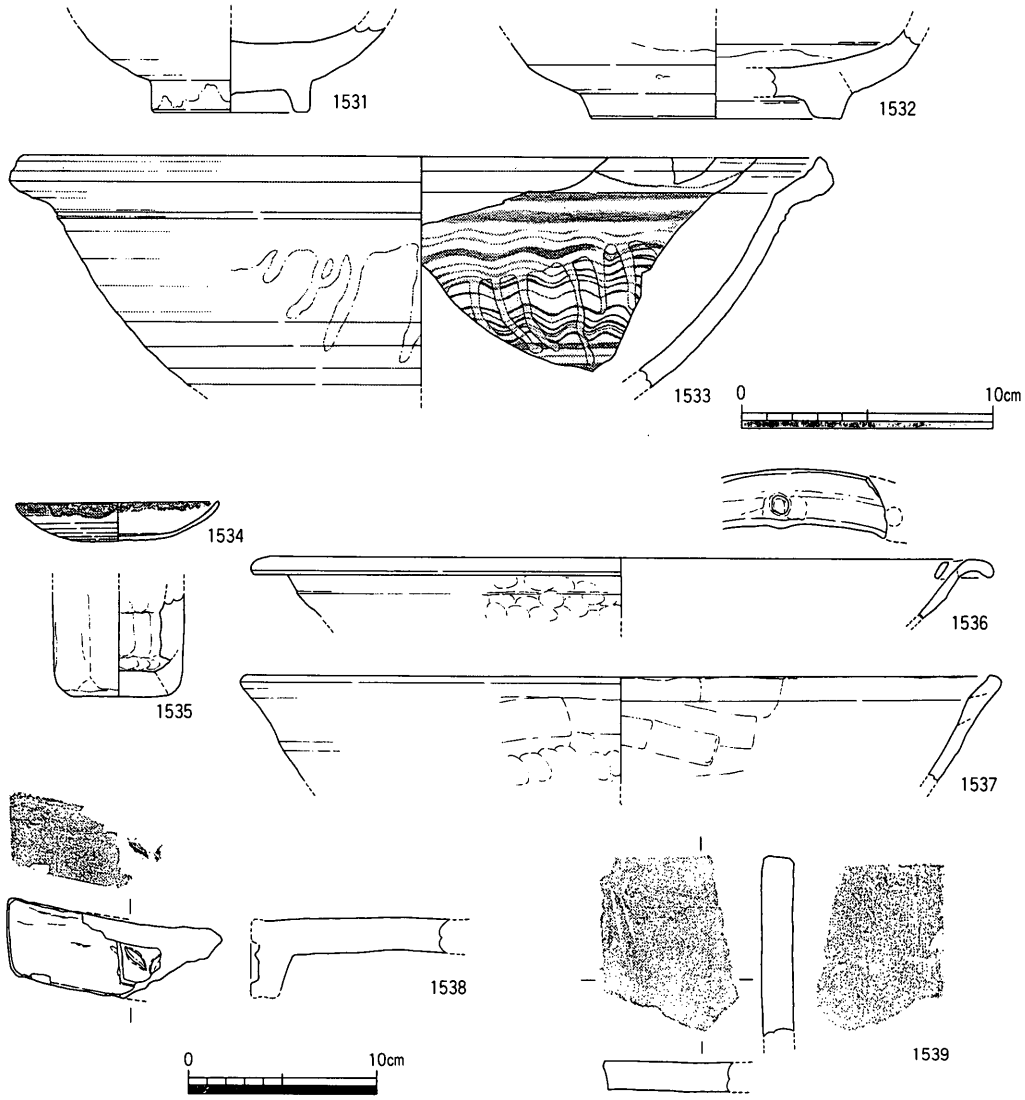


第249図　ＳＤⅡ03断面図（1/40）

遺物は，下層を中心にコンテナ半箱程度出土しており，いずれも小片であった。遺構周辺で破損したものを，礫と共に一括投棄したものと考えられる。遺物の取り上げに際しては，上記したような埋土の特徴から，特に層位によって区分はしていない。器形が判断できるものを中心に，25点を図示した。1515は肥前系磁器碗で，波佐見諸窯で盛行した「くらわんか碗」である。1516は肥前系磁器皿。見込みを蛇の目釉剝ぎし，底部を除いて白磁釉を施釉する。1517は肥前系染付皿。見込みに草花文を描く。口径に対する高台径は小さく，高台内に目砂が付着する。1518は肥前系染付中皿。外面には簡略化された唐草文を，見込みにコンニャク判の五弁花を描く。1519は肥前系染付鉢。器壁が分厚い「くらわんか手」の中鉢で，高台内に「大明年製」の字銘を描く。1520は肥前系磁器碗。外面と口縁部内面に鉄釉を掛け，その上に透明釉を施す。いわゆる天目碗に類する。1521・1522は肥前系陶器の刷毛目碗。外面と見込みに白泥を塗布し，刷毛で掻き取って波状ないし直線状の文様を描く。1523は肥前系の陶胎染付碗。外面に唐草文を描く最もポピュラーなタイプ。1524～1526は肥前系陶器の呉器手碗。丸腰のやや深めの体部を有し，畳付け部を除いて細かな貫入の入った透明釉が施釉される。1527・1528は肥前系陶器の灰釉皿。見込みに数ヶの砂目積み痕を認め，高台部に目砂が付着する。高台はいわゆる三日月高台を呈する。1529は肥前系陶器の銅緑釉皿。見込みを蛇の目釉剝ぎし，その上に砂目を置く。1530は肥前系陶器の皿で，見込みを蛇の目釉剝ぎする。破断面を含めて内面に２次的被熱による煤が付着する。1531は産地不明の陶器鉢。淡黄色のやや粗い胎土に，明るい緑灰色の青磁釉を厚く施釉する。見込み部には陰刻による文様を認めるが，施釉により不明瞭。1532は肥前系陶器の鉢。２次的な被熱を蒙り，釉調は変色している。見込みには褐色釉が掛けられ，体部外面には白泥を辛うじて認める。1533は肥前系陶器の刷毛目鉢である。内面には白泥に



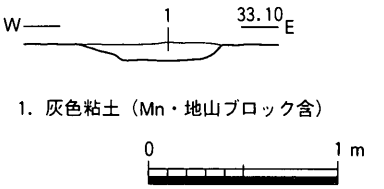
第250図　ＳＤⅡ03出土遺物実測図１（１／３）



第251図　ＳＤⅡ03出土遺物実測図２（１/３・１/４）

より波状文を描いた後，口縁部より灰釉を流し掛けする。1534は備前系陶器の皿。口縁端部内外面に煤が付着し，灯明皿として使用される。内面には刷毛を用いた赤褐色の塗土を認める。1535は土師質の焼塩壺。輪積み成形されたもので，体部内面には成形時の布目痕が僅かに残る。また外面は八角形状に面取りされる。破断面にも煤が付着し，２次的被熱を蒙る。集落遺跡からの出土としては，現状では本例が県下唯一のものである。1536は御厩系の土師質土器焙烙。口縁部内面には一対の内耳を有し，内耳の穿孔は貫通する古いタイプのものである。1537は岡本系の土師質土器焙烙。口縁端部は丸く納める。胎土中には

多量の黒雲母粒を含む。1538は軒平瓦。1539は平瓦の小片である。図示したものの他，弥生土器壺，須恵器，土師質土器擂鉢・火鉢，瓦質土器擂鉢，中世備前焼擂鉢，備前系陶器擂鉢，サヌカイト剥片等がコンテナ半箱程度出土している。上記資料より18世紀中葉までに位置付けられると考える。



第252図　ＳＤⅡ04断面図（１/40）

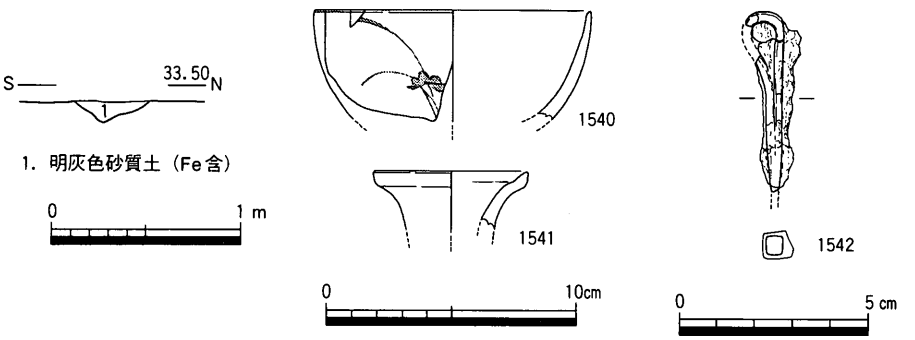
ＳＤⅡ04（第252図）

６ａ区東半東寄りで検出した，南北方向に配された小溝である。整地層と考えられるＳＸⅡ03下面で検出され，またＳＤⅡ02と重複し，ＳＤⅡ02よりは後出する。南北両端は調査区内で途切れ，検出した延長は約8.5m程に過ぎない。溝は，幅1.3m前後，深さ0.2mで，断面形は浅い皿状ないしは逆台形状を呈する。埋土は灰色粘土の単層で，明確な砂層の堆積はみられず，通有の給排水路とは異なる性格が想定される。流路方向はN9.5°Ｅで，現在の地割りの方向と概ね合致する。両側壁は緩やかに掘り込まれ，底面は起伏に乏しい。底面の標高は32.9m前後で一定し，検出部分で溝底の顕著な比高差は認められない。

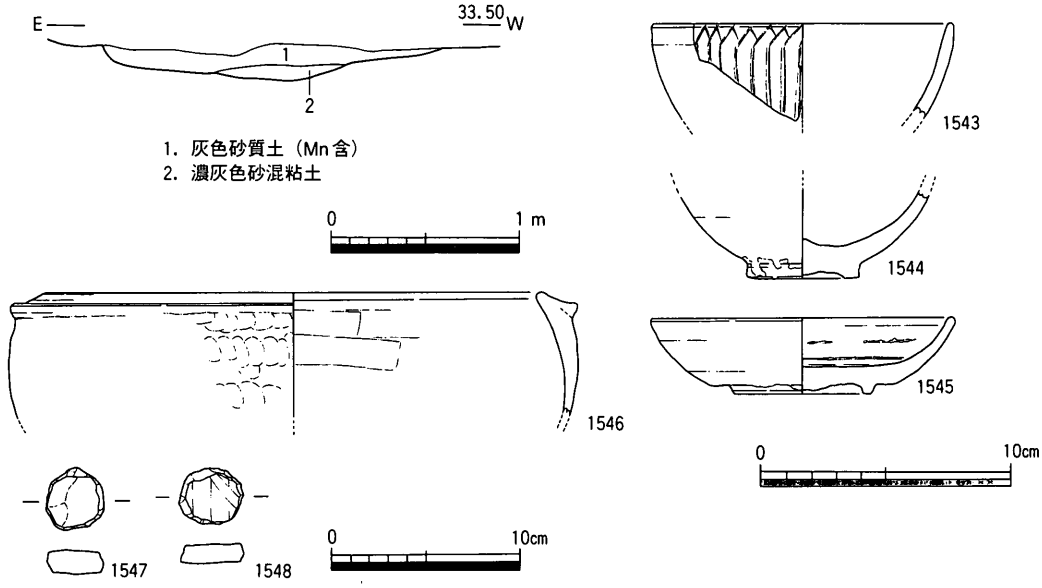
遺物は，弥生土器，須恵器，土師質土器擂鉢，瀬戸・美濃系陶器等の小片が極微量出土したに過ぎない。出土遺物より細かな時期を特定することは困難だが，出土遺物と遺構の重複関係より，概ね18世紀代に位置付けることができる。

ＳＤⅡ05（第253図）

６ａ区東半中央で検出した，東西方向に配された小溝である。東西両端は調査区内で途切れ，延長約9.3mを検出した。溝は，幅0.8m，深さ0.2mで，断面形は底幅の狭い逆台形状ないしは浅いＶ字状を呈する。流路方向はN87.5°Ｗと，現在の地割りの方向に概ね



第253図　ＳＤⅡ05断面図（１/40），出土遺物実測図（１/３・１/２）



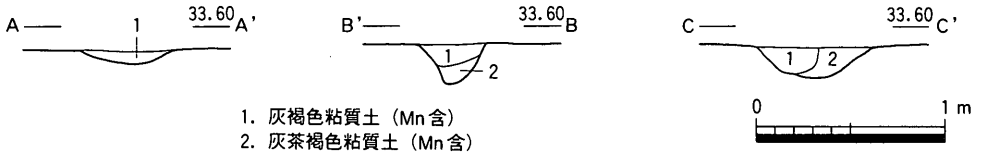
第254図　ＳＤⅡ07断面図（１/40），出土遺物実測図（１/３・１/４）

合致する。底面の標高は32.9m前後と一定し，検出部分で流下方向を特定することはできなかった。埋土は，暗灰色砂質土の単層であった。

遺物は，極少量しか出土せず，いずれも小片である。３点を図示した。1540は肥前系磁器のくらわんか手の染付碗である。外面に草花文を描く。18世紀中葉から後半代に位置付けられよう。1541は同じく肥前系磁器の瓶口縁部で，大形の瓶が復元される。用途としては酒徳利の可能性が高い。18世紀代か。1542はヘアピン状の鉄製品。単体で使用するものではなく，金具の一部を構成すると思われるが用途は不明。図示したものの他，土師質土器，肥前系陶器皿等の細片があり，18世紀後半代以降に下るものはなく，遺構埋没の下限を示していると考える。

ＳＤⅡ07（第254図）

６ａ区東半南西隅で検出した，浅い溝状遺構である。北端は調査区内で途切れ，南端は調査区外へ延長する。約7.0mを検出した。溝は，幅3.6m，深さ0.4mで，断面形は浅い皿状を呈する。流路方向はN14.0°Ｅと，現在の地割りの方向と概ね合致する。底面の標高は，南端で33.29m，北端で33.15mと僅かに北に傾斜する。なお，北端部で２条に分岐する可能性があるが，検出範囲が限られており断定するまでには至らなかった。溝と重複して数基の柱穴を検出したが，いずれも溝底面より掘り込まれており，中世に遡る可能性が高い。埋土は，灰色系の粘土及び砂質土が水平堆積しており，穏やかな環境下で埋没し



第255図　ＳＤⅡ10断面図（1/40）

たものと考えられる。

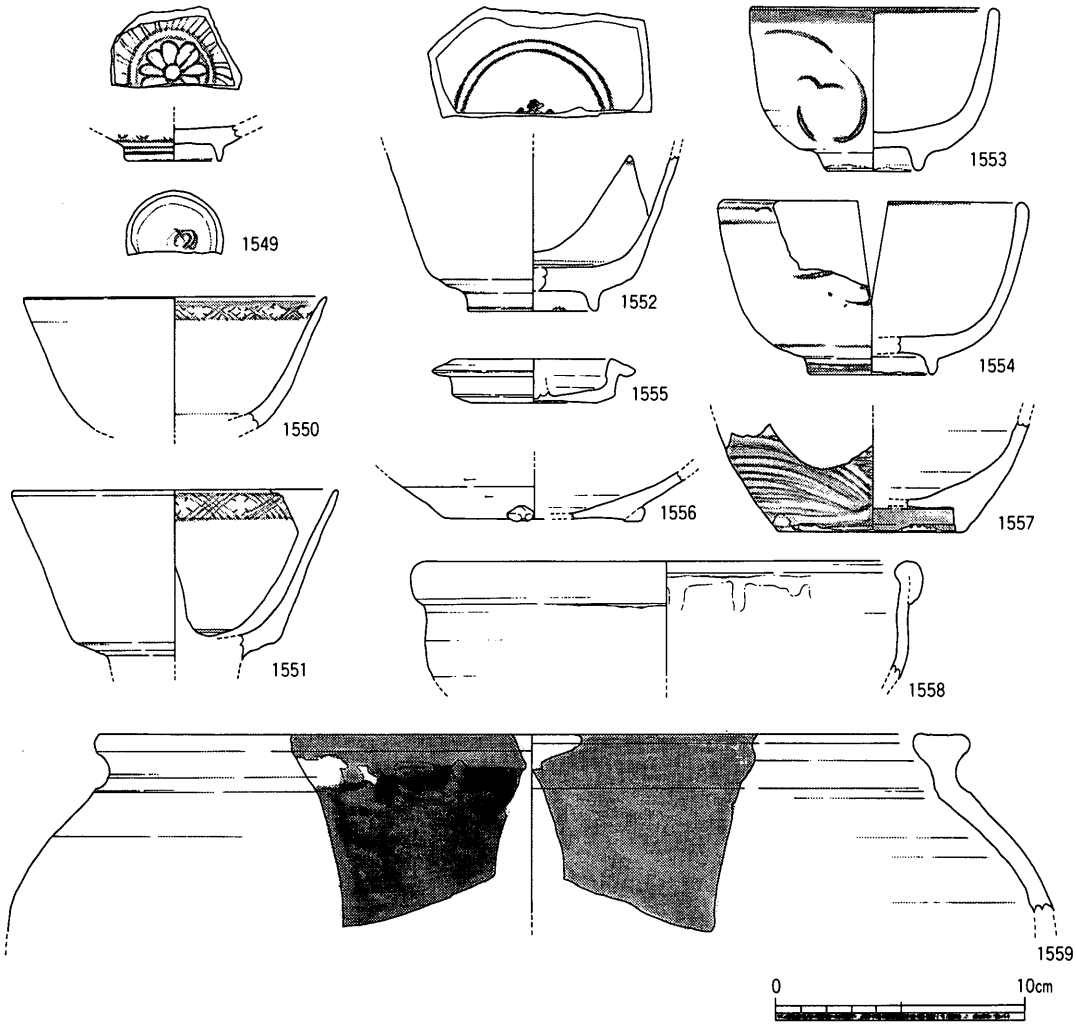
遺物は６点を図示した。1543は中国産青磁碗。外面には線描きの剣先状細連弁文を有する。中世後半代に遡る。1544は肥前系陶器灰釉碗。高台部を除いて施釉される。また２次的被熱により，釉はかなりの部分が剥落し変色している。1545は肥前系陶器の灰釉皿。底部を除いて薄く灰釉を施釉。1544と共に17世紀前半代に位置付けられる。1546は土師質土器鍋。退化した口縁部と鍔部の形状から，中世末頃に位置付けられる。1547は土師質土器を，1548はおそらく備前焼製品を転用したそれぞれ土製円盤である。周縁を打ち欠いて成形する。上記資料は概ね17世紀前半代までに位置付けられる。

ＳＤⅡ09・10（第255～258図）

６ａ区西半部で検出した，浅い溝状遺構である。両溝は，約0.3～0.5mの間隔をあけてほぼ東西に並走する。位置関係より，両溝が併存する可能性が高く，調査区西部をＨ字形に区画する区画溝と考えられるが，区画内部に建物等は検出されていない。

ＳＤⅡ09は，北に配された東西溝で，延長27.2mを検出した。東西両端は，やや幅を広げつつ北に屈曲し，２m程延長して途切れる。本来的な北への延長距離は判然としないが，延長部分で地山面の急激な落ちはみられなかったため，北への延長部は東西溝より浅い小溝程度のものであったと思われる。溝は，幅0.4～1.1m，深さ0.15～0.35mで断面形は逆台形状を呈する。流路方向はN79.5°Wとなり，現在の地割りの方向と概ね合致する。底面の標高は，西端で33.35m，東端で33.0m前後となり，やや東に深く掘削されている。

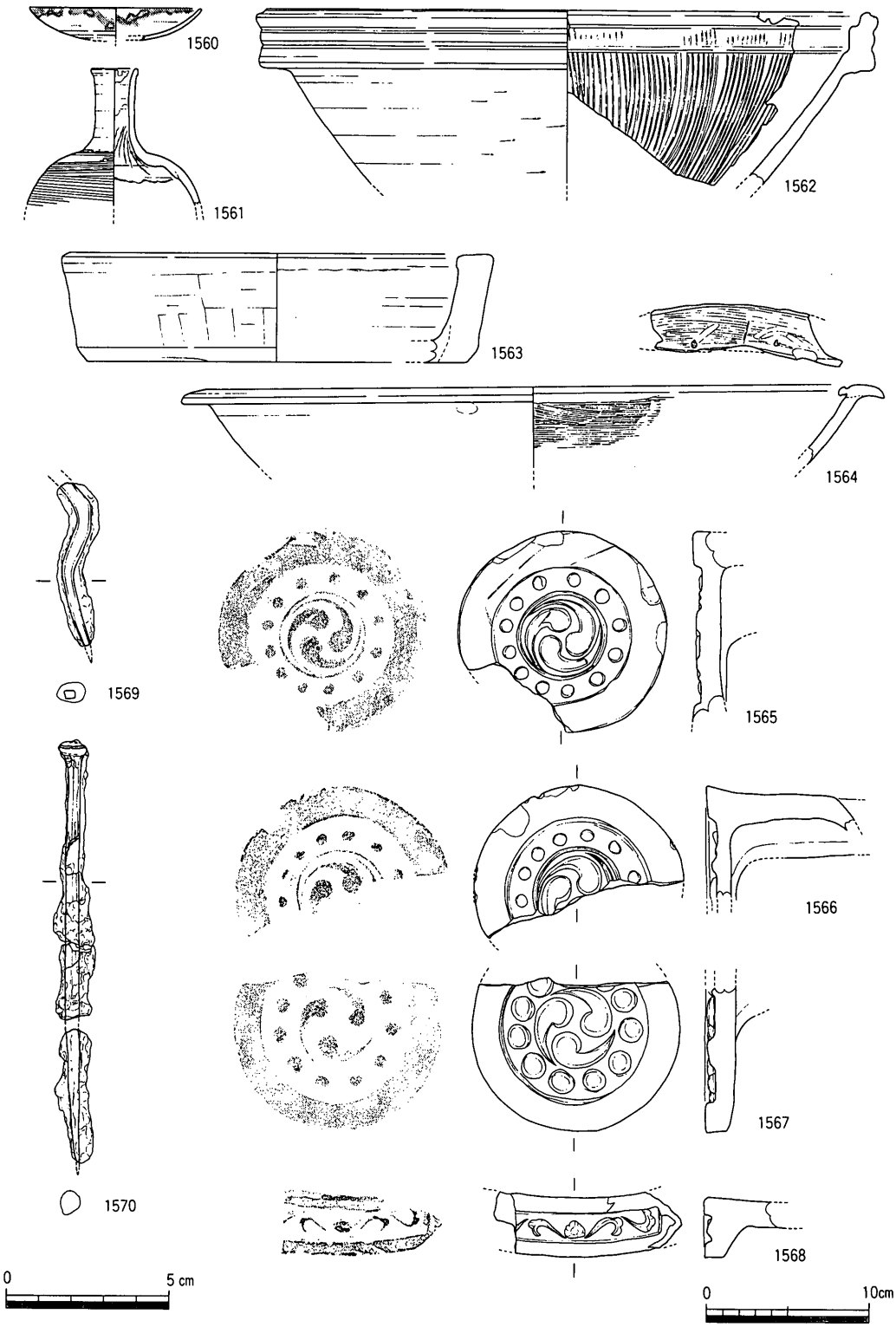
一方，南側のＳＤⅡ10は，平面Ｌ字形を呈し，東西溝の延長21.5mを検出した。西端は緩やかに屈折して南に約３m程延長して途切れる。西端の南北溝のラインが，ほぼＳＤⅡ09のそれと揃うことからすれば，東端もＳＤⅡ09東端付近まで延長し，南に折れて平面コ字形を呈していた可能性は高い。溝は，幅0.7～1.2m，深さ0.15～0.4mで，断面形は西半部で浅い皿状を，東半部で逆台形状を呈する。溝底の標高は，西半部で33.0m，東半部で32.8m前後となり，本溝もやや東に深く掘削されてはいるが，平面形状からすれば，必ずしもそれが流下方向を示すとは限らない。埋土は２層に細分され，いずれも灰褐色系の粘質土



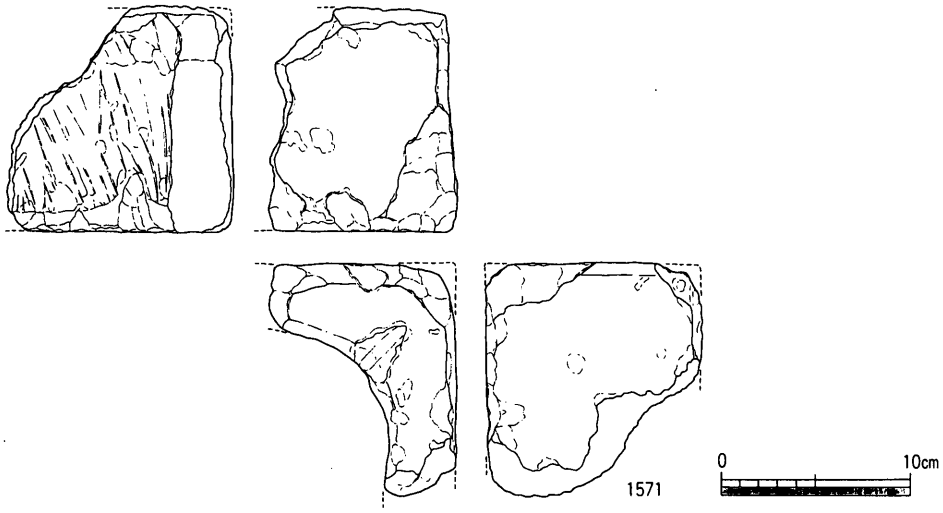
第256図　ＳＤⅡ09出土遺物実測図１（１/３）

が認められた。西端部では溝深が浅いためか，上位層のみしか認められない。

遺物は，ＳＤⅡ09東西溝を中心に，両溝合わせてコンテナ３箱程度が出土した。大半はＳＤⅡ09より出土した土器・陶磁器片である。陶磁器類はすべて小片であり，完形に復元可能なものはなく，また出土状態も意図的な埋置の可能性は少なく，一括して投棄されたもののようである。図示したものはすべて，ＳＤⅡ09より出土した遺物である。1549は肥前系磁器のくらわんか碗。割り筆で描かれた二重網目文を主として，高台内には渦福銘を，見込みは菊花文がそれぞれ染付される。1550～1552は肥前系磁器で青磁染付碗。腰部よりやや内湾気味に立ち上がる1550と，むしろ外反気味に開く1551・1552の２者がある。いずれも口縁部内面には四方襷文が描かれるが，前者の方がやや幅が狭い。また1552の見込み



第257図　ＳＤⅡ09出土遺物実測図２（１/２・１/４）



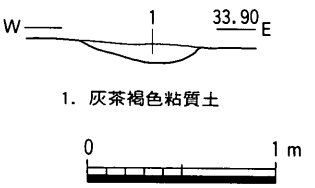
第258図　ＳＤⅡ09出土遺物実測図３（１/４）

にはコンニャク判の五弁花が染付される。1553は外面に唐草文を配した通有の肥前系陶胎染付碗。1554も同じく陶胎染付碗だが，外面の文様は不明。口縁部は顕著なひずみがみられる。1555は産地不詳の陶器蓋。おそらく水注の蓋であろう。外底面は矩形に鋭く削られ，内面には鉄釉が施釉される。中央部の摘みは欠損する。1556も産地不詳の施釉陶器底部。土瓶の底部となろうか。外底部には小粘土塊で３足を貼付し無釉，内面には透明釉施釉。在地冨田焼の可能性もある。1557は肥前系陶器の刷毛目甕？。底部は碁笥底。外面に白泥で直線状の刷毛目文を描く。1558も産地不詳の施釉陶器鉢。口縁部は外面側に折り返して玉縁状を呈する。本例も在地冨田焼の可能性がある。1559は丹波系の陶器甕。口径から復元すれば，器高40cm程度の中形の甕となろう。体部外面に鉄釉を施した後，内面から口縁部外面にかけて透明釉を施釉する。胎土は灰色を呈し，やや粗い。1560は備前系陶器の皿。口縁端部に煤が付着し灯明皿であろう。内面と口縁部外面に赤褐色を呈する塗土が施される。1561は産地不詳の陶器徳利。肩部に櫛目を施し，外面には鉄釉が施釉される。1562は堺もしくは明石産の陶器擂鉢。口縁部内面に強い段を有する。体部外面は上端付近までケズリ調整される。内面の擦目は１単位９条で，比較的密に施され，上端は回転ナデにより消される。白神編年のⅡ型式（白神1992）に位置付けられる。1563は土師質土器の鉢。外面は横方向のケズリ調整の後回転ナデ調整される。1564は御厩系の土師質土器焙烙。口縁部内面の内耳部分に穿たれた円孔は，貫通せず本来の機能を喪失した後出形態である。1565～1567は軒丸瓦。いずれも左巻きの巴文を有するが，1567は巴の尾が短くなったやや後出

するタイプである。1568は簡略化された唐草文を配した軒平瓦。1570は丁字頭の鉄釘。1569も頭部を欠損するが鉄釘であろう。1571は角礫凝灰岩製の石製品。石灯篭の火袋部分の小片と思われる。内面には斜め方向の鉋痕が顕著に残される。なお，上記したものの他，弥生土器，土師質土器甕・鍋，瓦質土器羽釜，肥前系磁器仏飯具，同陶器刷毛目鉢，瀬戸美濃系陶器腰錆釉碗，備前焼甕，平瓦，丸瓦等が出土している。またＳＤⅡ10よりは，弥生土器，須恵器，土師質土器足釜，亀山焼甕等の小片が少量出土したに過ぎない。上記資料は18世紀中葉から後半を中心とし，瀬戸・美濃製品や在地産陶器類等に一部19世紀代に下る可能性が想定される。

ＳＤⅡ11（第259図）

６ｂ区北東隅で検出した，南北方向に延びる直線溝である。南端は調査区内で途切れ，北端は調査区外へ延長するが，６ａ区では削平によるため検出されなかった。したがって，延長4.8m程を確認したにとどまる。溝は，幅約0.6m，深さ0.1m，断面形は浅い皿状を呈する。流路方向はN10.5°Ｅで，現在の地割りの方向とほぼ合致する。底面の標高は，33.65～33.8mで，緩やかに北に流下する。

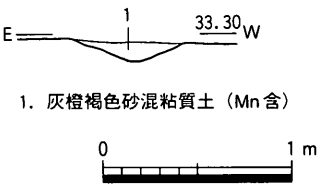


第259図　ＳＤⅡ11断面図（1/40）

遺物は，中世後半期に遡る土師質土器擂鉢の口縁部小片が１点出土したに過ぎない。時期を特定することは困難だが，検出位置や流路方向などから当該時期に位置付けられるものと判断された。

ＳＤⅡ37（第260図）

10ａ区第１面東半部で検出した溝状遺構である。僅かに蛇行しながら南北に配され，両端は調査区外へ延び，延長約24mを確認した。10ｂ区では南への延長部分は確認されていない。重複関係より，ＳＤⅡ39より後出する。溝の幅は，0.2～0.6mとやや北半部が幅広となる。深さは0.05～0.1mと浅く，断面形は皿状を呈する。上記上面幅の差は，単純に上面の削平深度に起因するものであろう。流路方向は，やや蛇行するものの概ねN10～15°Ｅに配され，現行の地割り方向にほぼ合致する。底面の標高は，南端で33.20m，北端で32.86mを測り，底面の高低差から北に流下するものと考えられる。



第260図　ＳＤⅡ37断面図（1/40）

遺物は，土師質土器足釜，備前系陶器擂鉢等の破片が３点出土したのみである。出土遺

物より，当該時期に位置付けられるものと判断したが，細かな時期については不明である。

本文註

1. 本遺構より出土した貝類遺骸は新腹足目アクキガイ科アカニシ Rapana venosa（Valenciennes, 1846）である。なお，ＳＫⅡ30より出土した貝類遺骸も，同種のアカニシであった。

貝類遺骸の同定に際して，香川県立香川中部養護学校教諭　多田昭氏にお世話になりました。記して感謝致します。

第6節　包含層

いくつかの調査区では，現・旧耕作土層下において，極少量ながら遺物を包含する自然堆積層あるいは人為的な整地土層が削平を免れて残存することが確認された。詳細については本章第1節に記したが，これら包含層及び遺構検出途中や撹乱坑等より出土した遺物について，前節までの報告内容の参考となるものを特に選択して，以下記述する。

1591・1592・1594・1598は6ａ区出土の遺物である。1591・1592は調査区中央の撹乱坑より出土した軒丸瓦片。いずれも左巻きの巴文を有するが，1592の方が朱文数が多く同笵ではない。1594・1598は遺構面精査中に出土した。帰属層位や遺構を明確にし得ない遺物である。いずれもサヌカイト製の横長剥片石核と考える。

1572～1582・1588は7区出土の遺物である。その内，1573・1575・1577・1578・1579は包含層Ⅱ出土の遺物で，その他は遺構検出途中に各遺構より遊離して出土したものである。1572は器表面の磨滅が著しく詳細は不明。形状よりＴＫ217型式期に併行する在地産の粗製土師器坏Ｇとみられる。1573は須恵器坏蓋として図示した。ＴＫ209からＴＫ217型式期を前後する時期のものである。1574は外面底部上端に1条の沈線を配した須恵器坏。成形は全体にシャープで，ＴＫ217型式期に出現する坏Ｇ形態。1575は須恵器坏。高台は外底縁辺ではなく，やや中央寄りに付される。8世紀初頭を前後する時期に位置付けられる。1576は須恵器底部。坏底部とすれば1575よりやや後出するか。1577は須恵器高坏脚部。脚端部は強く外反させて，下方へ鋭く摘み出す。進展した短脚形状よりＴＫ217型式期に併行する。1578は須恵器壺口縁部。口縁端部は矩形に納めつつ，小さく摘み上げる。8世紀前半代には納まる。1579は須恵器長頸壺。頸基部には鈍い突帯を貼付する。1580は土師器小形甕。口縁部は小さく外反し，端部は上方へ僅かに摘み上げる。1581は土師器の釣鐘形蛸壺頂部小片。頂端部は鈍く溝状に窪み，側面より径8㎜程の円孔を穿つ通有のタイプ。1582は須恵器鉢。口縁部外面下端には1条の沈線が配される。1588は縄文土器深鉢。外面にはやや密な横方向のヘラナデ調整を認める。後期中葉を前後する時期であろう。

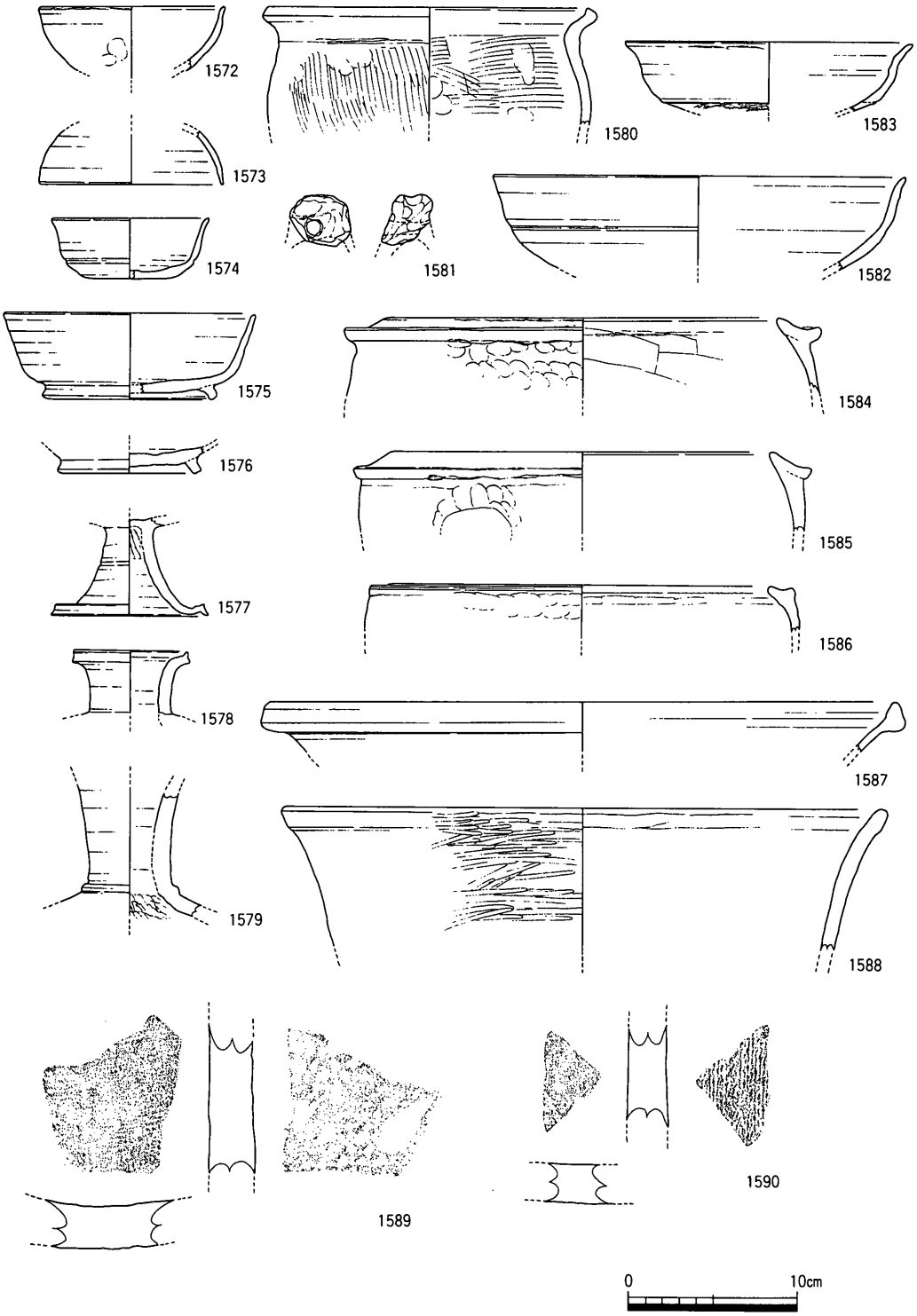
1590・1600は8区遺構面精査中に出土した遺物。明確な帰属遺構が不詳なため，本節で報告する。1590は須恵質焼成の平瓦小片。凸面には縄目タタキ痕を，凹面には布目圧痕を認める。器壁は厚いが，均質な素地粘土が使用される。1600はサヌカイト製の横長剥片石

核か。

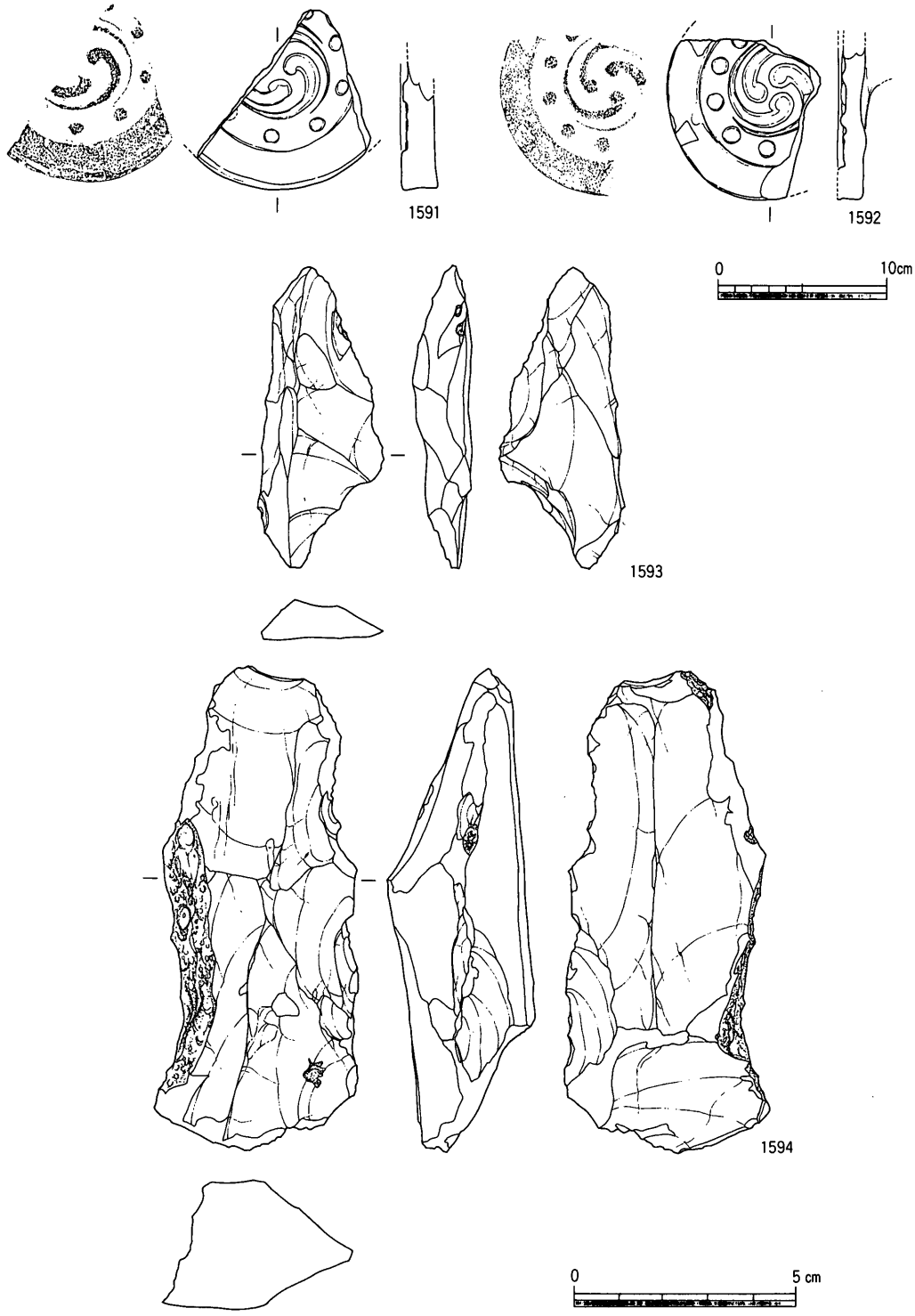
1584・1585は10ａ区谷７上面を中心に確認された中世包含層中の資料である。いずれも土師質土器足釜で，大きな時期差を認めない。15世紀前半代を前後する時期に位置付けられよう。

1593・1596・1597は10ｂ区調査中に出土した遺物。旧耕土層及び谷７調査中に出土したが，明確な層位を把握できなかった遺物である。いずれもサヌカイト製。1593は横長剥片石核であろう。全体に白色風化が進展し，旧石器時代に遡る。1596は僅かに潰し加工をみることから楔形石器と考えた。1597は剥片である。

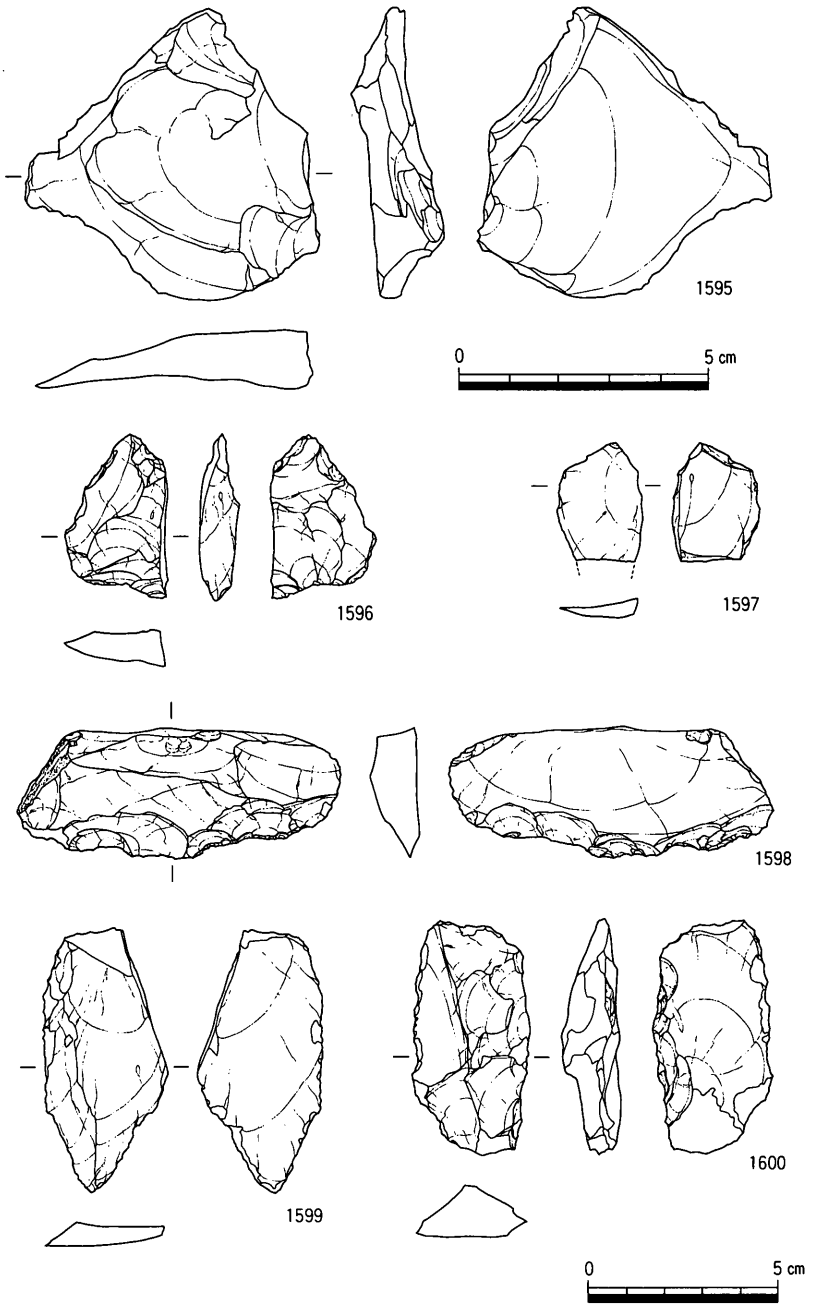
1583・1586・1587・1589・1595・1599は11区出土の遺物。1586・1587・1595は旧耕土層の最下位層より主に出土した。1586は中世末頃に散見される土師質土器鍋。口縁部は強く内傾して萎縮し，下端外面に瘤状の痕跡的な鍔を有する。1587は東播系須恵器の捏鉢。口縁部は肥厚して玉縁状を呈する。14世紀代に位置付けられる。1595はサヌカイト製の剥片。1583・1599は谷７上面を精査中に出土した。正確な出土層位が把握できなかったため包含層として報告する。1583は土師器高坏坏部片。坏部中位に屈曲を有し，下半外面はハケ調整される。布留式新相を前後する時期に位置付けられる。1599はサヌカイト製の縦長剥片。1589は11区遺構検出中に出土しており，帰属遺構は不詳。やや焼成のあまい，土師質の平瓦片である。凸面には粗い格子目タタキ痕を，凹面には布目圧痕をそれぞれ認める。



第261図　包含層等出土遺物実測図１（１/４）



第262図　包含層等出土遺物実測図２（１/４・２/３）



第263図　包含層等出土遺物実測図３（２/３・１/２）

文献註

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No 2』

上原真人ほか　1993『木器集成図録　近畿原始篇（解説）』　奈良国立文化財研究所

大久保徹也　1992「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社

大久保徹也ほか　1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊　中間西井坪遺跡Ⅰ』　香川県教育委員会他

大久保徹也　1997「讃岐・阿波地方における弥生墳丘墓・前期古墳出土の土器」『第16回庄内式土器研究会発表資料』

片桐孝浩　1997『県道三谷香川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　百相坂遺跡』　香川県教育委員会他

北山健一郎　1995『六条・上所遺跡』　香川県教育委員会他

蔵本晋司ほか　1992『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　東山崎・水田遺跡』　香川県教育委員会他

蔵本晋司　1995『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成６年度』　香川県教育委員会他

蔵本晋司ほか　1997『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　空港跡地遺跡Ⅱ』　香川県教育委員会他

佐藤竜馬　1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊　国分寺楠井遺跡』　香川県教育委員会他

佐藤竜馬　1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第24冊　郡家田代遺跡』　香川県教育委員会他

白神典之　1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号

菅原康夫　1987『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』　徳島県教育委員会

菅原康夫ほか　1989『黒谷川郡頭遺跡Ⅲ・Ⅳ』　徳島県教育委員会

菅原康夫　1990「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」『同志社大学考古学研究シリーズⅢ　考古学と地域文化』

西岡達哉ほか　1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第７冊　一の谷遺跡群』　香川県教育委員会他

広瀬都巽　1974『和鏡の研究』角川書店

間壁忠彦　1991『考古学ライブラリー40　備前焼』ニューサイエンス社

和田素子　1993『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12冊　郡家一里屋遺跡』　香川県教育委員会他

渡部明夫　1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第９冊　永井遺跡』　香川県教育委員会他

第３章　　自然科学的調査の成果

第１節　中間西井坪遺跡から出土した木材・種実遺体の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中間西井坪遺跡は，高松平野南西縁に位置する。本遺跡が立地する地形は，背後の堂山山地から続く埋もれ谷と，谷によって分断された丘陵とに分かれる。発掘調査により，本遺跡からは縄文時代～近世の遺構・遺物が検出されている。

本報告では，弥生時代以降の木製品および種実遺体の種類を同定し，用材や植物利用などに関する資料を得る。

1.　木製品などの樹種

(1) 試料

試料は，発掘調査により出土した木製品など26点（試料番号１～26）である。このうち，試料番号24～26は種実遺体の試料番号と重複している。本報告では混同を避けるため，材試料については試料番号に「W」をハイフォンで記し，W－１のように記す。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。作製したプレパラートは，生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を第８表に示す。木材は，針葉樹３種類（マツ属複維管束亜属・スギ・サワラ），広葉樹11種類（ハンノキ属ヤシャブシ亜属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・コナラ属・ツブラジイ・ムクノキ・ケヤキ・タブノキ・クスノキ科・ヤブツバキ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

番　号	挿図番号	器種など	時代・時期	樹　　種
W－1	1245	桶側板？	近世	マツ属複維管束亜属
W－2	37	杭	弥生時代	コナラ属
W－3	33	不明（横槌？）	弥生時代	タブノキ
W－4	31	蓋？	弥生時代	コナラ属アカガシ亜属
W－5	32	不明（横槌？）	弥生時代	クスノキ科
W－6	240	曲柄又鍬	弥生時代	コナラ属アカガシ亜属
W－7	924	刀形	古代	コナラ属アカガシ亜属
W－8	931	杭	古代	ケヤキ
W－9	926	杭？	古代	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
W－10	928	不明（杭？）	古代	コナラ属アカガシ亜属
W－11	930	杭	古代	ハンノキ属ヤシャブシ亜属
W－12	929	不明（杭？）	古代	コナラ属アカガシ亜属
W－13	925	杙	古代	スギ
W－14	1115	斎串	古代	スギ
W－15	1116	板材	古代	サワラ
W－16	830	不明（部材？）	弥生時代	ツブラジイ
W－17	923	不明（部材？）	古代	コナラ属コナラ亜属コナラ節
W－18	927	杭	古代	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
W－19	36	泥除	弥生時代	コナラ属アカガシ亜属
W－20		立木1	弥生時代	ムクノキ
W－21		立木2	弥生時代	コナラ属アカガシ亜属
W－22		立木3	弥生時代	コナラ属コナラ亜属コナラ節
W－23		立木4	弥生時代	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
W－24	1175	加工材	中世	ツブラジイ
W－25	35	不明（板材？）	弥生時代	コナラ属アカガシ亜属
W－26	34	不明（部材？）	弥生時代	ヤブツバキ

第8表　樹種同定結果

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで，晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状となり，放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列，1～15細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　　スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞が晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか，分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列，1～15細胞高。

・サワラ（*Chamaecyparis pisifera*（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　　ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され，柔細胞壁は滑らか，分野壁孔はス

ギ型～ヒノキ型で１～３個。放射組織は単列，１～15細胞高。

・ハンノキ属ヤシャブシ亜属（*Alnus* subgen. *Alnaster*）　　カバノキ科

散孔材で，道管は単独もしくは２～６個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高いが，年輪界付近では密度が低くなる傾向がある。道管は階段穿孔を有し，壁孔は密に対列状に配列する。放射組織は同性，単列，１～30細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. Cerris）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～２列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　　ブナ科

放射孔材で，管壁厚は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属（*Quercus*）

木口面および板目面で複合放射組織が認められる。道管の配列はほとんど観察できないが，少なくとも散孔材ではない。以上の特徴から，ブナ科のコナラ属と判断した。

・ツブラジイ（*Castanopsis cuspidata*（Thunberg）Schottky）　　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で孔圏部は３～４列，孔圏外で急激に管径を減じたのち，漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，１～20細胞高のものと集合～複合放射組織よりなる。

・ムクノキ（*APhananthe aspera*（Thunb.）Planchon）　　ニレ科ムクノキ属

散孔材で横断面では角張った楕円形，単独または２～３個が複合する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型，１～５細胞幅，１～30細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）　　ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部はほぼ１列，孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減，塊状に複合し接線

・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型，１～10細胞幅，１～30細胞高。しばしば結晶を含む。

・タブノキ（*Persea thunbergii*（Sieb. et Zucc.）Kostermans）　クスノキ科タブノキ属

散孔材で管壁は厚く，横断面では楕円形，単独および２～３個が放射方向に複合する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型，１～３細胞幅，１～20細胞高。大型の油細胞が認められる。

・クスノキ科（Lauraceae）

保存状態が悪いが，散孔材であることと油細胞を持つことが確認できた。日本産の木材で油細胞を持つのはクスノキ科のみであることから，クスノキ科と判断したが，種類の同定には至らない。

・ヤブツバキ（*Camellia japonica* L.）　ツバキ科ツバキ属

散孔材で管壁は薄く，横断面では多角形～角張った楕円形，単独および２～３個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し，壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型，１～２細胞幅，１～20細胞高で時に上下に連結する。柔細胞には結晶細胞が顕著に認められる。

(4) 考察

樹種同定を行った木製品等の時代別・用途別樹種構成を第９表に示す。木製品の時代性は，弥生時代，古墳時代，古代，中世，近世に分けられる。用途は多岐にわたり，その中で多いものは杭（６点）である。そのため，用途別の用材選択の傾向などは把握しにくいが，鋤先や泥除具にアカガシ亜属が利用される結果は，これまでにも西日本の多くの遺跡で確認されており，選択的な利用が指摘されている（島地・伊東,1988；伊東,1990)。今回の結果から，本遺跡においても同様の用材選択が行われていたことが指摘できる。また，横槌？はタブノキとクスノキ科であった。この状況を考慮すれば，保存状態が悪いためにクスノキ科とした試料番号W－５もタブノキの可能性がある。

今回の結果を時代別に見ると，用材選択の傾向が若干異なる。弥生時代と古墳時代では，アカガシ亜属を中心とした広葉樹材の利用が多い。同様の傾向は，高松平野北部に位置する遺跡でも多くの確認例が知られている（能城・鈴木，1995；パリノ・サーヴェイ株式会社；1993；鈴木・能城，1995)。また，この結果は，周囲の植生を反映する立木や杭などの樹種構成とも調和的であり，遺跡周辺に生育していた樹木の材質などを考慮しながら有

時代・用途	樹種	複維管亜属	スギ	サワラ	ヤシャブシ亜属	クヌギ節	コナラ節	アカガシ亜属	コナラ属	ツブラジイ	ムクノキ	ケヤキ	タブノキ	クスノキ科	ヤブツバキ	合計
弥生時代	杭								1							1
	横槌？												1	1		2
	蓋　？							1								1
	鍬　先							1								1
	泥　除							1								1
	部材？														1	1
	板　材							1		1						2
	立　木					1	1	1			1					4
古　代	刀　形							1								1
	杭				1	2		2				1				6
	棒		1													1
	部材？						1									1
	斎　串		1													1
	板　材			1												1
中　世	加工材									1						1
近　世	桶側板？	1														1
合　計		1	2	1	1	3	2	8	1	2	1	1	1	1	1	26

第９表　時代別・用途別樹種構成

効に利用していた可能性がある。一方，古代以降は木製品の多くが針葉樹である。古代に針葉樹材の利用が広がる傾向があることは，近畿地方を中心とした地域の樹種同定結果などにも見ることができる（小原，1972；伊東・島地，1979；島地ほか，1980；西岡・小原，1978）。そのため，本遺跡の結果も，時代によって用材が変化したことを示している可能性があるが，木製品の用途が多少異なるため現時点では断定には至らない。今後さらに資料を蓄積して検討したい。

2.　種実遺体の種類

(1) 試料

試料は，弥生時代，古代，中世の包含層中から検出された種実遺体７点（試料番号24～30）である。木材試料と番号が重複している試料があり，混同を避けるため試料番号に「S」をハイフォンで付し，S－１のように記す。

(2) 方法

双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定する。

(3) 結果

結果を第10表に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

番　号	試　料　名	出土遺構	時代・時期	同定結果
S－24	種子1	10b区谷7中層	弥生時代終末期	コナラ亜属
S－25	種子2	10b区谷7中層	弥生時代終末期	コナラ亜属
S－26	種子3	10b区谷7中層	弥生時代終末期	コナラ亜属
S－27	種子4	SDⅡ71下層	古代	コナラ亜属
S－28	種子5	SDⅡ71下層	古代	フジ
S－29	種子6	SDⅡ48	中世	オニバス
S－30	種子7	SDⅡ48	中世	オニバス

第10表　種実遺体の同定結果

・コナラ属コナラ亜属（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*）　　ブナ科

果実が検出されている。いずれも幼果であるため，大きなものでも1cm以下である。殻斗は総苞が互いに癒着して瓦状となる。木質でやや硬い。果皮は薄くてやや硬く，表面は光沢がある。

・フジ（*Wisteria floribunda*（Willd.）DC.）　　マメ科フジ属

莢果の破片が検出された。黒褐色，倒被針型で，偏平。長さは6cm程度で，全体の約1/2が破損している。肉厚でやや硬く弾力がある。

・オニバス（*Euryale ferox* Salisb）　　スイレン科オニバス属

種子が検出された。黒色でいびつな球形。大きさは8mm程度。肉厚で暑く，やや弾力がある。表面はざらつく。一端が突出し，円形の大きな「へそ」がみられる。

(4) 考察

種実遺体は3種類に同定された。このうち，コナラ亜属は立木でもクヌギ節とコナラ節が今回の報告の中で確認されていることから，周囲に生育していたものから落下した幼果と考えられる。また，フジは山地に普通に見られることから，背後の山地に生育していたことが推定される。なお，コナラ亜属は種実が食用となることから，食糧としても利用されていたことが推定される。

オニバスは，湖沼や池などに生育する水生植物であり，栽培されることもある。本遺跡周囲の湖沼などに生育していたと考えられるが，現時点では自生か栽培かは不明である。

引用文献

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料，26，p.91-189.

伊東隆夫・島地　謙（1979）古代における建造物柱材の使用樹種．木材研究資料，14，p.49-76.

小原二郎（1972）木の文化．217p.，鹿島出版会.

西岡常一・小原次郎（1978）法隆寺を支えた木．226p.，NHKブックス.

能城修一・鈴木三男（1995）井出東Ⅰ遺跡出土の木製品の樹種．「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第四冊　井出東Ⅰ遺跡（自然科学分析・考察編）」，p.1-28，高松市教育委員会・建設省四国地方建設局.

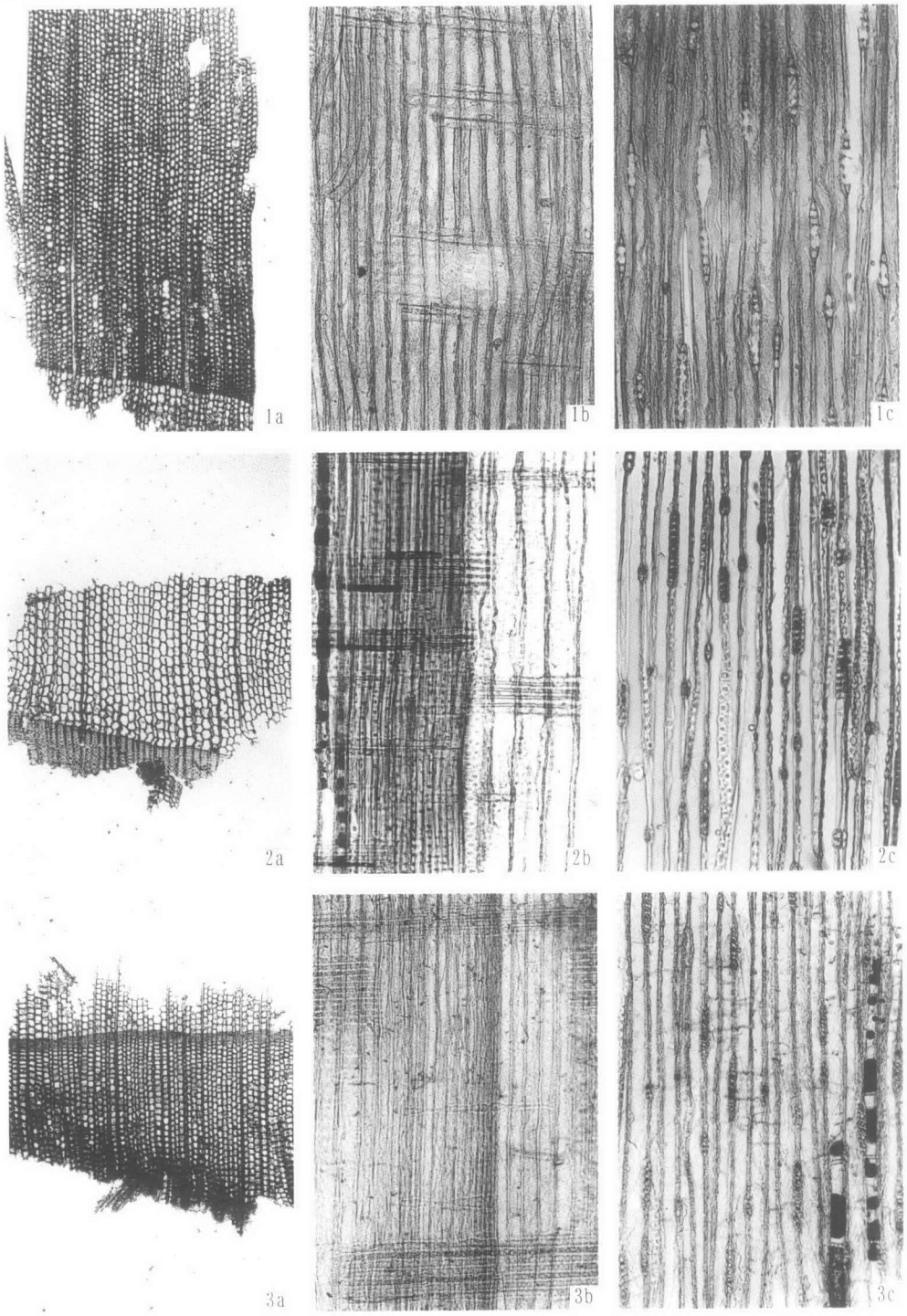
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）郡家一里屋遺跡出土木材等分析委託業務報告．「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第十二冊　郡家一里屋遺跡」，p.227-233，香川県教育委員会.

島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣.

島地　謙・伊東隆夫・林　昭三（1980）古代における宮殿・官衙の使用樹種．古文化財編集委員会編「考古学・美術史の自然科学的研究」，p.249-260，日本学術振興会.

鈴木三男・能城修一（1995）高松市居石遺跡出土木材の樹種．「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第七冊」，p.165-171，高松市教育委員会・建設省四国地方建設局.

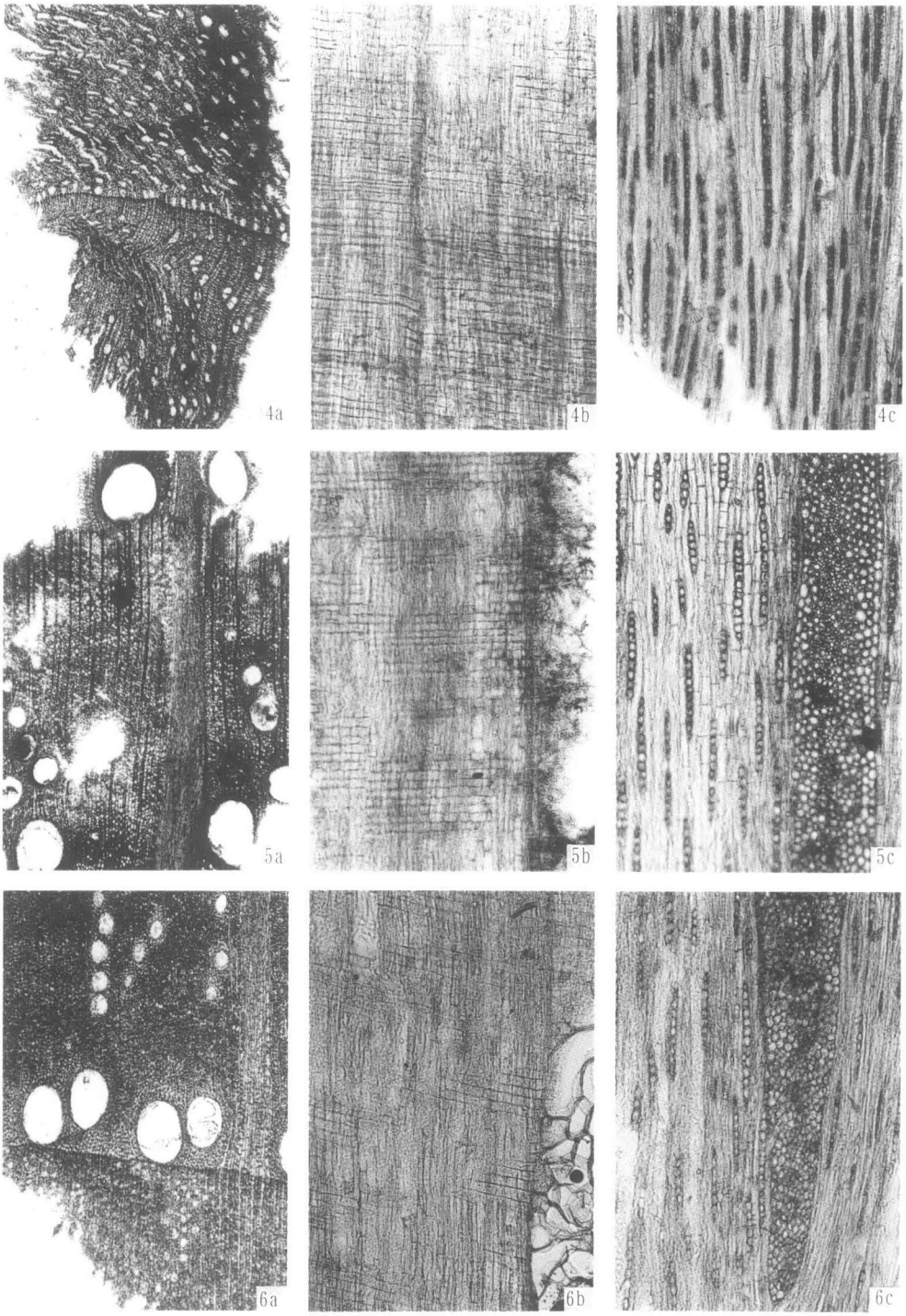
写真１　木材（１）



1. マツ属複維管束亜属（試料番号W－１）
2. スギ（試料番号W－13）
3. サクラ（試料番号W－15）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

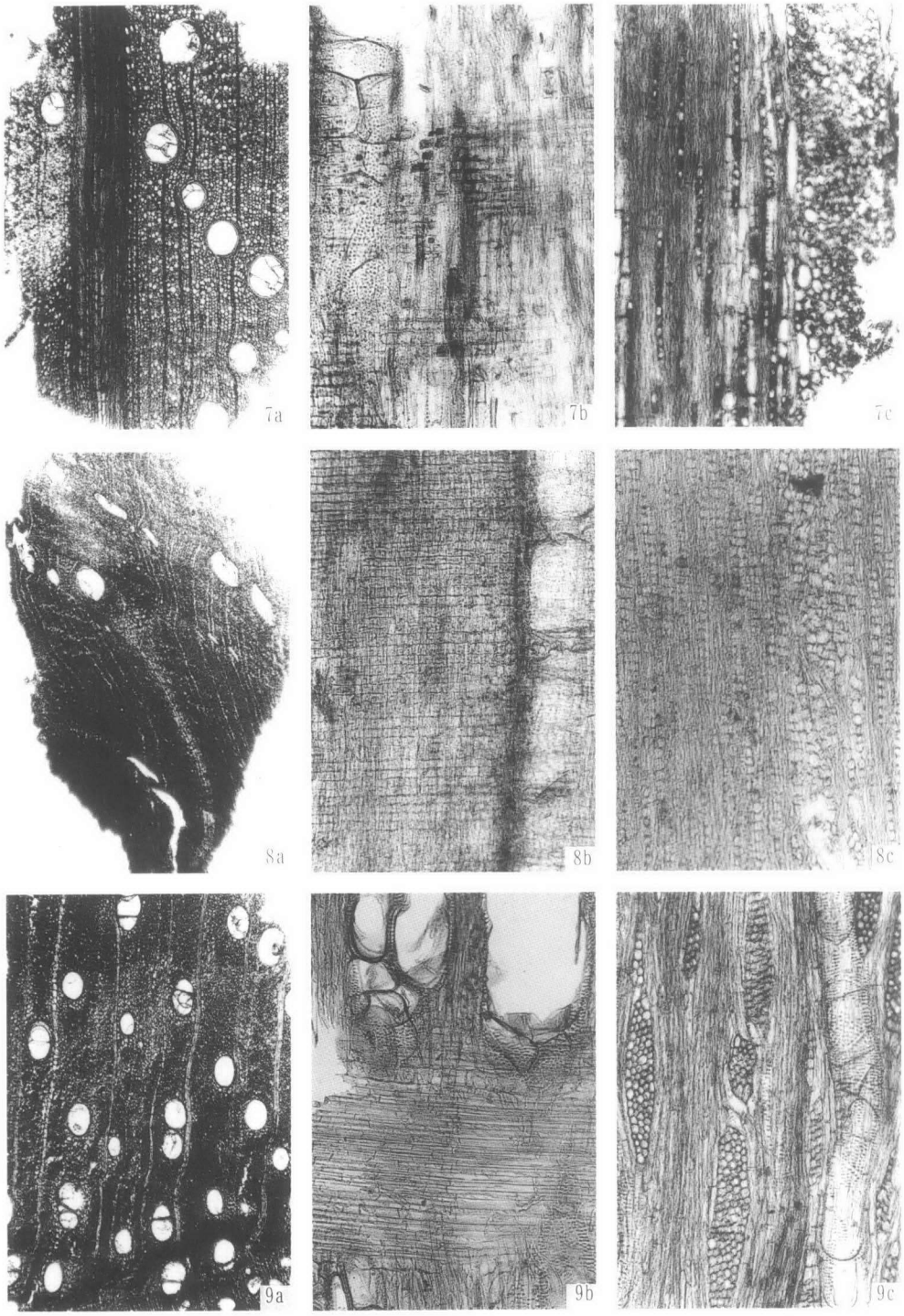
写真２　木材（２）



4. ハンノキ属ヤシャブシ亜属（試料番号W－11）
5. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号W－18）
6. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号W－17）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

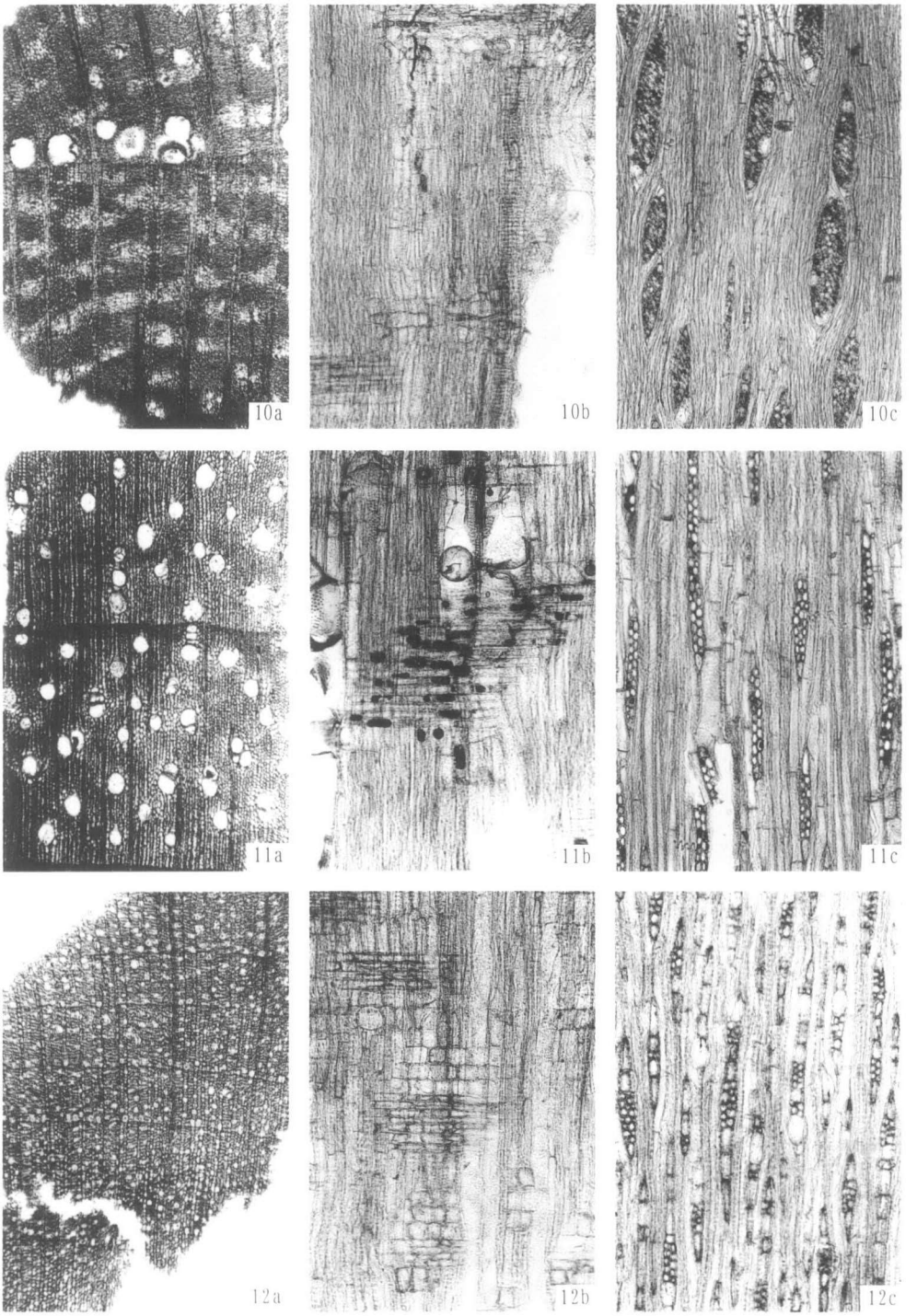
写真３　木材（３）



7. コナラ属アカガシ亜属（試料番号W－６）
8. ツブラジイ（試料番号W－16）
9. ムクノキ（試料番号W－20）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b、c

写真４　木材（４）



10．ケヤキ（試料番号W－８）
11．タブノキ（試料番号W－３）
12．ヤブツバキ（試料番号W－26）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b.c

写真５　種実遺体

1

2

3

1 cm：1

1 cm：2，3

1. フジ（試料番号28）
2. コナラ亜属（試料番号25）
3. オニバス（試料番号29）

第２節　中間西井坪遺跡出土土器の胎土分析

Ⅰ　分析試料について

今回分析を依頼した資料は，中間西井坪遺跡の谷７から主に出土した弥生時代終末期から古墳時代前期初頭を中心とした土器111点である。これら分析試料は，あらかじめ数十倍程度の実体顕微鏡での観察により，含有される鉱物組成や形状等により下記５類に分類を行った。この分類案を基に，過去の分析データとの比較や分類案の妥当性の検証などを通して，中間西井坪遺跡の当該時期の土器様相の把握を目的として，後掲分析を依頼した。

砂粒分類１類……若干量の石英・長石と多量の角閃石・黒雲母を含有する。白石分析の試料番号１～９・11・13～18・20～30はいわゆる「下川津Ｂ類」土器（胎土１類土器[1]），同19は胎土中に角閃石を多量に含み胎土１類土器に近似する弥生時代中期に遡る資料，同10・12は畿内産の可能性のある土器である。いずれも総じて粒径４㎜以下のきめの細かな胎土で，選別された素地粘土が使用されている。特徴的な胎土・色調を呈しており，実体顕微鏡下でも３類を除く他の類型とは明瞭に識別される。３類との相違は，器形や調整手法等の考古学的諸特徴と，角閃石と雲母粒の多寡を主な判断材料としており，胎土の面で両者の中間的なやや分類に苦慮するものも少数ながら存在する。なお，『空港跡地遺跡Ⅱ』（蔵本1997）での砂粒分類のうち，砂粒５類に相当する。

砂粒分類２類……出土遺物中最も普遍的にみられる砂粒構成を呈する一群。本遺跡周辺で製作された可能性のある土器を含むと考えている。石英・長石・雲母を含むことを基本とし，角閃石のような黒色細粒が少量含まれるものもある。含有岩石・鉱物の粒径は土器によって異なり，粗いものから水簸されたと思われるきめの細かなものもある。本類型は，さらに細分される可能性もあるが，観察能力の限界もあって一括して類型設定する。黒雲母の含有が，後記砂粒分類３類と比して明確に微量である点から本類型を設定する。『空港跡地遺跡Ⅱ』での砂粒１類と概ね共通した内容を有する。

砂粒分類３類……若干量の石英・長石のほか，多量の黒雲母粒を含むことを特徴とする。角閃石粒は含まれないか１類に比して極微量が含まれる程度と思われる。含有される黒雲母粒の粒径は，１類土器に比してやや大きなものが散見され，１類土器との分類はこうした視点を基準の一つとしたが，清水分析結果からも分かるように必ずしも成功はしていない。しかし，１類を除く他の類型とは明瞭に分類可能である。遺物総量に占める占有率も１～２％と低く（第281図参照），搬入土器であることは間違いない。『空港跡地遺跡Ⅱ』での砂粒４類に相当する。

砂粒分類４類……土器の形態や色調等主に考古学的な所見を根拠に，いわゆる「東阿波型土器」と称される，徳島県吉野川下流域産の土器として分類した。しかし，実体顕微鏡下の観察では，結晶片岩などの片岩系統起源の鉱物・岩石は確認できず根拠は乏しい。

砂粒分類５類……胎土中に多量の火山ガラスを含むことを指標に分類した。その他の基本的な砂粒構成は，上記砂粒分類２類と大差はない。

分析結果の検討と今後の課題

両分析結果については後掲するが，上記分類案毎に分析結果についての筆者の所見について，まず記しておきたい。

１類土器の内，下川津Ｂ類土器に含まれる３資料（107・131・212）については，清水分析では，角閃石を多量に含む点に際だった特徴を有し，他の資料とは明確に区別されることが判明した。Ｂ類土器の胎土中に，角閃石が多量に含有される点は従来より指摘されており（大久保1990），さらに考古学的な所見からも，１類土器の過半が下川津Ｂ類土器に属すものと考えて大過ないものと判断される。

一方白石分析でも，１類土器の分析値は一定のまとまりをもった領域として設定された。しかしながら，分布領域はまとまるものの，従来の分析で設定された下川津Ｂ類土器の領域とは，Ca 量が相対的に低く分布領域を異にする（第265図）。Ca 量の差がどのような岩石あるいは鉱物種に起因するものか，あるいは別の要因によるものかは判然としないが[(2)]，従来下川津Ｂ類土器と一括して呼称されている一群の土器にも，その胎土組成にいくつか

のヴァリエーションがあることを示唆する可能性を考える。今後，類似した胎土の分析データ数を増やすことで，より詳細が判明するものと期待する。

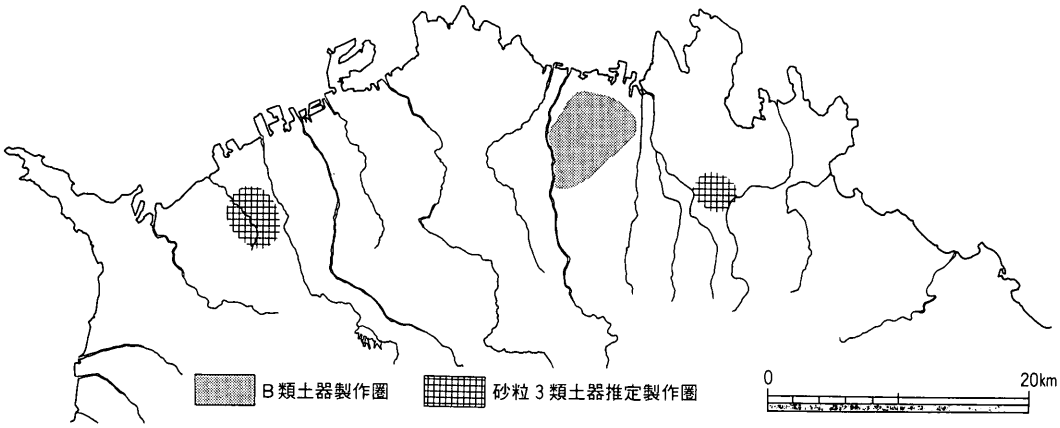
また，1類土器のうち畿内産の可能性がある資料（155・159）については，清水分析の結果，多量に含有される鉱物種は，角閃石ではなく輝石であることが判明した。明らかに筆者の分類上での誤りであり，ここでは清水分析に従い輝石に訂正しておきたい。さて同種土器は，白石分析でもSr－Rb散布図を中心に他の1類土器とは異なる領域を示し，両分析において整合性をもって細分された。分析結果から即その製作地の議論を展開することは困難だが，分析結果は素地粘土採取地あるいは一歩進めて土器製作地が異なる可能性を示唆するものと考える。形態や内外面の調整手法など考古学的所見から推して，これら土器の製作地を河内平野沖積低地部に求める妥当性は高いと判断される[(3)]。

砂粒分類2類に分類された資料については，清水分析の結果，石英・長石を多量に含む土器群として一括された。しかし，190・834の2資料については，相対的に輝石・角閃石の2種類の有色鉱物がやや多量に含まれるとされ，細分される可能性を示唆される。含有する岩石や鉱物の組成や量のどの程度までの差異が，同一地点での素地粘土採取の可能性を証する上で許容範囲とされるのかは，私には専門的な知識に乏しく不詳である。しかし，清水分析にも述べられているように，出土土器資料の大多数を占める2類土器は，本遺跡周辺での製作の可能性が他の類型に比して最も高いものであることは否定できない。

一方，白石分析では，同様に2類土器は2群に細分されたが，その分類は必ずしも上記清水分析での細分案と合致しない。つまり，清水分析の資料中307の資料のみが白石分析の2類Aグループに属し，他の資料は全て2類Bグループに属した。試料数が僅少なため確実なことは不詳だが，分析手法や視点の相違によって，得られる結果に齟齬が生じる可能性を示唆するものであろう。この点についても，今後類似した胎土の分析資料数を増やすことで，その詳細は明らかになるものと考える。

清水分析では3類土器は，黒雲母粒が多量に含まれる土器群（284・388）と，角閃石が多量に含まれる土器（486）に2分された。しかも後者の胎土中には，黒雲母の含有は極めて乏しいという。本例も筆者が一部の黒雲母と角閃石を誤認したためであり，上記分類案は清水分析結果に従って訂正する。清水分析結果により，再度3類土器として分類した土器群を検討すれば，清水分析で角閃石が多量に含まれるとされた486以外は，黒雲母粒を多量に含む私案の3類土器に属することを再確認した。

一方，白石分析では3類土器の分布領域は一定しない。上記再検討によって，角閃石を



第264図　B類土器と砂粒分類3類土器の推定製作圏分布

多量に含むことが明らかとなった486を除外しても，各元素において散漫な分布傾向を示し，白石分析からは特徴的な傾向を見出すことは困難であった。この点については今後の検討課題としたい。

さて，黒雲母粒を多量に含む特徴的な砂粒構成を示す3類土器の具体的な製作地については，現状では不明瞭である。清水分析にも述べられているように，「製作地の問題について軽々に推定すること」は慎まなければならないが，近年の調査遺跡数の増加から，一定程度の可能性をもって，その製作地について論及しうる資料が蓄積されつつある。

例えば，高松平野東縁部の前田東・中村遺跡では，同種胎土を有する土器は最大40％程度の土器が報告されている。なお，前田東・中村遺跡では，明らかに在地胎土と推定される白色系の土器の一群が存在し，同種土器は搬入品である可能性が高い。一方，丸亀平野西縁部の善通寺市稲木遺跡では同様に40％近くが同種胎土の土器で占められる[(4)]。資料の絶対数は少ないため直接比較することは困難だが，丸亀市三条番ノ原遺跡では70％，同郡家大林上遺跡や龍川四条遺跡では80％強が同種胎土の土器である。以上の点から，3類土器は，善通寺地域と長尾平野東部地域の2地域において製作された可能性を指摘しておきたい（第264図）。詳細については，より資料の充実を待って再度検討したい。

4類土器は，清水分析の結果，結晶片岩は含まれていないことが判明した。考古学的所見から阿波系統の土器と近似するが，分析結果は製作地が阿波以外の可能性が高いことを示唆するものと言えるだろう。

以上，両分析では，分析結果が整合性をもってうまく説明付けられるものと，若干の乖離がみられるものがある。何よりも試料数が乏しく，今回の分析のみから土器胎土の属性

が明確になったわけではない。両分析の相違点に，どのような要因が求められるかも不明瞭である。例えば，下川津Ｂ類土器では，白石分析からＢ類胎土のヴァリエーションの可能性が示唆されたが，それが粘土採取地の細かな差異を表出するものか，試料上での誤差の範囲なのかは未だ明確ではない。また，土器から得られる考古学的所見とどう関連するかも整理できていない。今後とも同様の分析を継続する必要性を認めると共に，推定される粘土採取地の粘土の分析なども新たに実施していく必要があろう。

本文註

1. 胎土１類土器は，森下氏の提唱段階では，「「雲母土器」・「下川津Ｂ類土器」と呼ばれている土器で，茶褐色系統の色調を呈し，角閃石と考えられる黒色砂粒を含む土器」を総称している（森下1995)。さらに大久保氏は，「胎土１類」土器を香東川・本津川下流域の集団が弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて使用した土器群である（大久保1995）として，その製作者や期間を限定された。つまり，「胎土１類」土器は，高松平野中枢部で製作・使用された「下川津Ｂ類」土器の系統に属する土器群に限定されると考える。つまり，本分析で明らかとなった「下川津Ｂ類」土器以外の角閃石を多量に含む土器については，「胎土１類」土器には含まれないと考える。
2. 可能性として角閃石量の多寡が想定される。
3. 製作地については，森岡秀人氏よりご教示を得た。
4. 菅原康夫氏は，善通寺市彼ノ宗遺跡出土土器に，黒雲母粒を多量に含む同種胎土の土器群がみられることを早くに指摘されている（菅原1987)。

文献註

大久保徹也　1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』　香川県教育委員会他

大久保徹也　1995「上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第６冊　上天神遺跡』　香川県教育委員会他

蔵本晋司　1997「空港跡地遺跡出土土器の胎土分析」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　空港跡地遺跡Ⅱ』　香川県教育委員会他

菅原康夫　1987「まとめ」『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』　徳島県教育委員会

森下友子　1995「胎土１類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　太田下・須川遺跡』　香川県教育委員会他

Ⅱ　中間西井坪遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白石　　純

1.　分析目的

中間西井坪遺跡から出土した弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の土器が実体顕微鏡観察による砂粒分類で5類[1]に分類されており，この分類を基準として蛍光X線分析法による胎土分析を行い，以下の事柄について検討した。

(1) 当遺跡の砂粒分類１類土器と，「下川津Ｂ類[2]」土器および『空港跡地遺跡Ⅱ[3]』で分類された５類土器との差異について。

(2) 当遺跡の砂粒分類３類土器と，『空港跡地遺跡Ⅱ』で分類された４類土器との差異について。

(3) 当遺跡から出土している土器のうち最も普遍的にみられる胎土である砂粒分類２類土器がこの胎土分析法によって細分が可能か。また，細分された場合，現在まで分析しているどの遺跡と類似しているか。

(4) 当遺跡の砂粒分類２類土器と，『中間西井坪遺跡Ⅰ[4]』で分析した埴輪制作関連遺構内出土土器との差異について。

(5) 当遺跡の砂粒分類４・５類土器と，他の砂粒分類土器との差異について。

2.　分析方法・結果

分析方法は，波長分散型蛍光X線分析装置（リガク製）を使用し，分析試料の作製，測定方法・条件は，現在までに行っている方法である。

分析した試料は，第10表・第11表の１類土器の30点，２類土器の69点，３類土器の10点，４・５類土器の各1点の合計111点の土器である。

分析の結果，K・Ca・Sr・Rb・Fe・Tiの６元素に顕著な差がみられることから，これらの元素を用いX-Y散布図を作製し，分布状況から検討した。

(1) 砂粒分類１類土器と，「下川津Ｂ類」土器および『空港跡地遺跡Ⅱ』で分類された5類土器との比較では，第265図のK－Ca散布図から１類土器（試料番号１～30）は，一部が下川津Ｂ類および５類土器（空港跡地遺跡）の分布域に入るだけで，その他のほとんどの

土器が範囲外に分布した。また，試料番号11だけが離れてプロットし胎土的に異なっているようである。

第266図 Sr － Rb 散布図では，半分以上の１類土器が分布範囲に入っており，10・12の土器が畿内地域の分布域に分布している。

(2) 砂粒分類３類土器と，『空港跡地遺跡Ⅱ』で分類された４類土器との比較では，第265・266図の散布図とも３類土器は広く散漫な分布をなし，４類土器の分布範囲にほとんど入らない結果となった。

(3) 砂粒分類２類土器がこの胎土分析法によって細分が可能か。また，細分された場合，現在まで分析しているどの遺跡と類似しているかの検討では，第267・268図の散布図より大きく二つのグループに分類が可能であった。一つのグループ（Ａグループ）は，試料番号43・47・49・52・53・54・56・57・58・60・63・64・70・77・84・90・95の土器で，もう一つのグループ(Ｂグループ)は31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・42・44・45・46・48・50・51・55・59・61・62・65・66・67・68・69・71・72・73・74・75・76・78・79・80・81・82・83・85・86・87・88・89・94・96・97・98・99の土器である。そして，前者のＡグループは空港跡地遺跡Ⅱで分類された１類土器の分布範囲に属した。また，91・92・93の土器はほぼ一つにまとまり，41の土器は第268図ではどのグループにも属さず単独でプロットした。

(4) 砂粒分類２類土器と，『中間西井坪遺跡Ⅰ』で分析した埴輪制作関連遺構内出土土器との比較では，第267・268図から２類土器のＡグループが中間西井坪遺跡Ⅰの埴輪制作関連遺構内出土の土器と分布範囲がほぼ重なっているようである。

(5) 砂粒分類４・５類土器と，他の砂粒分類土器との比較では，第269図 K － Ca，第270図 Sr － Rb の両散布図とも４類土器は１類土器の分布範囲に，５類土器は２類土器の分布範囲にそれぞれ分布し，識別できないが，第271図の Fe － Ti 散布図では，４・５類土器とも他の分類土器に属さず単独で分布している。

3. まとめ

以上のように分析目的の検討課題についての分析結果を報告したが，これらを簡単にまとめ整理してみたい。

(1) いわゆる「下川津Ｂ類」土器に通有の胎土である１類土器と『空港跡地遺跡Ⅱ』の砂粒５類の比較では，１類土器がまとまるものの Ca 量に差がみられ「下川津Ｂ類」と「砂

粒５類」の分布領域とは，ほとんど重ならず胎土的に差異があった。つまり，１類土器のほうが Ca 量が少ない傾向がみられ，同一の胎土ではないと推測される。また，11は２類土器の分布に入り，１類土器には属さなかった。

(2) 実体顕微鏡では胎土的に似ている３類土器と空港跡地遺跡の砂粒４類との比較では，３類土器が広く散漫な分布でまとまらないが，砂粒４類の分布領域に入る土器も数点みられた。従って，この３類土器は胎土的に砂粒４類の領域をも含むような広い散漫な分布をする一群と推測される。

(3) 当遺跡周辺で製作されたと考えられる２類土器の細分が可能かどうかの検討では，大きく二つのグループに分かれた。そして，Ａグループは「空港跡地遺跡Ⅱ」の砂粒１類の分布域に入り，分析値ではほぼ一致し，Ｂグループは，砂粒４類の領域に一部重なり分布している。

また，このＡグループは『中間西井坪遺跡Ⅰ』の埴輪制作関連遺構内から出土した土器の分布領域と半分ほど重なることがわかった。このことより，２類土器のＡグループは在地で生産されたものと推定される。

(4) ４類・５類土器と他の土器との比較では，４類の Fe・Ti 量が他の分類土器より少なく，５類では Ti 量が他の分類土器より多いことがわかり，この５つに分類された土器の間では識別が可能であった。４・５類は，資料の蓄積をし再検討する必要がある。

この他の検討課題として

・１類の1（742）・28（249）・29（1066）の３点は，実体顕微鏡観察による分析で３類に近い胎土であるがこの分析では１類土器の領域に入り差はみられなかった。

・１類土器の10（155）・12（159）は形態的には畿内を含めた他地域からの搬入土器であるが，分析値でも畿内を含めた他地域からの搬入品であることが推定された。

・３類土器の106（383）は，胎土的には１類に近いが分析では２類のＢグループに属した。

・２類土器の土器棺である91（117）・92（118）・93（116）の３点は，一つにまとまりA･Bの両グループの中間部分の領域に分布した。

・１類土器の19（138）は形態的に弥生時代中期の資料で，胎土的は「下川津Ｂ類」に類似しているが，分析値では１類土器の分布範囲に入るものの「下川津Ｂ類」の領域からは外れている。

・２類土器の41（769）は形態的には吉備系甕であるが，分析でも Sr 量が多く２類土器には入らず，吉備系の土器と推定される。

この分析の機会を与えていただいた蔵本晋司氏，香川県埋蔵文化財調査センターの職員の方々にはお世話になりました。文末ではありますが記して感謝いたします。

註

(1) 蔵本晋司氏の詳細な実体顕微鏡観察により５類に砂粒分類されている。

(2) 大久保徹也 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第６冊 上天神遺跡』香川県教育委員会他 1995

(3) 蔵本晋司 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第２冊 空港跡地遺跡Ⅱ』香川県教育委員会他

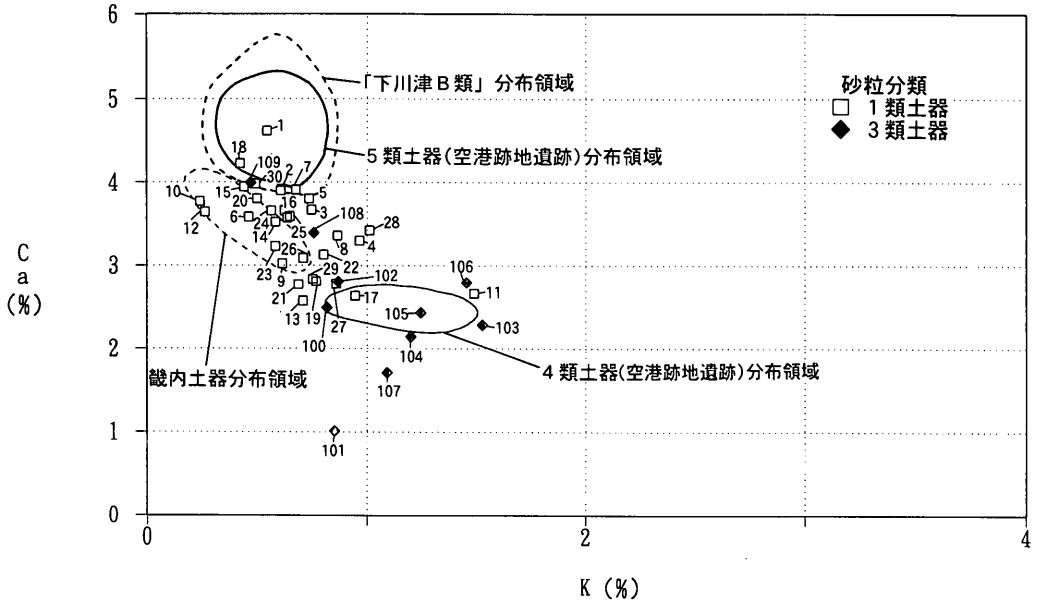
(4) 大久保徹也 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ』香川県教育委員会他1996

試料番号	挿図番号	器　　種	砂粒分類	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
1	742	甕	1類	0.55	14.9	41.32	1.71	18.32	4.61	226	24
2	262	広口壺	1類	0.61	11.56	48.99	1.74	18.43	3.89	268	18
3	389	高杯	1類	0.75	14.02	44.17	1.5	16.75	3.65	208	29
4	131	広口壺	1類	0.97	11.97	48.58	1.23	21.59	3.28	115	28
5	132	広口壺	1類	0.74	11.54	48.67	1.61	18.47	3.79	226	27
6	133	細頸壺	1類	0.47	13.87	43.09	1.62	17.97	3.57	150	21
7	134	細頸壺	1類	0.68	11.67	45.79	1.95	17.54	3.9	170	20
8	182	甕	1類	0.87	11.67	49.7	1.35	21.43	3.34	117	30
9	178	甕	1類	0.62	10.93	45.89	1.2	21.3	3	130	30
10	155	甕	1類	0.24	8.71	43.98	0.86	24.69	3.76	354	13
11	181	甕	1類	1.49	11.42	47.17	1.66	19.32	2.65	144	44
12	159	甕	1類	0.27	8.44	43.77	0.81	24.91	3.63	340	16
13	183	甕	1類	0.71	13.56	46.79	1.5	18.61	2.55	146	30
14	184	甕	1類	0.59	11.05	47.86	1.57	19.52	3.51	155	24
15	177	甕	1類	0.44	12.17	44.77	1.21	19.87	3.94	178	19
16	179	甕	1類	0.64	10.44	47.41	1.17	20.89	3.56	187	28
17	176	甕	1類	0.95	12.82	45.97	1.56	18.54	2.62	162	32
18	174	甕	1類	0.42	12	44.71	1.2	19.17	4.22	221	18
19	138	甕	1類	0.77	10.21	48.36	1.03	18.85	2.79	231	31
20	169	甕	1類	0.5	10.86	48.13	1.2	19.81	3.79	192	19
21	173	甕	1類	0.69	13.28	47.9	1.51	18.3	2.75	150	31
22	180	甕	1類	0.71	11.74	47.15	1.37	18.56	3.08	152	31
23	212	高杯	1類	0.58	11.65	44.93	1.08	19.91	3.22	150	27
24	211	高杯	1類	0.57	11.95	46.11	1.57	19.86	3.64	161	23
25	202	高杯	1類	0.65	11.57	49	1.64	19.95	3.58	170	30
26	204	高杯	1類	0.81	11.46	49.15	1.27	18.65	3.11	173	35
27	201	高杯	1類	0.87	11.3	52.09	1.56	17.91	2.76	195	35
28	249	甕	1類	1.02	11.74	49.51	1.38	18.78	3.41	197	48
29	1066	高杯	1類	0.76	14.25	47.36	1.59	19.28	2.82	147	27
30	107	甕	1類	0.49	14.4	39.87	1.35	20.19	3.98	163	20
31	699	二重口縁壺	2類	1.43	11.89	47.39	1.11	17.8	2.45	243	53
32	817	底部穿孔鉢	2類	1.57	10.25	50.13	1.05	17.6	2.22	249	59
33	770	甕	2類	1.57	8.46	51.74	1.15	17.75	2.13	266	63
34	695	広口壺	2類	1.53	6.12	54.23	1.1	18.62	2.02	265	66
35	740	甕	2類	1.57	7.49	54.16	1.15	18.12	2.01	257	63
36	744	甕	2類	1.57	6.78	57.09	1.12	18.97	2.08	247	55
37	783	小形鉢	2類	1.54	8.66	55.28	1.1	17.85	2.01	236	57
38	793	小形鉢	2類	1.53	7.74	53.58	1.13	19.31	2.02	249	71
39	738	甕	2類	1.46	8.93	50.7	1.18	18.43	2.58	268	63
40	748	甕	2類	1.61	6.23	55.4	1.24	19.86	2.15	282	63
41	769	甕	2類	1.44	3.58	59.46	0.93	21.76	1.82	419	66
42	688	広口壺	2類	1.7	8.55	56.21	1.21	19.5	2.35	241	62
43	684	広口壺	2類	2.21	8.7	58	0.87	20.65	0.99	140	123
44	694	広口壺	2類	1.43	9.5	55.2	1.17	18.97	2.5	269	56
45	808	中形鉢	2類	1.47	10.89	49.76	1.08	17.26	2.57	247	53
46	773	高杯	2類	1.39	11.92	50.71	1.16	17.04	2.2	222	58
47	794	小形鉢	2類	2.06	9.02	54.61	0.76	17.8	1.3	129	103
48	768	甕	2類	1.51	13.44	49.11	1.18	16.12	2.16	203	66
49	762	甕	2類	1.93	11.4	53.07	0.93	16.38	1.44	160	83
50	802	中形鉢	2類	1.58	8.29	58.23	1.08	18.95	2.39	254	61
51	829	器台	2類	1.63	9.49	54.88	1.31	19.95	1.99	226	56
52	696	二重口縁壺	2類	1.66	8.35	57.86	0.93	17.97	1.61	212	76
53	693	広口壺	2類	1.86	6.72	58.06	0.82	18.66	1.72	230	84
54	307	甕	2類	2.24	6.03	60.12	0.88	18.94	1.41	211	117
55	819	台付鉢	2類	1.45	11.03	50.78	1.16	17.12	2.17	245	49

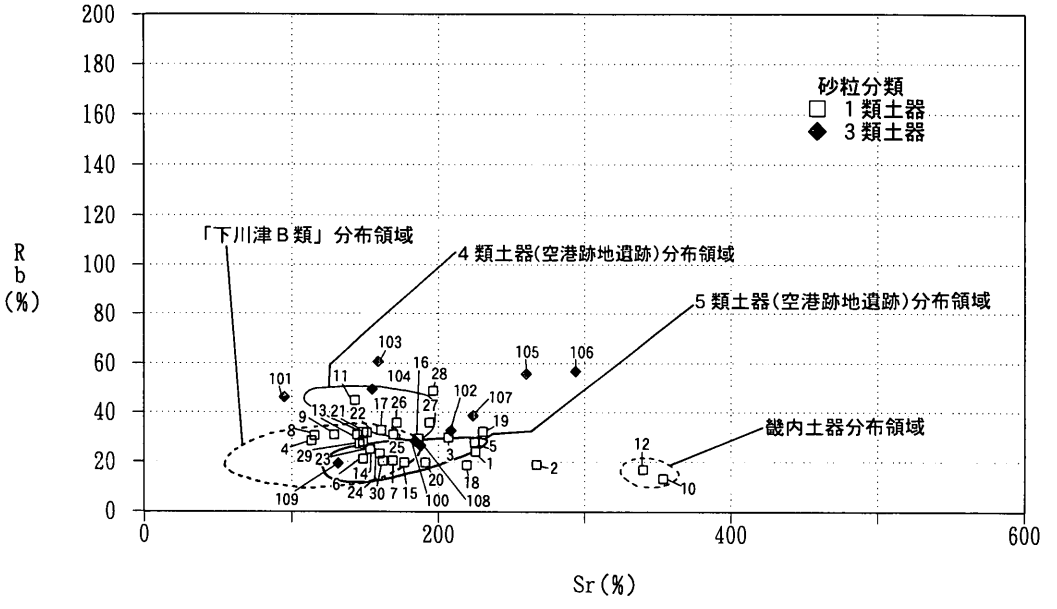
第11表　谷７外出土土器の胎土分析試料一覧表（%）ただしSr, Rbはppm

試料番号	挿図番号	器　　種	砂粒分類	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
56	774	高杯	2類	1.98	8	52.64	1.11	20.35	0.91	130	74
57	292	広口壺	2類	1.89	11.29	52.34	0.94	17.59	1.3	157	87
58	283	広口壺	2類	1.98	6.43	56.8	1	18.1	1.52	207	100
59	295	二重口縁壺	2類	1.48	10.18	51.44	1.2	18.13	2.18	252	66
60	260	広口壺	2類	2.16	4.51	64.09	0.78	18.82	0.95	151	80
61	269	広口壺	2類	1.66	10	55.27	1.11	19.31	2.32	231	63
62	290	二重口縁壺	2類	1.58	8.49	53.73	1.05	18.21	2.04	268	70
63	336	甕	2類	1.76	8.06	57.75	1.17	17.45	1.61	217	59
64	382	甕	2類	2.27	5.38	57.98	0.9	19.34	1.14	166	112
65	377	甕	2類	1.61	8.26	51.85	1.2	18.29	2.05	227	68
66	271	広口壺	2類	1.64	8.5	52.02	1.11	18.22	2.29	270	56
67	305	甕	2類	1.45	8.91	53.01	1.13	18.11	2.29	249	63
68	384	底部穿孔鉢？	2類	1.51	11.08	51.59	1.06	16.63	2.12	250	59
69	370	甕	2類	1.68	7.71	55.84	0.98	17.34	2.2	267	54
70	330	甕	2類	2.01	6.82	57.66	0.68	18.28	1.41	175	106
71	347	甕	2類	1.46	8.98	51.14	1.14	18.45	2.4	290	55
72	331	甕	2類	1.47	9.26	52.68	1.13	17.58	2.46	261	55
73	332	甕	2類	1.53	7.2	56.75	1.08	18.8	2.57	314	50
74	371	甕	2類	1.48	7.6	52.57	1.11	18.76	2.39	279	54
75	442	中形鉢	2類	1.45	7.39	53.75	1.16	19.13	2.51	283	54
76	411	小形鉢	2類	1.56	10.12	49.55	1.18	18.76	2.31	224	56
77	438	中形鉢	2類	2.16	5.63	56.71	1.08	20.44	1.23	159	102
78	430	中形鉢	2類	1.61	7.71	59.11	0.91	18.81	2.35	279	61
79	425	小形鉢	2類	1.38	9.49	51.47	1.04	17.84	2.76	270	43
80	444	中形鉢	2類	1.45	8.09	56.17	1.08	17.55	2.09	253	59
81	437	中形鉢	2類	1.7	5.65	59.42	1.16	17.87	2.06	272	70
82	123	広口壺	2類	1.56	9.83	56.42	1.06	18.35	2.16	229	61
83	125	広口壺	2類	1.41	7.1	58.86	0.79	17.99	1.41	211	83
84	126	広口壺	2類	2.14	9.04	55.82	0.92	19.24	1.01	145	115
85	157	甕	2類	1.48	6.86	57.42	1.05	17.92	2.03	285	66
86	462	広口壺	2類	1.68	9.04	56.81	1.03	18.33	2.3	252	70
87	834	壺	2類	1.52	9.3	54.19	1.2	19.99	2.24	266	68
88	245	広口壺	2類	1.55	6.16	59.19	0.93	17.64	2.41	315	62
89	490	甕	2類	1.6	7.61	56.55	1.11	19.68	2.4	277	63
90	478	甕	2類	2.15	6.58	57.9	1.04	18.03	1.18	183	106
91	117	土器棺（壺）	2類	1.65	11.33	49.77	1.04	17.49	1.85	193	56
92	118	土器棺（壺）	2類	1.6	11.85	48.7	1.17	17.35	1.86	199	55
93	116	土器棺（大形鉢）	2類	1.56	10.22	49.35	1.15	18.3	1.79	191	69
94	775	高杯	2類	1.43	7.82	55.29	1.05	18.23	2.2	283	58
95	235	底部穿孔鉢	2類	2.24	5.43	60.65	0.68	16.9	1.43	194	125
96	836	甕	2類	1.35	9.26	48.5	1.07	17.69	2.28	261	67
97	248	甕	2類	1.53	8.28	56.96	1.22	19.35	2.23	250	65
98	585	甕	2類	1.39	8.17	53.6	1.07	17.96	2.35	272	59
99	464	広口壺	2類	1.73	5.9	53.09	1.21	21.16	2.14	261	72
100	697	二重口縁壺	3類	0.82	14.1	42.96	1.53	19.26	2.48	185	28
101	698	広口壺	3類	0.86	11.32	48.26	1.27	19.83	0.99	97	45
102	785	小形鉢	3類	0.87	11.62	43.81	1.56	19.31	2.79	210	32
103	284	広口壺	3類	1.53	12.67	46.42	1.25	17.07	2.25	160	60
104	270	広口壺	3類	1.2	11.16	45.16	1.57	20.84	2.12	156	48
105	275	二重口縁壺	3類	1.25	10.25	49.74	1.16	18.38	2.41	263	55
106	383	底部穿孔鉢	3類	1.46	8.89	50.2	1.28	18.79	2.77	295	56
107	388	高杯	3類	1.09	12.22	47.9	1.33	19.45	1.68	225	38
108	209	高杯	3類	0.76	13.14	47.39	1.65	19.87	3.37	189	26
109	486	甕	3類	0.48	14.73	42.3	2.04	19.12	4	134	18
110	551	二重口縁壺	4類	0.73	11.03	48.53	2.53	16.78	3.42	123	37
111	416	小形鉢	5類	1.82	2.5	64.57	0.6	19.46	0.79	130	101

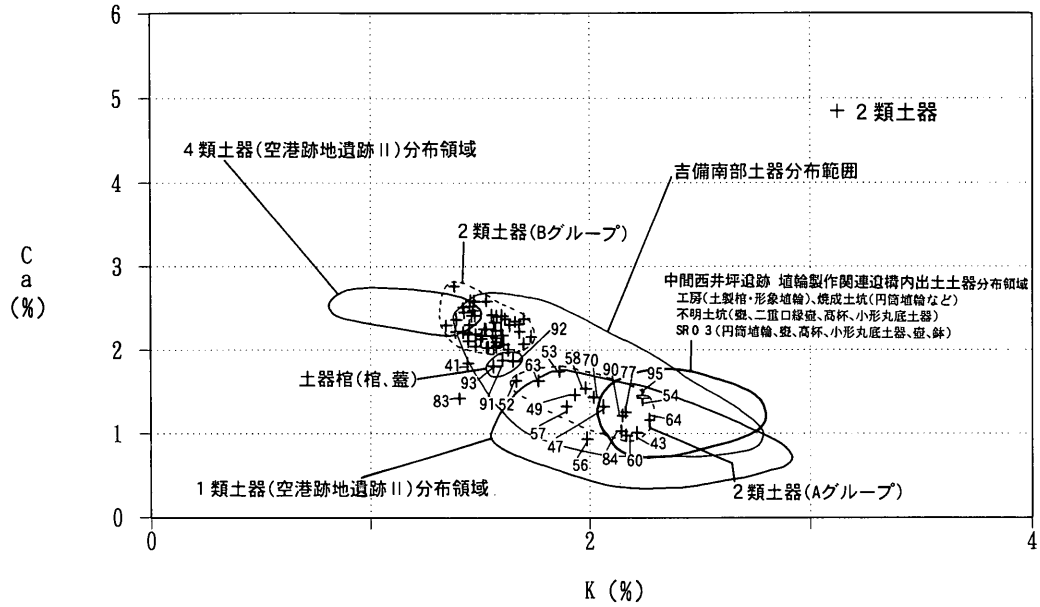
第12表　谷７外出土土器の胎土分析試料一覧表（%）ただしSr, Rbはppm



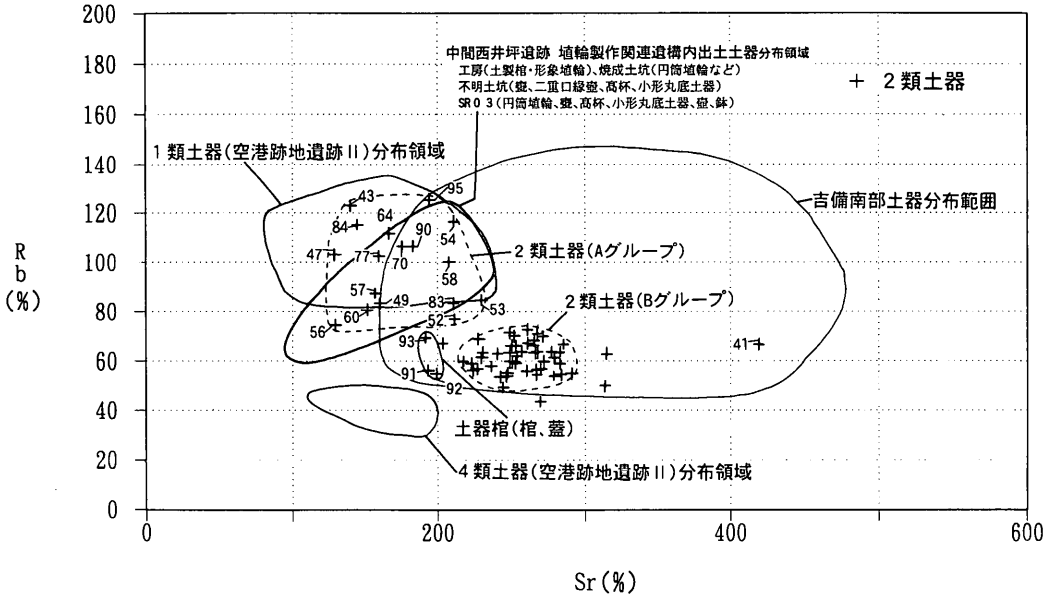
第265図　１類土器と下川津Ｂ類および５類土器（空港跡地遺跡Ⅱ）との比較



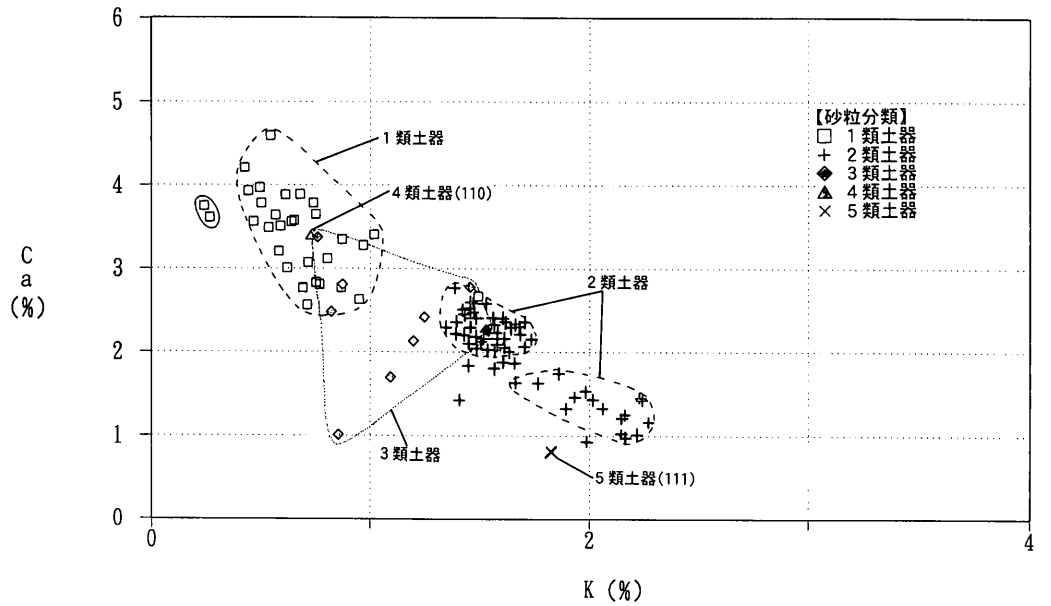
第266図　１類土器と下川津Ｂ類および５類土器（空港跡地遺跡Ⅱ）との比較



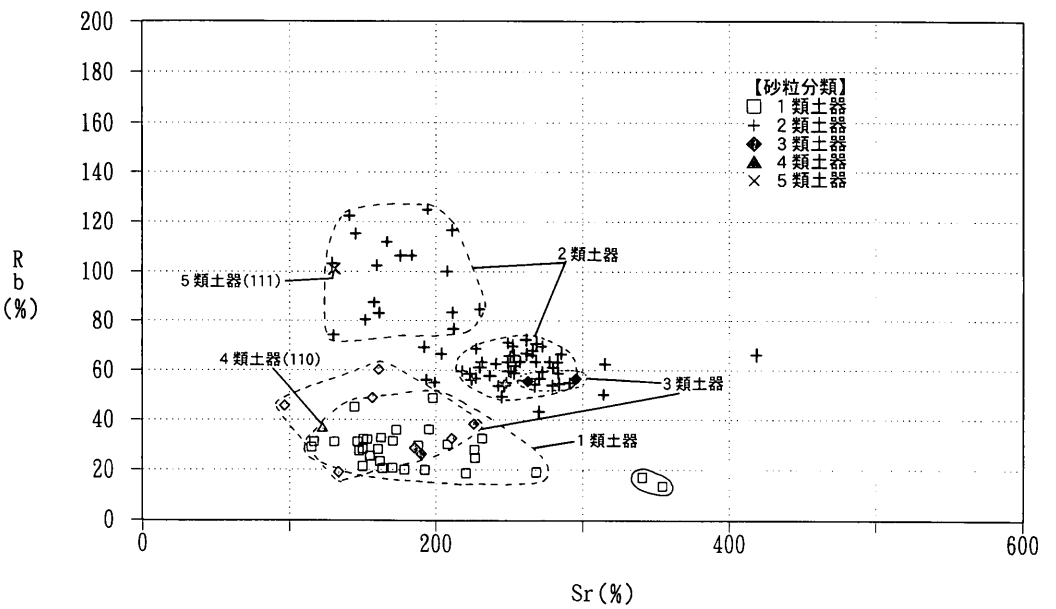
第267図　2類土器の細分および他遺跡との比較



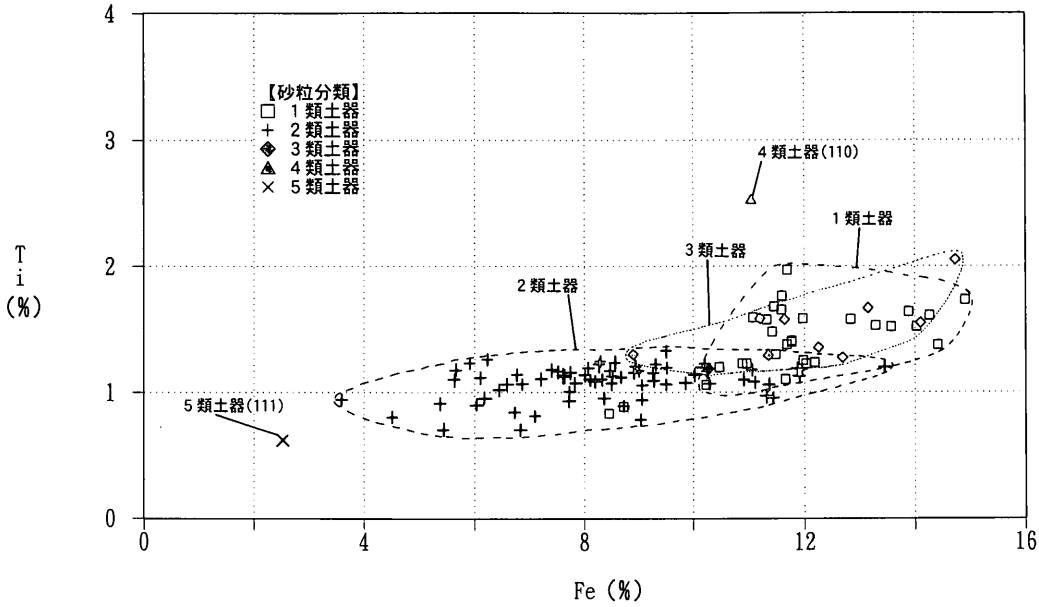
第268図　2類土器の細分および他遺跡との比較



第269図　4・5類土器と他の分類土器との比較



第270図　4・5類土器と他の分類土器との比較



第271図　4・5類土器と他の分類土器との比較

Ⅲ　中間西井坪遺跡出土土器の胎土の特徴と材料の検討

京都大学文学部
清水　芳裕

1.　はじめに

製作地に関するいくつかの考察がなされている土器の胎土を分析する機会が与えられ，岩石鉱物の含有状態から胎土の特徴の基礎的な要素を抽出し，地質構成物との比較を検討した。資料は21点で，調査者による土器の整理段階で，製作技法の地域差と胎土に含まれる鉱物の肉眼的な特徴などを基準に５分類されたものである（第13表）。その分類の基準とされている点はほぼ以下のような内容である。

（１類）：いわゆる「下川津Ｂ類」とされる土器に一般的な胎土で，角閃石・雲母を多量に含む特徴とされ，搬入土器と指摘されているもの。（２類）：石英・長石・雲母を主とする胎土で，中間西井坪遺跡周辺で製作されたと想定される土器。（３類）：多量の雲母を含み，搬入土器と考えられている土器。（４類）：型式要素や色調などから，いわゆる「東阿波型土器」と称されて，搬入土器の可能性をもつとされている土器。ただしこの２点については，この類の土器に付随する変成岩を含む特徴が実体顕微鏡下で確認されないという。（５類）：火山ガラスを多量に含み，搬入土器の可能性をもつ土器。

資　料	土器番号	器　種	分　類	資　料	土器番号	器　種	分　類
1	131	広口壺	1類	12	585	甕	2類
2	212	高杯	1類	13	117	壺	2類
3	107	甕	1類	14	118	大型壺	2類
4	159	甕	1類	15	116	大型鉢	2類
5	699	二重口縁壺	2類	16	284	広口壺	3類
6	695	広口壺	2類	17	388	高杯	3類
7	768	甕	2類	18	486	甕	3類
8	307	甕	2類	19	551	二重口縁壺	4類
9	336	甕	2類	20	589	甕	4類
10	190	甕	2類	21	416	小型鉢	5類
11	834	広口壺	2類				

第13表　分析資料

2. 分析の目的と方法

以上のように分類された胎土の特徴を，具体的に確認することがこの分析の目的であり，またその結果若干の補足すべき点も明らかになった。

肉眼観察で把握できる胎土の特徴は，機器を用いて分析した結果と大きな違いは生じないであろう。しかし胎土に加わる個々の岩石鉱物の比率や，地質構成物との対比を念頭においた鉱物の細別という点については，前者ではやや困難な面が生じると考えられる。したがってここでは，上述した分類要素つまり岩石鉱物の含有状態を中心に比較をおこなうことにした。

分析は主に偏光顕微鏡を用いて，岩石鉱物の同定およびそれぞれの含有状態の相対的な比率を求める方法をとり，また一部の土器について，X線回折法と螢光X線分析法によって結果の補足をした。前者では，土器を0.02～0.03㎜の厚さの薄片にし，また後者では粉末試料を作成しておこなった。その結果を第14表に示した。表中の１～４の数値は，土器の薄片中で占める個々の岩石鉱物の相対的な量比を示している。具体的には，含まれる岩石鉱物の中で，ほぼ半ばあるいはそれ以上の量を示すものを４，微細な粒子で数点が確認できるものを１として，それらの間の量を占めるものをほぼ２分して，多いものを３，少ないものを２とした。黒雲母のように扁平な鉱物は，体積あるいは重量として測定すると量の算定は異なる可能性もあるが，ここでは薄片中での面積を基準に分類した。また，１～４・18の土器の角閃石と輝石については，X線回折分析を併用して求めた相対比である。

岩石鉱物＼資料番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
石英		3	2	2	1	4	4	4	4	4	3	4	4	4	4	4	3	3	2	3	4	4
カリ長石	パーサイト	3	3		1	3	2	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	2	2		2	3
	微斜長石					1	1	1		1	1		1	2	1	1			2			
斜長石		2	2	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	2
黒雲母		1	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	4	4	1	1	1	1
白雲母																		1				1
角閃石類		4	4	4	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	2	1	4		2	1
輝石類		2	2	2	4	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	2	1	1	1
ジルコン				1		1				1		1									1	
カンラン石		1			1	1		1	1	1	1		1			1	1		1	2	1	
ガラス							1		1	1	1	1	1	1		1	1			3	1	3
不透明鉱物		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
深成岩岩片		2		2	2	2	3	2		2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
火山岩岩片																				2		
堆積岩岩片														2			2					2

第14表　胎土中の岩石鉱物の含有量比

胎土中に含まれる岩石鉱物の量はさまざまであるが，この数値は個々の胎土の中での比率である。分析の目的からいえば，全体に対する基準を設けて，それに対する個々の土器中の岩石鉱物を量的に比較するのが最も理解しやすいであろうが，ここではおこなっていない。それは多くの時間を要すると同時に，21点の土器の要素が，この地域の土器の胎土の特徴の全体を網羅していない可能性，つまり分析数が増加した場合には，基準が変わることを想定しなければならないなど，有効性にも問題があるためである。この点を補うために別の表現として，21点の土器の比較の中できわだった特徴を示す鉱物を抽出して，該当する土器との関係を第15表に示した。

3. 含有鉱物の特徴

岩石鉱物の含有状態の特徴として取り上げられる要素は，角閃石，輝石，石英と長石，黒雲母・ガラスを多量に含むという点で，土器の肉眼観察の上で従来から把握されている内容と，基本的な視点では一致する面が多い。

そのうち，角閃石，輝石，石英と長石，黒雲母については，きわだった量で加えられている場合には，機器的な分析をまつまでもなく，肉眼的にも明瞭に識別できると考えられる。角閃石と輝石は両者ともに肉眼観察では，光沢のある黒色の結晶で表面に劈開の稜をもっていること，また黒雲母は扁平な鉱物で，風化によって金色の色彩をもつことから容易に識別が可能なものである。石英・長石も胎土中では透明あるいは白色の結晶としてよく目立つものである。ただし，肉眼で両者を区分することが容易でないものも多いが，両者をまとめて一つの特徴として扱えば，他の鉱物と混同することは少ない。ガラスについては，個々の結晶はきわめて微細なものであるために，少量含まれる場合は肉眼ではほとんど識別できないが，非常に多量であると器面ではその光の反射による光沢が認められる。単一の鉱物が多量に含まれる胎土の特徴と土器との対応を示すと，第15表のようになる。

含有鉱物の特徴	該当する土器
角閃石が多量	1～3，18
輝石が多量	4
石英・長石が多量	5～15
黒雲母が多量	16・17
ガラスが多量	19・21
その他	20

第15表　胎土の特徴と土器との関係

4. 胎土の分類

第15表の分類にしたがって，それぞれの特徴と要素を土器との関係で示すと以下のような点が指摘できる。

(1) 角閃石を多量に含む土器群（1～3，18）

角閃石の量は，一般的に地質構成物の中心となる石英や長石などを上回る点できわめて特徴的である（写真6－1～4）。大部分は約0.3㎜以下の微細粒であるが，0.7～0.8㎜程度の比較的粒径の大きなものも少数含まれる。また1・3の土器には，小粒のため岩石名の特定には十分でないが，深成岩の特徴をもつ岩石片がみられ，このうち3の土器の岩石片は，多量の角閃石と関連すると考えられる塩基性の鉱物を多く含む深成岩である。また黒雲母は，これら4点の土器にはごく少量しか含まれていない。

(2) 輝石を多量に含む土器（4）

胎土中の輝石の含有率は，1～3と18の角閃石とほぼ同程度（写真6－5）で，その多くは斜方輝石である。比較的粒径の大きな輝石を含む塩基性の強い深成岩の岩片もみられ（写真6－6），その供給源としての岩石の性質を示唆している。またこの土器には，角閃石も黒雲母もごく微量しか含まれていない。

(3) 石英・長石を多量に含む土器群（5～15）

粒径の大きな砂として含まれるものが多く（写真7－1～3），長径が3㎜に近いものもある。同時にこれらの鉱物と関連する花崗岩の岩片と考えられるもの（写真7－4）も多く混在する。またいずれの土器でも黒雲母は非常に少量である。石英と長石の含有量の特徴を指標に区分すると，11点の土器はすべて共通しているが，さらに別の要素が加わるものもある。それは10・11の2点で，輝石・角閃石の2種類の有色鉱物がやや多く含まれるという特徴をもつ。

(4) 黒雲母を多量に含む土器群（16・17）

黒雲母が多量に含まれる特徴から，他の19点の土器ときわだった相違がある（写真6－7・8）。肉眼的に土器を観察した場合，板状の結晶としてその金色に輝く面が視覚的に特徴づける役割をもつ。またこの2点の土器には，角閃石と輝石が1～4・18の土器ほど多量ではないが混在する。

(5) ガラスを多量に含む土器群（19・21）

すべて火山性噴出物に由来するものと考えられる。この2点以外の土器にも微量ながら含まれているが，それらと比較して圧倒的に多量である（写真7－6・7）。個々の粒子

はきわめて微細なものが多く，胎土中での含有量からいえば，石英・長石の量を優るものではないが，他の土器の組成とは明瞭に区分できる。このうち19の土器は胎土全体が非常に緻密な組成であるという特徴をもち（写真７－５），またガラスと同じ起源と考えられる火山岩の岩片も含まれている。

(6) その他（20）

上記の（1）から（5）の分類を基準におくと，20の土器の胎土はいずれにも該当しない。具体的には，１種類の多量の鉱物は抽出できないが，角閃石，輝石および石英・長石類がそれぞれ多く含まれている（写真７－８）。きわだって多量の鉱物が存在しない点が，この土器の特徴であるが，一方で，（1）～（3）の特徴に該当するそれぞれの鉱物が多く含まれていることは，これらの土器の製作地を考察する上で，一つの示唆を与えている要素とも考えられる。また，分析結果が増加した場合には，同様の要素をもつ胎土の土器が一つの群を作る可能性もあることを示しているのかもしれない。

5. 胎土の特徴と材料との関係

上記のように，鉱物の含有量による胎土の特徴はきわめて明瞭に区分できる。その上で，こうしたある種の鉱物を多量に含む胎土の状態を生み出した材料について，採取の過程を想定すると，ある限られた狭い範囲の堆積物の中からそれぞれ得られたとは考えにくい。また一方で，量の多少を問わず一般的な地質構成物を念頭におくと，これらの鉱物を含む堆積物が分布する地域は，とくに限定されるものでもない。まず，遺跡周辺の地質構成物についてみると，その概要は次のようである[(1)]。

香川県南部を東西に横断する和泉層群以北には，閃緑岩質から花崗岩質のさまざまな性質の深成岩類が広く分布し，一部に片麻岩を主とする変成岩がみられ，これらがこの地域一帯にわたる地質の基盤を構成する主要な岩石である。さらにその基盤を貫くようにして噴出した火山岩類が，基盤岩類を覆って点在している。火山岩は，流紋岩，安山岩，玄武岩など各種の性質のものを含む。遺跡周辺の火山岩についていくつか上げると，北西方に位置する大平山や国分台から，その北方の大崎山や峰の池付近，および北東方の石清尾山や紫雲山などには，古銅輝石や各種の輝石，角閃石類，かんらん石などを含む安山岩が分布している。

さて，これらの地質構成物と胎土の鉱物の特徴とを比較すると，以下のような点が想定できる。多量に含まれる５種類の鉱物のうち角閃石，輝石，石英と長石，黒雲母の４要素

は，塩基性の強い閃緑岩質から酸性の強い花崗岩質の，多様な成分からなる基盤の深成岩に基因する鉱物として，またガラスは，点在する火山岩の地域の堆積物と関係をもつ要素である。したがって胎土の特徴と地質構成物との関係を，量的な要素を考慮に入れずに一般的にみると，その限りにおいて矛盾しないものともいえる。その中でとくに，５～15の土器の胎土については，石英や長石はこの地域の基盤の岩石である深成岩の風化によって多量に生成される鉱物であり，またそれに加えてガラスが少量含まれることは，周辺に点在する火山岩の風化物からの影響と考えられる。これらの点から遺跡周辺を含む地域で製作されたものといえよう。

一方，その他の４種類の鉱物をそれぞれ多量に含む土器は，少なくとも５～15の土器と同様の条件を想定することは難しい。搬入された土器であることを示しているのかもしれないが，その可能性を調査するにあたっては，写真から明らかなように，ある特定の鉱物が非常に多量であることに十分留意しなければならない。たとえば１～４・18の土器では，角閃石と輝石が地質構成物の中で一般的に多量に存在する石英・長石を上回る量として含まれおり，これらを多く含む岩石の風化物を，自然の状態で採取した結果というよりも，意図して採取し添加した可能性を考えさせられる。このような特徴は，岡山県倉敷市楯築弥生墳丘墓の特殊器台など，一部の器種の胎土とも類似している[(2)]。そこでは，胎土の特徴と器種とが関係をもっていることから，ある固有の地質構成物の特徴を反映していると同時に，多量に採取できる場所での意図的な作業が関与していることを示すものであった。この４種の土器の胎土も，同様の可能性を示唆しているかもしれない。

このような点は，１例として第16表に示した資料１の胎土の成分含有率からも考えることができる。これは土器の粉末試料を，螢光Ｘ線分析によって測定し，酸化物への換算をおこなった推定含有率である。これによると，珪酸（SiO_2）は50％以下と少量であり，一方鉄の酸化物である Fe_2O_3 が非常に多量で，酸化カルシウム（CaO）と酸化マグネシウ

SiO_2	49.18	TiO_2	1.25	SO_3	0.07
Al_2O_3	23.10	Na_2O	1.08	Cr_2O_3	0.22
Fe_2O_3	16.30	K_2O	1.03	ZrO_2	0.02
CaO	4.00	P_2O_5	0.22	ZnO	0.02
MgO	3.50	MnO	0.20	SrO	0.02

第16表　資料１の胎土の元素含有率（％）

ム（MgO）のを含めた3成分で23.8%の高い値となる。有色鉱物を多く含むほどこの傾向は高くなり，この土器の場合は，角閃石の含有率が異常に多いことを示すものである[(3)]。

(1)・(2)・(4)・(5)に分類した4種の胎土の組成は，それぞれ非常に明瞭な差をもち，類似した堆積物によって作られたものでないことは確かである。したがって，この4種の群の土器のすべてあるいはそのいずれかが，材料の採取地を異にするという視点から検討をすることは必要であろう。しかしその可能性を探る上で，多量に含まれる鉱物は，①ある地域の固有の地質にのみに存在が限定されるものではないこと，② その風化物が局部的に集中して堆積する場所は，比較的多く存在する可能性があること，の2点に留意する必要がある。ここでは少数の土器の分析であるため，製作地の問題について軽々に推定することは避ける。この点は，従来からの調査によって，土器の型式学的な地域細分および胎土の特徴との関係について大きな骨格が把握されており，堆積物の地質学的な資料の蓄積をおこなうことによって焦点は絞られていくものと考える。

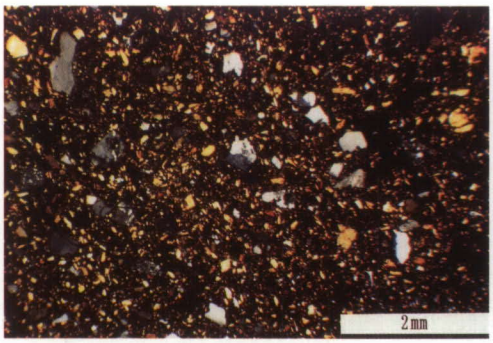
（注）

1　経済企画庁総合開発局国土調査課編『土地分類基本調査－丸亀－』　1968年
『香川県地質図』および内場地下工業株式会社発行『香川県地質図説明書』1962年

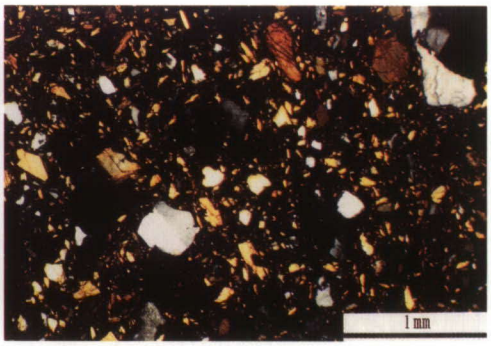
2　清水芳裕「楯築弥生墳丘墓出土の特殊壺・特殊器台等の胎土分析」『楯築弥生墳丘墓の研究』 PP.171-177，1992年。

3　比較のため，地質調査所の分析結果の中から，この地域で比較的塩基性成分の高い石清尾山の溶岩の成分を上げると次のような値である。（出典は注1により，単位は%）

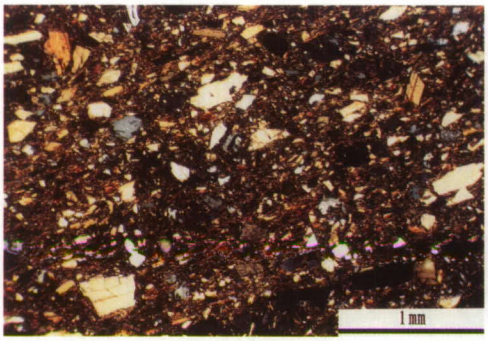
SiO_2	55.66	FeO	6.61	Na_2O	3.64	MnO	0.10
Al_2O_3	18.61	CaO	6.90	K_2O	1.22	灼熱減量	0.86
Fe_2O_3	1.20	MgO	4.82	TiO_2	0.26		



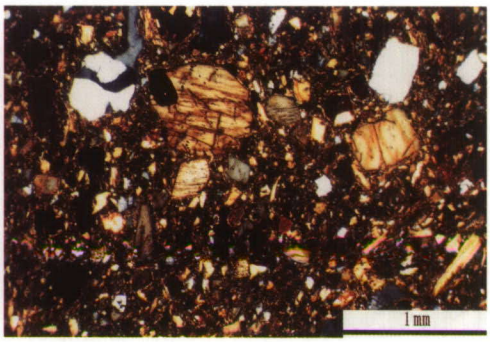
1　資料１　黄色鉱物の多くが角閃石



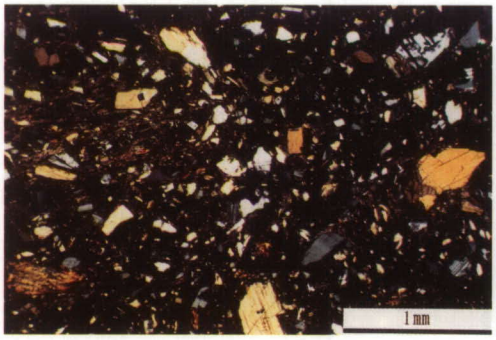
2　資料１　左写真１の拡大



3　資料２　多量の角閃石を含む組成

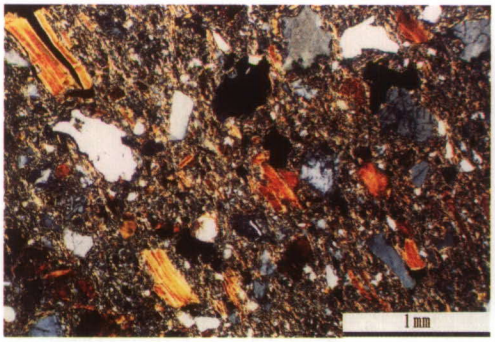


4　資料18　多量の角閃石を含む組成

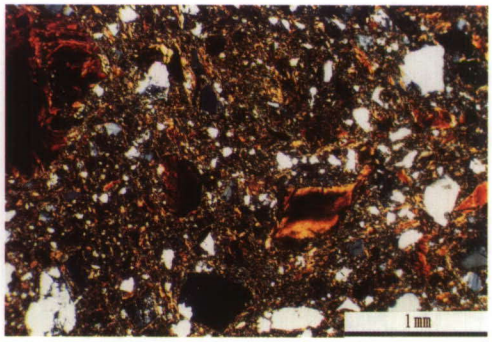


5　資料４　白色～黄色の鉱物が輝石

6　資料４　多量の輝石を含む深成岩

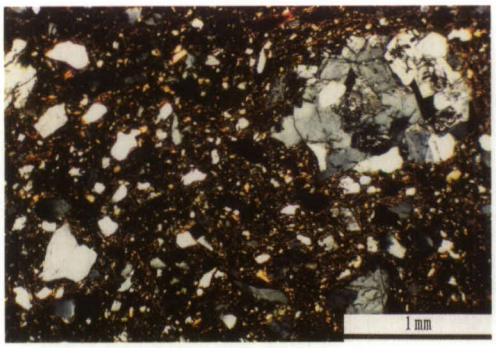


7　資料16　黄色～褐色の鉱物が黒雲母

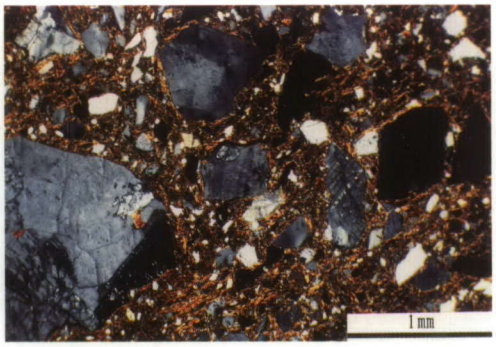


8　資料17　褐色の鉱物が黒雲母

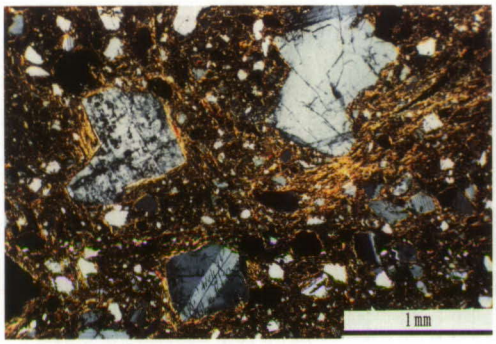
写真６　胎土の特徴と岩石鉱物（いずれも十ニコル）



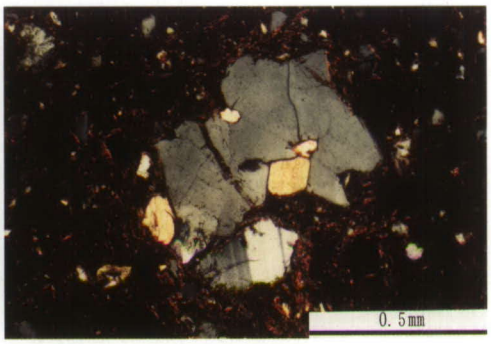
1　資料5　石英・長石を多量に含む組成



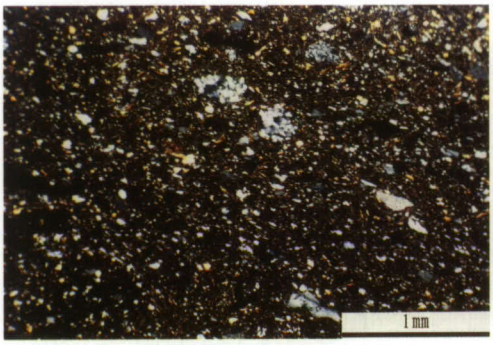
2　資料12　石英・長石を多量に含む組成



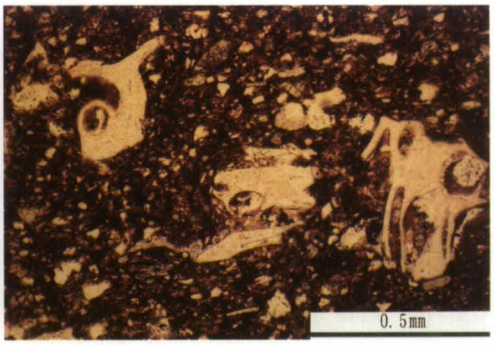
3　資料13　多くが斜長石



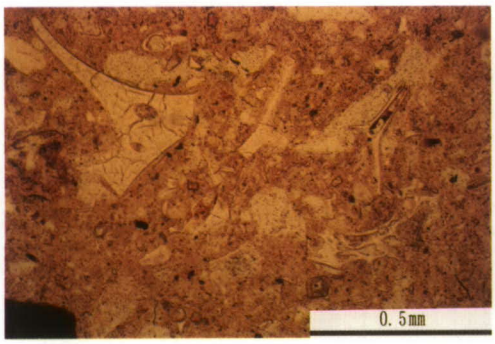
4　資料6　花崗石の岩片



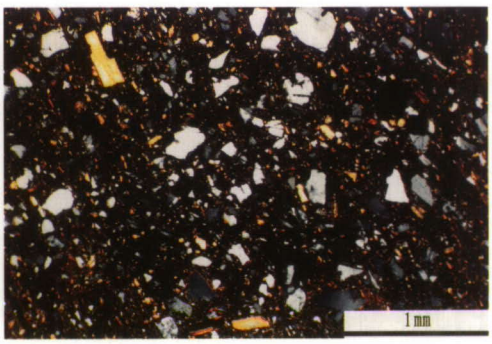
5　資料19　緻密な胎土の組成



6　資料19　曲線の輪郭をもつ鉱物がガラス



7　資料21　ガラスを多量に含む組成



8　資料20　角閃石・輝石を比較的多く含む

写真7　胎土の特徴と岩石鉱物（6・7が－ニコル、その他は十ニコル）

第３節　中間西井坪遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤　正己

概要

７世紀中葉・15世紀代の椀形鍛冶滓，16世紀代の羽口などを調査して，次の点が明らかになった。

＜１＞　７世紀中葉の鉄滓は，鉱石系荒鉄（製錬生成鉄で，表皮スラグや捲き込みスラグ更には炉材粘土など不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物）の成分調整から，折返し曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛冶滓に分類される。鍛冶作業は，共析鋼（C ：0.77%）クラスの鉄原料が供されており，この種の鉄粒が検出された。

＜２＞　15世紀代の鉄滓は，砂鉄系鉄素材の成分調整の末期もしくは，鍛錬鍛冶に際して排出された鍛冶滓である。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）2.02%，バナジウム（V）0.030%を含み，鉱物組成は大量のヴスタイト（Wustite：FeO）とファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の晶出である。

＜３＞　16世紀代の羽口破片は，内径が20mm 径の鍛冶用である。羽口先端は溶融し，暗黒色ガラス質スラグに微細なマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）やファイヤライトを晶出する。

1.　いきさつ

中間西井坪遺跡は，香川県高松市中間町西井坪に所在する。ここは弥生時代以降中・近世へかけての複合遺跡であって，７世紀中葉，15世紀代，及び16世紀代の鍛冶関連遺物が出土している。これらの遺物を通して，当時の鉄器製作の実態を把握すべく目的から，金属学的調査を行なった。

2.　調査方法

２－１．供試材

第17表に示す。鉄滓２点と羽口１点である。

第17表　供試材の履歴と調査項目

符　号	試　料	出土位置	推定年代	計　測　値		調　査　項　目		
				大きさ（mm）	重量（g）	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	化学組成
NNT-1	椀形鍛冶滓	7b区SKⅡ26	7C中葉	75×54×28	132	○	○	○
2	〃	8区SDⅡ30	15C代	60×48×19	83	○	○	○
3	羽口破片	6a区SXⅡ02	16C代	94×63×35	284	○	−	○

2－2．調査項目

(1) 肉眼観察

(2) 顕微鏡組織

椀形鍛冶滓は2分割した中央部から試料を切り出し，ベークライト樹脂に埋込み，エメリー研磨紙の#150，#240，#320，#600，#1,000と順を追って研磨し，最後は被研磨面をダイヤモンドの3μmと1μmで仕上げて光学顕微鏡観察を行なった。なお，金属鉄の炭化物は，ピクラル（ピクリン酸飽和アルコール液）で，フェライト結晶粒はナイタル（5％アルコール液）で腐食（Etching）している。

(3) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と，金属鉄の組織同定を目的として，ビッカース断面硬度計（Vickeys Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行なった。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み，その時に生じた窪みの面積をもって，その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

(4) 化学組成分析

鉄滓と羽口胎土の分析は，次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe），金属鉄（Metallic Fe），酸化第1鉄（FeO）：容量法。

炭素（C），硫黄（S）：燃焼容量法，燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO_2），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），酸化カリウム（K_2O），酸化ナトリウム（Na_2O），酸化マンガン（MnO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），五酸化燐（P_2O_5），バナジウム（V），銅（Cu）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

(1) NNT－1：椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：平面が不整台形状の椀形鍛冶滓の1/3～1/4の破損品である。鍛冶炉の炉底で堆積形成された形状をもつ。表面は比較的平坦で，多くの小気泡を発する。なお，二次的な灰色酸化土砂被膜に覆われて，石英粒子の付着が認められた。裏面は椀形状の突起を呈し，凹凸肌で赤褐色の顆粒状荒れを残す。破面は長軸側と短軸の２面で，後者は黒褐色鉄銹があり，滴下鉄の残存が予測される。

② 顕微鏡組織：写真８の①～⑨に示す。鉄滓の鉱物組成は①～④にみられるように，白色粒状結晶のヴスタイト（Wustite：FeO）と淡灰色長柱状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$），これに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。なお，④は椀形滓の底部で炉床粘土に接した個所の鉱物相で，ファイヤライトが多く，ヴスタイトは極く微量の晶出となる。該品は鍛冶滓の晶癖である。

一方，当椀形滓中には金属鉄の滴下があって，⑤～⑨に組織を示す。⑤は全面パーライト（Pearlite ：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）析出個所で炭素含有量が0.77％前後の共析鋼の領域である。次に⑥は初析セメンタイト（Proeutectoid Cementite：オーステナイトから最初に析出するセメンタイトをいい，この析出する温度を Acm 変態点という。初析セメンタイトは，元のオーステナイトの結晶粒界にそって網状に析出するので，網状セメンタイトともいわれる。）を析出した過共析鋼域（C：0.77％以上）で，⑦は⑥の拡大組織である。

この椀形鍛冶滓を形成する鍛冶作業は，共析鋼から過共析鋼クラスの鋼の加工であって刃物製作の可能性が想定される。

なお，パーライトの説明を若干加えると，パーライトの占める面積は，炭素含有量の増加にともなって増し，焼ならし状態では0.4％前後で半分，0.77％で全部パーライトとなる。このようにパーライトが多くなるにしたがい，硬さ，引張強さは増加し，逆に伸び，衝撃値などは減少する。0.77％C以下を亜共析鋼という。

③ ビッカース断面硬度：写真８の⑧は全面パーライト共析鋼域の硬度測定の圧痕である。硬度値は，281Hv であった。また，⑨は，過共析鋼域の初析セメンタイト部の硬度測定の圧痕で，こちらは653Hv と硬質であった。セメンタイト（Cementite）は，炭化鉄（Fe_3C）の組織学上の呼び名であり，金属光沢をもち，非常に硬くて脆い特徴をもつ。両者は組織に見合った硬度値を呈している。

次に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を写真８の③に示す。硬度値は436Hv であった。ヴ

スタイトの文献硬度値が450～500Hv で[1]，これの下限を若干割るがヴスタイトと同定される。

④ 化学組成分析：第18表に示す。全鉄分（Total Fe）が48.18％に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.30％，酸化第１鉄（FeO）41.97％，酸化第２鉄（Fe_2O_3）21.81％の割合である。顕微鏡試料側に金属鉄を充当したので，分析試料側には金属鉄はあまり含有されず滓主体となっている。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は，29.97％でこのうちに塩基性成分（CaO＋MgO）を2.31％含む。次に砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.17％，バナジウム（V）0.003％は少なくて，かつ，銅（Cu）の0.052％は高めであり，鍛冶原料鉄は磁鉄鉱系が想定される。酸化マンガン（MnO）の0.15％も矛盾のない含有量とみなされる。精錬鍛冶滓の最終段階もしくは，鍛錬鍛冶滓の前半段階にもってきてもおかしくない成分系である。

(2) NNT－２：椀形鍛冶滓

① 肉眼観察：不整楕円形を呈する小型（83g）椀形鍛冶滓である。割れてはいるが接合できて完形品となる。表面の基地は，黒色で平滑面を有するが，灰褐色の酸化土砂の被膜に覆われる。裏面の椀形状突起は弱く，炉床粘土との反応痕をもつ肌で，これにも灰色粘土被膜に覆われて大粒石英粒を付着する。破面は黒色地に小気泡が散在するが緻密質である。

② 顕微鏡組織：写真９の①～③に示す。鉱物組成は，大粒で多量の白色粒状結晶のヴスタイトと，淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト，これに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。この晶癖は，鉄素材の折返し曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。

③ ビッカース断面硬度：写真９の①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は，461Hv であった。ヴスタイトの文献硬度値が450～500Hv である。硬度値がこの範囲内に収まるので，ヴスタイトに同定される。

④ 化学組成分析：第18表に示す。鉄分が多くて，ガラス質の少ない成分系となる。全鉄分（Total Fe）は59.23％に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.05％，酸化第１鉄（FeO）55.62％，酸化第２鉄（Fe_2O_3）22.80％の割合となる。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は15.24％で，このうちの塩基性成分（CaO＋MgO）は0.91％と少ない。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）は，2.02％，バナジウム（V）0.030％は，精錬鍛冶滓の末期段階から鍛錬鍛冶滓の前半段階の派生物となる。酸化マンガン

(MnO) 0.30%，銅（Cu）0.005%などは砂鉄系を裏付ける。

(3) NNT－3：羽口破片

① 肉眼観察：羽口の外径が10cm，内径2.0cmの寸胴型の先端部破片である。全面を灰色粘土被膜が覆う。先端の溶融ガラス化部は灰黒色を呈し，石英粒を含む。

② 顕微鏡組織：写真9の④～⑧に示す。羽口先端の溶融ガラス化部分は，暗黒色ガラス質スラグ中に白色微小結晶のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）や，淡灰色木ずれ状結晶や長柱状結晶のファイヤライトを晶出する。中・近世の鍛冶羽口は，先端部が肉厚となる傾向をもち，この個所が高温に曝された痕跡を留める。

③ 化学組成分析：第18表に示す。胎土の強熱減量のIg Lossは，9.39%と大きくて，熱影響の少ない個所からの試料採取であり，結晶構造水の飛散のないところの分析結果となる。該品は鉄分（Fe_2O_3）が8.32%と高めで軟化点は劣化傾向の粘土である。しかし，酸化アルミニウム（Al_2O_3）が22.61%と高めで，塩基性成分（CaO＋MgO）を1.63%と適度に含有するので耐火性はある程度確保できる成分系であろう。胎土の中には砂鉄が少量含まれるので，二酸化チタン（TiO_2）0.77%，バナジウム（V）0.006%が検出された。

4. まとめ

中間西井坪遺跡出土の7世紀中葉と15世紀代の鉄滓は，鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓で，鍛冶原料の荒鉄の成分調整から，鉄器製作時の折返し曲げ鍛接時の高温作業での排出滓である。7世紀中葉の椀形鍛冶滓は，鉄鉱石（磁鉄鉱）系の精錬鍛冶滓，15世紀代の椀形鍛冶滓は，砂鉄系に分類された。第17表の古代製鉄遺跡作業工程概念想定表からみると，第3ステップと第4ステップからの排出滓となる。

今回の2点の椀形鍛冶滓を形成させた鍛冶作業の原料鉄の産出地の追求が今後の研究課題となる。7世紀中葉であれば，岡山県内に所在する製鉄遺跡からの荒鉄の搬入があったとしても，おかしくない状況である。総社市内には6～7世紀代の鉱石製錬遺跡が幾つも存在する[(2)]。また，15世紀代となると，四国方面でも製錬操業は無視できないと考えている[(3)]。

四国での古代鍛冶の鉄滓調査は今回のものが初めてである。それも7世紀中葉が1点，15世紀代のもの1点と，調査点数が少なく背景となるデータもなく，鍛冶滓分類も明瞭なる発言のできぬ結果となった。次回に期したく思っている。

注

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』　1968。ヴスタイトは450～500Hv，マグネタイトは600～700Hv，ファイヤライト600～700Hv の範囲が提示されている。

(2) 大澤正己「総社久代製鉄遺跡群出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『水島機械金属工業団地共同組合西団地内遺跡群』（総社市埋蔵文化財調査報告９）　総社市教育委員会　1991

大澤正己「鬼ノ城製鉄遺跡群出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『鬼ノ城ゴルフクラブ造成工事に伴う発掘調査　～奥坂遺跡群～』（総社市埋蔵文化財発掘調査報告15）総社市教育委員会　1998

(3) 当地域での製鉄に関する史料の収集が必要となろう。

第18表　供試材の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	年代推定	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分/Total Fe	TiO_2/Total Fe	注
NNT-1	中間西井坪		鍛錬鍛冶滓	7C中葉	48.18	0.30	41.97	21.81	21.87	4.01	1.79	0.52	1.11	0.67	0.15	0.17	0.02	0.06	0.41	0.10	0.003	0.052	29.97	0.622	0.004	
2	〃		鍛錬鍛冶滓	15C代	59.23	0.05	55.62	22.80	11.22	2.47	0.61	0.30	0.43	0.21	0.30	2.02	0.02	0.02	0.21	0.10	0.030	0.005	15.24	0.257	0.034	
3	〃		羽口胎土	16C代	6.87	0.14	1.17	8.32	53.03	22.61	0.69	0.94	1.50	0.41	0.09	0.77	0.04	0.01	0.78	IgLoss 9.39	0.006	0.002	79.18	11.526	0.112	

第19表　古代製鉄遺跡作業工程概念想定表

	第1ステップ	第2ステップ	第3ステップ	第4ステップ
	製鉄準備段階	製鉄作業段階	第1鍛冶（成分調整），鋳造	第2鍛冶（鉄製品製作）
工程	(1) 採鉱（砂鉄，鉱石） (2) 製炭（採木，築窯） (3) 築炉（粘土採掘）（羽口製作）	製錬（smelting） 低温還元（鋼，鉄）＜C:1.7%以下＞ 高温還元（銑鉄） 低炭素鋼 白鋳鉄 ねずみ鋳鉄	精錬鍛冶（Refining）：大鍛冶 製鉄炉　直注 溶解炉 鋳物製品	鍛錬鍛冶：小鍛冶

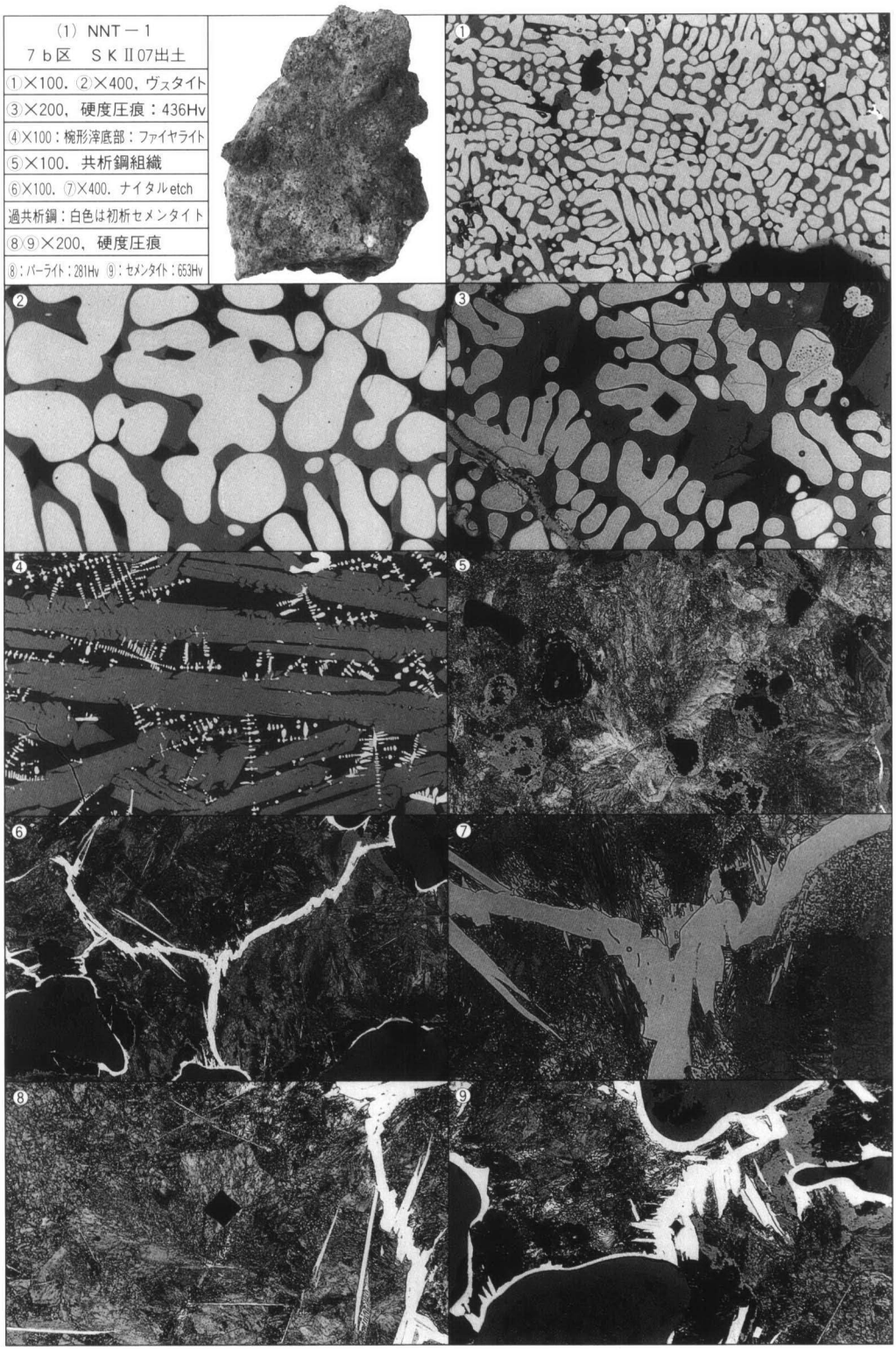


写真８　鉄滓の顕微鏡組織

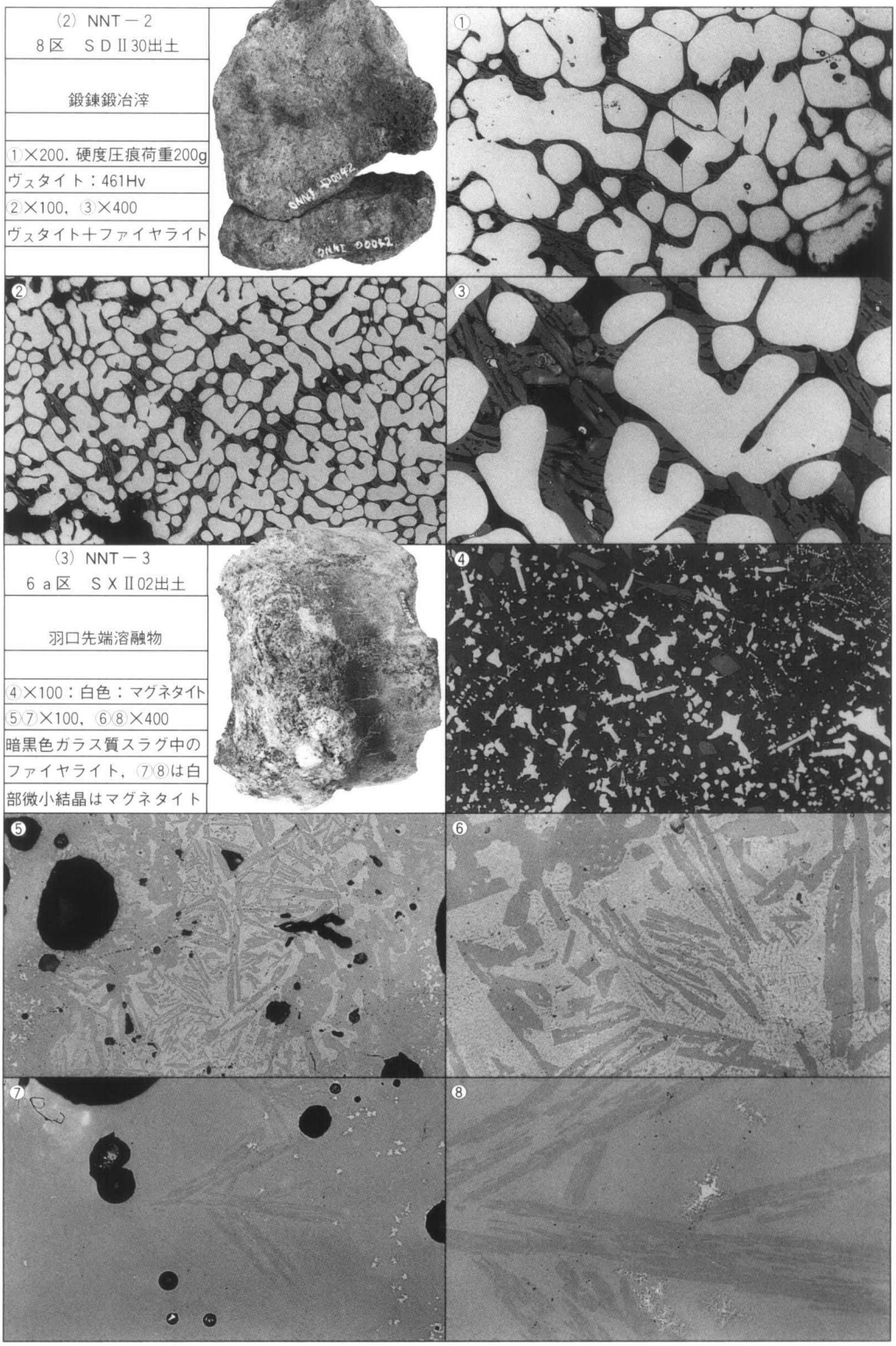


写真9　鉄滓と羽口溶融物の顕微鏡組織